



PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS PÓCKET

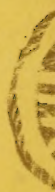
---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

BL                    Tripitaka. Japanese. 1927  
1411                Kokuyaku daizokyo  
T8J3  
1927  
v.18

East Asia

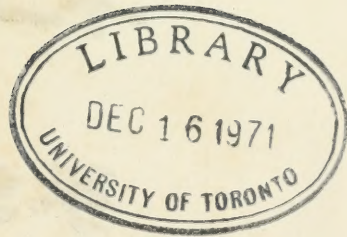




國譯大藏經

論部  
第四卷

BL  
1411  
T8J3  
v.927  
v.18



# 目次

## 國譯大智度論

..... 一七九

### 卷の第七十二..... 一三二

●第一問、智度もし甚深ならざると無くんば、或時は甚深を讚するは何故なるか(四)●第二問、諸天の讚する法は甚深にして、一切世間の信する能はざる所なり、説を用ゐて何かせん(五)●第三問、若し爾らば、微妙は智者能く知ると言ふか(五)●第四問、法位に入れる菩薩は、何を以てか佛に隨順して生ぜざるか(八)●第五問、色等の法とは何ぞや。色等の法の如とは何ぞや(五)●第六問、智度は菩薩のために説く、六千人は何故に阿羅漢道を得たるか(六)●第七問、無分別の法を得ずして而も阿羅漢となる理由如何(六)●第八問、俱に空・無相・無作を行じて、一人は佛と作り、一人は阿羅漢と作れる理由如何(七)●第九問、佛は、「菩薩は無上菩提を成ず」と説き給へるに、舍利弗が「何等の菩薩を成就するか」と問へる理由如何(三)●第一〇問、未だ法身を得ざる菩薩にして、能く此の心を行する理由如何(二)●第一一問、等心と慈心との差異如何(元)●第一二問、菩薩は大人なり、云何が一切衆生の中に於いて下意を起すといふや(元)

### 卷の第七十三..... 三三六

●第一問、今復不退の相を問へる理由如何(三七)●第二問、不退の行と類と相貌との三事の差異如何(三七)●第三問、菩薩は衆生を視ること子の如くし、常に普く教化せんと欲す、云何が其の長短を觀ぜざるや(元)●第四問、佛、須菩提

の初め不退の行・類・相貌を問へるに答へずして、今此の中に説きたる理由如何(三九)●第五問、今は「不退疑」と説き、後には「深法不疑」と説く、此の二の疑の差異如何(四〇)●第六問、慈悲心は外道にも亦これあり、何ぞ不退の菩薩の相なりといふや(四一)●第七問、菩薩は煩惱を斷ぜずして、云何が能く慳貪等の諸の惡心を生ぜざるや(四二)●第八問、惡魔が善を行する者を地獄の記を受くと言へる理由如何(四三)●第九問、經中に「不退の菩薩は方便力もて衆生を利益するが故に五欲を受く」と説けり。今それ其の方便とは何をいふか(四四)●第一〇問、者し金剛神王の爲には守護せらるれば、菩薩は力あることなきや(四五)●第一一問、信等の五根なければ、即ち是れ凡夫なりと言ふ理由如何(四六)●第一二問、不散亂の心もて、無上道を行する一事を上人と名くる理由如何(四七)

### 卷の第七十四……………六二—一九

●第一問、何事をか得來るを不退と名くるや(七〇)●第二問、人あり、讀誦し、説き、正憶念し、無生法忍の義に隨順せば、是の人は未だ禪定を得ず、疑心を生じ、著心の爲に牽かるるも、不退の菩薩と爲すや不や(七一)●第三問、空無所有を以て深奥となす理由如何(七二)●第四問、此の中に空等の法の深きを説けり、是れ何等の空なるか(七三)●第五問、二種の無漏法すら尙ほ果報福德なし、云何ぞ大乘の畢竟空の觀法もて、無量の福德を得んや(七四)

### 卷の第七十五……………九二—一二

●第一問、須菩提が是の問難をなせし理由如何(九四)●第二問、菩薩地は辟支佛地に似たりと説がざる理由如何(九五)●第三問、此の心、如如ならば、何故に實際と作すことを得ざるや(一〇〇)●第四問、衆生を教化して、空を得せしむれば便ち足る、何ぞ無相無作三昧を用ゐんや(一〇三)●第五問、舍利弗が夢を以て、菩薩の三三昧を難ぜし理由如何(一〇五)●第六問、彌勒が但空を説くのみにて答へざるは如何(一〇八)●第七問、菩薩、衆生の飢寒凍餓等を見るに、何の次第あるや(一一〇)●第八問、是の如きの大衆、淨國土の行を説きながら、但一女人のみ淨國土を願へるは何故なるか(一一九)



●第九問、恆伽提婆と名くる理由如何(二三) ●第一〇問、是の女の福德は、應に久しく女身を轉すべし、然るを阿闍佛の國に於いて、男子たるを得るは何故なるか(一一〇)

### 卷の第七十六……………三三—四六

●第一問、空を學すると、空に入るとの差別如何(三七) ●第二問、上には深く禪定に入り、心をして亂さしめずといひ、今は云何が専心ならずと言ふか(三八) ●第三問、未だ道を得ざる菩薩の、能く深空を行することを知る理由如何(三三) ●第四問、前の阿鞞跋致品中に已に不退の相を廣説せり、今復た此に之を説くは何故なるか(三九) ●第五問、佛及び六度は善知識なるべきも、二乗は云何にして善知識たり得るか(四四) ●第六問、六度中に一切法を攝す、今それ別して三十七品及び法性實際等を説くは何故なるか(四五)

### 卷の第七十七……………四七—六一

●第一問、上に已に般若の相を説けり、然るに今復た更に問ふは何故なるか(五三) ●第二問、須菩提が「菩薩は無生忍を得るが故に授記するや」と問へるに、佛は何故に無生の理を以て答へたまひしか(五〇) ●第三問、一比丘、帝釋に向ひ、善男子の福德は仁者に勝ると語りし理由如何(五六) ●第四問、阿難が、「帝釋は自力を以て説くか、佛力を用て説くか」と念言せし理由如何(五六) ●第五問、帝釋は自ら智ありて能く問ひ、能く答ふ。何を以てか、佛力によるといふか(六七) ●第六問、一切の有爲法は皆轉すべく捨つべし、然るを阿難が疑つて、「是の罪は悔ゆべきや不や」と問へるは何故なるか(六六) ●第七問、心中に恨を懷かば、云何が滅すべきや(六七) ●第八問、衆生は無量無邊なり、空なり、何の度する所かあらんや(七七) ●第九問、菩薩は惡人を攝せんが爲に出現せり、何を以ての故に惡人を攝せざるか(七〇) ●第一〇問、諸見を我見の中に攝する理由如何(八〇) ●第一一問、是の念を作し、是の念を作さざる事は已に盡きたり、何を以てか第三説ありや(八一)

## 卷の第七十八……………一八三—二〇五

●第一問、但發心あるのみにして、離欲の人たる阿羅漢等に勝る理由如何(一九九)●第二問、罪福は以て人に與へらるべきものにあらす、然るを釋提桓因は、何故に此の福徳を以て佛道を求むるものをして佛道を具定せしむと言ひしか(二〇三)●第三問、佛は難しと宣ひ須菩提は不難と言ふ、師弟兩者の意見相違する理由如何(一九〇)●第四問、平等法も衆生も畢竟空なり、云何が一は難く一は難からずと言ふや(二〇〇)●第五問、佛は一切智人なり、何を以てか、弟子に心驚かす没せざるかを問ふや(二〇三)●第六問、佛、須菩提に命じて説かしめ給ひし理由如何(二〇三)●第七問、若し爾らば何故に大菩薩をして説かしめ給はざりしか(二〇四)●第八問、若し爾らば、智慧第一の舍利弗、及び餘の大弟子に命ぜざる理由如何(二〇五)

## 卷の第七十九……………二〇六—二三五

●第一問、一切智を得ざる諸天にして、菩薩に受記を與ふる理由如何(二二〇)●第二問、何經の中に、二菩薩は佛の讚歎し給ふ所と説くや(二三)●第三問、文珠、普賢、觀音、勢至等の如きを稱讚せず、但た二菩薩のみを稱讚する理由如何(二三)●第四問、佛已に先に説き給へり。然るを今復た須菩提の問へるは何故なるか(二三)●第五問、是の菩薩は已に般若波羅蜜多を信解せり、何を以てか、阿闍佛及び諸菩薩の邊に従つて聞きしか(三四)●第六問、帝釋が自ら正答なりや不やを疑へる理由如何(三三)●第七問、佛が帝釋の説を可とし給へる理由如何(三四)●第八問、法空衆生空は、何の盡さざる所ありてか、百分の一にも及ばずと言ふや(三五)●第九問、涅槃は無量なり、然るを二乗の所行は有量なりと言へる理由如何(三六)●第一〇問、八百の比丘が、華を以て獨り佛のみを供養せし理由如何(三七)●第一一問、法華に曰く、或は少香、或は一華を以て佛を供養し、若くは一たび南無佛と稱ふれば、皆當に作佛すべしと。若し爾れば何ぞ殊更に般若の知り難く得難き空行を行ぜんや(三七)●第一二問、佛は食る所なし、何を以てか智度を以

て阿難に囑累するに、食惜するが如くなるや(三元)●第一三問、三千世界の衆生を教化して阿羅漢を得せしむるは、何故に般若の一句を以て、菩薩に教ふるに如かざるか(三三)●第一四問、般若を得るが故に、能く一切諸佛の法を持すと言ふ理由如何(三四)●第一五問、般若は便ち是れ波羅蜜多なり、何を以てか名けて陀羅尼と爲すや(三五)

### 卷の第八十.....二二六—二二六

●第一問、若し無明なくんば、亦諸行等もなけん、云何が十二因縁を説くや(四二)●第二問、六度には各異相あり、云何が一波羅蜜多を行して、他の五度を攝するや(四九)●第三問、忍辱は一切を侵奪せらるるも、能く忍ぶの義なり。云何が身體を割截せらるるのみを説くや(五二)●第四問、一念の瞋心だに生ぜざる者は、是れ變化身なりや、將父母生身なりや。若し變化身なれば奇とするに足らざるも、父母生身は結未だ斷ぜざる人なり。云何ぞ一念の瞋心を生ぜざらんや(五三)●第五問、有爲法は有相、無爲法は無相なり、今それ有爲相の中に無相を説く理由如何(五五)●第六問、汝は先に有を離れば則ち無も無しと言へり、今云何が如・法性・實際を見ると言ふや(五五)

### 卷の第八十一.....二二七—二二八

●第一問、何故に但一の波羅蜜多のみを主となすや(五五)●第二問、忍辱に住して戒を取り、當に戒に住して忍を攝すべしと説く理由如何(五六)●第三問、禪智、忍辱共に心清淨の法なり、今何故に忍辱のみを説くや(五七)●第四問、何が故に財法の二施のみは精進より生ずと言ふや(五七)●第五問、十八空中に何が故に四空を説きたまはざりしや(五九)●第六問、是の如く、第十四を一切法空と名け、已に一切なるが故に説かずとせば、強ひて十八空を説き給ひし理由如何(五九)●第七問、何故に菩薩は諸佛の如く食著心なしと説くや又何の義ありや(六〇)●第八問、四空は是れ無生忍なり、何故に柔順忍と言ふや(六四)●第九問、超越三昧は二を起ゆる能はず、又散心より滅盡定に入らずと説く理由如何(六四)

## 卷の第八十二.....三三—三二

●第一問、五波羅蜜多は般若に守護せらるるが故に薩婆若に入るといふ理由如何(三〇六)●第二問、薩婆若に至るは諸の善法を以てするも得べきに、但般若のみを高調する理由如何(三〇七)●第三問、著空及び著無性の二失の因縁は或は然らんも、今何が故に布施等を生ずるも亦失なりと言ふや(三〇八)●第四問、菩薩は、如は一相、無生の相なることを知るしとせば、何が故に諸法の總相別相即ち廣略兩相を知るや(三〇九)●第五問、如實の相を得るが故に、了了に諸法の總相別相を知るといふ理由如何(三一〇)●第六問、眼に二指を見るに有合有散なり、何が故に無合無散なりといふや(三一〇)●第七問、盡く合せず、又多分合せざるが故に「合す」と言はずとせば、少しく合するが故に「合す」と名くるや如何(三一〇)

## 卷の第八十三.....三二—三五

●第一問、上の八十二卷に於ては但般若のみ能く一切種智に至ると説きしに、今本卷に於ては何が故に「五波羅蜜多」と合するが故に一切種智を得しといふや(三二六)●第二問、(一)先には色乃至識を知ると説き、後には衆、界、入を知ると説く理由如何。(二)先には善く縁を知ると説き、後には次第縁によりて増上すと説く理由如何(三二九)●第三問、菩薩は初發心より十地、六度、三十七品等の一切善法を行すべきに、何が故に但般若のみを行すと説きしや(三三〇)●第四問、智度は無量無限なるに道場を於て限りとなす理由如何(三三三)●第五問、一彈指の間すら六十念念に生滅變遷す、何んぞ一心常恆に薩婆若のみを念じて、餘念を入れざらしむることを得んや(三三六)●第六問、菩薩の般若を行する時、心心數法を行ぜざる理由如何(三三六)●第七問、但無相を以て心心數法を行ぜずとせば、乃至涅槃の無相法、有相法を以て縁するも、心心數法を生ぜず減せざるや(三七七)●第八問、男女色等は無相ならんも、無相を以て心心數法を生ずとせば、涅槃には相あるに非ずや(三七七)●第九問、佛自ら涅槃法に三相ありと説き給ふ、何が故に無相なりといふや(三八)

●第一〇問、若し第三の中に過あらば、第四の中に何の過かあつて復た不なりと言ひ給ひしや(三三九)●第一問、須菩提は已に如品の中に如を説けり、今何を以てか疑ありや(三四〇)●第一二問、何の解し易きとあつて如を以て實際に喩へ又實際を以て如に喩ふるや(三四〇)●第一三問、常に如・法性・實際の次第なるに、何が故に如・實際・法性の順にせしや(三四〇)●第一四問、色を見ざる時すら眼有り、云何が眼と色と無二なることを得んや(三四〇)

## 卷の第八十四……………三六—三六三

●第一問、佛は第一義に住して道を得給ひ乍ら、須菩提が「三乘三聚には分別無きに非ずや」との問の對して「不なり」と答へたまへる理由如何(三四五)●第二問、化人は有爲性無爲性に住せずして、來去して說法せんも、云何が能く布施等を行するや(三四五)●第三問、化佛は十方等の諸功德なし、今眞佛を供養すると化佛を供養すると其福德は等しと云ふ理由如何(三四六)●第四問、若し眞化兩佛共に十方等の諸功德相等しとせば、何が故に出佛身血等の説を化佛にも説かざるや(三四六)●第五問、若し化佛に出佛身血の逆罪を得とせば、何が故に毗尼の中に、化人を殺すも、殺生戒の犯罪なりと言はざるや(三四六)●第六問、但空しく佛の稱名のみにて、苦を畢へ而も其福德盡きざる理由如何(三四七)●第七問、佛は須菩提が心中に「菩薩は何の處に住して實際に證をなすや」と問はんとせるを看破して、却て「汝得道の時は四句の中に於てせしや」と反問し給ひし理由如何(三四七)●第八問、須菩提は金剛三昧に住して解脱を得たり、何が故に道中に住せずして心に解脱を得といふや(三四七)●第九問、上來常に智度の相を説けり、今何が故に更に智度に就て憤問するや(三四七)●第一〇問、先品には常・無常等の行なば智度を行すと名けずして、今本品には常・無常等の義を行するを以て智度を行すべしといふ理由如何(三四七)●第一一問、三藏中には但十智のみ有るに、此の中には十如實智有る理由如何(三四九)●第一二問、十智の各々の體相有り、如實智には何等の體相有りや(三四九)●第一三問、若し佛の外に如實智を得る者なくんば、二乗の涅槃を得、大菩薩の無生忍を得るは何故なるか(三四九)

卷の第八十五……………三六四—三九〇

●第一問、畜生の中にも亦この如あり、何故に如と名けざるや(三七〇)●第二問、佛は何を以てか一切種智を念ずと答へたまひしか(三七三)●第三問、皆これ畢竟空の念なり、何を以てか獨り増上と言ふや(三七三)●第四問、若し智度の中に一切法を辨し、般若は即ち菩薩行ならば、今復た更に問へるは何故なるか(三七九)●第五問、阿羅漢・辟支佛・大菩薩を佛と名けざる理由如何(三八〇)●第六問、(一)諸法の實義を知ると、(二)諸法の實相を得ると、(三)實義に通達すると、(四)一切法を如實に知ると、此の四に何の異ありや(三八〇)●第七問、不善根の爲の故に般若を行ぜざるは、爾るべし、云何が善根の爲の故に行ぜざるや(三八四)●第八問、若し菩薩に無礙智あらば、佛と何の異ありや(三八五)●第九問、須菩提が、諸佛を供養せず、善根を具足せず、眞知識を得ずして、當に一切智を得べきやとの盛問を發せし理由如何(三八〇)

卷の第八十六……………三九一—四一九

●第一問、若し不生不滅に入らば、云何が常顛倒を離るることを得んや(四〇五)●第二問、知と見との差別如何(四〇八)●第三問、何故に道なきか(四二二)●第四問、順忍とは、大小乗中、孰れの順忍なるか(四三三)●第五問、頂法は已に不退なり、然るを忍法までも説けるは何故なるか(四三三)●第六問、諸法空は一義なり、然るを須菩提が、種種の理由を以て重ねて問へるは何故なるか(四三三)●第七問、初禪の煩惱を離れて二禪を得、何を以てか離生を説かざるや(四三七)

卷の第八十七……………四二〇—四五一

●第一問、若し是の如きの人これ新學ならば、但だ應に布施持戒等を教ふべし、佛は何を以てか無所有畢竟空性の中に行ぜしめ給ひしか(四二五)●第二問、若し諸法は畢竟空にして無所有なりと知らば、云何が復た我れ何を以てか發心し作佛せざらんと云ふか(四三〇)●第三問、若し發心を障へずんば、不發心をも障へざるべし。菩薩は何ぞ安住して、

而も發心し、諸の勤苦を受けざるや(四二六)●第四問、次第行と、次第學と、次第道とに何の差別ありや(四二九)●第五問、何を以てか次第と名くるや(四三〇)●第六問、菩薩は布施するに當り、先づ何人に施すや(四三三)●第七問、是の如く種種ならば、應に先づ何者に施すべきか(四三三)●第八問、經に、衣食を與ふと言はずして、食を須ふるには、食を與ふと言ふ理由如何(四三三)●第九問、有人は若くは差む、若くは怖れ、所須ありと雖も發言すること能はず、云何が其の所須を知らん(四三三)●第一〇問、菩薩は應に六度を行じて菩薩の位に入るべし、此の中、云何が五衆を説くや(四三四)●第一一問、若し爾れば何を以てか但諸波羅蜜多の名を説かずして而も五衆を説くや(四三四)●第一二問、六念の中に、「色を以て佛を念ぜず」と言ふ、云何が易と言ふや(四三五)●第一三問、問者と答者も俱に無所有と言ふ、云何が分別して、是の間、是の答を知るや(四三六)●第一四問、若し法空なれば、菩薩何事を見るが故に發心するや。今若し法空なりと言はば、云何が初地等あるやとの間に對して、佛は皆空を以て答へ給へり。然るを今復た須菩提が之を問へるは何故なるか(四三六)●第一五問、須菩提が、一念の中に六度等を行する諸の功德を問へる理由如何(四三六)●第一六問、身の菩薩は貪惜未だ除かざるが故に、割截すれば甚だ痛む、是れ則ち難しと爲す。無生法忍を得たる菩薩は割截するも痛なし、何の恩分あらんや(四三六)

卷の第八十八.....四五一—四八五

●第一問、須菩提の間も佛の答も俱に空なり、云何が兩者の異を別つことを得るか(四三五)●第二問、若し諸法空ならば云何が檀波羅蜜(多)等を行することを知るを得て、各各餘の波羅蜜多を具足するや(四三〇)●第三問、上品品の中に於ける、一波羅蜜多を以て諸波羅蜜多を具すると、此の品に於ける、無相に一切法を攝すると何の差別ありや(四三〇)●第四問、已に處處に諸法の性の空なるを説けり、然るを須菩提が種種の名を作して問へるは何故なるか(四三七)●第五問、經中に教へて布施持戒禪定せしむると、今復た更に説くと、何等の相異ありや(四七三)●第六問、若し菩薩、佛は是れ福田、衆生は是れ福田にあらず」と知らば、是れ菩薩の法にあらず。菩薩は何の力を以て、能く佛をして畜生と

等しからしむるか(四七五)●第七問、菩薩の身は木石にあらず、云何が衆生來りて割截するに、而も異心を生ぜざるや(四七五)●第八問、若し爾らば應に三惡道あるべからざるにあらずや(四七五)●第九問、若し衆生、菩薩を割截して其肉を食はば、當に罪あるべし、云何が得度せんや(四七五)●第一〇問、人道を詳説し、餘の四道を略説する理由如何(四七五)●第一一問、四事の中、多く布施を説き、餘の三は略して説く理由如何(四七七)●第一二問、財施を略説して、法施を廣説する理由如何(四七七)●第一三問、須菩提が、菩薩は一切種智を得るや不やを問へる理由如何(四七八)●第一四問、九次第定、三十二相等を出世間不共の法と名くる理由如何(四七七)●第一五問、初めより來、處處に諸法、五衆、乃至一切種智を説き、三十二相及び八十隨形好を説かず、今經竟ばらんと欲するに、何を以てか品品の中に説くや(四七五)●第一六問、佛の力を但だ十力に限る理由如何(四八〇)●第一七問、人をして皆淨業を作さしめざる理由如何(四八〇)●第一八問、衆生の根に利鈍の差別ある理由如何(四八〇)●第一九問、衆生の皆善欲を作さざる理由如何(四八一)●第二〇問、惡性即ち惡欲ならば、何の差別ありてか二力を作すや(四八一)●第二一問、一切到處道力と天眼力との差別如何(四八二)●第二二問、二衆も亦淨業を得、亦た能く衆生を化す、何を以てか是の力なきや(四八三)●第二三問、佛は智慧も無量、身も亦無量にして、諸の天王に勝る。然るを轉輪聖王と同じく三十二相ある理由如何(四八四)

### 卷の第八十九……………四八六—五

●第一問、八十隨形好は、身法を莊嚴し、識満足す、何を以てか隨形好の中にあるや(四九二)●第二問、足安立住處と安住處との相異如何(四九二)●第三問、二空のみを説いて、名けて法と爲す理由如何(四九三)●第四問、上に佛は道を修すれば果ありと説き、今何を以てか果無しと言ふや(四九三)●第五問、佛は已に各品の中に、善く諸法の相に通達するを説けり。然るを今復た須菩提が更に問へるは何故なるか(四九五)●第六問、微塵は分なきが故に定法なれば、一切法は空なりと言ひ得ざるにあらずや(四九八)●第七問、微塵は細なるが故に、五情の得ること能はざる所ならんも、聖人天眼を得ば則ち見得べきにあらずや(五〇九)●第八問、名と相に何の差別あるや(五二〇)●第九問、相を見るが故に名を得、名



を知るが故に相を得、是の故に名と相とは差別なきにあらすや(五二〇)●第一〇問、四諦の中、苦・集・道の三諦は皆相あり、滅諦のみ無相なり、然るを今何故に一切の無漏法は無相無憶念なりと言ふか(五二一)●第一一問、菩薩の三解脱門を學するに、餘法を學する理由如何(五三)

卷の第九十.....五六一—五四一

●第一問、一切の菩薩は衆生の苦惱を見て、衆生を度せんが爲の故に大悲心を發せば、今何を以てか實際と爲すと云ふや(五三二)●第二問、一切衆生皆生の因縁は是れ苦なりと知らば、菩薩は何の奇特かあらん(五三三)●第三問、識の胎に入る理由如何(五三六)●第四問、上には業を有と名け、今また業を行と名くる理由如何(五三六)●第五問、無始の生死は展轉して甚だ多し、何を以てか止だ無明に齊るや(五三九)●第六問、若し衆生及び法は、從本已來無爲ならば、誰か方便をなし、誰をか度脱すと爲すや(五四〇)●第七問、性空とは何ぞや、菩薩道とは何ぞや(五四三)●第八問、佛が阿羅漢の夢中の菩提は何處に在つて行するやと問ひ給ひし理由如何(五四六)●第九問、須菩提が阿羅漢すら尙ほ眠らずと云ひし理由如何(五四九)

卷の第九十一.....五四二—五六四

●第一問、須菩提は已に六度を修行して菩薩道を具足し、無上正等覺を得べきことを知り、然るを今更に問へるは何故なるか(五四〇)●第二問、六度の外に更に何等の勝法ありや(五四四)●第三問、幻法咒術は實有なるも、幻の所作の物は虚なり、衆生の空なるが如く、菩薩も亦空なり。菩薩は衆生を化作せず、何ぞ喩となすことを得んや(五四七)●第四問、貧乏の者に給施して瞋らしめざることば耐るべし、人の意に稱はず、乃を惱ましめば復云何(五六一)●第五問、布施波羅蜜多に住して、他の五波羅蜜多を行じ訖る、何を以てか復更に六波羅蜜多を説くや(五六三)●第六問、三十七品は自ら心より出づ、何ぞ是の因縁を與ふべけんや(五六三)

## 卷の第九十二.....五六五—五八二

●第一問、須菩提は無言なりと雖も、而も世尊は言を以て答へ給ひしに非ずや(五六六)●第二問、生不生ともにも過あり、非生非不生も亦過あらば、何を以てか得すと云ふや(五七〇)●第三問、佛は是れ衆生、衆生は是れ法なり、云何が佛は即ち是れ菩提なりと云ふや(五七五)●第四問、經中に、道は即ち是れ菩提、菩提即ち是れ道、佛即ち是れ菩提、菩提即ち是れ佛」と説く理由如何(五七六)●第五問、淨佛國土とは何ぞや(五七七)●第六問、若し菩提は無生法忍を得て、然る後佛國土を淨めば、今何を以てか初發心より已來、塵の身口意を淨むと云ふや(五七〇)●第七問、若し布施等の善法、佛土を淨むるの果報を得ば、何を以てか但だ三業を淨むるのみを説くや(五七九)●第八問、身口意の麤業は知り易し、須菩提が之を問へる理由如何(五七九)●第九問、已に十不善道の中に慳貪等を攝せり、今之を別説する理由如何(五八〇)●第一〇問、六度の中に已に戒を説けり、今それ更に戒不淨を説くは何故なるか(五八〇)

## 卷の第九十三.....五八二—六〇八

●第一問、若し相を取らずんば、云何が能く色等を厭ひ、善法を成就せんや(五八四)●第二問、有爲法の取るべからざるは即ち可なり、無爲法——如・法性・實際——を取るべからずと云ふは、何故なるか(五八五)●第三問、三千大千世界に滿つる珍寶は、何の處より來るや。諸賢聖は少欲知足なり、誰か之を受くる者ぞ。若し凡夫は厭足なければ、何ぞ能く三千世界の物を受けんや(五八五)●第四問、諸佛賢聖は離欲の人なり、即ち音樂歌舞を用ゐず、何を以て伎樂を供養するか(五八六)●第五問、沙彌戒一日戒を受くるに、尙ほ身に香を塗らず、云何が香を以て、佛及び僧に供養するか(五八六)●第六問、佛説によれば、此の五欲は火の如く、坑等の如し、然るを菩薩は何故に衆生をして之を得せしめんと欲するか(五八六)●第七問、若し爾らば毗尼の中に、「一比丘の我れ佛法の義を知る、五欲を受くるも妨げず」と言へるに、呵するも三たびにして擯出せし理由如何(五九〇)●第八問、諸佛の出世は苦惱せる衆生を救はんが爲なり、若し三

惡道なくんば云何が憐愍する所あらんや(五九〇)●第九問、佛は衆生を憐愍して佛國土を淨む、何を以てか三惡道の衆生なきや(五九二)●第一〇問、若し煩惱なくんば、諸佛出世するも、何の爲す所かあらんや(五九三)●第一一問、餘佛に三乘の教化あり、豈に獨り劣らんや(五九四)●第一二問、阿彌陀佛、阿闍佛等は五濁惡世に生ぜず、何を以てか三乘あるや(五九五)●第一三問、諸佛は無量不可思議の神通力あり、何ぞ無量の身を現じて衆生を度せざるや。又何ぞ樹木の音聲を須ふるや(五九六)●第一四問、餘佛は種種に勤苦して說法するも、衆生尙ほ道を得ず、何を以てか但だ佛名を聞くのみにして便ち道を得るか(五九七)●第一五問、法華經の中に説くが如くば、福徳の大なるも若くは小なるも、皆當に作佛すべし、何を以てか獨り淨佛國土のみを説くや(五九八)●第一六問、人の釋尊より法を聞いて、疑を生ずる者多き理由如何(五九九)●第一七問、上には佛の名を聞けば、畢竟して佛に至ると言ひ、今は諸法に於いて障礙なければ、必ず作佛すと云ふ。是の間、何等の差別ありや(五九九)●第一八問、已に是の如きの相は不退轉、是の如きの相は不退轉にあらず、不退轉は是れ畢定なりと説けり、然るを須菩提が今更に問へるは何故なるか(六〇〇)●第一九問、佛を求むる者は恆河沙の如く多きも、不退轉を得る者は、一人乃至二人に過ぎず、然るを今三種の菩薩は、皆盡く畢定すと云へる理由如何(六〇一)●第二〇問、是の二義の中、何れか是れ實なるや(六〇二)●第二一問、菩薩もし畢定して佛ならば、何を以てか種種に二乘を呵し、菩薩の二乘の證を取るを聽かざるか(六〇三)●第二二問、阿羅漢の先世の因縁により受くる所の身は應に滅すべし、何の處に住してか佛道を具足するや(六〇四)●第二三問、若し阿羅漢にして、淨佛國土に往いて法性生身を受け、是の如く速かに作佛するを得ば、何を以てか迂廻し稽留すと云ふか(六〇五)●第二四問、若し爾らば此の菩薩は何故に長壽天に生ぜざるか(六〇六)●第二五問、菩薩は大福德智慧の力もて應に邊地邪見の家に生じ、而して之を教化すべし、何を以てか畏れて生ぜざるや(六〇六)●第二六問、菩薩の獸身と作る理由如何(六〇七)

卷の第九十四……………六〇九—六三五

●第一問、若し國土空ならば、佛も亦た應に空なるべし、何を以てか別説するや(六一五)●第二問、天眼は色を見るべ

きに、善法又は一切法の性空を見る理由如何(六六)●第三問、菩薩の神通を遊戯と名くる理由如何(六八)●第四問、何の必要ありてか、衆生を成就し、佛土を淨むるか(六九)●第五問、菩薩もし著心もて布施せば、何等の過ありてか、具足と名げざるや(六九)●第六問、その過は如何(六三)●第七問、須菩提が佛法と菩薩との差別を問へる理由如何(六五)●第八問、佛は先に大利益の故に五道に墮せずと説き給ひしに、今云何が得ずと説き給へるか(六七)●第九問、無漏業を非自非異といふ理由如何(六六)●第一〇問、佛は無數劫より已來、微妙の法を習ふ。何を以てか、但だ菩薩滅道を説き給へるか(六三)●第一一問、須菩提が是の難問をなせる理由如何(六三)●第一二問、菩薩二諦は有漏法なれば虚誑不實なるべきも、遺諦は無漏法、滅諦は無爲法、云何が虚誑不實といはん(六三)●第一三問、空亦ば空觀を説かずして、菩薩の位に入る理由如何(六三)●第一四問、佛、十八空の中に但だ自相空を説き給へる理由如何(六三)

### 卷の第九十五.....六三六—六三三

●第一問、佛は處處に已に此の事に就き答へ給へり、然るを須菩薩が復た問へるは何故なるか(六四)●第二問、須菩提は有を以て空を難す、佛は何故に其の意を可し給へるや(六四)●第三問、諸佛所行の實義なる畢竟空は此は實にあらざるか(六五)●第四問、若し二俱に實ならずんば、云何が解脱することを得ん(六五)●第五問、阿毗曇等の經中には、垢あり、淨あり、但だ垢淨を受くる者なし、三毒等は是れ垢、三解脱門等は是れ淨と説くにあらずや(六五)●第六問、我に我見なしと雖も、實に凡夫の人あり、此の中に住して、諸の煩惱を起すは如何(六五)●第七問、我なしと雖も五蘊の中に於て邪行す、五蘊はこれ我我所にあらずや(六五)●第八問、若し顛倒して生ぜば、何を以てか但だ己身に於いて見を生ずるや(六五)●第九問、若し菩薩、諸法實相を知らば、布施等を行じて何かせん(六五)●第一〇問、菩薩の利他的方面のみを説いて、自利的方面を説かざる理由如何(六五)●第一一問、若し但だ利他的のみならば自らを利する能はず、云何が上の人といはん(六五)●第一二問、自ら無所著を得て、衆生をして無所著を得せしむる理由如何(六五)●第一三問、餘處には、二法は凡夫の法、不二の法は聖賢の法と説くにあらずや(六五)●第一四問、先に諸法

は即ち平等の相、平等は即ち諸法の實、名異にして義同じと説けり、今それ平等は一切法を出過すと説くは何故なるか(六六)●第一五問、諸佛は諸法を轉ぜず、但一切智を以て照し、人の爲に演説す。汝今何を以てか、若し佛諸法を分別せずんば、云何が地獄乃至十八不共法あることを知らんと言ふや。畜生等は現に人の眠に見る所、何ぞ佛の説を須ゑん(六六)●第一六問、有爲法は無常、無爲法は常なり、云何が有爲法は無爲を離るることを得ずと言ふか(六六)

## 卷の第九十六.....六四—六八

●第一問、此の事は佛已に説きたまへり、今それ須菩提が更に問へる理由如何(六六)●第二問、一切法の空なる理由如何(六六)●第三問、一切の法は相を離ると説く理由如何(六六)●第四問、空空の故に名けて空と爲す理由如何(六六)●第五問、若し一切法空にして化の如くならば、諸法に種種の別異なる理由如何(六六)●第六問、諸の煩惱は是れ惡法なり、云何が能く善業無動業を生ずるや(六七)●第七問、煩惱は是れ垢心にして、善心は是れ淨心なり。垢と淨とは和合するを得ず、何を以てか我心の中に住して能く善業を起すといふや(六七)●第八問、若し業に従つて果報あらば、云何が變化といふや(六七)●第九問、諸の變化は皆業の所作ならば、何を以てか但だ業變化のみ説かざるや(六七)●第一〇問、唯佛のみは無誑の人なり。然るに佛が或は都て空なりと説き、又は都て空ならずと説き給へる理由如何(六七)●第一一問、人の爲の故に諸法の相を轉すべきや如何(六七)●第一二問、若し智度は無相畢竟空にして禪定を行するも尙ほ得難くんば、散心もて求覓して、云何が之を得べけんや(六七)●第一三問、若し常啼これ新發意ならば、十方の諸佛は何故に其の前に現在して、諸の三昧を得、身命を惜まざるか(六七)●第一四問、常啼菩薩が大雷音佛の所に於いて菩薩の行を修せし理由如何(六七)●第一五問、常啼は未だ不退轉を得ず、何を何てか菩薩大菩薩と名くるか(六八)●第一六問、薩陀波崙と名く所以如何(六八)●第一七問、空中の聲とは是れ何の聲なるか(六八)●第一八問、疲極飢渴の火の來つて身を切るに云何が念はざるや(六八)●第一九問、常啼は其の形を見ず、但たその聲を聞くのみ、何を以てか便ち教を受くと言ふや(六八)●第二〇問、三解脱門は般若の中に攝在するや如何(六八)●第二一問、初に糖

進を教へ、後には三解脱門を教ふ、般若は今復た何事をなさんと欲すが故に、善知識に親近することを教ふるや  
 (六八五) ● 第二二問、但だ善知識に親近すと説かずして、種種の因縁を説く理由如何(六八六)

### 卷の第九十七……………六八九—七〇五

● 第一問、常啼が忘れて空中の聲を問はざりし理由如何(六九二) ● 第二問、空中の聲已に滅す、何を以てか此に住する  
 と七日にして更に間處を求めざるや(六九三) ● 第三問、七日に至りて佛身乃ち現する理由如何(六九四) ● 第四問、常啼が  
 爾かく憂愁せし理由如何(六九五) ● 第五問、空中に現するは是れ何等の佛なるか。先に音聲のみありて全身を現するは  
 何故なるか。既に現せば何を以てか即ち度せずして曇無竭の所に至るや(六九五) ● 第六問、衆香城の所在地は何の處なり  
 や(六九六) ● 第七問、曇無竭の因縁は如何(六九六) ● 第八問、曇無竭は是れ生身なりや、法身なりや(六九七) ● 第九問、若し  
 是の菩薩、一切法の中の無明を破さば、此の人は尙ほ佛すら見るを須あらず、何を以てか曇無竭の所に至らんや(六九九)

### 卷の第九十八……………七〇六—七三四

● 第一問、上に已に曇無竭は是れ汝が善知識なりと説けり、今何を以てか、「何等か是れ我が善知識なり」と問ふや  
 (七〇六) ● 第二問、上に虚空の聲を聞いて問はざるが故に七日啼哭す、今十方の佛を見ず、何を以てか大憂愁して佛を  
 見んことを求めず、但曇無竭の所に於て、諸佛去來の事を問はんと欲するや(七〇七) ● 第三問、若し常啼是の三昧力を  
 得ば、何を以てか諸佛の去來を曇無竭に問へるか(七〇七) ● 第四問、先には常啼大に世間の事に著せず、深く般若波羅  
 蜜多を愛するが故に憂愁すと説き、今何を以てか自ら貧窮にして以て供養無なきを鄙むや。但だ好心を以て師の意に  
 隨はば則ち是れ法供養なり、華香を用つて何かせん(七〇八) ● 第五問、大菩薩たる常啼の貧窮なる理由如何(七〇八) ● 第六  
 問、若し身を賣りて他に與へば、誰か此の物を買うて、往いて師を供養せんや(七〇九) ● 第七問、魔は何を以てか其の  
 意を破せんと欲するや(七一一) ● 第八問、若し魔にして常啼を壞せんと欲せば、先に来りて空中の聲を聞き、十方の佛

を見る時、何を以てか壞せざるや、又婆羅門居士に聞かしめざる理由如何(七三) ●第九問、魔の菩薩を殺さず、但だ破壞するは如何(七三) ●第一〇問、常啼は身を惜まず、買ふ人なしと雖も、又愁ふ可らざるにあらずや(七三) ●第一一問、釋提桓因は報得の知他心あり、何を以てか今來つて常啼を試むるや(七三) ●第一二問、帝釋は是れ大天王なり、何を以てか、我れ天を嗣らんと欲して、人の心血髓を須むと妄語するや(七三) ●第一三問、若し帝釋身を化して來らば、何を以てか、汝は何等の價をか須むと言ふや(七三) ●第一四問、若し長者の女、聲を聞かば、何ぞ來つて問はざるや、「汝何を以てか身を賣る」と(七三) ●第一五問、是の菩薩は、既に自ら身を割截す、云何が能く長者の女とともに多く佛法を説かんや(七三) ●第一六問、已に肉を割く、云何が平滿を得せしむるか(七三) ●第一七問、是の女は先に「汝が須むる所のは盡く我に従つて之を索めよ」といひ、今何を以てか我が父母に従つて索めよといふか(七三) ●第一八問、長者は貴くして力あり、云何が先に常啼を誑らす、其の功德を聞くが故に、便ち能く女、及び眷屬寶物を之に與へ、俱に去らしむるか(七三) ●第一九問、曇無竭は已に般若の義に通達せり、何ぞ七寶の臺に書する般若の經卷を用つて、中に著いて供養するか(七三) ●第二〇問、臺上に書寫する般若と法盛の演說する般若と、二處俱に力ありと雖も、而も書寫する處のものは人を益する能はず、何を以てか先づ臺の所に至るや(七三) ●第二一問、法盛には六萬の姪女と五欲の宮殿とあり、云何が能く散する所の花物を以て、化して華臺とすや(七三) ●第二二問、菩薩の法は先づ衆生の中に於いて悲心を起し、衆生の苦を度せんと欲するが故に無上正等正覺を求む。今は但曇無竭の神力威德を見て、云何が發心するや(七三) ●第二三問、常啼は諸の大三昧を得、云何が空を知らず、佛相を取つて深く著するや(七三)

卷の第九十九……………七三—七六〇

●第一問、諸法如とは何ぞや(七四〇) ●第二問、三十二相、八十隨好形、十力、四無所畏等和合するが故に、佛ありと知るや如何(七四〇) ●第三問、是の故に我先に「第一清淨の五衆、三十二相等を名づけて佛となすや」と問ひしにあらず

や(七四)●第四問、若し一切種智にして、第一妙色身の中にあれば、即ち是を佛と名くるや如何(七五)●第五問、何故に華法なしと言ふか(七六)●第六問、若し佛無なしと言はば、即ち是れ邪見なり、云何が菩薩は發心して作佛を求むるや(七七)●第七問、若し是の法、無所有ならば、云何が見るべく、聞くべく、苦あり、樂あり等と、諸の異を分別するか(七八)●第八問、若し衆生の福徳の因縁の故に海に珍寶を生ぜば、云何が衆生の近邊に生ぜずして、大海難得の處に生ずるや(七九)●第九問、帝釋が曼陀羅華を化作して、薩陀波耆に與へたる理由如何(八〇)●第一〇問、長者の女が身を以て供養せずして、而も薩陀波耆に與へし理由如何(八一)●第一一問、長者の女は初め父母を捨てて已に薩陀波耆に屬す、今何を以てか復た身を以て施すや(八二)●第一二問、若し曇無竭、常啼をして善根を具足せしめんと欲せば、何を以てか遺つて常啼に與ふるや(八三)●第一三問、諸の大菩薩は法を説いて疲極すべからず、何を以てか宮に入るや(八四)●第一四問、法の爲めならば、何故に坐臥すべからざるか(八五)●第一五問、常啼は先に師の七歳出でざりしを知りしや不や(八六)●第一六問、人身は軟弱なり、何ぞ能く七歳坐臥せざることを得るや(八七)●第一七問、法盛が七歳の間三昧に入りし理由如何(八八)●第一八問、常啼は云何が七歳を過ぎ已つて、法盛の當に出づべきを知りしや(八九)●第一九問、若し福德成就し、願に隨つて即ち得ば、魔は其の水を隠蔽せざるべきにあらずや(九〇)●第二〇問、若し常啼法を愛するの念盛んなるが爲め、肉を刺し、血を出し、身死せば、誰か法を聽かん(七一)●第二一問、水を得ざる時、何を以てか、當に何の處に於いてか水を得て地に灑がんとし念をなさざりしか(七二)●第二二問、若し諸の菩薩、微妙三昧の中に入らば、誰か能く起たしめんや(七三)●第二三問、四樂の中、但だ第三禪の樂のみを説く理由如何(七四)

## 卷の第一百……………七六一—七九〇

●第一問、諸法平等と般若とを區別して因果となす理由如何(七六)●第二問、般若波羅蜜(多)の相を説かずして、平等を説く理由如何(七六)●第三問、離等は是れ般若波羅蜜多の相なりと説く理由如何(七六)●第四問、上に已に諸法



平等と説き、今復た諸法一味と説く理由如何(七六六) ●第五問、諸法平等と諸法離とを別説する理由如何(七七七) ●第六問、大海を無邊といふ理由如何(七八〇) ●第七問、須彌山は一色なり、何を以てか莊嚴といふや(七八九) ●第八問、常啼は已に諸法の空相を知れり、今それ種種に勤苦して七歳住立し、法盛に見えて何等の利益を得たりしや(七九二) ●第九問、佛が此の法を囑累して、愛著せるものの如くなるは何故なるか(七九七) ●第一〇問、聲聞たる阿難に囑累して、彌勒等の大菩薩に囑累せざりし理由如何(七九九) ●第一二問、若し爾らば、法華經及び餘の方等經等は、何を以てか喜王等に囑累せしか(七八八) ●第一二問、何の法か般若に勝るものありて、般若を阿難に囑累し、餘經を菩薩に囑累せしか(七七六) ●第一三問、阿闍佛品の中の囑累と今の囑累と何等の異なるか(七七九) ●第一四問、囑累の爾かく慇懃鄭重なる理由如何(七八〇) ●第一五問、佛が阿難に「汝はこれ我が弟子なりや、我は是れ汝が師なりや」と問ひし理由如何(七八二) ●第一六問、般若に諸佛の師なり、阿難が其の師を尊敬せずして、佛を尊敬するは何故なるか(七八三) ●第一七問、三たび囑累する理由如何(七八三) ●第一八問、若し深く愛せば何ぞ三たびに限らんや(七八三) ●第一九問、般若は已に不増不減なりといふ。今何ぞ斷滅せざらしめよといふや(七八四) ●第二〇問、三不善業を成就する人にして般若を聽受すとも、云何ぞ佛に親近し、離れざるを得んや(七八五) ●第二二問、諸の大阿羅漢ば已に實際を證して小喜すらなし、況んや大喜なや(七八六) ●第二二問、佛、阿難に般若を囑累せば、佛涅槃の後、阿難は大迦葉とともに三藏を結集する時、何故に説かざりしか(七八七)

## 以上



# 國譯大智度論

## 卷の第七十二

### 大如品第五十四を釋す。

經

爾の時に、欲界の諸の天子と色界の諸の天子は天の末旃檀香を以て、天の青蓮華、赤蓮華、白蓮華を以て、遙に佛の上に散じ、來りて佛所に至り、佛足を頂禮して、一面に住して佛に白して言さく、  
 「世尊よ、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は、甚深にして見難く解し難く、微妙寂滅にして思惟し知るべからず。智者は能く知るも、一切世間の信する能はざる所なり。何となれば是の深般若波羅蜜(多)の中には、是の如く説けばなり。色は即ち是れ薩婆若、薩婆ニヤ、若は即ち是れ色なり。乃至一切種智は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ一切種智なり。色の如相と薩婆若の如相とは、是れ一如にして、無二無別なり。乃至一切種智の如相と薩婆若の如相とは、一如にして無二無別なり」と。

佛、欲色界の諸の天子に告げたまはく、「是の如し、諸の天子よ、色は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ色なり。乃至一切種智は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ一切種智なり。色の如相、乃至一切種智の如相は無二無別なり。諸の天子よ、是の義を以ての故に、佛初め成道の時、心樂しんで、嚳然として法を説くことを樂まず、何となれば、是の諸佛の

【一】此の品には、大如一乘の甚深を説き、成佛と平等大慈の佛行と得益とを明す。他本には、大如相品又は菩薩行品に作れり。  
 【二】是の法は甚深なれば、世間の人は信すること能はず。

阿耨多羅三藐三菩提は、甚深にして、見難く、解し難く、微妙寂滅にして思惟し知るべからず。智者は能く知るも、一切世間の信する能はざる所なり。何となれば、阿耨多羅三藐三菩提は、得る者無く、得る處無く、得る時無ければなり。是を諸法の甚深の相と名く。所謂る二法有ること無きなり。諸の天子よ、如虚空は、甚深なるが故に、是の法は甚深なり。如は甚深なるが故に、是の法は甚深なり、法性も甚深、實際も甚深、不可思議無邊も甚深なるが故に、是の法は甚深なり。無來無去は、甚深なるが故に、是の法は甚深なり。不生不滅、無垢無淨、無知無得は、甚深なるが故に、是の法は甚深なり。諸天子よ、我も甚深、乃至知者、見者も甚深なるが故に、是の法は甚深なり。諸天子よ、色も甚深、受想行識も甚深なるが故に、是の法は甚深なり。檀波羅蜜(多)も甚深、乃至般若波羅蜜(多)も甚深なるが故に、是の法は甚深なり。内空、乃至無法有法空も甚深なるが故に、是の法は甚深なり。四念處も甚深、乃至一切種智も甚深なるが故に、是の法は甚深なり」と。

爾の時に、欲界色界の諸の天子、佛に白して言さく、「世尊よ、是の所説の法は、一切世間の信すること能はざる所なり。世尊よ、是の甚深の法は色を受くる爲の故に説かず、色を捨つる爲の故に説かず、受想行識を受くる爲の故に説かず、受想行識を捨つる爲の故に説かず、須陀洹果を受くる爲の故に説かず、須陀洹果を捨つる爲の故に説かず、乃至一切種智を受くる爲の故に説かず、一切種智を捨つる爲の故に説かず。諸の世間は皆受けて行ず、所謂色は是れ我なり、我所なり。受想行識は是れ我なり、我所なり、乃至十八不共法は是れ我なり、是れ我所なり、須陀洹果は是れ我なり、是れ我所なり。乃至一切種智は是れ我なり、是れ我所なり」と。佛、諸の天子に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸天子よ、是の法は色を受くる爲の故に説くに非ず、色を捨つる爲の故に説くに非ず、乃至一切種智を受くる爲の故に説くに非ず、一切種智を捨つる爲の故に説くに非ず。諸天子よ、若し菩薩有りて、色を受くる爲の故に行じ、乃至一切種智を受けんが爲の故に行ぜんに、是の菩薩は般若波羅蜜(多)を修するも能はず。禪(那)波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜

〔多〕を修すること能はず。檀〔那〕波羅蜜〔多〕を修すること能はず。乃至一切種智を修すること能はざる者なりしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の法は一切法に隨順す。云何が是の法は一切法に隨順するや。是の法は般若

波羅蜜〔多〕に隨順し、乃至檀〔那〕波羅蜜〔多〕に隨順す。是の法は内空に隨順し、乃至無法有法空に隨順す、是の法は四念處

に隨順し、乃至一切種智に隨順す。是の法は無礙なり、色を礙せず、受想行識を礙せず、乃至一切種智を礙せず、諸天子よ

是の法は無礙の相と名く。如虚空等の故に、如法性・法住・實際・不可思議性等の故に、空・無相・無作等の故なり。是の法は

不生の相なり。色は不生にして得べからざるが故に、受想行識は不生にして得べからざるが故に、乃至一切種智は不生にし

て得べからざるが故なり。是の法は無處なり。色處は得べからざるが故に、受想行識は得べからざるが故に、乃至一切種

智處は得べからざるが故なりしと。

是の時、欲色界の諸の天子、佛に白して言さく、「世尊よ、須菩提は、是れ佛子にし

て、佛に隨つて生ず。何となれば、須菩提の所説は皆空と合すればなりしと。爾の時に須

菩提、諸の天子に語るらく、「汝等は、須菩提は是れ佛子にして、佛に隨つて生ずと言へり。云何が佛に隨つて生ずと爲す

や」と。諸の天子〔答ふらく〕、「如相の故に、須菩提は佛に隨つて生ず。何となれば、如來の如相は不來不去にして、須菩提

の如相も亦不來不去なればなり。是の故に須菩提は佛に隨つて生ず。

復次に、須菩提は本より已來、佛に隨つて生ず。何となれば、如來の如相は、即ち是れ一切法の如相、一切法の如相は、

即ち是れ如來の如相にして、是の如相の中にも亦如相無し。是の故に、須菩提は佛に隨つて生ずと爲す。

復次に、如來の如は常住の相、須菩提の如も亦常住の相なり。如來の如相は異無く別無く、須菩提の如相も亦異無く別無

し。是の故に、須菩提は佛に隨つて生ずと爲す。如來の如相は礙ある處無く、一切法の如も亦無礙の處なり。是の如來の如

【三】 般若の一切法に隨順し、無礙不生無處なるを明す。

相と、一切法の如相とは、一如にして無二無別なり。是の如相は無作にして、終に如ならざるにあらず。是の故に是の如相は無二無別なり。是の故に、須菩提は佛に隨つて生ずと爲す。如來の如相は一切處に無念無別にして、須菩提の如相も亦是の如く、一切處に無念無別なり。如來の如相は不異・不別・不可得なり、須菩提の如相も亦是の如し。是を以ての故に、須菩提は佛に隨つて生ずと爲す。如來の如相は、諸法の如相を遠離せず、是の如は終に如ならず。是の故に、須菩提の如に異あらず、佛に隨つて生ずと爲すも、亦隨ふ所無し。

復次に、如來の如相は、過去ならず、未來ならず、現在ならず。諸法の如相も亦過去ならず、未來ならず、現在ならず。是の故に須菩提は佛に隨つて生ずと爲す。

復次に、如來の如は、過去の如中に在らず、過去の如も、亦如來の如中に在らず、如來の如は、未來の如中に在らず、未來の如は、如來の如中に在らず、如來の如は現在の如中に在らず、現在の如は如來の如中に在らず、過去・未來・現在の如と如來の如は、一如にして無二無別なり。色の如は、如來の如なり、受想行識の如は、如來の如なり、是の色の如と、受想行識の如と、如來の如とは、一如にして無二無別なり。我の如、乃至知者・見者の如と、如來の如とは、一如にして無二無別なり。檀波羅蜜(多)の如と、乃至般若波羅蜜(多)の如は、内空の如、乃至無法有法空の如、四念處の如と、乃至一切種智の如と、如來の如とは、一如にして無二無別なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の如を得るが故に、名けて如來と爲すしと。

是の如相品を説く時、是の三千大千世界の大地は六種に震動し、東涌西沒し、西涌東沒し、南涌北沒し、北涌南沒し、中央に涌きて四邊に沒し、四邊に涌て中央に沒す。

問うて曰く、若し般若波羅蜜(多)は、甚深ならざること無くんば、何を以てか或時は甚深を

【四】 第一問、智度もし甚深ならざると無くんば、或時は甚深を讚するは何故なるか。

讚するや。答へて曰く、般若波羅蜜(多)の中に、或時は諸法の空を分別す、是は淺し。或時は世間の法は、即ち涅槃に同じと説く、是は深し。色等の諸法は即ち是れ佛法にして、聽く者は説を聞いて心に佛語を信じ、自の智慧及ばざるが故に甚深なりと言ふ。譬へば、河水は洄洑して深處有り、淺處あるが如し。

問うて曰く、諸天の讚する所の法は甚深にして、一切世間の信する能はざる所なり。説を用ゐて何かせん。答へて曰く、一切に二種有り、一には名字の一切、二には實の一切なり。此の中の如きは名字の一切を説く、多く信せざるを以ての故に一切と言ふ。此の中に説く、「微妙寂滅の智者は能く知る」と。智者は必ず信有り。先に信じて後に知るが故なり。

復次に、是の般若波羅蜜(多)は、唯佛のみ能く知りたまへり。衆生の所説を聞いて、而して信する者は、此の中に名けて信と爲さず。智慧もて知り已るを名けて信と爲す。

問うて曰く、若し爾らば、何を以てか微妙は智者能く知ると言ふや。答へて曰く、一切世間は、能く遍なく盡く、諸佛を知るもの無し。智者は寂滅にして、智者は能く知る。少分は須陀洹の如く、無上道に於いて少分を得、所謂三結を斷するなり。是の如きの諸道は、展轉して増多す。若し世間都

【五】 第二問、諸天の讚する法

は甚深にして、一切世間の信する能はざる所なり、説を用ゐて何かせん。

【六】 一切に二種あり、(一)名字の一切、(二)實の一切。

【七】 智慧もて知り已るを名けて信と爲す。

【八】 第三問、若し爾らば、微妙は智者能く知ると言ふか。

べて信ぜずんば、云何が諸道有らん。是を以ての故に、寂滅の智者は、能く知ると言ふ。阿耨多羅三藐三菩提は、即ち是れ般若にして、但名字を異にし、菩薩の心中に在りては般若と爲し、佛の心中に在りては、阿耨多羅三藐三菩提と名く。是の中に、色等の法は、即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ色等の法なりと説く。此の中に、色等の法の如と、薩婆若の如とは、無二無別なりと説く。佛は諸天子の意を可とし、更に因縁を説きたまはく、「如し名色等の諸法は、眞實の相なり。譬へば宮殿及び諸の陋廬を除くが如き、旃檀及び雜木を燒くが如きは、其の處は虚空にして異色有ること無し。及び薩婆若等の諸法は、其の實を求むるに皆是れ如なり。是の義を以ての故に、佛初め成道の時、心に嘿然を樂しんで説法を樂します。甚深の法は凡夫の人の悟り難きことを知りたまひしが故なり。復次に、是の法は無二なるが故に甚深なり、虚空の如きが故に甚深なり、如法性等は甚深なるが故に甚深なり。

爾の時に、諸の天子は、是の法に取るべきの相無きことを知りて、佛に白して言さく、「是の所説の法は、一切世間の信すること能はざる所なり。是の法は色等の法を受くるが爲の故に説かず」と。佛は其の言を可とし、若し菩薩有りて、色等を受くるが爲の故に、菩薩道を行せば、般若波羅蜜(多)等の諸の功德を修すること能はず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)の

【九】 旃檀及び雜木を燒くに、其の處は虚空にして、異色あることなし。

【一〇】 佛初め成道の時、嘿然を樂んで、説法を樂しまざりし理由。



相は、一切法に隨順して障礙する所無し。何となれば、般若波羅蜜(多)に於いても、亦著せざればなりしと。障礙せざる因縁は虚空等の如しと説くが故に。(二)壁の中に先づ空相有り。譬へば小兒櫃を以て之に釘つに、力少なるが故に入らず、大力の者なれば能く入るが如し。行者も亦是の如く、色等の諸法の中に、自ら如實の相有るも、智慧力少なるが故に、空ならしむること能はず。大智者は能く知る。是の故に、「諸法は無礙にして、虚空の如く平等なり」と説く。色等の法は、不生にして亦得べからず。是を以ての故に不生と名く。但色等のみ不生なるに非ず、若し不生法にして得べくんば、則ち畢竟空に非ず、無礙と名くるに非ず、住する處無きも、亦是の如し。

爾の時、諸の天子、佛に白して言さく、「世尊よ、須菩提は佛に隨つて生ず、何となれば、知る所、説く所、皆空と合すればなり」と。

復次に、經に説く、(三)三種の子有り、一には隨順せずして生じ、二には隨順して生じ、三には勝れたる生なり、世尊は皆二種の子、「乃ち」隨順の子と勝れたる子とを願ふ。佛法の中には、唯一種の隨順の生を欲す。佛に勝るもの有ること無きを以ての故なり。(三)佛に五あり、皆口より生じ、法より生ず。須陀洹、乃至阿羅漢と、正位に入る菩薩となり。辟支佛は佛法の中に因縁を種うと雖も、無佛の時、自ら能く得道し、佛口より生ずと言ふことを得ず。因縁遠きが故な

- 【二】壁の中に空相あり、小兒櫃を以て之に釘つに、力少なきが故に入らず、大力の者釘てば、能く入るが如し。
- 【三】三種の子——(一)不隨順、(二)隨順、(三)勝生。
- 【三】五種の佛子。

り。諸漏盡くる者は、是れ隨順生なり。須菩提漏盡の中に於いて、常に畢竟空を樂しむ、是れ隨順生なり。何となれば、所行の法は、破壊すべからず、虚空の如ければなり。佛法は是の如き相なり。是を佛に隨つて生ずと名く。

問うて曰く、何を以てか法位に入れる菩薩は、佛に隨順して生ずと説かざるや。答へて曰く、有人は言ふ、「漏未だ盡さざるが故に説かず、須菩提は漏盡くるが故に説く」と。有人の言く、「無餘涅槃に入る者は、是れ第一清淨なり。阿羅漢の末後の身は、有餘涅槃に住して、無餘涅槃門に近きが故に説く。菩薩は深利なる智慧有りと雖も、生死の中に往返す。是の故に説かず」と。有人の言く、「般若に二種有り、一には唯大菩薩の與に説き、二には三乘と共に説く。聲聞と共に説く中に須菩提は是れ佛に隨つて生ず。但菩薩の與に説く時は、須菩提は佛に隨つて生ずと説かず。何となれば、法性生身の大菩薩は、是の中に結業の生身あること無く、但變化の生身のみ有り。三毒を滅し、三界を出で、衆生を教化し、佛世界を淨むるが故に世間に住すればなり」と。此の中には、都べて一切の聲聞の人無し、佛は大慈悲心なり、菩薩心も亦爾なり。是を菩薩は隨つて生ずと名く。須菩提は但涅槃を取るが故に隨つて生ずと説かず。此の經は二乘と共に説く。須菩提は般若波羅蜜(多)の甚深にして、法性生身の菩薩の力の大なることを知る。諸天は讚すと雖も

【四】 第四問、法位に入れる菩薩は、何を以てか佛に隨順して生ぜざるか。  
 【五】 二種の般若——(一)唯大菩薩のための般若。(二)三乘共説の般若。

語を受くべからず。諸の天子の言はく、「諸法の如は一相所謂無相にして、是の因縁の故に佛に随つて生ず、如は異ならざるが故なり」と。經中に説くが如し、「如來の如相の不來不去なるが如く、須菩提の如相も亦不來不去なり」と。

復次に、如來の如も畢竟空、一切法の如も亦畢竟空にして、一切法の如の中に須菩提の如を攝す。是の故に、須菩提は如來の如を用ふるが故に、佛に随つて生ずるなり。復次に、如來の如の憶想分別無く、常住にして、虚空の如くなるが如く、須菩提の如も亦是の如し。是の故に須菩提は佛に随つて生ず。

復次に、如來の如の無礙解脱を得るが故に、一切法中に聖礙無きが如く一切法の如も亦是の如し。一切法中に於いて亦聖礙無し。如來の如と、一切法の如は、一如にして異なること無し。須菩提の如も亦、一切法の如に入るが故に、是を以て佛に随つて生ず。

【一六】 如の意義。

復次に、諸法の如相は作無く、作者無し、如來の如相も亦是の如し。須菩提の如は、一切法の如に攝するが故に、佛に随つて生ず。復次に、如來の如相の一切處に常に憶想分別無きが如く、須菩提の如は一切法の如に攝するが故に、佛に随つて生ず。

復次に、如來の如相は一切法の如相を離れず、正しく一切法を觀するを名けて佛と爲す。一切法は

是れ因縁、佛は是れ果報なり。是の故に、如來の如は一切法の如を離れずと説く。是の如は實なるが故に、常に如にして如ならざる時無し。須菩提の如も亦是の如く、異ならざるが故に、佛に隨つて生じ、亦法として隨ふべきもの無し。

復次に、如來の如相は、憶想分別無く、三世を出過す、一切法の如も亦是の如く、須菩提の如も亦三世を出づ。是の故に佛に隨つて生ず。

復次に、如來の如は過去の如中に在らず。何となれば、如來は空にして、過去も亦畢竟空なればなり。是の故に空は空中に在りて住せず、譬へば、虚空は虚空の中に住せざるが如く、未來・現在も亦是の如し。三世の如と如來の如とは、不二にして分別せずとは、三世の如は空・無相・無生・無滅等なり、如來の如も亦是の如し。三世の如は無障礙の如にして、過去世も無窮無邊、未來世も亦無窮無邊なり、如來の如も亦是の如し。此の三世十方は無礙無邊なり。須菩提の如も亦是の如し。

復次に、五衆の如と、乃至一切種智の如と、如來の如とは、無二無別なり。何となれば、色等の諸法和合するが故に如來の如有り。是の如來は但是れ色等の法なりと言ふことを得ず、亦色等を離れたる法なりと言ふことを得ず、亦色等の法は如來の中に在りと言ふことを得ず、亦如來は色等の法中に在りと言ふことを得ず、亦色等の法は如來に屬すと言ふことを得ず、亦如來無しとも言ふことを得ず、五衆の色等の法中は假名の如來なり。如來の如は即ち是れ一切法の如なり。是の故に説けり、「色等

の法の如と如来の如とは不二不別なり」と。凡夫の人は二有り別有りと見、聖人は二無く別無しと見る。聖人〔の所見〕は信すべく、凡夫の人の所見は信すべからず。佛、須菩提に語りたまはく、「是を名けて如と爲す」と。佛は此の如に因りての故に名けて如来と爲す。如来とは如實に行じて、佛法の中に來到するなり。是の如を説く時、地の六種に震動すること、上に説けるが如し。

**釋**

是の時、諸の欲〔界〕の天子、諸の色〔界〕の天子は、天の末旃檀香を以て、佛の上に散じ、及び須菩提の上に散じて佛に白して言さく、「未曾有なり、世尊よ、須菩提は如来の如を以て佛に隨つて生ず」と。須菩提は復諸の天子の爲に説いて言く、「諸の天子よ、須菩提は色中より佛に隨つて生ぜず、亦一七色如中より佛に隨つて生ぜず、色を離れて佛に隨つて生ぜず、亦色如を離れて佛に隨つて生ぜず。須菩提は受想行識中より佛に隨つて生ぜず、亦受想行識如中より佛に隨つて生ぜず、亦一七受想行識を離れて佛に隨つて生ぜず、亦一切種智を離れて佛に隨つて生ぜず、亦一切種智如中より佛に隨つて生ぜず、亦一切種智を離れて佛に隨つて生ぜず、亦一切種智如を離れて佛に隨つて生ぜず。須菩提は無爲中より佛に隨つて生ぜず、亦無爲如中より佛に隨つて生ぜず、亦一七無爲如を離れて佛に隨つて生ぜず。何となれば、是の一切法は皆所有なく、不可得にして、隨つて生ずる者無く、亦隨つて生ずる法無ければなり」と。

【七】色如等。眼所見等を色等の法といひ、此の法の實相を色如等といふ。

爾の時、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の如は實にして虚しからず。法相・法住・法位、甚深にして、是の中に色は得べからず、色如も得べからず。何となれば、色すら尚ほ得べからず、何に泥んや色如得べけんや。受・想・行・識は得べからず、受・想・行・識如は得べからず。何となれば、受・想・行・識すら尚ほ得べからず、何に泥んや、受・想・行・識如得

べけんや。乃至一切種智は得べからず。一切種智如は得べからず。何となれば、一切種智すら尚ほ得べからず。何に況んや一切種智如得べけんや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の如し。舍利弗よ、是の如は實にして虚しからず。法相・法住・法位、甚深にして、是の中に色は得べからず。色如は得べからず、何となれば、色すら尚得べからず、何に況んや色如得べけんや。乃至一切種智は得べからず、一切種智如は得べからず。何となれば、一切種智すら尚ほ得べからず、何に況んや一切種智如得べけんや」と。

舍利弗の是の如相を説く時、二百の比丘は、一切法を受けざるが故に、漏を盡くして阿羅漢を得、五百の比丘尼は塵を遺ざかり垢を離れ、諸法の中に法眼を得て、天人の中に生じ、五千の菩薩摩訶薩は無生法忍を得、六千の菩薩は、諸法を受けざるが故に、漏を盡し、心に解脱を得て、阿羅漢を成ず。舍利弗よ、是の六千の菩薩は先世に五百の佛に値ひ、親近し供養し、五百の佛の法中に於いて布施、持戒、忍辱、精進、禪定を行するも、般若波羅蜜(多)無く、方便力無きが故に、別異の相を行じて是の念を作す、「是は施、是は持戒、是は忍辱、是は精進、是は禪定なり」と。般若波羅蜜(多)無く、方便力無きが故に、布施、持戒、忍辱、精進、禪定の別異の相を行じ、別異の相を行するが故に、無異の相を得ず。無異の相を得ざるが故に、菩薩位に入ることを得ず。菩薩位に入ることを得ざるが故に、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果を得。

舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、道の若くは空、若くは無相、若くは無作法ありと雖も、般若波羅蜜(多)を遠離して方便力無きが故に、便ち實際に於いては證を作して聲聞乘を取る」と。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁の故に、俱に空・無相・無作の法を行じ、方便力を遠離するが故に、實際に於いては證を作して聲聞乘を取り、菩薩摩訶薩も亦空・無相・無作の法をするも、方便力有るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。

佛、舍利弗に告げたまはく、「有る菩薩は薩婆若心を遠離して空・無相・無作の法を修し、方便力無きが故に聲聞乘を取

る。舍利弗よ、復有る菩薩摩訶薩は薩婆若心を遠離せず、空・無相・無作の法を修し、方便力有るが故に、菩薩位に入りて、阿耨多羅三藐三菩提を得。舍利弗よ、譬へば、鳥有り、身の長百由旬、若くは二百、三百由旬にして、而も翅有ること無く、三十天より自ら閻浮提に投するが如し。舍利弗よ、汝が意に於いて云何、是の鳥は申道に是の念を作す、上の三十三天に還らんと欲すと。能く還ることを得るや不や」と。「得ざるなり、世尊よ」と。

「舍利弗よ、是の鳥は復是の願を作す、閻浮提到るに身をして痛まず、惱まざらしめんことを欲す」と。舍利弗よ、汝が意に於いて云何、是の鳥は痛まず、惱まざることを得るや不や」と、舍利弗の言く、「得ざるなり、世尊よ。是の鳥は地に到りて、若くは痛み、若くは惱み、若くは死し、若くは死に等しき苦あり。何となれば、世尊よ、是の鳥は身大にして而も翅無ければなり」と。

「舍利弗よ、菩薩摩訶薩も亦是の如く、如恆河沙等の劫に、布施・持戒・忍辱・精進・禪定を修し、大事を發し、大心を生じ、阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故に、無量の願を受くと雖も、般若波羅蜜(多)の方便力を遠離するが故に、若くは阿羅漢に墮し、若くは辟支佛道に墮す。何となれば、是の菩薩は薩婆若心を遠離し、布施・持戒・忍辱・精進・禪定に般若波羅蜜(多)無く、方便力無きが故に、聲聞地、若くは辟支佛道の中に墮す。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、過去・未來・現在の諸佛の持戒・禪定・智慧・解脫・解脫知見を念ずと雖も、相を取りて受持せず。是の人ば諸佛の戒・定・慧・解脫・解脫知見を知らず解せず、但空・無相・無作の名字の聲のみを聞き、而も名字の聲を取りて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。菩薩摩訶薩、如是の如く廻向せば、聲聞辟支佛地の中に住して、過ぐることを得ること能はず。何となれば、般若波羅蜜(多)、及び方便力を遠離して、諸の善根を持し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すればなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩あり、初發意より已來、薩婆

過去・未來・現在の諸佛の戒・定・慧・解脫知見に於いて空解脫門の相を取らず、無相・無作解脫門の相を取らず。舍利弗よ、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は聲聞・辟支佛道に墮せずして、直に阿耨多羅三藐三菩提に至る。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、初發心より已來、布施を行じて相を取らず、持戒・忍辱・精進・禪定に相を取らず、過去・未來・現在の諸佛の戒・定・慧・解脫・解脫知見に相を取らざればなり。舍利弗よ、是を菩薩は方便力もて離相の心を以て、布施・持戒・忍辱・精進・禪定を行じ、乃至離相の心もて、一切種智を行すと名くしと。

舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、我れ佛の所説の義を解するが如くんば、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)の方便力を遠離せざれば、當に知るべし。是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に近づけりと。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、初發心より已來、法の若くは色、若くは受・想・行・識、乃至一切種智なりと知るべき無ければなり。世尊よ、菩薩道を求むる善男子善女人ありて、般若波羅蜜(多)の方便力を遠離せば、當に知るべし、是の人ば阿耨多羅三藐三菩提に於いて、或は得、或は得ずと。何となれば、世尊よ、是の菩薩道を求むる善男子善女人は、有ゆるの布施に皆相を取り、有ゆるの持戒・忍辱・精進・禪定に皆相を取る。是を以ての故に、是の善男子善女人は、阿耨多羅三藐三菩提に於いて不定なり。世尊よ、是の因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、般若波羅蜜(多)の方便力を遠離すべからず。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の方便力の中に住し、無得無相の心を以て、應に布施・持戒・忍辱・精進・禪定を修すべく、乃至無得無相の心を以て、應に一切種智を修すべしと。



釋して曰く、諸の天子は歡喜し、末旃檀香を以て佛及び須菩提の上に散じ、歎じて言はく、「希有なり、世尊よ」と。須菩提は如來の如を以て佛に隨つて生ずとは、諸の天子は意に謂へらく、「須菩



提は智慧力の故に、一切法をして皆如にして佛法ならしむ」と。是の故に佛に隨つて生ずと説く。須菩提は諸の天子の心に少しく是の諸法の如を貴尚することを知れり。是の故に、須菩提は諸の天子の心を斷せんと欲するが故に、是の如の畢竟空相を説き、四種を以て如に著する心を破す。所謂須菩提は色中に在らず、色如の中に在らず、色等を以てせず、色等の如を以てせず、色等を離れず、色等の如を離れず、佛に隨つて生ず。佛は此の中に自ら因縁を説きたまはく、「此の法は皆空にして得べからず」と。舍利弗言はく、世尊よ、是の如は甚深なり。是の如の中には、但色等の法は得べからず、何に況んや、色等の法の如得べけんやと。

問うて曰く、(一八)何者か是れ色等の法にして、何者か是れ色等の法の如なりや。答へて曰く、色等の法とは、眼所見等の諸法なり。如とは、色等の

法の實相不虛誑なるに名く。人は色等の如の法中に於いて、錯謬するが故に、或は不善業を起して、惡道の中に墮し、或は善道を起して、人天の中に生ずるも、終に磨滅に歸して、還た諸の苦を生じ、或は無漏業を起し、應に大利を求むべくして、而も小乗を取りて畢竟清淨の如相を得ず。故に色等の法は皆是れ作法有爲虚妄にして顛倒より生ず。凡夫は行處を憶想分別する所なり。是の故に、色等の法は虚妄にして即ち是れ如ならず。色等の法の如實を知るが故に即ち是れ如なり。色等の法に因りて如の名を得、是の故に色等の法を離れすと言ふ。如を得れば色等の法は如の中に入り、皆一相に

【一八】 第五問、色等の法とは何ぞや。色等の法の如とは何ぞや。

して異なるは無し。是の故に、須菩提は謙して言はく、「但我のみ佛に隨つて生ずるに非ず、一切法も亦是の如き相なり」と。舍利弗、須菩提の所説を讚歎すらく、「色等の法も亦畢竟空なり。何に況んや如をや。因若し空ならば、何に況んや果をや」と。是の如き甚深の如相を聞いて、衆生は各道を得て利益す。

問うて曰く、(一九) 是の般若波羅蜜(多)は菩薩の爲に説く、何故に六千人は阿羅漢道を成ずるや。答へて曰く、佛は必ず難者あるを知りて、自ら舍利弗の爲に因縁を説きたまはく、「是の人は般若波羅蜜(多)無く、方便力無く、過去に功德を作すも、方便無きが故に、邪行にして正しからず。是の人は般若波羅蜜(多)を離るるが故に、深く善法に著す。今佛より般若波羅蜜(多)を聞くも、深く世間を厭ひ、慈悲心薄きが故に、自利を求め、一切法を受けず、即ち阿羅漢を得るも。般若に於いては咎無し。人の器を持して海に詣り、器の大小に隨つて各自ら取りて足るが如し」と。

問うて曰く、(二〇) 經に説くが如くんば、六千の菩薩は般若波羅蜜(多)の方便力無きが故に、五波羅蜜(多)を行じ、是の無分別の法を得ずして阿羅漢と作る。若し一切の聖人は、皆無爲法を得、無爲法は即ち是れ分別無し。何を以てか、此の中に無分別の法を得ずして、阿羅漢と作ると説くや。答へて曰

【一九】 第六問、智度は菩薩のた  
めに説く、六千人は何故に阿  
羅漢道を得たるか。  
【二〇】 第七問、無分別の法を得  
ずして而も阿羅漢となる理由  
如何。

く、今世の聽法の時を説くに非ず、即ち是は過去五百世の時、般若の方便を得ず、五波羅蜜(多)の功德を修集す。是を以ての故に、無分別(の法)を得ずして、菩薩の信等の五根を失すと云ふ。菩薩の信等の五根を失するが故に、般若を聞くと雖も、菩薩の所聞の如くなることを得ず、即ち實際に於いて證を作すなり。

問うて曰く、(三) 俱に空・無相・無作を行じ、何を以てか、一人は佛と作れることを得、一人は阿羅漢と作れるや。答へて曰く、種種の因縁有りと雖も、阿羅漢を得る大因縁は、所謂、薩婆若心を離れて、空等を行するが故なり。大鳥とは金翅鳥にして、諸天に在(住)す、此の間には人の鳥たる雀等の如きと異なること無し。是の鳥の來らざる所以は、此の鳥は龍を食し、翅より毒風を出だし、扇げば一切の人眼、明を失するが故なり。(三三) 是の鳥は初めて卵を出づるより羽翼未だ成らず、意に飛び去らんと欲して即時に墮落し、中道にして心に悔ゆらく、

「我は未だ飛ぶべからず」と。本の天上の舍摩梨樹の上に還り往かんと欲す。是の鳥は身大にして、羽翼未だ成らず、身を擧ぐることに能はず。鳥身とは、是れ菩薩なり。身大なりとは、世世に廣く五波羅蜜(多)の功德を集むるなり。兩翅無しとは、是れ般若波羅蜜(多)無く、方便無きなり。須彌山とは是れ三界なり。虚空とは是れ無量の佛法なり。未だ飛ぶべからずして而も飛ぶとは、是の菩薩は功德未

【三】 第八問、俱に空・無相・無作を行じて、一人は佛と作り、一人は阿羅漢と作れる理由如何。

【三三】 金翅鳥の子は羽翼未だ成らざるが故に墮落す、未熟の菩薩も亦是の如し。

だ成滿せずして、菩薩の三解脱門に行かんと欲し、無量の佛法の虚空の中に遊ばんと欲し、而も自ら退没し、是の心は佛と作ることを欲し願ふと雖も、而も得ること能はざるなり。若くは死すとは、是れ阿羅漢道なり、死等とは辟支佛道なり。若くは痛み、若くは惱むとは、菩薩の本願功徳を失するなり。佛は自ら句を結びたまはく、「乃至是の無得無相の心中に住して應に布施すべし等」と。此の經中の合喩の義自ら明了なるが故に説かず。

釋

爾の時、欲界、色界の諸天子、佛に白して言さく、「世尊よ、阿耨多羅三藐三菩提は得難し。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、應に知るべし、一切の諸法は、已に阿耨多羅三藐三菩提を得れば、是の法も亦得べからざればなり」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。諸天子よ、阿耨多羅三藐三菩提は得難し。我も亦一切法、一切種智を得已つて、阿耨多羅三藐三菩提を得るも亦所得無く、能く知ること無く、知るべきこと無し。亦知ること無しとは、何となれば、諸法は畢竟清淨なればなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛の説きたまふ所の如く、阿耨多羅三藐三菩提は得難し。我れ佛の所説の義を解するが如きは、我れ心に思惟す、是の阿耨多羅三藐三菩提は得易し。何となれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること有ること無く、亦法を得べきこと無く、一切法の相は空にして、法として得べきもの無く、能く得る者無ければなり。何となれば、一切法は空なればなり、亦法として増すべきもの無く、亦法として減すべきもの無し。所謂布施・持戒・忍辱・精進・禪定より、乃ち一切種智に至るまで、是の法は皆得べき者無く、能く得る者無し。世尊よ、是の因縁を以ての故に、我れ意に謂へらく、「阿耨多羅三藐三菩提は得易しと爲す」と。何となれば、世尊よ、色・色相は空、受・想・行・識・識相は

空、乃至一切種智、一切種智の相は空なればなり」と。

舍利弗、須菩提に語るらく、「若し一切法は空にして虚空の如くんば、虚空は是の念を作さず、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。若し菩薩摩訶薩は、一切法の空にして、虚空の如きことを信解し、是の阿耨多羅三藐三菩提は得易からんには、

今恆河沙等の諸の菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を求め、何を以ての故に退還するや。須菩提よ、是を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提は得易からざることを知る」と。

須菩提、舍利弗に語るらく、「意に於いて云何、色は阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、

「不なり」と。「受・想・行・識は阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「乃至一切種

智は阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「色を離るる法有りて、阿耨多羅三藐三

菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「受・想・行・識を離るる法有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於

いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「乃至一切種智を離るる法有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還

するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。

「舍利弗よ、意に於いて云何、色の如相は阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。

「受・想・行・識の如相、乃至一切種智の如相は、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。

「色の如相を離るる法有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「受・想・行

識の如相を離れ、乃至一切種智の如相を離るる法有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、

「不なり」と。

「舍利弗よ、意に於いて云何、如ば阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「法性、

法住・法位・實際・不可思議性は、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「舍利弗よ、意に於いては何、如を離るる法有りて阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗の言はく、「不なり」と。法性・法住・法位・實際・不可思議性を離るる法有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。

須菩提、舍利弗に語るらく、「諸法は畢竟不可得なり。何等の法か、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや」と。舍利弗須菩提に語るらく、「須菩提の所説の如くんば、是の法忍の中には、菩薩の阿耨多羅三藐三菩提に於いて、退還する者有ること無し。若し退還せずんば、佛の説きたまはく、道を求むる者に三種有り、阿羅漢道・辟支佛道・佛道なりと、是の三種を分別無しと爲す。是は須菩提の説の如くんば、獨り一菩薩のみ有りて、佛道を求むればなり」と。

是の時、富樓那彌多羅尼子、舍利弗に語るらく、「應當に須菩提に問ふべし、一菩薩乘有りて爲すや不や」と。爾の時に、舍利弗、須菩提に問ふ、「一菩薩乘有りて説かんと欲することを爲すや」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「諸法の如中に於いて、三種の人〔乃至〕聲聞乘、辟支佛乘、佛乘有らしめんと欲するや」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「舍利弗よ、三乗の分別中に如有りて得べきや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「舍利弗よ、是の如には相の若くは一相、若くは二相、若くは三相有りや不や」と。舍利弗言はく、「不なり」と。「舍利弗よ、汝は如中に於いて、乃至一菩薩だも有ることを欲するや不や」と。

舍利弗言はく、「不なり」と。「是の如く四種の中に三乗の人は得べからず。舍利弗よ、云何が是の念を作すや。〔所謂〕、是は聲聞乘を求め、是は辟支佛乘を求むる人なり、是は佛乘を求むる人なりと。舍利弗よ、菩薩摩訶薩の是の諸法の如相を聞いて心に驚かず、沒せず、悔いす、疑はざる、是れを菩薩摩訶薩は、能く阿耨多羅三藐三菩提を成就すと名く

るなり」と。

爾の時、佛、須菩提を讚して言はく、「善い哉、善い哉。須菩提よ、汝が説く所の者は、皆是れ佛の力なり。須菩提よ、もし菩薩摩訶薩、是の如を説くを聞き、諸法に別異の心有ること無く、驚かす、怖かす、畏れず、難ぜず、没せず、悔いずんば、當に知るべし、是の菩薩は能く阿耨多羅三藐三菩提を成就す」と。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、何等の菩提を成就するや」と。佛の言はく、「佛の阿耨多羅三藐三菩提を成就す」と。

### 論

釋して曰く、爾の時、諸の天子は、是の念を作して佛に白して言さく、「世尊よ、阿耨多羅三藐三菩提は得難し。何となれば、一切法は畢竟空にして、而も菩薩は佛道を求め、觀行を修集し、成佛して衆生を度す、是の法も亦得べからざればなり」と。佛は其の言を可したまはく、「自身に證を爲し、我れ道場に坐し、一切種を以て一切法を得るも、亦一定相の得べきもの無し」と。須菩提言はく、「世尊よ、我が意の如きは、阿耨多羅三藐三菩提は得易し。一切法は畢竟常に空なればなり」と。是の中に得ること無しとは、法を得べきこと無きなり、障無く、礙無く、修する所無く、斷する所無ければなり。爾の時に、舍利弗言はく、「若し佛道は得易からんには、何を以ての故に、恆河沙等の無量の菩薩佛道を求むるに、若くは一、若くは二〔人〕佛と作り、餘の者は皆退還するや」と。須菩提、舍利弗に答ふらく、「色は阿耨多羅三藐三菩提に於いて退還するや不や。受・想・行・識、乃至一切種智は退還するや不や」と。答へて曰く、「不なり。何となれば、色等の法は畢竟空にして退還有ると無く、色等の法の如は二相無く、亦分別無きが故に退還無ければなり」と。〔問ふ〕、「色等の法を離れて更に

法有りて退還するや不<sup>いな</sup>や」と。答へて言<sup>いは</sup>く、「色等を離<sup>はな</sup>れて更に法有ると無し」と。是の故に言<sup>いは</sup>よく、「不<sup>いな</sup>なり」と。「色等の法の如<sup>ごと</sup>を離<sup>はな</sup>れて更に法有りて退還するや不<sup>いな</sup>や」と。答へて言<sup>いは</sup>く、「色等の法を破<sup>は</sup>し已<sup>は</sup>れば、如も亦自ら空なるが如し」と。是の故に不<sup>いな</sup>と言<sup>い</sup>ふ。法性・法住・法位より乃<sup>すなは</sup>ち不可思議性に至<sup>いた</sup>るも亦是<sup>また</sup>かくの如し。須菩提舍利弗に語<sup>かた</sup>るらく、「若し法に退還なくんば、何を以ての故に、如恆河沙等<sup>ごと</sup>の菩薩は退還すと言<sup>い</sup>ふや」と。舍利弗答ふらく、「須菩提の所説の如くんば法忍の中には、則ち退還無し」と。(三) 法忍とは、是れ法門、法修、法行なり。

須菩提の所説の法門の中には、則ち退還無く、是の法門を出<sup>い</sup>づれば則ち退還有り。舍利弗は須菩提の語を見受すと雖も、亦自ら佛法を引いて難しと作<sup>な</sup>す。若し退<sup>しりぞ</sup>くこと無くんば盡く當に作佛すべし。何を以てか三乘有りと説<sup>と</sup>かん。須菩提は還つて如相の四句を以て三乘を破す。佛、須菩提を歎じたまはく、「善哉」と。若し菩薩は如中に二乗の分別無しと聞くも、恐怖せざれば、是の菩薩は即ち能く無上道を成ずるなり。

問うて曰<sup>と</sup>く、(二) 若し佛は、「菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を成ず」と説きたまはば、舍利弗は何を以ての故に、何等の菩提を成就するかと問へるや。答へて曰<sup>と</sup>く、各各に無上有り。舍利弗は疑ふが故に、「何等の道か無上なりや」と問へり。答ふらく、「大乘は無上なり」と。

【三】 法忍とは法門なり。所説の法門に入れば退なく、出づれば則ち退あり。

【四】 第九問、佛は、「菩薩は無上菩提を成ず」と説き給へるに、舍利弗が「何等の菩薩を成就するか」と問へる理由如何。

問うて曰<sup>と</sup>く、(二) 若し佛は、「菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を成ず」と説きたまはば、舍利弗は何を以ての故に、何等の菩提を成就するかと問へるや。答へて曰<sup>と</sup>く、各各に無上有り。舍利弗は疑ふが故に、「何等の道か無上なりや」と問へり。答ふらく、「大乘は無上なり」と。

問うて曰<sup>と</sup>く、(二) 若し佛は、「菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を成ず」と説きたまはば、舍利弗は何を以ての故に、何等の菩提を成就するかと問へるや。答へて曰<sup>と</sup>く、各各に無上有り。舍利弗は疑ふが故に、「何等の道か無上なりや」と問へり。答ふらく、「大乘は無上なり」と。

問うて曰<sup>と</sup>く、(二) 若し佛は、「菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を成ず」と説きたまはば、舍利弗は何を以ての故に、何等の菩提を成就するかと問へるや。答へて曰<sup>と</sup>く、各各に無上有り。舍利弗は疑ふが故に、「何等の道か無上なりや」と問へり。答ふらく、「大乘は無上なり」と。





復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に自ら初禪を行じ、亦他人をして初禪を行ぜしめ、初禪の法を行するを讚歎し、初禪を行する者を歡喜し、讚歎す。二禪、三禪、四禪も亦是の如くなるべし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に自ら慈心を行じ、亦人をして慈心を行ぜしめ、慈心の法を行するを讚歎し、慈心を行する者を歡喜し、讚歎す。悲・喜・捨心も亦是の如し。自ら虚空處を行じ、亦人をして虚空處を行ぜしめ、虚空處の法を行するを讚歎し、虚空處を行する者を歡喜し、讚歎す。識處・無所有處・非有想非無想處も亦是の如し。自ら檀波羅蜜・多を具足し、亦人をして檀・那・波羅蜜・多を具足せしめ、檀・那・波羅蜜・多の法を具足するを讚歎し、檀・那・波羅蜜・多を具足する者を歡喜し、讚歎す。尸羅・廣提・毗梨耶・禪・那・般若波羅蜜・多も亦是の如くすべし。

復次に、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、自ら内空を行じ、亦人をして内空を行ぜしめ、内空の法を行するを讚歎し、内空を行する者を歡喜し、讚歎す。乃至無法有法空も亦是の如し。自ら四念處を行じ、亦人をして四念處を行ぜしめ、四念處の法を行するを讚歎し、四念處を行する者を歡喜し、讚歎す。乃至八聖道分も亦是の如し。自ら空・三昧・無相・三昧、無作三昧を修し、亦人をして空・無相・無作の三昧を修せしめ、空・無相・無作の三昧を修するを讚歎し、空・無相・無作の三昧を修する者を歡喜し、讚歎す。自ら八背捨を行じ、亦人をして八背捨を行ぜしめ、八背捨の法を行するを讚歎し、八背捨を行する者を歡喜し、讚歎す。自ら九次第定を行じ、亦人をして九次第定を行ぜしめ、九次第定の法を行するを讚歎し、九次第定を行する者を歡喜し、讚歎す。

自ら佛の十力を具足し、亦人をして佛の十力を具足せしめ、佛の十力の法を具足するを讚歎し、佛の十力を具足する者を歡喜し、讚歎す。自ら四無所畏、四無礙智、十八不共法・大慈・大悲を行じ、亦人をして四無所畏、乃至大慈・大悲を行ぜしめ、



の成就を取らしめ、壽命の成就を取る法を讚歎し、壽命の成就を取る者を歡喜し讚歎す。自ら法住を成就し、亦人をして法住の法を成就せしめ、法住を成就する法を讚歎し、法住を成就する者を歡喜し讚歎す。

須菩提よ、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應に是の如く行すべく、亦應に是の如く般若波羅蜜〔多〕の方便力を學すべし。是の菩薩は、是の如く學し、是の如く行する時、當に無礙の色を得、無礙の受・想・行・識を得、乃至無礙の法住を得べし。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、本より已來、色を受けず、受・想・行・識を受けず、乃至一切種智を受けざればなり。何となれば、色を受けざる者を色に非ずと爲し、乃至一切種智を受けざる者を一切種智に非ずと爲せばなりしと。是の菩薩行品を説く時、二千の菩薩は無生法忍を得き。

論

釋して曰く、(五) 須菩提問ふ、「菩薩は無上道を成せんと欲せば、云

何が應に行すべきや」と。佛答へたまはく、「應に等心を起し、一切衆生に

於て、偏黨有ること無かるべし」と。五衆和合して假名の衆生あり。車の如く、林の如し。一切衆生

とは、十方六道を擧げて、遺餘有ること無し。(三) 一切衆生の法は各三分を行す。怨・親・中人なり。

佛は今菩薩をして等心にして、一切衆生に皆親愛の想有りて、怨心を生ずること莫く、中人の心を生

ずること莫らしめたまふ。

復次に、衆生に二種の〔心〕有り、愛及び憎なり。佛の言はく、「一切衆生に於て是の二心を離れて憎

愛を生ずると莫れ」と。愛とは貪欲、煩惱心なり、行すべからず、當に慈愛の心を行すべし。世間の法

【五】 菩提を成せんと欲せば、應に等心を起すべし。  
【六】 三種の衆生法。

は妻子、牛馬等を愛念し、怨賊等を憎惡す。菩薩は此の世間の法を轉じ、但慈愛の心を一切衆上に於いて行ふ。

復次に、等心とは、菩薩は法喜を生じ、一切衆上に於いて、皆佛道に至らしめんと欲す。菩薩は自ら憎愛の心を捨て、亦衆生をして、憎愛の心を己に加ふることを棄てしむ。

惡と大惡と惡中の惡と、善と大善と善中の善となり。惡とは、人の惡事を以て己に加ふれば、還つて之に報ずるに惡事を以てするが如し。諸佛の

法は一切衆生に於いて平等心にして、惡念を起すべからず。何に況んや、身行、口行を起さんや。大惡とは、人の己を侵すこと無きに、而も惡を以て人に加ふるが如し。惡中の惡とは、人の好心を以て、供給し慈念す

るに、而も反つて惡心を以て、毀害するが如き、是の如き等の惡を惡中の惡と名く。善とは、人の好事を以て己に於いてすれば、還た善報を以てするが如し。大善とは、人の己に於いて善なること無きも、而も善事を以て利益するが如し。

中の善とは、人の惡害を以て、己に於いてするも、而も善事を以てし、乃至生命を供養するが如き、是を善中の善と名く、菩薩は是の三の惡を捨て、是の二種の善行を過ぎ、第六心もて一切衆生に於いてす。

世間に三種の人あり。

- 【一】 世に三種の人あり。
- 【二】 惡人の意義。
- 【三】 大惡人の意義。
- 【四】 惡中の惡人の義解。
- 【五】 善人の義解。
- 【六】 大善人の義解。
- 【七】 善中の善人の義解。

問うて曰く、(三四)是の菩薩は未だ法身を得ず、云何が能く是の心を行ずるや。答へて曰く、是の菩薩は無上道を求めて、應に無上法を行すべし。是の如きの難を受け、苦行を爲して乃ち無上道を成す。譬へば、賈客は險道の中に於いて、備に苦を受け、乃ち大利を得るが如し。

復次に、是の菩薩は佛法の正體を聞く。所謂る畢竟空にして我無く、我所無く、一定の實法無く、見る所、聞く所、知る所は、皆是れ虚誑にして、幻の如く、夢の如し。深く是の法を信ずるが故に、能く身命を以て怨賊に供養す。

復次に、菩薩は、此の身の罪業・煩惱・顛倒の因縁より生じ、見る所、聞く所は、皆是れ虚誑にして、罪垢の本なることを知る。若し人あり、來つて害を我に加へんと欲するも、我は宜しく歡喜して之を受くべし。此の弊身を以て而も無上道を得、利何ぞ與へざることを爲ん。

復次に、菩薩は發心して深く衆生を愛し、利益せんと欲するが故に、自ら己が身を以て怨賊に供養し、衆生をして己が所行に効はしめんと欲す。有る衆生は法を説くも、教ふる者を必ず肯へて受けざるを以ての故に、身を以て教へて、其をして信受せしむ。

復次に、多くの有る人は、意を發して、無上道を求むるも、而も身に行ずると稱はず、亦是を以ての故に、菩薩は身を以て之に教へ、堅心に此の難事を行せしむ。無上道を求めんと欲せば、當に善中

【言】第一〇問、未だ法身を得ざる菩薩にして、能く此の心を行ずる理由如何。

の善法を行すべし、此を難事と爲す。爾も乃ち得べし。是の如き等の無量の因縁もて、自ら身命を以て怨賊に供養す。

問うて曰く、**【三】**等心と慈心とは何の異有りや。答へて曰く、等心とは是れ四無量心なり。慈心とは是れ一無量心なり。有る人の言はく、「初に怨親を捨つるは是れ等心、後に愍念を加ふるは是れ慈心なり」と。

復次に、有る人の言はく、「等心とは、衆生如、如實際・法性を觀するなり。是の法は皆無爲無量なるが故に等しく衆生を愛念す、是を慈心と名く。悲心を説かざる所以は、悲心有れば、或は衆生を憂念し、此の心を積集すれば心則ち退没すればなり。或は有る衆生は菩薩の悲念を受けずして言はく、「汝は何を以てか自ら其の身を憂ひずして、而も他人を念するや」と。慈心は是の如き事なく衆生を攝し易きが故に但慈心のみを説く。

問うて曰く、**【三】**若し衆生に三種上中下有らば、菩薩は福德、智慧を積集するが故に、應に是れ大人なるべし。云何が一切衆生の中に於いて、下意を起すと言ふや。答へて曰く、菩薩は是の念を作す、「一切法は無常なれば、一切衆生の上中下は皆磨滅に歸す。是の中に何者か是れ大にして、何者か是れ小人ならん。世法を以ての故に大小有り」と。

**【三】** 第一問、等心と慈心との差異如何。  
**【三六】** 第二問、菩薩は大人なり、云何が一切衆生の中に於いて下意を起すといふや。

復次に、大小は不定にして、此の國には以て大と爲すも、餘國には以つて小と爲し、此に於いては大と爲すも、彼に於いては小と爲す。今世には卑賤なるも、後世には天王と爲るが如し。是の如き業因縁をもて、世間の輪轉在れば、貴賤、大小は定無きこと水火の如し。貴賤は、時に隨うて用捨して定り無し。

復次に、菩薩は功德有りと雖も、是の功德の畢竟空にして、幻の如く、夢の如きことを知り、此の功德に著せず、是れ大小有らず。

復次に、一切衆生の中に佛道の因縁有る者を唯佛のみ能く知りたまふ。

菩薩は是の念を作す、「我は小衆生にして、形貌才能有り」と。此の事を以

て輕んずるは、則ち未來の佛を輕んずると爲す。若し佛を輕んぜば、則ち永く了すと爲す。

復次に、菩薩は是の念を作す、「我は誓つて一切衆生を度せん、若し衆生に所得無くんば、我は則ち幸を衆生に負はん」と。譬へば、主人客を請ずれば、則ち應に客を敬すべし、而も自ら卑しうして

若し供を設くる所無くんば、是れ則ち愧を客に負ふが如し。

復次に、自ら大心あるを以ての故に、即ち喜んで瞋心を生ず、憍慢は是れ瞋の本なり、瞋は是れ一

切の重罪の根なり。若し菩薩、衆生に於いて、下心を起さば、衆生の若くは罵り、若くは打つも、

則ち悲恨無し。譬へば、大家の奴を打つも奴は敢て瞋恨せざるが如し。若し菩薩は自ら下意の衆生

【三三】菩薩は衆生に於いて下意を起す。



より高しとすれば、衆生侵害するに、忿然として怒を生ず。奴の大家を打てば、則ち瞋怒を起すが如し。下意に是の如き等の種種の利益有るが故に、菩薩は應當に行すべし。【三六】安隱心とは、今世、後世の究竟の樂を與ふ。父母知識の如く、現世の樂を與ふるに非ず。菩薩は若し等心・慈心・下心を以て衆生を利益する時、若し恩を知らざる人有り、來りて菩薩を惱まし、所行を信せず、謂ひて、欺誑と爲し、名を求むるが故に實事有ること無しと爲す。又魔の爲に使はれ、來つて菩薩を惱ます。惡中の惡は思分を識らず。菩薩は等心にして此に於いて通達無礙なり。是の無礙心を得已れば、衆生に大罪大過有りと雖も、但利益せんと欲して惱心を生ぜず。慈心・安隱・無礙もて心を惱ます。譬へば、孝子は父母を愛敬し、兄の如く弟の如く、姉妹兒女の如きも、淫欲の心無くして而も愛敬・慈念を生ずるが如し。【三九】世人は但能く親む所のみを愛敬し、菩薩は普く一切に及ぶ。是の柔軟・清淨の好心を得るを衆生忍と名く、是れ法忍の初門なり。【四〇】次に十善道を行す。十善道は佛あるも、佛なきも、世間に常に有り。是の善法を教ふる菩薩は、先づ四十種の行を以て、是の十善道を行す。何となれば、是の善法は深く善法を念じ、心に衆生を慈むが故なり。離欲の凡夫の法に十二事有り。亦四十八種を以て六波羅蜜(多)乃至法住を行す。是れ客法なり。佛有りて説きたまへば、則ち菩薩有りて行す。上來は舊法・客法・本末を具足せり。今世に善法

【三六】菩薩は衆生に於いて安穩の心を起す。

【三九】世人は但己が親む所のみを愛敬し、菩薩は普く一切に及ぶ。

【四〇】十善道は、佛あるも佛なきも世間に常にあり。

を得、智慧無礙にして、身を捨てて法身無礙なることを得、意に随つて十方に至りて衆生を教化し、  
 十方の佛前に於いて善法を修集す。是の法を聞く時、二千の菩薩は無生法忍を得とは、是の品には如  
 の微妙の深法を説き、亦善門智門の二門の二行を行じて具足すること有ることを説く。但如法のみを  
 説くも利する所少く、若し有法を説くも利する所亦少し。今、有無の二法の具足を説くが故に無生法  
 忍を得。譬へば、二輪を具足するが故に能く至る所有るが如し。此の中に善く二諦を説くが故に、二  
 千の菩薩は無生法忍を得たり。

卷の第七十三

阿鞞跋致品第五十五を釋す。

經

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等の行、何等の相、何等の相貌を以てか、是の阿鞞跋致の菩薩摩訶薩を知るや」と。  
佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は能く凡夫地・聲聞地・辟支佛地・佛地を知る。

是の諸地は、如相の中には二無く、別無く、亦念せず、亦分別せず。是の如中に入れ  
ば、是の事を聞いて直に過ぎて疑無し。何となれば、是の如中には、一(相)無く、二相  
無ければなり。是の菩薩摩訶薩は、亦無益の語を作さず、但利益に相應する語を説き、

他人の長短を視ず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、是れ阿鞞跋致の菩薩なりと知  
る」と。須菩提言はく、「世尊よ、復た何の行・類・相貌を以てか、是れ阿鞞跋致の菩薩摩訶薩なりと知るや」と。佛、須菩提に  
告げたまはく、「若し一切法には行無く、類無く、相貌無くば、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く」と。須菩  
提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法に行無く、類無く、相貌無くんば、菩薩は何等の法に於いてか轉じ、轉ぜず  
と名くるや」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩は色の中に轉じ、受・想・行・識中に轉ぜば、是を菩薩は轉ぜずと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は(那)波羅蜜(多)の中に轉じ、乃至般若波羅蜜(多)の中に轉じ、内空中、乃至無法有法  
空の中に轉じ、四念處中、乃至十八不共法中に轉じ、聲聞・辟支佛地中に轉じ、乃至阿耨多羅三藐三菩提中に轉ず。當に知

【一】此の品には、初に般若の相を説き、次に、魔縁の智度を壞する相として、不退を認むべき行類相貌を廣説す。異本には記して「不退品」といへり。

るべし。是を菩薩摩訶薩は轉ぜすと名く。何となれば、須菩提よ、色性は無なり。是の菩薩は何の處にか住せん。乃至阿耨多羅三藐三菩提の性は無なり。是の菩薩は何の所に住せん。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は外道・沙門・婆羅門の面類、言語を觀ぜず。是の念を作さず、「是の諸の外道、若くは沙門、若くは婆羅門は實に知り、實に見、若くは正見を説く(か如き)」。是の事は有ること無し」と。

復次に、菩薩は疑を生ぜず、戒取を取らず、邪見に隨はず、亦世俗の吉事を求めて以て清淨と爲さず。華香・瓔珞・幡蓋・妓樂・禮拜を以て、諸天を供養せず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名くることを。

復次に、須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は常に下賤の家に生ぜず、乃至入難の處に生ぜず、常に女人の身を受けず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名くることを。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は常に十善道を行じ、自ら殺生せず、人をして殺生せしめず、不殺生の法を讚歎し、不殺生の者を歡喜し、讚歎し、乃至自ら邪見せず、人をして邪見せしめず、亦邪見の法を讚歎せず、邪見を行する者を歡喜し、讚歎せず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は乃至夢中にも十不善道を行ぜず。是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は一切衆生を利益するが爲の故に、檀・那・波羅蜜(多)を行じ、乃至一切衆生を利益せんが爲の故に、般若波羅蜜(多)を行す。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、所有る諸法を受持し、誦誦し、説き、正憶念す。所謂修妬路、乃至優波提舍なり。是

の菩薩は法施する時、是の念を作す、「是の法施の因縁の故に一切衆生の願を満し、是の法施の功德を以て、一切衆生に與へ、共に之を阿耨多羅三藐三菩提に廻向せん」と。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く」と。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は甚深の法中に於いて、疑はず、悔いすしと。須菩提言はく、「世尊よ、菩薩は甚深の法中に於いて、何の因縁の故に疑はず、悔いざるや」と。佛の言はく、「是の阿鞞跋致の菩薩は、すべて法有りて疑を生ずべき處を見ず。若くは色・受・想・行・識より、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、是の法の疑を生ずべき處、悔(を生ずべき)處を見ず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く」と。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は身・口・意の業柔軟なり。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く」と。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は五蓋と俱ならず。(五蓋とは)嫉欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑なり。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く」と。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は一切處に愛著する所無し。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く」と。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、出入・去來・坐臥・行住に常に一心を念じ、出入・去來・坐臥・行住、舉足・下足に安隱痒序にして、常に一心を念じ、地を視て而して行く。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名く」と。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、著る所の衣服及び臥具を人惡穢とせず。好んで淨潔を樂しみ、疾病少し。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名くと。

復次に、須菩提よ、常に人身の中に八萬戶の蟲有りて、其の身を侵食す。是の阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は身に是の蟲無し。何となれば、是の菩薩の功德は、世間を出過すればなり。是を以ての故に、是の菩薩に是の蟲戸無し。是の菩薩は功德を増益し、其の功德に隨つて身の清淨を得、心の清淨を得。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名くと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は身の清淨を得、心の清淨を得るや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は其の所得に隨つて善根を増益し、心曲・心邪を滅除す。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は身清淨に、心清淨なりと名く。是の身心の清淨を以ての故に、能く聲聞・辟支佛地を過ぎて菩薩位の中に入る。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名くと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は利養を貴ばず、十二頭陀を行すと雖も、阿蘭若法を貴ばず、乃至但三衣法のみを貴ばず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名くと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、常に慳貪心を生ぜず、破戒心・瞋動心・懈怠心・散亂心を生ぜず、愚癡心を生ぜず、嫉妬心を生ぜず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名くと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は心住して動ぜず、智慧深く入りて、一心に聽受し、從つて聞く所の法、及び世間の事、皆般若波羅蜜多と合す。是の菩薩摩訶薩は、婁栗の事の法性に入らざる者を見ず。是の事は一切皆般若波羅蜜多と合す

るを見る。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是を阿鞞跋致の菩薩の阿鞞跋致の相と名くと。

論 問うて曰く、三上来處處に阿鞞跋致の相を説けり、今何を以て復問ふや。答へて曰く、上に處處に略説すと雖も、今は廣く説かんと欲す。此の中、多くは是れ阿鞞跋致の相なるが故に、阿鞞跋致品と名く。

復次に、上來は般若波羅蜜〔多〕の相を解し、次に魔の因縁の般若波羅蜜〔多〕を壞することを説き、今般若波羅蜜〔多〕を信受する者は是れ阿鞞跋致なることを説く。其の相貌を説かんと欲するが故に、須菩提は問へるなり。

復次に、菩薩の初發心より來た行する所の因縁、得る所の果報は是れ阿鞞跋致にして、必ず當に作佛すべきことを受記せらる。人の受職し已りて印を得れば、信心にして復疑無きが如し。又聲聞の人の行する所の衆行は、皆四沙門果と爲るが如く、阿鞞跋致は是れ決定の安隱地にして、凡夫地を過ぎて二乘地に入らず、未だ佛道を成せずと雖も、能く世間の爲に福田と作る。是の事は微妙にして得難きが故に、須菩提は其の相貌を問へるなり。佛は本須菩提に命じて、般若波羅蜜〔多〕を説かしたまふが故に、須菩提は問へり、「世尊よ、阿鞞跋致に何の行・類・相貌有りや」と。

問うて曰く、(三) 是の三事は何等の異有りや。答へて曰く、有人の言はく、「是の三事は皆一義なり。此を以て是の阿鞞跋致は阿鞞跋致に非ざることを知る」と。有人の言はく、「行は是を阿鞞跋致と名く。菩薩

【二】 第一問、今復不退の相を問へる理由如何。  
【三】 第二問、不退の行と類と相貌との三事の差異如何。

の身・口・業は、他人に異なり、此の行を以て阿鞞跋致の甚深の智慧を表す」と。類とは、分別して、諸の菩薩は、是れ阿鞞跋致、「若くは」阿鞞跋致に非すと知るなり。相貌とは、行と類とを除きて、餘の種種の因縁もて、阿鞞跋致の相を知ることを得るなり。佛は義趣を説きたまふ、若し菩薩は能く五波羅蜜「多」を具足し、深く般若波羅蜜「多」の方便力に入るが故に、般若波羅蜜「多」に著せず、但如、所謂諸法實相を觀す。菩薩は、爾の時、凡夫と二乘地とを以て下賤と爲さず、佛地を以て高貴と爲さず。「そは」諸法の如に入れればなり。諸法の如相には二法を分別すると有ると無く、但如を以て如に入り、更に餘事無く、亦分別して相を取らず。何となれば、如は平等なればなり。能く是の如く入れれば、即ち諸佛の法藏に入り、心に疑を生ぜず、更に諸法の決定相を求む。是の故に經に説けり、「須菩提よ、凡夫地より乃ち佛地に至るまで、如の中には無二無別なり」と。是の如き法を得るを、阿鞞跋致の行・類・相貌と名く。

復次に、略して是の義を説けば、菩薩は諸法の如、所謂畢竟空に因りて一切世間の事を捨て、亦畢竟空に住せず。何となれば、諸法の畢竟清淨の實相を得ればなり。菩薩は若し是の依止無き法を聞くも、心に疑悔無く、依止を念せず。上事は是れ阿鞞跋致の正體なり。是より以下は盡く是れ畢竟空の行果なり。畢竟空を得るが故に心淳熟し、寂滅相にして、無益の語を説かず。所説は常に法にして、是れ非法ならず。所説は皆實にして、妄説に非ず、言ふ所柔軟にして麤獷ならず、皆慈悲心を説

【四】不退の行・類・相貌を釋す。



き、瞋恚心を以てせず。所説は時に應じて常に機會を得、人心を觀察し、其の方俗に隨ふ。今此の中に略して利益の言を説く、若くは佛道、若くは二乗、若くは人天道を教ふ。若くは今世に罪に非ずして樂を得、常に口の四惡を遠離するが故に、衆生の中に於いて慈悲心大なるが故に、又能く自ら諸の煩惱を推薄するが故に、是を以て、能く種種の因縁もて、諸の利益の語を説く。

問うて曰く、聲聞の人は直に涅槃に趣いて他人を觀せざるべきも、菩薩は衆生を觀ること子の如く、常に教化せんと欲するに、云何が其の長短を觀せざるや。答へて曰く、若し衆生の伏折すべからず、化度すべからざる、是の如き等は觀すること莫し。何となれば、若し好心を以て教詔するも、則ち己を嫉むと謂ふ。刀もて心を刺すが如し。既に益する所無く、更に其の罪を増す。是の故に長短を觀せず。

復次に、菩薩は應に是の念を作すべし。「諸佛の一切智もて煩惱の習を盡くすが如きすら、尙ほ盡く衆生を度すること能はず。何に況んや、我未だ菩薩の神通を得ず、未だ無礙智を得ず、云何が能く普く衆生を觀せんや」と。阿鞞跋致に神通を得る者有り、「是を」得ざる者有り。阿鞞跋致を得已つて別に神通道を修めて即ち得、若し先づ神通を得る者は、具足せざるが故に遍く觀すること能はず。問うて曰く、須菩提は初に行・類・相貌を問へるに、佛は何を以てか即ち行・類・相貌無きことを答へ

【五】 第三問、菩薩は衆生を觀ること子の如くし、常に普く教化せんと欲す、云何が其の長短を觀せざるや。  
【六】 第四問、佛、須菩提の初め不退の行・類・相貌を問へるに答へずして、今此の中に説きまたへる理由如何。

す、今此の中に方に説きたまへるや。答へて曰く、初に問ふ時は、衆生は未だ阿鞞跋致の相に著せざるが故に、佛は答へて或は空相を説き、或は有相を説きたまふ。今衆生は阿鞞跋致の相に著するを以て、凡夫〔地〕従り阿鞞跋致地に入らんと欲す。是の故に佛は一切に行無く、類無く、相貌無しと説きたまへり。須菩提は以て更に問ふ、「若し諸法盡く空ならば、何を以て、何法に於いて、轉ずるを法を轉せずと名くと言ふや。應當に凡夫地に從つて轉じ、佛地に於いて轉せざるべし」と。佛答へたまはく、「若し菩薩は能く色等の諸法の空にして所有無きことを觀じ、諸の著心を轉ずるが故に、佛道の中に於いて轉せず。色等の法は和合の因縁もて生ず。菩薩は是の有爲法の過罪を知るが故に、此の中に住すべからず。諸法は空なるが故に、能く著心を轉じ、著心を轉ずるが故に轉せずと名く。

復次に、阿鞞跋致の菩薩は正位に入るが故に心決定して疑はず。一切の外道中には實智有り、若し實智有れば外道と名けず。是の如きを阿鞞跋致の相と名く。

問うて曰く、今は疑を生ぜずと説き、後には深法を疑はずと説く。是の二の不疑に何の差別有りや。答へて曰く、今疑はずとは、四縛の中に須陀洹の斷する所の如し。後の疑はずとは、佛の知りたまふ所の深法の中に於いて疑はざるなり。是の菩薩は福德智慧力の故に、須陀洹と作らず、未だ佛と作らずと雖も、而も能く是の二疑無し。戒取は外道の戒に名く。人は此の外道の戒を行ずるも涅槃を

【七】第五問、今は「不生疑」と説き、後には「深法不疑」と説く、此の二の疑の差異如何。

得ず、餘の四見は皆邪見に名く。深く業因縁果報を信するが故に、吉事を求めず、華香等を以て、天を供養せず。道を求めて、憍慢の根本を破するが故に、常に下賤の家に生ぜず。他の功德を障げず、常に勸助を行するが故に八難處に生ぜず、(二) 姪欲を折薄し、諂媚心を遠離するが故に、女人の身を受けず。

復次に、餘人は十善道を行すと雖も、一或は二、或は三を成じ、四種を具足すること能はず。是の菩薩は大悲心もて、深く善法を愛するが故に、具足して四種を行じ、常に十善道を修するが故に、乃ち夢中に至るまで、十不善道を行せず。餘人の修する所の福德は但自ら身の爲にし、(三) 小菩薩は衆生の爲にすと雖も、亦己の爲にし、阿鞞跋致(の菩薩の)諸の所作の福は、皆衆生の爲にして其の身の爲にせず。若し福德の以て人に與ふべくんば、則ち盡く衆生に與へ、更に自ら修習し、但與ふべからざるが故に、菩薩は十二部經を以て衆生を教化し、亦但衆生の爲にして、自ら己の爲にせず。

復次に、菩薩は信等の五根利なるが故に、未だ佛と作らずと雖も、諸法に於いて能く信ず。佛、此の中に更に空の因縁を説きたまへば、菩薩は色等の法を見ざるが故に、疑を生ずる處無し。復次に、

- 【八】 業因縁を信するが故に吉事を求めず、諸天を供養せざるなり。
- 【九】 憍慢を破するが故に下賤の家に生れず。
- 【一〇】 勸助を行するが故に八難處に生ぜず。
- 【一一】 姪欲を折け諂媚心を離るるが故に女人の身を受けず。
- 【一二】 小菩薩は衆生の爲にすれども、亦己の爲にす、不退の菩薩は然らず。

是の菩薩は常に慈悲心を行するが故に、意業柔軟なり。意業柔軟なるが故に、身口の慈業成就す。

問うて曰く、(三)慈悲心は外道にも亦有り、云何が是を阿鞞跋致の相なりと説くや。答へて曰く、外

道に有りと雖も而も深からず、遍く衆生を念すること能はず、亦常有ならず、諸法實相の和合するに

非ざればなり。菩薩は爾らず。

復次に、是の菩薩は五欲を呵し、五蓋を除き、五支の初禪に入り、五蓋と俱ならず。五蓋心を覆へ

ば能く智慧を耗滅し、佛道を破し、魔路を開くが故なり。是の菩薩は一切

有爲の作法の虚妄不實にして、幻の如く、夢の如く、無爲法は空にして所

有なく、寂滅の相なることを知る。是の故に、一切處に於いて愛著する所

無し。衆生の中、乃至佛に於いても亦著せず。法の中、乃至涅槃に於いて

も亦著せず。瞋は麤罪にして、小菩薩も已に斷するが故に説かず。愛は深

微にして斷じ難きが故に今説けり。

復次に、(四)是の菩薩は深く禪定に入るが故に一切衆生を守護し、一切衆生を守護するが故に、常に

一心に念じて衆生を惱まざす。戒を破せざるが故に、出入來去、等しく安詳なり。一心に擧足下足

地を視て行くとは、衆生を護るが爲に、亂心を避くるが爲の故なり。

復次に、(五)是の菩薩は久しく無量無邊の善法を修集し、身中に八萬の尸蟲無く、亦病痛少きが故

【三】第六問・慈悲心は外道にも亦これあり、何ぞ不退の菩薩の相なりといふや。

【四】禪定に入るが故に衆生を守護し、戒を持つが故に出入來去に安詳なり。

【五】不退の菩薩は身中に八萬の尸蟲なく、又病痛なし。

に、衣服・臥具等常に清潔にして垢無く、諸法實相等の善根力を得るが故なり。身中に八萬の戸蟲無く、心清淨なるが故に身口等も亦清淨なり。虚誑・邪曲等の下賤の煩惱を離るるが故に心清淨なり。二事清淨なるが故に、世間を行すと雖も、諸の逼迫苦惱を離れ、心に厭沒せざるが故に、聲聞・辟支佛地を出過し、是の菩薩は佛道を貴ぶが故に利養を貴ばず。頭陀を行すと雖も是の法を貴ばず、是の法は是れ究竟道の因縁少分にして、究竟道に非ざるを以てなり。是を阿鞞跋致の菩薩の行・類相貌と名く。

問うて曰く、(一六) 是の菩薩は未だ佛道を得ず、未だ諸の煩惱を斷せざるに、云何が常に慳貪等の諸の惡心を生ぜざるや。答へて曰く、阿鞞跋致の菩薩は無生法忍を得る時、諸の煩惱を斷じ、但未だ習を斷せざるのみ。若し「煩惱を斷せずんば、云何が常に能く諸の慳貪等の障道の心を生ぜざらんや。經に説くが如し、」須陀洹、乃至阿羅漢は、即ち是れ菩薩の無生法忍なり」と。

復次に、有人の言はく、「菩薩は六波羅蜜(多)を行じ、深く諸の功德を修集するが故に、諸の煩惱を折薄して心中に生ぜざるが故に、是を常に生ぜずと名く」とし。

復次に、是の菩薩は無量世に禪(那)波羅蜜(多)を行ずるが故に、心不動に住し、般若を積習するが故に、深く智慧に入り、是の菩薩は法味の微妙なることを知るが故に、他より法を聞いて一心に聽受

【一六】 第七問、菩薩は煩惱を斷ぜずして、云何が能く慳貪等の諸の惡心を生ぜざるや。

し、法を樂む情深きが故に、聞く所は若くは三乘法、若くは外道、及び世間の法なり。自ら心妙なるが故に皆般若と和合し、法相を破せず。譬へば、壯夫は病無く、食する所の物、消化せざることも無きが如く、又佛は最上の味相を得、復苦辛にして美ならざる食と雖も、佛口の中に在りては皆是れ上味となるが如く、又石蜜を煮るに、熱せんと欲する時、種種の物を中に内るれば、皆石蜜と成るが如し。妙味の力盛なるが故なり。菩薩も亦是の如く、般若波羅蜜「多」の力盛なるが故に、種種の諸法を能く皆般若と合して一味と爲し、諸の過罪無からしむ。

復次に、世間の事とは、菩薩の起す所の身口の諸業は、皆憐愍の爲に衆生を度するが故に、此の憐愍心は皆般若波羅蜜「多」の初門に入る。又た復た世間の諸事の因縁、乃至坐起・行歩・飲食・言語、常に念じて衆生を安隱にす。是の來去等の法は皆法性に入る、來去を破する中に説くが如し。産業の事も亦是の如し。是を阿鞞跋致の相と名く。

【七】 諸法と般若と合して一味となること、壯夫の食を消化し、佛口の苦味を轉じて上味となす如し。

經

復次に、須菩提よ、若し惡魔は阿鞞跋致の菩薩の前に於いて、八大地獄を化作し、一一の地獄の中に千億萬の菩薩有りて皆燒き煮られ、諸の辛酸、苦毒を受く。菩薩に語りて言く、「是の諸の菩薩は皆是れ阿鞞跋致にして、佛の授記したまふ所なるも、大地獄の中に墮す。汝若し佛に阿鞞跋致の記を授けらるれば、當に是の大地獄の中に入るべし。佛は汝に地獄の記

を授くることを爲すも、汝は知らざるなり。還つて菩薩心を捨てば、地獄に墮せざることを得て、天上に生ずることを得べしと。須菩提よ、若し是の菩薩は、是の事を見、是の事を聞くも、心に動ぜず、疑はず、驚かず。是の念を作さく、「阿耨跋致の菩薩若し地獄・畜生・餓鬼の中に墮することは、終に是の處無し」と。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし。是を阿耨跋致の菩薩摩訶薩と名く。

復次に、須菩提よ、惡魔は化して比丘と作り、服を被りて菩薩の所に來至し、菩薩に語つて言く、「汝は先に應に是の如く淨く六波羅蜜(多)を修すべく、乃至應に是の如く、淨く阿耨多羅三藐三菩提を修すべきとを聞けり。是の事をば汝は疾く悔いて捨てよ。汝は先に過去・未來・現在の諸佛の所に於いて、初發心より乃ち法住に至るまで、其の中間に於いて、作す所の善根を隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せり。是の事も汝は亦疾く放捨せよ。若し汝疾く捨てば、われ當に汝に眞の佛法を語るべし。汝が先に聞く所は皆佛法に非ず、佛教に非ず。皆是れ文飾合集して作るのみ。我が所説は是れ眞の佛法なり」と。若し是の菩薩は是の説を作すを聞きて、心に驚き疑悔せば、當に知るべし、是の菩薩は未だ諸佛の受記を得ず、未だ定めて阿耨跋致の性中に住せず。若し是の菩薩は心に動ぜず、驚かず、疑はず、悔いせず、無作無生の法に隨順し依止し、他語を信ぜず、他行に隨はず。六波羅蜜(多)を行する時、他語に隨はず。乃至阿耨多羅三藐三菩提を行する時、亦他語に隨はず。須菩提よ、譬へば、漏盡の阿羅漢の他語を信ぜず、他行に隨はず、現に諸法實相を見て、惡魔も轉ずること能はざるが如し。

須菩提よ、阿耨跋致の菩薩摩訶薩も亦是の如く、聲聞辟支佛道を求むる人は、「是の菩薩を」破壞すること能はず、其の心を折伏すること能はず。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は必ず定んで阿耨跋致地の中に住し、他語に隨はず。乃至佛語をも直に信取せず。何に況んや、聲聞・辟支佛を求むる人、及び惡魔・外道・梵志の語をや、終に是の處無し。何となれば、是の菩

薩は、法の隨つて信すべき者あるを見ず、所謂る色、若くは受・想・行・識・若くは色如、乃至識如、乃至阿耨多羅三藐三菩提を見ず、何に泥んや、阿耨多羅三藐三菩提の如をや。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿耨多羅三藐三菩提と名くと。

復次に、須菩提よ、譬は比丘の身を作りて菩薩の所に來りし、菩薩に語りて言く、「汝が行する所の者は是れ生死の法にして、薩婆の道に非ず。汝は今身に苦を取りて盡く證す」と。是の時、惡魔は菩薩の爲に、世間の行を用ゐ、道に似たる法を説く。此の道に似たる法は是れ三界の繫觀にして不淨なり。所謂る、骨相、若くは初禪、乃至非有想非無想處なり。善男子に語るらく、「是の道を用ゐ、是の行を用ゐれば、當に須陀洹果を得べく、乃至當に阿羅漢果を得べし。汝、是の道を行ぜば、今世の苦盡きん。汝は生死の中の種種の苦惱を用受す。今是の四大身すら尙用受せずと爲す、何に泥んや、當に更に來身を愛くべけんや」と。須菩提よ、若し是の菩薩摩訶薩は心に驚かす、疑はす、悔はす、是の念を作さく、「是の比丘は我を益すること少からず。我が爲に道に似たる法を説く。是の道に似たる法を行するも、須陀洹果の證に至ることを得ず、阿羅漢果、辟支佛道の證に至ることを得ず、何に泥んや、阿耨多羅三藐三菩提に至ることを得んや」と。是の菩薩摩訶薩は益復、歡喜して是の念を作さく、「是の比丘は我を益すること少からず、我が爲に障道の法を説く。我は是の障道の法を知りて、三乘道を學することを隔げず」と。是の時、惡魔は菩薩の觀喜するを知りて、是の言を作さく、「善男子よ、汝、見んと欲するや。是の菩薩摩訶薩は、如恆河沙等の諸佛に、衣服・飲食・臥具・瞻養・資生の所須を供養し、亦如恆河沙等の諸佛の所に於いて、檀・那・波羅蜜・多・尸羅波羅蜜・多・廣提波羅蜜・多・毗梨耶波羅蜜・多・禪・那・波羅蜜・多・般若波羅蜜・多」を行じ、亦如恆河沙等の諸佛に親近して、菩薩摩訶薩の道を請問すらく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何が菩薩摩訶薩乘に住し、云何が檀・那・波羅蜜・多・尸羅波羅蜜・多・廣提波羅蜜・多・毗梨耶波羅蜜・多・禪・那・波羅蜜・多・般若波羅蜜・多」・四念處、



乃至大慈大悲を行するや」と。是の菩薩摩訶薩は佛の教ふる所の如く、是の如く住し、是の如く行じ、是の如く修す。是の菩薩摩訶薩の是の如き教を、是の如く學するすら、尙ほ阿耨多羅三藐三菩提を得ず、薩婆若を得ず、何に況んや、汝當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや」と。若し菩薩摩訶薩は是の事を聞いて、心に異とせず、驚かす、益復歡喜して是の念を作さく、「是の比丘は我を益すること少からず、我が爲に障道の法を説く、是の障道の法は須陀洹道を得ず、乃至阿羅漢・辟支佛道を得ず、何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得んや」と。是の時、惡魔は是の菩薩の心没せず、驚かざることを知り、即ち是の處に於いて多くの比丘を化作し、菩薩に語つて言はく、「此は皆是れ意を發して佛道を求むる菩薩にして、今皆阿羅漢地に住す。是の輩すら尙ほ阿耨多羅三藐三菩提を得ず。汝、云何が能く得んや」と。若し菩薩摩訶薩は即ち是の念を作さく、「此は是れ惡魔相似の道相を説くなり。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行すれば、阿耨多羅三藐三菩提心を轉すべからず、亦聲聞・辟支佛道の中に墮すべからず」と。復是の念を作さく、「檀・那・波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪・那・波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)」、乃至一切種智を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得ずとは、是の處有ること無し」と。須菩提、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿耨跋致の菩薩摩訶薩と名くと。

復次に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は復たの念を作さく、「若し菩薩は能く佛の所説の如く、般若波羅蜜(多)の心、乃至一切種智を遠離せずんば、是の菩薩は、終に阿耨多羅三藐三菩提を退かず。若し菩薩は魔事を覺知するも、亦阿耨多羅三藐三菩提を失せず」と。是の行・類・相貌を以て、當に阿耨跋致の菩薩摩訶薩の相を知るべしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の法に於てか轉ずるを名けて轉ぜずと爲すや」と。佛の言はく、「色相に於て轉じ、受・想・行・識の相に於いて轉じ、十二入の相十八界の相・聲・識・識心・愚癡の相・邪見の相・四念處の相、乃至聲聞・辟支佛の相、乃至佛相に於いて轉ず。是を以ての故に、名けて不退轉の菩薩摩訶薩の相と爲す。何となれば、是の阿耨跋致の菩薩

摩訶薩は、是の自相空法を以て、菩薩の位に入り、無生法忍を得るに至つて少許の法も得べからず。得べからざるが故に作さず、作さざるが故に生ぜず、生ぜざるは、是を無生法忍と名く。菩薩摩訶薩は、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是れ阿鞞跋致の菩薩摩訶薩なることをしと。

論

釋して曰く、魔は了了に、是の菩薩は是れ阿鞞跋致なりと知れば、復沮壞せず。若し未だ了了に知らざれば、則ち種種の因縁もて験試し、破壞す。或は八大地獄を作り、無數の菩薩の中に在りて、燒煮せらるるを化作し、菩薩に語りて言はく、「此は皆是れ阿鞞跋致にして諸佛の記を授くる者なり。汝若し記を受けば、地獄の記を受くと爲す」と。

問うて曰く、(一)惡魔は何の因縁の故に、善を行する者を地獄の記を受くと言ふや。答へて曰く、惡魔は是の菩薩の一切衆生に代つて苦を受けんと欲するを以ての故に、地獄の記を受くと言ひ、汝若し福德を行じて天に生せば、則ち自ら身の爲にし

【一八】 第八問、惡魔が善を行する者を地獄の記を受くと云へる理由如何。

て、衆生の豫にする事無しと。若し菩薩は是の事を聞いて、心動じ、疑悔し、若くは魔の語を信受せば、當に知るべし、是は未だ阿鞞跋致の記を受けざるなり。若し菩薩は是の事を聞くも疑はず、動せず、驚かず、是の念を作さく、「阿鞞跋致は、諸法實相を得るが故に一切法に著せず、一切法に著せざるが故に、乃至小罪をも生ぜず、何に況んや、三惡道の罪をや。火中に水有り、水中に火を生ずるが如きは、是の處有ること無し」と。復魔有りて比丘と作り、服を被り、來りて菩薩に語るらく、「汝

が先に小師より六波羅蜜(多)法を修することを聞けるは、皆是れ虚妄もて集むる所、隨喜心の功德も亦是れ虚誑なり。汝が先に聞く所は皆是れ虚誑の文飾にして、眞ならず、是れ佛口の所説に非ず、今我れ汝が爲に説く者は眞に是れ佛法なり、汝疾く之を捨てよと。若し菩薩は是を聞いて、心動じ、瞋り疑はば、當に知るべし、諸佛は未だ受記を與へざることを。譬へば、僞金を火に燒きて磨き打たんに、若くは黒く、若くは赤く、若くは白ければ、乃ち眞に非ざるを知るが如し。(一九) 若し菩薩は是を聞いて、瞋らず、疑はず、無生・無滅・無起・無作の法に隨ひ、六波羅蜜(多)の相を行する中に自ら知つて、他語に隨はずんば、當に知るべし、是れ眞の阿鞞跋致なることを。譬へば、阿羅漢は漏を盡すが故に、諸の魔事來るも、破すること能はざるが如し。阿鞞跋致の菩薩も亦是の如く、能く「是を」降伏する者無し。「そは」自ら現前に諸法實相を知ればなり。乃至魔は佛身と作りて來るとも、「その」所説法相と異ならば亦信受せず。(二〇) 譬へば、狗、師子の皮を著れば、諸獸は之を見て怖ると雖も、聲を聞けば、是を狗なりと知るが如し。何に況んや、變じて餘の身等と作るをや。此の中に、佛は自ら因縁を説きたまはく、「是の菩薩は色等の法の空なることを見るが故に、誰か當に他語に隨ふべきし」と。

復次に、惡魔は來りて、比丘の身と作り、菩薩に語つて言く、「是の六波羅蜜(多)は皆是れ生死の

【一九】 惡魔種種に菩薩を欺き誘ふと雖も、不退の菩薩は終に動ぜず。  
 【二〇】 狗、師子の皮を著れば、諸獸これを見て怖るれども、聲を聞けば狗なりと知る。

道なり。布施等の因縁の故に、欲界の中に福樂を受け、禪波羅蜜「多」の因縁の故に、色界の中に樂を受く。是の般若波羅蜜「多」は定相無きが故に、虚誑の法と名く。五道の中に廻轉して、自らは生死の道を出づること能はず。人は汝を誑して言はく、是れ一切種智の道なりと。我れ今實語す。汝涅槃を取らば、今世に苦を盡さん」と。是の菩薩若し嘿然せば、魔は即ち道に似たる法を説く、「若くは三十六種の不淨を觀じ、若くは骨人、若くは出入の息を觀じ、是の道に因りて四禪四無色定を得、汝は是の禪定に因つて、須陀洹、乃至阿羅漢を得べし。汝、今此の身は是れ罪の因縁の生ずる所なり。佛の説きたまはく、彈指の頃も更に身を受くるを讀せずと。何に況んや、久しく生死中に住するをや」と。阿鞞跋致の菩薩は是の事を聞き、心に喜んで是の念を作す、「是の比丘は大に我を益す、我が爲に道に似たる法を説く。我は是の道に似たる法を得て即ち眞道を知る。路を行く人の邪逕を知らば則ち正道を知るが如く、障道も亦是の如し」と。阿鞞跋致の菩薩は、「是れ大人にして、貴重なるが故に、是の比丘と誦語せず。魔は菩薩の嘿然たるを見、歡喜して言はく、「是の人は我が語を信受す」と。菩薩に語つて言く、「善男子よ、無量の菩薩有りて、如恆河沙等の諸佛を供養し、六波羅蜜「多」、及び菩薩の道法を請問し、奉行し、而たり佛の教を受け、盡く受けて菩薩の行を行するすら、尙ほ無上道を得ずして、今皆阿羅漢と作れり、汝見んと欲するや不や」と。菩薩は是の事を聞き已つて嘿然たり。魔は是處に於いて、即ち無數の阿羅漢の比丘を化作し、菩薩に語つて言く、「是の諸の比丘は皆

久しく無上道を行じ、今皆阿羅漢を取れり。汝は今、云何が獨り作佛せんと欲するや」と。阿鞞跋致  
 「の菩薩」は復歡喜すらく、「是の比丘は我が爲に、道に似たる障道の法を説く。是の菩薩は實に六波  
 羅蜜〔多〕の諸の功徳を行せば、定んで二定に墮せず。佛の所説の如く、心に常に六波羅蜜〔多〕等の  
 諸の功徳を離れずして、無上道を得ずとは、是の處有ること無けん」と。菩薩、若し是の魔事を知  
 れば、則ち大に利益を得て、而して失ふ所無し。是を以ての故に、菩薩は心に動轉せず、是を阿鞞跋  
 致の相と名く。爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の法  
 に於いて轉ずるを名けて、轉せずと爲すや」と。佛の言はく、色相等の法  
 中に於いて轉ずることは還つて上に略説せり、今當に廣く説くべし。若し  
 菩薩、色等の相に於いて皆能く轉せば、是を一切法の性空を行じて無生法  
 忍を得、菩薩の位に入ると名く。無生忍とは、乃至微細の法すら得べから  
 ず。何に況んや、大なるをや。是を無生と名く。是の無生法を得て、諸の業行を作さず、起さざる、  
 是を無生法忍を得と名け、無生法忍を得る菩薩は、是を阿鞞跋致と名く。是の如き等の無量の行・類・相  
 貌は、是れ阿鞞跋致の相なり。

【三】此の品は前品に續いて不  
 退の行・類・相貌を説き、殊に  
 菩薩の心堅固にして、魔障に  
 障へられざるを明し、轉不轉  
 の義を辯ず。他本には堅固品  
 に作る。

(三) 轉不退輪品第五十六の上を釋す。

復次に、須菩提よ、惡魔は菩薩の所に到り、其の心を壞ぜんとして是の言を作す、サウルワチニヤー「薩婆若は虚空と等しく無所有の相なり、諸法も亦虚空と等しく無所有の相なり。是の虚空等の諸法の空、無所有の相中に、阿耨多羅三藐三菩提を得る者有ると無く、亦得ざる者も有ること無し。是の諸法は皆虚空の如く無所有の相なり。汝は、唐に勤苦を受く。汝が聞く所の阿耨多羅三藐三菩提は皆是れ魔事にして、佛の所説に非ず。汝は當に是を放捨すべし。願はくは、汝、長夜に是を受け、安隱ならず、憂苦して惡道に墮すること莫れ」と。是の諸の善男子善女人は、是の阿を聞く時、應に是の如く念すべし、「是の惡魔の事は、我が阿耨多羅三藐三菩提心を壞す。諸法は虚空の如く、無所有にして自相空なりと雖も、而も衆生は知らず、見ず、解せず。我も亦是の虚空等の如く、無所有にして自相空を以て、大誓莊嚴し、一切種智を得、衆生の爲に此の法を説いて解脱を得せしむるに、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提を得」と。須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より已來、是の如き法を聞いて、應に其の心を堅固にして、動ぜず、轉ぜざるべく、菩薩摩訶薩は是の堅固心を以て動ぜず、轉ぜず、心に六波羅蜜(多)を行じて、當に菩薩の位に入るべしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、轉ぜざるが故に、阿鞞跋致と名け、轉するが故に、亦阿鞞跋致と名くるや」と。佛の言はく、「轉ぜざるが故に、阿鞞跋致と名け、轉するが故に、亦阿鞞跋致と名く」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が轉ぜざるが故に、阿鞞跋致と名け、轉するが故に、亦阿鞞跋致と名くるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩は、聲聞地・辟支佛地に於いて轉ぜず、是の故に轉ぜずと名け、若し菩薩摩訶薩は聲聞地・辟支佛地に於いて轉ず、是の故に亦轉ぜずと名く。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の相と名く。是の行・類・相貌を以ての故に、惡魔は其の意を壞して、阿耨多羅三藐三菩提を離れしむること能はず。

復次に、須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、若し初禪・第二・第三・第四禪、乃至滅受想定禪に入らんと欲せば、即ち入



〔多〕を行する者を歡喜し、讚歎し、尸羅波羅蜜〔多〕乃至般若波羅蜜〔多〕も亦是の如し。須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、家に在る時、能く闍浮提に滿つる珍寶を以て、衆生に施與し、乃至三千大千世界の中に滿つる珍寶を衆生に給施し、亦自ら常に先行を修することを爲さず、他人を凌易し虜掠し、其をして憂惱せしめず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と名くることな。

復次に、須菩提よ、阿鞞跋致の是の菩薩摩訶薩には、執金剛神王常に隨逐して、是の願を作す、「是の菩薩摩訶薩は、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。我れ常に隨逐し、乃至五性執金剛神も常に隨つて守護せん」と。是を以ての故に、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは餘の世間の大力の者は、是の菩薩摩訶薩の薩婆若心を破壞すること能はず。乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至る。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は常に菩薩の五根を具足す。「所謂」、信根・精進根・念根・定根・慧根なり。是を阿鞞跋致の相と名く。

復次に、須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は上人と爲り、下人と爲らずしと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が上人と爲るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩は一心に阿耨多羅三藐三菩提を行じ、心散亂せず、是を上人と名く。是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是れ阿鞞跋致の相なることな。

復次に、須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩は、一心に常に佛道を念じ、淨命を爲し、咒術もて諸藥を合和することを作さず。鬼神を呪して男女に著かしめ、其の吉凶、男女の祿相、壽命の長短を問はず。何となれば、須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、諸法の自相空を知り、諸法の相を見ざるが故に、邪命を行ぜずして、而して淨命を行ず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の相と名くることな。



論

釋して曰く、復阿鞞跋致の菩薩の相有り。若し 惡魔は是の言を作す、「薩婆若は虚空と等

し」と。薩婆若に種種の名字有り、或は一切智と説き、或は一切種智と説き、或は無上道と説き、或

は無量諸佛の法と説き、或は菩提と説く。皆是れ薩婆若の名字なり。此の中に薩婆若を説くは、當に

知るべし、是れ阿耨多羅三藐三菩提なるを。一切の菩薩は皆願つて薩婆若を得んと欲するに、魔は

來りて壞せんと欲し、是の言を作す、「是の薩婆若は空にして無所有なり、但諸師は汝が耳を誑はす

のみ。虚空の無所有無色無形にして、知るべからざるが如く、薩婆若も亦是の如し。是の故に諸法

と等しと説く。諸法とは、六波羅蜜〔多〕等の薩婆若に趣く助道法なり。是

の法も亦空、薩婆若も空にして無所有の相なり。諸法は但名字のみ有り

て、實事有ること無し。是の中に薩婆若を得る者無く、薩婆若に趣く〔者〕

無く、助道有る者無し。汝は唐らに辛苦を受け、汝が師は常に汝をして魔事を離れしむ。薩婆若は是

れ魔事なり。何となれば、涅槃を捨てて生死を取ればなり。汝が先に聞く所の經の、若くは六波羅蜜

〔多〕の義は是れ佛法に非ず、皆是れ人の造〔る所〕なり。汝、今、疾かに是の邪心を悔い捨てよ。若し

捨てずんば、長夜に三惡道の苦を受けん」と。阿鞞跋致の菩薩は是の事を聞いて、即ち魔事なること

を覺知すらく、「是の魔は薩婆若を毀訾し、我をして阿耨多羅三藐三菩提を遠離せしめんと欲す。何

となれば、一切法は空無所有なりと雖も、而も凡夫の衆生は、顛倒覆心の故に、知らず見ず。我も亦

【三】 惡魔曰く、般若は空にして無所得なり、汝何ぞ空しく辛苦を爲すやと。

當に自相空を以て莊嚴し、一切智を得て衆生の爲に法を説くべし。若し一切法は空ならば、我れ以て實に莊嚴するも、是れ相應にあらずし。若し諸法空にして、莊嚴も亦空ならば、是れ則ち相應す。衆生の爲に法を説くも亦是の如く、衆生をして須陀洹果を得せしむ。須陀洹果に二種あり。一には三結を斷せる無爲法なり、二には空無相無作三昧に相應する有爲の須陀洹果なり、是の二は皆空なり。有爲法の中には、三解脱門の故に空なり。無爲法の中には、無生無滅無減の相の故に即ち是れ空なり。乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如し。阿鞞跋致の菩薩は、初發意より已來、是の法を聞き、堅固にして、其の心動せず、轉せず。一切の諸の煩惱の箭入らざるが故に名けて堅と爲し、一切の外道・魔民の轉すること能はざるが故に不動と名け、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退せざるが故に不轉と名く。是の菩薩は是の如き三種の心を以て六波羅蜜〔多〕を行じ、菩薩の位に入る。菩薩の位の義は先に説けるが如し。是を菩薩の位に入ると名く。菩薩の位に入る者を阿鞞跋致と名く。須菩提、問ふ、「轉せざるが故に阿鞞跋致と名け、轉するが故に阿鞞跋致と名くるや」と。佛は二種を答へたまふ。二諦を以ての故なり。所謂、世諦と第一義諦となり。若し菩薩は菩薩位に入り、聲聞辟支佛心を轉じて、直に菩薩位に入るは、是を轉すと名く。轉せずとは、阿鞞跋致第一義諸法の一相中、所謂無相に入るすら尙一乘の定相無し。何に況んや、三乘をや。則ち轉する所無く、轉ずる所無きが故に阿鞞跋致と名く。

【三】二種の須陀洹果——(一)有爲、(二)無爲。

復次に、阿鞞跋致は欲界の法を行じて衆生を度すと雖も、禪定に於いて出入自在なり。禪定に於いて自在なるが故に、若し他人を教化せんと欲して、四念處、乃至八聖道分、三解脱門、乃至五神通を修するに、皆自在を得。禪定に入ると雖も、其の心清淨、柔軟なるが故に、長壽天の福を受けず、欲界に於いて教化し、四念處の道法を修すと雖も、亦須陀洹果を證せず、乃至辟支佛道を證せず。是の菩薩は十方の國土を觀じて、何の處に衆生を利益すべき處有るやを知るが故に、爲に身を受けて其の國に生ず。是の如き等を阿鞞跋致の相と名く。是の菩薩は一心に深く念じて、常に阿耨多羅三藐三菩提を離れざるが故に、但阿耨多羅三藐三菩提を貴び、餘事、所謂三十二相、金色の身を貴ばず。本願を捨てずして衆生を度するが故に、聲聞・辟支佛道を貴ばず。是の人は無所得・畢竟空を貴ぶが故に是の布施を貴ばず、乃至善根を種うることを貴ばず。何に泥んや、世間の利養をや。何となれば、菩薩は一切法を觀するに、自相空にして、實定の法の貴心を生ずべきものを見ざればなり。

復次に、有人は貪り貴ぶ所有るが故に、心動じて自ら安んずること能はず。若し得れば自ら歡喜し、失すれば自ら憂感す。菩薩は貴ぶ所無く、貪る所無きが故に、至つて得失に於いて心清淨、不動なるが故に、身行口行調和して異ならざるが故に、身の四威儀を一心に常に念じて違失する所無し。復次に、深く禪「那」波羅蜜多に入るが故に、身の四威儀に違失する所無し。



名く。

復次に、若し菩薩、無生法忍を得て菩薩の位に入り、受記を得れば、即時に執金剛神王等の法は、應に隨逐して守護すべく、佛道を得るときは則ち其の身を現じ、時に人をして見せしめ、此の中に自ら因縁を説けり、「若くは人、若くは非人も能く破壊すること無し」と。人破すとは、若くは殺し、若くは縛し、若くは論議して勝を得る等なり。非人破すとは、病を與へて、人をして狂せしめ、若くは命を奪ひ、若くは惡身と作つて其をして恐怖せしめ、若くは佛身を變作して邪道を説くなり。是の如き等は菩薩を折伏すること能はず。

問うて曰く、三若し金剛神王の爲に守護せらるれば、菩薩は自ら力有ること無きや。答へて曰く、菩薩も亦自ら力あり。復菩薩の功德を以ての故に、能く金剛神をして守護する所あらしむ。金剛神に守護せらるるが故に、未だ法身を得ずと雖も、而も功德を増大す。又天神をして、金剛神の侍衛することを見せしむるが故に、益敬畏を加ふ。菩薩の根を具足すとは、人の眼等の五情根無ければ、則ち木石に異なると無く、五情の力の故に能く見、能く聞くが如く、菩薩は心中に信等の五根無ければ、則ち是れ凡夫にして、聖數に入らず。

問うて曰く、阿毗曇經に説くが如きは、誰か五根を成就し、善根を斷せざる者ありやと。今何を

【五】 第一〇問、若し金剛神王の爲には守護せらるれば、菩薩は力あることなきや。  
【六】 第一一問、信等の五根なければ、即ち是れ凡夫なりと言ふ理由如何。

以てか、信等の五根なければ即ち是れ凡夫なりと言ふや。答へて曰く、善根を斷せざる衆生は、五根を成就すと雖も、而も發起して用を爲すこと能はず。譬へば、小兒の煩惱・姪欲を成就すと雖も、未だ用を發すること能はざるが如し。故に信等の五根無しと言ふも亦是の如し。衆生は有りと雖も、用ゐず、發せず、是の故に數へず。信等の五根に二種有り。一には聲聞・辟支佛に屬し、二には佛と諸の菩薩に屬す。聲聞・辟支佛に屬する五根は、能く深く涅槃を信じ、能く智慧を以て世間の無常空なることを知り、能く涅槃寂滅を知る。菩薩の五根は深き慈悲心を生じ、怨惡の衆生に於いても亦能く諸法の實相、所謂の無生無滅等を觀じ、未だ佛を得ずと雖も、亦能く佛事を信受す。復菩薩の根を以ての故に、能く見、能く聞き、能く知ること有り。諸佛の神通力は諸の聲聞・辟支佛の及ぶ所に非ざること、(二九) 不思議解脫經中に説くが如し。舍利弗・目連・須菩提等は、佛の左右に在りと雖も、菩薩の根無きを以ての故に、是の大菩薩の會及び所有る神通力を見ず。亦佛の不思議解脫を説きたまふを聞かず。是の故に説けり、「若し菩薩は具足して信等の五根を得るが故に阿鞞跋致と名く」と。

問うて曰く、餘の經中に説けり、「善人は身口意業に惡無く、想を知り、恩を報じ、能く一切衆

【二七】 小兒は姪欲ありと雖も、未だ發用せざるが如く、凡夫も亦信等の五根あれども、未だ發用せざるなり。  
 【二八】 二種の五根。(一)聲聞・辟支佛に屬し、(二)佛・菩薩に屬す。  
 【二九】 不思議解脫經とは維摩經のことなり。  
 【三〇】 第一二問、不散亂の心もて、無上道を行する一事を上人と名くる理由如何。

生の爲の故に自ら身を捨て、楽しんで衆生を安隱にし、利益する所あるも、果報を求めず。是の如き  
 等は上人の相なり」と。何を以ての故に、但散亂せざる心に無上道を行するの事を名けて上人と爲す  
 と説くや。答へて曰く、此の中には、佛は自ら略説したまへり。一心にして散亂せざるに、盡く諸  
 の善法を攝す。何となれば、佛道を貪重するが故に、一切の煩惱を折薄す。是の故に、衆生に於いて  
 深く慈心を加へ、能く自ら身命を以て給施す。何に況んや、報恩等を知らざらんや。常に一心に阿耨  
 多羅三藐三菩提を念じ、清淨に戒を持するが故に邪命を行せず。所謂 呪術合藥を作さず。呪術と  
 は能く身を醫して人をして見ざらしめ、能く人を變じて畜獸と爲す。是の  
 如き等の種種の呪術なり。合藥とは、餌食もて仙を求め、亦諸藥を合和し  
 て疾を療し、財を求め、及び名聲を求む。咒鬼とは、有人は未來の事を知  
 らんと欲し、鬼を咒つて男女に著かしめ、其の吉凶・生男・生女・壽命の脩短・豐樂・勝負等を問ふ。若し  
 作者あれば、衆生を攝するが爲に、其の懦弱を破し、財利・名聞の爲にせず。何となれば、是の人は  
 一切諸法の自相空を知るが故に、諸法の相、所謂る、己身・妻子・男女等を見ず。是の相を見ざるが故  
 に、邪命を行せざるなり。

【三】 漢譯原本には祝術に作れ  
 ども、恐くは咒術の誤字なら  
 ん。

# 卷の第七十四

## 不退轉輪品第五十六の下を釋す。

經

復次に、須菩提よ、今當に更に阿耨跋致の菩薩摩訶薩の行・類・相貌を説くべし。一心に諦に聽け、佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、常に阿耨多羅三藐三菩提心を遠離せざるが故に、五衆の事を説かず、十二入の事を説かず、十八界の事を説かず。何となれば、常に念じて五衆の空相・十二入・十八界の空相を觀すればなり。是の菩薩摩訶薩は官事を説くを好まず。何となれば、是の菩薩は諸法の空相の中に住し、法の若くは貴く、若くは賤しきを見ざればなり。賊事を説くを好まず。何となれば、諸法は自相空なるが故に、若くは得、若くは失を見ざればなり。軍事を説くを好まず。何となれば、諸法は自相空なるが故に、若くは多き、若くは少きを見ざればなり。鬭争を説くを好まず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は諸法如中に住し、法の若くは悦み、若くは愛するを見ざればなり。婦女の事を説くを好まず。何となれば、諸法空の中に住して、好醜を見ざればなり。聚落の事を説くを好まず。何となれば、諸法は實際の中に住し、勝つこと有り負くること有るを見ざればなり。國事を説くを好まず。何となれば、諸法は實際の中に住して、法の是れ我、是れ無我なることを見ず、乃至知者、見者を見ざればなり。是の如き等の種種の世間の事を

【一】更に不退の菩薩の細相を説く。

何となれば、是の菩薩は諸法の空相の中に住し、法の若くは貴く、若くは賤しきを見ざればなり。賊事を説くを好まず。何となれば、諸法は自相空なるが故に、若くは得、若くは失を見ざればなり。軍事を説くを好まず。何となれば、諸法は自相空なるが故に、若くは多き、若くは少きを見ざればなり。鬭争を説くを好まず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は諸法如中に住し、法の若くは悦み、若くは愛するを見ざればなり。婦女の事を説くを好まず。何となれば、諸法空の中に住して、好醜を見ざればなり。聚落の事を説くを好まず。何となれば、諸法は實際の中に住し、勝つこと有り負くること有るを見ざればなり。國事を説くを好まず。何となれば、諸法は實際の中に住して、法の是れ我、是れ無我なることを見ず、乃至知者、見者を見ざればなり。是の如き等の種種の世間の事を



七  
説かず。但好んで般若波羅蜜(多)を説き、薩婆 若心を遠離せず。

若し檀(那)波羅蜜(多)を行する時、檀食の事を爲さず、尸羅波羅蜜(多)を行する時、破戒の事を爲さず、屠提波羅蜜(多)を行する時、瞋諍の事を爲さず、毗梨耶波羅蜜(多)を行する時、憍怠の事を爲さず、禪(那)波羅蜜(多)を行する時、散亂の事を爲さず、般若波羅蜜(多)を行する時、愚癡の事を爲さざれば、是の菩薩は一切法空を行すと雖も、而も法を樂しみ、法を愛す。是の菩薩は法性を修すと雖も、常に不壞法を讀じ、而も善知識、所謂、諸佛及び菩薩、聲聞、辟支佛、諸の能く教化し阿耨多羅三藐三菩提に樂住せしむる者を愛樂す。是の人は常に願つて諸佛を見たてまつらんと欲し、在所の處を聞き、佛國土の中に、現在佛有らば、願に隨つて往生せんと欲す。是の如く心常に晝夜に行す。所謂佛を念する心なり。

是の如く、須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、初禪、乃至非有想非無想處を行じ、方便力を以ての故に欲界の心を起し若し衆生の能く十善道を行する者、及び現在佛有るの處には中に在りて生ず。是の如き行・類・相貌もて當に是を阿鞞跋致の菩薩摩訶薩と爲すことを知るべし。

復次に、須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、内空・外空、乃至無法有法空に住じ、四念處・乃至空・無相・無作解脱門に住し、自地の中に於いて了了に知り、我は是れ阿鞞跋致なり、阿鞞跋致に非すと疑はず。何となれば、乃至少許の法をも阿耨多羅三藐三菩提の中に於いて、若くは轉じ、若くは轉ぜざるを見ざればなり。須菩提よ、譬へば、人の須陀洹果を得、須陀洹地の中に住し、自ら了了に知つて、終に疑はず、悔いざるが如し。阿鞞跋致の菩薩摩訶薩も亦是の如く、阿鞞跋致の中に住して終に疑はず。是の地中に住して佛世界を淨め、衆生を成就し、種種の魔事起れば即時に覺知して、亦魔事に隨はず、魔事を破壞す。須菩提よ、譬へば人有り、五逆罪を作り、五逆罪の心、乃至死する時まで、常に返うて捨てず。異心有りと雖も障隔すること能はざるが如し。

須菩提よ、阿耨跋致の菩薩摩訶薩も亦是の如く、自ら其地に住し、心常に動ぜず。一切世間・天人・阿修羅も動轉すること能はず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は一切の世間・天人・阿修羅の上に出て、正法位の中に住し、自證地の中に住し、諸の菩薩の神通を具足し、能く佛世界を淨め、衆生を成就し、一佛界より一佛界に至り、十方佛の所に於いて、諸の善根を殖ふ諸佛に親近し諮問すればなり。是の菩薩は是の如く住し、種種の魔事起るも、覺して而も隨はず。方便力を以て魔事の著に處し、實際の中、自證地の中に疑はず、悔いず。何となれば、實際の中には疑相無く、是の實際は一に非ず、二に非ざる、とを知らばなり。是の因縁を以ての故に、是の人ば乃ち身を轉するに至るまで、終に聲聞辟支佛地に向はす。是の菩薩摩訶薩は諸法の自相空の中に、法の若くは生じ、若くは滅し、若くは垢つき、若くは淨きを見ず。

須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は乃ち身を轉するに至るまで、亦我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、若くは得ずと疑はず。何となれば、須菩提よ、諸法の自相空は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なればなり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は自證地の中に住し、他語に隨はざれば、能く壞する者無し。何となれば、是の阿耨跋致の菩薩摩訶薩は不動の智慧を成就すればなり。

須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に是れ阿耨跋致の菩薩摩訶薩なることを知るべし。

復次に、須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は若し惡魔佛身と作り、來つて菩薩に語つて言はく、「汝は今是の間に於いて、阿羅漢道を取らば、汝は亦阿耨多羅三藐三菩提の記無く、汝は亦未だ無生法忍を得ず、汝は亦是の阿耨跋致の行・類・相貌無く、亦是の相、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得る無しと。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、是の語を聞いて、心異ならず、沒せず、驚かず、畏れざれば、是の菩薩は應に自知すべし、我は必ず諸佛に從つて阿耨多羅三藐三菩提の記を受けんと、何を以ての故に、諸の菩薩は、是の法を以て記を受く、我も亦是の法有りて受記を得ればなり。須菩提よ、若くは惡魔、若くは魔の所使と爲りて、佛の形像を作し來り、菩薩と與に、聲聞辟支佛の記を受く。須菩提よ、是の菩薩は是の念を

作す、是れ惡魔、若くは魔の所使の、佛の形像と作つて來れるなり。諸佛は應に菩薩を教へて、阿耨多羅三藐三菩提を遠離せしめ、聲聞辟支佛道に住せしむべからずと。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、當に知るべし、是を阿鞞跋致の相と名くることな。

復次に、須菩提よ、惡魔は復佛身と作り、菩薩の所に來到して、是の言を作す、汝が學する所の經書は佛の所説に非ず、亦聲聞の説にも非ず、是れ魔の所説なりと。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は當に是の知を作すべし、是れ惡魔、若くは魔の所使の、我をして阿耨多羅三藐三菩提を遠離せしむるなりと。須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩は已に過去の佛の爲に授記せられて、阿鞞跋致地の中に住することな。何となれば、諸の菩薩の有する所の阿鞞跋致の行・類・相貌、是の菩薩も亦是の行・類・相貌を有すればなり。是を阿鞞跋致の菩薩の相と名く。

復次に、須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、諸法を護持せんが爲の故に壽命を惜まず、何に況んや餘物をや。是の菩薩は法を護持するが故に是の念を作す、我は一佛法を護持することを爲さず。我は三世十方の諸佛の法を護持することを爲すが故にと。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は、佛法を護持するが故に、壽命を惜まざるや。須菩提よ、佛の所説の如く、一切諸法は眞實なり。是の時、愚癡の人の破壊して受けざるありて、是の言を作す、是れ法に非ず、善に非ず、卍尊の教に非ずと。須菩提よ、菩薩は是の如き法を護持するが故に壽命を惜まず。菩薩も亦應に是の念を作すべし、未來世の諸佛、我も亦是の數中に在り、中に在りて記を受く。是の法も亦是れ我が法なり。是を以ての故に壽命を惜まざるなりと。須菩提よ、菩薩は是の利益を見るが故に、是の法を護持し、壽命を惜まず。須菩提よ、是の行・類・相貌を以て、是の阿鞞跋致の相を知る。

復次に、須菩提よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は佛の説法を聞き、疑はず、悔いず。聞き已つて受持し、終に忘失せず。何と

なれば、陀羅尼を得ればなり」と。須菩提言さく、「世尊よ、何等の陀羅尼を得て、佛の説きたまふ所の諸經を聞き、而も忘  
 失せざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩は聞持等の陀羅尼を得るが故に、佛の説きたまふ諸經を忘れず、失せず  
 疑はず、悔いざるなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、但だ佛の説法をのみ聞いて、忘れず、失せず、疑はず、  
 悔いざるや。聲聞辟支佛の説、天龍・鬼神・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽の説を聞くも亦復忘れず、失せず、疑はず、悔いざるや」と。  
 佛、須菩提に告げたまはく、「所有の言説、衆事に陀羅尼を得る菩薩は、皆忘れず、失せず、疑はず、悔いざるなり。  
 須菩提よ、是の如き行・類・相貌を成就するが故に、當に是れ阿鞞跋致の菩薩摩訶薩なりと知るべし」と。

論

釋して曰く、佛は更に阿鞞跋致の相を細説せんと欲するが故に、須  
 菩提に告げたまはく、一心に諦聽せよ。是の菩薩は常に阿耨多羅三藐三  
 菩提を離れず、樂しんで畢竟空を行するが故に、五衆十二入・十八界の決定  
 相を説き分別することを喜ばず。又國王等の事を説くことを喜ばざるな

り。餘の外道の如きは、他の供養を受け、正道無きが故に、虚妄に染著し、心懈怠するが故に國事を  
 説き、過去世の諸王の力勢等の樂を分別す。阿鞞跋致の菩薩は是の事を説かず。一切世間を見るに、  
 常に無常の火に燒かる。衆生は惑むべし、我れ未だ佛道を得ざるも、我は但應に衆生を度する法を説  
 くべく、餘事を説くべからず。一切法は畢竟空なるが故に、大小の相は得べからず、賊等の事も亦是  
 の如し。畢竟空は即ち是れ如法性實際なり。六波羅蜜〔多〕を説き、六蔽を説かず。菩薩は一切法空

【二】不退の菩薩の五蘊十二  
 處十八界の事を説かず、國  
 事・賊事・男女等の俗事を説か  
 ざる理由。

の如し。畢竟空は即ち是れ如法性實際なり。六波羅蜜〔多〕を説き、六蔽を説かず。菩薩は一切法空

の中に安住すと雖も、而も法を樂しみ、法を愛す。何となれば、是の菩薩は是の一切法空に著せざるなり。又我は次第法・禪定・智慧等を行じ、然る後に一切法空を得。此の空は得べからず、口に説けば而も心に著す。是の故に先づ次第法を行す。

復次に、法性の中には、諸法を分別せざるが故に、法性は破壊の相に非ず。是の菩薩は法性に著せず、衆生を憐愍して、爲に種種に善・不善等を分別し、衆生をして解することを得せしむ。衆生の爲に是の如く説くと雖も、亦常に不壞法を讚歎す。「そは」衆生を引導して、法性の中に入らしむるが故なり。

復次に、阿鞞跋致の菩薩は更に親善無し。但諸佛及び大菩薩の能く諸の實相法を讚歎する者をもつて親善と爲す。是の人の功德智慧大なるが故に意の住する所に隨ふ。若し諸佛の世界に至らんと欲せば、意に隨つて生ずる事を得。是の菩薩は諸の禪定を得んと欲すと雖も、方便力を以ての故に、衆生の爲に欲界に生ずる者あり、現在の佛の處に生ずるもの有り。三 欲界に生ずる者は、故らに衆生の爲に愛慢分を留め、此の禪定の果報を以て色無色界に生ぜず。但禪定を以て、其の心を柔和にし、其の報を受けず。

復次に、是の菩薩は内空等の諸空の中に安住す。四 安住とは、深く通達心に入りて、著する所無きが故に、疑を生ぜざるなり。「我は是れ阿鞞跋致なり、阿鞞跋致に非ず」と。「そは」自心の中に深く智

【三】 欲界に生ずる菩薩は、衆生を度せんが爲に愛慢の分を留む。  
【四】 安住の義解。

慧に入るが故なり。是を自地の證と名く。又是の人は一切法の、若くは轉じ、若くは轉せざることを  
見す。是の故に疑を生ぜず。疑を取相、有所得と名く。人の夜、樹杪を見、尋いで復念を生じ、人形  
も亦爾なりと便ち疑心を生ずるが如し。若し此の二相を取るが故に疑と名く。菩薩は無相三昧を行  
するが故に、一切法の中に於いて相を取らず、則ち疑を生ずる所無し。此の中に佛は譬喩を説きたま  
へり。須陀洹は無始世より來た、未だ是の無漏の智慧を得ざるも、三結を斷ずるが故に、即ち自ら無  
漏法を知り、四諦の中に於いて定心にして、若くは苦、若くは樂を疑はざるが如し。阿鞞跋致も亦是  
の如く、無始世より來た、未だ諸法の實相、所謂阿鞞跋致を得ず、得る時も亦疑を生ぜず。諸の疑を  
生ずる者は、違失の事を見る。本聞く所の如くならざればなり。是の菩薩は、一切法に於いて、畢竟  
空なるが故に、是れ聞く所の法の如くならずと疑ふことを得ず。住處無きが故に疑無し。此は是れ究  
竟道にして、論ずべからず、破すべからずと知る。是の地中に住して衆生を教化し、佛世界を淨め、  
亦能く方便力を以ての故に、種種の魔事を破す。是の阿鞞跋致の法は常に菩薩、乃至成佛に隨逐す。  
此の中に、佛は二の譬喩を説きたまへり、一には須陀洹、二には五逆なり。是の二心は厚重なるが故  
に却くべからず。須陀洹の心は常に却くべからず、五逆の心は罪畢れば乃ち除く。人の簞を著くれば  
鬼常に隨逐するが如し。阿鞞跋致の心は復是に過ぎたり。阿鞞跋致の心は一切能く動轉する者無し。  
種種の苦事逼迫するも動すること能はず。種種の供養、利養の因縁も實相の心、及び慈悲心を捨てし

むること能はず。上來、種種に阿鞞跋致の相貌を説けり。今は其の行事を説かん。所謂衆生を教化し佛世界を淨め、諸佛の所に從つて新に善根を種ゑ、一佛に從つて諸佛の諸の深法の要、及び種種に衆生を度する門を諮問し、十方の種種の魔事起るも而も隨逐せず、方便力を以て、是の魔事を觀するこゝと佛法の如く、諸の魔身を觀すること佛の如くにして異なること無し。何となれば、一切法及び實際は、同じく一相、所謂の無相なればなり。是の人は身を轉じて亦聲聞、辟支佛地向はず。何となれば、是の菩薩は初めて阿鞞跋致を得る時、一切法の實相の空なることを知り、身心を轉じて亦二地向はず、心に自ら疑はず。若くは無上道を得、若くは得ざるも、是の菩薩を世世に人の能く降伏し破壊する者無し。佛は是の菩薩を驗するが爲の故に譬喩を作したまはく、「若し魔、佛身と作り來つて、是の菩薩を誑試せんと欲して語つて言はく、「汝は今世に阿羅漢を取べし。汝、阿鞞跋致の相は佛道を得べきと無し、無生法忍は即ち是れ一切法なり。此の中に云何が忍を得べけんや」と。若し菩薩は是を聞いて心退没せずんば、是の菩薩は自ら必ず諸佛より記を受くるとを知る。何となれば「我に無生法忍有り」と是の魔事を聞くも心に怖畏せざればなり。復次に、惡魔は是の菩薩の歡喜せることを知り、聲聞、辟支佛道の記を與授すれば、若くは今世に阿羅漢を得、後世に辟支佛を得。若し菩薩は此の變化の佛身の語に隨はずば、定は魔なり、若くは魔の所使なりと覺知す。何となれば身は是にして而も言は非なればなり。金錢を試むるに、之を彈きて

【五】 金銀貨を彈きて眞偽を知るの法は印度古來の習慣也。

聲を出せば即ち其の眞僞を知るが如し。若し佛は菩薩に與ふるに、聲聞辟支佛の記を授けば終に是の處無し。何となれば、諸佛は種種の方便もて、一切の人をして、盡く佛道に入らしめんと欲す。云何が菩薩を引いて聲聞の記を與へんや。

復次に、魔は復佛身を化作し、菩薩に語つて言く、「汝が行ずる所の經書は盡く是れ魔の所説なり」と。是の菩薩は是を魔事なりと覺知す。當に知るべし、是の菩薩は已に受記を得て、阿鞞跋致性中に安住することを。

復次に、阿鞞跋致の菩薩は深く法を愛樂するが故に、聞いて即ち心に染み、衣毛皆堅ち、佛の大悲を念ずれば即ち歡喜悲泣し、或は甚深の法中に於いて大歡喜を生ず。當に知るべし、是は阿鞞跋致なりと。譬へば、大軍退敗すれば、即ち怖據迷悶し、地に臥して死に似んに、親族は之を見て活すつと之を知らんと欲して、杖を以て之を鞭ち、廢疹起れば則ち必ず活することを知るが如し。菩薩も亦是の如く、皆是れ肉身なり。何を以ての故に必ず能く成佛することを知るや。若し佛法を説くことを聞けば、身中に相現じ、衣毛爲に堅ち、顔色の相異なればなり。餘人は聞くも心に入らざれば則ち異相無く、死人の如くして異なること無し。是の菩薩は深く法を愛するが故に、能く身を捨てて法の爲にす。若くは佛、若くは佛弟子は、大會に於いて、種種の因縁もて、諸法の畢竟空を説くに

【六】迷悶して地に臥すに、若し廢疹起れば、必ず活すべきを知る。肉身の菩薩は毛堅の信生すれば、必ず成佛するを知る。



一人の狂人有り。音聲、名字の相を取りて、是の畢竟空に著し、其の過罪を出す。若し諸法盡く畢竟空ならば、則ち佛無く、法無く、罪・福業の因縁無く、修行・精進・得道果報無しと。是の如き等の無量の過罪を出す。阿鞞跋致の菩薩は觀察し籌量して、説法者の有無の著心を知り、佛語に隨つて憐愍するが故に説く。狂人の語言に著して相を取り、是の畢竟空を破することを知る。爾の時、阿鞞跋致は則ち命を没し、狂人を佐助して言く、「是れ邪見の人にして、自ら邪見に没し、亦多く衆人を化し、邪見もて佛法を壊滅せしむ。深く瞋根を懷くが故に、或は自ら殺し、或は弟子をして殺さしむ」と。爾の時、菩薩は若し死時至るも、法を佐けんが爲の故に、怖畏を以て諸法の性を壊せず。此の中に佛は因縁を説きたまへり。菩薩は是の念を作す、「未來世の佛に、我も亦是の數中に在り。是の法も亦是れ我が法なり。是れ我が法なるが故に、身命を惜まずして、而も之を守護す」と。是の思惟を作す、「我は無量世の中に、煩惱邪見の爲の故に、身を喪ふこと無數なり。今、十方三世諸佛の法を佐助發起することを爲す。若し益有りて而して死せんに、益無うして而して生ずるに勝れたり」と。

是の如き等の法の爲の故に身命を惜まず。  
復次に、是の菩薩は未だ佛道を成せざるも、佛より甚深の法を聞いて、能く盡く受け、信力を失はざるが故に能く受け、聞持陀羅尼の力の故に失せず、斷疑陀羅尼の力の故に疑はず。須菩提問ふ、「但だ佛語のみを聞いて、能く信じ、持して疑はざるや。餘の語を聞くも亦爾なりや」と。佛の言はく、

一切の所説有れば、皆能く持す。若し二乘・天・龍等の所説は、道理有るものは能く信じ、持して疑はず。道理無き者は、之を持して疑無きも、而も信せず。

復次に、有人の言く、「是の邪法を信じ、〔是は〕不善、是は善と疑はず」と。有人の言く、「諸の天・龍・二乗の所説は、皆是れ佛法なり。是を以て阿鞞跋致の相は、聞いて則ち能く持し、疑無く、悔無し。是の菩薩は未だ佛と作らずと雖も、諸法實相の中に於いて、都べて疑あること無し」と。是の如きの行・類・相貌は、是れ阿鞞跋致の菩薩なり。

問うて曰く、何事をか得來るを阿鞞跋致と名くるや。答へて曰く、阿毗曇毗婆沙の中に説く、「三阿僧祇劫を過ぎて後、三十二相の因縁を種ゑ、是より已來を阿鞞跋致と名く」と。毗泥・阿波陀那の中に説く、「然燈佛を見てより、五莖の華を以て

【七】第一問、何事をか得來るを不退と名くるや。

佛に散じたてまつり、髮を以て地に布き、佛は阿鞞跋致の記を授くることを爲したまふに、虚空に飛騰し、偈を以て佛を讃じたてまつる。是より已來を阿鞞跋致と名く」と。此の般若波羅蜜〔多〕の中に、「若し菩薩は具足して六波羅蜜〔多〕を行じ、智慧方便力を得て、是の畢竟空波羅蜜〔多〕に著せず。一切法を觀するに、不生・不滅・不增・不減・不垢・不淨・不來・不去・不一・不異・不常・不斷・非有・非無なり。是の如き等の無量の相對の二法有り。是の智慧に因りて、一切の生滅等の無常相を觀破す。先づ無常等に因りて、常等の倒を破し、今亦無生無滅等を捨つ。無常觀等を捨て、不生・不滅に於いても亦著せず。亦

空にして無所有の中にも墮せず。亦是の不生不滅の相を知り、得ず著せざるが故に亦是の不生不滅の法を信用し、三世十方諸佛の眞智慧中に、信力の故に通達無礙なり。是を菩薩は無生法忍を得て、菩薩位に入ると名け、阿鞞跋致と名く」と。是の菩薩は初發心より已來、阿鞞跋致と名くと雖も阿鞞跋致の相を未だ具足せざるが故に授記を與へず。何となれば、外道の聖人・諸天・小菩薩等は此の念を作す、「佛は是の人を見て、何等の事有つてか而も授記を與へたまふや」と。是の人は佛道の因縁の中に於いて未だ住せずんば、云何が授記を與へんや。是の故に、佛は未だ授記を與へたまはず。是の菩薩に二種有り、一には生死の肉身、二には法性生身なり。無生忍の法を得、諸の煩惱を斷じ、是の身を捨てて後、法性生身を得。肉身の阿鞞跋致にも亦二種有り、佛前に於いて授記を得るもの有り、佛前に於いて授記せざるもの有り。若し佛世に在さざる時は、無生法忍を得るも、是は佛前に於いて授記せず。

問うて曰く、(二〇) 若し爾らば、人ありて讀誦し、説き、正憶念し、無生法忍の義に隨順するも、是の人は未だ禪定を得ず、或は疑心を生じ、或は著心の爲に牽かるれば、是の如き人を是に比するに、何等の菩薩をか是れ阿鞞跋致と爲すや不や。答へて曰く、是の人を名けて阿鞞跋致と爲さず。阿鞞跋致の菩薩は、甚深の佛法の中に於いてすら尙ほ疑無し。何に況んや、無生忍

【八】 二種の菩薩(一)生死の肉身、(二)法性生身。

【九】 二種の肉身の菩薩(一)佛前にて授記を得るもの(二)佛前にて授記せざるもの。

【一〇】 第二問、人あり、讀誦し、説き、正憶念し、無生法忍の義に隨順せば、是の人は未だ禪定を得ず、疑心を生じ、著心の爲に牽かるるも、不退の菩薩と爲すや不や。

の初法門をや。(二)是の未だ阿鞞跋致を得ざる者に二種有り、一には信少く疑多く、二には疑少く信多し。信少く疑多しとは、經を讀誦する人よりも少しく勝る。信多く疑少しとは、若くは禪定を得て、即時に柔順忍を得るも、未だ法愛を斷せざるが故に、或は著心を生じ、或は還つて退没す。是の人若し常に修習すれば、此の柔順忍を増長するが故に、法愛を斷じ、無生忍を得、菩薩の位に入る。略して阿鞞跋致の相の義を説けり。

(三)燈炷品第五十七の上を釋す。

經

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は大功德を成就す。

世尊よ、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は無量の功德を成就し、無邊の功德を成就す」と。佛、須

菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。是の阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は大功德を成就

し、是の阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は無量無邊の功德を成就す。何となれば、是の阿鞞跋致

の菩薩摩訶薩は無量無邊の智慧を得、一切の聲聞辟支佛と共にならざればなり。阿鞞跋致の菩薩は是の智慧の中に住し、四無礙を生じ、是の四無礙智を得るが故に、一切の世間天及び人、能く窮盡すること無しと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は能く如恆河沙等の劫を以て、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の行・類・相貌を數説した

まふ」と。須菩提言さく、「世尊よ、何等か深奥の處にして、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は是の中に住して六波羅蜜(多)を行する

時、四念處を具足し、乃至一切種智を具足するや」と。佛、須菩提を讚じて言はく、「善哉、善哉、須菩提よ、汝は阿鞞

【一】二種の未得不退の菩薩、(一)信少疑多、(二)疑少信多。  
 【二】此の品には、四無礙門を開き、不退の深奥の相を説く。  
 燈炷とは、後段に般若の功德の成就について、其の譬喩あるが故に、取つて品の名とせしなり。他本には燈炷深奥品又は深奥品とせり。

跋致の菩薩摩訶薩の爲に是の深奥の處を問へり。須菩提よ、(三)深奥の處とは、空は是れ其の義なり。無相・無作・無起・無生・無染・離・寂滅・如・法性・實際・涅槃、須菩提よ、是の如き等の法は、是を深奥の義と爲す」と。須菩提、佛に白して言さく、  
 「世尊よ、但空乃至涅槃のみ是れ深奥にして、一切法は深奥に非ざるや」と。佛の言はく、(四)一切法も亦是れ深奥の義なり。  
 須菩提よ、色も亦深奥、受・想・行・識も亦深奥、眼も亦深奥、乃至意・色乃至法、眼界乃至意識界、檀・那・波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)、四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦深奥なり」と。世尊よ、  
 何何が色深奥、乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦深奥なるや」と。佛の言はく、色如は深奥なるが故に、色は深奥なり。受・想・行・識如、乃至阿耨多羅三藐三菩提如は深奥なるが故に、阿耨多羅三藐三菩提は深奥なり」と。  
 世尊よ、  
 何何が色如深奥、乃至阿耨多羅三藐三菩提如は深奥なるや」と。「須菩提よ、是の色如は是れ色に非ず、色を離るるに非ず。乃至阿耨多羅三藐三菩提は、是れ識に非ず、識を離るるに非ず。乃至阿耨多羅三藐三菩提は、是れ阿耨多羅三藐三菩提に非ず、阿耨多羅三藐三菩提を離るるに非ず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「希有なり、世尊よ、微妙の方便の故に、阿耨跋致の菩薩をして、色を離れて涅槃に處せしめ、亦受・想・行・識を離れて、涅槃に處せしめ、亦一切法の、若くは世間、若くは有諍、若くは無諍、若くは有漏、若くは無漏法を離れて、涅槃に處せしむ」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し、須菩提よ、佛は微妙の方便力を以ての故に、阿耨跋致の菩薩をして、色を離れて涅槃に處し、乃至有漏無漏法を離れて涅槃に處せしむ。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、是の如く、甚深の法と般若波羅蜜(多)と相應して觀察し、籌量し、思惟せば、是の念を作さん、我れ應に是の如く行じ、般若波羅蜜(多)の中に教ふるが如くすべし。我れ應に是の如く學し、般若波羅蜜(多)の中に説くが如くすべし」と。須菩提よ、若し是の菩薩摩訶薩は、能く説の如く行じ、説の如く學し、般若

【三】 空は即ち深奥の處なり。  
 相・無作、乃至實際涅槃等は深奥の義なり。  
 【四】 一切法等も亦深奥の義なり。

波羅蜜(多)の中の如く觀じ、具足し、勤めて精進すれば、一念生ずる時、當に無量無邊阿僧祇の福德を得べし。是の菩薩摩訶薩は無量劫を超越して、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。何に況んや、當に般若波羅蜜(多)を行じ、應に阿耨多羅三藐三菩提に應ずる念あるをや。須菩提よ、(五)譬へば、嫉妬多き人と端正淨潔の女人、共に期するが如し。此の女人、限礙有りて、時に往くことを得ずば、須菩提の意に於いて云何、是の人の念する所は何處に在りと爲すや」と。世尊よ、是の人の念は常に彼の女人の所に在つて、恆に是の念憶想を作さん。當に來つて與共に坐臥し、歡樂すべしと憶想す」と。「須菩提よ、是の人は一日一夜に幾く念有つて生ずと爲すや」と。須菩提言さく、「世尊よ、是の人は一日一夜に其の念甚だ多し」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を念することは、般若波羅蜜(多)の中に説くが如し。是の道を行じ、一念の頃に劫數を超越するも亦彼の人の一日一夜の心念の數の如し。是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、業罪を遠離す。所謂る、阿耨多羅三藐三菩提の罪を離る。(六)是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行じ、一日に得る所の善根功德は、假令如恆河沙等の三千大千世界の中に滿つるも、功德猶ほ亦減ぜず。餘殘の功德に於いて、百分する一分にも及ばず、千分・千億萬分、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。」

釋して曰く、須菩提は阿鞞跋致の相を聞く時、具に阿鞞跋致の功德を聞き、心大に歡喜し、阿鞞跋致の功德を讚歎するが故に、佛に白して言さく、「世尊よ、阿鞞跋致は大功德を成就し、無量無邊の功德を成就す」と。佛は其の讚する所を可とし、更に自ら大功德等の因縁を説きたまへり。「所

【五】多嫉の人は、女を憶念して、一日事を緣じて一切を超越す、菩薩は説の如く行ぜば、一念の頃に多劫を超越す。  
 【六】一日般若を行する功德は如恆河沙等の世界に滿つるも猶ほ減ぜず。

謂、阿鞞跋致の菩薩は、無量無邊の智慧を得、聲聞辟支佛と共に共ならず。行者は要らず先づ知り、而して後に行じ、行じ已つて其の功德を受く。是を以ての故に、功德の因縁を説くことは、智慧の無量無邊なるに由る」と。智慧とは、所謂般若波羅蜜(多)なり。菩薩は是の般若波羅蜜(多)の中に住し、能く四無礙智を生ず。一切法の實義中に、智慧無礙無障なれば、既に義無礙なることを知る。已に種種に諸法の名字を分別し、爲に義を説くが故に、是を法無礙と名け、是の名字は要らず語言に由る。語言に由るが故に是の種種の名字を出す。是れ名字無礙なり。是の法無礙及び辭無礙を得るが故に、便ち諸法の實義を樂説す。是を樂説無礙と名く。菩薩は四無礙の中に安住し、一切衆生の問難するも能く窮盡すること無く、大海水の傾竭すべからざるが如し。須菩提は、佛の上の二品の中に、阿鞞跋致の具足の相を説きたまへるを聞き、此の品に入れり。佛は方に四無礙門を開き、更に阿鞞跋致の相を説かんと欲したまふ。是の故に、須菩提は佛を讚すらく、「世尊よ智慧無量無邊なり、阿鞞跋致の功德も亦無量無邊なり」と。佛の言はく、「若し恆河沙等の劫に樂説すとも亦盡くすべからず、阿鞞跋致の相貌も亦盡くすべからず」と。「世尊よ、何等か是れ阿鞞跋致の深奥處にして、阿鞞跋致の菩薩は、是の深奥處に住し、能く六波羅蜜(多)、四念處乃至一切種智を具足するや」と。佛、須菩提を歎じたまはく、「汝は能く阿鞞跋致の菩薩の爲に深奥の義を問へり」と。佛は須菩提に語りたまはく、「空等乃至涅槃、是を深奥と名く」と。

【一七】 四無礙智の義解。

問うて曰く、(一八) 諸有の法は種種細に分別するに、入解せざるが故に深有り。空・無所有は何を以てか深と爲すや。答へて曰く、直に口に名字を説くに非ざるが故なり。空とは、分別して諸有の相を解するに、内に我有るを見ず、外に定實の法を見ず、是の空を得已つて一切の法相を觀するに、皆是れ虚誑にして、諸の過罪有り。若し諸相を滅すれば、更に願つて三界に生ずることを作さず。此の空は是れ得道の空にして、但口に説くのみならず、是の故に深と言ふ。

復次に、空も亦復空なり。若し是の空に著すれば、則ち過失有り、是を深と名けず。若し空は邪見の有を破するに従ふが故に出づ、是を深と爲す。若し空中に於いても亦空に著せざるが故に亦深なり。

復次に、五衆の生滅を觀じて常顛倒を破し、畢竟空を觀じて生滅を破す。

【一八】 第三問、空無所有を以て深奥となす理由如何。  
【一九】 二種の無生滅。

何となれば、空中には無常無く、生滅無ければなり。(二〇) 生滅無きに二種有り。一には邪見の人の謂く、「世間は常に有なるが故に生滅無し」と。二には生滅を破するが故に、生滅無しと言ふ。此のうちには、生滅を破して、亦是の不生不滅に著せざるが故に、名けて深と爲す。諸の煩惱は除き難きが故に、離欲の寂滅を言ふが故に深なり。錯誤は易く、眞實は難きが故に、如法性・實際を深涅槃と爲す。諸の梵天等の九十六種の(外)道の及ぶと能はざる所なるが故に深なり。復次に涅槃の中に、一切の得道の人の入る者は、永く復出でざるが故に深なり。



問うて曰く、(四)此の中に空等の法の深きを説けり。是は何等の空なるや。答へて曰く、有人の言はく、「三三昧・空・無相・無作の心數法を名けて空と爲す。空なるが故に能く諸法の空を觀す」と。有人の言はく、「外に縁する所の色等の諸法は皆空なり。外空を縁するが故に名けて空三昧と爲す」と。此の中に佛説きたまはく、「空三昧を以ての故に空ならず、亦縁する所の外色等の諸法を以ての故に空ならず。何となれば、若し外法は實に空ならざればなり。三昧力を以ての故に空なりとは、是れ虚誑不實なり。若し外空を縁するが故に三昧を生ずとは、是も亦然らず。何となれば、若し色等の法は實に是れ空相ならば、則ち空三昧を生ずること能はず。若し空三昧を生ぜば、則ち是れ空に非ず。此の中に説く、「是の二邊を離れて中道を説く」と。所謂諸法は因縁和合の生なり。是の和合の法は一定の法有ること無きが故に空なり。何となれば、因縁生の法は自性無く、自性無きが故に、即ち是れ畢竟空なればなり。是の畢竟空は、本より已來空にして、佛の所作に非ず、亦餘人の所作に非ず。諸佛は衆生を度すべき爲の故に、是の畢竟空相を説きたまへり。是の空相は、是れ一切諸法の實體にして、内外に因らず。是の空相あれば、種種の名字有り。所謂、無相・無作・寂滅・離・涅槃等なり。須菩提は諸の菩薩の利根なるも、深く涅槃に著することを知り、是の菩薩の爲の故に問ふ、「世尊よ、但涅槃のみ甚深にして、諸法は甚深ならざるや」と。佛答へたまはく、「正しく色等の諸法を觀じて涅槃を得、色等の諸法は涅槃に因

【三】第四問、此の中に空等の法の深きを説けり、是れ何等の空なるか。

るが故に甚深なり」と。是の故に經中に説けり、「色等の如の故に甚深なり。色等の如は即ち是れ正觀なり」と。須菩提問ふ、「云何が色等の如の故に甚深なりや」と。此の中に佛は自ら深の因縁を説きたまはく、「所謂る、如は是れ色に非ず、色を離るるに非ず。譬へば、泥を以て瓶を爲らんに、泥は是れ瓶に非ず、泥を離れて瓶有るに非ず、亦瓶無しと言ふことを得ざるが如し」と。須菩提は是の因縁もて、法の甚深なること、大海の底有ること無きが如きを知るが故に讚じて言はく、「世尊よ、佛は微妙の方便力を以ての故に、菩薩をして色等の諸法を離れて涅槃に處し、亦涅槃にも著せず、亦世間にも著せざらしめたまふ。是れ微妙の方便なり」と。佛は其の所説を可とし、菩薩の諸法實相を行ずる果報福德を讚歎し、須菩提に告げたまはく、「是の如し。甚深の法は般若と相應し、觀察籌量等の一念生ずる時、無量無邊阿僧祇の福德を得」と。

問うて曰く、二乗の無漏法すら尚果報福德無し。何に況んや、大乘の畢竟空の觀法もて無量の福德を得んや、而も福德は大慈悲より衆生を愍むが故に生じ、罪も亦た衆生を惱害するに由るが故に得るが如し。答へて曰く、二乗の無漏心の中には煩惱盡るが故に、果報福德無し。菩薩は煩惱未だ盡きざるが故に應に福德果報有るべし。復次に、二乗は實際に於いて證するが故に、諸の功德を燒盡す。

【二】 泥を離れて瓶なく、瓶を離れて泥なし。如を離れて色なく色を離れて如なし。

【三】 第五問、二種の無漏法すら尚ほ果報福德なし、云何ぞ大乘の畢竟空の觀法もて、無量の福德を得んや。

菩薩は證せずして更に生有るが故に便ち福德有り。

復次に、人は實事に於いて錯謬するが故に、福德少く、正しく實事を行するが故に、福を得ること多し。畜生に施すが如きは、百倍の施を得、悪人は千倍の施を得、善人は十萬倍の施を得、離欲の人は十億萬倍の施を得、須陀洹等の諸の聖人は無量の福を得。凡夫の人は欲を離れ、慈悲心を行すと雖も、實の法相を得ざるが故に、無量の福田と作ることを得ず。須陀洹は未だ欲を離れずと雖も、諸法實相を分別するが故に、福德無量なり。諸法實相は深淺有ることを得。是の故に、菩薩は深く實相に入るが故に、一念の中の福德無量無邊なり。此の中に、念念の福德多きが故に譬喩を説く。衆生の心は念念に生滅すと雖も、但相續して生ずるが故に隨つて滅することを覺せず。姪欲の人は心に深く著し、欲する所に情を遂げざるが故に心に憶念を生じ、相を取りて種種に來らざる因縁の事、所謂彼の女は心に自ら悔ゆるが爲に來らず、人に遮られて來らずと分別す。是の如き等の多くの覺觀の心を生ず。是の心は覺知し易きが故に、以て譬喩と爲す。是の如きの念もて、一日に事を録すること一劫に超えたり。人濡薬を服すれば、一歳にして乃ち病を差し、大力の薬を服すれば、一日にして能く差ゆるが如し。菩薩も亦是の如く、五波羅蜜多を行じ、久久しうして乃ち佛と成る者有り、般若波羅蜜多を行じて、疾かに佛と成ることを得る者有り。

復次に、一日般若波羅蜜多を行する功德は、假令形有り取つて、如恆河沙等の三千大千世界に滿

つるも、一日の中に於ける正功德の體は猶ほ故らに滅せず。此の福德に於いて百分の一に及ばず、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。

經

「復次に、(三三) 須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を遠離し、如恆河沙等の劫に、三寶(即ち)佛寶・法寶・比丘僧寶に布施せんに、須菩提よ、汝が意に於いて云何、是の菩薩摩訶薩は、是の因縁を以ての故に、福を得ること多きや不や」と。須菩提言さく、「世尊よ、甚だ多し、無量無邊阿僧祇なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜(多)の中に、一日、説の如く修行して福を得ること多きには如かず。何となれば、般若波羅蜜(多)は、是れ諸の菩薩摩訶薩の道なり、是の道に乗じて疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。須菩提よ、若し菩薩は般若波羅蜜(多)を遠離し、如恆河沙の劫に須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛及び諸佛を供養せんに、須菩提の意に於いて云何、是の菩薩摩訶薩は是の因縁を以ての故に、福を得ると多きや不や」と。須菩提言さく、「世尊よ、甚だ多し」と。佛の言はく、「不なり。是の如き菩薩摩訶薩の深般若波羅蜜(多)を説の如く修行すること一日にして、福を得ること多きに如かず。何となれば、菩薩摩訶薩、是の般若波羅蜜(多)を行ぜば、一切の聲聞辟支佛地を過ぎ、菩薩位に入り、漸漸に阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。」

【三三】 更に般若を離るる功德と般若相應の功德とを比較し、般若を遠離すべからざるを明す。

須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を遠離し、如恆河沙の劫に、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を行ぜば、汝の意に於いて云何、是の人ば、是の因縁を以ての故に、福を得ること多きや不や」と。須菩提言さく、「世尊よ、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、説の如く一日、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修行して福を

得ること多きに如かず。何となれば、須菩提よ、般若波羅蜜多是是れ菩薩摩訶薩の尊なるが故に、是の般若波羅蜜多には能く諸の菩薩摩訶薩を生じ、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多の中に住して能く一切の佛法を具足すべしなり。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は般若波羅蜜多を遠離し、如恒河沙の時壽に法施を行ぜし、須菩提よ、汝が意に於いて云何、是の人に福を得ること多きや不わしと。須菩提言はく、甚だ多し、世尊よと。佛の言はく、是の善男子善女人は深般若波羅蜜多を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に般若波羅蜜多を遠離すべからず。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、如恒河沙の時般若波羅蜜多を遠離し、四念處乃至八聖道分、內空、乃至一切種智を修行せんに、須菩提よ、汝が意に於いて云何、是の善男子善女人は福を得ること多きや不わしと。須菩提言はく、甚だ多しと。佛の言はく、是の善男子善女人は深般若波羅蜜多を脱の如く修行し、一日四念處乃至一切種智を修行して、福を得ること多きには如かず。何となれば、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を遠離して、薩婆若に於いて離する者は、是の福有ること無し。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜多を遠離して、薩婆若に於いて離する者は、是の福有ること無し。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、當に應に般若波羅蜜多を行はば遠離すべからず。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜多を遠離し、如恒河沙の時壽の所施の佛法は施及の福定の福倍も阿耨多羅三藐三菩提に趣向せば、汝が意に於いて云何、是の人に福を得ること多きや不わしと。須菩提言はく、世尊よ、甚だ多し、甚だ多しと。佛の言はく、是の善男子善女人は深般若波羅蜜多を脱の如く修行し、乃至一日の所施の佛法・福定の福倍も、阿耨多羅三藐三菩提に趣向して福を得ること多きには如かず。何となれば是の第一の趣向は所謂般若波羅蜜多の趣向なり。若し般若波羅蜜多



邊とは諸法の邊の邊べからざるなり」と。

須菩提言さく、「世尊よ、頗る色も亦無數・無量・無邊なるあり。頗る受想行識も亦無數・無量・無邊なるあり」と。「須菩提

よ、因縁有れば色も亦無數無量無邊なり。受想行識も亦無數・無量・無邊なり」と。「世尊よ、何等の因縁の故に、色も亦無數

無量無邊、受想行識も亦無數無量無邊なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色は空なるが故に無數無量無邊なり。受想

行識は空なるが故に無數無量無邊なり」と。「世尊よ、但色は空、受想行識は空なるのみにして、一切法は空に非ざるや」と。

「須菩提よ、我は一切法の空を説かざるか」と。須菩提言さく、「世尊は一切法の空を説きたまふ。世尊よ、諸法空なれば、

即ち是れ説すべからず、數有ること無く、無量無邊なり。世尊よ、空中には數は得べからず、量は得べからず、邊は得べか

らず。是を以ての故に、世尊よ、是の不可盡・無數・無量・無邊の義は異なること有ること無し」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。是の法の義は別異有ること無し。須菩提よ、是の法は説くべからず、

佛は方便力を以ての故に分別して説く。所謂る不可盡・無數・無量・無邊・無著・空・無相・無作・無起・無生・無滅・無染・涅槃なり

と。佛は種種の因縁もて、方便力を以て説くと。須菩提、佛に白して言さく、「希有なり、世尊よ、諸法の實相は説くべか

らず、而も佛は方便力を以ての故に説きたまふ。世尊よ、我が佛の所説の義を解するが如くんば、一切法も亦説くべから

ず」と。

佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、一切法は説くべからず、一切法の不可説相、即ち是れ空なり。是の空は

説くべからず」と。「世尊よ、不可説の義に増あり、減ありや不や」と。「須菩提よ、不可説の義には増無く、減無し」と。「世尊

よ、若し不可説の義に増無く減無くんば、檀(那)波羅蜜(多)にも亦當に増無く減無かるべく、乃至般若波羅蜜(多)も亦當に

増無く減無かるべく、四念處乃至八聖道分も亦當に増無く減無かるべく、四禪・四無量心・四無色・五神通・八背捨・八勝處・九

大第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法も亦當に増無く減無かるべし。世尊よ、若し菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を増さず、乃至十八不共法を増さずんば、云何が菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得んや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、不可説の義には増無く減無し。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を修行し、方便力有るが故に、是の念を作さず、我は般若波羅蜜(多)を増し、乃至檀(那)波羅蜜(多)を増すと。當に是の念を作すべし、但名字の故に檀(那)波羅蜜(多)と名くと。是の菩薩摩訶薩は檀(那)波羅蜜(多)を行する時、是の心、及び善根を阿耨多羅三藐三菩提の相の如く廻向し、乃至般若波羅蜜(多)を行する時、是の心及び善根を阿耨多羅三藐三菩提の相の如く廻向す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ阿耨多羅三藐三菩提なるや」と。佛の言はく、「一切法の如相は是を阿耨多羅三藐三菩提と名くと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ一切法の如相は是れ阿耨多羅三藐三菩提なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色の如相受想行識の如相、乃至涅槃の如相は、是れ阿耨多羅三藐三菩提にして、是の如相も亦増さず減らず。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を離れず、常に是の如法を觀じ、増有り減有るを見ず。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、不可説の義に増無く減無く、積波羅蜜(多)も亦増さず減らず。乃至十八不共法も亦増さず減らず。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の不増不減の法を以ての故に、應に般若波羅蜜(多)を行すべし」と。

【一〇】般若を離れて、如恆河沙劫に三寶を供養するは、一日般若を行するに如かず。

論

釋して曰く、「一〇」般若波羅蜜(多)を離れて、恆河沙劫に三寶を供養するは、一日般若を行するに

及ばず。又復、人有り、壽・如恆河沙等の劫に住し、須陀洹等を供養するも、亦一日般若を行するに及ばず。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「菩薩は般若を行じ、二地を過ぎて、菩薩位に入り、



無上道を行すしと。

又復、(三五) 般若を遠離し、恆河沙等の劫に、布施等の六法を行するも、亦一日所説の如く般若中に住し、布施等の六法を行するには及ばず。是の中に勝る因縁を説く、「般若は是れ諸佛の母にして、是の般若の中に住すれば、能く諸の佛法を具足す」と。(三六) 若し般若を遠離して、如恆河沙等の劫に法施を行するは、一日般若の中に住して法施を行するには及ばず。

復次に、般若を遠離し、聲聞辟支佛を用ひ、四念處を修行すること、如恆河沙等の劫なるも、一日所説の如く、般若の中に住し、四念處、乃至一切種智を修するには如かず。此の中に自ら勝れる因縁を説く。所謂般若を離れずして、薩婆若に於いて轉ずとは、是の處有ること無し。

復次に、(三七) 菩薩は般若を離れ、如恆河沙等の劫に、財施・法施・禪定もて福德を生じ、無上道に廻向するは、一日般若に應じ、財施・法施・禪定もて福德を生じ、無上道に廻向するには如かず。何となれば、般若波羅蜜(多)には難毒無く、正廻向なるが故なり。

復次に、若し菩薩は般若を離れて、壽、如恆河沙劫等にして、十方三世諸佛の功德を隨喜して、無上道に廻向するは、一日、般若に應じて隨喜し廻向するには如かず。爾の時に、須菩提、佛を難より

【五】 般若を離れて、如恆河沙劫に六度を行するは、一日般若を行するに如かず。  
【六】 般若を離れて、如恆河沙劫に法施を行するは、一日般若を行するに如かず。  
【七】 般若を離れて、如恆河沙劫の財施、法施、禪定の福德を無上道に廻向するは、一日般若を行するに如かず。

く、「佛の説きたまふが如くんば、「一切の有爲法は虚誑不實にして、幻の如く、正見を生じて正位に入るに能はず」。云何が菩薩の一日の福德は勝るや」と。佛は其の言を可としたまはく、「是の如し、是の如し。有爲法は皆虚誑にして得ず、虚誑法を以て正位に入り、聖道を得」と。菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行する時、所作の福德の皆虚誑にして、堅固なること無きことを知り、心、是の福德に著せず、是の福德は清淨なるが故に餘の福德に勝る。金剛は小なりと雖も、能く大山を摧破するが如し。佛説きたまはく、「菩薩は善く巧に十八空を學し、空を觀すと雖も、而も能く諸の功德を行す」と。涅槃の無上道を知ると雖も、而も衆生を憐愍するが故に福德を修集し、一切法相の説くべからざることを知ると雖も、而も衆生の爲に種種に方便もて法を説き、法性の中に分別有ること無く、一相・無相なることを知ると雖も、而も衆生の爲に、是れ善、是れ不善、是は行すべく、是は行すべからず、是は取り、是は捨て、是は利にして、是は失なり等と分別す。若し菩薩は畢竟空を觀すと雖も而も能く諸の福德を起さば、是を般若波羅蜜〔多〕を離れざるの行と名く。若し菩薩は常に般若波羅蜜〔多〕を離れざれば、漸く無量無邊の功德を得。何となれば、若し菩薩、初めて般若を學する時は、煩惱の力強くして、般若の力弱く、漸漸に般若の力を得て、諸の煩惱を斷じ、諸の戲論を滅す。是の故に、福德を得ること無量無邊無量無邊なり。無量・無邊の義は、佛自ら分別して説きたまへり。所謂の無量とは、若くは有爲性中、若くは無爲性中

【六】 無量・無數・無邊の義解。

二〇二 無量・無

に墮せず。三世の量は得べからざるが故に無量と名け、十方の邊も亦得べからざるが故に無邊と名く。須菩提、佛に問ふ、「五衆は頗る因縁ありて亦無數無量無邊なりや」と。佛答へたまはく、「五衆は空なるを以ての故に亦無數無量無邊なり」と。須菩提問ふ、「世尊よ、但五衆のみ空にして、一切法は空に非ざるや」と。佛答へたまはく、「一切法は空なり」と。須菩提言さく、「是の空法は即ち盡すべからず。盡すべからざるが故に即ち是れ無數なり、無數なれば即ち是れ無量なり、無量なれば即ち是れ無邊なり。是の故に、空中には盡すことは得べからざるが故に無盡と名け、數得べからざるが故に無數と名け、量得べからざるが故に無量と名け、邊得べからざるが故に無邊と名け、四事は名は異なり」と名け、義は是れ一にして所謂畢竟空なり」と。佛は其の言を可として、「是の如し」と宣へり。更に自ら因縁を説きたまはく、「須菩提よ、是の空の法相は説くべからず。若し説くべからざれば名けて空と爲さず」と。佛は大慈悲心を以て衆生を憐愍したまふが故に、方便して爲に説き、強ひて名字語言を作し、衆生をして解を得せしむ、所謂空なり。或は不可盡・無數・無量・無邊等を説き、是の實相は不生・不作なるが故に不盡と説き、諸の聖人は諸法實相を得て無餘涅槃に入る時、六道の數に墮せず。是の實相の法も亦有爲無爲等の諸法の數中に墮せず。是の故に無數量の名を説く。智慧を以て好醜多少・大小・是非等を稱量し、諸法實相中には諸相を滅するが故に、是の故に無量と説き、諸法實相は量るべからざるが故に、無邊と説き、是の實相法は寂滅なるが故に無著と説き、是の實相法に我・我所の

定相は得べからざるが故に空と説く。空の故に無相なり、無相なれば則ち無作無起なり。是の法は常住にして壞せざるが故に無生無滅なり。是の法は能く三界の染を斷ずるが故に無染と名け、更に煩惱業を織らざるが故に涅槃と名け、是の如き等無量の名字有りて、種種の因縁もて是の諸法實相を説く。爾の時に、須菩提、佛に白さく、「希有なり、世尊よ、諸法實相は説くべからずと雖も、而も佛は方便力を以て説きたまふ。我が佛の義を解するが如くんば、但實相のみ説くべからざるに非ず。一切諸法も亦説くべからず」と。佛、其の言を可とし、而して因縁を説きたまはく、「一切法は終に空に歸す、空に歸するが故に説くべからず。説くべからざるの義は即ち是れ増無く減無きなり」と。「若し一切法に増無く減無くんば、六波羅蜜〔多〕等の諸の善法も亦増無く減無く、若し六波羅蜜〔多〕の善法は増さずんば、云何が無上道を得ん」と。佛は其の言を可とし、更に爲に因縁を説きたまはく、「法には増減無しと雖も、而も無上道を得べし。所謂菩薩は般若波羅蜜〔多〕の方便力を習行するが故に、檀〔那〕波羅蜜〔多〕を行すと雖も、諸の助道法もて我我所の憍慢を斷ずるが故に、是の念を作さず、我は是の六波羅蜜〔多〕等の法を増長すと。内外諸法の相を取らず、是の諸の善法を行すること無上道の相の如く廻向す」と。須菩提問ふ、「何等か是れ無上道なりや」と。佛答へたまはく、「諸法の如は即ち是れ無上道なり」と。須菩提問ふ、「何等か是れ一切法なりや」と。佛答へたまはく、「色等の法乃至涅槃は、是れ諸法の如寂滅の相にして、是れ無上道なり」と。寂滅とは、増さず、減らず、高からず、

下からず、諸の煩惱・戲論を滅し、動せず、壞せず、障礙する所無し。菩薩は般若波羅蜜(多)の方便力を以ての故に、亦能く布施等をして如寂滅の相ならしむ。是の如き種種の因縁もて無上道の相を説く。若し菩薩は常に無上道の寂滅の相を念じ、一切法をして皆同じく寂滅の相に同せしむ。亦不可説の義、所謂不増不減の相を觀す。菩薩は是の如く疾かに無上道を得。「ことば」不増不減不可得なるを以ての故なり。

# 卷の第七十五

## 燈喻品第五十七の下を釋す。

經

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は初心を用て阿耨多羅三藐三菩提を得るや、後心を用て阿耨多羅三藐三菩提を得るや。世尊よ、是の初心は後心に至らず、後心は初心に在らず。世尊よ、是の如く、心心數法は俱ならざれば、云何が善根を増益せん。若し善根増さずんば、云何が當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「我れ當に汝が爲に譬喩を説くべし。智者は譬喩を得れば、則ち義に於いて解し易し。須菩提よ、譬へば、燈を燃やすが如し。初焰を用て炷を燃くと爲すや、後焰を用て炷を燃くと爲すや」と。須菩提言さく、「世尊よ、初焰の炷を燃くと爲す、亦初焰を離るるに非ず。世尊よ、後焰の炷を燃くと爲す、亦後焰を離るるに非ず。須菩提よ、汝が意に於いて云何、炷燃くと爲すや不や」と。「世尊よ、炷は實に燃くと。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は是の如く、初心を用て阿耨多羅三藐三菩提を得ず、亦初心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得ず。而も阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。須菩提よ、是の中に、菩薩摩訶薩は初發意より般若波羅蜜(多)を行じ、十地を具足して阿耨多羅三藐三菩提を得」と。

【一】 續いて般若相應功德成就の疑難を辨す。  
 【二】 菩薩は初心より智度を行じ、乾慧等の十地を具足す。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ十地にして、菩薩は具足し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。

佛の言はく、「菩薩摩訶薩は乾慧地・性地・八人地・見地・薄地・離欲地・已作地・辟支佛地・菩薩地・佛地を具足し、是の地を具足して阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の十地を學し已り、初心に阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ず、亦初心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得ず。後心に阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ず、亦後心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ず、而も阿耨多羅三藐三菩提を得るなり」と。須菩提言さく、世尊よ、是の因縁の法は甚深なり。所謂初心に非ず、初心を離るるに非ず、後心に非ず、後心を離れて阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ず、而も阿耨多羅三藐三菩提を得るなり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、若し心滅し已りて、是の心更に生ずるや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、心生ずるは是れ滅相なりや不や」と。「世尊よ、是れ滅相なり」と。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、心減相は是れ減なりや不や」と。「不なり、世尊よ」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、若し是の心、如如に住せば、當に實際と作すべきや不や」と。「不なり、世尊よ」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、是の如きは甚深なりや不や」と。「世尊よ、甚深なり、甚深なり」と。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、但如のみ是れ心なりや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「如を離れて是れ心なりや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、汝が意に於いて云如、如は如を見るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く行せば、深般若波羅蜜(多)を行すと爲す」と。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、菩薩摩訶薩の是の如く行するは、是れ何處に行するや」と。須菩提言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、是の如く行せば、無處所にして行すと爲す。何となれば、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行じ、諸法如中に住せば、是の如きの念なく、

念者もなければなり」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、是の如く行せば、何處の行と爲すや」と。須菩提言さく、「世尊よ、是の菩薩摩訶薩、是の如く行せば、第一義中の行と爲す。」「(そは)二相は得べからざればなり」と。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、若し菩薩は第一義無念の中に行せば、行相と爲すや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「汝が意に於いて云何、是の菩薩摩訶薩は壞相なりや不や」と。「不なり、世尊よ」と。佛、須菩提に告げたまはく、「云何が不壞相と名くるや」と。須菩提言さく、「世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、是の念を作さず、我れ當に諸法の相を壞すべし」と。世尊よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、未だ佛の十力、四無所畏、四無礙智・大慈大悲・十八不共法を具足せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ず。世尊よ、菩薩摩訶薩は方便力を以ての故に、諸法に於いて亦相を取らず、亦相を壞せず。何となれば、世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、一切諸法の自相空を知ればなり。菩薩摩訶薩は是の自相空の中に住し、衆生の爲の故に三三昧に入り、三三昧を用て衆生を成就す」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は三三昧に入りて、衆生を成就するや」と。佛の言はく、「菩薩は是の三三昧に住し、衆生の作法中の行を見、菩薩は方便力を以て、教へて無作を得せしめ、衆生の我相の中の行を見、方便力を以て、教へて空を行ぜしめ、衆生の一切相中の行を見、方便力を以ての故に、教へて無相を行ぜしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて、三三昧に入り、三三昧を以て衆生を成就す」と。

論

須菩提は佛に、「初心を以て無上道を得るや、後心を以て得と爲すや」と問へり。

問うて曰く、須菩提は何の因縁の故に、是の難問を作せしか。答へて曰く、須菩提は上に諸法の

【三】 第一問、須菩提が是の問難をなせし理由如何。



不増不減なることを聞き、心に自ら疑を生ずらく、「若し諸法は不増不減ならば、云何が無上道を  
得べきや」と。

復次に、「若し如實の正行を以て無上道を得るは、唯佛のみ能く爾なり。菩薩は未だ無明等の煩惱を  
斷せず。云何が能く如實に正行せん」と。

復次に、須菩提は此の中に、自ら難問の因縁を説けり。「所謂初心は後心に至らず、後心は初心に  
在らず。云何が善根を増益して無上道を得ん」と。是の如き等の因縁の故に是の間を作せり、「初心を  
以て得るや、後心を以て得るや」と。佛は深因縁の法を以て答へたまはく、「所謂但初心のみを以て得ず、  
亦初心を離れても得ず。何となれば、若し但初心を以て得、後心を以てせずんば、菩薩は初發心に便  
ち應に是れ佛なるべし。若し初心無ければ、云何が第二第三心有らん。第二第三心は初心を以て根本  
の因縁と爲す。亦但後心のみならず、亦後心をも離れずんば、是の後心は亦初心を離れず。若し初心  
を離るれば則ち後心無し。初心に種種無量の功德を集め、後心に則ち具足す。具足するが故に能く煩  
惱の習を斷じ、無上道を得。須菩提は此の中に自ら難問の因縁を説けり、「初と後との心心數法は  
俱ならず」と。俱ならずとは、則ち過去は已に滅して和合することを得ず。若し和合すること無く  
ば、則ち善根集らず、善根集らずんば、云何が無上道を成せん。佛は現事の譬喩を以て答へたまは  
く、「燈炷は獨り初焰のみ燦くに非ず、亦初焰を離れず。獨り後焰のみ燦くに非ず、亦後焰を離れず、

而も燈炷は焦く」と。佛は須菩提に語りたまはく、「汝は目に炷の焦くるを見るに、初に非ず、後に非

ず、而も炷は焦く。我も亦佛眼を以て菩薩の無上道を得るを見るに、初心を以て得ず、亦初心を離れ

ず。亦後心を以て得ず、亦後心を離れず、而も無上道を得るなり」と。燈を菩薩道に譬へ、炷を無明

等の煩惱に喩へ、焰は初地相應の智慧乃至金剛三昧相應の智慧の如し。無明等の煩惱の炷を焦くも、

亦初心智の焰に非ず、亦後心智の焰に非ず、而も無明等の煩惱の炷を焦き盡して無上道を成ずることを

得。此の中に佛は更に無上道を得る因縁を説きたまはく、「所謂菩薩は初發心より來た、般若波羅蜜

【多】を行じ、初地乃至十地を具足し、此の十地を皆佐助して無上道を成

ず」と。十地とは乾慧地等なり。乾慧地に二種有り、一には聲聞、二にはは

菩薩なり。聲聞の人は獨り涅槃の爲の故にのみ勤めて精進し、持戒清淨

にして堪任して道を受く。或は佛の三昧を習觀し、或は不淨觀、或は慈悲

無常等の觀を行じ、分別して諸の善法を集め、不善法を捨て、智慧有りと雖も、禪定の水を得ざれば

則ち道を得ること能はず、故に乾慧地と名く。菩薩に於いては、則ち初發心より乃ち未だ順忍を得ざ

るに至るまでなり。性地とは、聲聞の人は煖法より乃ち世間第一法に至るまでなり。菩薩に於いて

は順忍を得、諸法實相に愛著するも亦邪見を生ぜず、禪定の水を得。八人地とは、苦法忍より乃ち

道比忍に至るまで、是の十五心なり。菩薩に於いては、則ち是れ無生法忍にして、菩薩の位に入る。

【四】 二種の乾慧地。(一)聲聞、(二)菩薩の義解。

【五】 性地の義解。

【六】 八人地の義解。

見地とは、初めて聖果を得、所謂須陀洹果なり。菩薩に於いては、則ち是れ阿鞞跋致地なり。薄

地とは、或は須陀洹、或は斯陀含なり。欲界九種の煩惱を分斷するが故なり。菩薩に於いては、阿鞞

跋致地を過ぎてより乃ち未だ佛を成ぜざるに至るまでにして、諸の煩惱を斷じ、餘氣も亦薄し。離

欲地とは、欲界等の貪欲、諸の煩惱を離る、是を阿那含と名く。菩薩に於

いては、離欲の因縁の故に五神通を得。已作地とは、聲聞の人は盡智無

生智を得、阿羅漢を得。菩薩に於いては、佛地を成就す。辟支佛地とは、

先世に辟支佛道の因縁を種る、今世に少因縁を得て出家し、亦深因縁の法

を觀じて、道を成ずるを辟支佛と名く。菩薩地とは、乾慧地乃至離欲地

なり。上に説けるが如し。

復次に、菩薩地とは、歡喜地より乃ち法雲地に至るを皆菩薩地と名く。

有人は言ふ、「一たび發心してより來た、乃ち金剛三昧に至るを菩薩地と

名く」と。(三)佛地とは、一切種智等の諸佛の法なり。菩薩は自地の中に具足することを得、地地の中

に於いて具足を觀ず。二事具するが故に具足と名く。

問うて曰く、(四)何を以ての故に、菩薩は辟支佛地に似たりと説かざるや。答へて曰く、餘地には名

字を説かず、辟支佛地は辟支佛の名字を説くが故なり。

【七】 見地の義解。

【八】 薄地の義解。

【九】 離欲地の義解。

【一〇】 已作地の義解。

【一一】 辟支佛地の義解。

【一二】 菩薩地の義解。

【一三】 佛地の義解。

【一四】 第二問、菩薩地は辟支佛

地に似たりと説かざる理由如

何、

復次に、菩薩は能く分別して衆生の、辟支佛の因縁を以て度すべき者を知る。是の故に、菩薩は智慧を以て辟支佛の事を行す。首楞嚴經の中に、(五) 文殊尸利は七十二億反、辟支佛と作ると説くが如し。菩薩も亦是の如く、九地を満足し、佛法を修集す。十力四無所畏等は未だ具足せずと雖も、修習して佛に近くを以ての故に具足と名く。是を以ての故に、十地を具足するが故に無上道を得と言ふ。

是の諸法は皆因縁和合の故に初に非ず、亦初を離れず。後に非ず、亦後を離れず、而も無上道を得。須菩提は是の法を尊重するが故に歎じて言さく、「世尊よ、是の因縁の法は甚深なり。所謂過去の心は滅せず、住せず、而も能く増益して無上道を得。是の事は甚深希有にして、信解すべきこと難し。此の心は住すと爲すや、滅すと爲すや」と。佛反問したまはく、「須菩提よ、

汝が意に於いて云何、若し心滅し已れば、更に生ずるや不や」とは、諸法は畢竟空にして不生不滅なりと雖も、衆生の爲に、六情の見る所の生滅の法を以てするが故に、心は已に滅して更に生ずるや不やを問ふや」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ、何となれば、心滅し已らば、云何が當に更に生ずべけん。若し心滅し已りて更に生せば、則ち常中に墮す」と。

若し心生ずるは是れ滅相なりや不やとは、上には過去の心を問ひ已り、今は現在の心相は當に滅すべきや不やを問ふなり。是の故に答ふ、是れ滅相なりと。何となれば生滅は是れ相待の法にして、生有れば必ず滅有るが故に、先に無うして今有り、已に有にして還た無なるが故なり。心の滅相

【三】 文殊師利、七十二億反、辟支佛と作る。

は是れ滅なりや不<sup>いな</sup>やとは、若<sup>も</sup>し心の滅相<sup>めつさう</sup>は即<sup>すなは</sup>ち是れ滅なりや、更<sup>さら</sup>に滅有りやとなり。答<sup>こた</sup>へて曰<sup>いは</sup>く、「不<sup>いな</sup>なり、世尊<sup>せそん</sup>よ、何<sup>なん</sup>となれば、若<sup>も</sup>し即<sup>すなは</sup>ち是れ滅ならば、則<sup>すなは</sup>ち一心<sup>しん</sup>に兩時<sup>りやうじ</sup>有り、生時<sup>しやうじ</sup>と滅相<sup>めつさう</sup>なり」と。無常<sup>むじやう</sup>を説<sup>と</sup>く者の心<sup>しん</sup>は一念<sup>ねんじ</sup>時<sup>じ</sup>を過<sup>す</sup>ぎず。阿毗曇<sup>あびどん</sup>經<sup>きやう</sup>に説<sup>と</sup>くが如<sup>ごと</sup>きは、「生法<sup>しやうほふ</sup>有り、不生法<sup>ふしじやうほふ</sup>有り、欲生法<sup>よくしやうほふ</sup>有り、不欲生法<sup>ふよくしやうほふ</sup>有り、滅法<sup>めつほふ</sup>有り、不滅法<sup>ふめつほふ</sup>有り、欲滅法<sup>よくめつほふ</sup>有り、不欲滅法<sup>ふよくめつほふ</sup>有り。生法<sup>しやうほふ</sup>は現在<sup>げんざい</sup>の一心<sup>しん</sup>中に二種<sup>しゆあ</sup>有り、一<sup>いち</sup>には生<sup>しやう</sup>、二<sup>に</sup>には欲滅生<sup>よくめつしやう</sup>にして、欲滅相<sup>よくめつさう</sup>に非<sup>あ</sup>ず。欲滅相<sup>よくめつさう</sup>は生<sup>しやう</sup>に非<sup>あ</sup>ず」と。是<sup>こ</sup>の事は然<sup>しか</sup>らざるが故<sup>ゆゑ</sup>に、不<sup>いな</sup>なりと言<sup>い</sup>ふ。當<sup>まさ</sup>に是<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>く住<sup>じやう</sup>すべきや不<sup>いな</sup>やとは、若<sup>も</sup>し滅相<sup>めつさう</sup>は即<sup>すなは</sup>ち是れ滅なりとすんば、應<sup>まさ</sup>に常住<sup>じやうじやう</sup>なるべきや不<sup>いな</sup>や。若<sup>も</sup>し常住<sup>じやうじやう</sup>ならば即<sup>すなは</sup>ち是れ不滅<sup>ふめつ</sup>の相<sup>さう</sup>なり。佛<sup>ほとけ</sup>は是<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>く翻覆<sup>ほんかく</sup>して難<sup>なん</sup>じたまへり。須菩提<sup>しゆぼだい</sup>は理<sup>り</sup>を窮<sup>き</sup>むるが故<sup>ゆゑ</sup>に、是<sup>こ</sup>の念<sup>ねん</sup>を作<sup>な</sup>さく、「我<sup>わ</sup>れ若<sup>も</sup>し滅相<sup>めつさう</sup>は即<sup>すなは</sup>ち是れ滅なりと言<sup>い</sup>はば、則<sup>すなは</sup>ち一心<sup>しん</sup>は二時<sup>にじ</sup>に墮<sup>だ</sup>す。若<sup>も</sup>し不滅<sup>ふめつ</sup>なりと言<sup>い</sup>はば、實<sup>じつ</sup>に是れ滅相<sup>めつさう</sup>なり。云<sup>い</sup>何が不滅<sup>ふめつ</sup>と言<sup>い</sup>はん」と。上<sup>かみ</sup>の二理<sup>にり</sup>は過有<sup>とがあ</sup>るを以<sup>もつ</sup>ての故<sup>ゆゑ</sup>に、須菩提<sup>しゆぼだい</sup>は自<sup>みづか</sup>ら證<sup>しょう</sup>する所<sup>ところ</sup>の智慧<sup>ちゑ</sup>を以<sup>もつ</sup>て答<sup>こた</sup>ふらく、「世尊<sup>せそん</sup>よ、是<sup>こ</sup>の如<sup>ごと</sup>き住<sup>じやう</sup>は如<sup>に</sup>如<sup>に</sup>住<sup>じやう</sup>す」と。若<sup>も</sup>し是<sup>こ</sup>の心<sup>しん</sup>、如<sup>に</sup>如<sup>に</sup>住<sup>じやう</sup>せば、當<sup>まさ</sup>に實際<sup>じつさい</sup>と作<sup>な</sup>すべきや不<sup>いな</sup>やとは、若<sup>も</sup>し心相<sup>しんさう</sup>は同<sup>おな</sup>じく如<sup>に</sup>に住<sup>じやう</sup>すと説<sup>と</sup>かば、如<sup>に</sup>は即<sup>すなは</sup>ち是れ實際<sup>じつさい</sup>なり。若<sup>も</sup>し爾<sup>しか</sup>らば、心<sup>しん</sup>は即<sup>すなは</sup>ち實際<sup>じつさい</sup>と作<sup>な</sup>すべきや不<sup>いな</sup>や。須菩提<sup>しゆぼだい</sup>言<sup>い</sup>さく、「不<sup>いな</sup>なり、世尊<sup>せそん</sup>よ」と。何<sup>なん</sup>となれば、須菩提<sup>しゆぼだい</sup>は久<sup>ひさ</sup>しく是<sup>こ</sup>の實際<sup>じつさい</sup>心<sup>しん</sup>、是<sup>こ</sup>の虚誑<sup>こつじやう</sup>の法<sup>ほふ</sup>を尊重<sup>ぞんじゆう</sup>し、小乘<sup>せうじやう</sup>は智慧<sup>ちゑ</sup>力<sup>りき</sup>少<sup>すく</sup>く、心<sup>しん</sup>を觀<sup>くわん</sup>じて即<sup>すなは</sup>ち實際<sup>じつさい</sup>と作<sup>な</sup>すこと能<sup>あた</sup>はざればなり。是<sup>こ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、不<sup>いな</sup>なりと言<sup>い</sup>へり。

問うて曰く、(二六) 若し須菩提は已に、是の心を如如なりと説かば、何を以てか實際と作すことを得ざるや。答へて曰く、如を一切法の實相心に名け、實相を亦如と名く。須菩提は心に謂へらく、「凡夫の六情の見る所は虚誑顛倒せるが故に過有り。今心相の如實を説くも咎無し」と、故に如如に住すと  
 言へり。今實際は即ち是れ涅槃なり。須菩提は久しく涅槃を貴ぶが故に、即ち心を以て涅槃と爲すと能はず、是の故に不なりと言ふ。

復次に、實際は無相なるを以ての故に、心は即ち是れ實際なりと言ふことを得ず。是の如は甚深なりや不やとは、須菩提は心は如如に住すと云ふも、復た實際と作すことを得ずと言ふを以て、是の故に如は甚深なりや不やと問へり。須菩提は遍く  
 知ること能はざるが故に、答へて甚深なりと言へり。但如のみ是れ心なり

【二六】 第三問、此の心、如如ならば、何故に實際と作すことを得ざるや。

や不やと。須菩提答へて言く、「不なり、世尊よ」と。何となれば、如は是れ一相にして二相ならず。心に憶想分別して因縁生ずるが故に是の二相あり。如には所知無く、心には所知有り。又復た如は畢竟清淨なるが故に所知無く、心は覺知する所有り。故に如を離れたる心も亦是の如し。何となれば、一切法は皆如有り、云何が如を離れて而も心有らん、佛は須菩提に問ひたまはく、「如は能く如を見るや不や」と。答ふらく、「如中には是れ知、是れ可知と分別すること無し。是の菩薩は如・法性・實際に住せず、直に深菩薩道を行す。佛、須菩提に問ひたまはく、「若し是の如く行せば、能く深般若

波羅蜜〔多〕を行ずるや不や」と。須菩提は自ら小乗の淺薄なることを觀じ、大乘法の深なることを觀せるが故に答へて言さく、「是の如く行ずるは是を深般若波羅蜜〔多〕を行すと爲す」と。爾の時に、未だ無生法忍を得ざる菩薩有り、是の法を聞いて則ち心高く、自ら謂へらく、「小乗を出でて深く大乗に入る」と。佛は其の高心を破せんと欲するが故に、須菩提に問ひたまはく、「菩薩の是の如き行は何處の行と爲すや」と。須菩提言さく、「是の如く行ずるは無處の所行と爲す。何となれば、菩薩は如中に住して分別する所無ければなり」と。菩薩は無處の所行を聞いて、或は斷滅の中に墮す。是の故に、佛は復た須菩提に問ひたまはく、「菩薩の般若を行ずるは何處の行と爲すや」と。須菩提言さく、「第一義中の行なり」と。第一義の相には二相有ること無し。佛、須菩提に語りたまはく、「汝が意に於いて云何、若し菩薩は無念にして第一義を行せば、是の行は相を取る法なりや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ。何となれば、一切法は畢竟空にして憶念無く、即ち不行の相なればなり」と。佛、須菩提に問ひたまはく、「是の菩薩の壞相は無相を得るや不や」と。須菩提言さく、「不なり、相は本より已來無なり。但顛倒を除く爲の故に不壞法相なり」と。佛、須菩提に語りたまはく、「若し不壞の相ならば、云何が無相の行を行するや」と。須菩提言さく、「世尊よ、菩薩は是の念を作さず、我は當に相を破すべきが故に般若を行す」と。是の菩薩は未だ佛の十力等の諸の佛法を具足せず。方便力を以ての故に有相を作さず、無相を作さず。何となれば、若し相を取れば、是の相は皆虛誑妄語にして諸

の過失多し。若し相を破すれば則ち斷滅中に墮して亦過失多し。是の故に有相を取らず、無相を取らず。相を取るは即ち是れ有法、相を取らざるは即ち是れ無法なり。方便力の故に、是の有無の二邊を離れて中道を行す。此の中に、佛は自ら因縁を説きたまふ、「所謂一切法の自性空を知るが故に有無に著せず」と。自相空は一切の法相を破し、亦自ら其の相を破す。菩薩は是の自相空の中に住し、三三昧を起し、衆生を利益す。衆生は六道の中に於いて、種種に願を作して身を愛く。有人は心を攝せず、福を修すること能はず、自ら放恣にして意に隨つて業を造り、若くは地獄に入らず、冷風逼切すれば、則ち願つて火を得んと欲し、便ち地獄等の三惡道に入り、若くは人と爲りて貧窮下賤を得。有人は心を攝して能く慳貪を折伏し、布施持戒等の善行を行す。是の人は欲界人天中の富樂の處に生ず。有人は欲界を離れ、五蓋を除き、信等の五根に因りて、五支等の諸禪を得、則ち色界に生ず。有人は諸の色相を捨て、有對の相を滅し、雜相を念せざるが故に、無邊虛空處無色定等に入る。是の諸の所作は皆是れ邪願なり。何となれば、久久しくして皆當に破壞墮落すべければなり。譬へば繩を以て鳥を繋ぐに、繩盡れば、復た還るが如し。菩薩は是の無作三昧を以て衆生の作願を斷ず。

又復、是の身は皆空なり、但筋骨五藏・血塗のみ有り。皮裏に不淨充滿し、風は心の動作に隨ふ。是の心は、生滅して住せず、幻の如く、化の如く、定實の相無し。衆生は是の來去・語言の諸相を見る

【七】 死に臨む時、冷風逼切すれば火を得んと欲して三途に墮す。



が故に謂へらく、「人有り、我有り、我所有り」と。顛倒の心を起す。但憶想分別するが故に是の錯謬有り。菩薩は空三昧を以て、衆生の我我所の心を斷じ、空中に住せしむ。

又復、衆生は、諸の男女・色・聲・香味・好醜・脩短の相を取る。相を取るを以ての故に種種の煩惱を生じ、諸の憂苦を受く。菩薩は是の無相三昧を以て、衆生の諸相を斷じ、無相に住せしむ。

問うて曰く、若し衆生を教化して空を得せしむれば便ち足る、何ぞ無相無作三昧を用ゐんや。答へて曰く、衆生の根に利鈍あり、利根なる者は空を聞けば、即ち無相無作を得、鈍根なる者は空を聞き、諸法を破すれば、即ち空相を取る、是の故に無相を説く。若し人、空無相を知ると雖も、是の智慧に因りて更に身を作さんと欲す。是の有爲法には種種の過患有り、是の故に身を作すべからず。經に説くが如くんば、菩薩身を離れて、餘身は彈指の頃も樂しむべからず、何に況んや久しく住するをや、是の故に無作を説く。是の故に、具に三三昧を説き、衆生を教化す。

(二五) 夢中入三昧品第五十八を釋す。

【二八】 第四問、衆生を教化して空を得せしむれば便ち足る、何ぞ無相無作三昧を用ゐんや。  
【二九】 此の品には、初段に前品の三三昧に就て、夢中所行の益あるを論じ、後段には成就衆生の行願を叙す。他本には、夢入三昧品、又は夢行品に作る。



爾の時に、舍利弗、須菩提に問ふ、「若し菩薩摩訶薩、夢中に三三昧・空相無作三昧に入れば、寧ろ般若波羅蜜(多)を益すること有りや不や」と。須菩提、舍利弗に報すらく、「若し菩薩、晝日に三三昧に入らば、般若波羅蜜(多)を益すること有り。夜、夢中も亦當に益あるべし。何となれば、晝夜夢中等しくして異なること無ければなり。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩、晝日に般若波羅蜜(多)を行じて、益すること有らば、是の菩薩は、夢中に般若波羅蜜(多)を行するも亦應に益有るべし」と。

舍利弗、須菩提に問ふ、「菩薩摩訶薩の若し夢中に作す所の業は、是の業に集成有りや不や。佛の説きたまふが如くんば、一切法は夢の如し、是を以ての故に集成すべからず。何となれば、夢中には法の集成あること無ければなりと。若し覺むる時は憶想分別して應に集成有るべし」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「若し人、夢中に衆生を殺さば、覺め已りて憶念し相を取りて、我れ殺せり、是れ快なりと分別せんや。舍利弗よ、是の事云何」と。舍利弗言はく、「縁無ければ業生せず、縁無ければ思生せず、縁有れば業生じ、縁有れば思生す」と。「舍利弗よ、是の如し、是の如し、縁無ければ業生せず、縁無ければ思生せず、縁有れば業生じ、縁有れば思生す。見聞覺知の法中に於いて心生じ、見聞覺知せざる法中より心生せず。是の心の心に淨なる有り、垢なる有り。是を以ての故に、舍利弗よ、有縁の故に業生じ、無縁より生ぜず。有縁の故に思生じ、無縁より生ぜず」と。

舍利弗、須菩提に語るらく、「佛の説きたまふが如くんば、一切の諸業・諸思は自相を離る。云何が有縁の故に業生じ、無縁より生ぜず、有縁の故に思生じ、無縁より思生ぜずと言ふや」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「相を取るが故に有縁より業生じ、無縁より生ぜず。相を取るが故に、有縁より思生じ、無縁より生ぜず」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「若し菩薩摩訶薩は、夢中に布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修し、是の善根福德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、是れ實の廻向なりや不や」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「彌勒菩薩、今現に前に在す、佛不退轉の記を授け當に作佛すべし」と。當に彌

勸に問ふべし。彌勒當に答ふべしと。

舍利弗、彌勒菩薩に白さく、「須菩提の言はく、彌勒菩薩は今現に前に在し、佛不退轉の記を授け、當に作佛すべし。彌勒當に答ふべし」と。彌勒菩薩、舍利弗に語るらく、「當に彌勒の名を以て答ふべきや、若くは色受想行識もて答へんや、若くは色空もて答へんや、若くは受想行識空もて答へんや。是れ色もて答ふること能はず、受想行識もて答ふること能はず、色空もて答ふること能はず。受想行識空もて答ふること能はず。我は是の法の答ふべきものを見ず、能く答ふる者を見ず。我は是の人の記を受くるを見ず、亦法の受記すべき者を見ず。亦受記の處を見ず。是の一切法は皆無二無別なり」と。

舍利弗、彌勒菩薩に語るらく、「仁者の所説の如くんば、是の如きは法の證を作すことを得と爲すや不や」と。彌勒、舍利弗に答ふるらく、「我が所説の如くんば、法は是の如く證せず」と。爾の時に、舍利弗、是の念を作す、「彌勒菩薩は智慧甚深にして、久しく檀波羅蜜(多)尸羅波羅蜜(多)厲提波羅蜜(多)毗梨耶波羅蜜(多)禪波羅蜜(多)般若波羅蜜(多)を行じ、無所得を用つての故に、能く是の如く説く」と。爾の時に、佛、舍利弗に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、汝は是の法を用て阿羅漢を得ば、是の法を見るや不や」と。舍利弗言さく、「見ざるなり」と。「舍利弗よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行するも亦是の如く、是の念を作さず。是の法は當に受記を得べし、是の法は已に受記し、是の法は當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、我れ若くは得、若くは得すと疑はず。自ら實に阿耨多羅三藐三菩提を得ることを知る」と。

論

問うて曰く、(一〇)舍利弗は何を以ての故に、夢を以て菩薩の三三昧を難せしか。答へて曰く、夢

は虚証にして、狂の如く、實に見るに非ざるを以ての故なり。是の三三昧は是れ實法なり。又復た餘處に説く、「夢中にも亦三種有り善不善無記なり。若し菩薩、善心に三三昧を行せば、應に福德を得べし。然るに夢は是れ狂癡の法にして、中に於いて實法を行じ、果報を得べからず。若し實法有れば名けて夢と爲さず。是を以ての故に問ふ、若し菩薩は夢中に三三昧を行せば、般若波羅蜜〔多〕を増益し、福德善根を集め、佛道に近づくや不や」と。須菩提意へらく、「若し益有りと云はば、夢は是れ虚訴、般若は是れ實法なり、云何が増益することを得ん。若し益無しと言はば、夢中に善有り、云何が益無く不得ならん」と。答へて言はく、「益有り、益無し」と。是の故に須菩提は此の二邊の難を離る、故に諸法實相を以て答ふ。尙晝日の所行すら破す、何に況んや、夢中をや。是の言を作さく、「舍利弗よ、菩薩は若くは晝日般若を行じて益有る者は、夜も亦應に益有るべし。而も晝日に益無きが故に、何に況んや夢中をや。何となれば、般若波羅蜜〔多〕は晝夜有ることを分別せざればなり」と。舍利弗は須菩提の所説を聞き、既に般若に増無減無きことを知り、復た難すべからず。今更に餘事に因りて夢中を問ふ、「須菩提よ、若し夢中の所作の業は、是の業の集成有れば、是の業は實に集つて能く果報を成すや不や。是の業、若し實有らば、佛は常に説きたまへり、一切法は空にして夢の如く、集成することを得べからず。何となれば、是の夢心は微弱なるが故に集成すること能はざればなり」と。晝日の微弱の心すら尙集成すること能はず、何に況んや、夢中をや。若し覺め已りて、夢中に

生ずる善不善心を分別せば、是は應に集成なるべし」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「人の夢中に人を殺すが如きは、覺め已つて、我は殺せり、是は快なりと分別するや。舍利弗よ、是の業は云何、集成を爲すや不や」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「一切の業の、若くは晝、若くは夢、皆因縁より生じ、因縁無ければ則ち生ぜず」と。須菩提は其の言を可とし、  
 三三、是の如し。業は因縁有れば生じ、因縁無ければ生ぜず。思は因縁有れば生じ、因縁無ければ生ぜず」と言へり。業は身口業となり、思とは但意業にして、思は是れ眞業なり。身口業は思の爲の故に名けて業と爲す。是の三業は四種の法に因る、若くは見、若くは聞、若くは覺、若くは知なり。此の四種に因りて則ち心生ず。是の心は因縁に隨つて生じ、或は淨、或は不淨なり。不淨は罪業にして淨は福業なり。若し夢中の所見は皆先の見聞覺知に因らば、夢中の所作の善惡は眼に覆はれ、心自在ならざるが故に勢力有ること無く、果報を集成すること能はず。若し是の業は覺を得る時は、善惡の心と和合するが故に、能く果報を助成す。須菩提意に謂へらく、「夢中の業は實に集成有り。何となれば、因縁起ること有ればなり。晝日の心と夢中の心とは異なること無し。何となれば、皆四種に因つて生ずればなり」と。舍利弗は空を以て須菩提を難すらく、「佛の説きたまふが如くんば、一切の諸業は自相を離る。汝は云何が定んで、諸業は因縁有れば生じ、因縁無ければ生ぜずと説くや」と。須菩提答ふらく、「諸法は空にして遠離の相なりと雖も、而も凡夫は相を取り、縁有るが故に業

【三】縁あれば業生じ、縁無ければ業生ぜず。

生ず。若し相を取らず、因縁無ければ則ち生ぜず。是の故に、一切の業は皆相を取り、因縁に從つて生ず。故に晝日と夢中と有るも異なること無し」と。舍利弗復た問ふ、「若し菩薩は夢中に六波羅蜜〔多〕を行じ、無上道に廻向せば、是れ實の廻向なりや不や」と。舍利弗の難ずらく、「若し夢中と晝日と異なること無くんば、是の夢中の廻向は應當に實なるべし。又復た晝日に著心もて相を取るを名けて、廻向と爲さずんば、何に況んや、眠睡の心を覆ふをや」と。須菩提は、此の二難の深くして、答へ難きを以ての故に、舍利弗に語るらく、「當に彌勒に問ふべし」と。

問うて曰く、彌勒は何を以てか、但空を説くのみにて、而も答へざるや。答へて曰く、是の二大弟子は菩薩を利益せんが爲の故に、覺と夢の若くは同じく、若くは異なることを分別せり。佛、常に一切法は夢の如しと説きたまふを以ての故に、

【三】第六問、彌勒が但空を説くのみにて答へざるは如何。

若し晝日に道を行せば、夢中にも亦應に道を行すべし。彌勒は二人の各執する所有りて通達すること能はざるを知る、是の故に彌勒は答へざるなり。復有人の言はく、「彌勒は是の空を以て答ふや、舍利弗、彌勒に問ふ、所説の空の如くんば此を以て證と爲すや不やと。舍利弗は意へらく、若し此の法を以て證と爲さば、即ち難を生せんと欲す、云何が證を爲すや。若し證せずんば、汝は自ら得ず、知らず、云何が能く説かん」と。彌勒は意へらく、「汝は涅槃を以て樂と爲す。我は涅槃も亦空にして所得無きを以ての故に證せず」と。有人の言はく、「彌勒は未だ佛法を具足せざるが故に説いて菩薩法を證せず

と言ふ。應に空無相無作法は證すべからざることを知るべし。爾の時、舍利弗は是の念を作す、「彌勒菩薩は其の智甚深にして、能く是の如く説き、能く涅槃の相を知つて、而も證を取らず」と。是を甚深と名く。此の中に、舍利弗は自ら因縁を説けり、一久しく六波羅蜜(多)を行するが故に、其の智甚深なり」と。舍利弗意へらく、「彌勒は次に當に作佛すべく、應當に能く答ふべし」と。而も今答へず。是の故に、佛還た舍利弗に問ひたまはく、「汝が意に於いて云何、汝は是の法を用て阿羅漢を得ることを見るや不や」と。舍利弗言さく、「見ず」と。何となれば、是の法は空無相無作なり、云何が見ることを得ん。若し見れば即ち是れ相有り、肉眼天眼は分別して相を取るが故に見るべからず、慧眼は分別の無相きが故に亦見ず。是を以ての故に、見ずと言ふ。佛の言はく、「菩薩摩訶薩も亦是の如く、無生忍を得る。是の言を作さず、是の法を見、受記を得、當に無上道を得べし」と。是の見を作さずと雖も、亦我は無上道を得ずと疑を生ぜず。汝は法を見ずと雖も、亦我は阿羅漢を成じ、阿羅漢を成せずと疑はざるが如し。

經

佛、須菩提に告げたまはく、菩薩摩訶薩有りて檀(那)波羅蜜(多)を行する時、若し衆生の飢寒凍餓し、衣服弊壞せるを見れば、菩薩は當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、檀(那)波羅蜜(多)を行じ。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして、是の如きの事無く、衣服飲食養生の具に、當に四天王・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天の如くならしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して、能く檀(那)波羅蜜(多)を具足し、阿耨多羅

三藐三菩提に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜(多)を行する時、衆生の殺生し、乃至邪見・短壽・多病・顔色好からざる、威徳有ること無き、貧にして財物乏しく、下賤の家に生じて、形殘醜陋なるを見れば、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、尸羅波羅蜜(多)を行じ、我れ佛を得る時、我が國土の衆生をして、是の如きの事無からしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して、能く尸羅波羅蜜(多)を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は瞋提波羅蜜(多)を行する時、諸の衆生の互に相瞋恚し、罵詈訕、刀杖瓦石もて共に相殘害し、命を奪ふを見れば、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、瞋提波羅蜜(多)を行じ、(我れ佛と作る時)我が國土の衆生をして是の如きの事無く、相視ること父の如く、母の如く、兄の如く、弟の如く、姉の如く、妹の如く、善知識の如く、皆慈悲を行ぜしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して能く瞋提波羅蜜(多)を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は毗梨耶波羅蜜(多)を行する時、衆生の憍怠にして、勤めに精進せず、三乘の聲聞・辟支佛・佛乘を棄捨するを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、毗梨耶波羅蜜(多)を行じ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして、是の如きの事無く、一切衆生勤修し精進して、三乘道に於いて各度脱することを得せしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の如きの行を作して、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は禪(那)波羅蜜(多)を行する時、衆生の五蓋の覆ふ所と爲り、(所謂)婬欲・瞋恚・睡眠・掉(擧)・悔疑の爲に初禪乃至第四禪を失ひ、慈・悲・喜・捨・虚空處・識處、無所有處、非有想非無想處を失へるを見て、當に是の願



を作すべし、我は爾所の時に隨ひ、禪(那)波羅蜜(多)を行じ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして是の如きの事無からしめんと、須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して、能く禪(那)波羅蜜(多)を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、衆生の愚癡にして、世間の正見を失ひ、或は業因縁なきを説き、或は神の常を説き、或は斷滅を説き、或は無所有と説くを見て、當に是の願を作すべし、我は爾所の時に隨ひ、般若波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして、是の如きの事無からしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して、能く般若波羅蜜(多)を具足し、一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生の三聚(即ち)一には必正聚、二には必邪聚、三には不定聚に住するを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就せん。我れ佛を得る時、我が國土の衆生をして、邪聚無く、乃至其の名をも無からしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して、能く六波羅蜜(多)を具足し、一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、地獄の中の衆生、畜生餓鬼中の衆生を見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛を得る時、我が國土の中をして、乃ち三惡道の名無きに至らしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して、能く六波羅蜜(多)を具足し、一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、是の大地の棘刺棘山峻溝坑穢惡の處を見て、當に是の願を

作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土をして是の如きの惡趣無く、地平かなること、掌の如くならしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足し、一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、是の大地の純ら土のみにして、金銀の珍寶有ること無きを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土をして、金沙を以て地に布かしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足して一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生の戀著する所有ることを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして、戀著するの無からしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作して、能く六波羅蜜(多)を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、四姓の衆生(即ち)刹帝利・婆羅門・轉舍・首陀羅を見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして四姓の名も無からしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生下中上ありて、下中上の家に生ずるを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の

衆生をして、是の如きの優劣無からしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足して、一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生の種種の別異の色を見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして種種別異の色無く、一切衆生皆端正淨潔にして、妙色を成就せしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足して、一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生に主有るを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひて六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして、主の名も有ること無く、乃至其の形像をも無からしめん、〔但佛法を除くと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足して、一切種智に近づく。〕

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生に六道の別異有るを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして、六道の名、是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ神、是れ天、是れ人なりといふこと無く、一切衆生皆同一業もて、四念處乃至八聖道分を修せしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足して、疾く一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生に四生(所謂)卵生・胎生・濕生・化生有るを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして三種の生無く、等しく一化生ならしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜

〔多〕を具足して、一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜〔多〕を行する時、衆生に五神通無きを見て、當に是の願を作すべし、我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜〔多〕を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして、一切皆五神通を得せしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、六波羅蜜〔多〕を行する時、衆生に大小便の患有るを見て、當に是の願を作すべし、我れ佛と作る時、我が國土の衆生をして、皆歡喜を以て食と爲し、便利の患あること無からしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜〔多〕を行する時、衆生に光明有ること無きを見て、當に是の願を作すべし、〔我れ佛と作る時〕、我が國土の中の衆生をして、皆光明有らしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜〔多〕を行する時、日月の時節、歳數有るとを見て、當に是の願を作すべし、我れ佛と作る時、我が國土の中〔の衆生〕をして、日月・時節・歳數の名も有ると無からしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜〔多〕を行する時、衆生の短命を見て、當に是の願を作すべし、我が國土の中の衆生をして、壽命無量劫ならしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜〔多〕を行する時、衆生に相好有ること無きを見て、當に是の願を作すべし、我れ佛と作る時、我が國土の中の衆生をして皆三十二相成就すること有らしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜〔多〕を行する時、衆生の諸の善根を離るるを見て、當に是の願を作すべし、我れ佛と作る時、我が國土の中の衆生をして、諸の善根を成就し、是の福徳を以て、能く諸佛を供養せしめんと。乃至一切

種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生に三毒・四病有るを見て、當に是の願を作すべし、我れ佛と作る時、我が國土の中の衆生をして、四種の病(即ち)冷・熱・風病、三種の雜病、及び三毒の病無からしめんと。乃至一切科智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生に三乘有るを見て、當に是の願を作すべし、我れ佛と作る時、我が國土の中の衆生をして、二乘の名無く、統一の大衆なからしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、衆生に增上勝有るを見て、當に是の願を作すべし、我れ佛と作る時、我が國土の中の衆生をして、增上慢の名も無からしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、應に是の願を作すべし、若し我が光明壽命、量有り、僧數限有らば、當に是の願を作すべし、我は六波羅蜜(多)を行し、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が光明壽命をして無量に、僧數をして無限からしめんと。乃至一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、應に是の願を作すべし、若し我が國土量有らば、當に是の願を作すべし。我れ爾所の時に隨ひ、六波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、我れ佛と作る時、我が國土をして、恆河沙等の諸佛の世界の如くならしめんと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足して、一切種智に近づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行する時、當に是の念を作すべし、生死の道は長く、衆生の性は多しと雖も、爾の時應に是の如く正憶念すべし、生死の邊は虚空の如く、衆生性の邊も亦虚空の如し。是の中、實に生死の往

來無く、亦解脫する者無し」と。菩薩摩訶薩は是の如きの行を作し、能く六波羅蜜(多)を具足し、一切種智に近づく。

【三】

問うて曰く、(三)何の次第有るが故に、菩薩は衆生の飢寒凍餓等を見ると説くや。答へて曰く、

菩薩は聲聞辟支佛地を過ぎ、無生法忍の授記を得て更に餘事無く、唯佛世界を淨め、衆生を成就せんことを行す。今は佛世界を淨むる因縁を説く。不淨世界の相を見て「願はくは我が國土は是の如き事無からん」と。是の故に次第に是の事を説くなり。菩薩は檀(那)波羅蜜(多)を説く時、若し衆生の飢渴衣服弊壞を見て、即ち信念して言はく、「我が福德智慧は未だ成就せず、衆生の所須を給足すると能はず。若し我れ但慈悲心のみを行せば、則ち衆生に於いて益無けん。我れ當に爾所の時に、深く三種の福德を行じ、三種の福德の中に住し、能く貧窮の衆生をして皆満足を得せしめ、若くは轉輪聖王と作り、若くは天王と作り、若くは神通の聖人と作りて、則ち能く多く衆生を引導し、其の慳貪を破して布施に任せしめん。是の衆生の布施、乃至菩薩の布施の因縁を以ての故に、後成佛する時、國土の中に貧窮の者有ること無く、心生じ意に隨つて得る所は、欲界の第六天の所有の諸物の如し。菩薩は是の如く、爾所の時に隨ひ、檀(那)波羅蜜(多)の功德を積集するが故に、一切に充滿す。何となれば、一切の有爲法は因縁に屬し、善を行する因縁を具足するが故に、皆應に意に隨つて果報を得べければなり。

復次に、衆生は尸羅波羅蜜(多)を破する因縁の故に、短命多病にして威徳等有ること無し。菩薩は

【三】 第七問、菩薩、衆生の飢寒凍餓等を見るに、何の次第あるや。

是の願を作す、「我自ら持戒を具足し、亦衆生をして持戒せしめん」と。餘殘の所願も亦是の如く、義に随つて分別す。最後の義は明了ならず。今當に略して説くべし。菩薩は上の如き願を作し已りて疲厭の心起る。佛道に無量無數阿僧祇劫に諸の功德を行じ、然る後に得べし。但一劫の歳數のみすら數へ得べからざるが故に、佛は譬喩を以て人に示したまへり、何に況んや無量無邊阿僧祇劫をや。此の生死を経て、諸の苦惱を受くる衆生も亦無量無邊にして、譬喩すべき算數の及ぶ所に非ず、但三千大千世界中の微塵等の衆生の如きすら猶尙度し難し、何に況んや、十方無量世界の微塵等の衆生、而も度することを得べけんや」と。是の事を以ての故に、或は心に退没を生ず、是を邪憶念と名く。是の故に、佛は是の菩薩に正憶念を教へたまはく、「生死は長しと雖も、是の事は皆空にして、虚空の如く、夢中に見る所の如く、實に長遠なるに非ず、厭心を生ずべからず。又未來世も亦是れ一念の縁する所にして、亦長遠に非ず」と。

復次に、菩薩は無量の福德智慧力の故に、能く無量劫を超ゆ。是の如き種種の因縁の故に、厭心を生ずべからず。此の中に佛は大因縁を説きたまへり、「所謂、生死は虚空の如く、衆生も亦是の如し。衆生は多しと雖も、亦定實の衆生無し。衆生の無量無邊なるが如く、佛の智慧も亦無量無邊にして、度することも亦難からず。是の故に菩薩は疲厭の心を生ずべからず」と。

經 恆伽提婆品第五十九を釋す。

爾の時に、一の女人有り、三恆伽提婆と字け、衆中に在りて坐す。是の女人は坐より起ち、偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、掌を合せて佛に白して言さく、「世尊よ、我れ當に六波羅蜜(多)を行じ、淨佛世界を取るべし。般若波羅蜜(多)中の所説の如く、我れ盡く當に行すべし」と。是の時、女人は金銀華及び水陸の生華種種の莊嚴供養の具、金縷もて織り成せる氍毹張を以て、佛の上に散す。散じ已つて、佛の頂上、虚空の中に於いて化して四柱の寶臺と成るに、端正嚴好なり。是の女人は是の功德を持って、一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。爾の時、世尊は是の女人の深心の因縁を知り、即時に微笑したまふに、諸佛の法の如く、種種の色光口中より出で、青黃赤白、紅縹、遍く十方無量無邊の佛國を照らし、還つて佛を遮りて三市し、頂上より入る。爾の時、阿難座より起ち、右の膝を地に著け、掌を合せて佛に白して言さく、「何の因縁もてか微笑したまふや。諸佛の法は因縁無きを以て而も笑はず」と。佛、阿難に告げたまはく、「是の恆伽提婆姉は、未來世中に當に佛と作るべく、劫を星宿と名け、佛を金華と號す。阿難よ、是の女人は女身を畢つて男子の形を受け、當に阿闍佛の阿毗羅提國土に生じ、彼に於いて淨く梵行を修すべし。阿難よ、是の菩薩は彼の國土に於いても亦金華と號せん。是の金華菩薩は彼に於いて壽を終り、復た他方の佛國に至り、一佛國より一佛國に至りて諸佛を離れず。譬へば轉輪聖王の一觀より一觀に至り、生より終に至るまで、足地を踏まざるが如し。阿難よ、是の金華菩薩摩訶薩も亦是の如く、一佛國より一佛國に至るより、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、未だ曾つて佛を見ずんばあらず」と。時に阿難は是の念言を作す、「是の金華菩薩摩訶薩の後に佛と作る時、諸の菩薩摩訶薩會す、當に知るべし。佛會の如く爲らん」と。佛、阿難の意に念する所を知り、阿難に告げて言はく、「是の如し、是の如し。金

【一四】 此の品には、前品の淨國土の行を聞き、河天女の發願受記するを明す。他本には譯して河天品に作れり。

【一五】 Candariveri.



華佛の時、菩薩摩訶薩の會は當に知るべし、佛會の如く爲らんことを。阿難よ、是の金華佛の比丘僧は無量無邊不可數不可數若干千萬億那由他ならん。阿難よ、是の金華菩薩、佛と作る時、其の國土に、是の諸の衆惡有ること無きこと、上に説く所の如し」と。阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、是の女人は何處に從つて徳本を植ふ善根を種うるや」と。佛阿難に告げたまはく、「是の女人は燃燈佛に從つて善根を種ふ、初めて阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是の功徳を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。亦金華を以て燃燈佛の上に散じ、阿耨多羅三藐三菩提を求む。阿難よ、我の如きは、爾の時、五華を以て燃燈佛の上に散じ、阿耨多羅三藐三菩提を求む。燃燈佛は、我が善根を成就することを知り、我に與へて阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふ。是の女人は我に授記するを聞き、發心して言はく、我も當來世に亦是の菩薩の如く、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得んと。阿難よ、當に知るべし、是の女人は燃燈佛に於いて初めて發心す」と。阿難、佛に白くて言さく、「世尊よ、是の女人は久しく阿耨多羅三藐三菩提を習行するや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。是の女人は久しく阿耨多羅三藐三菩提を習行す」と。阿難、佛に白して言さく、「是の如し、是の如し。是の女人は久しく阿耨多羅三藐三菩提を習行す」と。

【三】第八問、是の如きの大衆、淨國土の行を説きながら、但一女人のみ淨國土を願へるは何故なるか。

問うて曰く、(二天) 是の如きの大衆、淨國土の行を説くを聞き、何を以てか但一女人のみ淨國土の願を取るや。答へて曰く、多く淨國土の願を發する者有り、但言を發せざるのみ。女人は性輕躁好勝にして、世世習氣あるが故に言を發す。

復次に、有人の言はく、「女人は得道の分有り、餘人は分無し」と。佛法は然らず、衆生の業因縁に隨ふ。譬へば良藥の諸病を療治するに、貴賤を擇ばざるが如し。復た女人は淺智なりと雖も、而も先世

の業因縁(を以て)て應に授記を得べし。心生じて説かんと欲するが故に、佛は自ら説くことを聽きたまへり。

復次に、若し佛嘿然として授記を與へたまはば、人は則ち疑を生せん。「何の因縁有るが故に、獨り此の女人の與にのみ記を授けたまふや」と。是の故に、佛は其の自説に因るが故に而も授記を與へたまへり。

問うて曰く、(三七) 何を以てか名けて恆伽提婆と爲すや。答へて曰く、一切

は皆名字のみ有りて識と爲すが故に、何を義を求むるに足らんや。有人は言ふ、「是の女人の父母は、恆伽神に供養して、此の女を得るが故に、恆伽提婆と言ふ」と。恆伽は是れ河の名、提婆は天と名く。是の女人は福德

の因縁もて富家に生じ、佛法を聞いて信樂するが故に、能く金銀・寶華・金縷もて織り成せる上下の衣、並に自身を莊嚴する瓔珞の具を以て、用つて供養し、佛に上つる。佛、報するに授記を以てし、是の女人の宿世の所行を觀じて、便ち微笑したまへり。微笑の義は先に説くが如し。此の中に小因縁もて、而も大事を起すが故に、佛は微笑したまへり。

問うて曰く、(三六) 是の女の福德は應に久しく女人を轉すべし。何を以て方に阿闍佛の國に於いて、乃ち女身を轉するや。答へて曰く、世間の五欲は斷じ難し。女人は著欲の情多きが故に、世世に諸の福

【三七】 第九問、恆伽提婆と名くる理由如何。

【三六】 第一〇問、是の女の福德は、應に久しく女身を轉すべし、然るを阿闍佛の國に於いて、男子たるを得るは何故なるか。

徳を行すと雖も、男子の身を得ること能はず。今、授記を得て諸の煩惱を折薄す。是の故に阿闍佛の國に於いて、方に男子の身を得。有人は言ふ、此の女は宿世に人多く女人を輕するを以ての故に、女身の授記を願ふ」と。是の如き等の因縁もて、女身を轉せしめて而して授記を得たり。

また次に、經に、女人の五礙を説けるは、授記を得ずと説くにあらず。是の故に難を生ずべからず。阿難は、是の女人の無量劫中に、一佛國より一佛國に至り、廣く功德を集めて當來に佛世界を淨むることを得、其の中の菩薩は皆三十二相八十種隨形好無量の光明有るを聞けり。是の故に阿難は歎すらく、「未曾有なり。能く是の如く佛國土を淨めば、便ち佛會の如しと爲す」と。佛、其の言を可とし已りたまふに、阿難等は疑ふらく、「此の女人は希有なり。小法を聞いて而も大果報を得」と。是の故に、阿難は問ふ、「是の女人は何處に從つて諸の徳本を殖うるや」と。佛答へたまはく、「錠光佛、我に記を授けたまふ時、是の女人は金華を持して佛に散じ、彼に是の願を作す、「此の人の後に佛と成る時、亦當に我に記を與ふるを受くべし」と。彼に從つて善根を種ゑ、今果報を得たり。

# 卷の第七十六

(二) 學空不證品第六十を釋す。

經

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行ぜんと欲せば、云何が空三昧を學し、云何が空三昧に入り、云何が無相無作三昧を學し、云何が無相無作三昧に入り、云何が四念處を學し、云何が四念處を修し、乃至云何が八聖道分を學し、云何が八聖道分を修するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、

「菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時、應に色の空、受想行識の空、十二入・十八界の空を觀すべし。乃至應に欲・色・無色界の空を觀じ、是の觀を作す時、心をして亂さしめざるべし。是の菩薩摩訶薩は若し心亂さざれば則ち是の法を見ず、若し是の法を見ざれば、則ち證を作さず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、善く自相空を學するが故に、餘有らず、分有らず、證法と證者と皆見るべからざればなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛の説きたまふ所の如くば、菩薩摩訶薩は、空法もて證を作すべからず。世尊よ、云何が菩薩は空法に住して、而も證を作さざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、觀空を具足せば、先づ是の願を作す、我れ今空法もて證を作すべからず。我れ今學する時にして、是れ證する時に非ずと。菩薩摩訶薩は専ら心を攝して、緣中に繋をせず。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提の中に於いて退せず、亦漏盡證を取らず。須菩提よ、菩薩摩訶薩、是の如き、大善妙法を成就せば、何を以ての故に、是の空中に住して是の念を作すや、我れ今是れ學

【一】此の品には、空等を學して證を作さざるを明す。他本には、單に不證品に作れり。

する時にして、是れ證する時に非ず。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く念すべし、我は是れ檀(那)波羅蜜(多)を學する時にして、是れ證する時に非ず。尸羅波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・毘梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)を學する時、四念處を學する時、乃至八聖道分を學する時にして、是れ證する時に非ず。空三昧・無相三昧・無作三昧を修する時にして、是れ證する時に非ず。佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大悲を修する時にして、是れ證する時に非ず。我は今一切種智を學する時にして、是れ須陀洹果の證乃至阿羅漢果・辟支佛道の證を得る時に非ず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、空慧を學し、空の中に住し、無相無作觀を學し、無相無作の中に住し、四念處を修して、四念處を證せず、乃至八聖道分を修して八聖道分を證せず、是の菩薩は三十七品を學すと雖も、三十七品を行すと雖も、而も須陀洹果の證、乃至辟支佛道の證を作せず。須菩提よ、譬へば壯夫の勁勇猛健にして兵法六十四能を善くし、器仗を堅持し、安立して動ぜず、諸の技術を巧にし、端正淨潔にして人に愛敬せられ、少しく事業を修して報利を得ること多きが如し。是の因縁を以ての故に、衆に恭敬し、尊重し、讚歎せらる。人に敬重せらるるを見て、倍復た歡喜す。少しく因縁有りて、當に他處に至るべきに、老弱を扶將し、諸の險難恐怖の處を過ぎ、父母を安んじ、妻子を嗷諭し、「恐懼有ること莫れ、我れ能く此を過ぐれば、心に苦しむ所無からん」と。險難の道中に多くの怨賊有りて潜伏劫害するも、其の人は智力具足するが故に、能く惡道を度りて、本處に還歸し、賊害に遇はず、歡喜し安樂す。須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦是の如く、一切衆生の中に於いて、慈悲喜捨の心獨り満足す。爾の時、菩薩摩訶薩は四無量心に住し、六波羅蜜(多)を具足し、漏盡證を取らず、一切種智を學びて、空・無相・無作の解脫門に入る。是の時、菩薩は一切諸相に隨はざるも、亦無相三昧を證せず、無相三昧を證せざるを以ての故に、聲聞辟支佛地に墮せず。須菩提よ、譬へば、有翼の鳥の虚空に飛騰して而も墮墜せず、空中に在りて雖も、亦空に住せざるが如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦是の如く、空解脫門を學し、無相無作解脫門を學す

るも亦證を作さず、證せざるを以ての故に聲聞辟支佛地に墮せず、未だ佛の十力・大慈大悲・無量の諸の佛法・一切種智を具足せず、亦空無相無作解脫門をも證せず。須菩提よ、譬へば、健人の諸の射法を學し、射術を善くし、仰いで空中を射、復た彼の箭を以て前の箭を射、箭箭相往へて箭を墮せしめざる、こと、墮意自在なり。若し墮せしめんと欲せば、便ち後の箭を止む。爾れば乃ち地に墮するが如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦是の如く、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、諸の善根未だ具足せず、實際に於いて證を作さず。若し善根を成就すれば、是の時便ち實際に於いて證を作す。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、應に是の如く諸の法相を觀すべし」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難し。何となれば、是の諸の法相を學し、實際を學し、如を學し、法性を學し、畢竟空を學し、乃至自相空、三解脫門を學すと雖も、終に中道にして墮落せざればなり。世尊よ、是れ甚だ稀有なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の菩薩摩訶薩は一切衆生を捨てざるが故に、是の如きの願を作す。須菩提よ、若し是の菩薩摩訶薩は是の念を作す、「我れ一切衆生を捨てつべからず、一切衆生は無所有の法中に没在す、われ應當に度すべし」と。爾の時、即ち空解脫門・無相解脫門・無作解脫門に入る。須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は方便力を成就し、未だ一切種智を得ず。是の解脫門を行するも、亦中道に實際の證を取らざることを。」

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の諸の甚深の法、所謂の内空乃至無法有法空、四念處乃至三解脫門を觀せんと欲す。爾の時、菩薩摩訶薩は應に是の如きの心を生ずべし。是の諸の衆生は長夜に我相乃至知者、見者相を行じ、得法に著す。衆生、是の諸相を斷ぜんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、當に法を説くべしと。爾の時、菩薩は空解脫門・無相無作・解脫門を行するも、亦實際の證を取らず、證せざるを以ての故に、須陀洹果乃至辟支佛道に墮せず。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、是の心を以て、善根を成就せんと欲するが故に、中道にして實際に證を作さず、四禪・四無量心・四無色定・

四念處乃至八聖道分、空・無相・無作、佛の十力・四無所長・四無礙智・大悲・十八不共法を失はず、是の時、菩薩摩訶薩は一切の助道法、乃至阿耨多羅三藐三菩提を成就して、終に耗滅せず。是の菩薩は方便力有るが故に、常に善法を増益し、諸根通利にして、阿羅漢辟支佛の根に勝る。

復次に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は是の念を作す、衆生に長夜に四顛倒〔所謂〕常相・樂相・淨相・我相に著す。是の衆生の爲の故に薩婆若を求む。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得たる時、爲に無常法・苦〔法〕・不淨〔法〕・無我〔法〕を説くと。是の菩薩は是の心を成就し、方便力を以て、般若波羅蜜〔多〕を行すれば、佛の三昧を得ず、未だ佛の十力・四無所長・四無礙智・大悲・十八不共法を具足せざるも、亦實際に證を作さず。爾の時、菩薩は無作解脫門を修し、未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ずと雖も、亦實際に證を作さず。

復次に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は是の念を作す、衆生は長夜に得法に著す。所謂我、衆生、乃至知者・見者、是れ色はれ受想行識、是れ入、是れ界、是れ四禪・四無量心・四無色定とし、我れ是の如く行すとす。我が阿耨多羅三藐三菩提を得る時の如きは、衆生をして是の得法なからしめんと。菩薩は是の心を成就し、方便力を以て、般若波羅蜜〔多〕を行じ、未だ佛の十力・四無所長・四無礙智・大悲・十八不共法を具足せず、實際に於いて證を作さず。爾の時、菩薩は具足して空三昧を修す。

復次に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は是の念を作す、衆生は長夜に諸相を行す。所謂男相・女相・色相・無色相なり。我れ是の如く行すとす。我が阿耨多羅三藐三菩提を得る時の如きは、衆生をして是の諸相の過失無からしめんと。是の心を成就し、方便力を以て般若波羅蜜〔多〕を行じ、未だ佛の十力、乃至十八不共法を具足せず、實際に於いて證を作さず。爾の時、菩薩摩訶薩は具足して無相三昧を修す。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜〔多〕を學し、內空、乃至無法有法空を學し、

四念處乃至空無相無作解脫門を學し、佛の十力・四無所畏・四無礙智・大慈大悲を學し、十八不共法を學し、是の如くして智慧を成就するも、若くは作法に著し、若くは三界に住するは、是の處有ること無し。是の菩薩摩訶薩の助道法を學し、助道法を行する時、應當に試問すべし、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、云何が是の法を學し、空を觀じて空の實際を證せず、證せざるを以ての故に、須陀洹果、乃至辟支佛道に墮せず、無相・無作・無起・無生・無所有を觀するも亦實際を證せずして而も般若波羅蜜(多)を修行するやと。應に是の如く問ふべし。須菩提よ、若し諸の菩薩摩訶薩、若し試問する時、是の菩薩は若くは是の如く答ふ、菩薩摩訶薩は但應に空を觀すべきのみ。但應に無相・無作・無起・無生・無所有を觀すべきのみ。是の菩薩摩訶薩は空・無相・無作・無起・無生・無所有を學すべからず、是の助道法を學すべからずと。須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩には、諸佛未だ阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまはずと。何となれば、是の人ば阿鞞跋致の菩薩の學する所の相を説くこと能はず、示すこと能はず、答ふること能はざればなり。若し是の菩薩摩訶薩は阿鞞跋致の學する所の相を能く説き、能く示し、能く答へば、當に知べし、是の菩薩摩訶薩は已に菩薩道を習學し、薄地に入ること、餘の阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相の如きとを。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、願し未だ阿鞞跋致を得ざる菩薩の、能く是の如く答ふるもの有りや不や」と。佛の言はく、「有り、須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、六波羅蜜(多)を、若くは聞き、若くは聞かざるも、能く是の如く答ふること、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の如し」と。須菩提言さく、「世尊よ、多く菩薩の佛道を求むるもの有り、少しく菩薩の能く是の如く答ふる有ること、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の學道、無學道の中の如し」と。佛、須菩提に語りたまはく、「是の如し、是の如し、是の菩薩は甚だ少し。何となれば、菩薩摩訶薩は少しく是の如く授記を得て、阿鞞跋致を行すること有ればなり。乾慧地に若し授記を得ること有れば是の人ば能く是の如く答ふ。是の人ば善根明了にして、諸天世人の壞すること能はざる所なり」と。



論 問うて曰く、空を學すると、空に入ると何の差別有りや。答へて曰く、初は空を學すと名け

後には是れ空に入るなり。因は是れ學空にして、果は是れ入空なり、方便

をば空を學すと名け、得をば空に入ると名く。是等の如きの二道あり。無

相・無作・三十七品も亦是の如し。三解脱門三十七品は、是れ聲聞辟支佛の

涅槃道なり。佛は菩薩に應に是の道を行すべきことを勧めたまへり。須菩

提是の念を作さく、「此は是れ涅槃の道なり、云何が菩薩は是の法を行じ

て、而も涅槃の證を取らざるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は色等の一切

法は空なりと觀ず。是の菩薩は深く禪定に入りて心亂れず、利なる智慧力

を得るを以ての故に、是の空法を見ず。見ざるを以ての故に、證する所

無し。聲聞辟支佛は、吾我を斷じ、愛著を捨て、直に涅槃に趣く、是の菩

薩は善く自相空を學し、色法の中より乃ち、微塵に至るまで、遺餘微細の分

を留めず。無色法中には乃ち一念をも留めざるに至り、直に畢竟空中に入

りて乃ち是の空法を以て證と爲すべきものを見ざるに至る」と。佛は答へ

たまふと雖も、須菩提は未だ佛意に達せず、更に問ふ、「佛の説きたまふ所

の如くんば、菩薩は空法を證と作すべからず。今空中に入りて、云何が證を作さざるや」と。佛答へた

【二】 第一問、空を學すると、空に入るとの差別如何。

【三】 方便とは、二釋あり、一は般若に對し、二は眞實に對す。前者に約すれば大小一切の佛教を稱して方便と稱するなり。後者に約すれば小乘は大乗に入るの門なれば、之を方便と名け、三乘は一乘に通ずる爲めに設けしものなれば之を方便となすなり。

【四】 空法を見ずとは、空にも執著せざるをいふ。執著せざるが故に、別に事新しく證する所もなきなり。

【五】 吾我とは、小我の見なり。

【六】 微塵とは、色法即ち物質を分折せる終極の名稱なり。

まはく、一深く入るを以ての故に能く證を作さず」と。具足とは、則ち是れ深く入るなり。譬へば菅草を執るに、捉緩なれば則ち手を傷め、若し捉急なれば則ち傷無きが如し。菩薩も亦是の如く、深く空に入るが故に、空も亦空なることを知る、涅槃も亦空なるが故に證する所無し。

復次に、菩薩は未だ空に入らざる時、是の思惟を作す、「我れ應に遍く諸法の空を觀すべし、具足し知らずして、而も證を取るべからず」と。是の故に、專心に念を攝して禪に入り、空縁の中に繫在せず。何となれば、若し專心に空縁に繫在すれば、則ち心柔軟にして空より自ら出づること能はざればなり。

問うて曰く、上には深く禪定に入りて心をして亂さしめずと言ひ、今は云何が專心ならずと言ふや。答へて曰く、今專心ならずと言ふは、是れ初めて入る時、自ら出づること能はざるが爲の故なり。上に深く入ると言ふは、入ること已に深くして、空も亦空なることを知り、心をして餘事に在らしめざるが故に、亂れずと言ふなり。

亦次に、是の菩薩は應に是の念を作すべし、「我れ今未だ三十二相八十種隨形好十力四無所畏・諸の佛法を具せず。云何が涅槃の證を取らん。我れ今是を學する時、諸の煩惱を薄くし、衆生を教化して佛道に入らしめん。我れ佛事を具足することを得て、是の時當に證を取るべし」と。是の故に、善

【七】 菅草を執るに捉緩なれば則ち手を傷め、捉急なれば則ち傷なし。

【八】 第二問。上には深く禪定に入り、心をして亂さしめずといひ、今は云何が專心ならずと言ふか。

薩は三解脱門に入ると雖も、而も證を取らず。是の中に譬喩を説けり。壯夫は是れ菩薩なり。父母親族は是れ度すべき衆生なり。險道は是れ三界の生死なり。惡賊は是れ魔民及び諸の煩惱なり。器仗は是れ菩薩の五神通等の種種の方便力なり。本處に還歸するは是れ菩薩の行する所の道なり。安立して動せざるは、是れ菩薩の畢竟空に住し、四無量心を以て、度すべき衆生を運致し、涅槃安樂の處に著くるなり。時に會する者疑ふらく、「空中は無所有なり。云何が行すべき」と。是の故に、佛は鳥の喩を説きたまへり。「鳥の虚空を飛んで依止する所無く、而も遠く逝きて墜ちざるが如し」と。

復次に、是の菩薩は未だ道法を具足せず、未だ佛道に至らず。其の中間に於いて而も證を作さず。鳥の未だ至る所に到らざれば、終に中に住せざるが如し。是の空法を學して、爲に自ら煩惱を斷じ、衆生を度せんが爲の故に、又明了と爲すが故に善射の譬喩を説けり。(一〇)人の射術を善くするが如し。弓は是れ菩薩の禪定なり、箭は是れ智慧なり、虚空は是れ三解脱門なり、地は是れ涅槃なり。是の菩薩は智慧の箭を以て、三解脱門の虚空を射、更

に方便力を以ての故に後の箭を以て前の箭を射て、涅槃の地に墮せしめず、未だ十力等の佛事を具足せざれば終に證を取らざるなり。須菩提、歡喜して、佛に白して言さく、諸の菩薩の爲す所は甚だ難く、實に希有と爲す。所謂空を行じて而も證を作さず」と。佛答へたまはく、「是の菩薩の本願は諸

【九】無所有にして而も行すること、鳥の虚空を飛んで依止する所なく、遠く逝いて墜ちざるが如し。

【一〇】善射の譬喩。

の一切衆生に苦を離るることを得せしめんとす。是の本願の大悲心の所持を以ての故に、空を行すと雖も證を作さざるなり」と。

復次に、若し菩薩は是の念を作さく、「一切衆生は苦中に處在し、顛倒の爲に縛せられ、無所有の

中に没在す」と。是の時、即ち空・無相・無作・解脫門を行すれば、當に知るべし、是の菩薩は方便力有り、三解脱門を行じて而も衆生を捨てざるを。

復次に、菩薩は甚深の法、所謂十八空・三十七品・三解脱門を觀せんと欲せば、先づ應に是の念を作すべし、「衆生は長夜に

行者若し直に甚深の法を觀せば、或は聲聞道を得、或は邪見に墮す。憐愍の心無きを以て、深く自相空に入ると能はざればなり。是を以て菩薩は是の法を觀せんと欲し、先づ悲心を生ず。所謂衆生は長夜に吾我の心に著し

諸の煩惱あり。長夜は久遠に名く。無量劫より來た是の我は必ず不可得にして但空なり。虛誑顛倒の故に諸の憂惱を受く。菩薩は是を見已つて願

を作さく、「我れ當に衆生の爲に佛道を成じ、是の衆生の我に著する顛倒を斷すべし」と。是の時即ち

是れ空等の三解脱門を行じ、而も實際を證せず、是の善根を成就す。菩薩は實際の證を取らず、亦四

禪等の諸の功德を失せず。菩薩は深く空に入るが故に、諸根猛利にして

二乘に勝る。四顛倒

倒いふ。

【一】我相等とは、我相・人相・衆生相なり。

【二】諸根とは、佛教徒の理想實現の方法たる七科の一なる信・進・念・定・慧の五根を云ふなり。

【三】二乘とは、小乗の聲聞乘と緣覺乘となり。

【四】四顛倒とは、不淨を淨とし、非樂を樂とし、無我を我とし、無常を常とする四の顛倒いふ。

を破する義も亦上に説くが如し。

復次に、菩薩は是の念を作さく、「衆生は長夜に得法に著す。所謂、我、衆生、乃至若くは作法に著し、若くは三界に住するも、是の處有ること無し」と。義は皆同じく空を觀するも而も證を取らざるなり。

問うて曰く、(五)云何が是の菩薩は未だ道を得ずして、而も能く此の深空を行することを知るや。答へて曰く、經中に自ら因縁を説けり、「是の菩薩は應に試問すべし、云何が菩薩は應に空を學して而も證を取らざるべきや」と。若し菩薩は、「但應に空を念じて一心に習行すべし。聲聞辟支佛の如く、但學知するのみにあらず、乃ち無生、無所有に至るまでも亦是の如し」と答へば、當に知るべし、是の菩薩は未だ諸佛の爲に授記せられざるとを。所以は何んとなれば方便學知を説かざるが故に、空を觀すればなり。若し是の菩薩は上の答に異ならば、當に知るべし、是の阿鞞跋致は已に習學して薄地に入ることを。學習とは、先づ空を學知するに名け、薄地とは阿鞞跋致地の中の諸の煩惱薄きに名く。須菩提は阿鞞跋致の相と、阿鞞跋致に非ざる相とを聞き已りて、佛に白して言さく、「世尊よ、頗し菩薩有りて未だ阿鞞跋致を得ざらん、是の如く答ふるや不や」と。佛の言はく、「有り。有る菩薩は若くは六波羅蜜〔多〕を聞き、若くは聞かずして、能く阿鞞跋致の如く答ふ。若し聞く者は但師より聞いて、自ら未だ

【五】 第三問、未だ道を得ざる菩薩の能く深空を行することを知る理由如何。

菩薩地を具足せず。若し聞かざる者は自ら思惟し正憶念し、未だ無生忍を得ず。雖も、能く諸法の相を求め、阿鞞跋致の菩薩の如く答ふ」と。須菩提言さく、「多く人有りて佛道を求むるに、少く能く是の如く答ふること、阿鞞跋致の菩薩の學地、無學地中の如し。未だ無生法忍を得ざれば學地と名け無生法忍を得れば無學地と名く」と。佛の言はく、「少し。何となれば、少しく菩薩有り、諸佛より記を受く。已に諸佛より記を受くる者は能く是の如く答ふ。何となれば、諸法實相は唯佛のみ能く遍く知りたまへばなり。佛は此の人は能く法の如く答ふと知りたまふが故に、懸に受記を與へたまへり。是の菩薩は善根少しと雖も、明了に、能く廣く衆生を利益し、能く壞する者無し」と。

夢中不證品第六十一の上を釋す。

經

佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、乃至夢中にも聲聞辟支佛地を貪らず、亦三界を貪らず、諸法を見たるに夢の如く、幻の如く、響の如く、焰の如く、化の如しとして、亦證をも作さざれば、須菩提よ、當に知るべし、是れ阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相なり」と。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は夢中に佛、無數百千萬億の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・鬼神・緊那羅等の與に法を説くを見、佛に従つて法を聞き、即ち中の義を解し、法に隨つて行ず。須菩提よ、當に知るべし、是れ阿鞞跋致菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相なり」と。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩、夢中に、佛の三十二相八十隨形好より大光明を放ち、虛空に跏趺在し、大比丘僧の中に於

いて法を説き、大神力を現はして化人を化作し、他佛の國土に到りて佛事を施作するを見れば、須菩提よ、當に知るべし、是れ阿鞞跋致菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相なりと。

復次に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、夢中に、兵起り、若くは聚落を破し、若くは城邑を破し、若くは火を失する時を見、若くは虎狼獅子猛害の獸を見、若くは來りて其の頭を絞らんと欲する者を見、若くは父母喪亡し、兄弟姉妹及び諸の親友知識の死する者を見、是の如き等の種種愁苦の事を見るも、驚かず、怖れず、亦憂惱せず、夢より覺め已りて、即時に思惟すらく、三界は虛妄にして皆夢の如きのみ。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、亦當に衆生の爲に三界は夢の如しと説くべしと。須菩提よ、當に知るべし、是れ阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相なりと。

復次に、須菩提よ、云何が當に、是の阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、國中に三惡道無きを知るや。須菩提よ、菩薩摩訶薩、若し夢中に地獄・畜生・餓鬼を見れば、是の念を作す、我れ當に勤めて精進して阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國中に一切の三惡道無からしめんと。何となれば、是の夢と及び諸法とは二無く別無ければなり。須菩提よ、當に知るべし、是れ阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は夢中に、地獄の火の衆生を焼くを見て、是の誓を作す、若し我れ實に是れ阿鞞跋致ならば、是の火當に滅すべしと。是の火即ち滅す、若し地獄の火即ち滅せば、是れ阿鞞跋致の相なり。

復次に、若し菩薩は晝日に城郭より火起るを見れば、是の念を作す、我れ夢中に阿鞞跋致の行・類・相貌を見るに、我れ今實に是の者有り、自ら誓を立て言はく、是の火は當に滅すべしと。若し火滅すれば、當に知るべし、是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得て、阿鞞跋致地に住することを得。

若し火滅せずして、一家を燒きて一家を置き、一里を燒きて一里を置かば、須菩提よ、當に知るべし、燒かるる家は、破

法業の因縁厚く集ることを。是を以ての故に、一家を燒きて一家を置く、是の諸の衆生は、今世に破法の餘殃を受くるが故に燒かる。須菩提よ、是の因縁を以ての故に、當に知るべし、是れ阿鞞跋致菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相なり」と。

佛須菩提に告げたまはく、「今當に更に汝が爲に、阿鞞跋致の行類・相貌を説くべし。須菩提よ、若くは男子、若くは女人、非人の爲に持せられんに、是の時菩薩摩訶薩は是の念を作す、若し我れ過去の諸佛の爲に受記せられ、我が心清淨にして阿耨多羅三藐三菩提を求め、清淨の正道を行じ、聲聞辟支佛の心を遠離し、聲聞辟支佛の念を遠離せば、應當に阿耨多羅三藐三菩提を成すべし、我れ必ず阿耨多羅三藐三菩提を得、得ざるに非ず。十方國土の中、現在の無量の諸佛は、知らざる所無く、見ざる所無く、解せざる所無く、證せざる所無けん。諸佛は我が深心を知り、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきを審定し給はんと。是の至説の誓を以ての故に、是の男子女人は、非人の持する所と爲り、非人の惱ます所と爲るも、是の非人は當に遠く去るべし。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は是の如く誓ふも、若し非人去らざれば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は未だ過去の諸佛より、阿耨多羅三藐三菩提の記を受けざることを。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は是の如く誓ひて、若し非人去らば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、已に過去の諸佛より阿耨多羅三藐三菩提の記を受けたりと。須菩提よ、是の行類・相貌を以て、當に知るべし、是れ阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の阿鞞跋致の相なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)及び方便力を遠離し、久しく四念處を行ぜず、乃至久しく空・無相・無作三昧を行ぜず、未だ菩薩の位に入らざれば、是の菩薩は惡魔の嫉す所と爲る。菩薩は是の誓を作す、若し我れ實に諸佛より記を受けば、是の非人は當に去るべしと。是の時に、惡魔は即ち方便を作し、非人を勸して去らしむ、惡魔は威力有りて諸の非人に勝るが故に、非人は即ち去る。是の時に、菩薩は是の念を作す、我が誓力を以ての故に非人去ると。是れ惡魔の力なることを知らずして、是の證を恃むが故に、諸餘の菩薩を輕弄し毀壞して、是の言を作す、我れ已に諸佛より受記

諸の非人に勝るが故に、非人は即ち去る。是の時に、菩薩は是の念を作す、我が誓力を以ての故に非人去ると。是れ惡魔の力なることを知らずして、是の證を恃むが故に、諸餘の菩薩を輕弄し毀壞して、是の言を作す、我れ已に諸佛より受記



せり、汝等は未だ得ずと。是の空誓を用つて、方便力無きが故に増上慢を生ず。是の事を以ての故に、薩婆若を遠離し、阿耨多羅三藐三菩提を遠離す。須菩提よ、當に知るべし、是の人は二地、若くは聲聞地、若くは辟支佛地に墮することを。是の誓の因縁を以ての故に魔事を起し、是の人は善知識に親近し依止せず、阿鞞跋致の相を問はざるを以ての故に、魔の縛する所と爲ると益復堅固なり。所以は何ん、是の菩薩は久しく六波羅蜜(多)を行ぜず、方便力無きが故なり。須菩提よ、當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲すことを。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は久しく六波羅蜜(多)を行ぜず、乃至未だ菩薩の位に入らざれば、惡魔の燒す所と爲るや。須菩提よ、惡魔は變化して種種の身と作り、菩薩に語りて言はく、「汝は諸佛の所に於いて、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得、汝が字は某、汝が父の字は某、汝が母の字は某、汝が兄弟姉妹の字は某、汝が七世の父母の名字は是の如し。汝は某方、某國、某城、某聚落の中に在りて生ずと。若し菩薩の性行の和柔なるを見れば、菩薩に語りて言はく、汝は先世も亦柔和なりと。若し急性卒暴なるを見れば、便ち言はく、汝は先世にも亦爾なりと。若し菩薩の阿蘭若の行を修するを見れば、語りて言はく、汝は先世にも亦阿蘭若の行を修すと。若し世にも亦爾なりと。若し菩薩の阿蘭若の行を修するを見れば、語りて言はく、汝は先世にも亦阿蘭若の行を修すと。若し菩薩の乞食し、納衣して、中後に漿を飲まず、一坐に食し、一鉢にして食し、死屍の間に住し、露地に住し、樹下に止まり、常に坐して臥せず、跏趺坐し、但三衣を受け、若くは少欲、若くは知足、若くは遠離住、若くは不塗脚、若くは少言語なるを見れば、便ち菩薩に語りて言はく、汝は先世にも亦是の行有り。何となれば、汝は今此の頭陀の功德有り、汝は先世にも亦必ず是の功德有りたればなりと。是の菩薩は是の先世の事及び名姓を聞き、今頭陀の功德を讚するを聞き、即ち歡喜し、憍慢の心を生ず、是の時、惡魔は菩薩に語りて言はく、「汝には是の如きの功德、是の如きの相有り、汝は實に諸佛より阿耨多羅三藐三菩提の記を受けたりと。須菩提よ、惡魔は或は比丘の被服を作し、或は居士の形と作り、或は父母の身と作りて、菩薩の所に來到して是の如く言ふ、汝は已に阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり。何となれば、是の阿

善哉の功徳相をば、汝の盡く具足して之を有すればなりと。須菩提よ、我が所説の實の阿鞞跋致の行・類・相貌は、是の人永く無し。須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、魔の持する所と爲ることを、何となれば、是の阿鞞跋致の行・類・相貌は、是の人永く無うして、是の名字を聞くが故に憍慢の心を生じ、餘人を輕弄し毀壞すればなり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、魔の持する所と爲ると名く。當に知るべし、是を菩薩の魔事と爲すことを。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は久しく六波羅蜜(多)を行ぜず、名字の相を知らず、色相を知らず、受想行識相を知らざれば惡魔は來つて語つて言はく、汝が當に來世に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、是の如き名字有り。其の本念に隨つて其の名號を説く。是の智無く方便無き菩薩は是の念を作す、我先にも亦是の成佛の名號の有りて念ず。是の人ば我が念する所の如く説く、是の人の所説は我本念に合す。我れ必ず諸佛の受記する所と爲らんと。須菩提よ、我が説く所の阿鞞跋致の行・類・相貌は、是の人永く無し。但空の名字を以て、餘人を輕弄し毀壞す。是の事を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を遠離す。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を遠離し、方便力無く、善知識を遠離して、惡知識と相得るが故に、二地(即ち)聲聞と辟支佛地に墮す。若し即ち、是の身に過を悔ゆること有れば、久しく生死の中に往來し、然る後に還た般若波羅蜜(多)に依止す。若し善知識に値へば、常に隨逐し親近するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の人ば是の身に於いて、若し即ち悔いざれば、當に二地(即ち)若くは阿羅漢地、若くは辟支佛地に墮すべし。須菩提よ、譬へば比丘、四重禁法に於て、若し一事を犯さば、沙門に非ず、釋子に非ずして、是の人ば現身に四沙門果を得ざるが如し。須菩提よ、是の空の名字に著する菩薩の心も亦是の如く、餘人を輕弄し毀壞するが故に、當に知るべし、是の罪は比丘の四禁よりも重きことを。須菩提よ、是の重罪を置けば、是の罪は五逆よりも過ぎたり。是の名字を受くるを以ての故に高心を生じ、餘人を輕弄し毀壞す。若し是の心を生ぜば、當に知るべし、其の罪は甚だ重しと。是の如き名字等の微細の魔事、菩薩は當に覺知すべし。

復次に、須菩提よ、菩薩の空閑山澤曠遠の處に在るや、魔は菩薩の所に來到し、遠離の法を讚歎して是の言を作す、善男子よ、汝の所行は是れ佛の稱譽したまふ所の遠離の法なりと。須菩提よ、我は是の遠離、所謂る但空閑山澤曠遠の處に在るのみを讚せずと。須菩提言さく、「世尊よ、若し空閑山澤曠遠の處、遠離の法に非ずんば、云何が更に異なる遠離有るや」と、佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩は聲聞辟支佛の心を遠離して、空閑山澤曠遠の處に住せば、是れ佛の許したまふ所の遠離の法なり。須菩提よ、是の如き遠離の法は、菩薩摩訶薩の應に修行すべき所なり。晝夜に是の遠離法を行する是な遠離行の菩薩と名く。須菩提よ、若し惡魔所説の遠離の法は、空閑山澤曠遠の處なり。是の菩薩の心は憤悶に在り。所謂聲聞辟支佛の心を遠離せず、般若波羅蜜(多)を勤修せざれば、是の菩薩摩訶薩は一切種智を具足すること能はず。是の菩薩は惡魔所説の遠離の法を行じ、心清淨ならず、而も餘の菩薩の城の傍に心を淨め、聲聞辟支佛の憤悶無く、亦諸餘の雜惡心無く、禪定解脱智慧神通を具足する者を輕んず。是の般若波羅蜜(多)を離れて、方便無き菩薩摩訶薩は、絶曠百由旬の外、禽獸鬼神羅刹の所住の處に在りて、若くは一歳、百千萬億歳、若くは萬億歳を過くと雖も、是の菩薩の遠離の法所謂諸の菩薩、是の遠離法を以て、深心に阿耨多羅三藐三菩提を發し、雜行せざるを知らず、是の菩薩は憤悶の行を受くるに依つて是の遠離の法に著す。是の人の行する所は、佛の許したまはざる所なり。須菩提よ、我が説く所の實の遠離の法は是なり。菩薩は是の中に在らず、亦是の遠離の相を見ず。何となれば但是れ空遠離のみを行するが故なり」と。爾の時、惡魔來りて、虛空中に在りて住し、讚じて言はく、「善哉、善哉、善男子よ、此は是れ佛の説きたまふ所の眞の遠離の法なり。汝は是の遠離を行ぜば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得」と。是の菩薩摩訶薩は是の遠離に念著して、諸餘の佛道を求むる清淨の比丘を輕易し、以て憤悶と爲す、憤悶を以て憤悶ならずと爲し、憤悶ならざるを以て憤悶と爲し、恭敬すべきを向も恭敬せず、恭敬すべからざるを而も恭敬す。是の菩薩は是の言を作す、非人、我を念じ、來りて我を稱讚す。我が

所行は是れ眞の遠離なりと。域傍に住する者、誰か當に稱美すべけんや。汝は是の因縁を以ての故に、餘の菩薩摩訶薩を輕んず。須菩提よ、當に知るべし、是を菩薩の旃陀羅と名け、諸の菩薩を汚染す。是の人は似像の菩薩、實に是れ天上人中の大賊、亦是れ沙門被服中の賊なり。是の如き人は、諸の佛道を求むる者の親近すべからず、供養恭敬すべからざる所なり。何となれば、須菩提よ、當に知るべし、是の人は増上慢に墮すればなりと。是を以ての故に、若し菩薩摩訶薩、一切の智を捨てざらんと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲し、一心に阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲し、一切衆生を利益せんと欲せば、應に是の人に親近し恭敬し供養すべからず。菩薩摩訶薩の法に常に應に自利を勤求し、世間を厭患し、心に常に三界を遠離すべし。是の人に於いて當に慈悲喜捨の心を起すべし。我れ菩薩道を行じ、應に是の如き過罪を生ずべからずと。若し生ぜば、當に疾く滅すべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩は當に善く是の事を覺り、是の事申より、善く自ら勉めて出づべし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は深心もて、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に善知識に親近し恭敬し供養すべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の善知識なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸佛は是れ菩薩摩訶薩の善知識なり。諸の菩薩摩訶薩も亦是れ菩薩の善知識なり。須菩提よ、阿羅漢も亦是れ菩薩の善知識なり。是を菩薩摩訶薩の善知識と爲す。

復次に、須菩提よ、六波羅蜜(多)も亦是れ菩薩の善知識なり。四念處乃至十八不共法も亦是れ菩薩の善知識なり。須菩提よ、如、實際、法性も亦是れ菩薩の善知識なり。須菩提よ、六波羅蜜(多)は是れ道、六波羅蜜(多)は是れ大明、六波羅蜜(多)は是れ炬、六波羅蜜(多)は是れ智、六波羅蜜(多)は是れ慧、六波羅蜜(多)は是れ救、六波羅蜜(多)は是れ歸、六波羅蜜(多)は是れ洲、六波羅蜜(多)は是れ究竟道、六波羅蜜(多)は、是れ父、是れ母なり。四念處乃至一切

種智も亦是の如し。何となれば六波羅蜜(多)三十七道法も亦是れ過去諸佛の父母なり、六波羅蜜(多)三十七道法も亦是れ未來現在の十方諸佛の父母なればなり。何となれば須菩提よ、六波羅蜜(多)三十七道法の中に過去未來現在の十方諸佛を生ずればなり。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得、佛世界を淨め、衆生を成就せんと欲せば、當に六波羅蜜(多)三十七の道法を學し、及び四攝法もて衆生を攝取すべし。何等か四なる。布施・愛語・利・同事なり。須菩提よ、是の利益を以ての故に、我は言ふ、六波羅蜜(多)及び三十七道法は是れ諸の菩薩摩訶薩の世尊なり。是れ道なり、是れ大明なり、是れ炬なり、是れ智なり、是れ慧なり、是れ救なり、是れ歸なり、是れ洲なり、是れ究竟道なり、是れ父なり、是れ母なりと。須菩提よ、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は他人の教に隨つて住せざらんと欲し、一切衆生の疑を斷ぜんと欲し、佛世界を淨め、衆生を成就せんと欲せば、當に是の般若波羅蜜(多)を學すべし。所以は、何んとなれば、是の般若波羅蜜(多)の中に廣く諸法を説き、是れ菩薩摩訶薩の所應の學處なればなりと。

論

問うて曰く、(六)阿鞞跋致品中に已に廣く阿鞞跋致の相を説けり。今

何を以てか更に説くや。答へて曰く、所説の般若波羅蜜(多)の義は皆是れ阿鞞跋致の相なり。但阿鞞跋致品の中には多く其の事を説く。餘品の中にも亦處處に阿鞞跋致の相を説くと有り、但不次第なり。有人は亦後來の衆生の爲に、異語を以て阿鞞跋致の相を説く。(一)有人の言はく、「二種の阿鞞跋致有り、一には已に記を得、二には未だ記を得ず。(一)授記を得るに二種有り、一には現前の授記、二には

- 【六】 第四問、前の阿鞞跋致品中に已に不退の相を廣説せり、今復た此に之を説くは何故なるか。
- 【七】 二種の不退。(一)已得記、(二)未得記。
- 【八】 二種の授記。(一)現前、(二)不現前。

現前ならざる授記なり。(一九) 現前ならざる授記に二種有り。一に具足せる授記の因縁、二には未だ具

足せざる授記の因縁なり。具足せる授記の因縁とは、諸法實相を知り、六波羅蜜(多)を具足するなり。

見足せざる授記の因縁とは、但諸法實相のみを知りて般若波羅蜜(多)の分を得、餘の波羅蜜(多)を未

だ具足せざるなり。是の菩薩は能く阿鞞跋致の菩薩の如く答ふ。此は是れ前品の末に説く所の阿鞞跋

致なり。是の故に次第に説く。夢中に二地を食らざれば、未だ阿鞞跋致法を具足せずと雖も、亦阿鞞

跋致と名く。是の如き等の阿鞞跋致相を説かんと欲するが故に、此の品中

に次第に説く。是の菩薩は晝日常に空を修行するが故に、夜夢中にも亦三

界を食らず、是の人は常に慈悲心を衆生に行じ、深く佛を樂しむが故に、

二乗を食らず、若くは夢、若くは覺めて、一切法は夢の如く、幻の如し等

と觀す。是の菩薩は未だ現前の授記を得ず、餘法未だ具足せずと雖も、亦

阿鞞跋致の相と名く。何となれば、菩薩は二處に於いて退轉す、一には世間の樂に著するが故に轉

じ、二には二乗を取るが故に轉ず。是の菩薩は堅心もて深く空及び慈悲心に入るが故に、乃至夢中に

も亦三界二乗を食らず、何に況んや、覺むる時をや。

復次に、(二〇) 若し菩薩は夢に、佛、人天の大衆の中に在りて、説法、所謂の諸法實相の義を説きたま

ふを見れば、菩薩は是の義を知りて、心と法と合す。復次に、諸佛の祕密の法をば、菩薩は夢中に見るこ

【一九】 二種の不現前授記。(一) 具足。(二)未具足。

【二〇】 菩薩は二處に於て退轉するなり。

【二一】 若菩薩、佛の説法を見れば、其の心、法と合す。

とを得。所謂る佛身の無量にして須彌山に過ぎ、色は閻浮檀金の如く、三十二相、八十種隨形好を以て自ら莊嚴し、無量の光明を放ち、梵音聲もて法を説き、及び身の毛孔より無量の化佛を出だし、十方に至りて種種の方便力もて佛事を施作し、衆生を度脱したまふを見る。爾の時、是の菩薩は、是の佛の神通力を見るが故に、深心清淨にして佛法を問ひ、諸法實相を得、是を阿鞞跋致と名く。是の菩薩は常に畢竟空を行ずるが故に、我我所等の諸の煩惱を折薄し、乃至自ら身を惜まざる。何に況んや、餘の親をや。是の因縁の故に、若くは夢中に、若くは自身、若くは父母等の、若くは殺され、若くは死する因縁、及び聚落の破する等を見るも、憂惱怖畏せず。(三) 覺め已りて思惟すらく、「夢中には死せざるを而も死すと見、畏れざるを而も畏ると見るが如く、一切の三界も皆爾なり。何ぞ但夢中のみならん。我れ佛と作る時、當に衆生の爲に、諸法は畢竟空にして、皆夢の如しと説かん」と。

復次に、有る菩薩は國土を清淨にする因縁を種うる時、是の願を作す、「我れ爾許の時、淨國土の行を積集し、是の心を修習するが故に、夢中に若し三惡道の衆生を見る時は、即ち是の心を得、我れ佛と作る時、我が國土をして乃至三惡道の名すら無からしめん」と。

復次に、(三) 是の菩薩は常に慈悲心を修するが故に、夢中に地獄の火の衆生を焼くを見て、誓を作す

【三】 夢中には死せざるを死すと見、又畏れざるを畏ると見る。三界も亦爾り。  
【三】 夢中に地獄の火の衆生を焼くを見て、誓を作すに、火即ち滅す。

に火は即ち滅す。覺め已りて是の相を取る。若し實の火の城郭を焼くを見ては是の念を作す、「我れ夢中に能く火を滅す、此の火も亦當に滅すべし。何となれば、佛は夢と覺と異なること無しと説きたまへばなり」と。是の菩薩は無量劫に於いて福德を修習し、諸法實相を得るが故に、鬼神龍王等は助けて是の火を滅す。其の中に滅せざるもの有り。一家を燒きて一家を置くは、是れ衆生の重罪の故なり。菩薩の福德智慧力も重罪の者を滅すると能はず。所謂破法業なり。法とは般若波羅蜜(多)なり。諸餘の法の利益は般若波羅蜜(多)に及ぶ者無し。是の故に破する者は罪重し。菩薩の誓力を以ての故に次第に燒けず、唯罪重き者は救はず妨げず。是れ阿鞞跋致の相なり。非人の所持も亦火を呪するが如し。有菩薩は未だ無生法忍を得ざるも、是の阿鞞跋致の呪を聞くが故に鬼去る。便ち呪を作す、是の菩薩は自ら未だ力有らざるなり。魔來つて鬼神を遣るが故に、自ら恃んで己が力と爲す。是の如くして去ること有るが故に、佛は示して覺知せしめたまへり。

復次に、菩薩未だ正位に入らざれば、魔は種種の形と作り、其の念に隨つて示して語るらく、「汝は已に受記を得、汝は是の相有り、但肉眼を以ての故に知らず」と。是の因縁を以ての故に増上慢を生じ、餘人を輕慢す。

復次に、菩薩は諸法實相を得ざれば、色等の五衆の和合の邊に更に名字の相有ることを知らず。魔來りて受記を與へ、「汝は當に佛と作るべく、名字は某甲なり」と。是の菩薩は思惟すらく、「我は本是



れ名字の念有り、今説く所の者は我が願ふ所に同じ、必ず是れ諸佛の授記なり」と。是の故に心に憍慢を生じ、餘の大菩薩を輕んず。是の因縁を以ての故に、無上道を遠離し、罪を受け畢つて二乗に墮す。若し即ち此の身に悔い、久久しうして罪を償ひ畢らば、還般若波羅蜜(多)に依止し、佛と作るとを得べし。何となれば若し身を轉じて乃ち悔ゆるも、則ち罪重くして滅し巨く、佛と作ることを得ざれば、是の心は、是の空の名字に著し、重罪を得るが故なり。佛は四重禁の因縁を説きたまへり。是の重禁を破すれば、現身に四道果を得ず。何となれば、是の四禁中に妄語して、我は是れ阿羅漢なりと稱し、此の中に是の受戒の名字に著し、自ら言はく、我れ當に作佛すべしと。是の故に四禁より重し。五逆罪に過ぎたりとは、地獄の品中に般若波羅蜜(多)を破する罪を説くが如し。微細の魔事とは、細は不逆に名く。其の意は、其の本念に隨つて其の心を助成す。是の菩薩は未だ阿鞞跋致法を得ざれば、魔の誑言を已に得ば、是れ微細の魔事なり。利根の菩薩は應に覺し除き遠離すべし。

復次に、菩薩は遠離の處に在るに、魔來つて讚歎すらく、汝は能く親族同學を遠離して、獨り深山林中に在り、佛道の爲の故に、是を眞の菩薩道の行と爲すと。是の菩薩は是を用ふるが故に、憍慢の心を生じて、餘の衆中に在りて住する菩薩を輕んず。是の事を以ての故に、佛道を遠離して二乗に墮す。佛は種種の因縁もて、是の菩薩を是れ賊、是れ旃陀羅なり等と呵したまふ。經中に説くが如し。佛の所説に親近して遠離すべからず。心二乗、三界を離るるは是を眞の遠離と名く。經中に廣く

説くが如し、是の如き等の細微の魔事を、應當に覺して而して遠離すべし。

復次に、菩薩は深心に無上道を得んと欲す、深心を一心と名く。重心は深く佛道を愛し、一切世間の樂とする所を出で、當に善知識に親近すべし。何となれば、二の因縁有るが故に無上道を得。一には内、二には外なり。内とは正憶念に名け、諸法を思惟し籌量するなり。外とは善知識に名く。佛は餘處に種種に善知識の相を説きたまふ。是の故に須菩提は佛に問ふらく、世尊よ、何等か是れ菩薩の善知識なると。佛、答へたまはく、諸佛、大菩薩及び聲聞は是れ諸佛の善知識なり。六波羅蜜「多」乃至一切種智、如法性實際等の諸法も亦是れ善知識なり。法は能く其の事を成辦するが故に、六波羅蜜「多」等の諸法を説いて善知識と名く。三種の聖人は、此の六波羅蜜「多」の法を以て、菩薩をして奉行して佛と作ることを得せしむ。是の故に法及び人を通じて善知識と名く。

【二四】 第五問、佛及び六度は善知識なるべきも、二乗は云何にして善知識たり得るか。

問うて曰く、佛及び菩薩の六波羅蜜「多」は、能く菩薩を成ずるが故に、應に是れ善知識なるべし、小乗の道は異なる、云何が能く與に善知識と作るや。答へて曰く、有る小乗の人は、先世に佛道を求むるが故に利根なり。是れ小乗なりと雖も、憍愨の心有りて、應に大乘を成すべき者を觀て、爲に大乘法を説く。佛恩を報ずることを知るが故に、佛種をして斷せざらしむ。舍利弗の如きは、六十劫佛道を求め、退轉して阿羅漢と作ると雖も、亦利根の智慧もて能く菩薩の爲に大乘を説く。須菩提は常

に無誣三昧を行じ、常に衆生に於いて慈悲心有るが故に、亦能く菩薩大乘の法を教化す。摩訶迦葉の如きは、神通力を以て此の身を持ち、彌勒の出世に至り、九足山中より出でて大衆の輿に得道の因縁と作る。是の如き等は甚だ多し。

問うて曰く、**六波羅蜜〔多〕**は一切法を攝す。今何を以てか別して三十七品を説き、**如法性實際**に至るや。答へて曰く、**六波羅蜜〔多〕**は是れ略説なり、**四念處等**は是れ廣説なり。**六波羅蜜〔多〕**を解するに、**六波羅蜜〔多〕**は是れ菩薩の初道にして少しく遠く、**三十七品**は是れ近因縁なり。**六波羅蜜〔多〕**の中に於いて、**禪〔那〕波羅蜜〔多〕**、**般若波羅蜜〔多〕**は最大なり。譬へば星宿有りと雖も、日月は最勝なるが如し。是の**二波羅蜜〔多〕**の中に、**四念處**、**佛の十力等**の法は最妙にして能く大に現世を利益し、人をして得道せしむるが故に、**持戒**、**布施等**は〔是に〕如かざるが故に別に説くなり。如等の無爲法は實にして虚誑ならざるが故に、能く菩薩の事行を成す。**四念處等**の法は、是の如等の法を得、菩薩をして虚誑の法を得せしむるが故に善知識と名く。

復次に、是の**六波羅蜜〔多〕**等の法は、佛の如くにして異なること無し。佛は現在も亦是の法を以て人を度したまふ、是の故に**世尊**と言ふ。世尊の所説は壞すべからざるが如く、**六波羅蜜〔多〕**等の所説も亦壞すべからず、是の故に**六波羅蜜〔多〕**は是れ**世尊**なりと言ふ。是れ道なりとは、是の道徑を行きて、

【五】第六問、六度中に一切法を攝す、今それ別して三十七品及び法性實際等を説くは何故なるか。

無量むりやうの佛法ぶつぽふの中なかに入る。六波羅蜜はろみつた〔多〕の中なかの所説しよせつを、人ひとは籌量ちゆうりやうし、思惟しゆいし、分別ぶんべつし、常つねに修行しゆぎやうして人ひとをして大智慧だいぢゐを得え、諸もろもろの世間せけんの無明むみやうを破はせしむ。是この故ゆゑに、六波羅蜜はろみつた〔多〕は是れ大明だいみやうなり、是れ大炬だいこなり、是れ智ちなり、是れ慧ゑなり、是れ救きうなり、是れ歸きなり、是れ洲しうなり、是れ究竟くきやう道だうなりと説とく。上かみに説とくか如ごとくんば、般若波羅蜜はんぱはろみつた〔多〕は是れ母ははなり、五波羅蜜はろみつた〔多〕は是れ父ちちなり、和合わがふして説とくが故ゆゑに六波羅蜜はろみつた〔多〕は是れ父母ふぼなりと言いふ。六波羅蜜はろみつた〔多〕の如ごとく、四念處ねんじよ等たうを説とくも亦是またの如ごとし。是この中なかに因縁いんねんを説とく、六波羅蜜はろみつた〔多〕等たうの法ほふも亦是またれ三世十方佛さんぜじふぱうぶつの父母ふぼなり。是この六波羅蜜はろみつた〔多〕等たうは是れ自利じりの法ほふなり、行者ぎやうじやは六波羅蜜はろみつた〔多〕を以もつて衆生しゆじやうを教化けうけし、佛世界ぶつせかいを淨きよめんと欲ほつせば、應まさに四攝法しゆしやくほふを以もつて衆生しゆじやうを攝取せしゆすべし。四攝法しゆしやくほふの義ぎは先さきに説とくが如ごとし。是この如ごとく、自利じりと利他りたの故ゆゑに、佛ほとけは六波羅蜜はろみつた〔多〕、三十七品等さんじちひんたうの諸法しよほふは是れ世尊せそんなり。是れ道等だうたうなりと説ときたまへり。是この故ゆゑに、菩薩ぼさつ若たし他教たけうに隨したがはず、他教たけうの名なに隨したがはず自みづから諸法實相しよほふじつさうを知しり、乃至佛身乃至ぶつしんを變作へんさくして來きたり説とくも、法相ほふさうに異ことならば亦また信しんせず、隨したがはず、自みづから菩薩道ぼさつだうを得え、漸漸ぜんぜんに諸もろもろの佛法ぶつぽふを具足ぐそくし、佛世界ぶつせかいを淨きよめ、衆生しゆじやうを成就じやうじゆし、佛道ぶつだうを得えて能よく一切衆生いつさいしゆじやうの疑ぎを斷だんせんと欲ほつし、若もし是これを得えんと欲ほつせば、當まさに般若波羅蜜はんぱはろみつた〔多〕中ちゆうの世間せけん、出世間しゆつせけんを若もしくは小せう、若もしくは大だいの事じとして説とかざる無なきを學がくすべし。

# 巻の第七十七

## 二 夢中不證品第六十一の下の下を釋す。

經

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ般若波羅蜜(多)の相なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「如虚空の相、是れ般若波羅蜜(多)の相なり。須菩提よ、般若波羅蜜(多)は無所有の相なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「願し因縁有らば、般若波羅蜜(多)の相の如く、諸法の相も亦是の如くなるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し、般若波羅蜜(多)の相の如く、諸法の相も亦是の如し。何となれば、須菩提よ、一切の法は離相空相なり。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、般若波羅蜜(多)の相の如く、諸法の相も亦是の如し。所謂離相空相なればなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法一切法離、一切法相一切法相空ならば、云何が衆生の若くは垢、若くは淨なることを知るや。世尊よ、離相の法、垢なく、淨なく、空相の法は垢なく、淨なく、離相空相の法は阿耨多羅三藐三菩提を得ると能はず。(そは、離相空相は法として得べきもの無ければなり。世尊よ、離相中、空相中には菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得ること無し。世尊よ、我は云何が當に佛の所説の義を知るべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、是の衆生は長夜に我が所の心を行するや不や」と。「是の如し、世尊よ、衆生は長夜に我が所の心を行す」と。「汝が意に於いて云何、是の我が所の心は離相なりや不や、空相なりや不や」と。須菩提、言さく、「世尊よ、我が所の心は離相空相なり」と。「汝が意に於て

【一】 以下般若波羅蜜多の理を説く。

云何、此の我我所の心を以て衆生は生死の中に往來するや不や」と。「是の如し、世尊よ、此の我我所の心を以て、衆生は生死の中に往來す」と。「是の如し、須菩提よ、衆生は生死の中に往來するが故に、垢惱有ることを知る。須菩提よ、若し衆生に我我所の心無く、著心無くんば、是の衆生は復た生死の中に往來せざらん。若し生死の中に往來せずんば、則ち苦惱無けん。是の如く、須菩提よ、衆生に淨有り」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩の是の如く行ぜざるをば、色を行ぜず、受想行識を行ぜずと爲し、四念處乃至入聖道を行ぜずと爲し、内空乃至無法有法空を行ぜずと爲し、佛の十力乃至一切種智を行ぜずと爲す。何となれば、是の法は得べからず、亦行者も無く、亦行處も無く、亦行法も無ければなり。世尊よ、菩薩摩訶薩、是の如く行すれば、一切世間の諸の天人阿修羅は、是の菩薩摩訶薩を降伏すること能はず。一切の聲聞辟支佛の及ぶこと能はざる所なり。何となれば、所住の處、能く及ぶ者無ければなり。所謂菩薩の位なり。世尊よ、是の菩薩摩訶薩の行は薩婆若心に應じ、能く及ぶ者無し」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く行じて、疾く薩婆若に近づく。

須菩提よ、汝が意に於いて云何、若し闍浮提の衆生、盡く人身を得已つて、皆阿耨多羅三藐三菩提を得んに、若し善男子善女人有りて、其の形壽を盡くして、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、是の善根を持して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、是の人ば是の因縁を以て、福を得ること多きや不や」と。須菩提言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子善女人、大家の中に於いて、是の般若波羅蜜(多)を説き、出示し、分別し、照明し、開演し、亦般若波羅蜜(多)に應じて行じ正憶念す、其の福多きに如かず、乃至三千大千世界の中の衆生も亦是の如し。

須菩提よ、汝が意に於いて云何、闍浮提中の衆生、一時に皆人身を得、人身を得已つて、若し善男子善女人をして、十善道・四禪・四無量心・四無色定を行ぜしめ、(彼等をして)須陀洹道乃至阿羅漢辟支佛道を得せしめ、阿耨多羅三藐三菩提を

得せしめ、是の善根を持って阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、須菩提よ、汝が意に於いて云何、是の善男子善女人は福を得ること多きや不や」と。須菩提言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、是の甚深の般若波羅蜜(多)を以て衆生の爲に説き、出示し、分別し、光明し、照明し、開演して、亦薩婆若を離れざるの、福を得ること多きに如かず。乃至三千大千世界も亦是の如し。是の菩薩摩訶薩は薩婆若心に應ずる心な遠離せざれば、則ち一切の福田の邊に到る。何となれば、諸佛を除きて、餘法の菩薩摩訶薩の如き勢力有るもの無ければなり。何となれば、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行ずる時、一切衆生の中に於いて大悲(悲)心を起し、諸の衆生の死地に趣くを見て、故らに而も大悲を起し、是の道を行ずる時、歡悅して大喜を生じ、想と俱ならず、便ち大捨を得ればなり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の大智の光明と爲す。

大智の光明とは所謂六波羅蜜(多)なり。須菩提よ、是の諸の善男子は未だ佛と作らずと雖も、能く一切衆生の爲に大福田と作り、阿耨多羅三藐三菩提に於いても亦轉ぜず。受くる所の供養・衣服・飲食・臥具・牀敷・疾藥・資生の所須、般若波羅蜜(多)に應ずる念を行じて、能く畢に施主の恩に報じ、疾く薩婆若に近づく。是を以ての故に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、虚しく國中の施を食はざらんと欲し、衆生に三乘道を示さんと欲し、衆生の爲に大明と作らんと欲し、三界の牢獄より拔出せんと欲し、一切衆生に眼を與へんと欲せば、應に常に般若波羅蜜(多)を行すべし。般若波羅蜜(多)を行ずる時、若し説くこと有らんと欲せば、但般若波羅蜜(多)のみを説き、般若波羅蜜(多)を説き已りて、常に般若波羅蜜(多)を憶念し、常に般若波羅蜜(多)を憶念し已りて、常に般若波羅蜜(多)を行じ、餘念をして生ずることを得せしめず。晝夜に勤めて、般若波羅蜜(多)を行じ、相應の念息ます休まず。須菩提よ、譬へば、士夫の未だ曾つて摩尼珠を得ざるが如し。後時に得、得已つて大に歡喜踊躍し、後復た之を失して、便ち大に憂愁し、常に是の摩尼珠を憶念して、是の念を作す、われ奈何ぞ忽にして此

の大寶珠を亡ふやと。須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦是の如く、常に般若波羅蜜(多)を憶念して薩婆若心を離れず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、一切の念性は自ら離れ、一切の念性は自ら空なり、云何ぞ菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて薩婆若に應ずる念を離れざるや。是の遠離の空法の中には、菩薩無く、亦念も無く、薩婆若に應ずることも無し」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩は是の如く、一切法性は自ら離れ、一切法性は自ら空なるを知らば、聲聞辟支佛の作に非ず、亦佛の作に非ず、諸法の相は常に法相法住法位如實際に住す。是を菩薩の般若波羅蜜(多)を行じて、薩婆若を離れざる念と名く。何となれば、般若波羅蜜(多)は、性自ら離れ、性自ら空にして、不増不減なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し般若波羅蜜(多)は性自ら離れ、性自ら空ならば、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)と等しく、阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)と等しく不増不減なり。何となれば、如法性、實際は不増不減なればなり。所以は何となれば、般若波羅蜜(多)と一に非ず、異に非ざればなり。若し菩薩、是の如きの般若波羅蜜(多)の相を聞いて、心驚かず、没せず、畏れず、怖かず、疑はざれば、須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行すること。當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は必ず阿鞞跋地の中に住すること」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は空にして所有無く堅固ならず。是は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、空を離れて更に法として行する般若波羅蜜(多)ありや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、色は是れ般若波羅蜜(多)を行するや不

増不減なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は空にして所有無く堅固ならず。是は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、空を離れて更に法として行する般若波羅蜜(多)ありや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、色は是れ般若波羅蜜(多)を行するや不

増不減なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は空にして所有無く堅固ならず。是は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、空を離れて更に法として行する般若波羅蜜(多)ありや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、色は是れ般若波羅蜜(多)を行するや不

増不減なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は空にして所有無く堅固ならず。是は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、空を離れて更に法として行する般若波羅蜜(多)ありや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、色は是れ般若波羅蜜(多)を行するや不

増不減なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は空にして所有無く堅固ならず。是は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、空を離れて更に法として行する般若波羅蜜(多)ありや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、色は是れ般若波羅蜜(多)を行するや不

増不減なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は空にして所有無く堅固ならず。是は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、空を離れて更に法として行する般若波羅蜜(多)ありや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、色は是れ般若波羅蜜(多)を行するや不

増不減なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は空にして所有無く堅固ならず。是は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、空を離れて更に法として行する般若波羅蜜(多)ありや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)を行するや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、色は是れ般若波羅蜜(多)を行するや不

増不減なればなり」と。



や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、受想行識は是れ般若波羅蜜(多)を行ずるや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、六波羅蜜(多)は是れ般若波羅蜜(多)を行ずるや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、四念處乃至十八不共法は是れ般若波羅蜜(多)を行ずるや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、色は空相にして虚誑不實、無所有にして、不堅固の相なり、色の如相・法相・法住・法位・實際は是れ般若波羅蜜(多)を行ずるや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、受想行識乃至十八不共法は、空相虚誑不實にして所有無く、不堅固の相なり。如・法相・法住・法位・實際は是れ般若波羅蜜(多)を行ずるや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、若し是の諸法、皆般若波羅蜜(多)を行ぜずんば、云何なる行をか菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行ずと名くるや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、汝は法として般若波羅蜜(多)を行ずる者あるを見るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、汝は般若波羅蜜(多)を菩薩摩訶薩の行す可き處と見るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、汝が見ざる所の法、是の法を得べきや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、若し法得べからずんば、是の法は當に生ずべきや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の無生法忍と名く。菩薩摩訶薩は是の忍を成就して、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得。須菩提よ、是を諸佛の無所畏無礙智と名く。菩薩摩訶薩は是の法を行じ、勤精進して、若し大智一切種智、所謂阿耨多羅三藐三菩提を得ずとは、智者は是の處有ると無し。何となれば、是の菩薩摩訶薩は無生法忍を得るが故に、乃至阿耨多羅三藐三菩提は減ぜず退かざればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸法は生相なり、此の中に阿耨多羅三藐三菩提の記を得るや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、諸法は生相なり、此の中に阿耨多羅三藐三菩提の記を得るや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、諸法の非生非不生の相は、阿耨多羅三藐三菩提の記を得るや不や」と。「不なり、須菩提よ」と。「世尊よ、諸の菩薩摩訶

薩は云何が諸法を知りて、阿耨多羅三藐三菩提の記を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝は法として、阿耨多羅三藐三菩提の記を得るものあるを見るや不や」と。「不なり、世尊よ、我は法として、阿耨多羅三藐三菩提の記を得るものあるを見ず。我れ亦法を得る者、得る處有ることを見ず」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、一切法に於いて所得無ければ、時に是の念を作さず、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。是の事を用て、阿耨多羅三藐三菩提を得。是を阿耨多羅三藐三菩提處と名く。何となれば、諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて、諸の憶想分別無ければなり。所以は何ん、般若波羅蜜(多)の中には諸の分別憶想無ければなり」と。

論

問うて曰く、**上**に已に種種に般若の相を説けり。今何を以てか更に問ふや。答へて曰く、般若波羅蜜(多)は第一微妙にして、聞く者厭足すること無く、満つる時無し。一定の相無きが故に難ずべからず。十住の大

【一】 第一問、上に已に般若の相を説けり、然るに今復た更に問ふは何故なるか。

菩薩の如きすら、般若波羅蜜(多)に於いて猶未だ満足せず、何に況んや、須菩提は小乘人なるをや。復次に、上に種種に般若は是れ父なり、是れ母なり等と讚するを聞けり、是の故に更に問ふなり。

佛は須菩提の問に因り、餘の衆生の爲の故に廣く般若波羅蜜(多)の相を説きたまふ。「須菩提よ、所謂虚空の相は是れ般若波羅蜜(多)の相なり。虚空は色相無く、非色相無きが如く、般若波羅蜜(多)も亦是の如く一無所有の相なり」と。須菩提、更に問ふ。「頗し因縁有らば、諸法の相は般若の相の如くなりや不や」と。佛、答へたまはく、「一切法は究竟空。究竟離相有るが故に、般若波羅蜜(多)の相の如

く、一切法も亦是の如しと説く」と。須菩提難すらく、「若し一切法は離相空相ならば、云何が垢淨有  
 ることを知り、云何が菩薩は無上道を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云  
 何、衆生は長夜に我我所等を行ずるや」と。是の佛の所説の義は、我我所の如きは畢竟無なり、衆  
 生は狂顛倒の因縁の故に諸の煩惱を生じ、煩惱の因縁の故に業有り。業因縁の故に生死の中に往來  
 す、是の事は本末空なり。何となれば、我無きが故に、我所の心は虚誑なればなり。我所の心虚誑な  
 るが故に、諸餘の因果もて展轉せる法は皆是れ虚誑なり。若し般若波羅蜜(多)の實智慧に因りて五衆  
 を觀せば、無常苦空無我なり。自相を離れ、自相空にして、本より來た  
 畢竟不生なり。爾の時、**【三】** 我我所の心則ち滅す、日出づれば衆冥皆除くが  
 如し。我我所の心滅するが故に、餘の煩惱滅し、餘の煩惱滅するが故に、  
 業因縁も亦滅し、業因縁滅するが故に、生死の中に往來することを斷ず、是を名けて淨と爲す。一切  
 法相は皆空なりと雖も、亦是の如き因縁を以ての故に淨有り、垢有り。爾の時に、須菩提は佛語を思  
 惟し、籌量し已つて、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩の是の如き行は、實に色等の一切法を行せ  
 ず。何となれば、是の菩薩は是の法に、若くは行じ、行ずる處、行ずる者を得ざればなり。世尊よ、  
 若し菩薩、能く是の如く行すれば、一切の人天世間は、能く降伏する者無けん」と。世間の人は皆假  
 名に著し、是の行者は實法を行す。是の故に伏すること能はず。世間の人は一切の虚誑顛倒及び虚誑

**【三】** 衆生は狂顛倒の故に生死  
 に往來す。

**【四】** 淨の意義。

の果報に著し、是の菩薩は畢竟空中に於いてすら尙著せず、何に況んや餘法をや。是の如くんば、云何が天人阿修羅に降伏すべけんや。世間とは是れ三種の善道なり。中に智慧人有るが故に、伏するのと能はずと説く。又復た一切の聲聞辟支佛の及ぶこと能はざる所なりとは、上の三善道は、未だ道を得ざる人に據る。此の中には、得道の者も及ぶ能はざることを説き、此の中に及ぶ能はざる因縁を説く。所謂菩薩、法位に入れば、一切の魔、魔の所使の能く惱ます者無し。是の菩薩は常に行じて薩婆若心に應ずれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提に近づく。何となれば、一切法に著せず、常に一切の助道法を集むればなり。佛は其の言を可として讃じたまふ。佛は是の如き智慧を以て他人の爲に説かんと欲するが故に、先づ菩薩自らの利益を讃じ、今他を利益し、福德果報を分別するが爲の故に、須菩提に問ひたまはく、「汝が意に於いて云何、閻浮提の衆生は盡く人身を得るや」と。經に廣く説くが如し。乃至薩婆若に應ずる心は一切の福田の上に出づ。是の中に因縁を説く。若し菩薩、能く自ら般若波羅蜜「多」を行じ、亦能く他をして教化す。是の人は一切の福田に於て能く其邊に到る。福田とは、須陀洹乃至佛なり。是の菩薩は、能く所説の如く、般若を履行すれば、則ち佛と作ることを得。餘の福德善法は般若波羅蜜「多」を離るるが故に皆盡く。般若波羅蜜「多」は盡くべからざるが故に、餘の福德有ること無しと言ふ。菩薩摩訶薩の力勢の如しとは、是の中に自ら因縁を説く。菩薩は般若を行ずる時、諸法の平等忍を得、平等忍を得るが故に、空を行すと雖も、亦能く四無量心を生ず。四無量心

中の大悲は、是れ大乘の本なり。衆生の死法に就くを見ること、囚の戮を受くるが如し。諸の菩薩は能く六波羅蜜〔多〕等、乃至一切種智を生ず。是の故に、是の人は未だ無上道を得ずと雖も、已に是れ一切衆生の福田なり。是の故に言はく、「菩薩摩訶薩は若し空しく國中の施を食せざらんと欲せば、當に般若波羅蜜〔多〕を學すべし」と。空しく食せざるを能く施主に報じ、能く道を生ずと名く。能く施主の福をして無盡にして乃ち涅槃に入るに至らしむ。若し衆生に三乘道を示し、衆生の爲に一切智大明を示し、亦三界の獄中の四縛を拔出せんと欲し、衆生をして五眼を得せしめんと欲せば、應に常に般若波羅蜜〔多〕を行すべし。相應念とは、即ち是れ般若の心なり。若し般若波羅蜜〔多〕を行する心は、若し所説有れば但般若波羅蜜〔多〕を説く。佛、弟子に勅したまはく、「若し和合して共に住せば、常に二事を行せよ、一には賢聖默然、二には説法なり」と。賢聖默然とは、是れ般若の心なり、説法とは般若波羅蜜〔多〕を説くなり。是の人は般若の心より出でて、般若波羅蜜〔多〕を説き、般若波羅蜜〔多〕を説き已つて還た般若の中に入り、餘心餘語をして入ることを得せしめず。晝夜に常に是を行じて休まず息まず。是の如くなれば、先に説く所の功德を得。佛は是の事をして明了ならしめんと欲するが故に、譬喩を説きたまへり。貧人の大價寶を失して、常に念じて離れざるが如く、菩薩も亦是の如く、薩婆若心を離れず、常に般若波羅蜜〔多〕を行じて休まず息まず。爾の時に、須菩提是の事を聞き、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切諸の念空ならば、云何が菩薩は薩婆若の念を離れざる

や。空中には菩薩は得べからず、薩婆若も亦得べからざるや」と。佛、答へたまはく、「若し菩薩は一切法は自性を離れ、聲聞辟支佛の所作に非ず、亦佛の所作にも非ず。自ら因縁より出で、諸法の相は如實際常住世間なることを知らば、即ち是の菩薩は般若波羅蜜(多)の行を離れず」と。佛は自ら因縁を説きたまはく、「般若波羅蜜(多)は空の故に、離の故に、増さず、減せず」と。須菩提是を聞いて復佛に問ふ、「若し般若波羅蜜(多)の性は空ならば、云何が菩薩は般若と合し、無上道を得るや」と。佛、須菩提に隨つて語りたまはく、「若し菩薩は般若波羅蜜(多)と合すれば、則ち不増不減なり。諸法の如法性・實際は不増不減なるが故に、般若波羅蜜(多)は不増不減なり。般若波羅蜜(多)は即ち是れ諸法の如法性・實際なり。如法性・實際は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり」と。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「如等の三法は一に非ず異に非ざるが如く、般若も亦是の如し」と。世間の法は一に非ざれば、即ち是の二は異ならず、即ち是れ一なり。般若波羅蜜(多)は則ち爾らず。是の故に、般若波羅蜜(多)は無量無邊なり。空無相無作なるが故に不増不減なり。若し菩薩は是の不増不減を得れば則ち能く阿耨多羅三藐三菩提を得。若し菩薩は是の事を聞いて通達無礙なれば、佛の智慧に入り、未だ佛と作らずと雖も、信力の故に、佛法の中に於いても亦疑無く、怖かす、畏れず。何となれば、凡夫は我心に著するが故に畏り。是の菩薩は我想を斷するが故に、畏るる所無きなり。當に知るべし、是の菩薩は即ち阿鞞跋致地に住し、亦能く正しく般若を行ずることを。須菩提は、是の菩薩の正しく

般若波羅蜜「多」を行ずるを聞き、是の故に佛に問ふ、「世尊よ、般若波羅蜜「多」は一切空にして牢固ならざるを觀ず。是の空相は般若を行ずることを爲すや不や」と。佛の言はく、「不なり。何となれば、若し空にして法有ること無くんば、云何が般若を行せん」と。「是の空を離れ、更に法有りて般若を行するや不や」と。佛の言はく、「不なり、何となれば、若し一切法は空無相無作ならば、云何が空を離れて更に法有らん」と。是の故に不なりと説く。須菩提、空の般若を行するに非ず、空を離れて般若を行するに非ず、一切法は皆般若の中に攝在することを聞き、今は但般若は般若を行するや不やを問ふ。法は自ら行せず、應に異法を以て行すべし。是の故に不なりと言ふ。復問ふ、「般若を離れて更に法有りて、般若を行するや不や」と。佛の言はく、「不なり、何となれば、一切法は般若の中に攝在し、更に法の般若を行すればなり。先來は略して般若を行する者を問ひ、今は名字因縁を問ふ、五衆は般若を行するや不や」と。佛の言はく、「不なり、何となれば、是の五衆は虚誑の和合の因縁に從つて自在ならざるが故に住相なきなり、云何が能く行せん」と。須菩提更に問ふ、「若し菩薩假名字は空にして不實なるが故に般若を行せずんば、今六波羅蜜「多」等の諸の助道法は般若波羅蜜「多」を行するや不や」と。佛の言はく、「不なり、何となれば五衆は和合の有なるが故に行すると能はざるが如く、是の諸法も亦是の如し。色等の法は空想にして牢固ならず」と。「復問ふ」、如法相法位法住實際の是の法は般若を行するや不や。佛答へたまはく、「是の法は無爲法にして不生不滅常住自性の

故に行せず」と。須菩提、佛に問ふ、「世尊よ、假名字の故に人行せず。諸法も亦和合因縁生にして自性無きが故に亦行せずんば、誰か當に般若を行すべき。若し行せずんば、云何が無上道を得ん」と。今佛は反問を以て答へたまはく、「汝が意に於いて云何」と。須菩提は佛に從ひ、急に般若を行する者を求む。是の故に、佛問ひたまはく、「汝慧眼を以て見よ、定んで一法の般若を行するもの有りや不や」と。須菩提は三解脱門に因りて諸法實相の中に入るに、法相は不可得なり、何に況んや、行者をや。是の故に答へて言はく、「世尊よ、般若を行する者あることを見ず」と。復問ひたまはく、「汝は是の般若波羅蜜〔多〕に菩薩の行處を見るや不や」と。須菩提答へて言はく、「見ず。何となれば般若波羅蜜〔多〕の中には一切の諸觀を滅す。若くは常、若くは無常、若くは生滅等は一法として定相無し。是の般若に云何が當に是の般若波羅蜜〔多〕を説くべきや」と。復問ひたまはく、「若し汝智慧の眼を以て法を見ざれば、是の見ざるの法は有と爲すや無と爲すや」と。答へて言はく、「無なり。何となれば、佛は智慧の眼は實にして、肉眼天眼は虚誑なりと説きたまへばなり」と。須菩提は慧眼を以て觀るに、見ざるが故に無なりと言ふ。復た問ふ、若し法は無にして得べからずんば、是の法は生ずること有りや不や」と。答へて言はく、「生せず」と。是の法は本自ら無く、畢竟空にして所有無く、是の法の有無の義は戲論にして已に滅す、云何が生ずること有らん。佛は須菩提に語りたまはく、「若し菩薩、是の法中に於いて、通達して疑無くんば、信力智慧力の故に能く是の法中に住す。是を無生忍と名



く」と。五衆の中の假名の菩薩の是の如きの法を得る、是を般若波羅蜜〔多〕を行すと名く。世俗法の故に、第一義に非すと説く。第一義の中には諸の戲論語言は即ち是れ無生なり。是の無生忍の記を得れば、便ち無上道の記を受く。佛の言はく、若し菩薩は一心に勤精進して休まず息まず、無生忍に随つて行じ、是の大智慧、無上智慧、一切智を得ずとは、是の處有ること無し。何となれば、經に説くが如くんば、若し因無く縁無ければ、則ち果報無く、邪因縁も亦果報無く、因縁少ければ亦果報無し。是の如く、菩薩は是の無生法忍を得、是の生死の肉身を捨て、法性生身を得、菩薩の果報、神通の中に住し、一時に能く無量の變化身と作り、佛世界を淨め、衆生を度脱す。是の人は末後身に佛法を具足し、道場に坐して正因縁を具足す。若し阿耨多羅三藐三菩提を得ずとは、是の處有ること無し。何となれば、是の人は無生法忍を得、一心に直に進んで廢退有ること無ければなり。菩薩未だ無生法忍を得ざれば、深く世間の法に著し、諸の煩惱厚ければ、福德有りと雖も、善心濡薄にして集まらざるが故に煩惱の爲に遮らる。無生法忍を得れば、復た是の事無し。未だ無生法忍を得ざれば、力を用ふること艱難なり、譬へば陸を行くが如し。無生法忍を得已れば、力を用ふること甚だ易きなり、譬へば船に乗るが如し。是の故に、無生法忍は諸の菩薩の貴ぶ所なり。是を貴ぶを以ての故に、須菩提、世尊に問ふ、「無生法忍を得るが故に記を受くるや」と。佛の言はく、「不なり。何となれば、無生法は不生不滅にして得相無し、云何が是に因つて記を受けん」と。復た問ふ、「生法は記を得るや」と。

佛の言はく、「得ず。何となれば、生法は虚誑妄語の作法なり、云何が阿耨多羅三藐三菩提の眞實の法を得ん」と。復た問ふ、「生不生は受記を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり。何となれば、此の二は俱に過有ればなり」と。復た問ふ、「世尊よ、若し爾らば、云何が當に受記すべきや」と。佛反問したまはく、「汝は慧眼を以て法有りて菩薩に受記を與ふるを觀見するや不や」と。答へて言はく、「見す。何となれば、是の法は本より已來寂滅の相にして、是の中に見ると見ざると、受記すと受記せざると無ければなり。亦阿耨多羅三藐三菩提を見ず、亦得る法も無く、亦得る者も無し」と。此の中に自ら因縁を説く。般若波羅蜜〔多〕は是れ憶想分別無しと。

問うて曰く、須菩提は上に問へり、「菩薩は無生忍を得るが故に受記

【五】 第二問、須菩提が「菩薩は無生忍を得るが故に授記するや」と問へるに、佛は何故に無生の理を以て答へたまひしか。

するや」と。佛の言はく、「不なり」と。佛は何を以てか還た無生の理を以て答へたまへるや。「所謂菩薩は般若を行する時、一切の憶想分別無し」と。答へて曰く、行者は實に無生忍を以ての故に記を受く、而も須菩提は菩薩の爲の故に、著心得心を以て問ふ。是を以ての故に不なりと言へり。如し一切法は實に無我なり。婆蹉梵志、佛に問ふ、「我有りや不や」と。佛默然として答へたまはず。「我無きや不や」と。佛亦答へたまはず。一切は實に無我なりと雖も、梵志は著心を以て問ひ、無我を戲弄せんと欲するが故に答へたまはざりしなり。須菩提の問意は、定んで受記の事有るを知るも、但何法

を觀じて記を得るかを知らざるが故に問へり。是の故に佛は須菩提所得の法を以て問たまはく、汝は慧眼を以て見るに、定んで法の受記するもの有りや不や」と。須菩提は三解脱門の中に住して法性を見るに、定んで受記するもの有る者を見ず。そは諸法の法性は無相無量なればなり。若し受記の法を見ずんば、云何が當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき者あらん。須菩提は是の受記者の空なることを聞き、難情則ち息み、自ら解けて疑無し。佛は其の意を可とし、「是の如し、是の如し、汝が見ず得ざる法は是れ實なり。何となれば、般若波羅蜜〔多〕は三相を分別する所無ければなり」と且へり。

〔六〕 同學品第六十二を釋す。

經

爾の時に、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜〔多〕は諸の憶想分別無し、畢竟離なるが故なり。世尊

よ、是の衆生は是の般若波羅蜜〔多〕を聞き、能く受持し、讀誦し、説き、正憶念し、親近し、説の如く行じ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、餘の心心數法を雜へざる者は、小功德より來らず」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し、是の深般若波羅蜜〔多〕を聞き、乃至餘の心心數法を雜へざる者は、小功德より來らず。憍尸迦よ、汝が意に於いて云何、若し闍浮提の衆生の十善道・四禪・四無量心・四無色定を成就し、復た善男子善女人有りて、深般若波羅蜜〔多〕を受持し、讀誦し、親近し、正憶念し、説の如く行すれば、闍浮提の衆生の十善道乃至四無色定を成就するに勝ること百倍千倍、萬億倍、乃至算

【六】 此の品には、般若に諸佛の護念あるも、亦魔縁あれば、菩薩は共住同學すべきを説くなり。他本には魔愁品に作れり。



佛、阿難に告げたまはく、「是の如し。是の如し。釋提桓因の所説の如きは皆佛の威神力なり。阿難よ、是の菩薩摩訶薩の是の深般若波羅蜜(多)を習學する時、三千大千世界中の諸の惡魔は皆狐疑を生ず、今是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得べしと爲さんや。當に中道にして實際に於いて證を作し、聲聞辟支佛地に墮すべきやと。

復次に、阿難よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を離れざる時、魔は大に愁毒し、箭の心に入るが如し。是の時、魔は復大火を放ち、風四方に俱に起り、菩薩の心をして没し、恐怖し、懈怠し、薩婆若の中に於いて乃ち一亂念を起さしめんと欲す」と。阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、魔はすべて諸の菩薩を燒亂することを爲すや、燒亂せざる者有りや」と。佛、阿難に告げたまはく、「燒す者有り、燒さざる者有り」と。阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、何等の菩薩か惡魔の燒す所となるや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩有り、先世に是の深般若波羅蜜(多)を聞き、心に信解せず、是の如き菩薩には、魔

其の便を得。復次に、阿難よ、菩薩は是の深般若波羅蜜(多)を説くを聞く時、意に疑ふらく、「是の般若波羅蜜(多)は實有と爲さんか、實無と爲さんか」と。是の如き菩薩には魔は其の便を得。

復次に、阿難よ、菩薩あり、善知識を遠離し、惡知識の攝する所と爲るが故に、深般若波羅蜜(多)を聞かず、聞かざるが故に、云何が應に般若波羅蜜(多)を行すべく、云何が應に般若波羅蜜(多)を修すべきかを知らず、見ず、問はざるなり。是

の(如き)菩薩には、惡魔は其の便を得。復次に、阿難よ、若し菩薩、般若波羅蜜(多)を遠離し、惡法を受けば、是の菩薩は惡魔便を得と爲す。魔は是の念を作す、是の輩は當に伴黨有るべく、當に我が願を滿すべしと。是の菩薩は自ら二地に墮し、亦他人をして二地に墮せしむ。

復次に、阿難よ、若し菩薩、深般若波羅蜜(多)を説くを聞く時、他人に語つて言く、是の般若波羅蜜(多)は甚深なり、

我すら尙底を得ること能はず、汝復た是の般若波羅蜜(多)を聞くことを用ゐ、學することを用ゐて(何か)爲んや」と。是の如きの菩薩には魔其の便を得と爲す。

復次に、阿難よ、若し菩薩、餘の菩薩を輕んじて言はく、我は般若波羅蜜(多)を行じ、遠離空を行す、汝には是の功德無しと。是の時、惡魔は大に歡喜踴躍す。若し菩薩ありて、自ら名性多人知識を恃むが故に、餘の善を行する菩薩を輕んず。是の人に實に阿鞞跋致の行、類、相貌の功德無し。是の功德無きが故に諸の煩惱を生じ、但虚名に著するが故に餘人を輕賤して言はく、汝は我が所得法の如き中に在らずと。爾の時、惡魔是の念を作す、今我が境界宮殿空ならず、三惡道を増益すと。惡魔其の威力を助け、餘人をして其の語を信受せしむ。其の語を信受するが故に其の纏を受行し、説の如く修學す。説の如く修學する時、諸の結使を増益す。是の諸人は心、顛倒するが故に、身口意業の所作、皆惡報を受け、是の因縁を以て三惡道を増益し、魔の眷屬の宮殿益多し。阿難よ、魔は是の利を見るが故に、大に歡喜踴躍す。阿難よ、若し菩薩道を行する者と、聲聞道を求むる家と諍鬪すれば、魔は是の念を作す、是れ薩婆若を遠離すと。阿難よ、若し菩薩と菩薩と共に諍鬪し、瞋恚し、罵詈すれば、是の時、惡魔は便ち大に歡喜踴躍して言はく、兩つながら薩婆若を離るること遠しと。

復次に、阿難よ、若し未だ記を受けざる菩薩、記を得たる菩薩に向ひて惡心を生じ、諍鬪し罵詈せば、起念の多少劫に隨ひ、若干劫數、若し一切種智を捨てざれば、然る後に乃ち爾所の劫を補ひ、大莊嚴す」と。阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、是の惡心は乃ち爾所の劫數を経て、其の中間に於いて、寧ろ排除することを得るや不や」と。佛、阿難に告げたまはく、「我が菩薩道を求むるもの、及び聲聞人出罪を得と説くと雖も、阿難よ、若し菩薩道を求むる人、共に鬪淨し、瞋恚し、罵詈し、恨を懷き、悔いず、捨てざれば、我れ出づること有るを説かず、必ず當に更に爾所の劫數を受くべし。若し一切種

智を捨てざれば、然る後乃ち大に莊嚴す。阿難よ、若し是の菩薩、闕諱し、瞋恚し、罵詈せば、便ち自ら改悔して是の念を作す、我れ大失を爲せり、我れ當に一切衆生の爲に下屈し、今世後世皆和解せしむべし。我れ當に一切衆生の履踐を忍受すること、橋梁の如く、聲の如く、啞の如くなるべし。云何が惡語を以て人に報いんや。我れ是の甚深なる阿耨多羅三藐三菩提心を壞すべからず。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、應當に是の一切善愍の衆生を度すべし。云何が當に瞋恚を起すべけんや」と。阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩と菩薩と共に住するや云何」と。佛、阿難に告げたまはく、「菩薩と菩薩と共に住し、相視ること當に世尊の如くすべし。何となれば、是の菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし、是れ我が眞の伴にして共に船に乗す。彼の學し我が學するは、所謂檀(那)波羅蜜(多)乃至一切種智なり。若し是の菩薩雜行して薩婆ニヤルン離るれば、我れ是の如く學すべからず。若し是の菩薩雜行せず、薩婆若心を離れずんば、我も亦應に是の如く學すべし」と。菩薩摩訶薩の是の如く學する者、是を同學と爲す」と。

論

釋して曰く、釋提桓因は、上に善男子の般若を書し受持し、乃至正憶念して、無量の功德を得ることを説き、今、其の義を説く。是の人は般若を讀誦し、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、餘の心心數法をして雜らしめざれば、上に説く所の如き功德を得。但從つて説を聞くも、而も行ずること能はず、餘心入らざれば、功德を得と雖も、名けて無上と爲さず。餘の心心數法を雜ふとは、有人の言はく、「慳貪等及び六波羅蜜(多)を破する惡心是なり」と。有人の言はく、「聲聞辟支佛の心をして入るとを得しめざれば、其の勢力を成し來るも則ち滅除す」と。有人の言はく、「聲聞辟支佛の心をして入るとを得せしめず」と。有人の言はく、「無記の散亂心は四惡に非ずと雖も、善道を遮ざるを以ての故に、亦入る

ことを得せしめず」と。是の故に是の人は小功德より來らず佛は其の言を可としたまへり。是の如く清淨に勢力を行ずることを分別せんと欲するが故に、反つて憍尸迦に問ひたまふ。若し閻浮提の人に、一切の十善道等を成就するは、經に説くが如く、是の福德は多しと雖も、諸法實相を離るるが故に、虚妄にして牢固ならず、無常にして盡滅すれば、多しと爲すに足らず。草芥は多しと雖も、一小の金剛に如かざるが如し。

問うて曰く、是の比丘は何を以てか帝釋に、善男子の福德は仁者に勝ると語るや。答へて曰く、帝釋は已に福德の果報の中に住し、人天の主として、威徳尊重なり。是の比丘は是の善法を重んじ、此の功德を顯さんと欲するが故に、仁者に勝ると言ふ。

復次に、是の比丘は帝釋の聲聞道を得るを聞き、是の故に言はく、「汝は福德有りと雖も、是の菩薩は汝に勝る」と。帝釋は道を得、深く佛法を

念するが故に高心を生ぜず。其の語を受けて言はく、「菩薩の阿耨多羅三藐三菩提の爲に但發心するすら便ち我に勝る、何に況んや、所説の如く行するをや」と。何となれば、帝釋は福報微薄なるに、是の菩薩は功德濃厚なればなり。又帝釋の福德は天樂に著するを以て、自ら其の身の爲にし、菩薩の功德は一切衆生の爲にし、佛道の樂に廻向すればなり。時に會する聽者は、比丘の仁者に勝ると説

【七】 閻浮提の人、十善・四無量心・八定の功德を成就するも、般若の功德に及ばず。

【八】 第三問、一比丘、帝釋に向ひ、善男子の福德は仁者に勝ると語りし理由如何。

【九】 般若に於いて發心修行するは、帝釋乃至二乗の菩薩に勝る理由。



き、帝釋の其の語を受くるを聞いて、咸く帝釋を輕んずる心を生ぜり。是の故に、帝釋言はく、「但我に勝るのみならず、乃至菩薩の般若を行ずるも方便力無き者に勝る」と。所説の如く般若波羅蜜(多)を行ずる時、餘の心心數法を離れざるが故に、是の中に帝釋は自ら勝る因縁を説けり。所謂是の菩薩は説の如く般若を行じ、佛種を斷せず、乃至般若波羅蜜(多)を行ずるを以ての故に、是の現世の功德を得。

問うて曰く、(一〇)阿難は何を以てか是の念言を作すや、「帝釋は自力を以て説くや。佛力を用つて説くや」と。答へて曰く、阿難は、帝釋は是れ聲聞なり、而も所説は甚深にして聲聞辟支佛の智に過ぐることを知れり。是の故に疑を生じて而も問へるなり。

問うて曰く、(一一)帝釋は自ら智有りて能く問ひ、能く答ふ。何を以てか佛力と言ふや。答へて曰く、般若は甚深甚難なると無量無邊なり。若し異處に在りて説くすら尙ほ難し、何に況んや、佛前の大衆の中に於いて説くをや。是の故に佛力なりと言ふ。持心經に説くが如くんば、「光明威神其の身に入るを以ての故に、能く佛前に於いて難問し、所説有り」と。佛、阿難に告ぐるに、帝釋の語る所を可とし、更に歎すらく、「深般若を行ずる菩薩は大威徳有り。所謂阿難よ、是の菩薩の深般若を習學する時、惡魔は疑を生ず」と。惡魔は是れ菩薩の怨賊にして、常に菩薩を求む、

【一〇】 第四問、阿難が、帝釋は自力を以て説くか、佛力を用て説くか」と念言せし理由如何。

【一一】 第五問、帝釋は自ら智有りて能く問ひ、能く答ふ。何を以てか、佛力によるかといふか。

便ち魔品の中に説くが如し。菩薩は深く般若波羅蜜(多)を行するを以ての故に、魔は大に方便を作して菩薩の心を壞す。若し菩薩懈怠すれば魔は大に歡喜す。是の人は自ら當に墮落すべし。有人の言はく、「一切の菩薩は應に魔の怨有るべし。是の故に阿難よ問ふ、「盡く魔有りと爲すや、亦無き者ありや」と。佛、分別して答へたまはく、「所謂深清淨の心に菩薩道を行すれば、則ち魔擾すこと無し、不清淨なれば魔の爲に壞せらる」と。經に廣く説くが如し。

問うて曰く、「二三佛の所説の如くんば、一切の有爲法、皆轉すべく捨つべし。阿難は何を以てか疑つて而も佛に、是の罪は悔ゆべきや不やと問へるや。答へて曰く、阿難は、般若波羅蜜(多)は是れ無盡の因縁にして、若し供養せば福は無邊なり、乃至佛を得るも福猶ほ盡さず。若し瞋罪を訶するも、亦是の如く無邊なることを知る。是の故に佛に問ひたてまつれり。佛答へたまはく、「我が法は罪を出づること有り」と雖も、若し菩薩は共に闘ひ、恨を結んで即ち捨てざれば、則ち出づべからず。何となれば、是の菩薩は深心に餘の菩薩を輕慢し瞋ればなり」と。瞋慢憍を以ての故に意を下して共に悔ゆること能はず。更に餘の功德を行じて、此の罪を滅せんことを求めんと欲す。佛の言はく、是の罪は出でず、恨を懷くを以ての故なり。餘の福德を作すと雖も皆清淨ならず。清淨ならざるが故に力無く、力無きが故に罪を滅すること能はず。此の人にして佛と作らんと欲せば、一切智を捨てず、

【三】第六問、一切の有爲法は皆轉すべく捨つべし、然るを阿難が疑つて、「是の罪は悔ゆべきや否や」と問へるは何故なるか。

意を下して懺悔せば、爾所の劫を補して乃ち大莊嚴を發することを得ん。

問うて曰く、(二三) 心中に恨を懷かば、云何が滅すべきや。答へて曰く、瞋を破する因縁は經に説くが

如し。阿難は、一切衆生の業因縁に屬して自在なることを得ず、能く救ふ者無く、心に怖畏を懷くと

を知り、佛に問ひたてまつるらく、「菩薩共住せば云何。云何が心を用つて、佛を恭敬したてまつ

らん」と。(二四) 答へたまはく、「供養恭敬すること、當に佛を視たてまつるが

如くすべし。是れ未來の佛なればなり」と。(二五) 此の中に佛自ら因縁を説き

たまへり。菩薩共住せば、應に是の念を作すべし、「是れ我が眞の伴にし

て俱に佛道に到り、共に一船に乗ず」と。船とは六波羅蜜(多)なり、三界

三漏を水と爲し、彼岸は是れ佛道なり。彼の學する所、我も亦應に學すべ

し。學とは、所謂六波羅蜜(多)等の同戒・同見・同道なり。白衣の兄弟の共

に闘ふべからざるが如く、我は是れ同法の兄弟なり、亦應に共に諍ふべか

らず。若し是の菩薩難行して薩婆若心を離るれば、我れ應に是の如きを學すべからず。何となれば勝

れる事は應に他より學すべく、惡事は應に捨つべければなり。菩薩若し是の學を作さば、輕慢瞋恨事

は皆滅す。是れ則ち菩薩の同學と名く。

【二三】 第七問、心中に恨を懷かば、云何が滅すべきや。

【二四】 菩薩共住せば、敬視すること佛を視るが如くすべし。

【二五】 俗家の兄弟、共に諍ふべからざるが如く、菩薩共住せば、互に之れ眞の伴なりと觀じ、決して共に諍ふべからざるなり。

〔二六〕とくがくはんたい  
等學品第六十三を釋す。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の等法にして、菩薩の應に學すべき所なるや」と。須菩提よ、  
内空は是れ菩薩の等法なり。外空乃至自相空は、是れ菩薩の等法なり。須菩提よ、色、色相空、受想行識、識相空、乃至阿耨  
多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提相空、須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の等法と名く。是の等法に住して阿耨多羅三藐三菩  
提を得しと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は色盡の爲の故に學するを薩婆若を學すと爲し、色離の爲の故  
に學し、色滅の爲の故に學するを、薩婆若を學すと爲し、色不生の爲の故に學するを  
薩婆若を學すと爲す。受想行識も亦是の如し。四念處乃至十八不共法の盡と離と滅と  
不生とな修行するが故に學するを薩婆若を學すと爲す」と。佛、須菩提に告げたまは  
く、「須菩提の所説の如く、色の盡と離と滅と不生との爲の故に學するを薩婆若を學  
すと爲し、受想行識乃至十八不共法の盡と離と滅と不生との(爲の)故に學するを薩婆若を學すと爲す」と。

【二六】此の品には菩薩の同學す  
べき眞實の般若を明す。等法  
を學するが故に等學と名くる  
なり。

佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何、色如、受想行識如、乃至阿耨多羅三藐三菩提如、佛如、是の諸の如は盡  
く滅斷するや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の是の如く如を學す  
るを薩婆若を學すと爲す。是の如きは證を作さず、滅せず、斷せず。須菩提よ、菩薩摩訶薩の是の如く如を學するを薩婆  
若を學すと爲す。須菩提よ、菩薩摩訶薩の是の如く學するを六波羅蜜(多)を學すと爲し、四念處乃至十八不共法を學すと  
爲し、若くは六波羅蜜(多)乃至十八不共法を學するを薩婆若を學すと爲す。須菩提よ、是の如く學するを諸學の邊を盡す  
と爲す。是の如く學せば、魔若くは魔天の壞すること能はざる所なり、是の如く學せば直に阿耨跋致地に到り、是の如く學

するを佛の所行の道を學すと爲し、是の如く學するを擁護を得と爲し、大慈大悲を學すと爲し、淨佛世界・成就衆生を學すと爲す。須菩提よ、是の如く學するを三轉十二行を學すと爲す、(それは)法輪轉するが故なり。是の如く學するを度衆生を學すと爲し、是の如く學するを不斷佛種を學すと爲し、是の如く學するを附甘露門を學すと爲し、是の如く學するを欲示無爲性を學すと爲す。須菩提よ、下劣の人は是の學を作すこと能はず。是の如く學するは、生死に沉沒せる衆生を抜かんと欲すと爲す。菩薩摩訶薩、是の如く學せば、終に地獄餓鬼畜生の中に墮せず。終に邊地に生ぜず、終に旃陀羅の家に生ぜず、終に餓鬼・瘡癩・拘躰ならず、諸根缺かず、眷屬成就して、終に孤窮ならず。是の如く學せば終に殺生せず、乃至終に邪見ならず。是の如く學せば、邪命活を作さず、惡人及び破戒者を攝せず。是の如く學せば、方便力を以ての故に、長壽天に生ぜず。何等か是れ方便力なるや。般若波羅蜜(多)の品の中に説ける所の如し。菩薩摩訶薩は、方便力を以ての故に、四禪・四無量心・四無色定に入り、(四)禪・無量・無色定に隨つて生ぜず。須菩提よ、菩薩は是の如く學すれば、一切法の中に清淨、所謂聲聞辟支佛心を淨むることを得しと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、一切法は本性清淨なり。云何が菩薩は一切法中に清淨を得と言ふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。一切諸法は本性清淨なり。若し菩薩摩訶薩、是の法中に於いて、心通達して沒せざれば、即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。是の如き諸法は、一切の凡夫の人の知らず見ざるところなり。菩薩摩訶薩は是の衆生の爲の故に、檀(那)・波羅蜜(多)、乃至般若波羅蜜(多)を行じ、四念處乃至一切種智を行す。須菩提よ、菩薩、是の如く學せば、一切法の中に於いて智力を得て畏るる所なし。是の如く學せば、一切衆生の心の趣向する所を了知すと爲す。譬へば大地の少所の處に金銀の珍寶を出すが如し。須菩提よ、衆生も亦是の如く、少所の人能く般若波羅蜜(多)を學し、多くは聲聞辟支佛地に墮す。須菩提よ、譬へば少所の人、轉輪聖王の業を受行し、多くは小王の業を受行するが如し。是

の如く、須菩提よ、少所の衆生は般若波羅蜜(多)を行じて一切智を求め、多くは聲聞辟支佛道を行す。須菩提よ、菩薩摩訶薩の發心して阿耨多羅三藐三菩提を求むる中に、少しく説の如く行するもの有り、多くは聲聞辟支佛地に住す。多くの菩薩摩訶薩有りて、般若波羅蜜(多)を行するも、方便力無きが故に、少所の人阿耨跋致地に住す。須菩提よ、是を以ての故に菩薩摩訶薩、阿耨跋致地の中に住せんと欲す。(若し菩薩摩訶薩、阿耨跋致地の中に住せんと欲せば、應當に是の深般若波羅蜜(多)を學すべし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の般若波羅蜜(多)を學する時、慳貪心を生ぜず、破戒・瞋恚・懈怠・愚痴心を生ぜず、諸餘の過失の心を生ぜず。色相を取り、受想行識相を取る心を生ぜず、四念處相を取る心を生ぜず、乃至阿耨多羅三藐三菩提相を取る心を生ぜず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、是の深般若波羅蜜(多)を行するも、法の得べきもの有ること無ければなり。不可得なるを以ての故に、諸法に於いて、心に取相を生ぜず。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の如く、深般若波羅蜜(多)を學し、總じて諸の波羅蜜(多)を攝し、諸の波羅蜜(多)をして増長し、諸の波羅蜜(多)を悉く隨從せしむ。何となれば、須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)は諸の波羅蜜(多)を悉く中に入ればなり。須菩提よ、譬へば我見の中に悉く六十二見を攝するが如し。是の如く、須菩提よ、是の深般若波羅蜜(多)は悉く諸の波羅蜜(多)を攝す。須菩提よ、譬へば人死するに、命根滅するが故に餘根悉く隨つて滅するが如し。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜(多)を行する時、諸の波羅蜜(多)は悉く隨從す。須菩提よ、菩薩摩訶薩、諸の波羅蜜(多)をして、彼岸に度らしめんと欲せば、應に深般若波羅蜜(多)を學すべし。

須菩提よ、菩薩摩訶薩、是の深般若波羅蜜(多)を學する者は、一切衆生の上に出づ。須菩提よ、汝が意に於いて云何。三千大千世界の中の衆生は多きや不やと。須菩提の言さく、「一閻浮提の中の衆生すら尙多し、何に況んや、三千大千世界を

や」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し三千大千世界の中の衆生、一時に皆人身を得、悉く阿耨多羅三藐三菩提を得たらんに、若し菩薩有りて、形壽を盡すまで、爾所の佛に衣服・飲食・臥具・湯藥・養生の所須を供養せば、須菩提よ、汝が意に於いて云何、是の人は是の因縁を以ての故に、福德を得ること多きや不や」と。須菩提言さく、「甚だ多し、甚だ多し」と。佛の言はく、「不なり。是の如き善男子善女人は、般若波羅蜜(多)を學し、説の如く行じ、正憶念すれば、福を得ること多し。何となれば、般若波羅蜜(多)は勢力有りて、能く菩薩摩訶薩をして阿耨多羅三藐三菩提を得せしむればなり。須菩提よ、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は一切衆生の上に出でんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。救護無き衆生の爲に救護を作さんと欲し、歸依無き衆生の與に歸依を作さんと欲し、究竟道無き衆生の與に、究竟道を作さんと欲し、盲目の爲に目を作らんと欲し、佛の功德を得んと欲し、諸佛の自在遊戲を作さんと欲し、佛の師子吼を作さんと欲し、佛の鐘鼓を撞撃せんと欲し、佛の貝を吹かんと欲し、佛の高座に昇りて説法せんと欲し、一切衆生の疑を斷ぜん」と欲せば、當に深般若波羅蜜(多)を學すべし。

須菩提よ、菩薩摩訶薩、若し深般若波羅蜜(多)を學せば、諸善功德は事として得ざる無し」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、寧ろ復た聲聞辟支佛の功德を得るや不や」と。佛の言はく、「聲聞辟支佛の功德も皆能く得、但中に於いて住せざるのみ。智を以て觀じ已り、直に過ぎて菩薩位の中に入る。須菩提よ、菩薩摩訶薩、是の如く學せば、薩婆若に近づき、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く學せば、一切の世間及び人、阿修羅の爲に福田と作る。須菩提よ、菩薩摩訶薩、是の如く學せば、諸の聲聞辟支佛の福田の上に過ぎて、疾かに薩婆若に近づく。須菩提よ、菩薩摩訶薩、是の如く學する、是を般若波羅蜜(多)を捨てず離れず、常に般若波羅蜜(多)を行す」と名く。須菩提よ、菩薩摩訶薩、是の如く學して、般若波羅蜜(多)を行せば、當に知るべし、是れ不退轉の菩薩なり、疾かに薩婆若に近づき、

聲聞辟支佛を遠離し阿耨多羅三藐三菩提に近づくことなり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、若し是の念を作す、是れ般若波羅蜜(多)なり、我は是の般若波羅蜜(多)を以て一切種智を得と。若し是の如く念せば、般若波羅蜜(多)を行すと名けず。須菩提よ、若し是の念を作さず、是れ般若波羅蜜(多)なり、是の人には般若波羅蜜(多)有り、是れ般若波羅蜜(多)の法なり。是の人は是の般若波羅蜜(多)を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得、是を般若波羅蜜(多)を行すと名くと。須菩提よ、若し菩薩、是の念を作さば、是の般若波羅蜜(多)無く、人の是の般若波羅蜜(多)有ること無く、是の般若波羅蜜(多)を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得るもの有ること無し。何となれば、一切法は如法性・實際・常住なればなり。是の如く行する、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行すと名くと。

釋して曰く、上に阿難問評を問ひ、佛答へたまはく、「同學は清淨

なり」と。今、須菩提、佛に問ひたてまつるらく、「甚深同心の等法は、是

れ菩薩の學する所の處なりや」と。佛答へたまはく、「内空乃至自相空、

是を等法と名く、(二七) 二種の等忍有り。上の品末には衆生の等忍を説き、此品には法の等忍を説く。兩

頭を稱るに停ること等しきが如し。是の如く、内空等の諸の空は、諸法の中に於いて平等なり。内法

の如きは種種差別有るも、内空を得れば則ち皆平等にして (二八) 二無し。乃至自相空、一切法相も、皆自

ら空なり。是の時、心則ち平等なり。菩薩は是の等中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩

提は復た問ふ、「色等盡るが爲の故に、薩婆若を學すと爲すや」と。色等を觀するに無常にして、念念

【二七】 二種の等忍——(一)衆生等忍。(二)法等忍。  
 【二八】 原本には二を法に作れり。



に滅して住せず。若し是の觀を得れば、心則ち色を離れ、心色を離るるが故に諸の煩惱滅し、煩惱滅するが故に不生の法を得。須菩提問ふ、「是の如く學するを薩婆若を學すと爲すや」と。佛、須菩提に反問したまはく、「汝が意に於いて云何、色等の諸法の如、及び如來の如、是の如は盡く滅斷と爲すや不や」と。須菩提言さく、「不なり。是の如は本より已來、集らず、和合せず、云何が盡るゝ有らん。來らず、生せず、云何が滅すること有らん。是の法は本來虛誑にして定相有ること無し、云何が常に證すべからず、滅すべからず、斷すべからず。是の盡離斷は顛倒を除くが故に行ず。是れ究竟に非ず」と。此の中に究竟の事を説く。是に於いて佛讚歎したまはく、「是の如く學するは不定なりと雖も、一法の爲の故に而も薩婆若を學す。若し薩婆若を學せば、即ち是れ六波羅蜜〔多〕等を學するなり。若し能く六波羅蜜〔多〕等を學すれば、是を諸學の邊を盡すと爲す。若し諸學の邊を盡せば、是の人は無量の福德智慧を具足するが故に、魔若くは魔民は能く降伏すること無し。是の如く正學するが故に、直に阿鞞跋致地に至る。是の如く學するをば、佛の所行の道を學すと爲す。是の如く學すれば、皆十方諸佛及び大菩薩諸天善人の爲に守護せられ、能く是の如く學すれば、是の人は邪見有ると無く、心に著する所無く、一切衆生に於いて、能く大慈大悲を起し、大慈大悲の故に、能く衆生を教化す。衆生の心清淨なるが故に、佛界清淨なり。佛界清淨なれば已に佛道を得て、三轉十二

行法輪の三乘を以て、無量の衆生を度し、大乘を以て衆生を度するが故に、佛種を斷せず。佛種を斷せざるが故に、世間に於いて、常に甘露の法門を開き、常に衆生に無爲性を示す。(二九) 無爲性とは、所謂る如法性・實際・涅槃なり。(三〇) 甘露とは、無爲性なり、門とは三解脱門なり。(三一) 下劣とは、懈怠放逸にして佛法を樂します、一心に道を行せず、罪福を雜行するに名く。是の如き等は、是の法を學すること能はず。何となれば、是の下劣の者は是の念を作さく、「我身及び親屬は是れ我應に護るべき所なり。諸餘の衆生は何ぞ我事に豫らん、而も頭目髓腦を以て之に施し、其をして樂を得せしむ。一切の人は、皆方便して樂を求む。我れ今何すれぞ樂を捨てて苦を求むることを爲ん」と。或は邪見を生じて復た是の念を作す、「衆生は無量無邊なれば、度するも盡すべからず。若し度し盡すべくんば、即ち是れ有量有邊なり。

「一佛便ち度し盡すべし」と。或は是の念を作す、「佛は一切法の空にして、不生不滅なるを説きたまへり。我復た何の度する所ぞ」と。佛道を求めて佛道を求めず、同じく夢幻の如し。是の如き等の下劣の人は、種種の邪見貪欲の因縁を以ての故に、此の大法を學すること能はず。或時は大人有りて出世し、諸法實相を籌量し、思惟す。所謂る常に非ず、無常に非ず、有邊に非ず、無邊に非ず、有に非ず、無に非ざる等なり。是の如く道を行じて顛倒の見を破し、還た此の道を棄てて、直に法性に入り、常に是の清淨法性の中に住す。一切衆生は是の事を知らざるを以ての故に、大悲心を生じ、然

【二九】 無爲性の義解。

【三〇】 甘露の義解。

【三一】 下劣の義解。

る後に六波羅蜜〔多〕等の諸の功德、佛の神通智慧無礙解脱を修集し、阿耨多羅三藐三菩提を得、種種の方便門を以て廣く衆生を度す。是の如き人を希有なりと爲す。

問うて曰く、(三)先に説くが如くんば、衆生は無量無邊なり、又言はく、衆生は空なり、復何の度する所あらんと。是の如くんば、云何が度する所有るべけんや。答へて曰く、此は是れ下劣の人の所説なり。何ぞ之を以て證と爲すに足らんや。

復次に、先に説く所は、邪見貪欲の因縁を以ての故に、下劣の人は是の念を作す、「衆生の有邊無邊一切法の空、無所有、一切法の常實とを言ふは、皆是れ六十二見の攝する所なり。大人は思惟籌量せんと欲すること無ければ、是の如き過罪を離れ、法性の中に住して、大悲心を生ず。譬へば、大人の但施心を以て他に財を施與し、而も價を取らざるが如し。貪欲の人は、因縁を求めて而して與へ、邪見の人は、有邊無邊等に依りて、能あるなく、事を利すること無く、而も所作有り。譬へば、小人の市に易ふるに、利を求めて乃ち與ふるが如し。又復た大人の菩薩は、求め欲する所無く、能く頭目等を以て衆生に施與し、所得の果報をも亦以て施し、一切法に與ふ。心依る所無うして、而も能く諸の功德を集む。是の故に、佛説きたまはく、「一切衆生の生死に沈没する者を抜かんと欲して、能く是の如く學す」と。

復次に、菩薩の是の如く學する者は、常に慈悲憐愍の心有り、衆生を惱まざるが故に、地獄に墮

【三】第八問、衆生は無量無邊なり、空なり、何の度する所かあらんや。

せず。常に因縁と諸法實相とを觀じ、愚痴を生ぜざるが故に畜生に墮せず。常に布施を行じ、慳貪の心を破するが故に、餓鬼の中に生ぜず。佛の所説なる、十二部經、八萬四千の法聚をば、常に惛惛せざるが故に、邊地に生ぜず。常に尊長善人を供養し、憍慢を破するが故に、旃陀羅等の下賤の人中に生ぜず。深心に衆生を愛し、具足して利益の事を行ずるが故に、身を受けて完具なり。善法を以て多く衆生を化するが故に、眷屬を成就し、終に孤窮ならず。深く尸羅波羅蜜(多)を愛樂するが故に、十惡道及び邪命を行ぜず。但衆生を利益し、自ら身の爲にせざるが故に、惡人及び破戒の者を攝せず。惡人とは心惡なるに名け、破戒は身口の惡に名く。

復次に、三不善道を行ずるを惡人と名け、七不善道を行ずるを破戒と名く。復次に、菩薩若し家に在りて、惡人に攝せば、惡人と名け、出家して

【三】第九問、菩薩は惡人を攝せんが爲に出現せり、何を以ての故に惡人を攝せざるか。

惡人に攝するを破戒と名く。

問うて曰く、(三)菩薩は惡人を度せんが爲の故に世に出現す、譬へば良醫の諸の疾病を療するが如し。何を以ての故に惡人を攝せざるや。答へて曰く、惡人の破戒者には化すべきもの有り、化すべからざるもの有り。此の中には但化すべからざる者を説く。若し攝取して共に住せば、則ち自ら其の道を壞し、彼に於いて益無し。譬へば、溺を救ふに、自ら浮ぶこと能はずして、而も彼を濟はんと欲すれば、二人俱に免れざるが如し。是の故に、惡人を遠離すと説く。欲界は多惡なり、憐愍の心を生ず

るを以ての故に、欲界の中に生ず。禪を行じて、心調ひ柔濡なりと雖も、方便力を以ての故に、命終の時、禪の生ずるに隨はず、經中に廣く説くが如し。須菩提よ、菩薩はの如く學すれば、一切法の中に於いて清淨を得、所謂の聲聞辟支佛心を淨む。淨を捨離無所有畢竟空と名くと。須菩提、佛に白して言さく、「若し一切法、本より已來空清淨ならば、云何が菩薩は是の如く學して、一切法中に清淨を得と言ふや」と。佛、須菩提の言を可とし、爲に因縁を説きたまへり。若し菩薩は一切法の本より已來空清淨なることを知るも、是の中に於いて心沒せず却かず。沒せざるを疑はずと名け、邪見を生ぜず、通達して空と諍はざる、是を般若波羅蜜〔多〕と名く。一切の凡夫の人は、是の如き清淨法を知らず見ず。是の人の爲の故に、六波羅蜜〔多〕等の諸の助道の法を行す。菩薩の法は應に是の衆生を教化すべし。是を菩薩は一切法の中に清淨を得と名く。所謂る三界の顛倒を捨て、聲聞辟支佛地を過ぎ、一切法中に清淨の智慧力を得。是の功德を得るが故に、三世十方の一切衆生の心心數法、心所行の種種の業を起す因縁悉く能く遍知し、知り已つて其の應する所に隨つて爲に說法し開化す。是の如き等の利益は、皆是れ般若を學するが故に得。是の故に諸學の邊を盡すと言ふ。少しく能く是の如き學有るも、是の人は佛を得難し、此の義をして明了ならしめんと欲するが故に譬喩を説く。金銀及び轉輪聖王の業等なり。

復次に、菩薩は是の般若を學する時、慳等の心を生ぜず。慳等の心を生ぜずとは、菩薩は般若波羅

蜜〔多〕を學するが故に、諸の煩惱を抑制し、煩惱未だ盡すと雖も、能く作す所無し、是の故に生ぜず  
 と言ふ。菩薩は般若を行じて、一切諸法の相の皆虚誑不實なることを知るが故に、是を以て色より乃  
 ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで相を取らず。何となれば、有無の見中に墮せしむることを欲せざれ  
 ばなり。直に中道を行じ、菩薩行を集む。此の中に佛自ら因縁を説きたまへり。菩薩は般若を行じ、  
 一切法に於いて所得無く、所得無きが故に、法として取るべき相、若くは善、若くは不善等有ること  
 無し。菩薩若し能く是の如く學せば、總じて諸の波羅蜜〔多〕を攝す。檀〔那〕等の諸の波羅蜜〔多〕は、  
 般若波羅蜜〔多〕を離れず。般若波羅蜜〔多〕の力の故に、餘の波羅蜜〔多〕を  
 して、諸の邪見貪著を離れ、各增長を得せしむ。佛は此の義をして明了な  
 らしめんと欲するが故に、譬喩を説きたまへり。我見及び命根の盡るが如し。

【三】第一〇問、諸見を我見の  
 中に攝する理由如何。

問うて曰く、二我見と諸見と各別相有り。云何が我見の中に攝入するや。答へて曰く、別相有りと  
 雖も、我見は是れ本人、無明の因縁を以ての故に、空なる五衆の中に我見を生じ、我見を生ずるが故  
 に、是の身は死すれば、如去なり、不如去なりと言ふ。若し如去なれば則ち是れ常見なり、若し不如  
 去なれば則ち是れ斷見なり。若し斷滅を謂はば、現に今樂を受け、五欲に著し、惡法を以て最と爲し  
 て則ち見取を生ず。若し常を謂はば、出家學道持戒苦行して、則ち戒取を生ず。或時は斷と常とを  
 見る。俱に過有るが故に、便ち因縁果報無しと言ひ、則ち邪見を生ず、是の五見の中に住し、世間の

常、無常、前際、後際等の五十七見を生ず。(二五) 是の故に、身見に六十二見を攝すと説くも答無し。是の如き等の種種の因縁譬喩有るが故に、般若波羅蜜(多)は、諸法の中、最も第一なることを知る。般若波羅蜜(多)は、諸法の中最も第一なるが故に、菩薩は是の般若を學ぶるが故に、衆生の中に於いて第一なり。佛は是の事を以て、善く衆生を化せんと欲するが故に、譬喩を説きたまへり。「須菩提よ、汝が意に於いて云何。三千大千世界の衆生は多きや不や」と。是の如き等より乃至菩薩は、是の如く學すれば、當に知るべし、是れ退轉せず、二乗を遠離して佛乘に近づく。

復次に、佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩是の念を作さば、是れ般若波羅蜜(多)なり」と。是の般若波羅蜜(多)とは、般若波羅蜜(多)の相の、若くは有、若くは無等を示す。般若を見、般若を得、般若に著する等なり。我は是の般若波羅蜜

【二五】身見の中に六十二見を攝す。

〔多〕を以て、一切種智を得とは、五衆和合の假名の菩薩なり。菩薩は假の名字を隨逐し、計つて以て我と爲す、是を以て般若に所作有り。般若は是れ無得無著の相なり、而も是の人は相有りと説く。般若は是れ第一義なり、是の人は假名に隨つて、而も我心を生ず。般若は是れ無作の相なり、而も是の人は般若を用て所作有らんと欲す。所謂る我は是の般若を用て、阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に、佛の言はく、「是の如きの念を作す者は、般若を行すと名けず、若し是の如く念せざれば、名けて般若波羅蜜(多)を行すと爲す」と。

問うて曰く、是の念を作し、是の念を作さざる事は已に盡きたり。何を以て復た第三説有りや。答へて曰く、初は是れ邪行の相なり、第二は邪行を遮するも未だ正相を説かず。是の故に第三に正行の相を説くなり。

復次に、初は是れ著心の取相なり、第二は是の著相を破するも、云何が是れ諸法の相たるかを説かず。第三の中には、邪著を破し、亦實相を説く。菩薩は是の念を作す、「一切處に於いて般若波羅蜜(多)の相を顯示せず、亦我心を生せず」と。我は般若波羅蜜(多)を用て所作有り、但一切法の常住・如法性・實際の中のみを知る。如法性・實際の中に於いて諍はず。是の故に第三を説くも、答無きなり。

【云】 第一問、是の念を作し、是の念を作さざる事は已に盡きたり、何を以てか第三説ありや。



# 巻の第七十八

## 願樂品第六十四を釋す。

經

爾の時に、釋提桓因、是の念を作す、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・騰提波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・種(那)波羅蜜(多)」、乃至十八不共法を行する時、一切衆生の上に出づ。何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得る時をや。是の諸の衆生にして、是の薩婆若を聞き、信する者は、人中の善利、壽命中の最を得、何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提の意を發す者をや。是の衆生の能く阿耨多羅三藐三菩提の意を發せば、其餘の衆生は應當に願樂すべし」と。爾の時、釋提桓因は天の曼陀羅華を以て、佛の上に散じ、是の言を發す、「此の福德を以て、若し阿耨多羅三藐三菩提を具足し、自然法を具足せしめん。有る者には、此の人をして佛法を具足し、一切種智を具足し、自然法を具足せしめん。」

【一】此の品には、隨喜の徳を明し、如幻無分別の成佛あるを説く。異本には或は隨喜品に作り、又は淨願品に作る。

一念を生じて其をして轉還せしめざらん。我れ亦一念を生じて、其をして轉還して聲聞辟支佛地に墮せしめざらん。世尊よ、我れ願くば、諸の菩薩の信復阿耨多羅三藐三菩提に於いて精進し、衆生の生死の中の種種の苦惱を見、一切世間の天及び人阿修羅を利益し、安樂にせんと欲す。是の心を以て是の願を作す、「我れ既に自ら度す、亦當に未だ度せざる者を度すべし。我れ既に自ら脱す、當に未だ脱せざる者を脱すべし。我れ既に安隱なり、當に未だ安んぜざる者を安んずべし。我れ既に滅

度す、當に未だ減度に入らざる者をして減度を得せしむべし。世尊よ、善男子善女人は、初發意の菩薩の功徳を隨喜する心に於いて、幾許の福徳を得るや。久發意の菩薩の功徳を隨喜する心に於いて、幾許の福徳を得るや。阿耨跋致の菩薩の功徳を隨喜する心に於いて、幾許の福徳を得るや。一坐補處の菩薩の功徳を隨喜する心に於いて、幾許の福徳を得るや」と。佛釋提桓因に告げたまはく、「橋尸迦よ、四天下の世界は斤兩を稱り知るべきも、是の隨喜の福徳は稱量すべからず。

復次に、橋尸迦よ、是の三千大千世界は、昔斤兩を稱り知るべきも、是の隨喜心の福徳は稱量すべからず。復次に、橋尸迦よ、三千大千世界の中に滿つる海水、一髮を取り、破(折)して百分と爲し、一分の髮を以て海水を滴取するに、滴數を知るべきも、是の隨喜心の福徳は數へ知るべからず」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、若し衆生にして、心に阿耨多羅三藐三菩提を隨喜せざる者は、皆是れ魔の眷屬なり。諸心の隨喜せざる者は魔中より來り生ず。何となれば、世尊よ、是の諸の隨喜心を發す菩薩は、魔の境界を破するが爲の故に生ずればなり。是の故に、三尊を愛敬せんと欲せば、應に隨喜心を生ずべく、隨喜し已つて、應に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。不二の相なるを以ての故なり」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。橋尸迦よ、若し人有りて菩薩に於いて能く是の如く隨喜廻向せば、常に諸佛に値ひたてまつりて、終に惡色を見ず、終に惡聲を聞かず、終に惡香を厭かず、終に惡味を食はず、終に惡觸に觸れず、終に惡念に隨はず、終に諸佛を遠離せず、一佛國より一佛國に至りて諸佛に親近したてまつり、善根を種う。何となれば、善男子善女人は無量阿僧祇(劫の間)初發意の菩薩の爲に、善根を隨喜し廻向し、無量阿僧祇、第二地第三地、乃至第十地一生補處の諸の菩薩摩訶薩の善根を隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すればなり。是の善根の因縁を以ての故に、疾かに阿耨多羅三藐三菩提に近づく。是の諸の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、無量無邊阿僧祇の衆生を度す。橋尸迦よ、是の因縁を以ての故に、善男子善女人は、初發意の菩薩の善根に於いて、

應に隨喜して阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべきも、心に非ず、心を離るるに非ず。久發意の阿鞞跋致一生補處の善根に於いて隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、心に非ず、心を離るるに非ずしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の心は幻の如し。云何が能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛、須菩提に告

げたまはく、「汝が意に於いて云何、汝は是の心の幻の如きを見るや不やしと。」不なり、世尊よ、我は幻を見ず、亦心の

幻の如くなるを見ずしと。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、若し幻無く、亦心の幻の如くなる無くんば、汝は是の心を見る

や不やしと。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、汝が意に於いて云何、幻を離れ、心の幻の如きを離れて、汝は更に法の阿耨

多羅三藐三菩提を得るものなるを見るや不やしと。」不なり、世尊よ、我は幻を離れ、心の幻の如きを離れて、更に法の阿耨

多羅三藐三菩提を得ることあるを見ず。世尊よ、我は更に法有ることを見ず。何等の法が、若くは有、若くは無なりと説く

べけんや。是の法相は畢竟離なるが故に、有に墮せず、無に墮せず。若し法の畢竟離なるもの、阿耨多羅三藐三菩提を得る

こと能はずんば、無所有の法も亦應に阿耨多羅三藐三菩提を得べからず。何となれば、世尊よ、一切法は無所有にして、是

の中に垢者無く、淨者無ければなり。世尊よ、是を以ての故に、般若波羅蜜(多)は畢竟離なり。禪(那)波羅蜜(多)毗梨耶

波羅蜜(多)廣提波羅蜜(多)尸羅波羅蜜(多)檀那波羅蜜(多)は畢竟離なり。乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦畢竟離なり。

若し法にして畢竟離ならば則ち修すべからず、壞すべからず。般若波羅蜜(多)を行するも亦法の得べきものあること無し、

提を得るや。阿耨多羅三藐三菩提も亦畢竟離なり、二離中に云何が能く所得有らん」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「善い哉、善い哉、是の般若波羅蜜(多)は畢竟離なり。禪(那)波羅蜜(多)毗梨耶波羅蜜(多)

廣提波羅蜜(多)尸羅波羅蜜(多)檀(那)波羅蜜(多)は畢竟離なり。乃至一切種智は畢竟離なり。須菩提よ、若し般若波羅蜜

〔多〕は畢竟離、乃至一切種智畢竟離ならば、是を以ての故に、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、若し般若波羅蜜〔多〕は畢竟離に非ず、乃至一切種智は畢竟離に非ずんば、是を般若波羅蜜〔多〕と名けず、禪〔那〕波羅蜜〔多〕乃至一切種智と名けず。須菩提よ、若し般若波羅蜜〔多〕は畢竟離、乃至一切種智は畢竟離ならば、是を以ての故に、須菩提よ、般若波羅蜜〔多〕に因らずして阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ざるも、亦離を何て離を得ず、而も阿耨多羅三藐三菩提を得るは、般若波羅蜜〔多〕に因らざるにあらずしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の行する所の義は甚深なりしと。佛の言はく、「是の如し、須菩提よ、菩薩摩訶薩の行する所の義は甚深なり。須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩は能く難事を爲す。所謂是の深義を行じて而も聲聞辟支佛地を證せずしと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、我が佛に従つて聞く義の如くんば、菩薩摩訶薩の行所は難しと爲さす。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、是の義を得て證を作すべからず、亦般若波羅蜜〔多〕を得て證を作さす、亦證を作すも無ければなり。世尊よ、若し一切法不可得ならば、何等か是の義にして證を作すべく、何等か是れ般若波羅蜜〔多〕にして證を作さん。何等か是れ證を作す者にして、證を作し已りて阿耨多羅三藐三菩提を得んや。世尊よ、是を菩薩摩訶薩の無所得の行と名く。菩薩は是を行じて、一切法に於いて皆明了を得。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、是の深法を聞いて、心に驚かず、没せず、怖かず、畏れざれば、是を名けて般若波羅蜜〔多〕を行すと爲す。是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜〔多〕を行する時、我れ般若波羅蜜〔多〕を行するを見ず、亦是の般若波羅蜜〔多〕を見ず、亦我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきを見ず。何となれば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜〔多〕を行する時、是の念を作さざればなり。聲聞辟支佛地は我を去ること遠く、薩

婆若は我を去ること近しと。世尊よ、譬へば虚空の是の念を作さざるが如し。法あり、我を去ること遠く、我を去ること近しと。何となれば、世尊よ、虚空は分別無ければなり。世尊よ、般若波羅蜜〔多〕を行する菩薩も亦是の念を作さす、

聲聞辟支佛地は我を去ること遠く、薩婆若は我を去ること近しと。何となれば、般若波羅蜜(多)の中には分別無ければなり。世尊よ、譬へば、幻人は是の念を作さざるが如し、幻師は我を去ること近く、観る人は我を去ること遠しと。何となれば、幻人は分別無ければなり。般若波羅蜜(多)を行する菩薩も是の念を作さず、聲聞辟支佛地は我を去ること遠く、薩婆若は我を去ること近しと。世尊よ、譬へば鏡中の像の是の念を作さざるが如し、所因の者は我を去ること近く、餘の者は我を去ること遠しと。何となれば、像は分別無ければなり。般若波羅蜜(多)を行する菩薩も亦是の念を作さず、聲聞辟支佛地は我を去ること遠く、薩婆若は我を去ること近しと。何となれば、般若波羅蜜(多)の中には分別無ければなり。世尊よ、般若波羅蜜(多)を行する菩薩は愛無く憎無し。何となれば、般若波羅蜜(多)は自性不可得なればなり。世尊よ、譬へば、佛は愛無く憎無きが如く、般若波羅蜜(多)を行する菩薩の愛無く憎無きも亦是の如し。何となれば、般若波羅蜜(多)の中には憎無く愛無ければなり。世尊よ、譬へば、佛は一切分別の想を斷ずるが如し。般若波羅蜜(多)を行する菩薩も亦是の如く一切の分別の想を斷ず。それは畢竟空なればなり。世尊よ、譬へば佛に化せらるる人の是の念を作さざるが如し。聲聞辟支佛は我を去ること遠く、阿耨多羅三藐三菩提は我を去ること近しと。何となれば、佛に化せらるる人は分別無ければなり。般若波羅蜜(多)を行する菩薩も亦是の如く、是の念を作さず、聲聞辟支佛は我を去ること遠く、阿耨多羅三藐三菩提は我を去ること近しと。世尊よ、譬へば、所爲有るが故に化を作し、化の所作の事分別無きか如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)も亦是の如く、所爲の事有りて、是の事を修し成就す、而して般若波羅蜜(多)も亦分別無し。世尊よ、譬へば、工匠、若し工匠の弟子の所爲有るが故に、木人若くは男女、象馬牛を作り、是の所作も亦能く所作有るも、是の牛馬には亦分別無きが如し。世尊よ、般若波羅蜜(多)も亦是の如く、所爲有るが故に是の事を説いて成就し、而も般若波羅蜜(多)には亦分別無きなりしと。



の菩薩は一切の未だ發心せざる者に勝る。何となれば、是の人は無量無上の佛法の因縁を種ゑ、一切衆生を度し、苦を離れて樂を得せしめんと欲す。其の餘の衆生は、但自ら樂を求め、他に苦を與へんと欲す。是の如き等の因縁の故に、發心の者は勝れたり。

問うて曰く、諸の阿羅漢、辟支佛、及び五通は、是れ離欲の人なり。發心の者にして、或は未だ欲を離れず、但發心のみ有り。云何が勝ることを得るや。答へて曰く、是の事は先品の中に已に種種に答へたり。阿羅漢等は、漏盡くと雖も、初發心の菩薩に如かず。譬へば、轉輪聖王の太子は、胎中に在りと雖も、已に餘子に勝るが如く、又國王の太子は未だ位に即かずと雖も、諸の大臣の位に有りて、富貴なる者に勝るが如し。發心の菩薩に二種有り、一には諸の波羅蜜〔多〕等の菩薩道を行じ、二には但密に發心す。此の中には菩薩道を行ずる者を説く、是の人は事未だ成就せずと雖も、能く一切衆生に勝る、何に況んや、成就せるをや。歌羅頻伽鳥の聲中に在りて、未だ聲を發せざるに已に能く諸鳥に勝るが如し、何に況んや、成就せるをや。菩薩も亦是の如く、未だ成就せずと雖も、菩薩道を行ずるに、諸法實相を説く音聲は、諸の外道及び魔民の戲論を破す、何に況んや、成就せるをや。有人の言はく、若し能く一たび發心して、「我れ當に作佛して、一切衆生の苦を滅すべし」と言ふこと有らんに、未だ煩惱を斷せず、未だ難事を行せずと雖も、心口の業重きを以ての故に、一切衆

【三】 第一問、但發心あるのみにして、離欲の人たる阿羅漢等に勝る理由如何。

【四】 二種の發心の菩薩。

生に勝る。一切衆生は皆自ら樂を求め、自ら身の爲の故に其の所親を愛す。阿羅漢辟支佛は世樂を貪らざると雖も、自ら苦を滅するが爲の故に、涅槃の樂を求め、能く衆生に爲にせず。菩薩の心に生じ、口に言ふは一切を度せんが爲なり、是の故に勝れたり。譬へば、一の六神通の阿羅漢の將に一沙彌をして衣鉢を負はしめ、路に循つて而して行くが如し。沙彌思推すらく、「我れ當に何の乘を以てか涅槃に入るべき」と。即ち發心すらく、「佛を世尊最上最妙と爲す。我れ當に佛乘を以て涅槃に入るべし」と。師其の念を知り、即ち衣鉢を取つて自ら擔ひ、沙彌を推し、前に在りて行かむ。沙彌覆つて復思惟すらく、「佛道は甚だ難く、久しく生死に住し、無量の苦を受く。且く小乘を以てし早く涅槃に入らん」と。師復衣鉢の囊を以て、沙彌に還し與へて擔はしめ、語つて前に在りて行かむ。是の如くすること三たびに至り、沙彌は師に白すらく、「師は年老い耄狀にして、小兒の戲るるが如し。方に始は我をして前に在らしめ、已つて復我をして後に在らしむ。何ぞ其れ太だ速かなるや」と。師答ふらく、「汝初は發心作佛を念す。是の心は貴重にして、則ち我が師道の中に住す。是の如き人は諸の辟支佛すら尙應に供養すべし、何に況んや阿羅漢をや。是を以ての故に汝を推して前に在らしむ。汝が心還た悔い、小乘を取らんと欲す、而も未だ便ち得ず。汝は我を去ること懸に遠し。是の故に汝をして後に在らしむ」と。沙彌は聞き已つて驚悟し、「我が師は能く我心を知る。我れ

【五】一の沙彌、一たび發心する時は、師後にあり、一たび小心を發する時は、師その前にありし因縁。



ひとたび發心するすら、已に阿羅漢に勝る、何に況んや、成就するをや」と。即ち自ら堅固に大乘法に住むり。

復次に、勝るの名は必ずしも一切事中に皆勝れず。但一たび發心し、作佛して衆生を度せんと思ふ事を以て、是の事を勝れたりと爲す。諸餘の禪定解脱等は猶尙未だ有らず。何ぞ勝れりと言ふことを得ん。譬へば、飛ぶを以て、之を鳥は則ち人に勝ると言ふが如し。未來は當に功德を得べきも、此の事を論せず。小乗の人の言はく、「乃至補處の菩薩すら尙小沙彌の無量の律儀を得る者に勝れず」と。摩訶衍論の中に或は人有りて、是の如く言ふ、「其れ大乘の心を發す者有れば、復弊惡の小人中に在りと雖も、猶ほ二乗の解脱を得る者に勝る」と。

是を二邊と名け、是の二邊を離るるを名けて中道と爲す。中道の義は

上に説くが如し。其の義あるを以て理實なり。故に應當に取るべし。是の故に説く、「初發心の時すら一切衆生に勝る、何に況んや、成佛せるをや」と。薩婆者を聞いて信する者は人中の善利を得とは、有人の言はく、「六波羅蜜(多)は是れ利なり」と。有人の言はく、「六波羅蜜(多)の果報は是れ利なり。所謂轉輪聖王、釋梵天王、人王、法王等なり」と。有人の言はく、「阿鞞跋致を得、惡道に墮せず、常に人天の富貴の處に生ずるなり」と。有人の言はく、「菩薩は果報の神通に住し、十方に遊至し、諸佛を供養し、種種に方便して衆生を教化し、因縁を信受して衆生を教化す、是の如き等の大利を得」と。壽

【六】發心の者は弊惡なりと雖も、二乗の解脱者に勝る。

命の中最なりとは、衆生に二種の命有り。一には命根、二には智慧命なり。是の人は智慧命を得るが故に、壽命中最なりと説く、何に況んや發心せるをや。發心の者は敬ぶべく貴ぶべし。何となれば先に因縁を説けるが如く、能く自らの樂を捨てて他に樂を與へ、自ら憂苦せず、他人の苦を憂ふればなり。爾の時、釋提桓因は歡喜の相を現せんと欲し、天の曼陀羅華を以て佛の上に散ず。經に廣く説くが如し。

問うて曰く、(一)罪福は以て人に與ふべからず、與へんと欲すと雖も亦得

ず。釋提桓因は何を以ての故に此の福徳を以て、佛道を求むる者をして、

佛法を具足せしむと言ひしか。答へて曰く、人に與ふべからずと雖も、然

も自ら心をして好からしむ。又是れ釋提桓因は此れ福に著せざるを顯す。

是の故に隨喜の心を以て佛道を求むる者に與ふ。聲聞の人に與ふるも亦爾

なり。釋提桓因、佛に白さく、「我は聲聞道を得と雖も、亦一念を生ぜずんば、菩薩をして轉じて還

た二乗の心に向はしむ」と。何となれば、諸の菩薩に衆生の生死中に在りて、種種の苦有ることを

見、一切の世間を利益せんと欲するが故に、是の願を作す、「未だ度せざる者を我當に度すべし等」と。

爾の時、會中の衆生に是の念を作すもの有り。「若し上に説くが如く、隨喜に功德有らば、初發心の

人の隨喜は、久發心の人の隨喜に於いて何の差別有りや」と。釋提桓因は衆人の疑を解かんと欲する

【七】 二種の衆生の命。

【八】 第二問、罪福は以て人に與へらるべきものにあらず、然るを釋提桓因は、何故に此の福徳を以て佛道を求むるものをして佛道を具足せしむと言ひしか。

が故に、佛に問うて言はく、「世尊よ、初發心の菩薩の功德の隨喜に於いて、幾許の福德を得るや」と。  
經に廣く説くが如くんば、是の福德は無量無邊なりと。種は無量無邊なるを以て、田中の人は數へ知  
ること能はず、故に譬喩を説きて解せしむ。經中に廣く説くが如く、隨喜の徳は無量無邊なりと雖も  
佛道に近づく者に於いて、隨喜の福德は轉多し。是の時、帝釋は歡喜するが故に、佛に白して言さく、  
「世尊よ、是の功德を聞いて隨喜せざる者有らば、則ち是れ魔民にして魔天より來る。何となれば、魔  
の境界に在りて惡心を積集するが故に隨喜せざればなり」と。此の中に因縁を説く、隨喜の心は能く  
魔界を破す。是の故に佛道を求むる者、三尊を愛敬して捨てざらんと欲せば、當に隨喜の心を以て阿  
耨多羅三藐三菩提に廻向すべしと。不一不二の相とは、諸法に一定の相有りて、因縁に屬せざる者を  
見ざるが故に不一と言ひ、隨喜の心と廻向の心とを分別せざる、是を不二と名く。「そは」畢竟空なるが  
故なり。佛は帝釋の意を可とし已つて、更に隨喜の功德を稱説したまへり。是の人は常に十方諸佛の  
功德を憶念し隨喜するが故に、疾かに佛を見ることを得。又深心を以て、一切衆生に於いて、苦を離  
れて樂を得せしめんと欲す。是の故に、生死に往來するも、六情は初に惡塵を受けず、終に諸佛の前  
に生ずることを離れず。「そは」見佛の行を種うるとを斷せざるを以ての故なり。此の中に、佛自ら  
因縁を説きたまはく、「是の人は無央數の阿僧祇に於いて、初發心の菩薩より、乃至無量の一生補處  
の菩薩に至るまで、皆隨喜するが故に、上の如き果報を得て、疾かに佛道を成じ、無量阿僧祇の衆生

を度す。

復次に、憍(けう)迦(か)よ、是(こ)の菩薩(ぼさつ)は是(こ)の福德(ふくとく)に因(よ)り、諸法(しよほふ)實相(じつさう)の如(ごと)く實相(じつさう)中(ちゆう)に廻向(まかう)す。心(こころ)は不可得(ふかたく)なり、是(こ)の故(ゆゑ)に心(こころ)に非(あら)ず、亦(また)心(こころ)を離(はな)れずと説(と)く。上(かみ)に不一(ふ)不二(ふ)の義(ぎ)を説(と)くが如(ごと)きは、事(じ)異なるを以(もつ)ての故(ゆゑ)に更(さら)に説(と)く。須菩提(しよぼだい)は聞(き)き已(ま)はり、是(こ)の空(くう)に心相(しんさう)有(あ)ること無(な)きを取(と)り、佛(ほとけ)を難(なん)ずらく、「是(こ)の心(こころ)は心(こころ)に非(あら)ず、空(くう)にして所有(しよいう)無(な)く、幻(まぼろし)の如(ごと)くんば、云何(いかん)が能(よ)く阿耨多羅三藐三菩提(あうたらかさんみやくさんぼだい)を得(え)んや」と。佛(ほとけ)は反問(はんもん)したまはく、「須菩提(しよぼだい)よ、汝(なんぢ)は是(こ)の空心(くうしん)の定相(ぢやうさう)の幻(まぼろし)の如(ごと)くなることを見るや不(いな)や」と。須菩提(しよぼだい)是(こ)の念(ねん)を作(な)す、「心若(こころも)し空(くう)にして幻(まぼろし)の如(ごと)くんば、云何(いかん)が見(み)るべけん。若(も)し見るべくんば則(すなは)ち空(くう)に非(あら)ず」と。是(こ)の故(ゆゑ)に答(こた)へて言(い)はく、「不(いな)なり」と。佛(ほとけ)の言(ことば)はく、「心(こころ)若(も)し空(くう)にして所有(しよいう)無(な)くんば、汝(なんぢ)は是(こ)の中(ちゆう)に有(あ)るを見る。是(こ)は若(も)しくは有(あ)り、若(も)しくは無(な)なりとは戲論(げいろん)なりや不(いな)や」と。答(こた)へて言(い)はく、「不(いな)なり」と。「是(こ)の空(くう)にして所有(しよいう)無(な)く、幻(まぼろし)の如(ごと)き心(こころ)を離(はな)れて、汝(なんぢ)は更(さら)に法(ほふ)有(あ)り、更(さら)に無上道(むじやうだう)を得(え)るものを見るや不(いな)や」と。答(こた)へて言(い)はく、「見(み)ず。見(み)えず得(え)べからざるが故(ゆゑ)に、何ぞ法(ほふ)有(あ)りて、若(も)しくは有(あ)り、若(も)しくは無(な)ならん。一切(いつさい)諸法(しよほふ)は畢竟(ひつぎやう)なるが故(ゆゑ)に、畢竟(ひつぎやう)空(くう)なるが故(ゆゑ)に、有(あ)り墮(だ)せず、無(な)に墮(だ)せず。若(も)し法(ほふ)にして、有(あ)る無(な)の中に墮(だ)せざれば、是(こ)れ則(すなは)ち畢竟(ひつぎやう)じて所有(しよいう)無(な)く、無上道(むじやうだう)を得(え)べからず。是(こ)の因縁(いんねん)を以(もつ)ての故(ゆゑ)に、般若波羅蜜(はんげはらみつた)〔多(た)〕は畢竟(ひつぎやう)離(り)相(さう)なり。〔そは〕有(あ)る無(な)の二(ふた)を見ることは、俱(とも)に過(とが)なればなり。禪(ぜん)〔那(な)〕波羅蜜(はらみつた)〔多(た)〕三藐三菩提(さんみやくさんぼだい)に至(いた)るも亦(また)是(こ)の如(ごと)く畢竟(ひつぎやう)離(り)相(さう)なり。若(も)し法(ほふ)は畢竟(ひつぎやう)離(り)なれば、則(すなは)ち見(み)るとを得(え)べからず、修(しゆ)

するとを得べからず、斷ずることを得べからず、證することを得べからず。是の法を行すれば則ち更に所得無し、「そは」畢竟離なるが故なり。世尊よ、今般若波羅蜜(多)は畢竟離なり。阿耨多羅三藐三菩提も畢竟離なり。云何が畢竟離を以て畢竟離を得ん。若し一法の畢竟離すら、尙は所得有るべからずんば、何に況んや二の離をや。譬へば、指を以て虚空に觸るるが如し。虚空には觸無きが故に、指は觸ること能はず、何に況んや、二は皆觸無きをや。亦虚空涅槃の如く、般若波羅蜜(多)は畢竟離なり、阿耨多羅三藐三菩提も畢竟離なり。云何が離を用て離を得ん」と。佛は須菩提の諸法實相に隨つて説くことを知りたまへるが故に、其の言を可として、「善哉、善哉」と「宣ひ」、即ち因縁を説きたまふく、「須菩提よ、若し般若波羅蜜(多)は畢竟離なり、阿耨多羅三藐三菩提も畢竟離なり。是の因縁を以ての故に得べし。何となれば若し一法の定んで相有りて空に非ずんば、則ち是れ常法にして不生の相なり。未來より現在に至り、現在より過去に至る。若し實に生相無くんば則ち滅相無し。若し生滅無くんば則ち四諦無し。若し四諦無くんば則ち法寶無く、法寶無きが故に亦阿耨多羅三藐三菩提無し。「そは」法寶は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なるが故なり。若し法寶無ければ則ち佛寶無し。若し佛法無ければ、則ち僧寶無し。若し三寶無ければ、則ち一切諸法無し。是の如き等の過罪有るが故に畢竟離相は則ち通達無礙なり。若し畢竟離を説けば、當に知るべし、亦空をも離ると。若し空を離れざれば畢竟離と名けざるなり。是の故に經に説いて言はく、「般若波羅蜜(多)は畢竟離なるが故

に、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。般若波羅蜜(多)を離れずと雖も、阿耨多羅三藐三菩提を得。亦二離を以て而して二離を得ず。畢竟空なるが故に難すべからず。須菩提は佛の所説の甚深の相を知る、この故に佛に白して言さく、「若し菩薩能く是の如く行せば、則ち是れ甚深の義を行するなり」と。佛其の言を可として(宣はく)、「是の菩薩は能く難事を爲し、能く是の如き甚深の義を行じ、而して二乗を證せず。何となれば、是の菩薩は一心に利智を以て深く空に入り、而も涅槃を證せざればなり。是を則ち難しと爲す」と。須菩提言はく、「我が佛所説の義を解するが如くんば、是を難しと爲さず。何となれば、是の人は是の甚深の義に、一定相の證を作すべきものを得ざればなり。般若波羅蜜(多)を得ず、證する者を得ず、誰か當に甚深の義を以て證を作さん。若し是の甚深の義を證せざれば、誰か當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき。是を菩薩の無所得の行と名く。是の道を行せば、則ち一切法を照明す」と。

問うて曰く、佛は説いて難しと言ひ、須菩提は難からずと言ふ。師と弟子の義は應に同じかるべし。何を以てか各相違背するや。答へて曰く、佛は世諦を以ての故に説きたまひ、須菩提は第一義諦を以ての故に説く。佛は、「菩薩は是の甚深の義を得」と説き、須菩提は、「菩薩も亦是の甚深の義を得す」と説く。(二)佛は須菩提の衆生の爲にするを以ての故に説きたまひ、有人は難事を聞けば則ち發心するが故に難事を説き、有人は難事を聞いて而も廢退するが故に無難を説く。是を菩薩の無所得の

【九】 第三問、佛は難しと宣ひ須菩提は難と言ふ、師弟兩者の意見相違する理由如何。

【一〇】 菩薩の無所得の行。

行と名く。是の行中に住すれば、一切法に於いて通達無礙なり。須菩提言さく、「若し菩薩は、是の如く畢竟離にして、法として證すべきもの無く、證を取る者無く、亦般若及び阿耨多羅三藐三菩提無きことを説くを聞き、是の時驚かす没せず、通達無礙なる者は、是を般若波羅蜜(多)を行すと名け、般若波羅蜜(多)を行する者は、是を眞行深行と名く。何となれば、是の菩薩は般若波羅蜜(多)を見ず、亦た我れ般若波羅蜜(多)を行すと見ず。阿耨多羅三藐三菩提を見ず。亦た是の法は阿耨多羅三藐三菩提を得べしと見ず、都べて分別する所無ければなり。是の菩薩は一切諸法の實相の中に安住するが故に、是の分別、「所謂」二乗は我を離ること遠く、佛道は我を離ること近しと言ふことを作さずしと。此の中に虚空等の譬喩を説く。此の諸の譬喩は畢竟空の義を明了にするが爲の故なり。般若波羅蜜(多)は空なりと雖も、若し修する所有れば能く其の事を成じ、乃至木人の作すに随つて何事も皆能く成就するが如し。舍利弗、須菩提に問ふ、「但だ般若のみ分別無く、諸の波羅蜜(多)も亦分別無し。若し但般若のみ空にして分別無く、餘の波羅蜜(多)は應に是れ有相なるべくんば、是れ則ち菩薩の道に別異有りて平等ならず。又初品の中に説く、檀(那)波羅蜜(多)を行する時は、施者・受者無く、亦財物も無しと。今云何が別と言ふや。若し五事は皆空ならば則ち分別無く、六名有ること無く、亦修行すべきこと無けん」と。須菩提言はく、「五波羅蜜(多)も亦空にして、分別有ること無し。初めて發心して未だ無生法忍を得ざる者には分別有り。譬へば、四河は未だ大海に會せざれば則

ち別名有り、既に大海に入れば則ち差別無きが如し。菩薩も亦是の如く、世俗諦の中には差別有り、第一義諦には則ち分別無し」と。舍利弗は問ふ、「色乃至阿耨多羅三藐三菩提、及び無爲性も亦分別無きや。若し此の法は空にして差別無くんば、云何が六道の別異有らん。云何が須陀洹乃至佛道を分別すること有らん」と。須菩提、舍利弗に答ふ、「諸法は畢竟空にして、分別無しと雖も、而も是の衆生は、狂顛倒の心もて、身口意の業を起し、業に随つて身を受く。業報は貪欲是れ本なり。但欲の爲に逼られて、而して著心を生じ、諸法に定相有ること無し」と。業の果報とは所謂六道なり。是を以ての故に知る、空にして分別する所無きは是れ其の實本なり、但顛倒不實を以ての故に六道の差別有り。又須陀洹等の賢聖も、亦畢竟空無分別の法に因りて生ず。所謂三結の法を斷ずるを須陀洹果と名く。三結使は即ち是れ顛倒にして、顛倒を覺して除却するを名けて斷と爲す。是の故に、斷する法は、即ち是れ空にして、分別有ること無し。世諦の故に假に人と名け、是の法を得るが故に、須陀洹果と名く。是の故に當に知るべし、須陀洹の人及び果は畢竟空にして分別無し、乃至佛佛道も亦是の如しと。此の中に因縁を説く、但現在のみ無分別なるに非ず、過去の如恆河沙の諸佛は一切の分別を斷するが故に、無餘涅槃に入りたまひ、少許の法の定相の分別すべきもの有ると無し、一切法は畢竟空なり、「そは」是の如法性實際門に入るが故なり。是の故に因縁法は甚深なりと言ふ。是の

【二】三結とは、預流果を得る人の斷する所の三種の煩惱謂ゆる見結、戒取結、疑結是れなり。



三門に入るが故に、菩薩は應に是の如き無分別の般若波羅蜜(多)を行すべく、無分別の般若波羅蜜(多)を行するが故に、無分別の法、所謂の阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。

二三 稱揚品第六十五の上を釋す。



舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行するを、眞實の法を行すと爲すや、無眞實の法を行すと爲すや」と。須菩提、舍利弗に報ふるらく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行するは、無眞實の法を行すと爲す。何となれば、

是の般若波羅蜜(多)は無眞實法、乃至一切種智も亦無眞實なればなり。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行するも、無眞實の法は不可得なり、何に況んや眞實をや。乃至一切種智を行するも、無眞實の法は不可得なり、何に況んや眞實をや」と。

爾の時に、欲色界の諸天子は是の念を作す、「諸の善男子善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提の意を發し、深般若波羅蜜(多)の所説の義の如く行し、等法に於いて、實際の證を作さず、聲聞辟支佛地に墮せず、應當に(是の菩薩の)爲に禮を作すべし」と。須菩提、

諸の天子に語るらく、「諸の菩薩摩訶薩は等法に於いて聲聞辟支佛地を證せざるを難しと爲さず、諸の菩薩摩訶薩は大に莊嚴し、我れ當に無量無邊阿僧祇の衆生を度すべし。衆生の畢竟不可得なることを知りて而も衆生を度す、是を乃ち難しと爲す。諸の天子よ、諸の菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提心を發して、是の願を作す、「我れ當に一切衆生を度すべし」と。

衆生は實に不可得なるに、是の人の衆生を度せんと欲するは、虚空を度せんと欲するが如し。何となれば、虚空は離なるが故に、當に知るべし衆生も亦離なりと。虚空は空なるが故に、當に知るべし衆生も亦空なりと。虚空は堅固なること無けれ

【三】 此の品は、初に衆生なくして、衆生を度すること、虚空を度するが如しとするが故に、度空品ともいひ、後に魔のよく壞せざる因縁を明し、諸天諸佛諸菩薩を稱揚するが故に稱揚品ともいふ。

ば、當に知るべし衆生も亦堅固なること無しと。虚空は虚誑なり、當に知るべし衆生も亦虚誑なりと。諸の天子よ、是の因縁を以ての故に、當に知るべし、菩薩の所作を難しと爲すと。無所有の衆生を利益せんが爲の故に、而も大に莊嚴すればなり。是の人は衆生の爲に誓を結び、虚空と共に闘はんことを爲すと。是の菩薩は誓を結び已るも亦衆生を得ず、而も衆生の爲に誓を結ぶ。何となれば、衆生は離なるが故に、當に知るべし大誓も亦離なりと。衆生は虚誑なるが故に、當に知るべし大誓も亦虚誑なりと。若し菩薩摩訶薩、是の法を聞き、心驚かず、没せざれば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行することな。何となれば、色の離は即ち是れ衆生の離なり、受想行識の離は即ち是れ衆生の離なり。色の離は即ち是れ六波羅蜜(多)の離なり、受想行識の離は即ち是れ六波羅蜜(多)の離なり。乃至一切種智の離は即ち是れ六波羅蜜(多)の離なればなり。若し菩薩摩訶薩、是の一切諸法の離相を聞いて、心驚かず、没せず、怖かず、畏れざれば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行することなと。

佛、須菩提に告げたまはく、「何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜(多)の中に於いて心没せざるや」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は無所有なるが故に没せず、般若波羅蜜(多)は離なるが故に没せず、般若波羅蜜(多)は寂滅なるが故に没せず。世尊よ、是の因縁を以ての故に、菩薩は深般若波羅蜜(多)の中に於いて心没せず。何となれば、是の菩薩は没者を得ず、没事を得ず、没處を得ず、是の一切法は皆不可得なればなり。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、是の法を聞いて、心驚かず、没せず、怖かず、畏れざれば、當に知るべし、是の菩薩は般若波羅蜜(多)を行すと爲すとを。何となれば、没者、没事、没處、是の法は皆不可得なればなり。菩薩摩訶薩は、是の如く般若波羅蜜(多)を行すれば、諸天及び釋提桓因、天、梵天、四天王及び世界主天は皆禮を作すことを爲すと。

佛、須菩提に告げたまはく、「但釋提桓因、諸天の梵王及び諸天世界の主及び諸天の禮するのみにあらず、是の菩薩摩訶

薩、般若波羅蜜(多)を行すれば、是の上に過ぎたる光音天、遍淨天、廣果天、淨居天、皆是の菩薩摩訶薩の爲に禮を作す。須菩提よ、今現在十方無量の諸佛も亦是の般若波羅蜜(多)を行する菩薩摩訶薩を念じたまふ。當に知るべし、是の菩薩は佛の如しと爲すと。須菩提よ、若し恆河沙等の世界の中の衆生を悉く魔と爲らしめ、是の一一の魔は復た魔を化作し、如恆河沙等の魔たるとも、是の一切の魔は、菩薩の般若波羅蜜(多)を行することを留難すること能はずと。

論

釋して曰く、爾の時、舍利弗は上の無分別相の法を聞き、心大に歡喜し、須菩提に問ふ、「若し菩薩、般若波羅蜜(多)を行するは、眞實の法を行すと爲すや、無眞實の法を行すと爲すや」と。眞實とは審定にして變異せず、即ち是れ取るべく著すべし。若し不眞實は即ち是れ虚誑の妄語なり。須菩提は常に樂んで深空を行じ、心に障礙無きが故に答ふらく、「(一)般若を行する者は無眞實を行すと。何となれば、般若波羅蜜(多)は空にして定相無く、分別無ければなり。乃至一切種智も亦是の如し。菩薩は是の如く般若波羅蜜(多)を行する時、先來生死の中に習ふ所、著する所の虚誑の有爲法すら尙不可得なり、何に況んや、後來に觀する虚誑の因縁生をや。般若波羅蜜(多)は所著の法に非ずして而も得べし。是の故に、菩薩は一切世間は不眞實なりと觀じ、亦是の般若波羅蜜(多)にも著せず。世諦の故に眞實を説く。(二)第一義の中には眞實は不可得なり。何に況んや不眞實をや、爾の時、欲色界の諸天子歡喜して言はく、「其れ菩薩の心を發すこと有る者を皆應に敬禮すべし。能く難事を

【一】般若を行する者は、無眞實を行す。  
 【二】第一義諦の中には、眞實すら不可得なり、況んや不眞實をや。

爲し、能く第一義を行じ、而して證を作さざればなりし。 (三五) 第一義とは即ち是れ平等法なり。但異

名を以て説くのみ。須菩提、諸の天子に語るらく、「菩薩は平等法に於いて證を作さざるを難しと爲

さず。菩薩は無量の衆生を度せんと欲するに、衆生は畢竟不可得なり、是れ則ち難しと爲す。何とな

れば、衆生を度せんと欲するは、虚空を度せんと欲すと爲す。虚空は離なるが故に、衆生も亦離な

り。虚空は虚誑不實なるが故に、衆生も亦虚誑不實なればなり。

問うて曰く、(二六) 平等法に於いて而も證せず、衆生は畢竟空なり、而も衆

生を度す。此の二は俱は畢竟空なり。云何が一は難く、一は難からずと言

ふや。答へて曰く、衆生は虚誑の假名なるが故に、是の所著の處の平等法

は無爲なるが故に、所著の處に非ず。衆生は有爲法の假名に従つて而して

生ず、無爲法は是れ第一義なり。顛倒の著處に於いて、而も能く著せざるを難しと爲す。無著の處に

於いて著せざるは是を難しと爲さず。是を以ての故に、是の如く説く、衆生は空なるが故に、大莊嚴

も亦空なり。若し大莊嚴は空にして而して能く發心するを難しと爲す。菩薩は是の第一平等義は、衆

生を度し、大莊嚴するは皆畢竟空なることを聞き、而も心に驚かず沒せず。譬へば、調馬の自ら影を

見て驚かざるが如し。何となれば、自ら影の身より出づることを知ればなり。菩薩も亦是の如く、畢

竟空にして、有爲(法)は和合虚妄の法に因りて生ずることを知るが故に、菩薩は是の事を聞くも驚か

【二五】 第一義とは平等法なり。  
【二六】 第四問、平等法も衆生も畢竟空なり、云何が一は難く一は難からずと言ふや。

す没せず。是を般若波羅蜜〔多〕を行すと爲す。色等の法は離なるが故に、衆生も亦離なり、離を名けて空と爲す。若し衆生は空にして法は空ならざれば、應に怖畏有るべし、若し法も亦空ならば、怖畏を生ずる處無し。若し菩薩は是の一切法の離相を聞き、心に畏れざれば、是を亦菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行すと名く。上に衆生空を聞くが故に畏れず、今法空を聞くが故に畏れず。若し是の二空を聞いて畏れざれば、是れ眞に般若を行すと爲す。佛須菩提に問ひたまはく、「何を以ての故に菩薩の心は没せざるや」とは〔次に説くが如し〕。

問うて曰く、佛は是れ一切智人なり、何を以てか、弟子に心驚かず没せざるかを問ふや。答へて曰く、衆會は疑有るも、敬ひ難るを以ての故に敢へて問はず、是を以て佛は問ひたまへり。

復次に、是の第一平等義は甚深にして得難し、深處は應當に没すべくして、而も没せざるが故に、試に須菩提に問ひたまへり。復次に、佛は須菩提を以て説法の主と爲したまふ。聽者の法は應に問難すべし。

問うて曰く、佛は一切智たり、何を以てか自ら説主とならず、而も須菩提をして説かしたまふや。答へて曰く、衆中の有人は、佛の智慧は無量無邊にして、我等が智力は量有るを以て、若し心に疑ふ所有るも敢へて問を發せず。是の人の爲の故に須菩提に命じて説かしたまへり。

【七】第五問、佛は一切智人なり、何を以てか、弟子に心驚かず没せざるかを問ふや。  
【八】第六問、佛、須菩提に命じて説かしたる理由如何。

問うて曰く、(一九) 若し爾らば、何を以てか、大菩薩をして説かしめざるや。答へて曰く、大菩薩の智慧は亦大に不可思議にして、威徳重きが故に、亦敢へて問難せざればなり。

復次に、有人の言はく、「阿羅漢、辟支佛、佛は三界の繋なる無明永く盡きて餘す無し、故に能く實の如く法を説く。諸の菩薩は廣く福徳を集むと雖も、漏未だ盡くさざるが故に或は信すべからず。是の故に命せざるなり。」

問うて曰く、(二〇) 若し爾らば、舍利弗の智慧第一なる、及び餘の大弟子に何を以てか命せざるや。答へて曰く、是の事は先に已に答へたり、「所謂、須菩提は空行を樂しみ、偏に善く空を説く。般若波羅蜜(多)は多く空を説くが故に、須菩提をして説かしむ」と。須菩提、佛に白さく、「一切法は畢竟空にして所有無きなり。所有無きが故に自相を離れ、相を離るるが故に常寂滅なり。常寂滅なるが故に憶想分別無し。是の故に菩薩は驚くべからず、没すべからず。沈

【一九】 第七問、若し爾らば何故に大菩薩をして説かしめ給はざりしか。  
【二〇】 第八問、若し爾らば、智慧第一の舍利弗、及び餘の大弟子に命せざる理由如何。

者、没處、没法は皆不可得なり。若し菩薩、是の事を聞いて驚かず没せざれば、是を般若波羅蜜(多)を行すと爲す」と。須菩提は答へ已り、佛に白して言さく、「能く是の如く行するを亦名けて般若波羅蜜(多)を行すと爲す。世尊よ、菩薩能く是の如く行せば、一切の諸天、帝釋及び世界の主は菩薩を禮すとは、地神・虛中神・四天王・忉利天は天帝釋を主と爲し、皆共に是の菩薩を禮す。梵天王は初禪中の

梵世界の衆生の主なり。世界主とは、欲界の餘の天の主なり。衆生は多く此の天有ることを信するが故に、須菩提は説いて、禮を作すと云ふ。何となれば、是の菩薩は自の樂を捨てて、衆生を利益せんと欲し、是の三種の天は但自の樂を求むるのみなればなり。佛、須菩提に語りたまはく、「但だ是の三種の天のみ禮を作すに非ず、光音天等の清淨一心の諸天も皆亦禮を作す」と。欲界の諸天は姪欲に著する心多きが故に、禮するも貴しと爲すに足らず、初禪は覺觀に散亂有りて、亦妙と爲すに足らず、上の諸天は心清淨なるも、菩薩には大功德有るを以ての故に禮す。爾れば乃ち難しと爲す。須菩提よ、菩薩若し能く是の如く般若を行せば、十方無量諸佛の爲に念せらる。佛の念じたまふ因縁は先に説くが如し。今、佛説きたまはく、「是の菩薩は諸佛の念じたまふ果報なり」と、所謂當に知るべし。是の菩薩を佛の如しと爲す。「ていはい」其の必ず佛道に至りて退かざるを以ての故なり。何となれば如恆河沙等の魔は是の菩薩を壞すること能はざればなり。經に廣く説くが如し。

# 卷の第七十九

## 稱揚品第六十五の下を釋す。

須菩提よ、菩薩摩訶薩、二法を成就すれば、魔は壞すること能はず。何等か二なる。一切法の空を觀すると、一切衆生を捨てざるとなり。須菩提よ、菩薩は此の二法を成就すれば、魔は壞すること能はざるなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、復た二法ありて成就すれば、魔は壞すること能はず。何等か二なる。所作言ふ所の如くなること、亦諸佛に念ぜらるることなり。菩薩、此

の二法を成就すれば魔は壞すること能はず。須菩提よ、菩薩是の如く行ぜば、是の諸天

は皆菩薩の所に來到し、親近し、請問し、勸諭し、安慰して、是の言を作す、善男子よ、汝疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ること久しからざらん、善男子よ、汝常に當に是の空無相無作の行を行すべし。何となれば、善男子よ、汝是の行を行ぜ

ば、無護の衆生には汝は爲に護と作り、無依の衆生には爲に依と作り、無救の衆生には爲に救と作り、無究竟道の衆生には爲に究竟道と作り、無歸の衆生には爲に歸と作り、無洲の衆生には爲に洲と作り、冥者には爲に明と作り、盲者には爲に眼と作ればなりと。何となれば、是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行するに、十方現在の無量阿僧祇の諸佛、大衆の中に

在して法を説きたまふ時、自らは此の菩薩摩訶薩の姓名を讚歎し稱揚して言はく、某甲菩薩は般若波羅蜜(多)の功德を成就すと。須菩提よ、我れ今法を説く時、自ら寶相菩薩、尸棄菩薩を稱揚するが如し。

【一】 以下魔の壞する能はざる因縁を明す。



復次に、諸の菩薩摩訶薩有り、阿闍佛の世界の中に在りて、般若波羅蜜多を行じ、梵行を淨修せば、我も亦是の菩薩の姓名を稱揚す。須菩提よ、亦是の如く東方現在の諸佛の法を説きたまふ時、是の中に菩薩摩訶薩有りて梵行を淨修せば、佛も亦歡喜して自ら是の菩薩を稱揚讃歎するが如く、南西北方、四維上下も亦是の如し。復た菩薩有りて、初發意より佛道を具足し、乃至一切種智を具足せんと欲す。諸佛の説法したまふ時も亦歡喜し、自ら是の菩薩を稱揚讃歎す。何となれば、是の諸の菩薩摩訶薩の行する所は甚だ難くして、佛種行を斷せざればなりしと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等の菩薩摩訶薩か、諸佛は法を説きたまふ時、自ら讃歎稱揚するや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「阿鞞跋致の菩薩、諸佛の法を説きたまふ時、自ら讃歎稱揚す」と。須菩提言さく、「何等の阿鞞跋致の菩薩か、佛の爲に讃ぜらるるや」と。佛の言はく、「阿闍佛の菩薩たりし時の所行所學の如く、諸の菩薩も亦是の如く學す。是の諸の阿鞞跋致の菩薩、諸佛の法を説きたまふ時、歡喜讃歎す。

復次に、須菩提よ、菩薩有りて般若波羅蜜(多)を行じ、一切法の無生なることを信解するも、未だ無生忍法を得ず、一切法空を信解するも、未だ無生忍法を得ず、一切法の虛誑不實不堅固を信解するも、未だ無生忍法を得ず。須菩提よ、是の如き等の諸の菩薩摩訶薩、佛の法を説きたまふ時、歡喜して自ら名姓を讃歎し稱揚す。須菩提よ、若し諸の菩薩摩訶薩、諸佛の法を説きたまふ時、歡喜して自ら讃歎せば是の菩薩は聲聞辟支佛地を滅し、當に阿耨多羅三藐三菩提の記を得べし。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、諸佛の法を説きたまふ時、歡喜して自ら讃歎せば是の菩薩は當に阿鞞跋致地に住すべく、是の地に住し已りて當に薩婆若を得べし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の深般若波羅蜜(多)を聞き、其の心明利にして疑はず悔いす、是の念を作す、是の事は佛の所説の如しと。是の菩薩も亦當に阿闍佛及び諸の菩薩の所に於いて、廣く是の般若波羅蜜(多)を聞いて、亦た信

解すべし。信解し已りて、佛の所説の如く、當に阿耨跋致地に住すべし。是の如く、須菩提よ、但だ般若波羅蜜(多)を聞くのみすら大利益を得、何に況んや、信解し、信解し已りて説の如く住し、説の如く行じ、説の如く行じ已りて、一切種智の中に住するをやしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛説の菩薩摩訶薩、所説の如く住し、所説の如く行じて薩婆若に住するも、若し菩薩摩訶薩、無所得の法なければ、云何が薩婆若に住するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、諸法の如の中に住して、薩婆若に住す」と。須菩提言さく、「世尊よ、如を除きて更に法の得べき無し。誰か如の中に住し、如の中に住し已りて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや。誰か如の中に住し、當に説法すべけんや。如すら尙不可得なり、何に況んや、如に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るをや。誰か如の中に住して、而して法を説かんや。是の處有ること無し」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「汝が所説の如く、如を除いて更に法無し、誰か如の中に住し、如の中に住し已りて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや。誰か如の中に住して當に法を説くべけんや。如すら尙得べからず、何に況んや、如に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るをや。誰か如の中に住して而して法を説かんや。是の處有ること無し」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、如を除きて更に法の得べきものあるも無し。誰か如の中に住し、如の中に住し已りて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや。誰か如の中に住して、當に法を説くべけんや。如すら尙得べからず、何に況んや、如の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得ることをや。誰か如の中に住して而して法を説かんや。何となれば、是の如の生は得べからず、滅は得べからず、住も異も得べからず。若し法の生滅住異にして得べからずんば、是の中に誰か當に如に住すべく、誰か當に如に住し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや。誰か當に如に住して而して法を説くべけんや。是の

處有ること無ければなり」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊、諸の菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難し。深般若波羅蜜(多)の中に阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。何となれば、世尊よ、如の中には住する者有ると無く、亦當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき者無く、亦法を説く者無く、亦法を説く者無きも、菩薩摩訶薩は是の處に於いて、心驚かす、没せず、怖かす、畏れず、疑はず、悔いざればなり」と。爾の時に、須菩提、釋提桓因に語るらく、「汝、橋尸迦、菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難し、是の甚深の法中に心驚かす、没せず、怖かす、畏れず、疑はず、悔いざればなり」と。是の時、釋提桓因、須菩提に語るらく、「須菩提の畏れ、誰か疑ひ、誰か悔ゆるや」と。是の時、釋提桓因、須菩提に語るらく、「須菩提の説く所は但空の事のみと爲し、聖處する所無し。譬へば、仰いで空中を射るに、箭は去つて廢無きが如し。須菩提の説法の無礙なることも亦是の如し」と。

論

釋して曰く、衆會は疑ふらく、「菩薩は何の因縁の故に、是の如き

【二】日月の二法合するが故に萬物成熟し、悲空の二義合するが故に魔も壞すること能はざるなり。

力を得、魔も壞すること能はざるや」と。佛答へたまはく、「二の因縁有るが故に魔も壞すること能はず」と。三 一には諸法の空を觀じ、二には一切衆生を捨てず。日月の因縁を以ての故に萬物潤生す。但月のみ有りて、而して日無くんば則ち萬物濕壞せん、但日のみ有りて、而して月無くんば、則ち萬物焦爛せん。日月和合するが故に萬物成熟す。菩薩も亦是の如し、二道有り、一には悲、二には空なり。悲心は衆生を憐愍し、誓願して度せんと欲す。空心來れば則ち憐愍心を滅す。若し但憐愍心のみ有りて智慧無くんば、則ち心没在して衆生無く、而して衆生は顛倒の中に有らん。若し但空心のみ

有らば、憍愍して衆生を度する心を捨て、則ち斷滅の中に墮せん。是の故に、佛は二事を説いて兼ね用ゐたまへり。一切空を觀すと雖も、而も衆生を捨てず。衆生を憍愍すと雖も、一切空を捨てず、一切法の空を觀するも、空も亦空なるが故に空に著せず。是の故に、衆生を憍愍するを妨げず。憍愍の衆生を觀するも亦衆生に著せず、衆生の相を取らず、但衆生を憍愍し引導して空に入るのみ。是の故に憍愍を行すと雖も而も空を妨げず。空を行すと雖も、亦空相を取らず、故に憍愍の心を妨げざるなり、日月の相須つが如し。諸神天は妄語の人を輕賤す。若し菩薩、所説の如く行せずんば、則ち五種の執金剛神は捨離して復守護せず、惡鬼は便を得ん。是の人は喜んで惡心を生じ、惡心の故に則ち惡業を生じ、惡業を生ずるが故に則ち惡道に墮す。菩薩は諸佛の爲に念せられざれば、則ち善根朽壞せん。魚子の母に念せられざれば、則ち爛壞して生ぜざるが如し。

是の故に言はく、「作す所は言ふ所の如く、亦諸佛の爲に念せらる」と。是の二法を得るが故に破壞すべからず。若し菩薩、能く是の如く、眞に般若波羅蜜「多」を行せば、魔も壞すること能はず。功德智慧を増益し、諸天に則ち來りて親近し、諮問し、安慰し、勸諭して、是の言を作す、「善男子よ、汝疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ること久しからず」と。是の因縁を以ての故に常に空行を行す。

問うて曰く、諸天は未だ一切智を得ず、云何が能く菩薩に受記を與ふるや。答へて曰く、諸天は

【三】 如法の行に非れば、五種の執金剛神は捨離して護らず、還つて惡鬼便りを得ん。  
 【四】 第一問、一切智を得ざる諸天にして、菩薩に受記を與ふる理由如何。

長壽なり。過去の諸佛より是の如き行の記を得ることを聞く。今菩薩の是の如き行有ることを見るが故に説けり。「そは因を見て果有ることを知るが故なり。諸天は是の菩薩の三解脱門印を行するを見、亦兼ねて慈悲心を衆生に行す。是の故に説いて、久しからずして作佛すと言ふ。無守護の衆生に汝は爲に守護と作り、無歸には與に歸と作る等の義は先きに説くが如し。若し菩薩能く是の如く甚深般若波羅蜜「多」を行せんに、十方現在無量の諸佛の説法の時、是の名字を稱揚讚歎したまふことは、我れ今寶相菩薩、尸棄菩薩及び阿閼佛の世界中の菩薩を稱揚するが如く、又十方佛の説法の時、諸の妙行の菩薩を稱揚したまふが如し。菩薩能く所説の如く諸法實相に應ぜば、十方の諸佛は説法の時、亦た是の菩薩を以つて譬喩と爲して、是の言を作す、「某方某世界の菩薩は、未だ作佛せずと雖も、能く是の如く甚深般若波羅蜜「多」を行す。「そは」功德希有なるが故なり」と。大國王に大將有りて、身命を惜まず、方便有りて能く怨敵を破し、常に國王の爲に稱譽せらるるが如し。菩薩も亦た是の如く、畢竟空を觀じ、我が身を惜まず、煩惱の賊を破し、方便有りて而も證を作さず、衆生を教化すれば、諸佛に稱譽せらる。諸佛は著心無く、善不善の法を分別すること無く、諸の阿羅漢、外道を視るも、亦た憎無く愛無しと雖も、衆生を利益せんが爲めの故に、善人を讚歎し、善法を稱揚し、不善を毀皆す。何となれば、衆生をして好人に依附し、心善法に隨ひ、世間を出でしめんと欲したまふが故なり。

問うて曰く、何の經の中に、二菩薩は佛の讚歎する所と説くや。答へて曰く、佛經は無量なりしも、佛の涅槃の後、諸の惡邪見の王出で、經法を焚燒し、塔寺を破壞し、諸の沙門を害し、五百歲の後、像法不淨にして諸の阿羅漢、神通の菩薩も見ることを得べきこと難し。故に諸の深經は、盡く閻浮提に在らず、行者、受者少きが故に、諸天、龍神持ち去れり。

問うて曰く、遍吉菩薩、觀世音菩薩、大力勢菩薩、文殊尸利、菩薩、彌勒菩薩等の如きを、何を以てか讚歎せず、而も但だ二菩薩は未だ無生忍法を得ずして、而も能く無生忍法を行するに似たり。必ず此の事有れば、一切の魔民の壞すること能はざる所なり。是の故に、佛は「二菩薩は、」希有なりと歎じたまへり。

復次に、是の二菩薩は、清淨の大願もて深大の慈悲心を行じ、疾かに作佛することを期せず、「こは」衆生を度せんが爲の故なり。是の如き等の功德有るが故に、佛は稱讚したまへり。

復次に、遍吉、觀世音菩薩等は、功德極めて大なれば人皆知る、是の二菩薩は人未だ知らざるが故に稱揚したまへり。阿閼佛の世界の菩薩は、皆阿閼佛に効ひ、初發心より來た、行ひ清淨にして、雜行せず。彼に生ずる菩薩は、皆其の行に効ふ、是の故に、阿閼佛の世界の菩薩の其の徳を稱譽すると

【五】 第二問、何經の中に、二菩薩は佛の讚歎し給ふ所と説くや。

【六】 佛の滅後、惡王世に出で、經法を焚燒し、寺塔を破壞せしが故に、諸天、龍、神、經を持ち去れり。

【七】 第三問、文殊、普賢、觀音、勢至等の如きを稱讚せず、但だ二菩薩のみを稱讚する理由如何。

を説く、又十方の諸佛の如きも亦諸の世界の上妙の菩薩を稱揚したまひ、亦釋迦文尼佛の如きは、二菩薩を稱揚したまふ。何等か是れ菩薩なる。初發心より乃ち十地に至るまでなり。佛説きたまはく、「是の菩薩の爲す所は甚だ難し、能く佛種を斷せず」と。此の中に須菩提問ふ、「何等の菩薩をか、佛は説法の時稱揚讚歎して、其の名字を説きたまふや」と。

問うて曰く、佛已に先に説きたまへり、須菩提は何を以てか更に問ふや、答へて曰く、佛は初に大菩薩を説き、後に一切の菩薩を稱説したまへり、初發意より乃ち十地に至るまでなり。是の故に、須菩提は疑つて佛に問へり、「佛は何等の菩薩をか讚歎して、其の名字を稱したまふや」と。佛答へたまはく、「佛は皆一切の菩薩を愛念すと雖も、其の中に德行有りて、勝る者の其の名を稱歎す」と。何等の菩薩か佛に稱歎せらるるや。阿闍佛の初發心の時、清淨の行を行じて休まず息まず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るが如き、是の如き等の菩薩は佛に讚歎せらるる。

復次に、有菩薩は未だ無生忍法を得ず、未だ菩薩の位に入らず、般若波羅蜜(多)を行する力の故に常に思惟し籌量し、諸法實相を求め、能く一切法の無生相・空・虛誑・不堅固を信解し忍通す。是の如き等の相有る諸の菩薩摩訶薩を、佛は名を稱し讚歎したまふ。虛誑不實不堅固は皆是れ無常なり、(二〇)苦

【八】 異本には、二を三に作れり。  
【九】 第四問、佛已に先に説き給へり。然るを今復た須菩提の問へるは何故なるか。  
【一〇】 他本には、苦を若に作れり。

は無我門なり。一切法は空なりとは、即ち是れ空門なり。一切法は無生なりとは、即ち是れ諸法實相にして、諸の觀門を滅す。

復次に、虚誑不實不堅固は即ち是れ無作解脫門なり、一切法空は即ち是れ無相解脫門なり。是の如き等の三種の差別あり。是の人は柔順法忍より出でて、未だ無生法忍を得ず。凡夫法より出でて未だ聖法に入らず、而も能く聖法を信受し、聖法を得たる人に似たり。是の故に希有なり、佛の稱譽したまへる所の如し。阿鞞跋致の菩薩は能く二地を斷じて授記を得、是の人は佛の爲に稱譽せらるること亦是の如し。是の如き相の人は、未だ無生法忍を得ずと雖も、智慧力の故に諸佛の爲に稱名讚歎せらる。今は信根力勝れるを以ての故に、佛は亦稱名讚歎したまふ。何者か是なる、所謂る、「復次に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、是の深般若を聞き、其の心明利にして、疑はず悔いずんば、是の念を作す、是の事は佛の所説の如し」となり。

問うて曰く、(二二) 是の菩薩は已に般若波羅蜜(多)を信解せり。何を以てか更に阿闍佛及び諸の菩薩の邊に從つて聞きしか。答へて曰く、是の人は、阿闍佛の菩薩たりし時、所行の清淨なりしことを聞く。是の人は聞き已つて阿闍佛の所行に効はんと欲す。是の故に、佛の説きたまはく、「此の人は是に於いて信力を得、彼に於いて智慧力を得、故に當に阿鞞跋致地に住すべし。是の人は未だ無生忍

【二】 第五問、是の菩薩は已に般若波羅蜜多を信解せり、何を以てか、阿闍佛及び諸菩薩の邊に從つて聞きしか。



法を得ざるも、智慧力を以ての故に、是の如き阿鞞跋致を得、諸佛の爲に讚せらる。信力を以ての故に得ること有ること、阿鞞跋致の如く、諸佛の爲に讚せらる。若し但般若を聞くのみすら、是の如き利益を得、何に況んや、信受し、所説の如く行じ、漸く一切種智中に住するをや」と。須菩提、佛に問ふ、「一切法は空相にして無所得なり、云何が菩薩は薩婆若に住するや」と。佛の言はく、「如の中に住す」と。如とは即ち是れ空なり。菩薩の是の畢竟空中に住するを名けて、薩婆若に住すと爲す。此の中に須菩提、佛に問ふ、「如を除いて更に法の得べきもの無し、誰か如の中に住せん。乃至是の處有ると無し」と、經に廣く説くが如し。佛、須菩提の語る所を可として説きたまはく、「如も亦因縁を空す。所謂、是の如の生住滅異は不可得なり。若し法に三相無ければ即ち是れ畢竟空なり、云何が住すべき。若し是の中に住して阿耨多羅三藐三菩提を得、而して法を説くとは、是の處有ること無し」と。釋提桓因は、般若の一定相を取つて、佛に聞かんと欲するに、須菩提と共に、無相も亦不可得なりと説きたまへり。是の故に佛に白して言さく、「希有なり。世尊よ、是の般若は甚深なり。是の菩薩の爲す所は甚だ難し。阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。何となれば、是の如は畢竟空にして、如を除いて更に無し。菩薩は是の如の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るも、亦定法無く、名けて佛と爲す。説法者と度する所の衆生も亦如を離れず、亦拔出して涅槃に安處すると無し、「(そは)諸法は常住如相なるが故なり。菩薩は是の事を聞いて心に疑悔せざる、是の事を難しと爲す。一切法の畢竟空を

信すと雖も、而も阿耨多羅三藐三菩提を求め、精進して休まず息まざる、是を難しと爲す」と。須菩提、帝釋に語るらく、「若し諸法は畢竟空にして無所有ならば、疑は何によりてか生ぜん、何ぞ難事有らん」と。帝釋心に歡喜して是の念を作す、「須菩提は實に是れ樂しんで空法を説く。須菩提は解説する所有れば皆空事を説く。色等の餘事を説くと雖も、其の義は皆空事に趣向す。若し難問有るも礙を作すこと能はず、空も亦空なるが故に、若し人空を難すれば、須菩提は先づ已に空を破し、有無の中に於いて、都べて礙する所無し。譬へば、仰いで空中を射るが如し。虚空は即ち是れ畢竟空なり。箭は是れ須菩提の智慧なり、所説は箭の空に於いて礙無きが如し。勢盡きて自ら墮つるは、空盡くと爲すに非ず、須菩提の説法の因縁の事辦するが故に便ち止むなり、法盡くと爲すには非ず。若し有る人は、利射有りて壁を射ると雖も、過ぐるること能はず。人は利智慧邪見有りと雖も有に著すれば則ち礙して而も通せず。是の故に、須菩提は無障無礙の法を説く」と。

(二三) 囉累品第六十六を釋す。

**經** 爾の時に、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、我れ是の如く説き、是の如く答ふるを、法に隨順すと爲すや不や、正答と爲すや不や」と。佛、釋提桓因に告げて言はく、「尸迦よ、汝が説く所、答ふる所は實に皆隨順す」と。釋提桓因言

【二三】 前來、般若の體用と、機の障徳とを三周廣説せしが故に、此の品には般若の道を付屬するなり。

さく、「希有なり。世尊よ、須菩提の樂説する所は皆是れ空と爲し、無相無作と爲し、四念處と爲し、乃至阿耨多羅三藐三菩提と爲すしと。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「須菩提よ、比丘の空を行する時、檀(那)波羅蜜(多)は不可得なり、何に況んや、檀(那)

波羅蜜(多)を行する者をや。乃至般若波羅蜜(多)は不可得なり、何に況んや、般若波羅蜜(多)を行する者をや。四念處は不可得なり、何に況んや、四念處を修する者をや。乃至八聖道分は不可得なり、何に況んや、八聖道分を修する者をや。禪解

脫三昧定は不可得なり、何に況んや、禪解脫三昧定を修する者をや。佛の十力は不可得なり、何に況んや、佛の十力を修する者をや。四無所畏は不可得なり、何に況んや、能く四無所畏を生ずる者をや。四無礙智は不可得なり、何に況んや、四無礙智を生ずる者をや。大慈大悲は不可得なり、何に況んや、大慈大悲を行する者をや。十八不共法は不可得なり、何に況ん

や、十八不共法を生ずる者をや。阿耨多羅三藐三菩提は不可得なり、何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得る者をや。一切智は不可得なり、何に況んや、一切智を得る者をや。如來は不可得なり、何に況んや、當に如來と作るべき者をや。無生法

は不可得なり、何に況んや、無生法を得て證を作す者をや。三十二相は不可得なり、何に況んや、三十二相を得る者をや。八十隨形好は不可得なり、何に況んや、八十隨形好を得る者をや。何となれば、橋戸迦よ、須菩提比丘の一切法は離行、一

切法は無所得行、一切法は空行、一切法は無相行、一切法は無作行なればなり。橋戸迦よ、是を須菩提比丘の所行と爲す。菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)の行に比せんと欲するに、百分して一にも及ばず、千分、千萬億分、乃至算數譬喩も及ぶこと

能はざる所なり。何となれば、佛行を除いて、是の菩薩摩訶薩の行する般若波羅蜜(多)は、聲聞辟支佛の諸行中に於いて

最尊最妙最上なればなり。是を以ての故に、菩薩摩訶薩、一切衆生中の最上を得んと欲せば、當に是の般若波羅蜜(多)の行を

行すべし。何となれば、橋戸迦よ、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、

能く佛法を具足し、一切種智を得、一切の煩惱の習を斷じて作佛すべければなり。」

是の會中の諸の三十三天は、天の曼陀羅華を以て佛及び僧に散す。是の時、八百の比丘、座より起ちて、華を以て佛に散じ、偏に右の肩を袒ぎ、合掌して右の膝を地に著け、佛に白して言さく、「世尊よ、我等は當に是の無上行の聲聞群支佛の行すること能はざる所を行すべし」と。爾の時に、佛、諸の比丘の心行を知りて便ち微笑したまふ。諸佛の法の如く種種の色光の青、黃、赤、白、紅、縹、佛の口中より出で、過く三千大千世界を照らし、佛を繞ると三市し、還た頂より入る。爾の時に、阿難、偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁の故に微笑したまふや。諸佛は無因縁を以ては笑みたまはず」と。佛、阿難に告げたまはく、「是の八百の比丘は、星宿劫の中に於いて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。佛を散華と名け、皆同一の字なり。比丘僧の世界、壽命は、皆等しうして、各各十萬歳を過ぎ、出家し作佛す。是の時、諸の世界は常に五色の天華を雨らす。是を以ての故に、阿難よ、菩薩摩訶薩、最上の行を行ぜん」と欲せば、應當に般若波羅蜜(多)を行すべし」と。

佛、阿難に告げたまはく、「若し善男子善女人有りて、能く是の深般若波羅蜜(多)を行ぜば、當に知るべし、是の菩薩は人中に死して此の間に生じ、若くは兜率天上に死し、來りて此の間に生じ、若くは人中、若くは兜率天上に、廣く是の深般若波羅蜜(多)を聞けばなり」と。阿難よ、我れ是の諸の菩薩摩訶薩の能く是の深般若波羅蜜(多)を行するを見る。阿難よ、若し善男子善女人有りて、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、受持し、讀誦し、親近し、正憶念し、轉た復た般若波羅蜜(多)を以て、菩薩道を行することを教ふる者は、當に知るべし、是の菩薩は面り佛に從ひて深般若波羅蜜(多)を聞き、乃至親近し、亦諸佛に從ひて善根を種ふたりと。善男子善女人は、當に是の念を作すべし、我等は聲聞に從ひて種うる所の善根に非ず、亦聲聞に從ひて聞く所の是の深般若波羅蜜(多)にあらずと。

佛、阿難に告げたまはく、「若し善男子善女人有りて、能く是の深般若波羅蜜(多)を行ぜば、當に知るべし、是の菩薩は人中に死して此の間に生じ、若くは兜率天上に死し、來りて此の間に生じ、若くは人中、若くは兜率天上に、廣く是の深般若波羅蜜(多)を聞けばなり」と。阿難よ、我れ是の諸の菩薩摩訶薩の能く是の深般若波羅蜜(多)を行するを見る。阿難よ、若し善男子善女人有りて、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、受持し、讀誦し、親近し、正憶念し、轉た復た般若波羅蜜(多)を以て、菩薩道を行することを教ふる者は、當に知るべし、是の菩薩は面り佛に從ひて深般若波羅蜜(多)を聞き、乃至親近し、亦諸佛に從ひて善根を種ふたりと。善男子善女人は、當に是の念を作すべし、我等は聲聞に從ひて種うる所の善根に非ず、亦聲聞に從ひて聞く所の是の深般若波羅蜜(多)にあらずと。

阿難よ、若し善男子善女人有りて、是の深般若波羅蜜(多)を受持し、讀誦し、親近し、義に隨ひ法に隨つて行ぜば、當に知るべし、是の善男子善女人は則ち爲に面り佛を見たてまつることを。阿難よ、若し善男子善女人有りて、是の深般若波羅蜜(多)を聞き、信心清淨にして沮壞すべからざれば、當に知るべし、是の善男子善女人は曾つて佛を供養し、善根を種ふ、善智識を相得たりと。諸佛の福田に於いて善根を種うれば、虚誑ならず、要す聲聞・辟支佛・佛を得、而も解脱を得と雖も、應當に深く了了に六波羅蜜(多)乃至一切種智を行すべし。阿難よ、若し菩薩は深く了了に六波羅蜜(多)乃至一切種智を行するも、是の人若し聲聞・辟支佛道に住し、阿耨多羅三藐三菩提を得ずんば、是の處有ること無し。是の故に、阿難よ、我れ般若波羅蜜(多)を以て汝に囑累す。阿難よ、汝は若し一切法を受持するに、般若波羅蜜(多)を除き、若くは忘れ、若くは失ふも、其の過小にして大罪有ること無し。阿難よ、汝は般若波羅蜜(多)を受持し、若し一句を忘失するも、其の過は甚だ大なり。阿難よ、汝若し深般若波羅蜜(多)を受持し、後還た忘失せば、其の罪は甚だ多し。是を以ての故に、阿難よ、汝に是の深般若波羅蜜(多)を囑累す、汝當に善く受持し、讀誦して利せしむべし。阿難よ、若し善男子善女人有りて、深般若波羅蜜(多)を受持せば、則ち過去未來現在の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を受持すと爲す。阿難よ、若し善男子善女人有りて、現在我を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎するに、華香・瓔珞・持香・深香・衣服・幡蓋を以つてせんとせば、應當に般若波羅蜜(多)を受持し、讀誦し、説き、親近し、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎するに、華香乃至幢幡を以てすべし。阿難よ、般若波羅蜜(多)を供養するは、則ち我を供養し、亦過去未來現在の佛を供養し已ると爲す。若し善男子善女人有りて、深般若波羅蜜(多)を説くを聞き、信心清淨に恭敬愛樂すれば、則ち信心清淨に過去未來現在の諸佛を恭敬し愛敬し已ると爲す。阿難よ、汝佛を愛樂して捨離せざれば、當に般若波羅蜜(多)を愛敬して捨離すること莫るべし。阿難よ、深般若波羅蜜(多)乃至一句も失せしむべからず。阿難よ、我れ囑累の因縁を説くこと甚だ多し。今は但略説するのみ。我の世尊たるが如く、般若波羅

蜜(多)も亦是れ世尊なり。是を以ての故に、阿難よ、種種の因縁もて汝に般若波羅蜜(多)を囑累す。阿難よ、今、われ一切の世間天人阿修羅の中に於いて、汝に囑累す。佛を捨てず、法を捨てず、僧を捨てず、過去未來現在の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を捨てざらんと欲する者は、憤んで般若波羅蜜(多)を捨つると莫れ。阿難よ、是れ我が弟子を教化する所の法なり。阿難よ、若し善男子善女人、深般若波羅蜜(多)を受持し、讀誦し、説き、正憶念し、復た他人の爲に、種種に廣く其の義を説き、開示し、演暢し、分明にし、解し易からしめば、是の善男子善女人は、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得、疾かに薩婆ニヤに近づかん。何となれば、般若波羅蜜(多)の中より諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を生ずればなり。阿難よ、過去未來の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は皆般若波羅蜜(多)の中より生じ、今、現在の東方・南方・西方・北方、四維上下の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提も亦般若波羅蜜(多)の中より生ず。是を以ての故に、阿難よ、諸の菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば應當に六波羅蜜(多)を學すべし。何となれば、阿難よ、六波羅蜜(多)は、是れ菩薩摩訶薩の母にして、諸の菩薩を生ずればなり。阿難よ、若し菩薩摩訶薩有りて、是の六波羅蜜(多)を學せば、皆當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是を以ての故に、我れ六波羅蜜(多)を以て、倍復た汝に囑累す。阿難よ、是の六波羅蜜(多)は是れ諸佛の無盡の法藏なり。阿難よ、十方諸佛の現在の説法は、皆六波羅蜜(多)の法藏の中より出づ。過去の諸佛も亦六波羅蜜(多)の中より學して阿耨多羅三藐三菩提を得、未來の諸佛も亦六波羅蜜(多)の中より學して阿耨多羅三藐三菩提を得、過去未來現在の諸佛の弟子も皆六波羅蜜(多)の中より學して滅度を得。已に得、今得、當に得べし。

阿難よ、汝は聲聞人の爲に説法し、三千大千世界中の衆生をして皆阿羅漢果の證を得せしむるとも、猶未だ我が弟子の事を爲さず、汝、若し般若波羅蜜(多)相應の一句を以て菩薩摩訶薩に教へば、則ち我が弟子の事を爲し我も亦歡喜す。三千大千世界中の衆生をして、阿羅漢果を得せしむるに勝る。

復次に、阿難よ、是の三千大千世界の中の衆生は前ならず、後ならず、一時に皆阿羅漢果の證を得。是の諸の阿羅漢果、布施の功德、持戒禪定の功德を行ぜば、是の功德は多きや不やと。阿難言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「阿難よ、弟子の般若波羅蜜(多)相應の法を以て、菩薩摩訶薩の爲に説くこと乃至一日ならんに、其の福德甚だ多きに如かず、一日を置いて但半日、半日を置いて但一食の頃、一食の頃を置いて但須臾の間説くも、其の福甚だ多し、何となれば、菩薩摩訶薩の善根は一切の聲聞辟支佛に勝ればなり。菩薩摩訶薩は自ら阿耨多羅三藐三菩提を得、亦他人に示教し利喜して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん」と欲す。阿難よ、是の如き菩薩は六波羅蜜(多)を行じ、四念處を行じ、乃至一切種智を行じて、善根を増益するも、若し阿耨多羅三藐三菩提を得ざれば、是の處有ること無し」と。

是の般若波羅蜜(多)品を説く時、佛、四衆の中に在り、天、人、龍、鬼神、緊那羅、摩睺羅伽等、大衆の前に於いて、神足變化を現じ、一切の大衆、皆阿闍佛の比丘僧に圍繞せられて大衆に法を説きたまふを見る。譬へば、大海の水の如し。皆是れ阿羅漢にして、漏盡きて煩惱無く、皆自在を得、好解脱、心解脱、慧解脱を得て、其の心調柔なること、譬へば大象の如し。所作已に辦じ、己利を逮得し、請の有結を盡し、正智もて解脱を得、一切の心心數法の中に自在を得、及び諸の菩薩摩訶薩の無量の功德を成就す。

爾の時に、佛神足を攝したまへば、一切の大衆は復た阿闍佛、聲聞人、菩薩摩訶薩及び其の世界を見ず、眼と對を作さす。何となれば、佛は神足を攝したまへばなり。爾の時、佛、阿難に告げたまはく、「是の如く、阿難よ、一切法は眼と對を作さす、法法相見す。法法相知らず、是の如く、阿難よ、阿闍佛、弟子、菩薩、世界の眼と對を作さざるが如く、是の如く、阿難よ、一切法は眼對を作さす。法法相知らず、法法相見す。何となれば、一切法は眼と對を作さざるが如く、是の如く、捉ふべからず、思議すべからず、幻人の如く、受無く、覺無く、眞實無ければなり。菩薩摩訶薩の是の如く行するを、般若波

羅蜜(多)を行じ、亦諸法に著せずと爲す。阿難よ、菩薩摩訶薩の是の如く學するを名けて般若波羅蜜(多)を學すと爲す。諸波羅蜜(多)を得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。何となれば、是の如く學するを名けて、第一の學、最上の學、微妙の學と爲せばなり。是の如く學して、一切の世界の護無き者を安樂にし、利益するを護を作ると爲す。是れ諸佛の學する所なり、諸佛は是の學中に住して、能く右の手を以て三千大千世界を擧げ、還た本處に著くるも、是の中に衆生は覺知する者無し。何となれば、阿難よ、諸佛は是の般若波羅蜜(多)を學し、過去未來現在の法中に無礙智見を得たまへばなり。阿難よ、般若波羅蜜(多)は諸學の中に於いて最尊第一微妙無上なり。

阿難よ、若し人有りて般若波羅蜜(多)の邊際を得んと欲せば、虚空の邊際を得んと欲すと爲す。何となれば、阿難よ、般若波羅蜜(多)は量有ること無ければなり。我は初に般若波羅蜜(多)の量を説かず、名衆・句衆・字衆は是れ量有るも、般若波羅蜜(多)には、量有ること無し」と。阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は何を以ての故に、量有ること無きや」と。佛、阿難に告げたまはく、「般若波羅蜜(多)は無盡なるが故に量有ること無く、般若波羅蜜(多)は離なるが故に量有ること無し。阿難よ、過去の諸佛は皆是の般若波羅蜜(多)を學して得度するも、般若波羅蜜(多)は故らに盡さず。未來の諸佛も亦是の般若波羅蜜(多)を學して得度するも、是の般若波羅蜜(多)は故らに盡さず。現在十方の諸佛、皆是の般若波羅蜜(多)を學して得度するも、般若波羅蜜(多)は故らに盡さず。已に盡さず、今盡さざるべし。阿難よ、般若波羅蜜(多)を學して得度するも、般若波羅蜜(多)は故らに盡さず。已に盡さず、今盡さざるべし。阿難よ、般若波羅蜜(多)を盡さんと欲するは、虚空を盡くさんと欲すと爲す。般若波羅蜜(多)は盡くべからず、已に盡さず、今盡さず、當に盡さざるべし。禪(那)波羅蜜(多)乃至檀(那)波羅蜜(多)も盡すべからず、已に盡さず、今盡さず、當に盡さざるべし。乃至一切種智も亦是の如し。何となれば、是の一切法は皆無生なればなり。若し法無生ならば云何が盡ること有らん」と。

爾の時に、佛、覆面の香相を出だし、阿難に告げたまはく、「今日より四衆の中に於いて、般若波羅蜜(多)を廣演し、開



示し、分別して、當に分明に解し易からしむべし。何となれば、是の深般若波羅蜜(多)の中には、廣く諸の法相を説き、  
の中に聲聞辟支佛を求め、佛を求むる者は皆當中に於いて學し、學し已りて各成就することを得ればなり。阿難よ、  
是の深般若波羅蜜(多)は則ち是れ一切の字門なり。是の深般若波羅蜜(多)を行すれば能く陀羅尼門に入る。是の陀羅尼門を  
學して、諸の菩薩は一切の衆賢辯才を得。阿難よ、般若波羅蜜(多)は是れ三世諸佛の妙法なり。是を以ての故に、阿難よ、  
我れ汝が爲に了了に説く。若し人有りて、深般若波羅蜜(多)を受持し、讚誦し、親近せんに、是の人は則ち能く三世諸佛の  
阿耨多羅三藐三菩提を得するなりと。阿難よ、我れ説く、般若波羅蜜(多)は是れ行者の足なりと。汝は是の般若波羅蜜  
〔多〕を持し、陀羅尼を得るが故に、則ち能く一切法を持すしと。

隨順を爲す、正答なりや不やと言ふや。答へて曰く、釋提桓因は一切智人に  
に非ず、初道を得と雖も、三毒未だ盡きず、猶錯謬有り、而して自ら籌量  
すらく、「我は福德の因縁もて、諸天王の爲に、聖道の味を得せしむと雖も、而も未だ一切智有らず、  
一切の漏未だ盡きざるが故に、所説或は能く錯謬して自ら覺知せざらん」と。是の故に問へり。

復次に、衆中に大に阿鞞跋致の菩薩、漏盡の阿羅漢及び離欲の諸天有り、是の諸人は、釋提桓因と  
佛、須菩提と共に問難し、心怯弱せざるを見て、是の念を作す、「是の釋提桓因は、漏すら尙未だ盡  
くさず、何ぞ能く諸法の邊を問難し盡くさん」と。釋提桓因は、是の事を以ての故に、佛に問ひたて  
まつれり。

【三】第六問、帝釋が自ら正答  
なりや不やを疑へる理由如  
何。

復次に、釋提桓因は自ら所説の諸法の相に違錯無きとを知り、佛印を求む。「そは」聽者をして信受せしむべきが故なり。佛は即ち之を可としたまへり。

問うて曰く、(四)佛は何を以てか、釋提桓因の説を可としたまひしや。答へて曰く、釋提桓因は一切智人に非ずと雖も、常に佛より聞き、誦讀の力強し。是の故に、所説に理有れば、佛は便ち印可したまふ。佛は三種の慧、「所謂」聞慧、思慧、修慧ありと説き給へり。有人は聞慧と思慧と明了なるが故に能く修慧の人と問難す。譬へば、船に乗りて流に隨へば、自ら力を用ゐざるも而も陸行よりも疾かなるが如し。阿難の如きは未だ欲を離れず、未だ甚深の禪定を得ずと雖も、而も能く佛、漏盡の阿羅漢等と論議し、法に隨つて違無し。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、須菩提は好み樂しんで空を説き、善く巧に空を説くと、諸の弟子中に於いて、最も第一たり。言説する所有れば、皆空無相無作に趣向す。所謂、四念處より乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、是の法中に皆和合して畢竟空を説けり」と。佛、釋提桓因に語りたまはく、「須菩提を知るに是れ畢竟空を行する人なり。世世に修集して、但今世のみに非ず、是の人は空解脱門を以て道に入り、亦此の門を以て衆生を教化す。是の人は若し深空の法に入るに、尙法すら待ず、何に況んや、是の法を行する者をや」と。經に説くが如し、「檀〔那〕波羅蜜〔多〕は不可得なり、何に況んや、檀〔那〕を行する者をや。乃至八十隨形好は不可得なり、何に況んや、八十隨形好を得る者を

【四】第七問、佛が帝釋の説を可とし給へる理由如何。

やしと。須菩提の行する所の空行を、菩薩の空行に比せんと欲するに、百分の一にも及ばず。

問うて曰く、(五)法空、衆生空は復た何の盡さざるところ有りてか、而も百分の一にも及ばずと言ふ

や。答へて曰く、佛此の中に自ら説きたまはく、「佛を除き、諸の聲聞辟支佛は、菩薩に及ぶ者有る

こと無し。諸法實相に種種の名字有り、或は空と説き、或は畢竟空と説き、或は般若波羅蜜(多)と説

き、或は阿耨多羅三藐三菩提と名く。此の中には諸法實相を説いて、名けて空行と爲す。一切の聲聞

の弟子中にて、須菩提の空行は最勝なるが如し。是の如く、佛と諸の菩薩の空行を除けば、二乗に

勝れり。何となれば、智慧分別に利鈍有りて、入るに深淺有ればなり。皆

諸法實相を得と名くるも、但利根の者のみ之を得ること了了なり。譬へば

闇を破するが故に燈を燃するに、更に大燈有れば明則ち轉た勝るが如し。

當に知るべし、先の燈に照らすと雖も、微に闇くして盡さず、若し後の燈を盡せば則ち用無し。空を

行する者も亦是の如く、俱に得道すと雖も、智慧に利鈍有るが故に、無明に盡と不盡と有り。唯佛の

智慧のみ能く諸の無明を盡す。

復次に、聲聞辟支佛は慈悲心無く、衆生を度する心無く、佛世界を淨むること無く、無量の佛法

無く、願つて法輪を轉じて衆生を度すること無く、亦無餘涅槃に入り、乃至法に違つて衆生を度する

こと無く、願つて三世に衆生を度する心有ること無し。所謂、菩薩の時、作佛の時、滅度の時は但空

【五】第八問、法空衆生空は、何の盡さざる所ありてか、百分の一にも及ばずと言ふや。

行を以てするが故に、菩薩等と與ならす。

復次に、二乗の空を得るは、分有り量有り、諸佛、菩薩は分無く量無し。渴者は河に飲んで、自足を過たざるが如し。何ぞ俱に空を行すれば異有るべからずと言ふことを得んや。又毛孔の空を十方の空に比せんと欲するが如きは、是の理有ること無し。是の故に、佛菩薩と比するに、千萬億分の一に及ばず。佛は是の空行を分別し已り、禪提桓因に告げたまはく、「若し一切衆生に於いて最上ならんと欲せば、當に般若波羅蜜多を行すべし」と。是の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「菩薩は是の般若波羅蜜多の空行を學し、空相を取らざるが故に、二地を過ぎて無生忍法を得て菩薩の位に入る。菩薩の位に入るが故に佛法を具足す、佛法は是れ菩薩道なり。菩薩道を具足するが故に當に一切種智を得べし。一切種智を得るが故に、名けて佛と爲す。一切の煩惱の習を斷する人は、是の諸事の空行を根本と爲す」と。

問うて曰く、涅槃は是れ無量なり。何を以てか二乗の所行は量有りと云ふや。答へて曰く、智慧に分有り量有りと云つて、諸法の法性に量有りと説かず。大水の喩を説くを聞かずや、器に量有りで、水に量有るにあらず。

復次に、量無量の相對法は、凡人に於いては是れ無量にして、佛は皆能く量りたまふ。「所謂」爾所の分は是れ須陀洹なり、乃至爾所の分は是れ阿羅漢、辟支佛、菩薩なり。餘殘の究竟法性は是れ佛な

【六】 第九問、涅槃は無量なり、然るを二乗の所行は有量なりと言へる理由如何。

りと。爾の時に、會中の諸天は天の曼陀羅華を以て佛等に散ず、經中に説くが如し。

問うて曰く、華は佛及び僧に供養す。是の八百の比丘は何を以てか獨り取つて佛のみを供養する

や。答へて曰く、諸天の散ずる所の華を、諸の比丘は當に得る所を分つべし。衣上に墮する者は、其

の色香の甚だ妙なるを見、因つて以て發心し、佛に供養して白して言さく、「我は今日より當に是の

無上行、所謂、畢竟空、無相、無作等を行すべし。「そは」一切衆生を度せんが爲の故なり。佛の所説の

如くんば二乗の及ばざる所なり」と。爾の時に佛は微笑したまへり。微笑の義は、恆伽提婆品の中に

説けるが如し。是の八百の比丘は、是れ善智識にして、行同じく、心等しく、世世に共に功德を修集するが故に一時に作佛し、皆同じく一字なり。

五色の天華もて佛を供養するが故に、世界中に常に五色の天の曼陀羅華を

雨らす。佛是の事に因んで般若を讚じて、是の言を作したまはく、「阿難よ、最上菩薩道を行せんと欲

せば、當に般若波羅蜜(多)を行すべし、阿難よ、若し善男子有りて、能く是の深般若波羅蜜(多)を行

せば、當に知るべし。是の人は人道の中より來り、或は兜率天上より來ることを。何となれば、三惡

道の中には罪苦多きが故に、深般若を行することを得ず、欲界の天は淨妙の五欲に著し、心則ち狂惑

して行ずること能はず、色界の天は深く禪定味に著するが故に行ずること能はず、無色界は無形なる

が故に行ずること能はず、鬼神道は眼等の根利なるも、諸の煩惱心を覆ふが故に専ら深般若を行す

【七】第一〇問、八百の比丘が、華を以て獨り佛のみを供養せし理由如何。

ること能はず。人道の中には苦は三惡道に差ひ、樂は諸天に如かず、眼等の諸根は濁重く、身は地種多きが故に、能く苦樂の意を制し、而して般若を行ずり、兜率天上には常に一生補處の菩薩有り、彼の中の諸天に常に般若を説くことを聞く、「そは」五欲多しと雖も法力勝るればなり。是の故に二處より來ると説く、若くは他方の佛世界より來り、若くは此の間の般若波羅蜜〔多〕有る所より來る。

復次に、阿難よ、若し佛道を求むること有る者、能く問ひ能く信じ、受持し、乃至正憶念せば、當に知るべし、是の人を、佛は常に佛眼を以て見たまふことを。是の諸人等

は應當に是の念を作すべし、「我等は便ち是れ面り佛より受け、佛より發し、心に善根を種る、二乘より發せず」と。阿難よ、若し人有りて、信心清淨にして破壞すべからずんば、當に知るべし、是の人は先世に無量の諸佛を供養したてまつり、善知識の爲に守護せらるるが故に、能く受持することをしし。

問うて曰く、二八 佛を亦名けて寶と爲し、亦名けて無上福出と爲す。若し人佛に従つて善根を種うれば、必ず三乘の法を以て涅槃に入ること虚しからず。法華の中に説くが如くんば、有人は或は一香を以てし、或は小香を以て佛を供養したてまつり、乃至一たび南無佛と稱せんに、是の如き等の人は皆當に作佛すべしと。若し爾らば、有人は是の念を作さん、「但五波羅蜜〔多〕を行じて作佛せんと欲す

【二八】 第一一問、法華に曰く、或は少香、或は一華を以て佛を供養し、若くは一たび南無佛と稱ふれば、皆當に作佛すべしと。若し爾れば何ぞ殊更に般若の知り難く得難き空行を行ぜんや。

る時、乃ち空を觀するのみ。何ぞ用つて常に般若波羅蜜(多)の知り難く、得難き空行を行せんや」と。  
答へて曰く、是の事を以ての故に、佛自ら答へたまはく、「阿難よ、佛の福田中に於いて虚誑ならず、  
要す三乘を得て涅槃に入ると雖も、應當に了了に六波羅蜜(多)乃至一切種智を行すべし。了了に行す  
るが故に疾かに佛道を得、久しく生死の苦を受けず。般若に是の如き等の利益功德有るが故に、應當  
に行すべし。阿難よ、應當に是の如き功德利益有るが故に、我れ汝に囑累す」と。

問うて曰く、(一九)佛は食る所無く、乃至一切種智の佛は無礙にして解脱清  
淨微妙なり、諸佛の法すら尙食らず。何を以ての故に、般若波羅蜜(多)を  
以て、殷懃に阿難に囑累するに、貪惜するが如きに似たるや。答へて曰く、

諸佛は衆生を利益せんが爲の故に世に出で、三十二相、八十種隨形好を現  
じたまふ。無量の光明、神足變化は皆衆生の爲の故なり。第一に衆生を利益するは、般若波羅蜜(多)  
に過ぎたるは無し、(そは)能く諸苦を盡すが故なり。是の般若波羅蜜(多)は語言文字章句に因りて、  
其の義を得べし。是の故に、佛は般若の經卷を以て殷懃に阿難に囑累したまへり。

復次に、有人は佛の殷懃に囑累したまふを見るが故に、佛の大事を辦すと言ひて猶尙般若を尊重す。  
是の法は必尊必妙なり。譬へば、大富長者の命終らんと欲する時、衆寶を以て兒に與へ、如意寶珠を  
以て殷懃に囑累し、「汝、是の寶を以て定まれる色質無しと目すること勿れ」と言ふが如し。虚空の如

【一九】 第一二問、佛は食る所なし、何を以てか智度を以て阿難に囑累するに、貪惜するが如くなるや。

きは微妙にして識り難きが故に、而も守護せず、若し餘寶を失するは可と爲すも、此の寶を失すべからざるなり。大富長者は是れ佛にして、般若波羅蜜多を以て阿難に囑累し、「汝好く受持し、守護して、忘失せしむること無れしと。般若を除いて、十二部經を盡く皆忘失すること有り」と雖も、其の過は尙少なり、若し般若の一句を失へば、其の過は大に多し。何となれば、是の深般若の法藏は、是れ十方三世諸佛の母にして、能く人をして疾かに佛道に至らしむればなり。經中に説くが如し、「三世の諸佛は皆般若より得、乃至聲聞人の爲に法を説きたまふ」と。其の中に皆是れ般若の事を讚す。

問うて曰く、三法を説きて、三千大千世界の衆生をして盡く阿羅漢を得

せしむるは、云何が般若の一句を以て、菩薩に教ふるに如かざるや。答へ

て曰く、是の事は先に答ふと雖も、今當に更に略して説くべし。是の三千

大千世界の中の衆生は、皆阿羅漢を得、自ら其の身を度すと雖も、作佛に

中らず。若し般若の一句を説けば、聞く者作佛を得るが故なり。人の衆の菓樹を種うるは、一人の一

如意樹を種る、能く人人の所願に隨つて意の如く皆得るに如かざるが如し。

復次に、聲聞法の中には大慈大悲心無しと爲し、大乘法の中の一句には少なしと雖も大慈悲有り。

聲聞法中は皆自ら身の爲にし、大乘法の中は廣く衆生の爲にす。聲聞法の中には廣く諸法の心を知ら

んと欲すると無く、但だ疾かに老病死を離れんと欲するも、大乘法の中には了了に一切法を知らんと

【100】 第一三問、三千世界の衆生を教化して阿羅漢を得せしむるは、何故に般若の一句を以て、菩薩に教ふるに如かざるか。



欲するが故に、聲聞法の功德には限量有り、大乘法中は諸の功德を盡さんと欲し、遺餘有るを無し。是の如き等の大小の差別有り、譬へば、金剛は小なりと雖も、能く一切の寶に勝り、少しと言ふことを得ざるが如し。故に多くの三千大千世界の中の阿羅漢の福德を、般若の一句を教ふる菩薩に比するに、一日より乃至須臾なるも其の福甚だ多きには如かず。此の中に佛は自ら因縁を説きたまはく、是の人は自ら阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲し、亦人を教へて得せしめ、自ら六波羅蜜「多」の諸の功德を行じ、亦人の爲に説き、菩薩は二處の功德を集めて佛道を得ずとは、是の處有ること無しと。爾の時、佛は是の事を明了にせんと欲したまふが故に、證を引き、亦一切法空を證せんと欲したまふ。是の空法に著せず、但衆生を憐愍するが故に囑累す。阿闍佛、大衆、莊嚴の眼と對を作さざるが如く一切法の眼と對を作さざるも亦是の如し。肉眼天眼の見る所は、皆是れ作法にして虚誑不實なり。慧眼、法眼、佛眼は皆是れ無相無爲法なるが故に見るべからず。若し見るべからざれば亦知るべからず、無作等も亦是の如し。見る所の阿闍佛の會は幻の如く夢の如し。能く是の如く諸法を觀する、是を菩薩は般若を行すと名け、著する所無しと名く。佛の囑累したまふ所も亦著する所無く、但大慈悲を以ての故に是の般若を讚じたまふ。一切法は是れ不可思議相なりと雖も、而も衆生を利益するを以ての故に讚歎して是の言を作す、阿難よ、是の如く學するを般若を學すと爲す。若し一切の諸の波羅蜜「多」を得んと欲せば、當に般若波羅蜜「多」を學すべし」と。是の如き等は經に廣く説けるが如し。「佛は無

量を以て般若を讚じたまふ。佛の智慧は盡くべからず、般若の功德も亦盡くすべからず、何となれば般若波羅蜜〔多〕は無量の相なればなり。名衆等の言語、章句、卷數は量有り、小品、放光、光讚等の般若波羅蜜〔多〕の經卷の章句の如きは限有り量有るも、般若波羅蜜〔多〕の義は無量なり」と。阿難問ふ、「般若波羅蜜〔多〕は云何が無量なるや」と。佛答へたまはく、「般若波羅蜜〔多〕の相は自ら離なり、離なるが故に本より已來、不生不集なり。不生不集なるが故に不盡不滅なり」と。此の中に、佛自ら因縁を説きたまはく、「過去の無量阿僧祇の諸佛及び弟子は、是の般若波羅蜜〔多〕を用て、十方を照明し、無量の衆生を度し、皆共に無餘涅槃に入る。般若波羅蜜〔多〕は故らに盡きず、未來現在も亦た是の如し。譬へば、人有りて虚空を盡くさんと欲するも、虚空は盡すべからざるが如し。般若波羅蜜〔多〕等の諸の功德、乃至一切種智も亦是の如く、今盡きず、已に盡きず、當に盡きざるべし」と。有人は過去に盡きざることを知るも、未來現在に盡くこと有るべしと謂ふ。是の故に、三世に盡くべからずと説く。何となれば、諸法は本無生なれば、云何が當に盡くべけんや。佛は般若は是れ眞に盡くること無きを知りたまふも、名字言語の衆は盡くこと有るが爲の故に囑累したまへり。人の香油の瓶を以て子弟に囑累するは、瓶を惜まずと雖も、香油を受持せんが爲の故なるが如し。語言の能く義を持するも亦是の如く、若し語言を失すれば則ち義は得べからず。爾の時、佛は人に般若を信受せしめんが爲の故に、舌相を出だして面を覆ひ、阿難に告げたまはく、「我れ今四衆の中に於いて

汝に般若を囑累す。汝當に衆生の爲に、解説し、顯示し、分別し、解し易からしむべし」と。舌相を現する所以の者は、世間の相法は、舌能く鼻を覆ふ、是れは不妄語の相なり。何に況んや、面を覆ふをや。是の故に、佛は衆生に示したまはく、我は父母生身より此の舌相有り、般若波羅蜜〔多〕を以て、汝をして信解せしめんと欲す。汝等は未だ一切智を得ず。遍ねく知ること能はざるを以て、汝等をして信せしめんと欲すと。故に神通力を以て現する所に非ず、佛は甚深の妙法、智慧禪定の中に於てすら猶尙著したまはず。何に況んや、世間の八法〔に於て〕供養の利の故に而も虚誑を爲さんや。一切法中に於て鳥の虚空を飛んで觸礙する所無きが如く、但本願を以て誓つて衆生を度し、大悲心もて一切を憐愍するが故に、第一利なる般若波羅蜜〔多〕を以て慇懃に汝に囑累すと。

復次に、阿難よ、是の深般若波羅蜜〔多〕を行する者は、能く一切の文字陀羅尼に入るとは、一字に因つて即ち畢竟空に入る、是を文字陀羅尼と名く。先の陀羅尼の中に説くが如し。諸の文字の法は皆般若波羅蜜〔多〕に因りて得、餘の聞持等の諸の陀羅尼も亦皆般若波羅蜜〔多〕を學するより得。菩薩は諸の陀羅尼を得已りて種種の樂說辯才を得、無量阿僧祇に一句を説くとも、義は盡くべからず、是を三世諸佛の眞法と名く、更に異法無し。

又復、阿難よ、般若は是れ十方三世諸佛の妙法にして、一城門は四方より來る者、異門より入ること無きが如し。阿難よ、我れ今汝が爲に了了に説かん。若し人有りて般若を受持せば、但我法を受持す

るのみに非ず、是の人は三世諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を受持するなり。阿難よ、是の般若波羅蜜〔多〕を、我は處處に、是れ行者の足なりと説けり。何となれば、菩薩は是の般若を得て、能く菩薩道を行ずればなり。阿難よ、汝は是の般若波羅蜜〔多〕の陀羅尼を得るが故に、能く一切の佛の所説の法を持すと。

問うて曰く、三閻持陀羅尼の力の故に能く持す。何を以てか、般若を得るが故に、能く一切の諸佛の法を持すと言ふや。答へて曰く、閻持陀羅尼は能く有數有量の法なる世間を持す。亦須尸摩外道の如きも亦閻持陀羅尼を得ること有り。是の人は少時に得と雖も、久しければ則ち忘失す。般若に従つて陀羅尼を得れば、廣く諸法を受持し、終に忘失せず、是を以て差別と爲す。

問うて曰く、三般若は便ち是れ波羅蜜〔多〕なり。何を以てか、名けて陀羅尼と爲すや。答へて曰く、諸法實相は是れ般若にして、能く種種に衆生を利益し愛念するが故に種種の名と作る、佛に十號等の文字あるが如し。

般若も亦是の如く、能く一切諸の智慧の邊に到る、是を名けて般若波羅蜜〔多〕と爲す。菩薩、般若を行じて佛と作り已れば名を變じて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。若し小乗の心中に在れば但名けて、三十七品、三解脱門と爲す。若し人聞くことを得て、忘れざらんと欲せば、是の人の心中に在るを名

【二】 第一四問、般若を得るが故に、能く一切諸佛の法を持すと云ふ理由如何。  
 【三】 第一五問、般若は便ち是れ波羅蜜多なり、何を以てか名けて陀羅尼と爲すや。

けて陀羅尼と爲す。是の故に、佛は如意珠の譬喩を説きたまへり。前物の色に随つて變ずるを名けて佛と爲す。是の如く種種に般若の大功德を説く。

# 卷の第八十

## 無盡方便品第六十七を釋す。

經

爾の時に、須菩提是の念を作す、是の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は甚深なり。我れ當に佛に問ひたてまつるべし」と。是の念を作して曰つて、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は盡くべからざるや」と。佛の言はく、「虚空は盡くべからざるが故に、般若波羅蜜(多)は盡くべからず」と。「世尊よ、云何が應に般若波羅蜜(多)を生すべきや」と。佛の言はく、「色は盡くべからざるが故に、般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。受想行識は盡くべからざるが故に、般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。檀(那)波羅蜜(多)は盡くべからざるが故に、般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)は應に生ずべし。尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)は應に生ずべし。般若波羅蜜(多)は盡くべからざるが故に、般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。乃至一切種智は盡くべからざるが故に、般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。」

【一】此の品には、般若諸法無盡甚深を説く、以下を方便道を説くものとす。蓋し般若と方便とは不離なるも、以下佛化方便を主とすれば、方便道とするなり。他本には無盡品、又は不可盡品に作れり。

復次に、須菩提よ、藏は空にして盡くべからざるが故に、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。行は空にして盡くべからざるが故に、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。識は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。名色は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。六處は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。

くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。六觸は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。受は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。受は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。取は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は生ずべし。有は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。生は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。老死憂悲苦惱は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)は應に生ずべし。

須菩提よ、十二因縁は是れ獨り菩薩の法にして、能く諸邊の顛倒を除く。道場に坐する時、應に是の如く觀じ、當に一切種智を得べし。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩有りて、虚空不可盡の法を以て、般若波羅蜜(多)を行じ、十二因縁を觀せば、聲聞辟支佛地に墮せず。阿耨多羅三藐三菩提に住せん。須菩提よ、若し菩薩道を求めて、而して轉還する者は、皆般若波羅蜜(多)の念を離るるが故に、是の人ば、云何が般若波羅蜜(多)を行じ、虚空不可盡の法を以て、十二因縁を觀すべきや知らず。須菩提よ、若し菩薩道を求めて而も轉還する者は、皆是の方便力を得ざるが故に、阿耨多羅三藐三菩提に於いて、而も轉還す。

須菩提よ、若し菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提に於いて轉還せざる者は、皆是の方便力を得るが故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に虚空不可盡の法を以て、般若波羅蜜(多)を觀すべく、應に虚空不可盡の法を以て、般若波羅蜜(多)を生ずべし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の十二因縁を觀する時、法の因縁無くして生ずるものを見ず、法の常にして不滅なるものを見ず。法の我・人・壽者・命者・衆生、乃至知者見者なることを見ず。法の無常なるものを見ず、法の苦なるものを見ず、法の無我なるものを見ず、法の寂滅非寂滅なるを見ず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、應

に是の如く十二因縁を觀すべし。

須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く、般若波羅蜜(多)を行せば、是の時、色の若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは我、若くは無我、若くは寂滅、若くは非寂滅なるを見ず。受想行識も亦是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の時、亦般若波羅蜜(多)を見ず、亦是の法を以て、般若波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)乃至阿耨多羅三藐三菩提を見ることをも見ず。亦阿耨多羅三藐三菩提を見ず、亦是の法を以て、阿耨多羅三藐三菩提を見ることも見ず。是の如く、須菩提よ、一切法は得べからざるが故に、是を般若波羅蜜(多)に應ずる行と爲す。

若し菩薩、無所得の般若波羅蜜(多)を行する時は、惡魔の愁毒すること箭の心に入るが如し。譬へば、人の新に父母を喪ふが如し。是の如く、須菩提よ、是の惡魔は、菩薩の無所得の般若波羅蜜(多)を行するを見る時、便ち大に愁毒すること、箭の心に入るが如し」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、但一魔のみ愁毒するや。三千大千世界の魔も亦復愁毒するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「三千大千世界の諸の惡魔は皆愁毒し、箭の心に入るが如し。各其の座に於いて自ら安んずること能はず。須菩提よ、菩薩摩訶薩、能く是の如く般若波羅蜜(多)を行せば、是の時、一切世間の天及び人阿修羅、其の便を得て、其をして憂惱せしむること能はず。須菩提よ、是を以ての故に、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に是の般若波羅蜜(多)を行すべし。菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、檀(那)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・麁提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を具足し修す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、諸の波羅蜜(多)を具足す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、云何が檀(那)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・麁提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を具足するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は所有る布施を皆隨婆若に廻向す。是の如く、須菩

提よ、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く、般若波羅蜜(多)を行せば、是の時、色の若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは我、若くは無我、若くは寂滅、若くは非寂滅なるを見ず。受想行識も亦是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の時、亦般若波羅蜜(多)を見ず、亦是の法を以て、般若波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)乃至阿耨多羅三藐三菩提を見ることをも見ず。亦阿耨多羅三藐三菩提を見ず、亦是の法を以て、阿耨多羅三藐三菩提を見ることも見ず。是の如く、須菩提よ、一切法は得べからざるが故に、是を般若波羅蜜(多)に應ずる行と爲す。

若し菩薩、無所得の般若波羅蜜(多)を行する時は、惡魔の愁毒すること箭の心に入るが如し。譬へば、人の新に父母を喪ふが如し。是の如く、須菩提よ、是の惡魔は、菩薩の無所得の般若波羅蜜(多)を行するを見る時、便ち大に愁毒すること、箭の心に入るが如し」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、但一魔のみ愁毒するや。三千大千世界の魔も亦復愁毒するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「三千大千世界の諸の惡魔は皆愁毒し、箭の心に入るが如し。各其の座に於いて自ら安んずること能はず。須菩提よ、菩薩摩訶薩、能く是の如く般若波羅蜜(多)を行せば、是の時、一切世間の天及び人阿修羅、其の便を得て、其をして憂惱せしむること能はず。須菩提よ、是を以ての故に、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に是の般若波羅蜜(多)を行すべし。菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、檀(那)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・麁提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を具足し修す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、諸の波羅蜜(多)を具足す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、云何が檀(那)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・麁提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を具足するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は所有る布施を皆隨婆若に廻向す。是の如く、須菩



提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、檀(那)波羅蜜(多)を具足す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は所有の持戒を皆薩婆若に廻向す、是を尸羅波羅蜜(多)を具足すと爲す。菩薩摩訶薩は所有の忍辱を皆薩婆若に廻向す、是を羼提波羅蜜(多)を具足すと爲す。菩薩摩訶薩は所有の精進を皆薩婆若に廻向す、是を毗梨耶波羅蜜(多)を具足すと爲す。菩薩摩訶薩は所有の禪定を皆薩婆若に廻向す、是を禪(那)波羅蜜(多)を具足すと爲す。菩薩摩訶薩は所有の智慧を、皆薩婆若に廻向す、是を般若波羅蜜(多)を具足すと爲す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、六波羅蜜(多)を具足するなり。

論

釋して曰く、須菩提は佛に從つて般若波羅蜜(多)の種種の相を聞けり。初に畢竟空相を聞き、中に囑累の有に似たるが如きを聞き、後に還つて空、所謂の般若の義は無量にして、名字句象は有量なることを聞く。是の時に、須菩提は是の念を作す、「諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は甚深なり、我れ當に佛に甚深なる所以を問ふべし」と。佛は菩提の少許の分を説きたまひ、但衆生の顛倒を破せんが爲の故に、具足して説きたまはず。何となれば能く受くる者無ければなり。若し人如相を取れば、佛は、如も亦空なり、「そは」生住滅無きが故なりと言へり。若し法に生住滅無ければ、是の法は即ち無なり、法性實際も亦是の如し。若し畢竟空を取ること有る者も亦非と言ふ。何となれば、若し畢竟空、是れ定相ならば、取るべくして、是れ畢竟空に非ず、是の故に甚深なりと言ふ。我れ當に更に佛に問ひたてまつるべしと。須菩提は是の念を作し已り、佛自ら説きたまふが如きは、三世諸佛は般若波羅蜜(多)を用て道を得たまひ、般若は故らに盡きず、已に盡きず、今盡きず、當に盡きざるべしと。是の

故に、我は今但盡きざるの義を問はんと。佛答へたまはく、虚空の盡きざるが如く、般若も亦盡きず、虚空は法有ると無く、但名字のみ有るが如く、般若波羅蜜「多」も亦是の如し。般若波羅蜜「多」は虚空の如く所有無きが故に、盡くすべからずと。「又問ふ」云何が菩薩は能く是の般若波羅蜜「多」を生ずるや、能く生ぜば、菩薩は云何が心中に能く行じ能く得るとを生ずるやと。佛答へたまはく、色は盡くること無きが故に、般若波羅蜜「多」は應に生ずべし。色の初中後の生の如きは得べからず。色は即ち生なり。色にして得べからざれば、色を離れて生色は得べからず。生、得べからざれば、生生は得べからず。先に生を破する中に説けるが如し。生は得べからざるが故に、色も亦得べからず。色は得べからざるが故に、色生は得べからず。二法、得べからざるが故に、色は幻の如く、夢の如く、但人の眼を誑はすのみ。若し色にして生有らば、必ず盡くすること有らん、無生なるを以ての故に、亦盡くすること無し。色の真相は即ち是れ般若波羅蜜「多」の相なり。是の故に、色は盡くすべからずと説く。般若波羅蜜「多」も亦盡くすべからず。受想行識、檀「那」波羅蜜「多」、乃至一切種智も亦是の如し。

復次に、應に般若を生ずべしとは、無明の虚誑は盡すべからざればなり。若し人但畢竟空のみを觀ずれば、多く 斷滅の邊に墮し、若し有を觀ずれば多く 常邊に墮す。是の二邊を離るるが故に、

- 【二】 斷滅の邊とは、謂ゆる斷見なり。
- 【三】 常邊とは、謂ゆる常見なり。
- 【四】 二邊を離るるが故に假りに名けて中道と爲す。

十二因縁は空なりと説く。何となれば、若し法は因縁の和合より生ぜば、是の法に定性有ること無し。若し法は定性無ければ、即ち是れ畢竟空、寂滅の相にして、二邊を離るるが故に、假に名けて中道と爲す。是の故に、十二因縁は虚空の如く法無きが故に盡きずと説く。癡も亦因縁の和合より生ずるが故に、自相無く、自相無きが故に、畢竟空なること虚空の如し。

復次に、因縁生の故に實無し、經中に説くが如し。眼に因りて色を縁じ、濁念を生じ、濁念は癡より生ず。濁念は眼中に在らず、色中に在らず、内に在らず、外に在らず、亦中間に在らず、亦十方三世より來らず。是の法の定相は得べからず。何となれば、一切法は如に入るが故なり。若し是の無明の定相を得れば、

即ち是れ智慧にして、名けて癡と爲さず。是の故に癡相と智慧相とは異なること無し。癡の實相は即ち是れ智慧なり、智慧相を取著すれば即ち是れ癡なり。是の故に、癡の實相は畢竟清淨にして、虚空の如く無生無滅なり。是の故に、是の觀を得るが故に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すれば、即ち般若波羅蜜「多」と名くと説く。

問うて曰く、若し無明無くんば、亦諸行等も無けん、云何が十二因縁を説くや。答へて曰く、

十二因縁を説くに三種有り、一には凡夫の肉眼に見る所は顛倒して我心に著し、諸の煩惱業を起

- 【五】 癡相と智慧相とは異なることなし。
- 【六】 第一問、若し無明なくんば、亦諸行等もなけん、云何が十二因縁を説くや。
- 【七】 三種の十二因縁——(一)肉眼、(二)諸賢聖、(三)諸菩薩。

し、生死の中に往來す。二には賢聖は法眼を以て諸法を分別し、老病死を心に厭うて世間を出でんと欲す、老病死の因縁を求むるに生に因るが故なり。是の生は諸の煩惱業の因縁に由る。何となれば、煩惱無き人は則ち生せざればなり。是の故に、煩惱の生因たることを知る。煩惱の因縁は是れ無明なり、無明の故に、應に捨つべくして而も取り、應に取るべくして而も捨つ。何者をか應に捨つべき。老病の諸の苦の因縁たる煩惱は應に捨つべし、少顛倒の樂の因縁なるを以ての故に而も取る。持戒禪定智慧は諸善の根本にして、是れ涅槃の樂の因縁なり、是の事を應に取るべくして而も捨つ。是の中には知者見者作者有ること無し。何となれば、是の法は定相無く、但虚誑の因縁より相續して生ずればなり。行者は是を虚誑不實なりと知れば、則ち戲論を生ぜず。是は但苦を滅すればなり。又涅槃に於いては、究盡して諸の苦相を求めず。三には、諸の菩薩摩訶薩の大智人は利根なるが故に、但十二因縁の根本相を究盡せんことを求め、憂怖を以て自ら没せず、時に於いて定相を得ず。老法は畢竟空にして、但虚誑の假名に従つて有り。何となれば、諸法の相を分別する者は老を説くも、是れ心に相應せざる行にして、是の相は得べからず。頭白等は是れ色相にして老相に非ず、二事は得べからざるが故に老相無し。

復次に、世人は老相を、髮白・齒離・面皺・身曲・羸瘦・力薄・諸根開塞なるに名け、是の如き等を老相と名く。但是の事は然らず。何となれば、髮の白きは、唯老者のみに非ず、又壯年にして而も白く、老

年にして而して黒き者あり。羸瘦皴曲なるも亦爾なり。有人は老いて而も諸根明利なり。少くして而も闇塞なる者あり。又年薬を服還すれば、老なりと雖も而も壯なり。是の如く老には定相無し。定相なきが故に、諸法の和合を假に名けて老と爲す。又假に輪軸・輻・輻等を車と爲すは、是れ假名にして實に非ざるが如し。

復次に、有人の言く、「果報の五衆を説くが故に、相を名けて老と爲す」と。是れ亦然らず。何となれば、一切の有爲法は、念念に生滅して住せず。若し住せざれば則ち相無く、相無ければ則ち老無ければなり。一切の有爲法は、若し住すること有れば、則ち無常無く、若し無常無ければ即ち是れ常なり。若し常なれば則ち老無し。何に況んや、常にあらず、無常にあらず、畢竟空の中には而も老有らんや。

復次に、諸法畢竟空の中には生相は得べからず。何に況んや、老有らんや。是の如き等の種種の因縁もて老法を求むるに得べからず。得べからざるが故に相無く、虚空の如く盡すべからず。老の如く、乃至無明も亦是の如し、無明を破することは上に説くが如し。菩薩は諸法實相の畢竟空にして所有無きことを觀じ、所有無きにも亦著せず。是の事の故に、衆生の中に於いて而も大悲を生ず。衆生は愚癡の故に、不實顛倒虛誑の法中に於いて、諸の苦惱を受く。初の十二因縁は但是れ凡夫人なるが故に、是の中に於いて是非を求めず。第二の十二因縁は、二乗の人及び未だ無生忍法を得ざる菩薩の

觀する所なり。第三の十二因縁は、無生忍法を得、乃至道場に坐する菩薩の觀する所なり。是の故  
 に、無明虚空は盡すべからず、乃至憂悲苦惱虚空は盡すべからずと説く。故に菩薩は般若波羅蜜(多)  
 を行じて、是の如く深く因縁法を觀す。諸邊の顛倒を離るとは、邊とは常邊斷滅邊有邊無邊實邊  
 空邊世間有邊等に名く。諸邊の顛倒に著する者は、無常中に常等の諸の顛倒の煩惱を起す。是の十  
 二因縁の法を觀すれば、諸邊の顛倒滅す。諸の煩惱に二分有り、一には外道邪見の人を名けて邊と爲  
 し、二には餘の衆生の煩惱を名けて顛倒と爲す。十二因縁を觀すれば、是の二種の煩惱は皆滅す。是  
 の第三の十二因縁觀は甚深にして、唯諸の菩薩の道場に坐する者のみ能く觀す。先に能く觀すと雖  
 も、未だ具足すること能はず。城譬喻經の中に説くが如し。佛の言はく、「我本未だ得道せざりし時、  
 是の如く思惟すらく、衆生は惑むべし。深く嶮道に入る。所謂數數生じ、數數老い、數數死し。世  
 間に往來して出處を知らずと。我れ即時に復た是の念を作す、何の因縁あつてか老死有ると。是の  
 如く求見する時、實智慧生ずることを得たり、因縁は是れ老死等なり」と。是の故に知る、第三觀は  
 道場に坐して乃ち得、經に廣く説くが如し。又復た是の如く因縁法を觀すれば、二乘を過ぎて、一  
 切種智を得。若し人有りて、佛道に於いて退するは、皆是の甚深觀を得ざるが故なり。若し是の觀を  
 得ば、則ち退せず。何となれば、深く畢竟空の中に入れば、則ち聲聞辟支佛地を得ず、見ざるが故  
 に、則ち是の中に住せず。

復次に、能く是の如く因縁法を觀する者は、一法の定んで自在にして、因縁無くして、而も生ずること有るを見ず。一切法は自在ならず、皆因縁生に屬す。有人は、一切法の因縁より生ずることを見ると雖も、謂つて邪因縁より生ずと爲す。邪因縁とは、微塵、世性等なり。是の故に説けり、「法として因縁無くして生ずるものを見ず、亦法として常因縁、微塵、世性より生ずるものを見ず。虚空の常なるが如く、常なるが故に則ち生ずると無し。虚空も亦物の與に因を作らず。是を以ての故に、法として常因縁より生ずること有ること無し」と。

復次に、菩薩は是の如く觀ず、一切法は因縁生に屬して自在ならず、自在ならざるが故に、我無く、乃至知者、見者無しと。爾の時、菩薩は畢竟空に安住し、十二因縁の中に、一切の色等の法の、若くは有、若くは無等を見ず、亦般若をも見ず、亦是の法を用ふることも見ず。般若乃至阿耨多羅三藐三菩提を行ずるも亦是の如し。是を菩薩の無所得の般若波羅蜜(多)と名く。是の無所得の般若を得れば、一切法中に於いて便ち障礙する所無き般若を得。爾の時、(一)諸魔は極めて大に愁毒す。何となれば、是の菩薩に深く十二因縁の畢竟空中に入り、有無非有非無等の六十二の諸の邪見の魔網に著せざるを以て、我れ今法として菩薩を得べき便有ること無し。譬へば、捕魚の人の一魚の深く大水に入りて鈎網の及ばざる所なることを見て、則ち絶望憂愁するが如く、亦新に父母を喪ふが如し。

【八】 深く畢竟空中に入れて、  
魔大いに愁毒すること、一魚  
の深く大水の中に入るに、鈎  
網も及ばざる如し。

復次に、菩薩は能く是の如く無所得の般若波羅蜜多を行すれば、則ち能く檀那波羅蜜多等をも具足す。何となれば、是の如き法を行すれば、諸の煩惱障を般若法もて皆折薄し、諸魔人民は便を得ること能はざるが故に、諸の波羅蜜多を具足することを得ればなり。先より來た六波羅蜜多を行すと雖も、未だ能く是の如く具足することを得ず。須菩提問ふ、「世尊よ、菩薩は云何が、能く是の如く、般若波羅蜜多を行じ、能く檀那波羅蜜多等の、諸の波羅蜜多を見足するや」と。佛答へたまはく、「菩薩は所有る布施を皆薩婆若に廻向すとは、二種の人有り、輒根と利根となり。輒根とは、少多の布施に皆相を取りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、利根とは、是の取相を破して而も戲論し、空法の信力轉た薄く、薩婆若を用ゐずして、但諸法實相を求む。是の二種の人は、皆檀那波羅蜜多を具足すること能はず。一には信力多く、慧力少きを以てなり、二には、慧力多く、信力少きを以ての故なり。佛は今、信力と慧力と等しきが故に、能く薩婆若に廻向すと説きたまへり。薩婆若を念すとは、是れ信力なり、薩婆若の如く廻向すとは是れ智力なり。乃至般若波羅蜜多も亦是の如し。

【九】 二種の人、(一)輒根、(二)利根。  
 【一〇】 此の品には、菩薩、一波羅蜜多を行すれば、他の五波羅蜜多を攝することをも明す。

(10) 六度相攝品第六十八の上を釋す。



須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は布施する時、是の布施を持つて薩婆若に廻向し、衆生の中に於いて慈の身口意業に住す。是を菩薩摩訶薩の檀(那)波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取ると名く」と。「世尊よ、云何が菩薩は檀(那)波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩は布施する時、受者瞋恚、罵詈、惡言もて之に加ふるも、是の時、菩薩は忍辱して瞋心を生ぜず。是を菩薩の檀(那)波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取ると爲す」と。「世尊よ、云何が菩薩は檀(那)波羅蜜(多)に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は布施する時、受者瞋恚、罵詈、惡言もて之に加ふるも、菩薩は布施の心を増益して、是の念を作す、われ應當に施して、惜しむ所有るべからざるべしと。即時に身精進、心精進を生ず。是を菩薩の檀(那)波羅蜜(多)に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取ると爲す」と。「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は檀(那)波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は布施する時、薩婆若に廻向し、聲聞辟支佛地に趣かず、但だ一心に薩婆若を念するのみ。是を菩薩の檀(那)波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取るを爲す」と。「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は檀(那)波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は布施する時、布施の空にして、幻の如きことを知り、衆生の爲に布施して益あり益なきことを見ず。是を菩薩の檀(那)波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取るを爲す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を取るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜(多)の中に住し、身口意に布施の福德を生じて、阿耨多羅三藐三菩提を助く。是の功德を持つて聲聞辟支佛地を取らず。尸羅波羅蜜(多)の中に住して他の命を奪はず、他家の物を劫奪せず。邪姪を行ぜず、妄語せず、兩舌せず、惡口せず、綺語せず、貪嫉ならず、瞋恚せず、邪

見ならずして、所有るものを布施す。飢うる者には食を與へ、渴する者には飲を與へ、乘を須むるには乘を與へ、衣を須むるには衣を與へ、香を須むるには香を與へ、瓔珞を須むるには瓔珞を與へ、塗香・臥具・房舍・燈燭・養生、須むる所、盡く之に給與す。是の布施を持つて衆生と之を共にし阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の如く廻向せば聲聞辟支佛地に墮せず。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の尸羅波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取ると爲す」と。世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)に住して、麁提波羅蜜(多)を取ると爲す」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜(多)の中に住し、若し衆生有り、來りて節節に支解するも、菩薩は是の中に於いて真心乃至一念だも生ぜずして、是の言を作す、我は大利を得、衆生來りて、我が支節を取り用ふるも、我は一念の瞋恚だも無しと。是を菩薩の尸羅波羅蜜(多)の中に住して、麁提波羅蜜(多)を取ると爲す」と。世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)の中に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取ると爲す」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩は身精進・心精進にして常に捨てざれば、是の念を作す、一切衆生は生死の中に在り、我れ當に抜きて甘露地に著かしむべしと。是を菩薩の尸羅波羅蜜(多)の中に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取ると爲す」と。世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜(多)に住して、禪(那)波羅蜜(多)を取ると爲す」と。佛の言はく、「菩薩は初禪・第二・第三・第四禪に入りて、聲聞辟支佛地を食らず。是の念を作す、我れ當に禪(那)波羅蜜(多)の中に住して、一切衆生を生死より度すべしと。是を菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜(多)に住して、禪(那)波羅蜜(多)を取ると爲す」と。世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取ると爲す」と。佛の言はく、「菩薩は尸羅波羅蜜(多)の中に住し、法の若くは作法、若くは有爲法、若くは數法、若くは相法、若くは有、若くは無を見るべきこと無く、但諸法の如相に過ぎざるを見るのみ。般若波羅蜜(多)の漚和拘舍羅力を以ての故に、聲聞辟支佛地に墮せず。是を菩薩の尸羅波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取ると名く」と。

釋して曰く、上品には未だ云何が菩薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、六波羅蜜(多)を具足するやを説かざるも、佛は一一に答へたまふ。此の品中に須菩提は、云何が菩薩は一波羅蜜(多)を行じて五波羅蜜(多)を攝するやを問ふ。

問うて曰く、(二) 六波羅蜜(多)は各各異相なり。云何が一波羅蜜(多)を行じて、五波羅蜜(多)を攝するや。答へて曰く、菩薩は方便力を以ての故に、一波羅蜜(多)を行じて、能く五波羅蜜(多)を攝す。

復次に、有爲法は因縁と果報と相續するが故に、善法を相成するは善法の因縁の故なり。是の波羅蜜(多)は皆是れ善法なるが故に、一を行すれば則ち五を攝し、一波羅蜜(多)を以て主と爲し、餘の波羅蜜(多)は分有り。

(二) 有る菩薩摩訶薩は、深く檀那波羅蜜(多)を行じ、檀(那)波羅蜜(多)の中に安住し、衆生に布施する時、慈心を得、慈より能く慈の身口業を起す。是の時菩薩は即ち尸羅波羅蜜(多)を取る。何となれば、慈業は是れ三善道にして尸羅波羅蜜(多)の根本なればなり。所謂不貪・不瞋・正見の是の三慈業は、能く三種の身業・四種の口業を生ず。慈は即ち是れ善業にして、衆生を利益するが爲の故に、名けて慈と爲す。(三) 屢提波羅蜜(多)を取るとは、菩薩は一切の智慧の爲の故に布施す。受者瞋らんに、若し施主は唱へて言く、我れ能く一切を施すと。受者は意に稱ふことを得ずして、便

- 【二】 第二問、六度には各異相あり、云何が一波羅蜜多を行じて、他の五度を攝するや。
- 【三】 布施の時、持戒を取る事。
- 【三】 布施の時、忍辱を取な事。

ち是の言を作す、「誰か汝をして我に請はしめ、而して我が意に隨はざらしむるや」と。瞋は是れ心の惡業なり、罵は是れ口の惡業なり、打害は是れ身の惡業なり。瞋に上中下有り、上は害殺し、中は罵詈訾し、下は心に瞋る。爾の時、菩薩は三種の惡業を生ぜず。意業は是れ根本なるが故に但意業のみを説く。是の念を作さく、「是れ我が罪なり、我れ彼の人に請ひ、而も意に稱ふことを得ること能はず、我が薄福に由つて施與を具足すること能はず。我れ若し瞋らば、既に財物を失し、又福德を失す。是の故に瞋るべからず」と。

(四) 毗梨耶波羅蜜(多)を取るとは、若し菩薩布施する時は、受者打害すとも心没せず、捨てずして布施すること先に説くが如し。布施の爲の故に身心に勤めて精進し、是の念を作す、「我れ先世に、強意に布施せざるが故に、今受者の意に稱ふことを得ること能はず。但當に勤めて布施すべく、應に餘の小事を計るべからず」と。

(五) 禪(那)波羅蜜(多)を取るとは、菩薩は布施して今世の福樂を求めず、亦後世の轉輪聖王(天子)を求めず、亦世間の禪定の樂を求めず、衆生の爲の故に涅槃の樂を求めず。但是の諸意を攝し、一切種智の中に在りて、散亂せしめざるなり。

(六) 般若波羅蜜(多)を取ることは菩薩は布施する時、常に一切有爲の作法は、虚誑不堅固にして、幻の如く、夢の如しと觀じ、衆生に布施する時、有益と無益を見ず。何となれば、是の布施物は、定んで是れ樂の因縁に非ざればなり。或時は食

(四) 布施の時、精進を取る所以を明す。

(五) 布施の時、禪那を取る所以を明す。

(六) 布施の時、般若を取る所以を明す。

(七) 衆生に布施する時、有益無益を見ず。

を得、腹脹れて而して死す。或時は財を得、賊の爲に害せらる。亦財物を得るを以ての故に慳貪の心を生じ、而して餓鬼の中に墮す。又此の財物は有爲相なるが故に、念念生滅し、無常にして苦を生ずる因縁なり。

復次に、此の財物は諸法實相畢竟空の中に入り、有利と無利とを分別せず。是の故に、菩薩は受者に於いて恩分を求めず。布施に於いて果報を望まず。設し報を求むる者、若し彼報せざれば則ち怨恨を生ず。菩薩は是の念を作す、「諸法は畢竟空なるが故に、我は與ふる所無し」と。若し果報を求めば、當に畢竟空を求むべし。阿耨多羅三藐三菩提は布施の相の如し。是の故に有益を見ず。畢竟空を以ての故に亦無益をも見ず。是の如く、檀〔那〕波羅蜜〔多〕の邊に於いて、五波羅蜜〔多〕を取る。菩薩は尸羅波羅蜜〔多〕を以て主と爲し、所有の身口意の善業・布施・多聞・思惟・持戒等もて、阿耨多羅三藐三菩提を助く。持戒力大なるが故に、總て尸羅波羅蜜〔多〕と名く。何となれば、欲界の中には持戒を上と爲し、餘の布施・聞思修の慧等は欲界の心を散亂するを以ての故に力を得ること微薄なればなり。阿毗曇中に説くが如くんば、出法を欲界繫、或は色無色界繫・淨・禪・定・學・無學の法、及び涅槃に名く。菩薩は是の持戒等の法を以て、聲聞・辟支佛地に趣かず。但た尸羅波羅蜜〔多〕の中にのみ安住して、衆生の命を奪はず、乃至邪見を爲さず。是の助道戒に住し、十善道戒を具足す。菩薩は是の二種の戒中に住して衆生に布施す。食を須むるものには食を與ふ。食を與ふる等の義は、初品の中に説けるが如し。

皆是の福を以て佛道に廻向し、二乗に趣かず。何となれば菩薩は二種の破戒有り、一には十不善道、二には聲聞辟支佛地に向ふ。此と相違すれば則ち是れ二種の持戒なり。摩提波羅蜜〔多〕を取るとは、菩薩は尸羅波羅蜜〔多〕に住し、忍辱波羅蜜〔多〕を具足せんと思す。若し衆生來りて節節に支解し持し去るとも乃至一念の瞋心を生ぜず。何に況んや身口の惡業を起さんや。

問うて曰く、(二)にんにく、忍辱は一切を侵奪するも能く忍ぶに名く。何を以てか、但身體を割截することをも説くや。答へて曰く、著する所の物に内外有り。内を自身に名く、頭目髓腦等なり。外を妻子珍寶等に名く。俱に是れ著處なりと雖も、内に著することは最も深し。

復次に、或は人有りて、財物を隨逐して、而して死すと雖も、亦是れ身の爲の故なり。又復た人は多く身を惜む時、財を惜むこと有り。財を惜むものは、則ち少きが故に説かず。

復次に、是の人は尙身すら惜まず、何に況んや、餘物をや。是の故に但だ大因縁のみを説けば、當に知るべし、已に小なる者を攝すと。

問うて曰く、(一)にんは、乃ち一念の瞋心だに生ぜざるに至れる者は、是を變化身と爲すや。是を父母生身と爲すや。若し是れ變化身ならば、則ち奇と爲すに足らず、若し是れ父母生身ならば、未だ結を斷せざ

【二】 第三問、忍辱は一切を侵奪せらるるも、能く忍ぶの義なり。云何が身體を割截せらるるのみを説くや。

【三】 第四問、一念の瞋心だに生ぜざる者は、是れ變化身なりや、將父母生身なりや。若し變化身なれば奇とするに足らざるも、父母生身は結未だ斷ぜざる人なり。云何ぞ一念の瞋心を生ぜざらんや。

る人なり。云何が能く一念の瞋心を生ぜざらんや。答へて曰く、有人の言はく、煩惱業の因縁の生身なり。是の菩薩は無量劫に於いて、衆生の爲に慈心を修集するが故に、割截せらるると有りて雖も瞋心を生ぜず。慈母の嬰兒を養育し、復た屎尿の身を汗すと雖も、深愛を以ての故に而も瞋を生ぜず、またその無智を愍むが如し。菩薩の衆生に於けるも亦是の如く、未だ聖道を得ざる者は皆小兒の如く、我は菩薩たり、應に慈心を生ずべく、當に父母の如くすべし。衆生は復た惡を我に加ふと雖も、我は應に瞋るべからず。何となれば、衆生は自在ならず、煩惱に使はるればなり。

復次に、菩薩は無量劫より來、常に畢竟空法を修し、害者罵者を見ず、亦善者惡者をも見ず。皆幻の如く夢の如し。諸の瞋恚の者は皆愚癡なり。若し我、彼に報せば彼と異なること無し。

復次に、菩薩は是の念を作す、「我れ瞋處に應じて、而も瞋らざれば、則ち大利を爲す」と。毗梨耶波羅蜜(多)を取るとは、尸羅波羅蜜(多)に住するは多くは是れ出家の人なり。時には在家の者もあり。一切の出家の人は無量の戒律儀を得、四十種の善道を具足し、深く諸法實相に入り、聲聞辟支佛地を過ぐ。是の三種の戒を尸羅波羅蜜(多)と名く。在家の者は無量の戒律儀無し。是の故に具足して、尸羅波羅蜜(多)に住せず。菩薩は是の念を作す、「我れ今世樂を捨てて道に入る、但持戒にのみ住すべからず。持戒は是れ餘の功德の住處なり。若し但住處のみを得て餘の功德を得ざれば、利を得ること甚だ薄し。譬へば、人の寶洲に在りて、但だ水の精珠のみを得れば、則ち利益する所薄きが如

し」と。是の故に、菩薩は五波羅蜜〔多〕を具足せんと欲するが故に、身心に勤めて精進す。身精進とは、法の如く財を致し、以て布施等に用ふるなり。心精進とは、慳貪等の諸の惡心の來りて、六波羅蜜〔多〕を破する者は入ることを得せしめず。此の二種の精進を得已つて、應に是の念を作すべし、「一切の衆生は生死に沈没す、我れ應に拯濟して甘露地に著くべし。聲聞の人は、但一身のみを度するすら、尙懈怠すべからず。何に況んや、菩薩は自度及び一切衆生の爲にして、而も當に懈怠すべけんや。是の事を以ての故に、我れ應に懈怠すべからず。身は疲苦すと雖も、心は應に息むべからず。何となれば、此の大乘法は若運用せざれば、則ち敗壞を爲せはなり」と。禪〔那〕波羅蜜〔多〕を取るとは、菩薩は尸羅波羅蜜〔多〕に住するも、或は未だ無生忍法を得ざるが故に、諸の煩惱の風吹いて願樹を動かし、其の尸羅波羅蜜〔多〕を壊せんと欲す。爾の時、應に禪定の樂を求めて五欲の樂を除却すべし。五欲の樂を除くが故に、戒は清淨なることを得、煩惱未だ斷せずと雖も、已に折伏すべし。亂を生ずること能はず。譬へば、毒蛇も咒術を以ての故に、毒を螫すことを得ざるが如し。禪とは、四禪四無色定・四無量・心等の諸の禪定なり。菩薩は禪心を得て柔軟なりと離も、尸羅波羅蜜〔多〕に安住するが故に、亦聲聞辟支佛地を取らず。是の菩薩は但是の念を作す、「我れ應に禪〔那〕波羅蜜〔多〕を行すべし。小乘涅槃の爲にせず。亦果報の爲にせず。但一切衆生を度せんが爲の故に、諸法實相を説く」と。是の實智は禪定より生ず。是の心は覺觀の爲に動かされず、亦貪欲瞋恚の爲に濁されず。心



を一處に繋げ、清淨柔軟なれば、則ち能く實智を生ず。水は澄靜なれば、照鑒分明なるが如し。菩薩は尸羅波羅蜜〔多〕に住して是の禪を得。禪を得るが故に心清淨に、心清淨なるが故に諸法實相を知る。有爲法は因縁和合より生じて虚誑なり。菩薩は慧眼を以て觀るに、是の有爲法を見ず。實に有爲法に種種の名有り、所謂、作法有爲數法相法若くは有、若くは無なり。有爲を以ての故に無爲を説くべし。有爲相すら尙得べからず、何に況んや、無爲をや。

問うて曰く。(一〇) 有爲法は是れ有相、無爲法は是れ無相なり。今何を以てか有爲相の中に無相を説くや。答へて曰く、無爲に二種有り。(一一) 一には無相寂滅にして、戲論無きと涅槃の如し。二には相待にして、無は有に因りて而して生ず。廟堂の上に馬無ければ能く無心を生ずるが如く、此の無心は是れ諸の煩惱を生ずる因縁なり。云何が是れ無爲法ならん、是の菩薩は此の有無等の法を見ず、但諸法の如法性實際を見るのみ。

問うて曰く、(一二) 汝は先に、有を離れば則ち無も無しと言へり。今云何が如法性實際を見るや。答へて曰く、有爲法の若くは常樂我淨等をば見ず。是は虚誑の法なり。若し無ならば、即ち是の諸法は、實に無生法なることを見る、故に能く有生法を離る。是の無生法は、定んで實相の取るべきもの無く、但だ能く人をして、虚誑の有生法を離れしむるが故に、無生と

【一〇】 第五問、有爲法は有相、無爲法は無相なり、今それ有爲相の中に無相を説く理由如何。

【一一】 二種の無爲、——(一)無相寂滅、(二)相對。

【一二】 第六問、汝は先に有を離れば則ち無も無しと言へり、今云何が如法性實際と見ると言ふや。

名く。若し是の如き智慧を得れば、方便・本願・悲心を以ての故に、二乗の證を取らず。直に阿耨多羅三藐三菩提に至る。是を菩薩は尸羅波羅蜜〔多〕に住して、五波羅蜜〔多〕に住すと名く。

巻の第八十一

六度相攝品第六十八の下を釋す。

釋

須菩提、佛に白して言さく、「云何が菩薩摩訶薩は、屬提波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩初發心より乃ち道場に至るまで、其の中間に於いて、若し一切の衆生來りて瞋恚し、罵詈し、若くは節節に支解するとも、菩薩は忍辱に住して是の念を作す、我れ應に一切衆生に布施すべし。是の衆生に與へずんばあるべからずと。食を須むるには食を與へ、飲を須むるには飲を與へ、乃至

【一】以下忍に他の五波羅蜜多を攝するを明す。

資生、須むる所、盡く皆之に與ふ。是の功德を持つて一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の菩薩は廻向する時、二心を生ぜず。誰か廻向する者ぞ、何處に廻向するやと。是を菩薩の屬提波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取ると爲すと。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、屬提波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩初發心より乃ち道場に至るまで、其の中間に於いて、終に他の命を奪はず、與へざるを取らず、乃至邪見ならず、亦聲聞辟支佛地を食らす。是の功德を持つて一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の菩薩は廻向する時、三種の心生ぜず。誰か阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、何法を用てか廻向し、何處に廻向するやと。是を菩薩の屬提波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取ると爲すと。」世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、屬提波羅蜜(多)に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取るや」と。佛

の言はく、「菩薩は屬提波羅蜜(多)に住し、精進を生じて、是の念を作す、我れ當に一由旬若くは十由旬、百千萬億由旬を往き、一世界を過ぎ、乃至百千萬億の世界を過ぎ、乃至一人を教へて五戒を持せしむべし。何に況んや、須陀洹果乃至阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提を得せしむるをや。是の功德を持つて一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せん」と。是を菩薩の屬提波羅蜜(多)に住して毗梨耶波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、屬提波羅蜜(多)に住して、禪(那)波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は屬提波羅蜜(多)に住し、欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪に入り、乃至第四禪に入る。是の諸禪の中の淨なる心心數法もて皆薩婆若に廻向す。廻向する時、是の菩薩、諸禪及び毗支皆得べからず。是を菩薩の屬提波羅蜜(多)に住して、禪(那)波羅蜜(多)を取ると爲す」と。「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、屬提波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取ると證を作さず。乃至道場に坐して一切種智を得、道場より起つて便ち法輪を轉す。是を菩薩の屬提波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取ると爲す。〔そは〕取らず捨てざればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩は毗梨耶波羅蜜(多)に住し、身心精進にして懈らず、息まず。是の念を作す、我れ必ず應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、得ざるべからず」と。是の菩薩は衆生を利益せんが爲の故に、一由旬若くは百千萬億由旬を往き、若くは一世界を過ぎ、若くは百千萬億世界を過ぎて、毗梨耶波羅蜜(多)の中に住し、若くは一人をして佛道の中、若くは聲聞道の中、若くは辟支佛道の中に入らしむることを得ざるも、或は一人をして十善道を行ぜしむることを得ば、精進して懈らず。法施及び財施を以て具足せしむ、是の功德を持って、衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し

て證を作さず。乃至道場に坐して一切種智を得、道場より起つて便ち法輪を轉す。是を菩薩の屬提波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取ると爲す。〔そは〕取らず捨てざればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩は毗梨耶波羅蜜(多)に住し、身心精進にして懈らず、息まず。是の念を作す、我れ必ず應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、得ざるべからず」と。是の菩薩は衆生を利益せんが爲の故に、一由旬若くは百千萬億由旬を往き、若くは一世界を過ぎ、若くは百千萬億世界を過ぎて、毗梨耶波羅蜜(多)の中に住し、若くは一人をして佛道の中、若くは聲聞道の中、若くは辟支佛道の中に入らしむることを得ざるも、或は一人をして十善道を行ぜしむることを得ば、精進して懈らず。法施及び財施を以て具足せしむ、是の功德を持って、衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し

聲聞辟支佛地に廻向せず。是を菩薩の毗梨耶波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取ると爲す」と。佛の言はく、「菩薩は毗梨耶

波羅蜜(多)に住し、初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、自ら殺生せず、他をして殺さしめず、不殺生の法を讀じ、不

殺生の者を歡喜し讚歎し、乃至自ら邪見を遠離し、他をして邪見を遠離せしめ、不邪見の法を讀じ、不邪見の者を歡喜し讚

歎す。是の菩薩は尸羅波羅蜜(多)に住する因縁もて、欲界色界無色界の福を求めず、聲聞辟支佛地を求めず、是の功徳を持つ

て、衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、三種の心を生ぜず。廻向する者を見ず、廻向する法を見ず、廻向す

る處を見すと。是を菩薩の毗梨耶波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取ると爲す」と。佛の言はく、「菩薩は毗梨耶

波羅蜜(多)に住し、初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、其の中間に於いて、若くは人、若くは非人來りて、節節に支

解するとも、菩薩は是の念を作す、我を割く者は誰ぞ、我を截る者は誰ぞ、我を奪ふ者は誰ぞと。復是の念を作す、我れ大

に善利を得、我れ衆生の爲の故に身を受く、衆生は還た自ら來り取ると。是の時、菩薩は正しく諸法の實相を憶念す。是

の功徳を持つて衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、聲聞辟支佛地に廻向せず。是を菩薩の毗梨耶波羅蜜(多)

に住して、尸羅波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取ると爲す」と。佛の言はく、「菩薩は毗梨耶

波羅蜜(多)に住し、欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪・第二・第三・第四禪に入り、慈悲喜捨に入り、

乃至非有想非無想處に入り、是の禪の無量無色定を持つて果報を受けず、衆生を利益するの處に生じ、六波羅蜜(多)を以て衆

生を成就す。所謂る檀(那)波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)なり。一佛土より一佛土に至りて、諸佛に親近し供養し、善根を

種う。是を菩薩の毗梨耶波羅蜜(多)に住して、禪(那)波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、毗梨耶波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は毗梨耶

波羅蜜(多)に住し、檀(那)波羅蜜(多)の法を見ず、檀(那)波羅蜜(多)の相を見ず、乃至禪(那)波羅蜜(多)の法を見ず、禪

(那)波羅蜜(多)の相を見ず。四念處乃至一切種智も亦法を見ず、亦相を見ず、一切法の非法、非非法を見ず。法の中に於い

て、著する所無く、是の菩薩の所作は、言ふ所の如し。是を菩薩の毗梨耶波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取ると爲

す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「云何が菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言

はく、「菩薩摩訶薩は禪(那)波羅蜜(多)に住して諸欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪・第二・第三・第四

禪に入り、慈悲喜捨、乃至非有想非無想處に入り、禪(那)波羅蜜(多)の中に住して心亂れず。二施を行じて以て衆生に施

す、法施と財施となり。自ら二施を行じ、他をして二施を行ぜしめ、二施の法を讚歎し、二施を行する者を歡喜し讚歎し、

是の功徳を持つて衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、聲聞辟支佛地に向けず。是を菩薩の禪(那)波羅蜜(多)

に住して、檀(那)波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は禪(那)波羅蜜(多)に住して、尸羅波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は禪(那)波

羅蜜(多)に住し、淫欲・瞋恚・愚癡の心を生ぜず、他を惱ます心を生ぜず、但一切智相應の心を修行するのみ。是の功徳を持つ

て、衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、聲聞辟支佛地に向けず。是を菩薩の禪(那)波羅蜜(多)に住して、尸

羅波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)に住して、屬提波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は禪(那)

波羅蜜(多)に住し、淫欲・瞋恚・愚癡の心を生ぜず、他を惱ます心を生ぜず、但一切智相應の心を修行するのみ。是の功徳を持つ

て、衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、聲聞辟支佛地に向けず。是を菩薩の禪(那)波羅蜜(多)に住して、尸

羅波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

波羅蜜(多)に住し、色を觀ること、衆沬の如く、受を觀ること、泡の如く、想を觀ること、野馬の如く、行を觀ること、芭蕉の如く、識を觀ること、幻の如し。是の觀を作す時、五家に堅固の相無きを見て、是の念を作す、我を割く者は誰ぞ、我を截る者は誰ぞ、誰か受け、誰か想ひ、誰か行じ、誰か識り、誰か罵る者ぞ、誰か罵を受くる者ぞ、誰か願志を生ずと。是を菩薩の禪(那)波羅蜜(多)に住して、屬提波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は禪(那)波羅蜜(多)に住し、欲を離れ、惡不善法を雜れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪・第二・第三・第四禪に入り、是の諸禪及び支相を取り、種種の神通を生じ、水を履むと地の如く、地に入る事水の如し。先に説くが如く、天耳は二種の聲、若くは天、若くは人を聞き、他心の若くは攝心、若くは亂心、乃至有上心、無上心なるを知り、種種の宿命を憶すること先に説けるが如し。天眼淨を以て人眼に過ぎて、衆生の乃至業の如く、報を受くるを見ること先に説けるが如し。菩薩は是の五神通に住し、一佛世界より一佛世界に至り、諸佛に親近し、供養し、善根を種ふ、衆生を成就して、佛世界を淨む。是の功德を持つて、衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩の禪(那)波羅蜜(多)に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、禪(那)波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は禪(那)波羅蜜(多)に住し、色を得ず、受想行識を得ず、檀(那)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・屬提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)を得ず、般若波羅蜜(多)を得ず、四念處を得ず、乃至一切種智を得ず、有爲性を得ず、無爲性を得ず。得ざるが故に作さず、作さざるが故に生ぜず、生ぜざるが故に滅せず。何となれば、有佛にも、無佛にも、是の如・法相・法性は常住にして、不生不滅なればなり。常に一心に薩婆若に應じて行す。是を菩薩の禪(那)波羅蜜(多)に住して、般若波羅蜜(多)を取る」と。

〔多〕を取ると爲すと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕に住して、檀那〔波羅蜜〕〔多〕を取るや」と。

佛の言はく、「菩薩は般若波羅蜜〔多〕に住し、内空の内空得べからず、外空の外空得べからず、内外空の内外空得べからず。

空空の空空得べからず、乃至一切法空の一切法空得べからず。菩薩は是の十四空の中に住して、色相の若くは空、若くは不

空なるを得ず。受想行識相の若くは空、若くは不空なるを得ず。四念處の若くは空、若くは不空なるを得ず。乃至阿耨多羅

三藐三菩提の若くは空、若くは不空なるを得ず。有爲性・無爲性の若くは空、若くは不空なるを得ず。是の菩薩摩訶薩は是

の如く般若波羅蜜〔多〕の中に住して、所有る布施をなす。若くは飲食衣服、種種資生の具もて、是の布施の空なることをば

觀す。何等か空なる。施者・受者・財物は空にして、慳貪の心を生ぜしめず。何となれば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜〔多〕を行

じ、初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、妄想分別有ること無く、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ時、慳貪の心

無きが如く、菩薩摩訶薩も亦是の如し。般若波羅蜜〔多〕を行する時、慳貪の心無し。是の菩薩の尊ぶべき所の者は般若波羅

蜜〔多〕なり。是を菩薩の般若波羅蜜〔多〕に住して、檀那〔波羅蜜〕〔多〕を取ると爲すと。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕に住して、尸羅波羅蜜〔多〕を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は般若波羅

蜜〔多〕に住して、聲聞辟支佛心を生ぜず。何となれば是の菩薩は聲聞・辟支佛地得べからず、聲聞辟支佛に趣向する心も亦

得べからざればなり。是の菩薩摩訶薩は初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、其の中間に於いて、自ら殺生せず、他を

して殺さしめず、不殺の法を誹じ、不殺の者を歡喜し讚歎し、乃至自ら邪見ならず、他をして邪見ならしめず、不邪見の法

を誹じ、不邪見の者を歡喜し讚歎し、是の持戒の因縁を以て、法の若くは聲聞、若くは辟支佛として取るべき無し、何に況

んや、餘法をや。是を菩薩の般若波羅蜜〔多〕に住して、尸羅波羅蜜〔多〕を取ると爲すと。



「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に住して、屬提波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は般若波羅蜜(多)に住して、隨順法忍を生じ、是の念を作す、此の法中には、法の若くは起り、若くは滅し、若くは生じ、若くは死し、若くは罵詈を受け、若くは惡口を受け、若くは割き、若くは截り、若くは破し、若くは縛し、若くは打ち、若くは殺すもの有ること無しと。是の菩薩は初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、若し一切衆生來りて、罵詈し惡口し、刀杖瓦石もて割截し傷害するも、心動ぜずして是の念を作す、甚だ怪しむべし。此の法中に、法の罵詈・惡口・割截・傷害を受くる者有ること無く、而も衆生は諸の苦惱を受くと。是を菩薩の般若波羅蜜(多)に住して、屬提波羅蜜(多)を取る」と爲す。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は般若波羅蜜(多)に住して、衆生の爲に法を説き、檀(那)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を行ぜしめ、教へて四念處乃至八聖道分を行ぜしめ、須陀洹果・斯陀含果・阿耶舍果・阿羅漢果・辟支佛道を得せしめ、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ、有爲性の中に住せず、無爲性の中に住せず。是を菩薩の般若波羅蜜(多)に住して、毗梨耶波羅蜜(多)を取ると爲す」と。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)に住して、禪(那)波羅蜜(多)を取るや」と。佛の言はく、「菩薩は般若波羅蜜(多)に住して、諸佛の三昧を除きて、餘の一切の三昧に入り、若くは聲聞三昧、若くは辟支佛三昧、若くは菩薩三昧に入り、皆行じ皆入る。是の菩薩は諸の三昧に住し、八背捨に逆順出入す。何等か八となす。内色相有りて外色を觀する、是れ初背捨なり。内色相無く、外色を觀するは二背捨なり。淨背捨身に證を作すは三背捨なり。一切の色相を過ぎ、有對相を滅し、種種相を念ぜざるが故に、無量虛空處に入るは四背捨なり。一切の虛空處を過ぎて、無邊識處に入るは五背捨なり。



ちて散心の中に住し、散心の中より起ちて第二禪に入り、第二禪の中より起ちて散心の中に住し、散心の中より起ちて初禪に入り、初禪の中より起ちて散心の中に住するなり。是の菩薩摩訶薩は超越三昧に住して、諸法の等相を得。是を菩薩の觀若波羅蜜(多)に住して、禪(那)波羅蜜(多)を取ると爲すしと。

論

問うて曰く、(三)何を以てか但一の波羅蜜(多)のみを主と爲すや。答へて曰く、行の因縁の次第は應に耐るべし。菩薩に二種あり、在家と出家なり。在家の菩薩は福德の因縁の故に大に富む。大に富むが故に、佛道の因縁を求めて諸の波羅蜜(多)を行するに、宜しく先づ布施を行すべし。何となれば、既に財物有り、又罪福を知り、兼ねて慈悲心を衆生に有するが故に、宜しく先づ布施を行じ、次第に因縁に随つて諸の波羅蜜(多)を行すべし。出家の菩薩は財無きを以ての故に、次第に宜しく持戒・忍辱・禪定すべし。宜しき所の故に、名けて主と爲す。財施を除き、餘の波羅蜜(多)は皆出家人の行すべき所なり。菩薩は屢提波羅蜜(多)を主と爲して是の願を作さく、「若し人、來つて身體を割截すとも、應に瞋心を生ずべからず。我は今菩薩道を行す、應に諸の波羅蜜(多)を具足すべし」と、諸の波羅蜜(多)の中に檀(那)波羅蜜(多)は最も初に在り。檀(那)の中に於て重惜する所の者は、身に過ぎたるは無し。能く人に施し、惜まず、瞋らざるを以て、能く忍波羅蜜(多)を具足し、檀(那)を攝取す。菩薩は忍辱の中に住して衆生に布施し、衣食等の諸物を盡く給與す。受者、菩薩に逆らひ

- 【一】 第一問、何故に但一の波羅蜜多のみを主となすや。
- 【二】 三本共に割截を截割に作る。

罵り打害し、其の施忍を破すれば、菩薩は是の念を作さく、「我ル應に虚誑身の爲の故に波羅蜜〔多〕道を毀るべからず、我れ應に布施すべし、應に惡心を生ずべからず」と。小惡の因縁を以ての故に而

も廢退を生ぜず。是の菩薩は、命未だ盡きざる間に施心を増益し、若し命終の時よ、二波羅蜜〔多〕の力故に即ち好處に生じ、續いて布施を行す。尸羅波羅蜜〔多〕を取るとは、「次に説くが如し。」

問うて曰く、忍辱に住する時、惡を爲さざるは即ち是れ戒なり。何を以ての故に、更に忍に住して戒波羅蜜〔多〕を取り、應當に戒に住して忍を攝すべしと説くや。答へて曰く、此の中には相を説くも

次第相生を説かず。和合すと雖も而も各各相有り。若し次第の法よ、應に戒を先に、忍を後にすべし。戒を「他命を奪はず」と名け、忍を「自命を惜

まず」と名く。是の故に、忍辱の中に於て別に戒相を説くなり。

復次に、忍は自ら其の心を攝して曠恚を起さざるに名く。持戒に二種有り、一には衆生を惱まざらず、

二には自ら禪定を生ずる根本と爲すが故なり。有る菩薩は忍辱を行じ、未だ戒法を受持せず、但罪を畏るを以ての故に忍辱し、未だ深く衆生を憐愍すること能はず。是の人は或は師に従つて聞き、或

は自ら思惟す、「持戒は是れ佛道の因縁にして、衆生を憐れず、我れ今已に能く忍辱すれば、則ち此の事を行じ易し」と。是を忍辱を説いて能く尸羅波羅蜜〔多〕を取ると名く。

復次に、忍辱は是れ心數法にして、持戒は是れ色法なり。持戒は心に生じ口に説き、受持するに

【四】 第二問、忍辱に住して戒を取り、當に戒に住して忍を攝すべしと説く理由如何。  
【五】 忍辱と持戒との差異。

名け、忍辱は但是れ心に生ずるのみにして、受持の法には非ず。復次に、身口の清淨なるを持戒と名け、意の清淨なるを忍辱と名く。

問うて曰く、禪智波羅蜜(多)も亦是れ心清淨の法なり。何を以てか但忍辱のみを説くや。答へて曰く、禪智力は大なるが故に説かず。持戒の時は心未だ清淨なること能はず、須らく忍辱して心を守るべし、故に此の經の中に自ら因縁を説く。有菩薩は大功德も智慧利根なり、現在の佛の所に於いて發心し、諸の波羅蜜(多)を行す。是の故に、世世に乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまでを増益し、惡處に墮せず。是の菩薩の爲の故に説く。初發心より乃ち道場に坐するに至るまで、瞋心を生せず、衆生の命を奪はず、亦二乘に著せず、皆是の二波羅蜜(多)の功德の故に、三種の心を離れて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。三心とは、人無く、法無く、廻向する處無うして、我心顛倒心有ること無きなり。

【六】 第三問、禪智、忍辱共に心清淨の法なり、今何故に忍辱のみを説くや。

毗梨耶波羅蜜(多)を取るとは、若くは自ら功德を集め、若くは衆生を度し、發心して懈らず、乃ち其の事を成辦するに至るまで、若し道を遮ざる因縁有るも心没せず退かず、能く衆苦を堪受し、久遠の勤苦を以て難と爲さざるなり。經の中に、「是の菩薩は、乃至千萬由旬を過ぐるも、乃至一人をして實法に入れ、涅槃を得せしむることを得ざるも、是の時、心亦愁ふること能はず。若し一人をして五戒等を持せしむることを得るも、爾の時、心歡喜して是の念を作さず、我は此の無量の國土を過

ぎ、正しく此の一人を得、以て愁苦と爲すと。何となれば、一人の相は即ち是れ一切人の相、一切人の相は是れ一人の相にして、是の諸法の相は不二なればなり」と説くが如し。

禪〔那〕波羅蜜〔多〕を取るとは、是の菩薩は忍辱の力の故に其の心調柔なり、心調柔なるが故に禪定を得易く、禪定の中に於いて、慈悲等の諸の清淨なる心心數法を得、皆是の著せざる心を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり。

般若波羅蜜〔多〕を取るとは、菩薩は衆生忍の中に住し、一切衆生の惡事を加ふるを忍び、大慈悲を行す。是の故に大福德を得。大福德を得るが故に心柔軟に、心柔軟なるが故に、法忍、所謂一切畢竟無生を得易し。是の法忍の中に住して一切法は空相・離相・無盡・寂滅相にして涅槃の相の如しと觀じ、爾の時、還つて衆生忍を増長す。是の如く、畢竟空中に誰か罵る者有り、誰か害する者有らん。爾の時、二忍を具足するが故に三事を見ず。〔三事とは〕忍法・忍者・忍處なり。是の如く一切法を戲論せざるが故に、能く一切法は空寂の滅相にして涅槃の如しと見、本願もて佛道を求む。是の畢竟空法に著せざるが故に、乃至未だ道場に坐せず、實際を證せざるも、道場に坐し已りて、具に佛法を得。佛道を得て法輪を轉じ、意に隨つて衆生を利益するは、皆是れ般若波羅蜜〔多〕の力なり。

毗梨耶波羅蜜〔多〕に住して檀〔那〕波羅蜜〔多〕を取るとは、菩薩は初に精進門を用ゐて諸の波羅蜜〔多〕の中に入り、勤めて五波羅蜜〔多〕を行じ、身心に精進にして休まず息まず、精進して更に異體無

し。是の精進の中に住して、阿鼻泥犁の苦を恐れず、何に況んや、餘の苦をや。菩薩は亦一切法の畢竟空を知り、畢竟空より出づる慈悲心を以ての故に、還つて善業を起し、涅槃を取らず、是れ精進の力なり。菩薩は精進の中に住して、應に是の念を作すべし、「我は久久しうして必ず應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、應に得ざるべからず」と。是の人は一由旬より乃至百千由旬を過ぎ、財法の二事を以て衆生に施與し、乃至百千萬億國土を過ぎ、正しく一人をして三乘に入らしむるを得ざるも、菩薩は心に亦悔いす没せず、是の念を作さず、「我れ爾所の佛土に而も一人の度すべきことを得ず、云何が一切の人を度し得べけんや」と。百千の國土を過ぎ、或は一人をして十善を行せしむべきことを得るも、三乘に入るに中らず。一人の實相を得ざるを以ての故に心に輕悔を懷かず。復是の念を作さく、「我れ今並に此の人をして十善道を行せしめ、漸やく三乘を以て而して之を度脱す」と。十善を教へ已つて、復財法二施を以て衆生を満足し、是の功德を持して阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、身心に精進して無數の國を過ぎ、衆生の爲に說法す。

問うて曰く、一切の布施は皆精進を以てす。何を以てか但此の二施(財施及び法施)は精進より生ずと言ふや。答へて曰く、一切の施は皆精進に由りて生ずと雖も、此は多く精進力を以て生ず。故に經に、「百千の國土を過ぎ、二施を以て衆生を満足す」と説くが如し。

【七】第四問、何が故に財法の二施のみは精進より生ずと言ふや。

尸羅波羅蜜(多)を取るとは、菩薩は具に十善道を行す。是を尸羅波羅蜜(多)と名け、或は忍辱等の波羅蜜(多)より生ず。若し菩薩は初發心より乃至道場に坐するまで、十不善道を捨て、四十種の善道を行じて休まず息まざる、是を精進波羅蜜(多)の力と名く。有る人は一種すら行ずると能はず、何に況んや、四種をや。亦尸羅波羅蜜(多)を以ての故に、三界に生ぜず、二乗を受けず。衆生は懈怠煩惱心を以ての故に、三界の中に生じ、生死を厭惡するが故に、佛道を捨てて小乗を取る。此は皆是れ懈怠の相なり。是の故に、是の菩薩は三界を貪らず、二乗を證せずと説く。

尸羅波羅蜜(多)を取るとは、菩薩は初發心より乃至道場に坐するまで、

【八】 他本に實の下に相の字あり。

若くは人、若くは非人來りて身體を割截して持ち去らんに、爾の時、菩薩は我顛倒・善業を破して畢竟空なるが故に、是の念を作さく、「此の中には割者、截者有ること無し、是の事は皆是れ凡夫の虚誑の邪見なり。我は大利を得。我は諸法の實を知る時、能く涅槃に入る。但衆生を憐愍するが爲の故に身を愛く。衆生は自ら來つて取り去るとも、我は應に惜むべからず」と。爾の時、深く諸法實相に入るに、此の中に定相有ること無く、衆生は自ら怖畏を生ず。此の功德を以て、衆生と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の中に、若し罵詈打害有るも能く忍ぶは、是を忍と爲し、歡喜して退かざるは是を精進と爲す。是の二法は、或は精進より忍辱を生じ、或は忍辱より精進を生ず。今は精進より忍辱を生ず。



禪(ぜん)那(な)波(は)羅(ら)蜜(みつ)多(た)を取るとは、有る人は自然に禪定を得ること劫盡の時  
 の如く、或は退いて得、生れながら得。或は上地に生れ、下地に得ること  
 有り。是の如く禪定を得と雖も、精進より生ぜず、大に布施に因りて悭貪  
 等の五蓋を破して、即ち禪定を得ること有り、或は有る人は持戒清淨に  
 して忍辱を修集するが故に、小に因りて心を厭ひ、便ち禪定を得、或は有  
 る人は大智慧力の故に、欲界の無常虚誑不淨なることを知りて、即ち禪定  
 を得、禪定も虚誑なりと雖も、猶欲界に勝る。是の如く精進有りと雖も、  
 更に餘法に因りて禪を得るが故に、精進より生ずと名けず。有る人は五法  
 に因りて生ずと爲さず。但日夜に精進し、經行坐禪し、常に心と闘ひ、信  
 等の五力を以て、深く五蓋を御す。若し心馳散すれば、便ち攝して還ら  
 しめ、賊と闘ひて、乃ち汗を流すに至るが如し。是の如き等の人の禪定を  
 得ることは精進より生ず。或は有る菩薩は、鈍根にして宿罪に覆はれ、深  
 く世樂に著し、馳逸にして制し難し。是の如き人は、深く精進を加ふれば  
 爾(の)時(とき)乃(すなは)ち定(ぢやう)を得。譬(たと)へば、福德有る人は安坐し、無事にして福祿自  
 ら至り、薄福の人は勤めて方便を設け、鬪戦して乃ち得るが如し。有福の

【九】 信等の五力とは一に信力、二に精進力、三に念力、四に定力、五に慧力の五根にして三十七道品の一たり。五根増長して五障を退治す。

【一〇】 五蓋とは一に貪慾蓋、五欲の境に執著し以て心性を蓋ふもの、二に瞋恚蓋、逆情の境に於て忿怒を懷き以て心性を蓋ふもの、三に睡眠蓋、心昏く身重くして其用を爲さず以て心性を蓋ふもの、四に掉悔蓋、心の躁動あるを掉と云ひ、所作の事に於て心に憂惱するを悔と云ふ、以て心性を蓋ふもの、五に疑法、法に於て猶豫して決斷なく、以て心性を蓋ふものなり。以上の五法ありて能く行者の心性を蓋覆して善法を生ぜざらしむるなり。

人の自然に得る者を名けて福德と爲し、自ら方便を至し、戰闘して得るものを名けて精進して得と爲す。是の如く、一切處に精進有りと雖も、多き處に名を受く。

般若波羅蜜〔多〕を取るとは、菩薩は精進力の故に、禪〔那〕波羅蜜〔多〕を得、禪〔那〕波羅蜜〔多〕を生ずるが故に、菩薩の神通力を生ず。二事の因縁の故に、神通力を以て遍く十方に至り、未だ功德を具足せざるには具足せしめんと欲し、又一切衆生を教化せんと欲す。四波羅蜜〔多〕を生ずる所の般若を除き、餘の智慧は多く精進より生ずるが故に、精進に住するを主と爲して智慧を取る。般若波羅蜜〔多〕とは二種有り。一には諸法實相を觀じ、一切法の中に於て法相を見ず。非法相を見ず、二には所説の如く行する人は懈怠有るが故に、心に二事を行すること能はず、精進力の故に、能く具足して二事を行す。

禪〔那〕波羅蜜〔多〕に住するを主と爲して五波羅蜜〔多〕を取るとは、菩薩は禪〔那〕波羅蜜〔多〕の中に住し、心調柔にして動せず、能く諸法實相を觀察す。譬へば、密室に燈を燃やせば、光照りて明了なるが如し。是を禪〔那〕波羅蜜〔多〕に住して智慧を生ずと名く。爾の時、一切衆生を惱まさず、又憐愍を加ふ、是を甚深と名く。清淨なる持戒忍辱あり、神通力を以て財物を變化して布施を具足し、又化人を遣はして一切の爲に説法す。又菩薩は禪より起ち、清淨柔軟の心を以て衆生の爲に説法す。是を布施と名く。禪定力に因りて神通を起し、周く十方に至りて一切を導利し、而も懈らず、是を精進

と名く。又禪定に因りて、四波羅蜜〔多〕をして増益せしむ。是を禪定精進を生ずと名く。餘の義は經に廣く説くが如し。般若波羅蜜〔多〕に住するを主と爲して、五波羅蜜〔多〕を取るとは、經中に、佛自ら廣く説きたまへるが如し。

問うて曰く、佛は廣く説きたまふと雖も、其の中に猶解せざる者有り、今當に問ふべし。十八空中に何を以ての故に、四空を説きたまはざりしや。答へて曰く、第十四を一切法空と名く。一切と言ふは、法として盡くさざること無きなり。是の故に説かず。

問うて曰く、若し爾らば、但應に十四を説くべし、何を以てか十八有りや。答へて曰く、(一)彼の中には一切法相の空を分別す。一切空は皆總じて十八空に入る。此中には行者の爲に説く。行者は或は一空、二空、乃至十四空を言す。「そは」本著する所の多少に隨へばなり。深く邪見に著する者と有る者には餘の四空を以てす。何となれば、有法無法等は是外道の邪見にして、是の菩薩は慈悲を修し、心柔軟なるが故に、是の如き有無の見を生ぜざればなり。(二)復次に菩薩は十四空の熏心を以ての故に、有無の中に於て了了にして錯らす。是の故に後の四空を説かず。問うて曰く、(三)何を以ての故に、菩薩は諸佛の如く貪著心無しと説くや。此の説は何の義有りや。

【一】第五問、十八空中に何が故に四空を説きたまはざりしや。

【二】第六問、是の如く、第十四を一切法空と名け、已に一切なるが故に説かずとせば、強ひて十八空を説き給ひし理由如何。

【三】第七問、何故に菩薩は諸佛の如く貪著心なしと説くや又何の義ありや。

答へて曰く、佛は諸の煩惱の習を斷じて起らず、菩薩は般若の力を以て、制して起らざらしむ。今般若の力を讚歎せんと欲するが故に、結使未だ斷せざるも、佛の斷と異なること無しとす。人をして般若の力を貴ぶことを知らしむるが故に、發心して是の念を作す、「是の中には、法の若くは生じ、若くは滅し、若くは罵詈を受け、割截する等有ること無し」と。

問うて曰く、(四) 此は即ち是れ無生忍なり。何を以てか柔順忍と言ふや。答へて曰く、此の中に五衆和合せる假名の衆生を破して、法を破すること能はざることを説く。是の故に、經に、生者滅者無く、罵詈を受くる者無しと説く。又是の人は我を破し、法空を觀すと雖も、未だ能く深く入らず、「そは」猶法愛に著すること有ればなり。無生忍法を得て、而して衆生を慈愍すること有るが如く、柔順忍の中にも亦法空を念すること有り。是の二法中の一處は、衆生に於て「得べからざるが故に衆生忍と名け、二は法に於いて得べからざるが故に、名けて法忍と爲す。法忍は衆生忍を妨げず、衆生忍は法忍を妨げず、但深淺を以て別と爲すのみなり。

問うて曰く、(五) 超越三昧は二を超越ることを得ず、又散心より而も滅盡定に入らず、此の中に何を以てか是の如く説くや。答へて曰く、大小乗の法は異なる、二を越えずとは小乘法中の説なり、菩薩は無量の福德智慧もて深く禪定力に入るが故に、能く意に隨つて超越す。人の力士は蹕躑すること丈

【四】 第八問、四空は是れ無生忍なり、何故に柔順忍と言ふや。

【五】 第九問、超越三昧は二を超越る能はず又散心より滅盡定に入らずと説く理由如何。

數に過ぎず。若し天の力士を以てすれば、之を蹕ゆると廣遠なるも難きと無きが如し。又阿毗曇の中  
には皆凡夫人聲聞人の爲に説く。菩薩は則ち然らず、智慧力の故に師子奮迅三昧に入り、能く諸法に  
於て自在を得、般若力の故に、能く意に隨つて自在に諸法を説き、應に衆法に適すべし。復有菩薩は  
多く般若波羅蜜「多」を行じ、諸法實相を知り、不動法中に安住し、一切世間の天及び人、能く難詰し  
て傾動せしむる者無し。若し財物を得れば二種の衆生に布施す、若くは佛に施し、若くは衆生に施  
す。衆生空なるを以ての故に、其の心は平等にして、諸佛に貴著せず、衆生を輕賤せず。若し貧賤の  
人に施して輕賤するが故に福少く、若し諸佛に施すも、貪著するが故に福具足せず。若し金銀寶物を  
以てすると、及び草木を施すと、法空を以ての故に、亦等しうして異なる  
と無し。諸の分別、一異等の諸の妄想を斷じ、不二の法門に入りて布  
施するは、是を財施と名く。法施も亦是の如く、有智にして能く法を受くる者を貧貴せず、無智にし  
て法を解せざる者を輕んぜず。何となれば、佛法は無量にして説くべからず、不可思議なればなり。  
若し布施等の淺法を説き、及び十二因縁の空・無相・無作を説かんに、空・無相・無作等の諸の甚深の法は  
等しうして異なること無し。何となれば、是の法は皆寂滅不戲論の中に入ればなり。是等の如きを、  
般若、布施を生ずと名く。

復次に、是の菩薩は十方三世の諸佛、及び弟子に於いて修する所の三種の功德を隨喜して、皆一切

【六】二の下に三本共に入の字あり。

衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。智慧力の故に施さざる所無く、能く衆生に福徳の分を與ふ。復有菩薩は、若し布施の時、種種の好心を生じ、慳貪の根本を拔出して布施を行す。慈心もて施すが故に諸の瞋恚を滅し、受者の樂を得るを見て歡喜するが故に嫉妬心を滅し、恭敬心もて受者に施すが故に憍慢を破し、了了に布施の果報を信知するが故に疑及び無明を破し、與者・受者の定實を得ざるが故に有無等の諸の邪見を破し、受者を觀ること、佛の物を觀たまふが如く、阿耨多羅三藐三菩提の相の己身を觀するに、本より已來畢竟空なり。若し是の如き布施は虚誑ならざるが故に、直に阿耨多羅三藐三菩提に至る。是等の如き相を般若波羅蜜〔多〕、檀〔那〕波羅蜜〔多〕を生ずと名く。

復次に、菩薩は深く清淨の般若波羅蜜〔多〕に入るが故に、衆生無きに非ず、而して能く十善等の諸戒を受持す。殺生の顛倒を破せんと欲するが故に不殺生戒有り、實相の中に有るに非ず。

復次に、人、百由旬の衆生の爲の故に戒を持して殺さざる〔者〕有り、一閻浮提の衆生の爲の故に戒を持して殺さざる者有り。是等の如きは、有量の衆生の爲の故に戒を持するなり。或は一日戒を持する有り。或は五戒十戒を受く。是等の如きは有量の持戒なり。菩薩は般若を行じ、無量國土の一切衆生の爲の故に戒を持し、一世二世の爲にせず。如如・虚空・法性・實際に住し、畢竟空相を以ての故に是の戒相を取らず、破戒を憎まず、持戒に著せず。是を菩薩は般若波羅蜜〔多〕もて、具足無分別戒を生ずと名く。

忍辱に二種あり、一には衆生忍、二には衆忍なり。菩薩は深く般若波羅蜜(多)に入るが故に、諸の法忍を得、能く無量の佛法を信受し、心には是非分別無し。是の如き相を般若波羅蜜(多)の中に忍辱を生ずと名く。復有菩薩は勤め精進して五波羅蜜(多)を具足するが故に般若波羅蜜(多)を行じ、諸法實相を得、三業を滅し、身に所作無く、口に所説無く、心に所念無し。人の夢中に大海に没在し、動かすに手足を以てして、渡らんことを求め、覺め已れば、夢心即ち息むが如し。是を般若波羅蜜(多)の中より第一精進を生ずと名く。持心經の中に、我は是の精進を得るが故に、然燈佛に於いて記莂を受くることを得と説くが如し。佛の言はく、智慧を離れ、禪定無しと雖も、多く智慧力を用ゐて禪定を得と。是の故に、智慧より禪定を生ず。佛、辟支佛經の中に、一人の國王有り、二の牡牛の姪欲の故に鬪死するを見て、自ら覺悟す、我れ財色を以ての故に、他國を征伐するは、此と何ぞ異ならんと説きたまへるが如し。即ち五欲を捨離し、禪定を得て辟支佛と成るなり。菩薩も亦少多の因縁もて、五欲を厭患し、五欲の樂と禪樂とを籌量するに、相去ること懸に遠し。我れ豈五欲の少樂を以て、而も禪定の樂を捨つべけんや。禪定の樂とは、福德清淨にして遍身に樂を受く。是等の如く、智慧を分別するに從つて禪定を生ず。禪定の義は經の中に説くが如し。

復次に、是の菩薩は無量劫に於いて佛道の爲の故に善根を種ゑ、欲を離るるが故に諸の禪定に於いて自在を得、深く如法性實際に入り、精進方便慈悲力の故に甚深の法より出でて還つて功德を修す。

是の人は其の心を勝伏し、一念の中に能く六波羅蜜〔多〕を行す。所謂菩薩は布施の時、法の如く財物を捨つ、是を檀〔那〕波羅蜜〔多〕と爲す。十善道中に安住し、布施して二乘に向はず、是を尸羅波羅蜜〔多〕と名く。若し慳貪等の諸の煩惱、及び魔、人民來るも心を動かすこと能はず、是を羼提波羅蜜〔多〕と名く。布施の時、身心に精進して休まず息めず、是を精進波羅蜜〔多〕と名く。心を攝し、布施に在りて散亂せしめず、疑無く、悔無く、正しく阿耨多羅三藐三菩提に向ふ、是を禪〔那〕波羅蜜〔多〕と名く。布施する時、與者受者財物は得べからず。邪見の如く相を取り、妄に一の定相を見ず。諸佛賢聖の物の相、受者〔の相〕、與者の相、及び廻向處を觀るが如く、法施の時も亦是の如し。是を般若波羅蜜〔多〕と名く。菩薩は盡く諸戒善心を受け、正語、正業、三種の律儀なる戒律儀、禪定律儀、無漏律儀を起し、是の戒中に住して、一切衆生に無畏を施す、是を檀〔那〕波羅蜜〔多〕と名く。姪欲瞋恚等の諸の煩惱、戒を破せんと欲するに、能く制し能く忍ぶ。

復次に、人來りて罵詈損害するも、破戒を畏るるが故に忍んで報いず。又復飢渴寒熱〔等〕の諸苦に逼らるるも、持戒の爲の故に、是等の如きを悉く皆能く忍ぶ、是を羼提波羅蜜〔多〕と名く。諸戒の相の輕重、有殘無殘、因縁の本末、或は遮、或は聽等を分別す。是の心は精進にして、能く戒法の如く行じ、犯すと有れば意を下して懺除す、是を身精進と名く、是の持戒精進を以て天王人王を求めず、乃至小乘の涅槃を求めず、但戒の爲にす。是れ菩薩道の住處たるが故に戒を持し、能く五波羅蜜〔多〕



を修集す、是を精進波羅蜜〔多〕と名く。菩薩は若し持戒清淨なれば禪定を離れず。何となれば、持戒清淨なれば、諸の煩惱の力を破し、心則ち調伏すればなり。譬へば老〔者〕の〔壯〕力を奪へば死來りて壞れ易きが如く、行者は禪定を得ざるが故に五欲を念じ、五蓋を生じ、持戒を侵害す。是の故に戒を堅牢にせんが爲の故に、禪定の樂を求む。禪定とは、諸の心心數法を攝して、一處に和合するを名けて禪定と爲す。行者は能く惡身口、破戒の業を除き、次に三の惡覺觀を除き、然る後に三の細覺觀、所謂國土、親里、不死を除くなり。是の如く除き已つて即ち禪定を得、是を禪〔那〕波羅蜜〔多〕と名く。持戒の時、戒の能く是の如く、今世後世の功德果報を生ずることを知る、是を智慧と名く。

復次に、戒持・戒破・戒者の三事は得べからず、是を智慧と名く。人に三種有り、下人は戒を破し、中人は戒に著し、上人は戒に著せず。是の菩薩は思惟す、若し我れ破戒及び破戒の者を憎み、戒及び持戒の者を愛し、而して愛と恚とを生ぜば、還つて罪業の因縁を受く。譬へば、象の浴洗し已り、還つて土を以て塗るが如し。是の故に應に憎愛を生ずべからず。

復次に、一切法は皆因縁に屬し、自在なる者なく、諸の善法は皆惡に因つて生ず。若し惡に因つて生ぜば、云何が著すべき、惡は是れ善の因なり、云何が憎むべきと。是の如く思惟して直に諸法實相に入り、持戒、破戒を觀るに皆因縁より生ず。因縁より生ずるが故に自性無く、自性無きが故に畢竟空なり。畢竟空なるが故に著せず、是を般若波羅蜜〔多〕と名く。菩薩は忍辱を行する時、是の念を作

す、「若し衆生來りて我が身を割截せば、我は即ち布施し、衆生をして劫盜の罪を得せしめざらん」と。  
 或は忍を修する時、忍に因りて法を説き、種種の因縁もて世間の涅槃を分別し、衆生をして六波羅蜜  
 [多]の中に住して、衆生忍を得せしめ、能く身を以て施す、是を財施と名く。法忍に入ることを得、  
 深く諸法に入り、衆生の爲に説く、是を法施と爲す。是の二施は二忍より生ず、故に檀[那]波羅蜜  
 [多]と名く。菩薩は忍辱を行ずる時、生命を惜まずして忍辱を爲す、何に況んや、衆生を惱まして戒を  
 破せんをや。是の故に忍に因りて戒を持し、一切衆生を憐愍し、之を度脱せんと欲して戒を持するを、  
 一切諸の善法の安立し住する處と名け、是を尸羅波羅蜜[多]と名く。菩薩は忍中に於いて、身心に  
 勤めて四波羅蜜[多]を行ず、是を精進と名く。忍中に於いて、心調柔にして五欲に著せず、心を一處  
 に攝す。我は一切衆生に於いて、能く忍ぶと地の如し、是を禪[那]波羅蜜[多]と名く。菩薩は忍辱の  
 果報、相好、嚴身等を知る。菩薩は忍を修して能く諸の煩惱を障げ、能く衆生の過惡を忍び、能く一  
 切の深法を忍受し、後諸法實相を得。是の時、行者は心中に是の無生法忍を得、即ち是れ般若波羅蜜  
 [多]なり。菩薩は精進に住して諸の波羅蜜[多]を生ず。精進は是れ一切善の根本にして、精進を離れ  
 ては、則ち善法の得べきもの無しと雖も、但精進力は多く五波羅蜜[多]を生ずるを以ての故に、精進  
 生ずと名く。菩薩は常に三種の施を行じ、未だ會つて財施・法施・無畏施を捨離せず、是を檀[那]波羅  
 蜜[多]と名く。菩薩は善の身口の正業もて直に佛道に向ひ二乗を食らず、是を尸羅波羅蜜[多]と名く。

勤めて精進を行じ、人有り來りて、菩薩道を毀壞すとも、能く忍んで動せず、是を屬提波羅蜜(多)と名く。菩薩は種種の餘法を行ずと雖も、心散亂せず、一心に薩婆若を念す、是を禪(那)波羅蜜(多)と名く。二種の精進有り、一には動相にして、身心勤め行ず、二には一切の戲論を滅するが故に身心動せざるなり。菩薩は動精進を勤行すと雖も、亦不動精進をも離れず。不動精進は般若波羅蜜(多)を離れず、菩薩は禪定に入り、慈悲心の力の故に、一切衆生に無畏を施し、或は禪定力の故に、實物を變化し、須彌山の如く一切を充滿し、衆の華香等を雨して諸佛を供養したてまつり、及び貧窮の衆生に衣服飲食等を施す。或は禪定中に入り、十方衆生の爲に說法す、是を檀(那)波羅蜜(多)と名く。此の中に、禪定に隨つて身口の善業を行じ、及び聲聞辟支佛身を離る、是を尸羅波羅蜜(多)と名く。菩薩は禪定に入り、清淨柔軟の樂を得、能く禪味に著せず。禪定力の故に、能く深く諸法空に入り、能く忍んで是の法を受け、心に疑悔せず、是を屬提波羅蜜(多)と名く。菩薩は忍辱の時、諸の三昧を起さんと欲す。超越三昧、師子奮迅三昧等の無量の諸の菩薩の三昧を休まず息めず、是を精進波羅蜜(多)と名く。菩薩は禪定力の故に、心清淨にして動せず、能く諸法實相に入る。諸法實相は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。菩薩は般若波羅蜜(多)を行じ、能く三種の布施の相を阿耨多羅三藐三菩提の如しと觀じ、諸の非有、非無等の戲論を滅す。是を無量無盡般若中の檀(那)波羅蜜(多)と名く。身口の業は般若に隨つて行じ、般若を得るが故に、能く牢固清淨に戒を持す、是を尸羅波羅蜜(多)は般若の心

中に住すと名く、衆生忍、法忍の轉た深く清淨なる、是を屬提波羅蜜〔多〕の般若を行すと名く。菩薩は身心清淨にして不動精進を得、動精進を幻の如く夢の如しと觀ず。不動精進を得るが故に涅槃に入らず。是を精進波羅蜜〔多〕と名く。菩薩は是の無礙般若を行するが故に、常に禪定に入ると雖も、般若波羅蜜〔多〕の力を得るが故に、禪より起たずして而も能く衆生を度す、是を禪〔那〕波羅蜜〔多〕と名く。是等の如き菩薩は利智慧の故に、一心中に一時に能く六波羅蜜〔多〕を具足す。

【一七】 三本共具の下に足の字なし。

# 卷の第八十二

## 方便品第六十九の上を釋す。



佛の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩摩訶薩の、是の如き方便力を成就せる者は、發意してより已來、幾の時來るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の菩薩摩訶薩の、能く方便力を成就せる者は發意より已來、無量億阿僧祇劫なり」と。須菩提言さく、「是の菩薩摩訶薩、是の如き方便力を成就せる者は、幾の佛をか供養することを爲すや」と。佛の言はく、「是の菩薩の方便力を成就せる者は、如恆河沙等の諸佛を供養す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩の、是の如き方便力を得る者は、何等の善根を種うるや」と。佛の言はく、「菩薩の是の如き方便力を成就する者は、初發意より已來、檀(那)波羅蜜(多)に於いて具足せざること無く、尸羅波羅蜜(多)・戒波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)に於いて具足せざること無し」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の、是の如き方便力を具足せる者は甚だ稀有なり」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩の、是の如き方便力を成就せる者は甚だ稀有なり。須菩提よ、譬へば、日月の通行して四天下を照らし、益する所有ること多きか如し。般若波羅蜜(多)も亦是の如く、五波羅蜜(多)を照らして、益する所有ること多し。須菩提よ、譬へば、轉輪聖王の如し。若し輪寶無ければ、名けて轉輪聖王と爲すことを得ず。輪寶を成就

【一】 他本には「大方便品」に作る。此の品は一波羅蜜多能く諸波羅蜜多を具足する看有の大方便を體得するにば、幾時の修行を經歷するかを明す。

するが故に、轉輪聖王と名くることを得。五波羅蜜(多)も亦是の如く、若し般若波羅蜜(多)を離るれば、波羅蜜(多)の名字を得ず。般若波羅蜜(多)を離れるが故に、波羅蜜(多)の名字を得。須菩提よ、譬へば、無天の婦は、人、侵陵す可きこと易きが如し。五波羅蜜(多)も亦是の如く、般若波羅蜜(多)を遠離すれば、魔若くは魔天、之を壞ること則ち易し。譬へば有夫の婦は、人、侵陵すべきこと難きが如し。五波羅蜜(多)も亦是の如く、般若波羅蜜(多)を得れば、魔若くは魔天は沮壞すること能はず。須菩提よ、譬へば、軍將の鎧仗を具足すれば、隣國の強敵の壞すること能はざる所なるが如し。五波羅蜜(多)も亦是の如く、般若波羅蜜(多)を遠離せざれば、魔若くは魔天、若くは増上慢の人、乃至菩薩、梅陀羅の壞すること能はざる所なり。須菩提よ、譬へば、小國王は時に隨つて轉輪聖王に朝侍するが如し。五波羅蜜(多)も亦是の如く、般若波羅蜜(多)に隨順す。譬へば、衆川萬流の皆恆河に入り、大海に隨入するが如し。五波羅蜜(多)も亦是の如く、般若波羅蜜(多)に守護せらるるが故に、隨つて薩婆若に到る。譬へば、人の右手に作す所の事は便なるが如く、般若波羅蜜(多)も亦是の如し。人の左手に事を造るは不便なるが如く、五波羅蜜(多)も亦是の如し。譬へば、衆流の若くは大、若くは小、俱に大海に入り、合して一味と爲るが如し。五波羅蜜(多)も亦是の如く、般若波羅蜜(多)の爲に護られ、般若波羅蜜(多)に隨つて薩婆若に入り、波羅蜜(多)の名字を得。譬へば、轉輪聖王の四種の兵を、輪寶の前に在りて導くに、王の意に住めんと欲すれば、輪則ち爲に住まり、五種の兵をして其の所願を滿さしめ、輪も亦其の處を離れざるが如し。般若波羅蜜(多)も亦是の如く、五波羅蜜(多)を導いて薩婆若に到り、常に是の中に住して其の處を過ぎず。譬へば、轉輪聖王の四種の兵を、輪寶の前に在りて導くが如し。般若波羅蜜(多)も亦是の如く、五波羅蜜(多)を導いて薩婆若に到りて住し亦分別せず。般若波羅蜜(多)も亦分別せず。檀(那)波羅蜜(多)は我に隨從し、尸羅波羅蜜(多)・瞿提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)は我に隨從せず。檀(那)波羅蜜(多)も亦分別せず。我れ般若波羅蜜(多)に隨從し、尸羅波羅蜜(多)・瞿提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)は我に隨從せず。

耶波羅蜜(多)・禪(耶)波羅蜜(多)には隨從せずと。尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(耶)波羅蜜(多)も亦是の如し。何となれば、諸波羅蜜(多)の性は能く作す所無く、自性空虚誑にして野馬の如くなればなり」と。

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法、自性空ふらば、云何が菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を行じ、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「須菩提よ、菩薩摩訶薩は、六波羅蜜(多)を行する時

是の念を作す、是の世間は心皆顛倒せり。我れ若し方領力を行ざれば、衆生を生死より度脱すること能はず。我れ當に衆生の爲の故に、檀(耶)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(耶)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)

を行すべしと。是の菩薩は衆生の爲の故に内外の物を捨て、捨つる時、是の念を作す、我れ捨つる所無しと。何となれば是の物は必ず當に壞敗すべければなり。菩薩は是の如きの思惟を作し、能く檀(耶)波羅蜜(多)を具足し、衆生の爲の故に終に破戒せず。何となれば、菩薩は是の念を作せばなり。我れ衆生の爲に、阿耨多羅三藐三菩提を發す。若し殺生せば是れ應ぜざる所なり。乃至我れ衆生の爲に阿耨多羅三藐三菩提を發す。若しくは邪見を作し、若しくは聲聞辟支佛地に貪著せば是れ應ぜざる所なりと。菩薩摩訶薩は是の如く思惟して、能く尸羅波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に顧らず、乃至一念を生ぜず。

菩薩は是の如く思惟す、我れ應に衆生を利益すべし。云何が而も瞋心を起すやと。菩薩は是の如く「思惟して」、能く羼提波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、常に憍怠の心を生ぜず、菩薩は是の如く行じて、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、散亂の心を生ぜず。菩薩は是の如く行じて、能く禪(耶)波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に智慧を離れず。何となれば、智慧を除き、餘法を以てに衆生を度脱すべからざればなり。菩薩は是の如く行

乃至一念を生ぜず。

菩薩は是の如く思惟す、我れ應に衆生を利益すべし。云何が而も瞋心を起すやと。菩薩は是の如く「思惟して」、能く羼提波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、常に憍怠の心を生ぜず、菩薩は是の如く行じて、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、散亂の心を生ぜず。菩薩は是の如く行じて、能く禪(耶)波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に智慧を離れず。何となれば、智慧を除き、餘法を以てに衆生を度脱すべからざればなり。菩薩は是の如く行

乃至一念を生ぜず。

菩薩は是の如く思惟す、我れ應に衆生を利益すべし。云何が而も瞋心を起すやと。菩薩は是の如く「思惟して」、能く羼提波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、常に憍怠の心を生ぜず、菩薩は是の如く行じて、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、散亂の心を生ぜず。菩薩は是の如く行じて、能く禪(耶)波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に智慧を離れず。何となれば、智慧を除き、餘法を以てに衆生を度脱すべからざればなり。菩薩は是の如く行

乃至一念を生ぜず。

菩薩は是の如く思惟す、我れ應に衆生を利益すべし。云何が而も瞋心を起すやと。菩薩は是の如く「思惟して」、能く羼提波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、常に憍怠の心を生ぜず、菩薩は是の如く行じて、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、散亂の心を生ぜず。菩薩は是の如く行じて、能く禪(耶)波羅蜜(多)を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に智慧を離れず。何となれば、智慧を除き、餘法を以てに衆生を度脱すべからざればなり。菩薩は是の如く行

じて、能く般若波羅蜜(多)を具足す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸の波羅蜜(多)に差別の相無くんば、云何が般若波羅蜜(多)は、五波羅蜜(多)の中に於いて、第一最上微妙なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し、諸の波羅蜜(多)は差別無し」と雖も、若し般若波羅蜜(多)無くんば、五波羅蜜(多)は波羅蜜(多)の名字を得ず。般若波羅蜜(多)に因りて、五波羅蜜(多)は波羅蜜(多)の名字を得。須菩提よ、譬へば、種種の色(多)の鳥、須彌山王の邊に到れば、皆同じく一色なるが如し。五波羅蜜(多)も亦是の如く、般若波羅蜜(多)に因りて、薩婆若の中に到れば、一種にして異なること無く、是れ檀(那)波羅蜜(多)なり」と。

是れ尸羅波羅蜜(多)、是れ尸羅波羅蜜(多)は、自性無きが故なり。是の因縁を以ての故に、諸の波羅蜜(多)は差別無し」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、實義に隨へば分別無し。云何が般若波羅蜜(多)は、五波羅蜜(多)の中に於いて最上微妙なるや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し、須菩提よ、實義の中には分別有ること無し」と雖も、但世俗法を以ての故に、檀(那)波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、瞿提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を説

き、衆生を生死より度せん」と欲する事を爲す。是の衆生は實に生ぜず、死せず、起らず、退せざるなり。須菩提よ、衆生は無所有なるが故に、當に知るべし、一切法は無所有なり」と。是の因縁を以ての故に、般若波羅蜜(多)は五波羅蜜(多)の中に於いて、最上最妙なり。須菩提よ、譬へば、閻浮提の衆の女人の中に、玉女寶は第一最上最妙なるが如く、般若波羅蜜(多)も亦是の如く、五波羅蜜(多)の中に於いて、第一最上最妙なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は何の意を以ての故に、般若波羅蜜(多)は最上最妙なり」と説きたまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「般若波羅蜜(多)は一切の善法を取つて薩婆若の中に到り、不住に住するが故なり」と。須菩提、



佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は法の取るべく捨つべきもの有りや不や」と。佛の言はく、「不なり。須菩提よ、般若波羅蜜(多)は法の取るべき無く、法の捨つべき無し。何となれば、一切法は取らず、捨てざればなり」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)は何等の法に於いてか取らず捨てざるや」と。佛の言はく、「般若波羅蜜(多)は色に於いて取らず捨てず、受想行識、乃至阿耨多羅三藐三菩提に於いて取らず捨てず」と。「世尊よ、云何が色を取らず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を取らざるや」と。佛の言はく、「若し菩薩、色を念ぜず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざれば、是を色を取らず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を取らずと名く」と。須菩提言さく、「世尊よ、若し色を念ぜず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を念ぜずんば、云何が善根を増益することを得るや。善根増さずんば、云何が諸の波羅蜜(多)を具足せん。若し諸の波羅蜜(多)を具足せずんば、云何が阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩、色を念ぜず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざれば、是の時善根増益す。善根を増益するが故に、諸の波羅蜜(多)を具足し、諸の波羅蜜(多)を具足するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。何となれば、色を念ぜず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざる時、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり」と。

「世尊よ、何の因縁の故に、色を念ぜざる時、乃至阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざる時、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛の言はく、「念するを以つての故に、欲界、色界、無色界に著し、念ぜざるが故に、著する所無し。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、著する所有るべからず」と。「世尊よ、菩薩摩訶薩は、是の如く般若波羅蜜(多)を行じて、當に何處に住すべきや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩、是の如く行すれば、色に住せず、乃至一切種智に住せず」と。「世尊よ、何の因縁の故に、色中に住せず、乃至一切種智に住せざるや」と。佛の言はく、「著せざるが故に住せず。何となれば、是の菩薩は法の著すべく、住すべきもの有ることを見ざればなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は不著不

住の法を以て般若波羅蜜(多)を行す。若し菩薩摩訶薩は是の念を作す、「若し能く是の如く行じ、是の如く修するは、是れ般若波羅蜜(多)を行するなり。我れ今般若波羅蜜(多)を行じ、般若波羅蜜(多)を修す。若し是の如く相を取れば、則ち般若波羅蜜(多)を遠離す。若し般若波羅蜜(多)を遠離すれば、則ち檀(那)波羅蜜(多)を遠離し、乃至一切種智を遠離す。何となれば、般若波羅蜜(多)には著處有ること無く、亦た著者も無く、自性無ければなり。菩薩摩訶薩は若し復た是の如く相を取れば、則ち般若波羅蜜(多)に於いて退す、若し般若波羅蜜(多)を退すれば、則ち是れ阿耨多羅三藐三菩提を退して受記を得ずと。菩薩摩訶薩は復た是の念を作す、是の般若波羅蜜(多)に住すれば、能く檀(那)波羅蜜(多)を生じ、乃至能く大悲を生ずと。若し是の念を作せば、則ち般若波羅蜜(多)を失すと爲す。般若波羅蜜(多)を失すれば、則ち檀(那)波羅蜜(多)を生ずること能はず、乃至大悲を生ずること能はず。菩薩は若し復た是の念を作す、諸佛は、諸法の受相無きを知るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと。菩薩は若し是の如きの演說、開示、教誨を作せば、則ち般若波羅蜜(多)を失す。何となれば、佛は諸法に於いて所知無く、所得無く、亦法の説くべき無ければなり。何に況んや、當に所得有るべきは、是の處有ること無しと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩の般若波羅蜜(多)を行するに云何が是の過失無きや」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行じて是の念を作す、「諸法は所有無く、取るべからず。若し法、所有無く、取るべからざれば、則ち所得無しと。若し是の如く行すれば、般若波羅蜜(多)を行すと爲す。若し菩薩摩訶薩、無所有の法に著すれば、則ち般若波羅蜜(多)を遠離す。何となれば、般若波羅蜜(多)の中には著法無ければなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を遠離するや。檀(那)波羅蜜(多)は檀(那)波羅蜜(多)を遠離するや。乃至一切種智は一切種智を遠離するや。世尊よ、若し般若波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)を遠離し、乃

至一切種智は一切種智を遠離せば、菩薩は云何が般若波羅蜜(多)を得、乃至一切種智を得るや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行ずる時、色に是の色は誰か色なる(の念)を生ず。乃至一切種智に、是の一切種智は誰か一切種智なる(の念)を生ず。是の如く、菩薩は能く般若波羅蜜(多)を生じ、乃至能く一切種智を生ず。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、色の若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは我、若くは非我、若くは空、若くは不空、若くは淨、若くは非淨を觀ぜず。何となれば、自性は自性を生ずること能はずればなり。乃至一切種智も亦是の如し。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行じ、是の如く色を觀じ、乃至一切種智を觀ずれば、能く般若波羅蜜(多)を生じ、乃至能く一切種智を生ず。譬へば、轉輪聖王の所至の處に、四種の兵ありて皆隨從するが如し。般若波羅蜜(多)も亦是の如く、所至の處には、五波羅蜜(多)ありて、皆悉く隨從し、薩婆若の中に到りて住す。譬へば、善く輕薄を御し、平道を失せざれば、意の至る所に隨ふが如し。般若波羅蜜(多)も亦是の如く、五波羅蜜(多)を御し、平道を失せずして薩婆若に至る」と。

須菩提言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の道にして、何等か是れ非道なるや」と。佛の言はく、「聲聞道は菩薩の道に非ず、辟支佛道は菩薩の道に非ず、一切種智道は是れ菩薩摩訶薩の道なり。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の道、非道と名くと。須菩提言さく、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜(多)は、大事の處の故に起る。所謂る是れ道なり、是れ道に非ず」と示す。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、般若波羅蜜(多)に大事の處の故に起る。所謂る是れ道なり、是れ道に非ず」と示す。須菩提よ、是の般若波羅蜜(多)は無量の衆生を度せんが爲の故に起り、阿耨多羅三藐三菩提を爲す爲の故に起る。般若波羅蜜(多)は是れ諸の菩薩摩訶薩に、阿耨多羅三藐三菩提を導示し、能く聲聞辟支佛地を離れて薩婆若に住

せしむ。般若波羅蜜(多)は生ずる所無く、滅する所無し、(そは)諸法常住なるが故なり」と。

須菩提言さく、「世尊よ、若し般若波羅蜜(多)は生ずる所無く、滅する所無くんば、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、應に布施すべく、云何が應に戒を持つべく、云何が應に忍を修すべく、云何が應に勤精進すべく、云何が應に禪定に入るべく、云何が應に智慧を修すべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、薩婆若を念じて應に布施すべく、薩婆若を念じて應に持戒し、忍辱し、精進し、禪定し、智慧(を修)すべし。是の菩薩摩訶薩は、是の功德を持つて、衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。若し是の如く廻向すれば、則ち具足して六波羅蜜(多)及び慈悲心、諸の功德を修す。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜(多)を遠離せざれば、則ち薩婆若を遠離せず。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、應に六波羅蜜(多)を學すべく、行すべし。菩薩摩訶薩、六波羅蜜(多)を行すれば、一切の善根を具足して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に六波羅蜜(多)を修行すべし」と。

須菩提言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は應に六波羅蜜(多)を修行すべきや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は是の如く觀すべし。色は合せず散ぜず、受想行識は合せず散ぜず、乃至一切種智は合せず散ぜず」と。是を菩薩摩訶薩、六波羅蜜(多)を修行すと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に是の念を作すべし、我れ當に色の中に住せず、受想行識の中に住せず、乃至一切種智の中に住せざるべしと。是の如く、應に六波羅蜜(多)を修行すべし。何となれば、是の色は所住無く、乃至薩婆若は所住無ければなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無所住の法を以て、六波羅蜜(多)を修行し、應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提よ、譬へば、士夫の、菴羅果、若くは波那婆果を食べんと欲せば、當に其の子を種ふ時に隨つ

て、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に是の念を作すべし、我れ當に色の中に住せず、受想行識の中に住せず、乃至一切種智の中に住せざるべしと。是の如く、應に六波羅蜜(多)を修行すべし。何となれば、是の色は所住無く、乃至薩婆若は所住無ければなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無所住の法を以て、六波羅蜜(多)を修行し、應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提よ、譬へば、士夫の、菴羅果、若くは波那婆果を食べんと欲せば、當に其の子を種ふ時に隨つ

て澆灌し、守護し、漸漸に生長し、時節和合すれば、便ち果實有りて、之を食ふことを得るが如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦是の如く、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に六波羅蜜(多)を學し、布施を以て衆生を攝取し、持戒・忍辱・精進・禪定・智慧もて衆生を攝取し、衆生を生死より度すべく、是の如きの行を以て當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩、他人の語に隨はざらんと言せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。佛國土を淨め、衆生を成就せんと欲し、道場に坐せんと欲し、法輪を轉ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、應に是の如く般若波羅蜜(多)を學すべきや」と。佛の言はく、「菩薩は應に是の如く、般若波羅蜜(多)を學すべし。諸法に於いて自在を得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を學すべし。何となれば、是の般若波羅蜜(多)を學すれば一切諸法の中に於いて自在を得ればなり。

復次に、般若波羅蜜(多)は一切諸法の中に於いて最大なり。譬へば、大海は萬川の中に於いて最大なるが如し。般若波羅蜜(多)も亦是の如く、一切法の中に於いて最大なり。是を以ての故に、諸の聲聞、辟支佛及び諸の菩薩道を求めんと欲するものば、應當に般若波羅蜜(多)、檀那・波羅蜜(多)、乃至一切種智を學すべし。須菩提よ、譬へば、射師の意の如き弓箭を取れば、怨敵を畏れざるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、般若波羅蜜(多)、乃至一切種智を行ぜば、魔若くは魔天の壞すること能はざる所なり。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、應に般若波羅蜜(多)を學すべし。是の般若波羅蜜(多)を行する菩薩は十方諸佛の爲に念せらる」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が十方の諸佛は、是の菩薩摩訶薩を念じたまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の檀那(那)波羅蜜(多)を行する時、十方の諸佛は皆念じたまふ。尸羅波羅蜜(多)・廣施波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪那(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を行する時、十方の諸佛は皆念じたまふ。云何が念する。布施は得べからず

持戒・忍辱・精進・禪・定・智慧は得べからず、乃至一切種智は得べからず。菩薩は能く是の如く諸法を得ざるが故に、諸佛は是の菩薩摩訶薩を念じたまふ。

復次に、須菩提よ、諸佛は色を以てせざるが故に念ず、受想行識を以てせざるが故に念ず、乃至一切種智を以てせざるが故に念ず。須菩提言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は多く學する所あるも、實には學する所無し」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、菩薩は多く學する所有れども、實には學する所無し。何となれば、是の菩薩の學する所の諸法は皆得べからざればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛の所説の法は、若くは略、若くは廣、應當に受持し、に於いて、諸の菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲せば、六波羅蜜(多)の若くは略、若くは廣、應當に受持し、親近し、讀誦し、讀誦し已つて思惟し、正觀すべし。(こほ)心心數法行ぜざるが故なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。菩薩摩訶薩、略廣の六波羅蜜(多)を學せば、當に一切法の略廣の相を知るべし」と。須菩提言さく、「云何が菩薩摩訶薩は一切法の略廣の相を知るや」と。佛の言はく、「色の如相を知り、受想行識の(如相)を知り、乃至一切種智の如相を知る。是の如く能く一切法の略廣の相を知る」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が色如相、云何が受想行識、乃至一切種智如相なりや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色は如・無生・無滅・無住異なり。是を色の如相と名く、乃至一切種智の如相は、無生・無滅・無住異なり。是を一切種智の如相と名く。是の中に、菩薩摩訶薩は應に學すべし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、諸法の實際を知る時、一切法の略廣の相を知ると、世尊よ、何等か是れ諸法の實際なるや」と。佛の言はく、「實際は是を實際と名く。菩薩は是の際を學して、一切諸法の略廣の相を知る。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、諸法の法性を知らば、是の菩薩は能く一切法の略廣の相を知ると。「世尊よ、何等か是れ諸法の法性なるや」と。佛の言はく、「色性、是を法性と名く。是の性には分無く、非分無し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は法性を知らるが故に、一切法

佛の言はく、「色性、是を法性と名く。是の性には分無く、非分無し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は法性を知らるが故に、一切法

佛の言はく、「色性、是を法性と名く。是の性には分無く、非分無し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は法性を知らるが故に、一切法

佛の言はく、「色性、是を法性と名く。是の性には分無く、非分無し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は法性を知らるが故に、一切法

佛の言はく、「色性、是を法性と名く。是の性には分無く、非分無し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は法性を知らるが故に、一切法

佛の言はく、「色性、是を法性と名く。是の性には分無く、非分無し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は法性を知らるが故に、一切法

の略廣の相を知る」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、復た云何が應に一切法の略廣の相を知るべきや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は、一切法の不合不散を知るが若し」と。須菩提言さく、「世尊よ、何等の法か不合不散なる」と。佛の言はく、「色は不合不散なり、受想行識は不合不散なり。乃至一切種智は不合不散なり。有爲性、無爲性は不合不散なり。何となれば、是の諸法は自性無し。云何が合有り、散有らん。若し法の自性無くんば、是を非法と爲す。非法は不合不散なり。是の如く、應當に一切法の略廣の相を知るべし」と。須菩提言さく、「世尊よ、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を略攝すと名く。世尊よ、是の略攝の般若波羅蜜(多)の中、初發意の菩薩摩訶薩は、應に學すべく、乃至十地の菩薩摩訶薩も亦應に學すべし、是の菩薩摩訶薩、是の略攝の般若波羅蜜(多)を學せば、則ち一切法の略廣の相を知る」と。

釋して曰く、須菩提は、菩薩摩訶薩の大利根の相を聞く。所謂る

一波羅蜜(多)の邊に、能く五波羅蜜(多)を生じ、一波羅蜜(多)を行じて、

即ち能く五波羅蜜(多)を具す。上品の中に説くが如し。是の事は希有なる

が故に佛に問ふ。一是の菩薩は、發心より已來、幾ばくにして能く是の如

き方便を得ると爲すや」と。佛は答へたまはく、「是の菩薩は發心より已來、大菩薩を除けば、餘の衆

生より「多きこと」無量阿僧祇劫なり」と。或は有る菩薩は、發心より已來、無量阿僧祇劫なるも、大罪の

因縁、心を覆ふが故に、佛を見たてまつらず、親近し供養せず。是の故に問ふ、「是の菩薩は幾ばく

の佛を供養することを爲すや」と。佛は答へたまはく、「是の菩薩は已に如恆河沙等の諸佛を供養すると

を爲せり」と。上には無量億阿僧祇と言ひ、今に恆河沙と言ふも、多數なる理は同じきが故なり。

【二】 以下菩薩の發心以後無量時の修行を經歷せるを明す。  
【三】 以下善根を種うるを明す。

菩薩は、久しく發心し、多く華香を以て佛に供養すと雖も、而も未だ善根を種うるに能はず。是の念を作す、「我れ必ず當に果報を得べし。〔そは〕深心に六波羅蜜〔多〕を行するが故なり」と。若し深心を以て六波羅蜜〔多〕を行じ、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に功德を作さば、是を善根を種うと名く。是の故に第三に、「何等の善根を種うるや」と問へり。佛は答へたまへり、「是の菩薩は初發心より已來、具足して六波羅蜜〔多〕を行じ、一切の福德を作さざる者無く、一切の善法を修集せざること無し」と。須菩提は聞き已り、歡喜して佛に白さく、「希有なり、世尊よ、是の菩薩は能く是の如く方便を行す。所謂る未だ諸の煩惱を斷せず、未だ生死を離れざるに、而も能く煩惱を斷じ、生死の法を離るる者に勝る」と。無始の生死より已來、諸の惡法を集む。菩薩の心は後に來り、而も能く後に來る心を用ゐ、先に集むる所の惡心に隨はず、是を希有と爲す。一切衆生は菩薩に於いて思ふること無し、而も菩薩は常に是の諸の衆生を利益せんと欲す。或は菩薩の命を奪ひ、身體を割截せんと欲するに、菩薩は第一佛樂を以てせんと欲し、智慧の命を衆生に與へんと欲す。是の如き等は是を希有と爲す。佛は須菩提の所説を可とし、此の事をして明了ならしめんと欲するが故に、譬喩を作さく、日月の四天下を照すが如しと。若し日月無ければ、則ち百穀、藥草及び衆生は以て生長すること無し。月は是れ陰氣、日は是れ陽氣にして、二氣和合するが故に、萬物成長す。是の故に、日月は四天下に於いて大に利益有り、菩薩も亦是の如く、四生中に

【四】 以下菩薩の恩德誓願の廣大深遠なるを明す。



於いて、大悲心を以て衆生を憐愍するが故に、能く所願に隨つて一切の善法を行じ、大智慧力の故に衆生の善法に著する心を破す。是の如く、六波羅蜜〔多〕等の諸善、增長成就して直に阿耨多羅三藐三菩提に至る。又復、衆生は復眼有りとも雖も、若し日月無ければ、則ち見る所無し。衆生は世俗の善根利智有りとも雖も、般若波羅蜜〔多〕の照明を得ざれば、尙二乗すら得ず、何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得んや。

〔五〕 又復、菩薩は五波羅蜜〔多〕を行すと雖も、般若波羅蜜〔多〕を得ざれば、波羅蜜〔多〕と名くるとを得ず。〔そは〕著心を破せざるが故なり。若し菩薩は乃ち能く自ら身命を以て布施するに至るも、若し般若無くんば、其の心は破れ易きこと、無夫の婦を侵陵するは則ち易きが如し。若し般若有れば、則ち破壊す可からず。

【五】 以下般若の一徳能く餘の五度を圓滿成就せしむる因縁を明す。

菩薩は種種に諸餘の深法を行すと雖も、般若を得ざれば、名けて波羅蜜〔多〕を行すと爲さず。但名けて善法を行すと爲す。〔そは〕量有り、盡くると有るが故なり。此の中に譬喩を説いて「曰く」、「轉輪聖王は、千の子、八萬四千の小王、及び六寶有りとも雖も、名けて轉輪聖王と爲すことを得ず。四天下に飛到することを得ざるも、若し天、金輪寶を遺すに至れば、乃ち名けて轉輪聖王と爲すことを得」と。菩薩も亦是の如し、布施等の諸の善法有りとも雖も、般若波羅蜜〔多〕を得ざるが故に、名けて菩薩と爲さず。〔そは〕六波羅蜜〔多〕を行する人、障礙を除き、菩薩道を行すること能はざるが爲の故なり。譬

へば、健將こんしやうは善よく戰法せんぽうを知り、器伏きぶくを具足ぐそくすれば、怨敵ゐんていを畏れざるが如し。健將こんしやうは是れ菩薩ぼさつにして、器伏きぶくは是れ般若ぼんぱなり。

増上慢ぞうじやまんとは、未だ聖道しやうだうを得ざるに、意こころに已すでに得たりと謂ふ。菩薩ぼさつ、畢竟空法ひつじやうくうほふとを説かんに、是この人は善法ぜんぽうを行ずる心同こころなじからざるが故に、菩薩ぼさつを毀壞きゑす。外道梵志等びだうはんしとう、及び諸おもの魔民まひん乃至菩薩ぼさつの旃陀羅せんたらか者しやをすら毀壞きゑす。菩薩ぼさつの旃陀羅せんたらかとは、魔品中まひんちゆうに説くが如く、魔來まきたりて其その名字みやうじを稱しょうし、而しかして受記じゆきを與あたふるを聞き、而しかして輕慢きやうまんを生ず。

【六】 増上慢の意義。

【七】 以下直に般若を説かざる理由を説く。

【八】 第一問、五波羅蜜多は般若に守護せらるるが故に薩婆若に入るといふ理由如何。

復次に、般若波羅蜜ぼんぱにやほらみつ「多」の爲ための故ゆゑに五波羅蜜ごはらみつ「多」を説く。若し人能ひとよく直ただに諸法實相しよほふじつさうを行せば、則すなはち布施等ふせとうの般若ぼんぱに入る初門しよとんを説くことを爲さず。人は鈍根どんこんにして罪重つみおもきを以ての故ゆゑに種種しゆじゆの因緣いんねんもて説く。布施ふせを以て慳けんを破はし、持戒ぢかいは諸しよの煩惱ぼんノウを折薄しゃくはくし、忍辱にんじやくは福德ふくとくの門もんを開き、能よく難事なんじを行じ、精進しやうじんは風吹かぜふくとも、火熾ひし然ぜんなれば息やすまざるが如く、禪定ぜんぢやうは心こころを攝せつして一定ぢやうぢゆうし、諸法實相しよほふじつさうを觀くわんす。故ゆゑに是この五波羅蜜ごはらみつ「多」は皆般若波羅蜜ぼんぱにやほらみつ「多」に趣向しゆかうす。諸しよの小王せうわうの轉輪聖王てんりんじやうわうに朝宗てうしゆうするが如く、一切いっさいの衆流しゆりゆうの皆大海みなうみに入るが如く、布施等ふせとうの諸しよの善法ぜんぽうも亦是またの如く、般若波羅蜜ぼんぱにやほらみつ「多」の爲ために守護しゆごせらるるが故ゆゑに薩婆若サルワチニヤに至いたることを得う。

問とうて曰いはく、五波羅蜜ごはらみつ「多」は諸しよの川流せんるの如く、般若ぼんぱは應まさに大海びがかいの如ごとくなるべし。今何いまなにを以てか五

波羅蜜〔多〕は般若の爲に守護せらるるが故に、薩婆若に入ることを得と言ふや。答へて曰く、汝は先に般若を説くに種種の名字有ることを聞かずや。薩婆若は即ち是れ般若の異名なり。五波羅蜜〔多〕の福德は、般若波羅蜜〔多〕の中に入れれば、即ち清淨の般若を得。般若清淨なるが故に佛道を得、變じて薩婆若と名く。是の故に、薩婆若に入れれば即ち是れ般若に入ると言ふ。有る人は疑ふ、「諸の波羅蜜〔多〕には各各力有り、何を以てか獨り般若波羅蜜〔多〕の功用は大と爲すと云ふや」と。是の故に言はく、譬へば、人の右手は自然に穩便なるが如く、「般若波羅蜜〔多〕も亦然なり」。五波羅蜜〔多〕は左手の如く、般若波羅蜜〔多〕を得ざれば、則ち所作便ならず。人は目を閉いて事を造せば、所作皆成るが如く、導師の前に在りて餘伴は隨逐し、進止取捨皆導師に隨へば、自在を得ざるが如く、般若波羅蜜〔多〕も亦是の如く。五波羅蜜〔多〕を導き、修集す可き所を成辦し、皆般若を仰ぐ。此の中に、佛は自ら譬喩を説きたまはく、轉輪聖王の輪寶、四兵の前に在りて導くに、輪住すれば、餘寶は則ち住するが如し」と。輪は是れ般若波羅蜜〔多〕にして常に五波羅蜜〔多〕の前に在りて導き、五波羅蜜〔多〕は〔是れに〕隨逐す。般若の初品中に説くが如し。菩薩は檀〔那〕波羅蜜〔多〕を具足せんと欲せば、施者、受者及び財物を見ず。先づ籌量分別して一切の著を斷じ然る後に布施す。是れは則ち般若の前に在りて導くなり。輪寶の四天下を伏し已りて、常に王宮に在り、虛空中に住するが如し。聖王は是れ菩薩、輪は是れ般若にして、諸の魔民煩惱を破し已り、薩婆若の宮中に入りて住す。是の輪は分別する所無し、

〔所謂る〕我は常に前に在りて、餘寶は後に在りと。〔又〕、憎愛の心無し、〔所謂る〕是は來るべく、是は來るべからずとの般若の分別無きも亦是の如く、〔所謂る〕檀〔那〕波羅蜜〔多〕は我に隨ひ來れ、尸羅波羅蜜〔多〕は來ること勿れと、經中に廣く説くが如し。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「一切の法性は能く作す所無し」と。須菩提は是を聞き已つて、佛に白して言さく、「若し一切法性は空にして所有無くんば、云何が菩薩は六波羅蜜〔多〕を行じて、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛は答へたまはく、「菩薩は般若を行じて是の念を作さく、諸法は畢竟空なりと雖も、衆生は狂顛倒の故に、深く著して解せずと。我れ若し方便力を以てせざれば、則ち度するとを得べからず」と。方便とは、所謂る金色身三十二相八十隨形好・無量の光明・神通變化、〔所謂る〕能く一指を以て十方三千大千國土を動かし、梵音もて法を説いて厭ふこと無しと。色身十力・四無所畏・十八不共法・無礙解脫・一切種智・大慈大悲等の無量の諸の佛法を具足し、然る後に能く衆生を教化するに、衆生は必ず能く信受す。是の如き力を得れば、假令妄語なりとも、人猶當に信すべし、何に況んや、實語なるをや。經に「我は諸法實相を知りて、能く涅槃に入ると雖も、但衆生の爲の故に、檀〔那〕波羅蜜〔多〕等を行ず」と説くが如し。經中に廣く説くが如く、乃至異事を以て衆生を度すべからず。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸の波羅蜜〔多〕は、畢竟空なるが故に差別無くんば、

【九】 方便の意義。

云何が般若波羅蜜(多)は、諸の波羅蜜(多)の中に於て最尊なりや」と。佛は須菩提(の所問)を可したまふ、「畢竟空中には、諸の波羅蜜(多)は實に差別無し。若し般若波羅蜜(多)無くんば、諸の波羅蜜(多)は畢竟空にして差別無し、誰か能く知る者あらんと。若し般若無くんば、五法は云何が波羅蜜(多)の名字を得ん。五波羅蜜(多)は、未だ般若に入らざる時差別有り、既に般若に入れば、則ち差別無し。諸の異色の物、須彌山の邊に到れば、皆同一の色なるも、餘物の色は皆同じなりと言ふことを得ざるが如し。何を以てか獨り須彌のみを稱して大と爲さん。檀(那)波羅蜜(多)等も亦是の如く、差別無しと雖も、皆是れ般若力の故に大と言ふとを得ず。何を以てか、獨り般若を稱して大と爲さん。須菩提は開釋を蒙ると雖も、猶未だ善く解せずして、復異塗を以て而も世尊に問ふ、「若し實義の中に差別無くんば、云何が般若は五波羅蜜(多)に於いて上と爲さん」と。先には未だ聖道空を得ずと説けり、是の故に第一實義を説く。第一實義の聖道は、是れ最も信す可し、是の中にも亦差別無し。佛は「須菩提の所問を」可して言はく、是の如し、是の如し。我れ六波羅蜜(多)を説き分別するは、皆世俗の爲の故なり。何となれば、世人には但爲に諸法實相を説くべからず、聞けば則ち迷悶し、疑悔を生ず。是の故に、第一義を以て心と爲し、世俗の語言を用ゐて説を爲す。是の故に、分別して諸の波羅蜜(多)ありと説き、衆生を教化するに衆生は實に法有ること無く、皆是れ空、不生、不死、不退、不起なり。色等の法も亦是の如し。是の故に般若波羅蜜(多)は空なりと雖も、能く是の如きの事を示す

が故に、「而も最上最妙なり」。譬へば玉女質の衆女中に於て、最も第一にして、最上最妙なるが如しと。須菩提佛に白さく、「佛は何の意を以ての故に、常に般若は最上なりと説きたまふや」とは、須菩提は種種の因縁もて般若を説き、五波羅蜜〔多〕には差別無しとなり。佛も亦然も其の所説を可としたまひ、而も復般若は最上なりと言ふ。佛の言はく、般若波羅蜜〔多〕は一切の善法を守護し、薩婆若中に至りて住すとは、一切法は空なりと雖も、若し般若無ければ、一切の諸の善法は皆薩婆若に至ること能はず、善法とは、五波羅蜜〔多〕三十七品大慈悲等の諸の菩薩法なり。

問うて曰く、「二〇）若し諸の善法を行するも亦能く薩婆若に至る、何を以てか但般若の故に至るを得と説くや。答へて曰く、諸の善法は和合して能く煩惱を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得と雖も、而も般若波羅蜜〔多〕は、中に於いて功力最大なり。譬へば、大軍敵を摧くに、而も主將功名を得るが如し。復た有る人の言はく、諸の善法は、般若を得ざれば、薩婆若に至ることを得ず。般若は諸の善法を得ずして、獨り能く薩婆若に至ると。經に、

【二〇】 第二問、薩婆若に至るは諸の善法を以てするも得べきに、但般若のみを高調する理由如何。

「師子雷音佛國の寶樹は莊嚴にして、其の樹は常に無量の法音を出す。所謂一切法畢竟空、無生無滅等なり。其の土の人民は生れて便ち此の法音を聞くが故に、悪心を起さず、無生法忍を得と説くが如し。此の如き人は、何ぞ布施持戒等の諸の功德有らん。亦狂人醉人の佛より四諦を聞き、即時に道

を得ること有り。是等の如きは智慧有ること無く、餘法を行じて道を得るなり、是の〔般若を得との〕處有ること無し。

須菩提、佛に問ふ、般若は畢竟空なれば、聖法を取らず、凡夫法を捨てず。云何が佛は是の般若の能く薩婆若に至りて住すと云ふやと。佛、其の言を可とし、是の如し、是の如し。是の般若波羅蜜〔多〕は取ること無く、捨つること無く、薩婆若を取ると言ふと雖も、法を取らざるを以ての故に取るなり。住の義も亦是の如し。此の中に、佛、自ら因縁を説きたまふ、所謂一切法は相を取らずと。一切法とは色より乃ち菩提に至るまでなり。是の法は虚誑にして因縁より生じ、自性無きが故に取らず、取らざるが故に捨てず。〔そは〕憶念して相を取らざるを以てなり。須菩提、言さく、若し色等の法を憶念せずんば、云何が善根を増長せん。善根増長せずんば、云何が阿耨多羅三藐三菩提を得んと。佛、答へたまはく、若し菩薩は能く一切法中の憶念を滅すれば、即ち是れ空・無相・無作・解脱門にして、解脱は即ち是れ諸法實相なり。善根有りと雖も相を取るを以て、若し心顛倒するが故に増長せず。譬へば、穀を種る、其の苗好しと雖も、穢草多きが故に増長すること能はざるが如し。此の中に因縁を説く。衆生は憶念を以ての故に、三界の善不善の處に生ず。若し憶念無ければ、則ち著せず、著せざれば則ち生ぜずと。須菩提、佛より是を聞き已つて思惟し籌量せり。是は畢竟空にして所有無く、若し是の法を行ずるも、亦應に所得無く、住處無かるべし。何となれば、因果相似すればなりと。是の

故に佛に問ひたてまつる、菩薩は是の念を作して般若を行するに、何の所にか住し、何の所得ありやと。佛答へたまはく、色等の一切法中に住せず、乃至不住の中にも亦住せず。相を取らざるが故に著せず、著せざるが故に則ち住せずと。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、是の菩薩は法の著すべく、住著すべき者有るとを見ずと。住とは此の中の法に破し難きが故に、但法のみを説いて著者を説かず。須菩提よ、若し菩薩、是の衆生空、法空に住すれば、是の念を作さく、我れ能く是の如く行ずとは、則ち是れ失、則ち是れ離なり。何となれば、般若波羅蜜「多」は是れ不著の相なるに、是の菩薩は我心を以て、外空に著し、内我に著し、般若の如く行せざるが故に、般若を遠離すと言ふ。何となれば般若波羅蜜「多」は是れ不著の相にして、性無なるを以ての故なりと。(二)かみ 上には空に著するを以ての故に失し、今は空を破するを以て般若を得るも、而も般若の無性に著するが故に失す。失するが故に受記を得ず。若し是の念を作して、般若の中に住すれば、能く檀「那」波羅蜜「多」等を生ず「と言ふ」も亦復是れ失なり。

問うて曰く、三上の二失の因縁は爾るべし、今何を以てか失と爲すや。答へて曰く、上の二失は空に著し、無生法に著するを以ての故に、更に檀「那」波羅蜜「多」等の功德を修すること能はず、而も邪見を生ずるが故に是の念を作さく、「若し法はすべて空ならば、復何ぞ行する所あらん」と。是の人

【二】 二種の失。  
 【三】 第三問、著空及び著無性の二失の因縁は或は然らんも、今何が故に布施等を生ずるも亦失なりと言ふや。



は空に著せず、無性に著せざるを以ての故に、檀(檀)那(那)波羅蜜(多)等を行じて、是の念を作さく、「能く空、無性に著せずして、而して能く是の功德を行ずるは、是を眞道と爲す」と。是も亦失と爲す。「そは」其の心に希望有るを以てなり。若し般若を失すれば則ち檀(檀)那(那)波羅蜜(多)乃至大悲を行ずること能はず。何となれば、阿耨多羅三藐三菩提は、是れ眞實の法にして、般若波羅蜜(多)は此と相似し、檀等の諸の善法は相似せず、「そは」其の相を取りて著するを以ての故なり。若し菩薩は自ら一切法を憶想分別して相を取らざれば、諸佛は是を知り已つて阿耨多羅三藐三菩提を得。(三)相を取らずとは畢竟空に名く。諸相の滅を取るべからざるが故に、亦他人の爲に開示演說せば、則ち般若を失す。是の人よ空を求むるを以て則ち失し、無性を「求むる」も亦失す。我は是れ凡夫、生死の人にして諸の煩惱未だ盡さず、云何が能く得んと。但佛語に隨つて自ら分別せず、而も定心もて、他人の爲に説いて一切の相を取らず、是れ佛法なり。種種の因縁をもて、此の事を以て開示し教詔するは、是も亦失と爲す。何となれば、諸佛は諸法に於いて、得取する所無ければなり。義も亦是の如く、是れ相を取らず、法乃至假名字をも説くべからず、何に況んや、所得有らんや。「そは」諸法の寂滅相には諸の戲論無く、一切の語言の道斷すればなり。須菩提、是の念を作さく、「若し空に失有らば、空空の中にも亦失有り、無取法の中にも亦失有り、然も道無かるべからず。今當に佛に問ひたてまつるべし、云何が行者は是の過失無きや」と。佛答へ

【三】 不取相の義解。

たまはく、「若し菩薩、諸法の畢竟空にして、所有無く、是の法を取るべからず、知ることを得べからざるを知り、是の如く行すれば、則ち失すると無けん」と。菩薩は、(四)畢竟空に著し、無性に著し、菩薩の所行の道に著するに、佛説きたまはく、三種は皆失すと。菩薩は是を聞き已つて、則ち著心を捨つるも、今猶佛に著し、所行未だ息まず。「佛の所行の如きは、必ず是れ眞道なり、我れ但當に佛に隨つて行すべし」と。一切法は所有無く不取の相なり、是の故に失と爲す。今能く佛の心中の所得の法の如き、是の如き法相は佛も亦所得無し。所得無きが故に佛を貪貴せず、餘人を輕賤せず。一切衆生に於いて其の心平等なり。此に更に問ふ、「是の如きは是れ清淨の般若にして過失有ること無く、自相を離れて著せず、自相を離れざれば是れ即ち著法有り。若し自相を離れんには、云何が行すべき」と。佛答へたまはく、「若し菩薩、一切法に於いて〔著心〕生ぜざれば、是を能く般若を行すと名く。是の菩薩は、是の色の若くは常、若くは無常等なり、是の色は誰の色なる、是の色は色を破し、誰の色は人の色を破すと説かず。乃至一切種智も亦是の如し。若し法は是の如く畢竟空にして推求するも得べからず、是は生ずべからず、何となれば、性は性を生ずること能はず、無性は無性を生ずること能はざればなり。是の如き等の顛倒を破して、實の論議を得るは、皆是れ般若波羅蜜〔多〕の力なり。餘の波羅蜜〔多〕は皆隨從す。譬へば、轉輪聖王の所至の處有れば、四種の兵も常に隨從し、聖王の福の故に、四種の兵も皆能く飛ぶが如し。

【四】三種の失。

般若力の故に、諸の餘法は皆是れ實性にして同じく佛道に至る。復次に、譬へば、善御駟を駕すれば平道を失せず。馬は車を致す力有りと雖も、若し御者無ければ、則ち所至有ること能はざるが如し。布施等も是の如く、功德果報の力有りと雖も、般若の調御無ければ、佛道に至ると能はず。是の種種の譬喩の如く、五波羅蜜〔多〕は般若の中に入れば、差別無しと雖も是の事を以ての故に、而も般若波羅蜜〔多〕は最尊最妙なりと。

須菩提は、佛の種種の因縁もて般若の最大なることを説きたまふを聞き、又〔著心して〕行せざるは是れ般若波羅蜜〔多〕を行ずるものなることを聞く。是の故に、佛に問ひたてまつる、「世尊よ、何等か是れ菩薩道にして、何等か菩薩道に非ざるや」と。佛答へたまはく、「二乗は菩薩道に非ず、凡夫及び諸の煩惱有りて菩薩道に非ずと雖も、塵なるが故に説かず。二乗は同じく空を行じ、同じく涅槃を求むるが故に、菩薩道に非ずと説く。塵事は人疑はず、細事は人疑ふが故なり。薩婆若は是れ菩薩道なり、〔そは〕因中に果を説くが故なり」と。須菩提歡喜し、般若を讚歎して是の言を作さく、「世尊よ、般若波羅蜜〔多〕は大事の爲の故に起る」と。經中に廣く説くが如し。乃至諸法常住の故なり。須菩提難ずらく、若し般若は所生無く、所滅無くんば、云何が布施、持戒等を行せんと。佛答へたまはく、「般若は所生無く、所滅無きを以て、即ち是れ畢竟空なり。畢竟空なるが故に、六波羅蜜〔多〕を行ずることを妨げず。菩薩は種種の因縁を聞き、一切智を讚じ、一切智の爲の故に、布施等の法を行す。

是の法は一切衆生を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の六波羅蜜「多」の功德は諸法實相の中に安立し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。「そは」是の如き菩薩は、六波羅蜜「多」、慈等の諸の功德を具足し、顛倒せず、正しく善根を行するが故なり」と。

須菩提は問ふ、「菩薩は云何が應に六波羅蜜「多」を習ふべきや」と。佛は答へたまはく、「菩薩は色等の諸法は合せず、散せざるに、色等の諸法は顛倒の煩惱和合するが故に合し、正智慧觀を以てするが故に散すと觀す」と。「菩薩は利き智慧を以て深く觀すれば、則ち法合すると無く、顛倒の煩惱は皆虛誑なるが故に、合するに非ず。先に染を破するが如し。染とは事の中に説けり。是の故に菩薩は諸法の本合せざるが故に、亦散すること無きことを知りて、則ち高心を生ぜず。復次に、菩薩は應に是の念を作すべからず、「我は眞智慧を以て、色等の諸法をして清淨ならしめ、而も其の中に住す」と。何となれば、色等の法は住處無ければなり。地は水に住し、水は風に住し、風は空に住するも、空には所住無く、本と住處無きを以ての故に、一切は都べて住すること無きが如く、菩薩は應に是の如く無住の法中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。此の中に譬喩を説く。一五、樹は是れ般若波羅蜜「多」、果は是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。若し人、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、應當に般若波羅蜜「多」の樹を種うべし。人は是れ行者、水は是れ五波羅蜜「多」なり。人は樹に澆灌する時、未だ果實を見ずと雖も、時至れば則ち得るが如く、時節

【五】元明俱に樹を子に作る。

の和合もて是れ諸法を具足して、經中に説くが如く般若を讚歎す。若し菩薩は、他に隨つて行せず、諸法實相を得んと欲するに、若し邪見の人有り、來つて破壊せんに、覺つて而して隨はず。若し佛國土を淨め、道場に坐し、法輪を轉せんと欲せば、當に般若を學すべし。

須菩提、佛に問ふ、「佛の教へたまふ所の如く、菩薩は當に般若を學すべきや」と。佛言はく、「われ教へて般若を學せしむ」と。須菩提、是の念を作さく、「一切法は平等の相なり、何を以ての故に、但般若を學することを教ふるや」と。佛、答へたまはく、「是の般若波羅蜜(多)を學すれば、一切法に於いて自在を得るが故に、我は般若波羅蜜(多)を學することを教ふ」と。般若波羅蜜(多)は一切法の中に於いて最大なり。佛は一切衆生の中に於いて、最尊なるが如く、又萬川は大海を大と爲すが如し。經中に射師の喩を説くが如し。若し菩薩、能く是の如く、一切法の中に、自在の般若を行せば、魔若くは魔民の勝つこと能はざる所なり、何に況んや、增上慢及び邪見の人をや。是の菩薩は十方諸佛の爲に念せらる。諸佛の念の義は、先に説くが如し。此の中に佛の説きたまはく、若し菩薩、六波羅蜜(多)を行じ、亦能く六波羅蜜(多)の畢畢空を觀すれば、是の如き人は大功夫有るが故に、諸佛の爲に念せらる。譬へば、勇士陣に入り賊を破し而も鎗を被らざれば、則ち主の爲に念せらるるが如し。菩薩も亦是の如く、諸の煩惱の賊を破し、六波羅蜜(多)を具足し、而も六波羅蜜(多)に著せざれば、則ち諸佛の爲に念せらる。諸佛は、是の菩薩の色を取らざるが故に念じ、受想行識を取らざるが故に念

す。何となれば、色等の諸法は虚誑不實なればなり。諸佛は、是の菩薩の身の實相の如くなるを觀するが故に念じたまふと。須菩提歡喜して言はく、「菩薩は多く學する所有り、亦俗法を學し、亦道法を學し、亦諸の波羅蜜多」を學し、亦畢竟空を學し、亦起を學し、亦識を學す。凡人は起を學して、滅を學すること能はず。聲聞は滅を學して起を學すること能はず。菩薩は亦起を學し亦識をも學す。是の故に多く學する所有りと云ふ。是の起滅は幼の如く、夢の如く、畢竟空なるが故に、實に學する所無し」と。佛は其の言を可とし、自ら因縁を説き、菩薩の所學は皆所得無し」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛の所説の法は、若くは略、若くは廣にして、菩薩の應に學すべき所なり。何を以ての故に、學する所皆所得無しと言ふべ」と。

【二六】 廣略兩相の差異。

【二七】 廣略兩相の差異。

須菩提意に「謂へらく」、佛の所説の如きは、八萬四千の法聚、十二部經の若くは廣、若くは略にして諸の三乘人の學する所なり。此の中には、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、應に六波羅蜜多」の若くは略、若くは廣を學すべし。學者應當に是の法を受持し、親近し、讀誦し、思惟し、正觀し、乃至無相三昧、心心數法の不行に入るべし。菩薩は能く是の如く學すれば、則ち能く諸法の略廣の相を知る。(二六) 廣とは八萬四千の法聚より已來、無量の佛法なり。略とは乃至小品、小品中の一品、一品中の一段なり。復次に、略とは、諸法は一切空、無相無作、無生無滅等を知るなり。廣とは諸法の種種の別相の分別なり。後の善知識中に説くが如し。須菩提問ふ、「云何が菩薩は、一切

法の略廣の相を知るや」と。佛答へたまはく、「若し諸法の如如相、所謂る不生、不滅、不住異を知るなりしし。

問うて曰く、二八も若し如は一相、無生の相ならば、云何が菩薩は、是の如を知るが故に、諸法の總相、別相を知るや。總相、別相は即ち是れ略廣の相なり。答へて曰く、如は諸法實相常住不壞に名け、諸觀に隨はず。菩薩は是の如を得て、即ち無明、邪見等の諸の顛倒を破す。是の法は實法を得るが故に、一切世間法の總相、別相を了了に先づ知る。凡夫の時は智慧の眼病み、無明顛倒に覆はるるを以ての故に、實に知ることを能はず。

問うて曰く、「二九」實法相とは、所謂る空・無相・無作にして諸智滅す。云何が如實の相を得るが故に、了了に諸法の總相、別相を知ると言ふか。答へて曰く、我れ已に先に答へたり、而も汝は如の中に於いて相を取るが故に、復是の難を作す。汝若し如を知らば、是の難を作すべからず。是の如は畢竟無相なるが故に、諸法の總相、別相を知ることを妨げず。「そは」智慧の眼了了なるを以ての故なり。

復次に、譬へば、人既に長大すれば、乃ち少時の所行皆愚癡にして笑ふべきが如し。菩薩も亦是の如く、諸法實相に入り、起ち已つて還つて顛倒の果報、六情の中に在り、寂滅解脱の樂を念じ、乃ち世間六情の著する所は、皆是れ虚誑にして捨つべき法なることを知る、是を總相と名く。此の中に不

【二八】第四問、菩薩は「如は一相、無生の相なる」とを知るしとせば、何が故に諸法の總相、別相即ち廣略兩相を知るや。  
【二九】第五問、如實の相を得るが故に、了了に諸法の總相、別相を知るといふ理由如何。

淨を分別するに、上中下有りの無常苦空無我等も亦是の如し。乃至八萬四千種の諸の錯謬あり。

復次に、如法性實際を知るが故に、亦諸法の略廣の相を知る。如法性實際の差別の義は、初品

の中に説くが如し。此の中に、佛説きたまはく、非際は是れ實際なりと。

【100】非際とは相の取るべき無く、定法の著すべき無く、法性を得るが故に

色等の十八性は皆是れ法性なることを知るなり。法性の相とは、佛説きた

まはく、分無く非分無しと。分無しとは此を示し、彼を示すべからず、分

別無く相無く量無きなり。非分無しとは、是の無相、無量等に著せず、量

相、法性を破す。二事を妨ぐるが故に見ず、一には有相有量、二には無相

無量なり。有相有量を麤と爲し、無相無量を細と爲す。是の故に法性の相

は分無く、非分無しと説く。菩薩は三解脱門に入り、如等の三實法に

住すれば、則ち能く籌量して一切法の總相別相を知る。須菩提は佛の答を

聞き已り、更に無量の佛法、異門の事を問はんと欲す。佛答へたまはく、

一切法の無合無散なることを知るが故に、則ち諸法の總相別相を知ると。

問うて曰く、眼に二指を見るに合散有り、云何が合散無しと言ふや。各へて曰く、我れ先に言へ

り、肉眼の見る所は牛羊と異なること無く、信すべからずと。復次に、三節、皮肉を具足するを指と

【100】 非際の義解。

【101】 法性の相の義解。

【102】 三解脱門とは、單重の二

種あり。舊に三三昧と云ひ、

三定又は三三昧と云ひ、無

到有漏定を三三昧と云ひ、無

漏定を三解脱門と云ふ。單の

三三昧とは空、無相、無願の

三昧を云ひ、重の三三昧とは

空空、無相無相、無願無願の

三昧を云ふなり。

【103】 第六問、眼に二指を見る

に有合有散なり、何が故に無

合無散なりといふや。



爲し、指に定法無しと。復次に、設ひ指法有るも、亦盡く合せず、一分合して多分合せず、多分合せざるが故に、指合すと云ふことを得ずと。

問うて曰く、少しく合するを以ての故に、名けて合すと爲すや。答へて曰く、指は少分を名けて指と爲さず、云何が指合すと言はん。多分合せざれば、名けて合すと爲さず、何を以てか、少分合するが故に、名けて合すと爲さん。是の故に二指は合すと云ふことを得ず。

復次に、指と分とは異ならず、一ならざるが故に、即ち是れ指無し。指

無きが故に合無し。一異を破する門中に入れば、則ち都べて合無し。佛、

此の中に説きたまふが如し。一切法の自性は無なり、性無きが故に、即ち

是れ無法なり。無法ならば、云何が合散有らん。須菩提は、佛の如法性實際の不合不散の四門を説きたまへるを聞いて略攝の相を知る。是の故に須菩提言さく、「世尊よ、是を般若波羅蜜(多)を略攝すと名く。略攝の門は是れ安隱の道なるが故に、一切の菩薩の應に學すべき所なり」と。

【四】第七問、盡く合せず、又多分合せざるが故に「合す」と言はずとせば、少しく合するが故に「合す」と名くるや如何。

# 卷の第八十三

## 方便品第六十九の下を釋す。

經

「世尊よ、是の門には、利根の菩薩摩訶薩能く入る」と。佛の言はく、「鈍根の菩薩も亦是の門に入るべし、中根の菩薩、散心の菩薩も、亦是の門に入るべし、是の門は無礙なればなり。若し菩薩摩訶薩、一心に學する者は、皆是の門に入り、懈怠、少精進・勞憶念・亂心の者は入る能はざる所なり。精進にして懈怠せず、正憶念・攝心の者は能く入る。阿耨跋致地に住せんと欲し、一切種智を速せんと欲する者は能く入る。

【一】略攝門は甚深なるも、鈍根散心の菩薩も亦入るべき」とを明す。

是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜多の所説の如く、當に學すべく、乃至檀(那)波羅蜜(多)の所説の如く當に學すべし。是の菩薩摩訶薩は、當に一切智を得べし。是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行すれば、所有る慶事起らんと欲するも即ち滅す。是を以ての故に、菩薩摩訶薩、方便力を得んと欲せば、當に般若波羅蜜(多)を行すべし。若し菩薩摩訶薩、是の如く行じ、是の如く習ひ、是の如く般若波羅蜜(多)を修せば、是の時、無量阿僧祇の國土の現存の諸佛は、是の般若波羅蜜(多)を行する菩薩を念じたまふ。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中には、過去未來現在の諸佛を生ずればなり。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は應に是の如く思惟すべし、過去未來現在の諸佛の所得の法、我も亦た當に得べしと。

是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に般若波羅蜜(多)を習ふべし。若し是の如く般若波羅蜜(多)を習はば、疾かに阿耨

多羅三藐三菩提を得。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、常に應に薩婆若の念を遠離せざるべし。若し菩薩摩訶薩、是の如く般若波羅蜜(多)を行すると、乃至彈指の頃なるも、是の菩薩の福德は甚だ多し。若し人有りて、三千大千世界中の衆生をして、自ら志に布施せしめ、教へて持戒・禪定・智慧せしめ、教へて解脫・解脫智見を得せしめ、教へて須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道を得せしむるも、是の菩薩の般若波羅蜜(多)を修すること、乃至彈指の頃なるには如かず。何となれば、是の般若波羅蜜(多)の中には、布施・持戒・禪定・智慧・須陀洹果乃至辟支佛道を生じ、今十方現在の諸佛も亦般若波羅蜜(多)の中より生じ、過去未來の諸佛も亦般若波羅蜜(多)の中より生ずればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に薩婆若を念すべし。般若波羅蜜(多)を行すると、若くは須臾の時、若くは半日、若くは一日、若くは一月、若くは百日、若くは一歳、若くは百劫、若くは百劫、乃至無量無邊阿僧祇劫ならば、是の菩薩は是の般若波羅蜜(多)を修し、福德甚だ多く、十方恆河沙等の世界中の衆生に、布施・持戒・禪定・智慧・解脫・解脫智見を教へ、教へて須陀洹果乃至辟支佛道を得せしむるに勝れり。何となれば、諸佛は般若波羅蜜(多)の中より生じて、是の布施・持戒・禪定・智慧・解脫・解脫智見・須陀洹果乃至辟支佛道を説けばなり。若し菩薩摩訶薩有りて、般若波羅蜜(多)の所説の如く住せば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、是れ阿耨跋致にして、諸佛の爲に念ぜられ、是の如き方便力を成就すること。當に知るべし、是の菩薩は無量千萬億の諸佛に親近し供養し、善根を種ふ、善知識と相隨ひ、久しく六波羅蜜(多)を行じ、久しく十八空、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智を修すること。當に知るべし、是の菩薩は法王子地に住し、諸願を満足し、常に諸佛を離れず、諸の善根を離れず。一佛國より一佛國に至ること。當に知るべし、是の菩薩は辯才無盡にして、陀羅尼身を具足し、色具足し、受記具足するが故に、衆生の爲に身を受くることを。當に知るべし、是の菩薩は善く字門を知り、善く非字門を知り、言を善くし、不言を善くし、一言を善くし、二言を善くし、多言を善くし、

善く女語を知り、善く男語を知り、善く色乃至識を知り、善く世間の性を知り、善く涅槃の性を知り、善く法相を知り、善く有爲相を知り、善く無爲相を知り、善く有法を知り、善く無法を知り、善く自性を知り、善く他性を知り、善く合法を知り、善く散法を知り、善く相應法を知り、善く不相應法を知り、善く如を知り、善く不知を知り、善く法性を知り、善く法位を知り、善く緣を知り、善く無緣を知り、善く陰を知り、善く界を知り、善く入を知り、善く四諦を知り、善く十二因緣を知り、善く禪を知り、善く無量心を知り、善く無色定を知り、善く六波羅蜜(多)を知り、善く四念處を知り、乃至善く一切種智を知り、善く有爲性を知り、善く無爲性を知り、善く有性を知り、善く無性を知り、善く色觀を知り、善く受想行識觀を知り、乃至一切種智觀を知り、善く色と色相の空を知り、善く受想行識と識相の空を知り、乃至善く菩提と菩提相の空を知り、善く捨道を知り、善く不捨道を知り、善く生を知り、善く滅を知り、善く住異を知り、善く欲を知り、善く瞋を知り、善く癡を知り、善く不欲を知り、善く不瞋を知り、善く不癡を知り、善く不見を知り、善く不礙を知り、善く正見を知り、善く一切見を知り、善く名を知り、善く色を知り、善く名色を知り、善く因緣を知り、善く次第緣を知り、善く緣緣を知り、善く増上緣を知り、善く行相を知り、善く苦を知り、善く集を知り、善く滅を知り、善く道を知り、善く地獄を知り、善く餓鬼を知り、善く畜生を知り、善く天人を知り、善く天を知り、善く地獄趣を知り、善く餓鬼趣を知り、善く畜生趣を知り、善く人趣を知り、善く天趣を知り、善く須陀洹を知り、善く須陀洹果を知り、善く須陀洹道を知り、善く斯陀含を知り、善く斯陀含果を知り、善く斯陀含道を知り、善く阿那含を知り、善く阿那含果を知り、善く阿那含道を知り、善く阿羅漢を知り、善く阿羅漢果を知り、善く阿羅漢道を知り、善く辟支佛を知り、善く辟支佛果を知り、善く辟支佛道を知り、善く佛を知り、善く一切種智を知り、善く一切種智道を知り、善く善根を知り、善く諸根具足を知り、善く慧を知り、善く疾慧を知り、善く有力慧を知り、善く利慧を知り、善く出慧を知り、善く達慧を知り、善く廣慧を知り、善く深慧を知

り、善く大悲を知り、善く無等慧を知り、善く實慧を知り、善く過去世を知り、善く未來世を知り、善く現在世を知り、善く方便を知り、善く待衆生を知り、善く心を知り、善く深心を知り、善く義を知り、善く語を知り、善く三乗を分別することを知る。須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、般若波羅蜜(多)を生じ、般若波羅蜜(多)を修して、是の如き等の利益を得しと。

釋しく曰く、(三)須菩提意へらく、四種の門を以て安隱とすと雖も、甚深なるを以ての故に利根の者は乃ち入ることを得と。佛答へたまはく、入らざる者無しと。須菩提は、智慧利根の者の能く入ることを明にせり。佛意(に依れ)ば、但一心に學せんと欲する者のみ入るべし。譬へば、熱時に清涼の池には目有り足有れば皆入るべきに、近しと雖も、入ることを欲せざる者は則ち入らざるが如し。四門の般若波羅蜜(多)の地も亦是の如く、四方の衆生を遮ぎること有る者無し。懈怠せずとは、是れ正精進なり。妄念せずとは、是れ正念なり。亂心ならずとは、是れ正定なり。是の如き等の四門は是れ正見なり。正見等に安住するは、是れ戒行なり。此の八聖道は能く般若波羅蜜(多)を得。須菩提は小乘にして智短きが故に、但利根の者のみ能く入ると説く。佛は大乘にして大智なるが故に、中根、鈍根なりと雖も、八法和合するが故に、能く是の四門に入ると説きたまへり。佛は此の中に大悲の氣の故に説きたまはく、中根、鈍根皆入ることを得べしと。若し菩薩は能く般若の所説の如く、六波羅蜜(多)を學すれば、久

【二】以下中下根の者と雖も所説の如く精進すれば薩婆若を得べきことを明す。

しからずして當に薩婆若を得べし。聲聞法中の如きは、但正見のみを以ては道を得ず、八分合行するを以ての故に「得」。大乘の法も亦是の如く、但般若を學するのみの故に得ず、薩婆若と五波羅蜜「多」と合するが故に得。是の故に菩薩は説く所の如く、般若波羅蜜「多」を當に學して一切智を得べしと説くなり。

問うて曰く、上には但般若のみ、能く一切種智に至ると説き、今は何を以てか五波羅蜜「多」と合するが故に至ることを得と言ふや。答へて曰く、常に六波羅蜜「多」と合するが故に至ることを得と説く。或る時は清淨の佛國有り、但實相を聞くのみにして薩婆若に至ることを得、次第に諸の波羅蜜「多」を行することを用人す。此の中には菩薩薩婆若を得れば、則ち般若の功報已に足ると説く。

【三】第一問、上の八十二卷に於ては但般若のみ能く一切種智に至ると説きしに、今本卷に於ては何が故に「五波羅蜜多と合するが故に一切種智を得」といふや。

今は但般若を行する人の力勢を讚す、經中に説くが如し。是の菩薩は般若を行するも、所有る魔事起らば即ち滅す。上の諸佛の所念より此に來至するまで、皆是れ菩薩の般若を行する功徳を讚じ、乃至分別して善く三乘を知る。善く字門を知るとは、文字陀羅尼中に説くが如し。非字を如法性實際と名け、此の中には文字無し。略して義を説けば、是の菩薩は無量の福徳力の故に、善く二法なる世間「法」及び涅槃「法」を知るなり。若し世苦を厭へば則ち涅槃を念じ、若し涅槃に没せんと欲せば還つて世間を念す。諸の福徳道を集むるが故に善く字を知り、福徳の中の顛倒を

破するが故に善く無字を知る。語と不語も亦是の如し。一語とは是の一語を以て、能く多と少、淨語と不淨語、一語と二語と多語、男語と女語等は音聲各異なることを分別す。菩薩は善く是の事を知るが故に、能く諸の邪道及び諸の豪勝を伏し、善く色乃至識の二種の相なる若くは常「相」、若くは無常「相」を知る、先に説くが如し。善く道を捨つることを知る者は、菩薩は一地より一地に至り、下地を捨てて憂へず、上地を得て貪らず。道を捨つることを「知ら」ざる者は、是の地の中の邪見に住し、次に世間の正見、一切の見、學無學等の諸見「に住す」。行とは十六行なり。善く須陀洹を知る者は人なり。須陀洹道とは見諦道なり。須陀洹果は第十六心なり。心數法及び無漏戒等の諸法より、乃ち佛に至るも、亦是の如し。善く諸根を知るとは、善く二十二根を分別するなり。有る人の言はく、度すべき衆生の根を觀るに利鈍有り。具足せる者は度すべく、具足せざる者は未だ度すべからざるなりと。又菩薩も亦自ら善根の具足と不具足とを知る。鳥の子の自ら毛羽の具足せるを知り、爾して乃ち飛ぶ可きが如し。

【四】一語の義解。  
【五】以下慧に就ての種種相を明す。

慧とは一切の智慧の總相なり。疾慧とは速に諸法を知るなり。有る人は疾なりと雖も、而も智力強からず。馬は疾なりと雖も、而も力弱きが如し。有る人は強き智力有りと雖も、而も利ならず。譬へば鈍斧は大力有りと雖も、物を破すると能はざるが如し。出慧とは種種の難中に於て能く自らを拔出し、亦能く諸の煩惱中より、自ら三界を拔出して涅槃に入るなり。達慧とは佛法中に究盡通達し、乃至

漏盡るどもて涅槃ねはんを得え、諸法しよほふを破壊はして法性ほつしやう中に到いたる。廣慧くわうゑとは道俗だうぞくの種種しゆじゆの經書論議きやうしよろんぎにして、佛法ぶつぽう中の有無うむに於おいて悉しつく知らざること無し。深慧じんゑとは一切法いつせほふの無礙むげ無相むさう、不可思議ふかしぎの世間せけんを觀くわんず。深慧じんゑの者は能よく久遠くゑんの事じ、利中りちゆうに裏有すみありり、裏中すみちゆうに利有りありることを知る。大慧たいゑとは總そうじて上の諸慧しよゑを具ぐするを名なづけて大たいと爲なし、又復またまた一切衆生いつせしやうじやうの中なかには佛ぼつを大だいと爲なし、諸法しよほふの中なかには般若はんにやを大だいと爲なし、佛ぼつを知しり、法ほふを信しんじ、大法だいほふと和合わがふするが故ゆゑに、名なづけて大だいと爲なす。無等慧むとうゑとは般若はんにやの中なかに於おいて般若はんにやに著ちやくせず、能よく是こゝの如ごとく深く入いり、更またに法ほふとして喻たとふべきもの無なきなり。復次またまたに菩薩ぼさつは漸漸ぜんぜんに道だうを行ぎやうじて、不可思議ふかしぎ性しやう中に到いたり、「是これと」等ひとしき者もの有ありること無なきが故ゆゑに無等むとうと名なづく。實慧じつゑとは如意寶にやいほうは自ら定色ぢやくしき無なくして前物ぜんぶつに隨したがつて變へんするが如ごとし。般若はんにやも亦是またかくの如ごとく自ら定相ぢやくさう無なくして諸法しよほふの行ぎやうに隨したがふ。又如またまた意珠いじゆは願がんに隨したがつて皆みな得えるが如ごとく、般若はんにやも亦是またかくの如ごとし。人ひと有ありり、行ぎやうする者ものは能よく佛願ぶつぐわんを得え、何いかに況いはんや、餘よの者ものをや。

過去くわこは已すに滅めつし、未來みらいは未いまだ起おこらず、「是こゝの故ゆゑに」有うと言いふことを得えず、無むと言いふことを得えず。是こゝの中なかに於おいて能よく實相じつさうを行ぎやうず、是これを善よく知しると名なづく。現在げんざいの法ほふは念念ねんねんに生滅しやうめつするが故ゆゑに知しるべからず、而しかも能よく通達つうたつす、是これを善よく知しると名なづく。現在げんざい世せいの方便べんぽうは其そのの事じを成辦じやうばんせんと欲ほつして、能よく因緣いんねんの多少たさうを具足ぐそくし、所しよを得えて中なかに於おいて失有しつちゆうらしめざるに名なづくるなり。菩薩ぼさつは空くうを行ぎやうずと雖いへども實際じつじやうを證しやうせず、福ふく徳とくを行ぎやうずと雖いへども亦復またまた著ちやくせざるが如ごとし。衆生しゆじやうを待まちつとは賈客こぎやくの大將たいしやうの快馬けいまに乗じやうじ、能よく疾はやく所止しよしに到いたると雖いへども、故ゆゑに衆人しゆじんを待まちつが如ごとし。菩薩ぼさつも亦是またかくの如ごとく、知慧ちゑの快馬けいまに乗じやうじて、能よく疾はやく涅槃ねはんに入いると雖いへど



も、亦衆生を待つが故に入らず、善く衆生の種種の善惡心を知る。深心とは現在に惡むりと雖も其の本は則ち好し。父母の子を搥つは外は惡にして内は善なるが如し。佛、央掘魔羅を度したまふが如きは、其の淺心は惡なりと雖も、深心は實に善なるとを知りたまふ。菩薩は衆生の信等の五善根の深心中より來るを觀じ、是の時度すべし。義とは二有り、亦是法、亦是名なり。語とは語言にして名字を以て物を得るなり。義無礙・法無礙を得るが故に善く知ると名け、義辭無礙・樂說無礙の故に善く語を知ると名く。菩薩は是の二善知の中に住し、能く三乘を以て衆生を度す。是を善く分別して三乘を知ると名く。是の如く、解し難きが故に説き、解し易き者を説かず。問うて曰く、何を以ての故に、先には善く色乃至識を知ると説き、後には〔五〕衆〔十八〕界〔十二〕入を知ると説くや。何を以てか先には善く縁を知ると説き、後には次第縁に因りて増上すと説くや。答へて曰く、先には廣く説き、後には略して説くなり。復有る人の言はく、先の五衆には三種有り、善・不善・無記なり。戒衆等の五も亦名けて五衆縁と爲す。先には略して説き、後には廣く説なりと。

(八) 三慧品第七十の上を釋す。

【六】 深心の義解。  
 【七】 第二問(一)先には色乃至識を知ると説き、後には衆・界・入を知ると説く理由如何。  
 (二)先には善く縁を知ると説き、後には次第縁によりて増上すと説く理由如何。  
 【八】 此の品には、般若の行を明す、中に三智を辨するが故に三慧品といふ。漢文原本には三惠品とあるも、他本に隨つて三慧と改めたり。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜(多)を生じ、云何が般若波羅蜜(多)を修するや」と。佛の言はく、「色は寂滅なるが故に、色は空なるが故に、色は虚誑なるが故に、色は不堅實なるが故に、應に般若波羅蜜(多)を行すべし。受想行識も亦是の如し。汝が問ふ所の如く、云何が般若波羅蜜(多)を生ずるやとば、如虚空生の故に、應に般若波羅蜜(多)を生ずべし。汝が問ふ所の如く、云何が般若波羅蜜(多)を修するやとば、諸法破壞を修するが故に、應に般若波羅蜜(多)を修すべし」と。須菩提言さく、「世尊よ、般若波羅蜜(多)を行じ、般若波羅蜜(多)を生じ、應に般若波羅蜜(多)を修することは、應に幾の時なるべきや」と。佛の言はく、「初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、應に般若波羅蜜(多)を行すべく、應に生ずべく、應に修すべし」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、次第心もて應に般若波羅蜜(多)を行すべきや」と。佛の言はく、「常に薩婆若心を捨てず。餘念をして入ることを得せしめざるを、般若波羅蜜(多)を行すと爲し、般若波羅蜜(多)を生ずと爲し、般若波羅蜜(多)を修すと爲す。若し心心數法を行ぜざるが故に、般若波羅蜜(多)を行すと爲し、般若波羅蜜(多)を生ずと爲し、般若波羅蜜(多)を修すと爲す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を修すれば、當に薩婆若を得べきや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、般若波羅蜜(多)を修せずして、薩婆若を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、佛の言はく、「不なり」と。世尊よ、修するも修せざるも薩婆若を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、非修、非不修も、薩婆若を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、若し爾らざれば、云何が當に薩婆若を得べきや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は薩婆若を得ること、如相の如し」と。「世尊よ、云何が如相の如くなるや」と。「實際の如し」と。「云何が實際の如くなるや」と。「法性の如し」と。「云何が法性の如くなるや」と。「我性、衆生性、壽命性の如し」と。「世尊よ、云何が我性・衆生性・壽命性なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、我、衆

生・壽命法は得べきや不<sup>な</sup>や」と。須菩提言さく、「得べからず」と。佛の言はく、「若し我・衆生・壽命は得べからずんば、云何が當に我性・衆生性・壽命性有り」と説くべけんや。若し般若波羅蜜(多)の中に、一切法有ることを説かざれば、當に一切種智を得べし」と。

須菩提言さく、「世尊よ、但般若波羅蜜(多)のみは是れ不可説なりや、禪(那)波羅蜜(多)乃至檀(那)波羅蜜(多)も亦不可説なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「般若波羅蜜(多)は不可説なり、檀(那)波羅蜜(多)乃至一切法、若くは有爲、若くは無爲、若くは聲聞法、若くは辟支佛法、若くは菩薩法、若くは佛法も亦不可説なり」と。「世尊よ、若し一切法不可説ならば、是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ人、是れ天、是れ須陀洹、是れ斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、是れ諸佛なり」と説くや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、是の衆生の名字は實に得べきや不<sup>な</sup>や」と。「世尊よ、得べからず」と。佛の言はく、「若し衆生は得べからずんば、云何が當に地獄・餓鬼・畜生・人・天・須陀洹乃至佛有り」と説くべけんや。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、應當に一切法の得べからざることを學すべし」と。

須菩提言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を學する時、應に色受想行識を學すべく、乃至應に一切種智を學すべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を學する時、應に色の不増不減を學すべく、乃至應に一切種智の不増不減を學すべし」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が色の不増不減を學し、乃至一切種智の不増不減を學するや」と。佛の言はく、「不生不滅なるが故に學す」と。「世尊よ、云何が不生不滅の學と名くるや」と。佛の言はく、「諸法の行業の若くは有、若くは無を起さず、作さざるが故なり」と。「世尊よ、云何が諸の行業の若くは有、若くは無を起さず、作さざるや」と。佛の言はく、「諸法は自相空と觀するが故なり」と。「世尊よ、云何が應に諸法は自相空と觀すべきや」と。

佛の言はく、「應に色、色相空を觀すべく、應に受想行識、識相空を觀すべく、應に眼、眼相空、乃至意、色乃至法、眼識

界乃至識界、意識界相空を觀すべく、應に內空、內空相空を觀すべく、乃至應に自相空、自相空相空を觀すべく、應に四禪、四禪相空、乃至滅受想定、滅受想定相空を觀すべく、應に四念處、四念處相空、乃至阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提相空を觀すべし。是の如く、須菩提よ、菩薩は般若波羅蜜(多)を行ずる時、應に諸法の自相空を行すべし」と。

「世尊よ、若し色・色相空、乃至阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提相空ならば、云何が菩薩摩訶薩は、應に般若波羅蜜(多)を行すべきや」と。佛の言はく、「行ぜざるをば是を般若波羅蜜(多)を行すと名く」と。「世尊よ、云何が行ぜざるをば般若波羅蜜(多)を行すとせずや」と。佛の言はく、「般若波羅蜜(多)は得べからざるが故に菩薩は得べからず。行も亦得べからず、行者・行法・行處も亦得べからざるが故に。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行ぜざるを行すと名く。(そは)一切の諸論は得べからざるが故なり」と。「世尊よ、若し行ぜざる、是を般若波羅蜜(多)を行すとせば、初發意の菩薩は、云何が般若波羅蜜(多)を行すと」と。「須菩提よ、菩薩は初發意より已來、應に空無所得の法を學すべし、(そは)是の菩薩は無所得の法を用ふるが故に、布施・持戒・忍辱・精進・禪定は無所得の法なるを以ての故なり。智慧乃至一切種智を修するも亦是の如し」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が有所得と名け、云何が無所得と名くるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸の二有る者は、是れ有所得なり。二有ること無き者は、是れ無所得なり」と。「世尊よ、何等か是れ二にして有所得、何等か是れ不二にして無所得なるや」と。佛の言はく、「眼と色を二と爲し、乃至意と法を二と爲し、乃至阿耨多羅三藐三菩提と佛とを二と爲す。是を名けて二と爲す」と。「世尊よ、有所得の中より無所得ありや、無所得の中より無所得ありや」と。佛の言はく、「有所得の中より無所得あるにあらず、無所得の中より無所得あるにあらず。須菩提よ、有所得と無所得と平等なる、是を無所得と名く。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、有所得と無所得の平等法中に於いて應に學すべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩の是の如く般若波羅蜜(多)を學する、是を無所得の者と名くれば、過失有る、と無し」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が有所得と名け、云何が無所得と名くるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸の二有る者は、是れ有所得なり。二有ること無き者は、是れ無所得なり」と。「世尊よ、何等か是れ二にして有所得、何等か是れ不二にして無所得なるや」と。佛の言はく、「眼と色を二と爲し、乃至意と法を二と爲し、乃至阿耨多羅三藐三菩提と佛とを二と爲す。是を名けて二と爲す」と。「世尊よ、有所得の中より無所得ありや、無所得の中より無所得ありや」と。佛の言はく、「有所得の中より無所得あるにあらず、無所得の中より無所得あるにあらず。須菩提よ、有所得と無所得と平等なる、是を無所得と名く。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、有所得と無所得の平等法中に於いて應に學すべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩の是の如く般若波羅蜜(多)を學する、是を無所得の者と名くれば、過失有る、と無し」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩、般若波羅蜜(多)を行じ、有所得を行ぜず、無所得を行ぜざれば、云何が一地より一地に至りて、一切種智を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、有所得中に住せずして、一地より一地に至る。何となれば、有所得中に住すれば、一地より一地に至ること能はざればなり。何となれば、須菩提よ、無所得は是れ般若波羅蜜(多)の相、無所得は是れ阿耨多羅三藐三菩提の相、無所得は亦是れ般若波羅蜜(多)を行する者の相なればなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く、般若波羅蜜(多)を行すべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し般若波羅蜜(多)は得べからず、阿耨多羅三藐三菩提も亦得べからず。般若波羅蜜(多)を行する者も亦得べからずんば、云何が菩薩摩訶薩は、諸法の相を分別して、是れ色なり、是れ受想行識なり、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとするや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、色は得べからず、乃至阿耨多羅三藐三菩提は得べからずんば、云何が檀那(波羅蜜(多))を具足し、乃至般若波羅蜜(多)を具足し、菩薩法位の中に入り、入り已つて佛國土を淨め、衆生を成就し、一切種智を得、一切種智を得已つて法輪を轉じ、佛事を作し、衆生を生死より度するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は色の爲にせざるが故に、般若波羅蜜(多)を行じ、乃至阿耨多羅三藐三菩提の爲にせざるが故に、般若波羅蜜(多)を行ぜずし」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩は何事の爲の故に、般若波羅蜜(多)を行するや」と。佛の言はく、「爲にする所無きが故に、般若波羅蜜(多)を行す。何となれば、一切諸法は所爲無く、所作無く、般若波羅蜜(多)も亦所爲無く、所作無く、阿耨多羅三藐三菩提も亦所爲無く、所作無く、菩薩も亦所爲無く、所作無ければなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に般若波羅蜜(多)を行して、所爲なく、所作無かるべし」と。

論

釋して曰く、聽者は種種の般若の功德を讚するを聞くことを得て善く一切の事を知るも、而も是の般若波羅蜜(多)の方便を貴愛して得んと欲す。須菩提は衆人の意をしり、是の故に佛に問ひたてまつれり、「世尊よ、云何が般若を行じ、云何が生じ、云何が修するや」と。有る人の言はく、行とは、乾慧地に在り、生とは、無生忍法を得、修とは無生忍法を得て後、禪(那)波羅蜜(多)を以て般若に熏修すと。佛答へたまはく、(二三)五衆は是れ一切の世間心に行ずる所の結縛の處にして、涅槃は是れ寂滅の相なり。菩薩は般若波羅蜜(多)の利き智慧力を以ての故に能く五衆を破し、通達して空ならしむ、即ち是れ涅槃寂滅の相なり。寂滅より出でて六情中に住し、還つて寂滅相を念じ、世間の諸法は皆是れ空・虛誑・不堅實なることを知る、是を般若と名く。般若を行するに定相無きが故に、若くは有、若くは無と説くことを得べからず、言語の道斷するが故に空にして虚空の如し。是の故に虚空の生するが如しと説く。又虚空の如きは、虚空の中には法生すること有ること無く、虚空も亦生せらるること有ること能はず。何となれば、法無く、形無く、觸無く、作相無ければなり。般若波羅蜜(多)も亦是の如しと。(二三)復有る

【九】 以下聽者の般若に對する執著を破せんが爲の故に、其の體相の空・虛誑・不堅實なることを明す。

【一〇】 乾慧地とは三乘共十地の初地位なり。是れ外凡の位にして、藏教の五停心、別總念處・總相念處の三賢の位に當る。乾は乾燥の義なり、此の位には未だ法性の理水を得ざる智慧なれば之を乾慧と云ひ、又有漏の智慧は法性の理水を以て潤さざるが故に乾慧と云ふ。

【一一】 無生忍法とは諸法實相の中に於て、無生無滅の理に安住し、通達無礙にして不動不退なるを云ふ。

【一二】 以下般若の行相を明す。  
【一三】 以下般若の生相を明す。

人の言はく、是の虚空有るも但常法にして無作なるを以ての故に生ずること能はず、是を定相と爲すと。摩訶衍の中には虚空を無法と名け、常と説くことを得ず、無常と説くことを得ず、有と言ふことを得ず、無と言ふことを得ず。有に非ず、無に非ず、亦不可得にして諸の戲論を滅し、染無く、著無く、亦文字無し。般若波羅蜜〔多〕も亦是の如く、能く世間を觀すること虚空の如くに似たり。是を般若波羅蜜〔多〕を生ずと名く。(四) 菩薩は般若を得已り、甚深禪定に入り、般若の力を以ての故に、禪定及び禪定縁を觀じて皆破壞す。何となれば般若波羅蜜〔多〕は一切法を捨てて、著せざるの相なればなり。是を般若波羅蜜〔多〕を修すと名く。聽者は是の念を作す、「一切法は皆時節有り」と。是の故に須菩提問ふ、般若波羅蜜〔多〕は幾時の行に應するやと。佛答へたまはく、「初發心より乃ち道場に坐するに至るまで、應に行すべし」と。

問うて曰く、(五) 菩薩は初發心より應に十地六波羅蜜〔多〕三十七品一切の善法を行すべきに、何を以てか但般若のみを行すと説くや。答へて曰く、須菩提は但般若のみを問ふが故に、佛は答ふるに、般若を行することを以てしたまへり。又復是の一切法は皆般若と和合し、般若は大なるを以ての故に餘法を説かず。

問うて曰く、(六) 般若波羅蜜〔多〕は無量無限なり、何を以ての故に、道場を以て限と爲すや。答へて

【四】 以下般若の修相を明す。  
 【五】 第三問、菩薩は初發心より十地、六度、三十七品等の一切善法を行すべきに、何が故に但般若のみを行すと説きしや。  
 【六】 第四問、智度は無量無限なるに道場を以て限りとなす理由如何。

曰く、(三七) 先に已に答へたり。是の般若は佛心の中に到れば、轉じて薩婆若と名く。理は一なりと雖も名變するが故に、道場に至りて應に行すべしと言ふ。菩薩は道場に至り、意を發してより已來、得る所の諸法を皆捨て、無礙解脱を得るが故に皆三世に通達す。

問うて曰く、(三八) 彈指の頃も六十念念に生滅す。云何が一心に常に薩婆若を念じて、餘念をして入るとを得せしめざるや。答へて曰く、心に二種有り、一に念念生滅の心と

二に相續次第して生ずるものとを、總じて一心と名く。相續次第して生ずるを以ての故に多しと雖も名けて一心と爲す。是の時、貪恚等の心をして相續して入ることを得せしめず。何となれば、貪恚等の心は久しく住すれば、則ち能く般若波羅蜜(多)を障げ、念少ければ則ち害を爲すこと能はざればなり。此れ新發意の菩薩の爲の故に説く。復大菩薩有り、餘の諸の善法を行すと雖も皆般若と和合し、能く念念の中に餘心をして入らざらしむ。菩薩は多く般若の中に於いて、種種の戲論及び諸の邪心を起す。是の故に佛は教へて常に薩婆若を念じて、餘心をして入るを得ざらしむ。常に念する者は心餘に向はず、縱使ひ死急の事至るも、薩婆若を忘れず。般若波羅蜜(多)の行相とは、所謂の心心數法を行せざるなり。

問うて曰く、(三九) 凡夫人は無想定に入りて若くは無想定に生じ、聖人は有餘涅槃に住して滅盡定に入

【三七】 八十二卷參照。  
 【三八】 第五問、一彈指の間すら六十念念に生滅變遷す、何んぞ一心常恆に薩婆若のみを念じて、餘念を入れざらしむることを得んや。  
 【三九】 第六問、菩薩の般若を行する時、心心數法を行ぜざる理由如何。



り、一切の聖人は無餘涅槃に入りて心心數法を皆行せず。是れ則ち心心數法の不行なり。菩薩は般若を行する時、云何が心心數法を行せざるや。答へて曰く、是の事は阿毗曇の中に説けり。大乘の中心義に非ず。小乗と大乘とは種類の差別有り、先に説けるが如し。是の故に應に阿毗曇を以て摩訶衍を難すべからず。復次に無相三昧中には色等の諸相滅するが故に無相と名け、無相なるを以ての故に應に心心數法を生ずべからず。此れ亦無想定に非ず、滅盡定なり。

問うて曰く、(二) 無相の義は佛種種に説きたまへり。(一) 或は見諦道の信心行法行を名けて無相と爲す、人疾きを以ての故なり。(二) 或は無色定の想は微細にして覺し難きが故に亦無相とも名くと説き、(三) 或は三解脱門中に涅槃を縁するを以ての故に無相と名く。是の故に得ず。但無相を以ての故に、心心數法を行せずと名く。乃至涅槃の無相法をもて縁するすら心心數法を滅せず、何に泥んや、有相法をもて縁するをや。答へて曰く、見諦道中の無色定中に、無相を説くは爾るべし。若し涅槃の無相法を縁すと言ふは、是の事は然らず。佛は常に種種に涅槃の無相無量不可思議の法なることを讚歎したまふ。即ち是は無相無縁の法なり、汝は云何が縁すと云ふや。

問うて曰く、(三) 男女色等の相を滅するが故に無相と名け、涅槃は相無しとは言はず。行者は是の涅槃

【一】 第七問、但無相を以て心心數法を行ぜずとせば、乃至涅槃の無相法、有相法を以て縁するも心心數法を生ぜず滅せざるや。

【二】 第八問、男女色等は無相ならんも、無相を以て心心數法を生ずとせば、涅槃には相あるに非ずや。

槃の相を取りて心心數法を生ず、是を緣すと名くや。答へて曰く、佛説きたまはく、一切有爲の生法は皆是れ魔網・虚誑・不實なりと。若し涅槃を緣する心心數法は是れ實ならば、則ち有爲虚誑の相を失す。若し不實ならば、涅槃を見ること能はず。是の故に汝、涅槃は相有りて緣すべしと言ふは、是の事は爾らず。

問うて曰く、(三)佛自ら涅槃法に三相有りて説きたまへり、云何が無相なりと言ふや。答へて曰く、是の三相は假名にして實無し。何となれば、有を破して三相と爲すが故に、無生・無滅・無住・異・無異と説くも、更に別相無ければなり。

復次に、生相は先に已に種種の因縁もて生を破せり。畢竟不可得なるが故に云何が無生有らん、有爲相・無爲相を離れて得べからず。是の故に無爲は但名字のみ有りて自相有ること無し。

復次に、佛法は眞實寂滅にして戲論無し。若し涅槃は有相ならば、即ち是れ定相の取るべきもの有り、便ち是れ戲論なり。戲論の故に而も諍訟を生ず。若し諍訟・瞋恚すら尙天人の中には生ずるとを得ず、何に況んや涅槃をや。是の故に佛の説きたまはく、涅槃の如きは、無相無量不可思議にして諸の戲論を滅す。此の涅槃の相は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。是の故に應に心心數法有るべからず。先の品に説くが如し。菩薩は般若を行じて心・非心の相を離る。若し非心の相有らば、應當に難じて無心

【三】第九問、佛自ら涅槃法に三相ありと説き給ふ、何が故に無相なりといふや。

の相は云何が般若を行するやと言ふべし。今此の二邊を離るるが故に難すべからず。

復次に、先世の無明・顛倒・邪見の因縁の故に是の身を得、是の身中の心心數法は善有りと雖も、因縁生なるが故に自性無く虚誑不實なり。是の善心の果報は人天の福樂を受く。皆是れ無常なるが故に能く大苦を生ずるも亦是れ虚誑不實なり。何に況んや不善無記心をや。虚誑に由るが故に果も亦虚誑なり。般若波羅蜜(多)は眞なるが故に心心數法を行せず。須菩提、是を聞いて心心數法を行せざるが故に佛に問ふ、「世尊よ、般若波羅蜜(多)を修して薩婆若を得るや不や」と。佛の言はく「不なり」と。何となれば修するを常行積集と名け、皆是れ心心數法の力なればなり。是の故に修すと言はず。修するすら尚ほ得ず、何に況んや、修せざるをや。修と不修とは、是の般若は、無爲法なるが故に修せず」と言ひ、「般若は是れ」能く實相を觀するが故に修すと言ふ。二俱に過あるが故に、「不なり」と「佛は答へたまへり」。

問うて曰く、(三)若し第三の中に過あらば第四の中に何の過かあつて復た不なりと言ひしや。答へて曰く、須菩提は相を取つて心に著するを以ての故に佛は不なりと言ふ。「又」修不修を受くるを以ての故に修するに非ず修せざるに非ず、是の故に佛は不なりと言ふ。若し相を取らざるを以て心に修するに非ず修せざるに非ずと説かば、則ち過有ると無し。須菩提四種を問ひしに佛皆聽したまはず。心惑

【三】第一〇問、若し第三の中に過あらば、第四の中に何の過かあつて復た不なりと言ひ給ひしや。

ふが故に復た問ふ、「世尊よ、今云何が常に薩婆若を得べきや」と。佛答へたまはく、「如は相の如く、如も亦解せず」と。是の故に佛は實際の如しと言へり。

問うて曰く、「(四) 如品の中に須菩提自ら善く如を説けり、今云何が疑ありや。答へて曰く、是の如は一定の相無し、是の故に問はざることを得ず。若し如に一定の相ありといはば、便ち應に已に解すべし。是の如は甚深無量なるが故なり。須菩提は處あつて解し、處あつて解せず。譬へば、人あり、深きに入る者も淺きに入る者も、皆水に入ると名け、淺きに入る者を水に入らずと言ふことを得ざるが如し。

問うて曰く、「(三) 何を以てか、如を以て實際に喩へ、而して實際を以て如に喩ふるや。實際は何の解し易きと有るが故に譬喩とするや。答へて曰く、如實際は是れ一物なりと雖も、觀る時を異にす。是の如き諸法の體性實際をば是の行者は心に證(と爲して)取る。佛は須菩提の是の實際を得て證と爲すを(知)りたまふを以ての故に、以て譬喩と爲したまへり。

問うて曰く、「(五) 常に法性を説く次(第)に、如實際は法性に次ぐ。今法性は何を以てか後に在るや。答へて曰く、今我性・衆生性を以て畢竟空を説かんと欲するが故に、次を轉じて後に在り。

復次に、見諦道の學道中より、能く諸法を觀すること、無學道中の如し。煩惱盡くるが故に定心に

【四】 第一問、須菩提は已に如品の中に如を説けり、今何を以てか疑ありや。  
【五】 第一二問、何の解し易きとあつて如を以て實際に喩へ又實際を以て如に喩ふるや。  
【六】 第一三問、常に如法性・實際の次第なるに、何が故に如實際・法性の順にせしや。

證を作し、定心に證を作すが故に、一切の總相別相中に於いて通達するを名けて法性と爲し、諸法の  
本生の處を名けて性と爲す。是の故に法性を以て實際に喩ふ。法性に聲聞の分有り、大乘の分有り。  
須菩提は聲聞の分中に於いて疑はず、大乘の分中に疑有るが故に問へり。

佛は凡人の解すべき所の事を以て證と爲さんと欲したまふが故に、如我性衆生性壽命性と  
言ふ。須菩提は更に問ふ所無し。佛は句を結びんと欲するが故に、反問したまはく、須菩提よ、汝が意  
に於いて云何、我法は實に有りや不やと。須菩提は道を得るが故に無しと言ふ。須陀洹すら尙我を見  
ず、何に泥んや阿羅漢なるをや。佛の言はく、汝、小乗の鈍智を以てす  
ら尙我を得ず、何に泥んや、佛なるをやと。佛は智慧を以て我を求むるに  
得べからず、云何が説くべけんや。我は説くべからざるが如く、一切法の  
有も亦是の如し。菩薩は能く是の説く可らざる法を行するが故に、當に薩婆若を得べしと。説くべか  
らずとは、若くは有、若くは無を分別すべからざるなり。須菩提問ふ、一世尊よ、諸法にして若し分  
別すべからずんば、云何が分別して、三三、地獄等の五道、須陀洹等の諸の聖道有りと言くと。佛答へ

【三三】地獄等の五道とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間の五道と言ふ。

たまはく、衆生は定法有ること無し、地獄は但假名字のみ有り、云何が當に分別して、地獄等の衆生  
及び諸の聖人有りと説くべけん。衆生等を分別するに従ふが故に諸道の名有り。衆生は實に得べから  
ず。是の如く、須菩提よ、菩薩は應に是の如く、不可説の般若波羅蜜「多」を學すべしと。須菩提問

ふ、世尊よ、菩薩は應に色等の諸法を學すべし。今何を以てか一切法の不可説を學すと言ふやと。佛答へたまはく、菩薩は應に色等の法を學すべしと雖も、但應に不増不滅の故に學することを作すべしと。不増不滅の義は先に説けるが如し。此の中に佛自ら不増不滅を得る因縁を説きたまふ。若し菩薩、不生不滅の法を學せば、即ち是れ不増不滅を學するなり。須菩提問ふ、云何が不生不滅を學するやと。佛答へたまはく、諸の行業の若くは有、若くは無を起さず、作さざるが故なりと。 (三二八) 有とは三有に名く、欲有色有・無色有なり。無とは斷滅の邊に名く、八聖道を離れ、強ひて滅を求めんと欲す。是の二事を以て、凡夫人は諸の行業の若くは善、若くは不善を起す。是の菩薩は諸法實相、所謂不生不滅を知る。是の故に三種の業を起さず、業相應の諸法を起さず、是を無作解脫門と名く。不生不滅は是れ無相解脫門なり。復問ふ、世尊よ、何等の方便の故に、能く諸の行業を作さず、起さざるやと。佛答へたまはく、若し菩薩は能く諸法の自相空を觀せば、所謂色・色相は空なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提の相は空なりと。菩薩は爾の時に、能く二事を作す。一には能く諸の行業を作さず起さず、二には能く一切法の中に於いて、自相空を行す。復問ふ、世尊よ、若し色等の法自相空ならば、云何が菩薩は應に般若波羅蜜〔多〕の中に行すべきやと。佛答へたまはく、行せざるをば是を菩薩の般若の中に行すと名くと。此の中に自ら因縁を説く、般若波羅蜜〔多〕の體、得べからざれば、行者・行法行處は得べからず。法空の故に

【六】 有の義解。

【三二】 無の義解。

般若波羅蜜「多」は得べからず、行處も亦得べからず、衆生空なるが故に行者は得べからず、一切の戲論は得べからざるが故に、菩薩の行せざるを名けて般若波羅蜜「多」の行を爲すと。須菩提問ふ、若し行せざるをば是を般若を行すといはば、初發心の菩薩は云何が應に般若を行すべきやと。須菩提意に「謂へらく」若し行せざるを行すと爲さば初發心の菩薩の心は則ち迷悶せん、若し行するを以て行と爲さば是れ則ち顛倒すと。是の故に問へり。佛答へたまはく、初發心の菩薩は應に無所得の法を學すべし、無所得の法は即ち是れ無行學の名なり。方便力を以て漸漸に行す。所謂布施の時は無所得の法を以ての故に、應に諸法實相畢竟空に布施すべし。畢竟空の中には、法の若くは有、若くは無なるものを得べきと有ると無し。菩薩は是の如き智慧心の中に住して、應に若くは多、若くは少を布施すべし。布施物與者受者は平等觀の故に所謂皆不可得なり、乃至薩婆若も亦是の如しと。須菩提は是の念を作す、所得有るが故に則ち是の世間は顛倒し、所得無きが故に即ち是れ涅槃なりと。是の故に佛に問ふ、云何が有所得、云何が無所得なるやと。佛、略して答へたまはく、二相は是れ有所得、無二の相は是れ無所得なりと。二相とは、眼は一、色も一にして、兩の一、和合するを名けて二と爲し、眼を以ての故に是の色を知り、色を以ての故に是の眼を知る、眼と色とは是れ相待の法なり。問うて曰く、若し色を見ざる時も亦眼有り、云何が眼は色を離れざるや。答へて曰く、曾つて色

【三〇】 無所得及び有所得の差異を辨ず。

【三一】 第一四問、色を見ざる時すら眼有り、云何が眼と色と無二なることを得んや。

を見るを以ての故に名けて眼と爲す。今は色を觀すと雖も本を以て名と爲す。是の故に一切の有爲法  
 は皆因縁に屬す。因は果に屬し、果は縁に屬し、定んで自ら有る者有ること無し。乃至意法菩薩、佛  
 も亦是の如し。凡夫は無智にして各各に分別し、善不善の業を爲す。智者は是の二法は皆虛誑にして  
 因縁に屬することを知り、是の二を以て二と爲さず。須菩提問ふ、是の二法は即ち是れ有所得にし  
 て、不二法は即ち是れ無所得なりや。世尊よ、有所得の法中に從つて無所得、無所得の法中に從つて無  
 所得ならば、諸法を縁に相を取りて道を行するが爲の故に、是の畢竟空無所得を得て縁することを作  
 さず、相を取らずして道を行するが爲の故に、是の畢竟空無所得を得。若し有所得の中の無所得なら  
 ば、有所得は即ち是れ顛倒なれば、顛倒を行するも云何が實を得ん、若し無所得の中に無所得を得  
 ば、無所得は即ち是れ無所有なり。無所有、云何が能く無所有を生ぜんやと。佛よ、二俱に過なる  
 を以ての故に皆聽したまはず。有所得と無所得の二事は皆能く平等に觀す。平等なれば即ち是れ畢竟  
 空無所得なり。無所得に由りて有所得を破す。事既に辦すれば亦無所得をも捨つ。是の如く菩薩は有  
 所得無所得の平等の般若の中に於いて應に學すべし。若し菩薩、能く是の如く學せば、是を眞の無所  
 得の者と名く。過失有ること無く、一地より一地に生ずる義も亦是の如し。須菩提問ふ、世尊よ、若  
 し般若は得べからず、菩提も得べからず、菩薩も得べからずんば、云何が菩薩は般若を學し、諸の法  
 相、所謂の惱相は是れ色、苦樂の相は是れ受なり等と分別するや。若し菩薩は般若波羅蜜(多)を行



じ、色等の法得べからずんば、云何が能く檀那波羅蜜多等の諸の善法を具足し、云何が能く菩薩位の中に入るやと。經中に廣く説くが如し。佛、須菩提に語りたまはく、菩薩は色等の諸の法相を得るを以ての故に般若を行せずと。復問ふ、何等の事の爲の故に般若を行するやと。佛答へたまはく、無所得を以ての故に般若を行す。何となれば、一切法は空・無相・無作・無起なり、般若波羅蜜多・菩薩菩提も亦無相・無作・無起なればなり。菩薩は一切法の實相の爲の故に般若を行す。「こは」顛倒を以てするに非ざればなり。須菩提よ、菩薩は應に是の如く、無作の般若の中に、無作無起を行すべきが故なりと。

# 卷の第八十四

## 三慧品第七十の下を釋す。



須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法に所爲無く、所作無くんば、應に三乘(即ち)聲聞・辟支佛・佛乘有り」と分別すべからず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法の所爲無く、所作無き中には、分別有ること無く、所爲有り、所作有る中には分別有り。何となれば、凡夫、愚人は聖法を聞かず、五受衆、所謂の色受想行識に著し、檀(那)波羅蜜(多)に著し、乃至阿耨多羅三藐三菩提に著すればなり。是の人ば、是の色有ること念じて是の色を得、乃至是の阿耨多羅三藐三菩提有ること念じて、是の阿耨多羅三藐三菩提を得。是の菩薩は是の念を作す、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。我れ當に衆生を生死より度すべし」と。

【一】 以下俗語より三乘三聚等の分別あるを明し、諸法の無自性不可得なる實相を示し、又一切種智、般若波羅蜜多名命せる所以を詳にして、无一無二の如實の法なることを結ぶなり。

須菩提よ、我れ五眼を以て觀るも、尚ほ色、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ず、何に況んや、是の狂愚の人ば、日無くして而も阿耨多羅三藐三菩提を得、衆生を生死より度脱せんと欲するをや」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し佛、五眼を以て觀たまふとも、衆生の生死の中より度すべき者を見ずんば、今、世尊は云何が阿耨多羅三藐三菩提を得て、衆生に三聚なる正定・邪定・不定有りと分別するや」と。「須菩提よ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得、初に衆生の三聚の若くは正定、若くは邪定、若くは不定を得ず。須菩提よ、衆生は無法に法想ある

を以て我れ其の妄著を除き、世俗法を以ての故に、得ると有りて説くも、第一義には非ず」と。世尊よ、第一義に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るにあらすや」と。佛の言はく、「不なり」と。世尊よ、顛倒に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。世尊よ、若し第一義の中に住して得ず、亦顛倒の中に住して得ずんば、將に世尊の阿耨多羅三藐三菩提を得るもの無きや」と。佛の言はく、「不なり。我れ實に阿耨多羅三藐三菩提を得るも、所住に若くは有爲相、若くは無爲相なし。須菩提よ、譬へば、佛の所化の人は、有爲相に住せず、無爲相に住せざるが如し。化人は亦は來ること有り、去ること有り。亦は坐し、亦は立つ。須菩提よ、是の化人は、若し檀(那)波羅蜜(多)を行じ、尸羅波羅蜜(多)、廣提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を行じ、四禪・四無量心・四無色定・五神通を行じ、四念處を行じ、乃至八聖道分を行じ、空三昧・無相三昧・無作三昧に入り、內空乃至無法有法空を行じ、八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・大悲大慈を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て法輪を轉す、是の化人は無量の衆生に三聚有るを化作す。須菩提よ、汝が意に於いて云何、是の化人は檀(那)波羅蜜(多)を行すること有りや。乃至三聚の衆生有りや不や」と。須菩提言さく、「不なり」と。須菩提よ、佛も亦是の如し。諸法は化の如く、化人の化の衆生を度するが如くにして、實に衆生の度すべきもの有ること無きを知る。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、佛の所化の人の如く行す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は化の如くならば、佛と化人と何等の差別有りや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「佛と化人と差別有ること無し。何となれば、佛も能く所作有り、化人も亦能く所作有ればなり」と。「世尊よ、若し佛無うして、化のみ獨り能く所作有りや不や」と。佛の言はく、「能く所作有り」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が佛無うして、化に能く所作有りや」と。「佛の言はく」「須菩提よ、譬へば、過去に佛有りて須扇多と名くるが如し。菩薩を度せ

んと欲するが爲の故に、佛を化作し已つて而も自ら滅度す。是の化佛は住すると半劫にして佛事を作し、應に菩薩の行に應ずる者に記を授け已つて滅度す。一切世間の衆生は、佛の實に滅度したまふことを知る。須菩提よ、化人は實に無生無滅なり。是の如く須菩提よ、菩薩は般若波羅蜜(多)を行じ、當に諸法の化の如きを信すべし」と。(須菩提言さく)「世尊よ、若し佛と佛の所化の人と差別無くんば、云何が布施をして清淨ならしめん。人、佛を供養してまつるが如きは、是の衆生は乃ち無餘涅槃に至るまで福德盡きす。若し化佛を供養せば、是の人は乃ち無餘涅槃に至るまで福德も亦應に盡きざるべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「佛は諸法實相を以ての故に、一切の衆生・天及び人の與に福田と作る。化佛も亦諸法實相を以ての故に、一切衆生・天及び人の與に福田と作る。佛、須菩提に告げたまはく、「是の佛及び化佛に於いて種う所の福德を置かんも、若し善男子・善女人有つて、但敬心のみを以て佛を念せば、是の善根の因縁をもて、乃ち苦を畢るに至るまで其の福盡きす。須菩提よ、是の敬心をもて佛を念するを置かんも、若し善男子・善女人有つて、但一華を以て虚空中に散するのみにして佛を念せば、乃ち苦を畢るに至るまで其の福盡きす。須菩提よ、是の敬心をもて佛を念じ、華を散じて佛を念することを置かんに、若し人有つて、一たび南無佛と稱せば、乃ち苦を畢るに至るまで、其の福盡きす。是の如く須菩提よ、佛は福田の中に其の福を種うること無量なり。是を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、佛と化佛と差別有ること無しと。(そは)諸法の法相に異なること無ければなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜(多)を行じ、諸法實相の中に入るべし。是の諸法實相は壞すべからず。所謂る般若波羅蜜(多)の相乃至阿耨多羅三藐三菩提の相も(亦壞すべからず)」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法實相を壞すべからずんば、佛は何を以てか諸の法相、言はく是の色、是の受想行識、是の内法、是の外法、是の善法、是の不善法、是の有漏、是の無漏、是の世間、是の出世間、是の有諍法、是の無

諍法、是の有爲法、是の無爲法等を壞したまひしや。世尊よ、將に諸法の相を壞すること無からんとす」と。佛、須菩提に告げたまはく、「不なり。名字の相を以ての故に諸法を示し、衆生をして解せしめんと欲す、佛は諸法の相を壞せず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若くは名字の相を以ての故に、諸法を説いて衆生をして解せしむ。世尊よ、若くは一切法に名無く相無くんば、いかなる名相を以て衆生に示し、解せしめんと欲するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「世俗の法に隨うて名相有り、實には著する處無し。須菩提よ、凡人の如きは苦を説くを聞いて、名に著し相に隨ふ。須菩提よ、諸佛及び弟子は名に著せず、相に隨はず。須菩提よ、若し名、名に著し、相、相に著せば、空も亦應に空に著すべく、無相も亦應に無相に著すべく、無作も亦應に無作に著すべく、實際も應に實際に著すべく、法性も應に法性に著すべく、無爲性も應に無爲性に著すべし。須菩提よ、是の一切法には但名相のみ有り。是の法は名相の中に住せず。是の如く須菩提よ、摩訶薩は但名相の中にのみ住して、應に般若波羅蜜(多)を行すべく、是の名相の中にも亦應に著すべからず」と。「世尊よ、若し一切有爲法は但名相のみならば、菩薩摩訶薩は誰の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、種種の勤苦を受くるや。菩薩は道を行する時、布施、持戒し、忍辱を行じ、勤めて精進し、禪定に入り、智慧を修し、四禪・四無量心・四無色定・四念處より乃至八聖道分を行じ、空を行じ、無相を行じ、無作を行じ、佛の十力を行じ、乃至大悲大慈を具足す」と。佛の言はく、「須菩提の所説の如く、若し一切の有爲法は但名相のみ有りといはば、菩薩摩訶薩は誰の爲の故に菩薩道を行ぜん。須菩提よ、若し有爲法は但名相等のみならば、是の名相と名相の相とは空なり。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は菩薩道を行じて一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉じ、法輪を轉じ已り、三乘法を以て衆生を度脱す。是の名相も亦無生・無滅・無住異なり」と。

爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は一切種智を説きたまふ」と。佛、須菩提に告げたまはく、「我は一

一切種智を説く」と。須菩提言さく、「佛は一切智を説き、道種智を説き、一切種智を説きたまふ。是の三種の智は何の差別有

りや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「薩婆若は是れ一切の聲聞・辟支佛の智なり、道種智は是れ菩薩摩訶薩の智なり、

一切種智は是れ諸佛の智なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁の故に、薩婆若は是れ聲聞辟支佛の

智なりや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切とは所謂内外法に名く。是の聲聞・辟支佛は能く知つて、一切道、一切種

智を用ふるに能はず」と。須菩提言さく、「世尊よ、何の因縁の故に、道種智は是れ諸の菩薩摩訶薩の智なりや」と。佛、

須菩提に告げたまはく、「一切の道を、菩薩摩訶薩は應に知るべし。若し聲聞道・辟支佛道・菩薩道を應に具足して知るべくん

ば、亦應に是の道を用つて衆生を度し、亦實際の證を作さざらん」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛説きたまふが

如く、菩薩摩訶薩は應に諸道を具足すべく、應に是の道を用つて、實際に證を作すべからざるや」と。佛、須菩提に告げたまは

く、「是の菩薩は未だ佛土を淨めず、未だ衆生を成就せず。是の時、應に實際に證を作すべからず」と。須菩提、佛に白して

言さく、「世尊よ、菩薩は道中に住して、應に實際に證を作すべし」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、外道の中に住

して、實際に證を作すや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、道・非道に住して、實際に證を作すや」と。佛の言はく、

「不なり」と。「世尊よ、非道・亦非非道に住して、實際に證を作すや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、菩薩摩訶薩は

何處に住して、應に實際に證を作すべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、汝は道中に住し、諸法

を受けざるが故に漏盡心に解脱を得るや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ」と。「汝、非道に住し、漏盡心もて解脱

を得るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「汝は道非道に住して漏盡心もて心に解脱を得るや不や」と。「不

なり、世尊よ」と。「汝は非道亦非非道に住して、漏盡心もて解脱を得るや不や」と。「不なり、世尊よ、我は所住無く、諸法

を受けず、漏盡心もて心に解脱を得」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩も亦是の如く、所住無くして、應に實際

に證を作すべし」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が一切種智相と爲すや」と。佛の言はく、「一相なるが故に一切種智と名く。所謂一切法寂滅の相なり。復次に諸法の行類相貌、名字、顯示の説をば佛は實の如く知りたまふ。是を以ての故に一切種智と名くし」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、一切智、道種智、一切種智、是の三智は結を斷するに、差別有り、盡くること有り。

餘ること有りや不」と。佛の言はく、「煩惱を斷するに差別有り、諸佛は煩惱の習を一切悉く斷じ、聲聞・辟支佛は煩惱

の習を悉く斷ぜず」と。「世尊よ、是の諸人は無爲法を得ずして、煩惱を斷することを得るや」と。佛の言はく、「不」と。

「世尊よ、無爲法の中に差別を得べきや不」と。佛の言はく、「不」と。「世尊よ、若し無爲法の中に差別を得べからず

んば、何を以ての故に、是の人は煩惱の習を斷じ、是の人は煩惱の習を斷ぜずと説くや」と。佛、須菩提に告げたまはく、

「習は煩惱に非ず。是の聲聞・辟支佛の身口には婬欲・瞋恚・愚癡の相に似たるもの有り。凡夫愚人は之が爲に罪を得。是れ三

毒の習なり、諸佛には有ること無し」と。須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、若し道に法無くんば、涅槃にも亦法無し。何

を以ての故に、分別して、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ佛なりと説く

や」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是れ皆無爲法なるを以て而も分別して、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ

阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ佛なりとすること有り」と。「世尊よ、實に無爲法なるを以ての故に、分別して須陀洹

乃至佛有りや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「世間の言説の故に差別有り、第一義には非ず、第一義の中には分別して説

くこと有ること無し。何となれば、第一義の中には言語の道無く、結を斷するが故に後際を説けばなり」と。須菩提言さく、

「世尊よ、諸法の自相空の中には前際は無、後際有り」と。佛、須菩提に告げたまはく、

「是の如し、是の如し。諸法の自相空の中には前際有ること無し、何に況んや、後際有り」と。佛、須菩提に告げたまはく、

よ、衆生は諸法の自相空を知らざるを以ての故に、爲に是れ前際、是れ後際なりと説くなり。諸法の自相空の中には前際、後際ほ得べからず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に自相空の法を以て般若波羅蜜(多)を行すべし。須菩提よ、若し菩薩、自相空の法を行すれば、則ち若くは内法、若くは外法、若くは有爲法、若くは無爲法、若くは聲聞法、辟支佛法、若くは佛法に著する所無し」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊は常に般若波羅蜜(多)を説きたまふ。般若波羅蜜(多)は何の義を以ての故に、般若波羅蜜(多)と名くるや」と。佛の言はく、「(一)第一度、一切法を得て彼岸に到る。是の義を以ての故に般若波羅蜜(多)と名く、

(二)復次に、須菩提よ、諸佛・菩薩・辟支佛・阿羅漢は、是の般若波羅蜜(多)を用つて彼岸に度ることを得。是の義を以ての故に般若波羅蜜(多)と名く。(三)復次に、須菩提よ、分別籌量して一切法乃至微塵を破壊し、是の中に堅實を得ず。是の義

を以ての故に般若波羅蜜(多)と名く。(四)復次に、須菩提よ、諸法の如・法性・實際は皆般若波羅蜜(多)の中に入る。是の義を以ての故に般若波羅蜜(多)と名く。(五)復次に、須菩提よ、是の般若波羅蜜(多)は、法有りて若くは合し、若くは散し、

若くは有色、若くは無色、若くは可見、若くは不可見、若くは有對、若くは無對、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲なること無し。何となれば、是の般若波羅蜜(多)は無色・無行・無對・一相・所謂無相なればなり。(是の義を以て

の故に般若波羅蜜(多)と名く)(六)復次に、須菩提よ、是の般若波羅蜜(多)は能く一切の法、一切の樂說辯、一切の照明を生ず。須菩提よ、是の般若波羅蜜(多)を、魔、若くは魔天、聲聞、辟支佛、人及び餘の異道の梵志・總儺・惡人も菩薩の般若波

羅蜜(多)を行するを壞すること能はず。何となれば、是の人輩は、般若波羅蜜(多)の中に皆得べからざればなり。須菩提よ、

是の菩薩摩訶薩は應に是の如く、般若波羅蜜(多)の義を行すべし。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜(多)の義

を行せんと欲せば、應に無常の義、苦の義、空の義、無我の義を行すべく、亦應に苦智の義、集智の義、滅智の義、道智の

義を行すべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く、般若波羅蜜(多)の義を行すべし。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜(多)の義



義、法智の義、比智の義、世智の義、他心智の義、盡智の義、無生智の義、如實智の義を行すべし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の義の爲の故に應に般若波羅蜜(多)を行すべしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の深般若波羅蜜(多)の中の義と非義とは皆得べからず、云何が菩薩は、深般若波羅蜜(多)の義の爲の故に、應に般若波羅蜜(多)を行すべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜(多)の義の爲の故に、應に是の如く念すべし。(一)貪欲は義に非ざれば、是の如き義は應に行すべからず。瞋恚・愚癡は義に非ざれば、是の如き義は應に行すべからず。一切の邪見には義無ければ、是の如き義は應に行すべからず。何となれば、三毒の如相には義有ること無く、非義有ること無く、一切の邪見の如相には義有ること無く、非義有ること無ければなり」と。(二)復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし、「色は義に非ず、非義に非ず。乃至識は義に非ず、非義に非ず。檀(那)波羅蜜(多)乃至阿耨多羅三藐三菩提は、義に非ず非義に非ず」と。何となれば、須菩提よ、佛、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ時、法の若くは義、若くは非義を得べきもの無ければなり。須菩提よ、佛有るも、佛無きも、諸法の法相は常住にして、是れ義有ること無く、非義有ること無し。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて、應に義及び非義を離るべし。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何を以ての故に、般若波羅蜜(多)は義に非ず非義に非ざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切の有爲法は無作の相なり、是を以ての故に般若波羅蜜(多)は義に非ず非義に非ず」と。「世尊よ、一切の賢聖、若くは佛、若くは佛弟子は皆無爲を以て義と爲す、云何が佛は般若波羅蜜(多)には義・非義有ること無しと言ふや」と。佛の言はく、「一切の賢聖、若くは佛、若くは佛弟子は皆無爲を以て義と爲すと雖も、亦曾を以てせず、亦損を以てせず。須菩提よ、譬へば、虚空の如きは衆生を益すること能はず、衆生を損すること能はざるが如し。是の如く、須菩提よ、菩薩

摩訶薩は般若波羅蜜(多)を縁すること有ること無く、損すること有ること無し」と。「世尊よ、菩薩摩訶薩は、無爲の般若波羅蜜(多)を學せしめて、一切種智を得るや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し、須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の無爲の般若波羅蜜(多)を學して、當に一切種智を得べし。(そは)二法を以てせざるが故なり」と。「世尊よ、二法を以てせざれば、能く不二の法を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。須菩提言さく、「二法は能く不二の法を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。須菩提言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、若し二法を以てせず、不二の法を以てせざれば、云何が當に一切種智を得べきや」と。「須菩提よ、所得無きは即ち是れ得なり。(そは)是の得には所得無きを以てなり」と。

論

釋して曰く、須菩提復た問ふ、世尊よ、若し一切法は無作・無起の

相ならば、云何が三乘有りと分別せんと。佛は其の意を可とし、更に因縁を説きたまふ。凡夫人は未だ道を得ず、五衆に著するが故に、亦是の空・無作・無起の法に著するが故に、疑を生ず、云何が分別して三乘有らんと。汝

は已に道を得、五衆に著せず。亦空・無作・無起に著せず、云何が疑を生ずるやと。佛、此の中に自ら因縁を説きたまふ、我れ五眼を以てするすら向色等の諸法を得ざるに、狂人は眼無うして而も得んと欲すと。須菩提問ふ、若し法無く衆生無くんば、云何が三衆の衆生有りと説くやと。佛答へたまはく、我れ衆生を觀るに、一衆は得べからず、云何が三有らん。但顛倒を破せんと欲するが爲の故に分別して三有り。能く顛倒を破する者を正定と名け、必ず顛倒を破すること能はざる者を是を邪定と

- 【一】 以下三乘の分別ある所以を明す。
- 【二】 以下三衆の分別ある所以を明す。
- 【三】 以下三衆の分別ある所以を明す。

〔名け〕、因縁を得れば能く破し、得ざれば則ち破すること能はず、是を不定と名く。皆世俗法を以ての故に説くも、最も第一義には非ずと。

問うて曰く、佛は實に第一義の中に住して道を得たまふ。何を以てか、須菩提に答へて、不なりと

言ふや。答へて曰く、須菩提は新發意の者の爲の故に問へり。是の故に佛は不なりと言へり。何となれば、顛倒の有法の中にすら尙住すべからず、何に況んや第一義の無所有

の中に住せんや。是の故に須菩提疑ふ、若し二處〔有爲及び無爲〕に住せず

んば、將は世尊は正覺を得ざることを無きやと。佛答へたまふ、實に阿耨多

羅三藐三菩提の道を得るも但住する所無し。有爲法は虚誑不實〔なるが故

に〕、無爲性は空無所有なるが故に〔二處に〕住すべからずと。此の中に佛

は是の事を明了にせんと欲するが故に、化佛の譬喩を説きたまふ。化佛の

如きは、有爲性に住せず、無爲性に住せず、而も能く來去して説法す。

問うて曰く、化人、來去し説法することは爾るべし。云何が能く檀

〔那〕波羅蜜〔多〕等を行するや。答へて曰く、化人能く實に行ずと言はず、衆生眼に所行有るに似た

るを見るも是れ化事なり。經中に説くが如く、乃至須扇多〔の如し〕。須菩提は意に已に信伏し、種種

の因縁もて、化佛眞佛等に異〔見〕無し。今猶少しく疑うて佛に問ふ、若し分別無うして眞佛に供養す

【四】 第一問、佛は第一義に住して道を得給ひ乍ら、須菩提が「三乘三聚には分別無きに非ずや」との間に對して「不なり」と答へたまへる理由如何。

【五】 第二問、化人は有爲性無爲性に住せずして、來去して説法せんも、云何が能く布施等を行するや。

【六】 本卷の經典本文參照。

れば、乃ち無餘涅槃に至るまで福故らに盡きず、化佛を供養するも亦爾なりや不やと。佛答へたまはく、化佛・眞佛を供養するは、其の福異ならず。何となれば、佛は諸法實相を得たまふが故に供養の福盡きず。化佛も亦實相を離れざるが故なり。若し供養する者は心能く異ならず其の福も亦等し。

問うて曰く、(七) 化佛は十方等の諸の功德無し、云何が眞佛と等しきや。

答へて曰く、十方等の諸の功德は皆諸法實相に入る。若し十方等にして諸法實相を離るれば、則ち佛法に非ず顛倒の邪見に墮するなり。

問うて曰く、(八) 若し爾らば、眞と化の中に定んで諸法實相有らん。何を以てか惡心もて佛身より血を出だし、逆罪を得と言ふを、化佛にも説かざるや。答へて曰く、經中には、但惡心もて佛身より血を出だすとのみ説いて眞化を辨せず。若し化佛を供養して、福を具足するを得ば、惡心もて毀謗するも、亦應に逆罪を得べし。惡人定んで化佛を是れ眞佛なりと謂つて、而も惡心もて「化佛身」より血を出ださば、血は則ち爲に出でて便ち逆罪を得ん。

問うて曰く、(九) 若し爾らば、毗尼の中に何を以てか化人を殺すも殺戒を犯さずと言ふや。答へて曰く、毗尼の中には皆世間の事の爲に衆僧を攝するが故に、戒を結んで實相を論せず。何となれば、毗

【七】 第三問、化佛は十方等の諸功德なし、今眞佛を供養すると化佛を供養すると其福德は等しと云ふ理由如何。

【八】 第四問、若し眞化兩佛共に十方等の諸功德相等しとせば、何が故に出佛身血等の説を化佛にも説かざるや。

【九】 第五問、若し化佛に出佛身血の逆罪を得とせば、何が故に毗尼の中に、化人を殺すも、殺生戒の犯罪なりと言はざるや。

問うて曰く、(十) 若し爾らば、毗尼の中に何を以てか化人を殺すも殺戒を犯さずと言ふや。答へて曰く、毗尼の中には皆世間の事の爲に衆僧を攝するが故に、戒を結んで實相を論せず。何となれば、毗

尼の中には人有り。衆生は假名を逐うて而して戒を結び、佛法を護ることを爲すこと有るが故に、後世の罪の多少を見ず。又後世の罪は重きも、戒中には便ち輕し。道人、鞭打して牛羊等を殺せば罪重く、而も戒は輕きが如し。女人を譏歎するは、戒中には重きに、後世の罪は輕し。化の牛羊を殺せば則ち衆人嫌はず亦譏論せず、但自ら心罪を得るのみ。もし眞と化の牛羊を殺すも、心異ならざる者は罪を得ること等し。然も戒を制する意は衆人の譏嫌の爲の故に重しと爲す。是の故に經中に説く、意業の罪は大にして、身口業のみに非ず。人如し大に布施を行するも、慈三昧を行するに及ばず。慈三昧を行すれば、衆生所得無きも、而も自ら無量の福を得。邪見を斷せる善根の人は、衆生を憐まざるも而も阿鼻地獄に入る。是の故に化佛眞佛を供養するは、心等しきを以ての故に、其の福は異ならず。復次に、此の中に、佛説きたまはく、是の化佛の光明具足せるものは置く。人あり、石泥の像等を見て慈心に念佛すれば、是の人は乃ち苦を畢ふるに至るまで、其の福盡きすと。佛の言はく、復泥像を置く。若し恭敬心有りて、佛像を見ずと雖も、佛を念するが故に、華を以て空中に散すれば、其の福も亦苦を畢ふることを得。復た華を散することを置き、但一たび南無佛と稱するのみにて、是の人も亦苦を畢ふることを得、其の福盡きす。

問うて曰く、(一)云何が但空しく佛の名字を稱するのみにて、便ち苦を畢ふることを得、其の福盡き

【一〇】 以下に上述の五問を結ぶ。  
 【一一】 第六問、但空しく佛の稱名のみにて、苦を畢へ而も其福徳盡きざる理由如何。

ざるや。答へて曰く、是の人は曾つて佛の功德を聞き、能く人の老病死の苦を度し、若くは多く、若くは少く供養す。名字を稱するに及んで、無量の福を得、亦苦を畢へ、「福」盡きざるに至る。是の故に福田無量なり。故に輕心に布施すと雖も、其の福は亦盡くること無し。是の如く種種の因縁譬喩の故に、眞佛も化佛も佛の福田に於いて異なること無く、供養する者は其の福無量なり。「そは」一切法は實相にして、別無く異なること無きを以ての故なり。

爾の時に、須菩提、佛に問ふ、「世尊よ、若し諸法實相は壞すると無きが故に、「眞化の」二佛異なること無くんば、今佛分別して諸佛を是れ色、是れ受・想・行・識、乃至是れ有爲、是れ無爲法なりと説きたまふは、將に諸法の相を壞すること無からんや」と。佛、須菩提に答へたまはく、佛は種種に分別して説くと雖も、但言説を以て衆生をして解脫を得、心に著する所無からしめんと欲するのみ。「眞化の」佛は共に語るとも、應に諸法は名字を説くべからず。衆生は佛に及ぶ者無きを以て、牽引して解せしめんと欲するが故に、是れ善、是れ惡と説く。(三) 法華經に火宅を説くが如し。三乘を以て諸子を引出し、但名相を以て諸法を説くのみ、

【三】 法華經卷の第二、譬喩品 第三に之を詳にす。

〔是の故に〕第一義を壞せず。須菩提問ふ、名相を以て衆生の爲に説くと雖も、實事有ること無くんば、將に虛妄なると無からんやと。佛答へたまはく、聖人は世俗の言説に隨ふも、中に於いて名相に著する處有ること無し。佛、此の中に自ら因縁を説きたまふ。凡夫の如きは、苦を説けば〔苦の〕名に

著し、〔苦〕相を取る。諸佛及び弟子は、口に苦を説くも而も心に著せず。若し著せば苦聖諦と名けず。苦諦は即ち是れ名相等にして、定んで實有る無し。凡夫の著する者も、亦是れ名相にして、定んで實有ること無し。云何が空の名相中に空の名相に著せん。若し空の名相中に名相に著せば、空も亦應に空に著すべく、無相も亦應に無相に著すべく、無作も亦應に無作に著すべく、乃至無爲性も亦應に無爲性に著すべく、是の法は皆如なり。凡夫の苦諦の相は但名相のみ有り。名相も亦名相中に住せず。菩薩は是の名相等の諸の法門中に入り、是の名相の般若の中に住し、應に一切法に實有ること無きことを觀すべし。須菩提問ふ、若し一切法は但名相のみ有らば、菩薩は何等の爲の故に發心するやと。經中に説くが如し。佛答へたまはく、若し一切法は但名相のみ有らば、名相の中の名相も亦空ならん。是の法は皆畢竟空にして、如法性實際の中に入る。是の故に菩薩は能く阿耨多羅三藐三菩提を發し、乃至能く三乘を以て衆生を度す。若し諸法に定んで實有りて名相に非ずんば、即ち是れ生滅無し、生滅無きが故に、苦無く、集無く、盡無く、道無し。云何が三乘を以て衆生を度せん。若し諸法は但是れ空の名相にして實無くんば、亦生滅無し、生滅無きが故に苦集盡道無し。亦云何が度すべけんや。今菩薩、一切法の名相等の空なることを知れば則ち世間の顛倒を離れ、亦名相の空なることを知るも、亦名相の空を離る。是の如く有を離れ無を離れ、中道に處して能く衆生を度す。佛意へたまはく、菩薩は是の中道の般若を行じて、一切種智を得と。

爾の時に、須菩提難せんと欲するが故に、先づ佛語を定んで乃ち問ふ。世尊は一切種智を説きたまふやと。佛の言はく、我一切種智を説くと。復た問ふ、佛は常に三種の智を説きたまふ、三種の智に何の差別有りやと。佛答へたまはく、薩婆若は是れ聲聞・辟支佛の智なり。何となれば、一切を内外の十二入に名く。是の法は聲聞・辟支佛の總相の智なればなり。皆是れ無常・苦・空・無我等なり。道種智は是れ諸の菩薩摩訶薩の智なり。道に四種有り。一には、人天中に福樂を受くる道なり。所謂の福徳を種うる「者は是れ」なり。并に三乗の道を「合して」四と爲す。(一)菩薩の法は應に衆生を引導して大道の中に著くべし。若し大道に入るに任へざる者は、二乗の中に著くし、若し涅槃に入るに任へざる者は、人天の福樂の中に著け、涅槃の因縁と作す。(二)世間の福樂の道は是れ十善・布施・諸の福徳なり。(三)三十七品は是れ二乗の道なり。(四)三十七品及び六波羅蜜「多」は是れ菩薩道なり。菩薩は應に了了に是の諸の道を知るべし。菩薩は佛道を以て自らの爲にし、人の爲には餘の三道を以てし、但衆生のみの爲には是れ菩薩の道種智を以てする」なり。須菩提問ふ、何を以てか道種智を菩薩の事と爲すやと。佛答へたまはく、菩薩は應に一切の道を具足し、是の道を以て衆生を化すべし。是の道に出入すと雖も、未だ衆生を教化し、佛國土を淨めざれば而も證を取らず。是の事を具足し已つて、然る後道場に坐して乃ち證を取る。是の故に須菩提よ、道種智は是れ菩薩の事なりと。須菩提復た問ふ、是の菩薩は、何の處に住し、實際に證を作すやと。須菩提、「自ら」意に「謂へらく」、若し道中に住して



證を作さば、是の事は然らず。「こは」二の過有ればなり。一には、結使有る人は應に畢竟清淨の正智有るべからず。若し有らば則ち佛と異なること無し。若し異ならば煩惱の習氣有るが故に、應に錯謬有るべし。二には、一切の有爲法は皆是れ虚誑の和合なるが故に、假名有りて定んで實有ること無しと。是の故に佛、不なりと言へり。若し道中に住するすら尙得ず、何に況んや、道中に住するに非ざるをや。道非道も亦二の過有るが故に、道に非ず道ならざるに非ず。心に著し、相を取るを以ての故に、不なりと言ふ。爾の時に、須菩提は意に或は是の念を作さく、佛の所得の道は甚深不可得底なりと。是の故に復た、「菩薩は何の處に住して、實際に證を作すや」と問へるに。佛は須菩提に反問したまへり。

【三】第七問、佛は須菩提が心中に「菩薩は何の處に住して實際に證をなすや」と問はんとせるを看破して、却て「汝得道の時は四句の中に於てせしや」と反問し給ひし理由如何。

問うて曰く、佛は何を以ての故に、直に答へずして、而も須菩提に反問したまひしや。答へて曰く、須菩提は、自ら所得の道中に於いては、了了にして惑無きも、佛の所證を貴尙ぶが故に四句に戲論し、心に著して了せざること有るが如きが故に問へり。是の故に佛は須菩提の所得の證を以て反つて問ひたまふ。汝、道を得る時、四句の中に住して證を得しやと。「須菩提」答へて曰く、不なり、我は住する所無して漏盡を得たりと。「佛の言はく」汝は住する所無きを以て而も心に解脫を得たり。當に知るべし、菩薩摩訶薩も亦是の如く、四句に住せしやして實際を證す

と。是の故に佛反問したまへり。復た有人言はく、二四四種答の中に、是を反問答と名くと。

問うて曰く、須菩提は金剛三昧に住し心に解脱を得、云何が道中に往せずと言ふや。答へて曰

く、住すとは相を取つて定んで是の法有り」とするに」名く。是の人は更に無爲の勝法を求むるが故に

名けて有爲法に住すと爲さず。「有爲法を」用ゐ

ざるが故に、中に於いて「有爲法に」住せずと爲

す。復た住すること有れば是を名相と言ふ。凡

夫法の中には便ち是は金剛、是は解脱なりと分

別すること有り。無相の法を得れば、則ち分別

する所無し。佛は無相の法の爲の故に、須菩提

に反問したまへり。汝は名相を以ての故に問ふ

べからず。汝は應に名相を以て難を爲すべから

ずと。

二六一切種智は是れ佛智なり、一切種智は、

一切三世法中通達無礙智と名く。大小精麤を知り、

を説きたまふに二種の相有り。一には諸法實相に通達するが故に寂滅の相なり。

二四四種の間答。(一)定答(一向記)、若し人は死すべきやと問はば全稱を以て「凡て人は死すべし」と答ふるもの、(二)分別義答(分別記)若し死する者は皆當に生すべきやと問はば、特稱を以て「煩惱ある者は當に生すべし、餘は然らず」と答ふるもの、(三)反問答(反需記)若し人は勝か劣かと問はば、對論者の心中を看破して逆觀的に「何の所に比するや」と反問して然る後若し天

二五第八問、須菩提は金剛三昧に住して解脱を得たり、何が故に道中に住せずして心に解脱を得といふや。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

に比すれば劣なり、若し三途に比すれば勝なり」と答ふるもの、(四)置答(默置記又は捨置記)若し石女の兒は白きや否やと問はば、已に自語相違なれば、敢て默殺して答ふるの必要なものなり。

二六以下一切種智の意義を明す。

佛自ら一切種智の義

大海水の中には、風

動ずること能はず、其の深きを以ての故に、波浪起らざるが如し。一切種智も亦是の如く、戲論の風の動ずること能はざる所なり。二には、一切諸法は、名相文字言説を以て、了了に通達して礙無かるべし、有無の二事を攝するが故に一切種智と名く。有る人の言はく、十力四無所畏四無礙法十八不共法は盡く是れ智慧の相和合し、名けて一切種智と爲すと。復た有る人の言はく、金剛三昧をもて次第に無礙解脫を得るが故に、若くは大小近遠深淺難易を事として知らざる無しと。是の如き等の種種無量の因縁をもて一切種智と名く。

(二七) 須菩提は是を聞き已つて問ふ、佛の智慧に故らに上中下の分別有らば、煩惱を斷ずるに復差別有りや不やと。佛の言はく、差別無し。斷ずる時差別有るも、斷じ已れば差別

【二七】 以下煩惱は斷じ易きも習氣の盡し難きを明す。

別無し。譬へば、刀に利鈍有りて斷ずる時に遲速有るも、斷じ已れば差別無きが如し。如來は煩惱及び習都べて盡き、聲聞辟支佛は但煩惱盡くるのみにして、而も習氣餘り有り。須菩提、佛に問ふ、世尊よ、三種の斷は是れ有爲なりや、是れ無爲なりやと。佛答へたまはく、皆是れ無爲なりと。復た問ふ、世尊よ、無爲法の中に差別を得べきや不やと。佛答へたまはく、是の法は無相無量なり、云何が差別を得べけんやと。復た問ふ、世尊よ、若し差別無くんば、云何が是の斷中には餘有り、是の斷中には餘無しと説くやと。須菩提よ、是の習は眞の煩惱と名けず。有る人は一切の煩惱を斷ずと雖も、身口の中にも亦煩惱の相出づること有り。凡夫は是の相を見聞し

已つて則ち不清淨の心を起す。譬へば、蜜婁私吒阿羅漢の如きは、五百世〔の間〕、彌猴の中に在り、今阿羅漢を得と離も猶樹木に騰跳す。愚人は之を見て即ち輕慢を生ず、是の比丘は彌猴の如くに似たりと。是の阿羅漢は煩惱の心無くして、而も猶ほ本の習有り。又、畢陵伽婆蹉阿羅漢の如きは、五百世〔の間〕婆羅門の中に生じて、輕慢の心を習ふが故に阿羅漢を得と雖も、猶恆〔河〕の水神に語つて言はく、小婢流を止めよと。恆〔河〕神瞋恚し、佛に詣つて陳訴す。佛懺悔を教へたまふも猶小婢と稱す。是の如き等の身口業は煩惱の習氣にして二乗には盡きず、佛には是の如き事無し。一婆羅門惡口し、一時に五百の〔惡〕事を以て佛を罵るに、佛慍色無し。婆羅門心に乃ち歡喜し、即ち復一時に五百の善事を以て佛を讚歎するに、佛亦喜色無きが如し。當に知るべし、佛には煩惱の習氣盡くるが故に、好惡異なること無し。又復佛初めて道を得、實の功德中に好名聲を出して十方に充滿し、唯佛のみ自ら知りたまふ。而も、孫陀梨梵志女は身を殺して佛を謗り、惡名を流布せり。佛は此の二事に於いて、心に異有ること無く亦憂喜せず。又婆羅門の聚落中に入り、空鉢にして出で、天人種種に供養したてまつる。又復三月馬麥を食したまふに、釋提桓因は恭敬し、天食を以て供養したてまつる。

〔一〇〕阿羅婆伽林中に棘刺寒風あり、佛、

【一〇】畢陵伽婆蹉。又畢蘭陀笈蹉 (Prilindavata) とも云ひ、餘習と譯す。高慢あるが故に此の名を得たり。

【一〇】孫陀梨 (Sundarī) 艶と譯す。姪女にして大衆の中に於て佛を誹謗す、佛十難の一と稱せらる。詳しくは孫陀利宿緣經に就て見よ。興起行經上に攝めらる。

【一一】阿羅婆伽。阿は不なり、羅婆は諸多・衆の義なり、不諸林と譯す。

中に在りて宥しほしたまふ。又歡喜園中に於いて、天の百寶石在り、上柔輓うへにうだんにして滑澤こつたくに、又天の臥具がらぐを敷く。此の好惡かあくの事中じちゆうに於いて心に憂喜無な。又三提婆達多さいだいばだつたは瞋心しんしんもて、石を以て佛を墮うち、三三羅喉羅さんさんらごは敬心きやうしんもて手を合せ、佛を禮らいしたてまつるに、此の二人に於いて其の心平等こころびやうとうにして、兩眼りやうげんを愛するが如し。是の如き等、種種しゆじゆの干亂かんらんに異相いさう有ること無し。譬たとへば、眞金しんこんを燒磨せうま鍛煉たんれんするも、其の色變せざるが如し。佛は此の衆事しゆじを經へて心に増減ぞうげん無し。是の故に知るべし、諸佛しよぶつは愛恚あいい等の諸もろの煩惱ぼんノウの習氣しゆけ都つて盡つくることを。

須菩提、意に「謂いへらく」、若し諸法實相しよほふつじつさうの中には、若くは道、若くは涅槃ねはんに所有しよいう無し。若し所有しよいう無くんば、何を以てか是の須陀洹しよたごん乃至辟支佛びやくしふつには習氣しゆけ未だ盡つきず、佛は習氣しゆけを盡つくすと分別ぶんべつするやと。佛の言はく、三乘さんじやうの聖人しやうにんは皆無みな爲法むゐほふを以て而も差別しやべつ有り。無爲むゐに因よつて差別しやべつ有りと雖も、而も有爲うゐの法中に説くことを得べしと。須菩提は佛語ぶつごを定めんと欲するが故に問ふ、世尊せそんよ、實じつに無爲法むゐほふを以ての故に差別しやべつ有りやと。佛答ぶつたへたまはく、世俗法せぞほふの語言名相ごんごふみやうなむさうの故に分別ぶんべつすべし、第一だいいち「義ぎの」法ほふ中には分別ぶんべつ無し。何となれば第一義だいいちぎの中には一切いっさい語言ごんの道斷みだんじ、一切いっさいの心こころの行ぎやうする所ところを斷だんずるを以ての故なり。但諸ただの聖人しやうにんは結使けつしを斷だんずるを以ての故に後際ごさい有りと説くと。後際ごさいとは所謂いはゆる無餘涅槃むよねはんなり。須菩提問しよはだいとふ、世尊せそんよ、諸法しよほふは自相空じさうくうなるが故に

【三】 提婆達多(Devadatta)。天授と譯す。斛飯王の子、阿難の兄にして、佛とは從弟の間にありがら、利欲の爲めに三逆罪を造り、生ながら墮獄せりと稱せらる。後法華に至り記別を受けぬ。

【三】 羅睺羅(Rohita)。佛の嫡子にして、後出家して阿羅漢を成じ、十大弟子中の密行第一となる。

前際、不可得なり、何に況んや、後際をや。何となれば、前際に因るが故に後際有ればなりと。佛、其の意を可としたまひ、衆生は諸法の自相空を知らざるを以ての故に、是れ前際なり、是れ後際なりと説く。自相空なる諸の法中に、前後際は得べからず。何となれば、若し先に生有れば則ち後に老死有り。若し老死を離れて生有れば、是れ則ち死せずして而も生ず、是の生には因無く縁無し。若し先に老死あり後に生有りといはば、生せずして云何が老死有らん。先後既に得べからず、一時も亦得べからず。是を以ての故に、自相空なる法中には、前[際]後際有ると無しと説く。佛の言はく、是の如く須菩提よ、菩薩は應に自相空なる法を以て般若を行すべし。「そは」内外の法乃至佛法に著せざるが故なりと。

問うて曰く、三上來常に般若波羅蜜[多]の相を説けり。今何を以てか更に問ふや。答へて曰く、但相のみを問はず、人常に般若波羅蜜[多]を説く

も、般若波羅蜜[多]は何の義を以ての故に般若と名くるや。佛の言はく、第一度を以て一切法を以て度し、菩薩は上智を以て度するが故に、第一度と名く。(一)聲聞人は下智を以て度し、辟支佛は中智を以て度し、菩薩は上智を以て度するが故に、第一度と名く。(二)復次に、煩惱に九種有り、上中下の各に三品有り。智慧にも亦九種有り。下の下智慧は鈍根の須陀洹より來た、乃至上の下[智慧]は是

【三】 第九問、上來常に智度の相を説けり、今何が故に更に智度に就て慎問するや。  
 【四】 以下第一度と名くる所以を明す。  
 【五】 九種、上品の上、上品の中、上品の下、中品の上、中品の中、中品の下、下品の上、下品の中、下品の下の九品なり。

れ第一の聲聞舍利弗等なり、上の中〔智慧〕は是れ大辟支佛なり、上の上〔智慧〕は是れ菩薩なり。上の上智慧を以て度するが故に、第一度と名く。聲聞辟支佛は但總相をもて度し、別相に於いて〔度すること〕少し。菩薩は一切法の總相別相を皆了了に知るが故に第一度と名く。(三)復次に、菩薩度する時は、智慧遍滿して法中を度すべし。二乗の人は法中を知るべきも、遍滿すること能はず。是の故に、第一度と名く。(四)復次に、第一度とは、大乘の福德智慧六波羅蜜〔多〕三十七品を具足し滿たすが故に、安隱に度す。〔是の故に第一度と名く〕(五)又十方の諸佛、大菩薩は諸に皆來つて佐助し、安隱に度することを得。〔是の故に第一度と名く〕人七寶の船に乗れば、牢治行具し、上に種種の好食有り、好導師有りて、意に隨つて好風に遇へば、則ち好度を爲し、若し人草楫に乗じて度れば、恐怖して好度と名けざるが如し。

【云】以下般若波羅蜜多と名くる所以を明す。

(三)復次に、佛三乘の人に説きたまはく、(一)是の般若波羅蜜〔多〕を以て、度つて彼岸の涅槃に到り、一切の憂苦を滅す。是の義を以ての故に般若波羅蜜〔多〕と名くと。(二)復次に、是の般若波羅蜜〔多〕の中には、一切法の内外、大小を思惟し籌量し分別し推求するに、乃至微塵の如きも堅實なるを得ず。既に微塵に到れば則ち分別すべからず。心心數法乃至一念の中にも亦分別すべからず。是の般若波羅蜜〔多〕の中には、心色の二法は破壊し、推求するに堅實を得ず。是の義を以ての故に、般若波羅蜜〔多〕と名く。(三)復次に、般若を慧波羅蜜〔多〕と名け、彼岸に到ると名く。彼岸をば盡一切の

智慧、邊智慧と名け、不可破壞相と名く。不可破壞は即ち是れ如法性・實際なり。是れ實を以ての故に  
 破壞すべからず。是の三事は般若中に攝入するが故に、名けて般若波羅蜜〔多〕と名く。(四)復次に、  
 般若波羅蜜〔多〕は法有ること無く、法と合すること有り、散すること有り、畢竟空なるが故に是の般  
 若は無色・無形・無對・一相・所謂の無相なり。是の義は先に説けるが如し。是の如き等の種種の因縁の故  
 に、般若の義と名く。今、當に般若の力を説くべし。(三)所謂、般若は能く一切の智慧、禪定等の諸法  
 を生じ、能く一切樂說辯才を生ず。般若の力を以ての故に、一句をもて演說するに種種に莊嚴し、劫  
 を窮むるとも盡さず。星宿日月の照らす能はざる處を般若は能く照らし、  
 能く邪見、無明の黑闇を破するが故に、魔、若くは魔人、聲聞辟支佛を求  
 むる人、外道、惡人も壞すること能はざる所なり。何となれば、菩薩は般若を行じ、此の諸の惡人は  
 般若の中に於いて皆得べからざればなり。

復次に、若し行者一心に信受し諷誦せば、諸惡も便を得ること能はず、何に況んや、正憶念し、説  
 の如く行するをや。是の如く須菩提よ、菩薩は應に般若の義を行すべし。般若の義とは、所謂無常の  
 義、苦空無我の義、四諦智慧・無生智・法智・比智・世智・知他心智・如實智の義なり。故に應に般若を行  
 すべし。是の般若は、大海に種種の寶物有つて、或は大、或は小なるも、唯一の是れ如意寶なるが如  
 く、般若波羅蜜〔多〕にも亦種種の諸の智慧の寶、無常等の四聖行・十智有るも、唯だ如實智のみ有る

【七】 以下は般若の力を明す。



こと如意實の如し。

問うて曰く、(三六)先品に説くが如きは、若くは常、若くは無常等の行を般若波羅蜜(多)を行すと名けず、今、何を以てか無常等の義を行するが故に、應に般若波羅蜜(多)を行すべしと言ふや。答へて曰く、我已に先に答へたり。無常に二種有り。若し著心をもて戲論する無常は、是を般若を行すと名けず、若し著心無く、戲論ならざる無常は常倒を破することを爲し、又白ら著心を生ぜず、是を般若を行すと名く。

問うて曰く、(三五)三藏の中には但十智のみ有り、此の中には何を以てか、十如實智有りや。答へて曰く、是の故に大乘と名く。大法は能く小法を受け、小は大を受くること能はず。

問うて曰く、(三〇)十智の各各に體相有り、如實智には何等の相有りや。答へて曰く、有る人の言はく、能く諸法實相、所謂る如法性實際を知るは、是を如實智の相と名くと。佛、此の中に説きたまはく、如實智は唯是れ諸佛のみ得たまふ所なり。何となれば、煩惱未だ盡きざる者には、猶無明有るが故に、如實を知ること能はず。二乗及び大菩薩は、習未だ盡きざるが故に、遍ねく一切法一切種を知ると能はざれば、如實智と名けず。但諸佛のみ一切の無明に於いて遺餘無きが故に、能く實の如く知りたまふと。

【二六】 第一〇問、先品には常・無常等の行を以ては智度を行すと名けずして、今本品には常無常等の義を行するを以て智度を行すべしといふ理由如何。  
【二五】 第一一問、三藏中には但十智のみ有るに、此の中には十如實智有る理由如何。  
【三〇】 第一二問、十智の各各の體相有り、如實智には何等の體相有りや。

問うて曰く、(三)若し佛を除き、更に實の如く知る者無くんば、二乗は云何が涅槃を得、大菩薩は無生忍を得るや。答へて曰く、(三)如實智に二種有り、一には遍滿具足し、二には未だ具足せざるなり。

〔遍滿〕具足とは佛なり、具足せずとは二乗及び大菩薩なり。譬へば、闇室の中に所作有るが爲の故に燈を燃し、爲す所已に辨するも、後來の燈あれば其の明益増すが如し。黒闇に二分有り、一分は初燈

已に除き、第二分は後燈の除く所なり。第二分の闇は初燈の明と和合す。

若し爾らざれば、第二燈には則ち所用無ければなり。是の如く二乗及び大菩薩の智慧は已に無明を破すと雖も、佛の除く所の無明の分は、是の諸人の除く能はざる所なり、初燈に照らす所無しと言ふことを得ず。是の如く

二乗及び菩薩の智慧は是れ、遍ねく實の如く知ると言ふことを得ず。遍ねき如實智は、是れ佛にして、但如實智のみは、二乗及び菩薩の共にせざる所なり。

(三)爾の時に、須菩提、佛に問ふ、世尊よ、若し深般若の中に義、非義得べからずんば、云何が菩薩は

深般若の義の爲の故に般若を行すと云ふやと。佛答へたまはく、貪欲等の煩惱は是れ義に非ず、應に行す

べからざる者なり。諸法に三分有り、貪欲等の諸の煩惱は是れ義に非ず、六波羅蜜「多」等の諸の善法は是れ義なり。色等の法は無記なるが故に、義に非ず、非義に非ず。若し人、煩惱及び煩惱を行する

【三】 第一三問、若し佛の外に如實智を得る者なくんば、二乗の涅槃を得、大菩薩の無生忍を得るは何故なるか。  
【三】 二種の如實智。(一)遍滿具足。(二)未具足。  
【三】 以下智度の中に義、非義の分別すべからざることなば明す。

者の中に於いて怨憎の心を生ぜば、六波羅蜜(多)等の諸の善法、及び善法を行ずる者の中に於いて愛念の心を生じ、色等の無記法、及び無記法を行ずる者の中に於いて即ち癡心を生ず。經中に説くが如し。凡人は樂を受くることを得る時は貪心を生じ、苦を受くる時は瞋心を生じ、不苦不樂を受くる時は癡心を生ず。是の故に説く、菩薩は應に是の念を作すべし、欲貪等は義に非ず、應に念すべからず、以て非と爲すと。經に廣く説くが如し。此の中に因縁を説く、惡法・善法・無記法は一一如相にして義・非義有ること無し。「そは」如相には二無く、分別無きが故なりと。

復次に、佛得道の時は、一法の若くは義、若くは非義を見ず。諸法實相は有佛にも無佛にも常住にして、義・非義を作さず。若し是の如く知らば即ち是れ義なり。但分別心を破するが故に、義・非義を應に行すべからずと説く。是の如く須菩提よ、菩薩は應に是の義・非義を離れたる般若波羅蜜(多)を行すべしと。須菩提復た問ふ、何の縁の故に、般若は義に非ず、非義に非ざるやと。佛答へたまはく、一切法は無作・無起の相なるが故に能く作す所無し。云何が般若波羅蜜(多)を義と作し、非義を以てせんやと。須菩提、復た問ふ、世尊よ、若し一切の諸佛及び弟子は皆無爲法を以て義と爲す。佛は何を以てか般若波羅蜜(多)を義と作し、非義を以てすること能はずと説きたまふやと。佛答へたまはく、一切の聖人は無爲法を以て義と爲すと雖も、義と作し、非義を以てせず。「そは」増すこと無く、損すること無きが故なりと。此の中に譬喩を説く、虚空の如の如きは、衆生を益すること能はず、衆生を

損ずること能はず。虚空は無法なるが故に義有り、非義を以てすること無し、何に況んや、虚空の如をや。虚空は法無しと雖も、一切の世間は虚空に因るが故に所作有ることを得。般若波羅蜜〔多〕も亦是の如く、無相無爲なりと雖も、而も般若に因りて能く五波羅蜜〔多〕等の一切の佛道法を行す、著心をして以ての故に、般若には義非義無しと説く。著心無きが故に第一實義を説き、世諦を以ての故に、説いて義と言ふ。第一義の中には義有ること無し。

復次に、言 般若に二種有り、一には有爲、二には無爲なり。有爲般若を學して能く六波羅蜜〔多〕を具足し、十地中に住し、無爲般若を學して一切の煩惱の習を滅し佛道を成ず。今、須菩提、佛に問ふ、世尊よ、菩薩は無爲般若を學して一切智を得。云何が義無しと言ふやと。佛答へたまはく、薩婆若を得と雖も、「有爲無爲の」二法を以てせざるが故に得。分別して相を取れば、是を二法と名くと。復た問ふ、不二の法は能く不二の法を得るやと。佛答へたまはく、不なり。何となれば、不二の法は即ち是れ無爲なり、無爲には得、不得の相有ること無し、是の無爲法は行すべからざるが故なりと。復た問ふ、若し不二の法を以て得ずんば、二法を以て不二の法を得べきや不やと。答へて言く、不なり。何となれば、二法は虛誑不實なればなり。云何が不實を行じて而も實法を得んやと。復た問ふ、世尊よ、若し二を以てせず、不二を以てせずんば、云何が當に一切種智を得べきやと。佛答へたまはく、無所得は即ち是れ得なり。此の中に、

【三四】二種の般若。(一)有爲。(二)無爲。

二、不二ふたは即すまち是これ分別ぶんべつ無く、皆みな無所得むじやくなり。是この無所得むじやくは、有所得うじやくを以もつて行ぎやうと爲なさず。有爲うゐ法ほふを以もつて是この無所得むじやくを得うと雖いも、心こころに相さうを取とらざるが故ゆゑに所得じやく無し。何なにとなれば、空くう・無相むさう・無作むじやくと合あ行ぎやうすればなり。

# 卷の第八十五

## 道樹品第七十一を釋す。



須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜(多)は甚深なり。世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は衆生を得ずして、而も衆生の爲に阿耨多羅三藐三菩提を求めば、是を甚だ難しと爲す。世尊よ、譬へば、人虚空の中に於いて、樹を種ふんと欲せば、是を甚だ難しと爲すが如し。世尊よ、菩薩摩訶薩も亦是の如く、衆生の爲に、阿耨多羅三藐三菩提を求むるも、衆生は亦得べからず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸の菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難し。衆生の爲の故に阿耨多羅三藐三菩提を求め、吾我に著する顛倒の衆生を度す。須菩提よ、譬へば、人の樹を種うるに樹の根莖枝葉華果を識らずして、而も鑿護し、澆灌すれば、漸漸に長大し、華葉果實成就し、昔之を用ふることを得るが如し。是の如く須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求め、漸漸に六波羅蜜(多)を行じ、一切種智を得て佛樹を成就し、華葉果實を以て衆生を益す。須菩提よ、何等をか葉もて衆生を益すと爲すや。菩薩摩訶薩に因りて三惡道を離るることを得る、是を葉もて衆生を益すと爲す。何等をか華もて衆生を益すと爲すや。菩薩よ、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天處、乃至非有想非無想處に生ずることを得。是を華もて衆生を益すと爲す。何等をか果もて衆生を益すと爲すや。是の菩薩は一切種智を得、衆生を益して須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛

【一】此の品には、種樹を以て喩説し、如相を明し、菩薩の功德方便を述ぶ。故に丹本には品名を「種樹品」とせり。

道・佛道を得せしむ。是の衆生は漸漸に三乗の法を以て、無餘涅槃に於いて而も般涅槃す。是を果もて衆生を益すと爲す。是の菩薩摩訶薩は衆生の實法を得ずして、而も衆生を度し、我顛倒の著を離れしめ、是の念を作す、一切の諸法中には衆生の我所無し、衆生の爲に一切種智を求むるも、是の衆生は實に得べからず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、當に知るべし、是の菩薩は佛の如しと爲す。何となれば、是の菩薩は因縁の故に、一切の地獄種、一切の畜生種、一切の餓鬼種を斷じ、一切の諸難を斷じ、一切の貧窮下賤の道を斷じ、一切の欲界、色界、無色界を斷ず」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は佛の如し。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求めざれば、世間には則ち過去未來現在の諸佛無く、世間には亦辟支佛・阿羅漢・阿那含・斯陀含・須陀洹無く、三惡趣及び三界の亦斷する時無けん。須菩提よ、汝の説く所の如く、是の菩薩摩訶薩は、當に知るべし佛の如しと。是の如し、是の如し。須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩は實に佛の如し。何となれば、如を以ての故に如來を説き、如を以ての故に、辟支佛、阿羅漢、一切の賢聖を説き、如を以ての故に、色乃至識と爲すと説き、如を以ての故に一切法乃至有爲性、無爲性と説き、是の諸の如は如實と異なること無し。是を以ての故に、説いて名けて如と爲す。諸の菩薩摩訶薩は、是の如を學して、一切種智を得、如來と名くることを得。是の因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩は、當に知るべし、佛の如しと説くことを、(八)それを以ての故なり。

是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に如般若波羅蜜(多)を學すべし。菩薩、如般若波羅蜜(多)を學すれば、則ち能く一切法の如を學す。一切法の如を學すれば、則ち一切法の如を具足することを得。一切法の如を具足し已れば、一切法の如に於いて自在なるを得。一切法の如に於いて自在を得已れば、善く一切衆生の根を知り、善く一切衆生の根を知り已れば、一切衆生の根を具足する、ことを知り、亦一切衆生の業因縁を知り、一切衆生の業因縁を知り已れば、願智を具足する、ことを

得、願智具足しければ、三世の慧を淨め、三世の慧を淨め已れば、一切衆生を饒益し、一切衆生を饒益し已れば、佛國土を得、願智具足しければ、三世の慧を淨め、三世の慧を淨め已れば、一切衆生を饒益し、一切衆生を饒益し已れば、佛國土を淨め、佛國土を淨め已れば一切種智を得、一切種智を得已れば法輪を轉じ、法輪を轉じ已れば、衆生を安立し、三乘に於いて無餘涅槃に入りしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩、一切の功德を得て、自ら利し人を利せんと欲せば、應に阿耨多羅三藐三菩提の心を發すべし」と。

須菩提、佛に白して言さく、「是の諸の菩薩摩訶薩は能く説の如く、深般若波羅蜜(多)を行す。一切世間の天、及び人、阿修羅は應に爲に禮を作すべし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。是の菩薩摩訶薩は能く説の如く、般若波羅蜜(多)を行す。一切世間の天、及び人、阿修羅は應當に爲に禮を作すべし」と。「世尊よ、是の初發意の菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めて、幾何の福德を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若干國土の中の家生、皆聲聞辟支佛の意を發さん、汝が意に於いて云何、其の福多きや不や」と。須菩提言さく、「甚だ多くして無量なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「其の福は、初發意の菩薩摩訶薩に如かざること、百倍、千倍、百億萬倍、乃至算數譬喩も、及ぶこと能はざる所なり。何となれば、聲聞辟支佛の意を發す者は、皆菩薩より出づればなり。菩薩は終に聲聞辟支佛より出でず。二千世界、三千大千世界の中の聲聞辟支佛地に住する者を置く。若し三千大千世界の中の衆生、皆乾慧地に住せば、其の福多きや不や」と。須菩提言さく、「甚だ多く無量なり」と。佛言はく、「初發意の菩薩に如かざること百倍

千倍、百億萬倍より、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。是の乾慧地に住する衆生を置き、若し三千大千世界の中の衆生、皆性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辦地、辟支佛地に住せんに、是の一切の福德を初發意の福德に比せんと欲するに、百倍、千倍、百億萬倍乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。須菩提よ、若し三千大千世界の中の初發意の菩薩の、法位に入れる菩薩に如かざること、百千萬倍、百億萬倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。若し三千大千世界の



中の法位に入る菩薩の、佛道に向ふ菩薩に如かざること、百千萬倍、巨億萬倍、乃至算數譬喩も及ぶと能はざる所なり。若し三千大千世界の中の佛道に向ふ菩薩の、佛の功德に如かざること、百千萬倍、巨億萬倍、乃至算數譬喩も及ぶと能はざる所なりと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、初發心の菩薩摩訶薩は、當に何等の法をか念すべきや」と。佛の言はく、「應に一切種智を念すべし」と。須菩提言さく、「何等か是れ一切種智なるや。一切種智は何等の縁、何等の増上、何等の行、何等の相なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切種智は所有無く、念なく、生なく、示なし。須菩提の問ふ所の如き、一切種智は何等の縁、何等の増上、何等の行、何等の相とは、須菩提よ、一切種智は、無法を縁となし。念を増上と爲し、寂滅を行と爲し、無相を相と爲す。須菩提よ、是を一切種智の縁・増上・行・相と名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、但一切種智のみ無法なりや、色受想行識も亦無法なりや、内外法も亦無法なりや、四禪・四無量心・四無色定・四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・空三昧・無相三昧・無作三昧・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・大喜大捨・初神通・第二・第三・第四・第五・第六の神通・有爲相・無爲相も亦た無法なりや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色も亦無法なり、乃至有爲相、無爲相も亦無法なり」と。須菩提言さく、「世尊よ、何の因縁の故に、一切種智は無法、色も無法、乃至有爲相、無爲相も亦無法なりや」と。

佛の言はく、「一切種智は自性無きが故に、若し法自性無くば是を無法と名く。色乃至有爲相、無爲相も亦是の如し」と。「世尊よ、何の因縁の故に、諸法は自性無きや」と。佛の言はく、「諸法は和合因縁生の(故に)、法中に自性無し。若し自性無くば是を無法と名く。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、當に一切法無性なりと知るべし。何となれば、一切法性は空なればなり。是を以ての故に、當に知るべし、一切法は無性なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法無性なれば、初發意の菩薩は、何等の方便力を以てか、能く檀(那)波羅蜜(多)を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、能く尸羅波羅蜜(多)・麁提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を行じ、初禪乃至第四禪を行じ、慈心乃至捨心を行じ、空處乃至非有想非無想處、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分・空三昧・無相三昧・無作三昧・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲を行じ、能く一切種智を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就するや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は能く諸法の無性を學し、亦能く佛世界を淨め、衆生を成就し、世界も衆生も亦無性なりと知る。即ち是れ方便力なり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、檀(那)波羅蜜(多)を行じて佛道を修學し、尸羅波羅蜜(多)を行じて佛道を習學し、麁提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を行じて佛道を修學し、乃至未だ佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・一切種智を成就せざるも、是を佛道を修學すと爲す。能く是の佛道の因縁を具足し已りて、一念相應の慧を用て一切種智を得。爾の時に、一切の煩惱の習永く盡きて、生ぜざるを以ての故に、是の時、佛眼を以て三千大千世界を見るに、無法も尙得べからず、何かに況んや有法をや。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に無性の般若波羅蜜(多)を行すべし。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の方便力と名く。無法すら尙得べからず、何かに況んや有法をや。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩の若くは布施する時、布施の無法すら尙知らず、何かに況んや有法をや。受者及び菩薩心は無法にして、尙は知るべからず、何かに況んや有法をや。乃至一切種智の得者、得法は無法にして尙は知るべからず、何かに況んや有法をや。何となれば、一切法の本性爾ればなり。佛の作に非ず、聲聞辟支佛の作に非ず、亦餘人の作に非ず、一切法には作者無きが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸法と諸法の性とは離るるや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。諸法と諸法の性とは離る」と。「世尊よ、若し諸法と諸法性と離るれば、云何が離法は能く離法の若くは有、若くは無あるを知るや。何となれば、無法は無法を知る能はず、有法は有法を知る能はず、無法は有法を知る能はず、有法は無法を知る能はざればなり。世尊よ、是の如く、一切法は無所有の相なり。云何が菩薩摩訶薩は是の分別を作すや、是の法は若くは有、若くは無なり」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は世諦を以ての故に、衆生に若くは有なり、若くは無なりと示す。第一義を以てするに非ず」と。「世尊よ、世諦と第一義諦とは異なること有りや」と。「須菩提よ、世諦と第一義諦とは異なること無し。何となれば、世諦の如く即ち是れ第一義諦の如なり。衆生は是の如く見ざるが故に、菩薩摩訶薩は世諦を以て、若くは有なり、若くは無なりと示す。復次に、須菩提よ、衆生は五受の衆中に於いて、著相有るが故に無所有なることを知らず。是の衆生の爲の故に、若くは有なり、若くは無なりと示し、清淨の無所有なることを知らしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應當に是の行般若波羅蜜(多)を作すべし」と。

論

釋して曰く、須菩提は佛より、無所得は即ち是れ得なることを聞き、未曾有なりと歎じ、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若は甚深なり」と。經中に廣く説くが如し。樹を以て譬喩と爲す。

葉華果實は薄きより轉た厚し。樹葉の蔭に熱時涼み樂しむが如く、衆生は菩薩道の樹蔭に因りて、三惡道の熱苦を離るることを得。何となれば、惡を遮すればなり。華の色好く、香淨くして柔軟なるが如く、衆生は菩薩に因り、布施持戒教化を以ての故に、人天の中に福樂を受く。樹果の色香味の力の如く、衆生は菩薩に因るが故に、須陀洹等の諸の聖道の果を得」と。須菩提よ、是を聞いて歡喜して

言はく、「是の菩薩は佛の如くして異なること無し」と。此の中に自ら因縁を説く、「菩薩に因るが故に、地獄等の惡道を斷ず」と。佛は其の意を可とし、更に因縁を説きたまはく、須菩提よ、菩薩發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求めずんば、乃至三界斷する時無しと。

復次に、諸法の如を得るが故に、説いて如來と名け、乃至須陀洹と名く。如を以ての故に、色乃至無爲性を説く。是の諸法の如は一にして異なること無し。菩薩是の如を學すれば、必ず當に薩婆若を得べし。是の故に、佛の如くして異なること無しと言ひ、我心を以て、菩薩を貪り貴ばざるが故に、説いて佛の如と言ひ、如を得るを以ての故に佛の如と言ふ。是の如は佛に在るも亦菩薩に在るも、一相なるを以ての故に、是を菩薩は佛の如しと爲すと名く。如を離れ、更に法の如に入らざる者有ること無し。

問うて曰く、若し如を同じうするを以ての故に、菩薩は佛の如しと名けば、乃至畜生の中にも亦是の如有り、何を以てか、佛の如しと名けざるや。答へて曰く、畜生にも亦如の因縁有りと雖も、未だ發せざるが故に、衆生を利益すること能はず、如を行じて薩婆若に至ること能はず。故に是の如く、須菩提よ、菩薩は應に是の如般若波羅蜜(多)を學すべし。菩薩は是の如般若を學するが故に、則ち能く一切法の如を具足す。具足を諸法實相を得と名け、能く種種の門を以て衆生をして、解すること

【二】 諸法の如を得るが故に如來と名く。

【三】 第一問、畜生の中にも亦この如あり、何故に如と名けざるや。

を得せしむ。具足することを得るを以ての故に、一切法に於いて、如にして自在なることを得。是の諸法の如を得れば、自在に已に能善く衆生の根を知るが故に、能く衆生の諸根を具足するを知る。諸根とは、信等の五善根なり。三乗の人は各各能く分別有り、是の人は有なり、是の人は無なり、是の人は力を得、是の人は力を得ずと。具足とは信等の善根を具足するなり。是の如き人は能く世間を出で、信(等の)根力を得れば、則ち決定して能く受持し疑はず。精進力の故に、未だ法を見ずと雖も、一心に道を求め、身命を惜まず、休まず、息まず、念力の故に、常に師の教を憶し、善法來れば聽き入れ、惡法來れば聽き入れず、守門の人の如し。定力の故に、心を一處に攝して動せず。智慧を助くるを以てなり。智慧力の故に、能く實の如く、諸法の相を觀ず。根を得るに二種有り。一には大心在りて、人身の中に則ち菩薩の根を成ず。二に

【四】根を得るに二種あり。

は、小心在りて、人身の中に則ち小乗の根を成ず。是の具足の根を得れば則ち度すべし。或は菩薩有り、人、信等の五根を得と雖も、而も度すべからざるを見る。「そは」先世の罪重きに由るが故なり。是の故に、一切衆生の業因縁を知ると云ふ。無數劫の業因縁を知らんと欲せば、宿命通を得るを要す。既に知り已つて衆生の爲に過去の罪業の因縁を説く。衆生は是の過去の罪を以ての故に畏れず。是の故に、願智を求め、三世の事を知らんと欲す。既に知り已つて、衆生の爲に、未來世の罪業の因縁も、當に地獄に墮すべしと説く。衆生は聞き已つて、則ち恐怖を懷き、恐怖し已れば、心伏して度し

易し。衆生若し未來世の福報の因縁を知らんと欲し、爲に説き已れば、則ち歡喜し、度すべし。是の故に、業因縁を知り已つて願智を具足すと説く。願智を具足するが故に、三世の慧淨にして通達無礙なることを得、過去の善惡の業を知り、又、未來の善惡の果報を知る。現在の衆生の諸根の利鈍を知り、然る後に、法を説いて教化するに、利益する所多くして虚しからず。大に衆生を利益するが故に佛國土を淨め、佛國土を淨め已つて一切種智を得。一切種智を得るが故に法輪を轉じ、法輪を轉じ已つて、三乘を以て衆生を安立し、無餘涅槃に入る。是の如き利益は、皆如を學する中より來る。是の故に、佛説きたまはく、菩薩、一切の功德を得て、自ら利し、人を利せんと欲せば、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべしと。須菩提是の菩薩の功德の甚だ多きことを聞き、佛に白して言さく、世尊よ、菩薩は能く説の如く、般若波羅蜜多を行す。一切の世間は應當に禮を作すべしと。經中に

【五】 一切種智とは阿耨多羅三藐三菩提なり。

【六】 第二問、佛は何を以てか一切種智を念すと答へたまひしか。

廣く説くが如し。初發意の菩薩の功德を分別す。爾の時に、須菩提は、是の甚深の般若の、憶想無く、初學の得る所に非ざることを知る。是の故に、佛に問ひたてまつれり、「初發心の菩薩は能く何等の法を念するや」と。佛答へたまはく、「應に一切種智を念すべし」と。一切種智とは、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。薩婆若、佛法、佛道は、皆是れ一切種智の異名なり。

問うて曰はく、佛は何を以てか答へて、一切種智を念すと言ひしや。答へて曰はく、初發意の菩薩

薩は、未だ深智慧を得ざるも、既に世間の五欲の樂を捨つるが故に、佛は心を繋けて薩婆若を念せしめ、應に是の念を作すべきを教へたまへり、「小雜の樂を捨つと雖も、當に清淨の大樂を得べし」と。顛倒虛誑の樂を捨てて實樂を得、繫縛の樂を捨てて解脱の樂を得、獨善の樂を捨てて一切衆生と共にする善樂を得。是の如き等の利益を得るが故に、佛は初發意の者をして、常に薩婆若を念せしめたまへり。須菩提問ふ、「世尊よ、是の一切種智は是れ有法なりとや爲ん。是れ無法なりとや爲ん。何等の縁、何等の増上、何等の行、何等の相なるや」と。佛、須菩提に答へたまはく、「一切諸法は所有無し。所有なきを非法と名く、無生無滅なり。諸法は如實なれば、縁も亦所有無し。念を増上と爲し、寂滅を行と爲し、無相を相と爲す。

問うて曰はく、皆是れ畢竟空の念なり。何を以てか、獨り増上と言ふ

や。答へて曰はく、諸法は各各力有り、佛の智慧は是れ畢竟空、如法性實際にして、無相、所謂る寂滅の相なり。佛は一切種智を得、復た思惟せず、復た難易無く、遠近の所念を皆得るが故に、念を増上と爲すと言ふ。須菩提問ふ、「世尊よ、但一切種智のみ無法なりや、色等の法も亦無法なりや」と。佛答へたまはく、「色等の一切法も亦是れ無法なり」と。自ら因縁を説きたまふ、若し法、因縁和合の生なれば即ち自性無し、若し法自性無ければ、即ち是れ空にして無法なり。是の因縁を以ての故に、當に知るべし、一切法は無所有の性なることを。須菩提問ふ、「初發心の菩薩は、何の方便を以てか、

【七】 第三問、皆これ畢竟空の念なり、何を以てか獨り増上と言ふや。

檀〔那〕波羅蜜〔多〕乃至一切種智を行じ、佛世界を淨め、衆生を教化するやと。佛答へたまはく、無所有の法性中に學し、入りて觀するも亦能く諸の功德を集め、衆生を教化し、佛世界を淨む、即ち是れ方便力なり。所謂の有無の二法を能く一時に行するが故なり、所謂る畢竟空もて諸の福德を集む。是の人には六波羅蜜〔多〕を行する時亦佛道を修治す。佛心の如く畢竟空なる無所有の法を以て、六波羅蜜〔多〕乃至一切種智を行す。是の菩薩は是の道を行じて、能く佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲を具足し、菩薩道を行する時、是の法を具足し、道場に坐し、一念相應の慧を用て一切種智を得。人、夜寶珠を失し、電光暫く現すれば、即時に還た得るが如し。故に煩惱及び習永く盡きて、更に復た生ぜず。佛を得已つて、佛眼を以て一切十方世界の中一切の物を見るに、尚無法を見ず。何に況んや有法をや。畢竟空法は能く顛倒を破し、菩薩をして成佛せしむるも、是の事すら尙得べからず、何に況んや、凡夫顛倒の有法をや。是の故に、須菩提よ、當に知るべし、一切法は無所有の相なり。是を菩薩の方便と名くることを。空すら尙得ず、何に況んや有法をや。須菩提よ、菩薩は應に無所有の般若波羅蜜〔多〕を行すべし。是の菩薩は是の無所有の般若波羅蜜〔多〕を行じ、若し布施の時、即ち布施物は空しうして、所有無く、受者及び菩薩心も、亦所有無きことを知る。乃至、一切種智、得者、得法、得處の無法すら尙知らず、何に況んや有法をや。得者は菩薩、得法は是れ阿耨多羅三藐三菩提、得法を用ふるは、是れ菩薩道なり。皆是の法の所有無きことを知る。何となれば、一



切法の本性爾なればなり。智慧を以ての故に異ならず。凡夫の作に非ず、亦諸の聖人の作に非ず。「そは」一切法は作無く、作者無きが故なりと。須菩提意へらく、若し諸法都て是れ無所有の相ならば、誰か是の無所有なるを知るやと。是の故に佛に問ふ、「世尊よ、諸法の性と離れば、云何が離は能く離法の、若くは有、若くは無なりと知らん。何となれば、無法は無法を知ると能はず、有法は有法を知ると能はず、無法は有法を知ること能はず、有法は無法を知ること能はざればなり。世尊よ、是の如く、一切法は無所有の相なり。云何が菩薩は是の分別を作さん、是の法は若くは有、若くは無なり」と。佛答へたまはく、「菩薩は世俗の故に衆生の爲に若くは有、若くは無と説く、第一義には非ず。若し有是れ實に有ならば、無も亦應に實有なるべし。若し有不實ならば、無云何が應に實なるべけんや」と。須菩提問ふ、世俗と第一義と異なると有りやと。若し異ならば法性を破壊するが故に、是の故に「佛は」異ならずと言ふ。世俗の如は即ち是れ第一義の如なり。衆生は是の如を知らざるが故に、世俗を以て爲に、若くは有、若くは無なりと説く。

復次に、衆生に五受陰の中に著する所有り、是を衆生は所有の得を離ると爲す。「そは」無所有なるが故なり。菩薩は無所有を説き、世俗法の故に、諸法を分別して、衆生をして是の無所有を知らしめんと欲す。是の如く、須菩提よ、菩薩は應に無所有の般若波羅蜜〔多〕を學すべしと。

【八】 世俗とは、俗諦 (Conventional truth) の義なり。

【九】 第一義とは、眞諦 (Transcendental truth) の義なり。



達するが故に、名けて佛と爲す。復次に、實の如く一切法を知るが故に、名けて佛と爲す」と。

須菩提言さく、何の義の故に菩提と名くるや」と。「須菩提よ、空の義は是れ菩提の義、如の義、法性の義、實際の義は是れ菩提の義なり。復次に、須菩提よ、名相、言説は是れ菩提の義なり。須菩提よ、菩提の實義は壞すべからず、分別すべからず、是れ菩提の義なり。復次に、須菩提よ、諸法實相は誰ならず、異ならず、是れ菩提の義なり。是を以ての故に菩提と名く。復次に、須菩提よ、是の菩提は是れ諸佛の有する所なるが故に菩提と名く。復次に、須菩提よ、諸佛は正しく遍ねく知るが故に、菩提と名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は、是の菩提の爲に六波羅蜜(多)を行じ、乃至一切種智を行ぜば、諸法に於いて、何の得、何の失、何の増、何の減、何の生、何の滅、何の垢、何の淨あらん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜(多)を行じ、乃至一切種智を行ぜば、諸法に於いて得無く、失無く、増無く、減無く、生無く、滅無く、垢無く、淨無し。何となれば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、得失・増減・生滅・垢淨を爲さざるが故に出ればなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、得失を爲さず、乃至淨垢を爲さざるが故に出れば、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜(多)を行じて、能く檀(那)波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を取り、云何が内空乃至無法有法空を行じ、云何が禪、無量心、無色定を行じ、云何が四念處乃至八聖道分を行じ、云何が空、無相、無作解脫門を行じ、云何が佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を行じ、云何が菩薩の十地を行じ、云何が聲聞辟支佛地を過ぎて、菩薩位中に入るや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、二法を以て檀(那)波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)

摩提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を行ぜず。二法を以て、乃至一切種智を行ぜず。須菩提言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、二法を以ての故に、檀(那)波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)を行ぜず、二法を以ての故に、乃至一切種智を行ぜずんば、菩薩は初發意より乃ち後意に至るまで、云何が善根を増益するや」と。

佛(ほつ) 須菩提に告げたまはく、「若し二法を行する者は、善根を増益することを得ず。何となれば、一切の凡夫は皆二法に依りて善根を増益することを得ず。菩薩摩訶薩は不二法を行じ、初發意より乃ち後意に至るまで、其の中間に於いて善根を増益す。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は一切世間の天及び人、阿修羅、能く伏すること無く、能く其の善根を壞して、聲聞辟支佛地、及び諸の衆惡、不善法に墮せしむることを得ず。菩薩を制して、檀(那)波羅蜜(多)を行じ、善根を増益すること能はざらしむること能はず。乃至、般若波羅蜜(多)も亦是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩に、是の如く般若波羅蜜(多)を行すべし」と。「世尊よ、菩薩摩訶薩は、善根の爲の故に般若波羅蜜(多)を行せず、亦非善根の爲の故に般若波羅蜜(多)を行ぜず。何となれば、須菩提よ、菩薩摩訶薩の法は、未だ諸佛を供養せず、未だ善根を具足せず、未だ眞知識を得ざれば、一切種智を得ること能はざればなり」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、諸佛を供養し、善根を具足し、眞知識を得て、能く一切種智を得るや」と。佛(ほつ) 須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩に初發意より諸佛を供養し、諸佛

所説の十二部經、修妬路乃至變波提舍をば、是の菩薩は聞持諷誦し、心に親じ了達し、了達するが故に陀羅尼を得。陀羅尼を得るが故に、能く無礙智を起し、無礙智を起すが故に、所生の處より乃ち薩婆若に至るまで、終に忘失せず。亦諸佛の種うる所の善根に於て、是の善根の爲に護られ、終に惡道諸難に墮せず。是の善根の因縁を以ての故に、深心清淨なることを得、深心清淨なることを得るが故に、能く佛國土を淨め、衆生を成就し、善根を以て護らるるか故に、常に眞知識、所謂諸佛

諸の菩薩摩訶薩、及び諸の聲聞の能く佛法を讚歎する者を離れず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に諸佛を供養し、善根を種み、善知識に親近すべしと。

論

釋して曰はく、上品の中に、須菩提、佛に問ふ、經に常に般若波羅蜜(多)を説く、何を以ての故に、般若波羅蜜(多)と名くるやと。佛、種種の因縁もて答へたまふ、此の事に因るが故に、此の品中に復た問ふ。世尊は經に常に菩薩行を説きたまへり、何等か是れ菩薩行なりやと。是の故に、須菩提は菩薩行を問へり。

問うて曰はく、(三)若し般若波羅蜜(多)の中に一切法を攝し、又、般若は即ち是れ菩薩行ならば、何を以ての故に更に問へるや。答へて曰はく、一切の菩薩道を菩薩行と名け、悉く遍ねく諸法實相を知る智慧を般若波羅蜜(多)と名く、是を異なれりと爲す。若し般若經の菩薩行は、等しうして共に相攝せば、異なること無し。

復次に、有人の言はく、菩薩行とは、菩薩の身口意業の諸有る所作を、皆菩薩行と名く。是の事を以ての故に、須菩提は但だ菩薩の正行を分別せんと欲するが故に問へり。是の故に佛答へたまはく、菩薩行とは、阿耨多羅三藐三菩提の爲にする諸の善行なり、是を菩薩の正行と名く。菩薩の不善無記、及び著心もて行する善法は、菩薩行に非ず。但だ悲心を以ての故に、及び空の智慧を阿耨多羅

【三】 第四問、若し智度の中に一切法を攝し、般若は即ち菩薩行ならば、今復た更に問へるは何故なるか。

【三】 菩薩行の義解、

三藐三菩提の行と爲し、是を菩薩行と名く。何等か是れ清淨の行なるや。所謂、色空行、受想行識空行、乃至有爲性無爲性空行、是の諸法に於いて、是れ空、是れ實、乃至是れ有爲、是れ無爲なりと分別せず。阿耨多羅三藐三菩提の如きは、戲論を滅し、不二相なり。是を菩薩行と名く、能く壞する者無く、亦過失無しと。須菩提は是の菩薩行を聞き已つて、歡喜し、菩薩行の果報、「所謂」、作佛を得るとを問へり。經に常に佛と言ふ、何等をか是れ佛の義なると。佛答へたまはく、諸法の實義を知るが故に、名けて佛と爲すと。

問うて曰はく、(二四) 若し爾らば阿羅漢、辟支佛、及び大菩薩、是「等」の人も亦諸法の實義を知る、何故に名けて佛と爲さざるや。答へて曰はく、上に已に燃燈佛の喩を説けり。凡夫に於いては實と爲すも、佛に於いては實と爲さず。煩惱の習に覆はるるを以ての故に、名けて實と爲さず。一切種智を得、一切法中の疑悔を斷すること能はざるが故に、正智實義と名けず。上に分別せるが如し。

問うて曰はく、(二五) 諸法の實義を知ると、諸法の實相を得ると、實義に通達すると、一切法を實の如く知ると。是の四に何等の異なること有りや。答へて曰はく、有人は言ふ、「義異なること無く、名字異なるのみ」と。有人は言ふ、義別有り。義とは、諸法實相は不生不滅、法相常住にして、涅槃の如きに名け。是の義を知るが故に、名けて佛と爲す。是の義中に常に覺悟して錯謬無く、是の義に

【二四】 第五問、阿羅漢・辟支佛・大菩薩を佛と名けざる理由如何。

【二五】 第六問、(一)諸法の實義を知ると、(二)諸法の實相を得ると、(三)實義に通達すると、(四)一切法を如實に知ると、此の四に何の異ありや。

於いて、種種の名相の法を以て、衆生をして第一實義を解せしむ。是の故に四無礙の中に別して義無礙、法無礙を説けり。有人は諸法の實義を得と雖も、通達する能はず。「(こは)二因縁有るが故なり。一には煩惱未だ盡きざると、二には未だ一切智を得ざるとなり。須陀洹・斯陀含・阿那含の如きは、未だ煩惱を斷せざるが故に、通達する能はず。阿羅漢・辟支佛・大菩薩は煩惱盡くと雖も、未だ一切種智を得ざるが故に、通達すること能はず。是の故に、實義に通達するが故に、名けて佛と爲すと説く。實際の如く一切法を知るとは、總じて上の三事の亦是義、亦是法、一切法の若くは有、若くは無を種種に了知するが故に、一切種智の義中に説くが如く、亦是寂滅相を知り、亦是有相を知る。

復次に、菩提を智と名け、佛を智者と名く、是の智を得るが故に、名けて智者と爲すなり。須菩提世尊に問ふ、何等か是れ菩提なるやと。佛答へたまはく、空・如・法・性・實際を名けて菩提と爲し。空三昧相應の智慧もて、如法・性・實際の菩提を緣するを實智慧と名く。三學道は未だ煩惱を斷せざれば、智慧有りと雖も、名けて菩提と爲さず。三無學の人は、無明永く盡きて、餘ると無きが故に、智慧を菩提と名く。二無學の人は、一切智もて、正しく遍ねく諸法を知るとを得ざるが故に、阿耨多羅三藐三菩提と名くることを得ず。唯佛一人の智慧のみを、阿耨多羅三藐三菩提と名く。

復次に、名相、語言、文字の故に菩提と名く。菩提の實義は分別し破壞すべからず。復次に、菩提は是の如と異ならず。常に虚誑ならず。何となれば、一切衆生の智慧は轉轉して勝るもの有り。佛に

至れば、更に勝る者無し。諸法も亦轉轉して勝るもの有り。先には虚誑にして、後には眞實なり。菩提に至れば、更に實なる者無し。是の故に、菩提を名けて實と爲す。

復次に、菩提を得るが故に、名けて佛と爲すが如く、今は佛を得るを以ての故に菩提と名く。復た有人は言はく、盡智もて生永く盡くることを知る。是を菩提と名くと。有人は言はく、盡智、無生智を菩提と名くと。有人は言はく、無礙解脱を菩提と名く。何となれば、是の解脱を得れば、一切法に於いて、皆通達すればなりと。有人は言はく、四無礙智は是れ菩提なり。何となれば、佛の諸法實相を知りたまふは是れ義無礙なり。諸法の名相を知りて分別するは、是を法無礙と名く。種種の語言を分別して、衆生をして解することを得せしむるは、是を辭無礙と名く。說法教化する所有りて無窮無盡なるは、是れを樂說無礙と名づく。四無礙を以て具足し、衆生を利益するが故に、菩提と名くと。有人は言はく、佛の十方四無所畏、四無礙智十八不共法、大慈大悲、一切種智の是くの如き無量の佛法を、盡く菩提と名づく。何となれば、智慧大なるを以ての故に、諸法皆菩提と名づくればなりと。有人は言はく、眞の菩提を佛に名く。無漏の十智、是の十智相應の受想行識、身口業、及び心相應の諸業を皆菩提と名く。共に緣じ、共に生じ、共に相佐助するが故に、皆菩提と名くと。復た有人は言はく、菩提の義は無量無邊なり。唯佛のみ能く遍ねく知りたまふ。餘人は其の少分を知る。譬へば、轉輪聖王の寶藏の中の諸寶は、能く分別して其の寶を知る者無く、聖主寶を出だして人に賜へば、正しく其の



所得の者を知るべきが如しと。此の中に須菩提、佛に菩提の相を問ひ已り、更に問ふ、世尊よ、若し菩提は畢竟空にして不壞の相ならば、菩薩は六波羅蜜〔多〕の諸法を行じて、何等の善根を増益するやと。佛答へたまはく、若し菩薩、是の菩提の實相を行ずるに、一切法に於いて増益する所無し、何に況んや、善根をや。何となれば、般若波羅蜜〔多〕は、得失乃至垢淨を爲さざるが故なり、畢竟清淨より出づるが故なりと。佛は其の意を可としたまへり。復た更に問ふ、若し増減無くんば、云何が菩薩は般若を行じ、檀〔那〕波羅蜜〔多〕等の諸の菩薩行を取るやと。佛答へたまはく、菩薩は是の法を行すと雖も、二法を以ての故に行せず、畢竟空に和合して共に行ず、是の故に應に難すべからずと。復た問ふ、世尊よ、若し是の菩薩二法を行せずんば、云何が初發意より乃ち後意に至るまで、善根を増長するやと。佛答へたまはく、若し人、二法を行せば、即ち是れ顛倒にして、善根を増長すること能はず。人の夢中に大に財を得と雖も、竟に所得無く、覺め已つて得る所の多少を、眞に名けて得と爲すが如しと。佛、須菩提に語りたまはく、一切の凡人は皆二法に著するが故に、善根を増益すること能はず。菩薩は諸法實相、所謂る不二の法を行じ、初發心より來た、乃ち後心に至るまで、善根を増益して錯謬有ること無し。是の故に、菩薩を、一切の天人、阿修羅、能く其の善根を壞して二乗及び餘の衆惡に墮せしむること無く、亦餘の惡者、慳貪等の煩惱を壞して、檀〔那〕波羅蜜〔多〕、諸の善法等を破すること能はざらしむと。復た問ふ、世尊よ、菩薩は善根の爲の故に般若を行ずるやと。佛答へ

たまはく、善を爲さず、不善を爲さざるが故に般若を行すと。

問うて曰はく、「不善根の爲の故に般若を行せざるは爾るべし、云何が善根の爲の故に行せざるや。」

答へて曰はく、此の中に、佛意は、阿耨多羅三藐三菩提を貴ぶが故に、諸善根を行すと雖も、事を辦

するが爲の故に行するは、以て貴しと爲さず。楞伽經に説くが如きは、善法すら尙應に捨つべし、何

に況んや、不善法をや。善根は是れ佛道を助くる法なり。若し人、棧の爲の故に渡らず、彼岸に到る

が爲の故に渡ると。此の中に佛、因縁を説きたまふ、菩薩、未だ諸佛を供

養せず、未だ眞の智識を得ず。一切種智を得ること能はず。是の故に、善

根を種うと雖も、以て貴しと爲さず、但阿耨多羅三藐三菩提の爲の故なり

と。須菩提言さく、云何が菩薩は、善根の爲にせずと雖も、而も能く諸佛

を供養し、乃至一切種智を得るや。佛答へたまはく、菩薩は初發心より已

來、諸佛を供養すと。經中に説くが如きは、佛を供養することは大なるが故に、但佛のみを説く。當

に知るべし、已に辟支佛、乃至乾慧地に住する凡人を供養するとを。「そは」聞法の爲の故なり。其れ

より十二部經を説くを聞き、常に師を得ること能はざるを以ての故に、皆當に受持すべく、喜忘を以

ての故に、誦讀して利ならしむ。心觀とは、常に心を經卷に繫け、次第に憶念し、先づ語言を以て義

を宜べ、後了達を得て即ち陀羅尼を得。陀羅尼に二種有り、一には、開持陀羅尼、二には、得諸法

【二六】第七問、不善根の爲の故に般若を行せざるは、爾るべし。云何が善根の爲の故に行せざるや。

【二七】二種の陀羅尼。(一)開持陀羅尼、(二)得諸法實相陀羅尼。

實相陀羅尼なり。讀誦修習して常に念ずるが故に、聞持陀羅尼を得、義に通達するが故に、實相陀羅尼を得。是の二陀羅尼門の中に住して、能く無礙智を生じ、衆生の爲に法を説くが故に、四無礙智を具足す。

問うて曰はく、(二八)若し菩薩に無礙智有らば、佛と何の異ありや。答へて曰はく、(二九)無礙に二種有り、一には眞無礙、二には名字無礙なり。此の中の佛の無礙を除き、餘は菩薩の所得の無礙に隨ふ、是の菩薩は讀經等の因縁の故に、所生の處より、乃至一切種智を得るに至るまで、終に忘失せず。何となれば、深く入りて諸法を讀誦するが故に、煩惱折薄し、善根の爲に護らるるが故に、惡道の諸難に墮せず、盲人、目有る者の爲に將護らるるが故に、終に溝壑に墜落せざるが如し。善根福德を集むるが故に、深心清淨を得。深心清淨とは、一切衆生を慈愛し、怨賊中の人と雖も、亦惡、所謂る奪命等を加へず。

復次に、智慧福德大に集るが故に、煩惱微妙にして、遍ねく菩薩の善心を覆ふこと能はず。復次に(三〇)深心とは、衆生の中に於いて慈悲心、不捨心、救度心を得、諸法の中に於いて無常、苦、空、無我、畢竟空、乃至佛を得、佛想、涅槃想を生せず、是を深心清淨と名く。深心清淨なるが故に、能く衆生を教化す。何となれば、是の煩惱薄きが故に高心、我心、瞋心を起さず。故に衆生、其の語を愛樂信受し

【二八】 第八問、若し菩薩に無礙

智あらば、佛と何の異ありや。

【二九】 二種の無礙、(一)眞無礙、

(二)名字無礙。

【三〇】 深心の義解。

衆生を教化す。衆生を教化するが故に、佛世界を淨むるを得。毗摩羅鞞佛國品の中に説くが如し、衆生淨きが故に世界清淨に、善根の爲に護らるるが故に終に善知識を離れずと。善知識とは、諸佛、大菩薩、阿羅漢なり。略して善知識の相を説かば、能く三寶を讚歎する者なり。是の如く菩薩は應に諸佛を供養し、善根を種え、善知識に親近すべし。何となれば、病人は應に良醫藥草を求むべきが如く、佛を良醫と爲し、諸の善根を藥草と爲し、瞻病人を善知識と爲す。病者は此の三事を具するが故に、病除愈することを得。菩薩も亦是の如く、此の三事を具して諸の煩惱を滅するが故に、能く衆生を利益す。

〔三〕 衆善根品第七十三を釋す。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、若し諸佛を供養せず、善根を具

【三】 善知識の義解。  
 【三】 此の品には、一切智を成就せんが爲に修する六度善根を明す。又諸佛善根知識を明すが故に三善品ともいふ。義疏には、三善提品に作れり。

足せず、眞知識を得ずして、當に薩婆若を得べきや不や」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は諸佛を供養し、善根を種え、眞知識を得るも、一切種智は尙ほ得難し、何に況んや、諸佛を供養せず、善根を種えず、眞知識を得ざるをや」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は諸佛を供養し、善根を種え、眞知識を得るも、何を以ての故に、一切種智を得難きや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は方便力を遠離し、諸佛より方便力を聞かず、種うる所の善根を具足せず、常に善知識の教に隨はず」と。「世尊よ、何等をか是れ方便力とし、菩薩摩訶薩は、是の方便力を行じて

一切種智を得るや」と。佛の言に、**「菩薩摩訶薩は初發意より檀那波羅蜜多」**を行じ、**薩婆若**に應ずる念もて、**佛若**くは**辟支佛**、若くは**聲聞**、若くは人、若くは非人に布施し、是の時に、布施想、受者想を生ぜず。何となれば、一切法の自相空、無生無定相、無所轉なることを觀して、諸法實相、所謂一切法の無作無起相に入ればなり。菩薩は是の方便力を以ての故に、善根を増益し、善根を増益するが故に檀那波羅蜜多を行じ、佛國土を淨め、衆生を成就し、布施して世間の果報を受けず。但一切衆生を救度せんと欲するが故に、檀那波羅蜜多を生ず。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より**尸羅波羅蜜多**を行じ、薩婆若に應ずる念もて戒を持する時、**嫉怒癡**の中に墮せず、亦諸の煩惱の纏縛、及び諸の不善、破道の法、若くは慳貪・破戒・瞋恚・懈怠・亂意・愚癡・慢・大慢・我慢・我慢・增上慢・不如慢・邪慢・若くは聲聞心、若くは辟支佛心に墮す。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、一切法の自相空・無生無定相・無所轉なることを觀じ、諸法實相、所謂一切法の無作無起相を觀すればなり。菩薩は是の方便力を成就するが故に、善根を増益し、善根を増益するが故に、尸羅波羅蜜多を行じ、佛國土を淨め、衆生を成就し、戒を持して世間の果報を受けず。但一切衆生を救度するが故に、尸羅波羅蜜多を行す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、**鬚髮波羅蜜多**を行じ、薩婆若に應ずる念もて方便力を成就するが故に、見諦道・思惟道を行じ、亦須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を取らず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は諸法の自相空、無生無定相、無所轉なることを知り、是の助道法を行すとも、聲聞辟支佛地を過ぐればなり。須菩提よ、是を菩薩の無生法忍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、**毗梨耶波羅蜜多**を行じ、初禪より乃至第四禪に入り、四無量心、四無色定に入り、諸禪に出入すと雖も、而も果報を受けず。何となれば、是の菩薩は是の方便力を成就するが故に、諸の禪定の自

相空、無生無相、無所轉なるを知り、佛國土を淨め、衆生を成就し、精進して世間の果報を受けず、但だ一切衆生を救度せんと欲するが故に、毗梨耶波羅蜜(多)を行す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禮(那)波羅蜜(多)を行じ、薩婆若を得んやと。

【三】第九問、須菩提が、諸佛を供養せず、善根を具足せず、眞知識を得ずして、當に薩婆若に得べきやと不わと。答へて曰はく、一切智を得べきやとの蠱問を發せし理由如何。

養し、善根を種ゑ、眞知識を得るすら尙得難し、何に況んや不らざるをやと。須菩提問ふ、畢竟空の中には福有ると無きを以て福に非ず、何を以てか但福徳を以ての故に得るやと。佛答へたまはく、世諦の中に福有るを以ての故に得、須菩提は衆生の無所有に著するが爲の故に問ひ、佛は有法に著せざるを以て答へたまへり。所謂る精進、修福すら尙得べからず、何に況んや、福を修せざるをや。食を乞うて受くる道人の一聚落に至り、一家より一家に至り乞食して得ず、一の餓狗の飢ゑ臥するを見、杖を以て之を打ち、「汝は畜生にして無智なり。我れ種種の因縁もて家家に食を來むるすら尙得ず。何に況んや、汝臥して而も望み得んやと言へるが如し。須菩提問ふ、世尊よ、是の諸佛を供養する等の因縁有りて、何故に其の果報を得ざるやと。佛答へたまはく、方便を離るるが故なりと。

【二】方便とは、般若波羅蜜〔多〕なり。諸佛の色身を見るとき雖も、智慧の眼を以て法身を見ず。少しく善根を種うと雖も、而も具足せず。善知識を得と雖も、親近し請受せず。又、佛自ら因縁を説きたまふ。所謂る菩薩は初發意より有無の心を以て、檀〔那〕波羅蜜〔多〕を行す。有心とは、所謂る薩婆若に應ずる心もて布施し、諸佛の種種無量の功徳を念じ、衆生を憐愍するが故に布施す。無心とは、若し佛、乃至凡夫に施し、三想所謂る施者・受者・財物を生ぜざるなり。何となれば、施物等の一切法は自相空にして、本より已來、常に不生不定相なり。若くは一、若くは異、若くは常、若くは無常等、是の法は、自相空なるが故に轉ずべからず。〔そは〕如中に

【三】方便とは、般若波羅蜜多なり。

安住するが故なり。是の如く觀すれば、即ち諸法實相、所謂る無作無起相に入る。一切法は能く作す  
 所無く、高心を生せず、希望する所無し。是の如き方便力の故に、能く善根を増益し、不善根を離れ、衆  
 生を教化し、佛世界を淨め、布施すること、若くは多く、若くは少く、世間の果報を受けず。但一切  
 衆生を救度せんと欲するが故なり。菩薩の衆生に布施するには量有り、限あり。是の念を作す、「我  
 れ先世に深く福德を行せず、今廣く衆生に施すこと能はず、我れ今當に深く、實に多く檀〔那〕波羅蜜  
 〔多〕を行すべし」と。是の果報を得已つて、能く利益を具足し、廣く無量の衆生に施し、若くは今世  
 に利し、若くは後世に利し、若くは道德もて利す。是の如き方便無き菩薩は、諸佛を供養し、善根を  
 種ゑ、眞知識を得と雖も尙得ず、何に況んや、供養せざるをや。餘の五波羅蜜〔多〕も亦是の如し。



# 巻の第八十六

## 二 通學品第七十四を釋す。

經

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩摩訶薩は大智慧を成就し、是の深法を行するも亦果報を受けずしと。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。菩薩摩訶薩は大智慧を成就し、是の深般若波羅蜜(多)を行するも亦果報を受けず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、諸法の性中に動ぜざればなり」と。

「世尊よ、何等か諸法の性中に動ぜざるや」と。佛の言はく、「無所有の性中に於いて動ぜざるなり。」

【一】此の品には菩薩の諸道を通學して、菩薩位に入ることを明す。

復次に、菩薩摩訶薩は色性の中に動ぜず、受想行識性の中に動ぜず、檀(那)波羅蜜(多)性の中に動ぜず、尸羅波羅蜜(多)・廣提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)性の中に動ぜず、四禪性の中に動ぜず、四無量性の中に動ぜず、四無色定性の中に動ぜず、四念處性の中に動ぜず、乃至八聖道分性の中に動ぜず、空三昧・無相・無作三昧乃至、大慈大悲性の中に動ぜず。何となれば、須菩提よ、是の諸の法性は即ち是れ無所有なればなり。須菩提よ、無所有の法なるを以て、所有の法を得ること能はずしと。

須菩提言さく、「世尊よ、所有の法は能く所有の法を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、所有の法は能く無所有の法を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、無所有の法は能く無所有の法を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、無所有の法は能く無所有の法を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。

はく、「不あり」と。「世尊よ、若し無所有に所有を得ること能はず、所有は所有を得ること能はず、無所有は無所有を得ると能はず、無所有は無所有を得ると能はずんば、將に世尊は道を得ざることを無きや」と。佛の言はく、「得ること有るも、此の四句を以てせず」と。「世尊よ、云何が得ること有るや」と。佛の言はく、「所有に非ず、無所有に非ず、諸の戲論無き、是を得道と名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ、菩薩摩訶薩の戲論なるや」と。佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、色の若くは常、若くは無常を觀ぜば、是を戲論と爲す。受想行識の若くは常、若くは無常を觀ぜば、是を戲論と爲す。色の若くは苦、若くは樂、受想行識の若くは苦、若くは樂を觀ぜば、是を戲論と爲す。色の若くは我、若くは非我、受想行識の若くは我、若くは非我、色の若くは寂滅、若くは不寂滅、受想行識の若くは寂滅、若くは不寂滅を觀ぜば、是を戲論と爲す。苦聖諦は應に見るべく、集聖諦は應に斷すべく、滅聖諦は應に證すべく、道聖諦は應に修すべしとせば、是を戲論と爲す。應に四禪・四無量心・四無色定を修すべしとせば、是を戲論と爲す。應に空解脱門・無相解脱門・無作解脱門を修すべしとせば、是を戲論と爲す。八聖道分を修すべしとせば、是を戲論と爲す。應に空解脱門・無相解脱門・無作解脱門を修すべしとせば、是を戲論と爲す。應に入肯捨、九次第定を修すべしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に菩薩の十地を具足すべしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に菩薩位に入るべしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に佛國土を淨むべしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に衆生を成就すべしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に佛の十方・四無所畏・四無礙智・十八不共法を生ずべしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に一切種智を得べしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に一切煩惱の習を斷すべしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に一切種智を得べしとせば、是を戲論と爲す。我れ當に一切煩惱の習を斷すべしとせば、是を戲論と爲す。

須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、色の若くは常、若くは無常を戲論すべからざるが故に、應に

戲論すべからず。妄想行議の若くは常、若くは無常を戲論すべからざるが故に、應に戲論せず。乃至、一切種智を戲論すべからざるが故に、應に戲論せず。何となれば、性は戲論ならざるの性、無性も戲論ならざるの無性なり。性と無性とを離れて更に法の得べき無ければなり。所謂、戲論とは戲論の法と戲論の處となり。是を以ての故に、須菩提よ、色は戲論無く、妄想行議は戲論無く、乃至一切種智は戲論無し。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に無戲論の般若波羅蜜(多)を行すべしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が色は戲論すべからず、乃至一切種智は戲論すべからざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色性無く、乃至一切種智性無し。須菩提よ、若し法性無ければ、即ち是れ戲論無し。是を以ての故に、色は戲論すべからず、乃至一切種智は戲論すべからず。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く無戲論の般若波羅蜜(多)を行せば、是の時菩薩位に入ることを得しと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法に性有ること無くんば、菩薩は何等の道を行じてか、菩薩位に入るや。聲聞道を用ふとや爲ん、辟支佛道を用ふとや爲ん、佛道を用ふとや爲ん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「聲聞道を用ふとや爲ん、辟支佛道を用ふとや爲ん、佛道を用ふとや爲ん」と。佛、須菩提を以てせず、菩薩位に入ることを得。須菩提よ、譬へば、八人の先づ諸道を學し、然る後に正位に入り、未だ果を得ずして、而して先づ果道を生ずるが如し。菩薩も亦是の如く、先づ遍れく諸道を學し、然る後に菩薩位に入り、亦未だ一切種智を得ずして、而して先づ金剛三昧を生ず。爾の時、一念相應の慧を以て、一切種智を得しと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、遍れく諸道を學して菩薩位に入らば、八人は、須陀洹に向つて須陀洹を得、斯陀舍に向つて斯陀舍を得、阿那含に向つて阿那含を得、阿羅漢に向つて阿羅漢、辟支佛道、佛道を得。是の

諸道は各各異なる。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、遍れく諸道を學し、然る後に菩薩位に入らば、是の菩薩若し八道を生ぜば、應に八人と作るべし。見道を生ぜば、應に須陀洹と作るべく、思惟道を生ぜば、應に斯陀含と作り、阿那含と作り、阿羅漢と作るべし。若し辟支佛道を生ぜば、辟支佛と作る。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、八人と作り、然る後に菩薩位に入るとせば、是の處有ること無し。菩薩位に入らずして、一切種智を得るも亦是の處無し。須陀洹と作り、乃至辟支佛と作り、然る後、菩薩位に入るも亦是の處無し。菩薩位に入らずして、一切種智を得るも、亦是の處無し。世尊よ、我れ云何が應に知るべきや、菩薩摩訶薩の遍れく諸道を學して、菩薩位に入るを得るといふことをしと。

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。若し菩薩摩訶薩、八人と作りて、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果を得、辟支佛道を得、然る後に菩薩位に入るとせば、是の處有ると無し。菩薩位に入らずして、當に一切種智を得べしとせば、是の處有ること無し。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、初發意より六波羅蜜(多)を行する時、智を以て觀じ、八地を過ぐ。何等か八地なる。乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辦地、辟支佛地なり。道種智を以て、菩薩位に入り、菩薩位に入り已つて、一切種智を以て、一切煩惱の習を斷ず。須菩提よ、八人の若くは智、若くは斷は是れ菩薩の無生法忍なり。須陀洹の若くは智、若くは斷、斯陀含の若くは智、若くは斷、阿那含の若くは智、若くは斷、阿羅漢の若くは智、若くは斷、辟支佛の若くは智、若くは斷は、皆是れ菩薩の忍なり。菩薩は是の如く、聲聞、辟支佛道を學し、道種智を以て菩薩位に入り、菩薩位に入り已つて、一切種智を以て、一切煩惱の習を斷じて佛道を得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は遍れく諸道を學し、具足して應に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、阿耨多羅三藐三菩提を得已り、果を以て衆生を饒益すしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊の所説の道は、聲聞道、辟支佛道、佛道なり。何等か是れ菩薩の道種智なる」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、應に一切道種淨智を生ずべし。須菩提よ、何等か是れ道種淨智なる。」

若し諸法の相貌の顯示すべき所の法を、菩薩は應に正しく知るべく、正しく知り已つて、他の爲に演說開示し、諸の衆生をして解を得せしむ。是の菩薩摩訶薩は、應に一切の音聲語言を解すべく、是の音聲を以て法を説くに、遍れく三千大千世界に滿つること響相の如し。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に先づ具足して一切道種智を學すべく、具足し已つて應に分別して衆生の深心を知るべし。所謂の地獄の衆生、地獄道、地獄の因、地獄の果應に障ふべきを知るべし。畜生餓鬼道、畜生餓鬼の因、畜生餓鬼の果、應に障ふべきを知るべし。諸の龍、鬼神、捷鬪婆、緊那羅、摩睺羅伽、阿修羅の因果、應に障ふべきを知るべし。人道の因果、應に知るべし。諸の天道の因果、應に知るべく、四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天、他化自在天・梵天・光音天・遍淨天・廣果天・無想天・阿婆羅呵天・無熱天・易見天・喜見天・阿迦尼吒天道の因果、應に知るべく、無邊虛空處・無邊識處・無所有處、非有想非無想處道の因果、應に知るべく、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八正道分の因果、應に知るべく、空解脫門・無相解脫門・無作解脫門・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大悲の因果、應に知るべし。菩薩は是の道を以て、衆生をなして須陀洹道、阿羅漢、辟支佛道乃至阿耨多羅三藐三菩提に入らしむ。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の淨道種智と名づく。菩薩は是の道種智を學し已つて、衆生の心に關つて如應に説法し、言ふ所慮しからず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、善く衆生の根相を知り、一切衆生の心心數法、生死の所處を知ればなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の如く應に般若波羅蜜(多)を行すべし。何となれば、一切諸の助道の法は、皆般若波羅蜜(多)の中に入り、諸の菩薩摩訶薩、聲聞、辟支佛の應に行すべき所なればなりしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し四念處乃ち阿耨多羅三藐三菩提、是の一切法は皆合せず、散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相ならば、世尊よ、云何が是の助道法は、能く阿耨多羅三藐三菩提を取るや。世尊よ、是は

合せず、散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相の法にして、取る所無く、捨つる所無く、譬へば、虚空の取る無く、捨つる無きが如し」と。佛の言はく、「是の如し、須菩提よ、諸法は自相空にして、取る所無く、捨つる所無し。須菩提よ、衆生有りて、諸法の自相空を知らざれば、是の衆生の爲の故に、助道法を顯示して、能く阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。

復次に、須菩提よ、所有る色受想行識、所有る檀〔那〕波羅蜜〔多〕、戸羅波羅蜜〔多〕、尸羅波羅蜜〔多〕、毗梨耶波羅蜜〔多〕、禪〔那〕波羅蜜〔多〕、般若波羅蜜〔多〕、所有る内空・外空乃至無法有法空・初禪乃至非有想非無想處、四念處乃至八聖道分・三解脱門・八背捨・九次第定・佛の十方・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・一切種智等の諸法、是の聖法の中に於いて、皆合せず、散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相なり。是の世俗法を以ての故に、衆生の爲に説いて解せしむ、第一義を以つてするに非ず。須菩提よ、是の一切法中に於いて、菩薩摩訶薩は法の如く應に學すべく、學し已つて諸法の、應に用ふべきと、應に用ふべからざるを分別す」と。須菩提言さく、「世尊よ、何等の法をか、菩薩分別し已つて應に用ふべしとし、應に用ふべからずとするや」と。佛の言はく、「聲聞辟支佛法は、分別して應に用ふべからずと知り、一切種智は分別して、應に用ふべしと知る。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の聖法の中に於いて、應に般若波羅蜜〔多〕を學すべし。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何を以ての故に、説いて聖法と名け、何等をか是れ聖法となす」と。佛、須菩提に告げたまはく、諸の聲聞辟支佛の法、菩薩摩訶薩、及び諸佛は、欲願癡に於いて合せず、散ぜず。身見、戒取、疑と合せず、散ぜず。欲染、瞋恚と合せず、散ぜず。色染、無色染、掉慢、無明と合せず、散ぜず。初禪乃至第四禪と合せず、散ぜず。慈、悲、喜、捨、虚空處乃至非有想非無想處と合せず、散ぜず。四念處乃至八聖道分と合せず、散ぜず。内空乃至大悲、有

爲性、無爲性と合せず、散ぜず。何となれば是の一切法は皆色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相なればなり。無色法は無色法と合せず、散ぜず。無形法は無形法と合せず、散ぜず。無對法は無對法と合せず、散ぜず。一相法は一相法と合せず、散ぜず。無相法は無相法と合せず、散ぜず。須菩提よ、是の色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相の般若波羅蜜(多)を諸の菩薩摩訶薩は應に學すべく、學し已れば諸の法相を得ずしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は色相を學せざるや、受想行識相を學せざるや、眼相乃至意相を學せず。色相乃至法相を學せず。地種相乃至識種相を學せず。檀(那)波羅蜜(多)・尸羅波羅蜜(多)・羼提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)の相を學せず。内空乃至無法有法空を學せず。初禪の相乃至第四禪の相を學せず。慈相乃至捨相を學せず。無邊空相乃至非有想非無想相を學せず。四念處相乃至八聖道分相を學せず。空三昧相、無相無作三昧相を學せず、八背捨、九次第定相を學せず、佛の十力、四無所畏、四無礙智の相、十八不共法の相、大慈大悲の相を學せず。苦樂諦相、集、滅、道聖諦相を學せず、逆順の十二因緣相を學せず、有爲性相、無爲性相を學せざるや。世尊よ、若し諸の法相を學せずんば、菩薩摩訶薩は云何が諸の法相の、若くは有爲、若くは無爲を學し、學し已つて聲聞辟支佛地を過ぎん。若し聲聞辟支佛地を過ぎずんば、云何が菩薩位に入らん。若し菩薩位に入らずんば、云何が當に一切種智を得べけん。若し一切種智を得ずんば、云何が當に法輪を轉すべけん。若し法輪を轉ぜずんば、云何が三乘を以て衆生の生死を度せんしと。

佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸法、實に有相ならば、菩薩は應に是の相を學すべし。須菩提よ、一切法は實に相なく、色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相なるを以て、是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は相を學せず、無相を學せず。何となれば、有佛にも無佛にも、諸法一相の性は常住なればなりしと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し

一切法は有相に非ず、無相に非ずんば、菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜(多)を修せん。若し般若波羅蜜(多)を修せずんば、聲聞辟支佛地を過ぐるに能はず。若し聲聞辟支佛地を過ぎずんば、菩薩位に入るに能はず。若し菩薩位に入らずんば、無生法忍を得ず。若し無生法忍を得ずんば、諸の菩薩の神通を得ると能はず。若し菩薩の神通を得ずんば、佛國土を淨め、衆生を成就すること能はず。若し佛國土を淨め、衆生を成就せずんば、一切種智を得ること能はず。若し一切種智を得ずんば、法輪を轉すること能はず。若し法輪を轉ぜずんば、衆生をして須陀洹果、斯陀含(果)、阿那含(果)、阿羅漢果、辟支佛道を得せしむること能はず。阿耨多羅三藐三菩提を得せしむること能はず。亦衆生をして、布施の福を得せしむること能はず。亦持戒、修定の福を得せしむること能はず」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸法は無相にして、一相に非ず、異相に非ず。若し無相を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が無相を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するや」と。佛の言はく、「諸法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり」と。世尊よ、云何が諸法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するや」と。佛の言はく、「色の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。受想行識の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり」と。佛の言はく、「色の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。眼の壞、耳鼻舌身意法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。色法の壞、聲香味觸法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。不淨觀の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。初禪の壞、第二、第三、第四禪の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。慈悲喜捨の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。無邊空處、無邊識處、無所有處、非有想非無想處の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念滅、念安般の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。無常相・苦相・無我相・空相・集相・因相・生相・緣相・閉相・滅相・妙相・出相・道相・正相・跡相・離相の壞を修するは、



是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。十二因縁の壞、我相、衆生、壽命相、乃至知者、見者相の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。常相・樂相・淨相・我相の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。四念處、乃至八聖道分の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。空・三昧・無相・三昧・無作・三昧の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。八背捨・九次第定の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。有覺有觀・三昧・無覺有觀・三昧・無覺有觀・三昧の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。苦聖諦・集聖諦・滅聖諦・道聖諦の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。苦智・集智・滅智・道智の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。盡智・無生智の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。法智・比智・世智・他心智の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。檀(那)・波羅蜜(多)を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。尸羅波羅蜜(多)・辱提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。內空・外空・內外空・空空・大空・第一義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無始空・散空・性空・諸法空・自相空・不可得空・無法空・有法空・無法有法空の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。一切智の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。一切煩惱の習の壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなりしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が色の壞を修し、乃至一切煩惱の習を斷する壞を修するは、是れ般若波羅蜜(多)を修するなりと名くるや、佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、色法有りとなぜす、是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。受想行識有りとなぜす、乃至一切の煩惱の習を斷する法有りとなぜす、是れ般若波羅蜜(多)を修するなりしと。」

蜜(多)を修すと爲す。何となれば、法念有る者は般若波羅蜜(多)を修せず。須菩提よ、法念有る者は檀(那)波羅蜜(多)尸羅波羅蜜(多)羼提波羅蜜(多)毗梨耶波羅蜜(多)禪(那)波羅蜜(多)般若波羅蜜(多)を修せず。何となれば、須菩提よ、是人は法に著して、檀(那)波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)を行ぜず。是の如く著する者には、解脱有ること無く、道有ること無く、涅槃有ること無ければなり。法念有る者は、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を修せず、空三昧を修せず、乃至一切種智を修せず。何となれば、是の人法に著すればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是有法、何等か是非無法なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「二は是れ有法、不二は是れ無法なり」と。「世尊よ、何等か是非二なるや」。佛の言はく、「色相は是れ二、受想行識相は是れ二、眼相乃至意相は是れ二、色相乃至法相は是れ二、檀(那)波羅蜜(多)乃至佛相、阿耨多羅三藐三菩提相、有爲(性)、無爲性相は是れ二なり。須菩提よ、一切相は皆是れ二なり。一切の二は皆是れ有法なり。適有法有れば便ら生死有り。適生死有れば、生老病死、憂悲苦惱を離るることを得ず。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、二相とは、檀(那)波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)有ること無く、道有ること無く、果有ること無く、乃至順忍有ること無し、何に況んや、色相を見、乃至一切種智相を見んや。若し道を修すること無くんば、云何が須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提及び一切煩惱の習を斷することを得んや」と。

論

釋して曰はく、佛説きたまはく、菩薩は六波羅蜜(多)を行じて、世間の果報を受けずと。須菩提は未曾有なりと歎じ、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩は大智慧を成就し、是の深法を行じ、能く因と作して而も果を受けず。是の菩薩は大利の爲の故に小報を受けず」と。佛は其の意を可し已

つて、更に自ら因縁を説きたまふ。所謂、菩薩は諸の法性中に於いて動せずと。諸の法性は、無所有にして畢竟空なり。法性實際を知る菩薩は定心に安住し、是の中に動せず。須菩提問ふ、「世尊よ、何等の性中に動せざるや」と。佛答へたまはく、「色性中に動せず。乃至大慈大悲等の性中に動せず。何となれば、是の諸法の性は衆の因縁もて生ずるが故に、自在ならず、定相無く、定相無きが故に所有無ければなり。諸法とは所謂色等の法なり。是の色法に因るが故に無爲を説く。是の故に、無爲法も亦所有無し。何となれば、無所有の法を以て、所有の法を得べからざればなり」と。須菩提言さく、「若し無所有は所有を得ること能はずんば、豈に所有の法を以て所有の法を得べけんや」と。佛答へたまはく、「不なり。何となれば、無所有の法は、一切の聖人の稱讚したまふ所なり。所住處すら尙所得を得ること能はず。何に況んや、所有の法をや」と。「所有の法は無所有を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり。何となれば、所有と無所有の二は俱に過有ればなり」と。「無所有を以て無所有を得べからずと言ふや不や」と。佛の言はく、「不なり、何となれば、所有の法に生相、住相有り。虚誑なるを以ての故に、尙ほ所得無し。何に況んや、無所有なるをや。本より已來畢竟空にして、而も所得有り」と。須菩提、更に問ふ、「世尊よ、若し四句は皆得ざるを以て、將に道無く、果を得ること無からんやとするや」と。佛答へたまはく、「實に得道の法有り。但是の四句を以てせず。何となれば、四句は上の如き失有ればなり。若し是の四句の戲論を離るれば、即ち是れ道なり」と。復た問ふ、「世尊

よ、何等か是れ菩薩の戲論の相なるや」と。佛答へたまはく、「色等の若くは常、若くは無常は是れ菩薩の戲論なり。何となれば、若し常なれば則ち不生不滅にして、罪福好醜無ければなり。無常も亦然らず。何となれば、常に因りて無常を説く。常既に不可得なり、何に況んや、無常をや」と。

復次に、若し無常なれば、定んで是の色等の實相も、亦應に業因縁、果報有るべからず。何となれば、色等の諸法は念念に滅失すべしなり。若し業因縁、果報滅すれば、則ち無常相と名けず。是の如き等の種種の因縁の故に、無常は是れ色等の實相に非ず。先に無常を破する中に説くが如し。乃至、是の念を作す、「我れ當に一切煩惱の習を斷すべし」と。是を戲論と爲す。色等の諸法は戲論すべからず、而も凡夫の人は諸法を戲論す。菩薩は、戲論すべからざるに於いて、法に隨つて戲論せず。何となれば、自性は自性を戲論すること能はざればなり。何となれば、性は因縁より生ずるが故に、但假名のみ有り、云何が能く戲論せん。若し性すら戲論する能はずんば、何に況んや無性をや。離性、無性は更に第三法の戲論すべきもの無し。所謂、戲論とは戲論の法、戲論の處なり。是の法は皆得べからず。須菩提よ、色等の法は是れ戲論すべからざる相なり。是の如く、菩薩は應に無戲論の般若波羅蜜〔多〕を行すべし。

復次に、佛自ら戲論すべからざる因縁を説きたまふ。色等の法は無性なり。若し法、無性ならば、即ち是れ戲論すべからず。若し菩薩能く是の不可戲論の般若を行せば、便ち菩薩位に入ることを得と

須菩薩は意に戲論無し。是の三乘道の菩薩は、何道を以て無戲論の菩薩位に入るやと。佛は答へて、皆不なりと言へり。何となれば、菩薩は大乘の人なるが故に、應に二乗道を用ふべからず。六波羅蜜〔多〕を未だ具足せざるが故に、佛道を用ふること能はず。此の中に佛自ら因縁を説きたまふ、菩薩は應に遍ねく諸道を學して菩薩位に入るべし。此の中に譬喩を説く、見諦道中の八人、先時に遍ねく諸道を學し、正位に入り、而も未だ須陀洹果を得ざるが如し。菩薩も亦是の如く、先づ遍ねく諸道を學し、菩薩位に入り、而も未だ一切種智の果を得ず。若し菩薩、金剛三昧に住すれば、一念相應の慧を以て一切種智の果を得。須菩提問ふ、「世尊よ、若し菩薩、遍ねく諸道を學し、然る後に菩薩位に入らば、是の諸道は各各異なれり。若し菩薩遍ねく是の道を學し、若し人道に生せば、即ち是れ八人なり。乃至辟支佛道に生すれば、即ち是れ辟支佛なり。世尊よ、若し菩薩八人と作り、乃至辟支佛と作り、然る後に菩薩位に入るとは、是の處有ること無し。若し菩薩位に入らずして、一切種智を得るも、亦是の處有ること無し。我れ當に云何が菩薩の諸道を學して、菩薩位に入るとを知るべきやと。佛、其の意を可るし已つて、更に自ら因縁を説きたまふ。菩薩は初發意に六波羅蜜〔多〕を行ずる時、智見を以て、八地に入ることを觀じ、直に過ぐ。人、親親獄に繋がるるが故に、入りて之を看るも、亦與に同じく桎梏に著かざるが如し。菩薩は道種智を具足せんと欲するが故に、菩薩位に入る。遍ねく諸道を觀じて菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて、一切種智を得、煩惱の習を斷ず。佛、須菩提に

示したまふ、二乗の人は諸佛菩薩の智慧に於て少氣分有り。是の故に、八人の若くは智、若くは斷、乃至、辟支佛の若くは智、若くは斷は、皆是れ菩薩の無生法忍智にして、學人の入智と名く。無學は、或は九、或は十斷なり。十種の結使を斷するに名く。所謂上下分の 三 十結なり。須陀洹、斯陀含は略して三結を斷すと説く。當に八十八結を斷すべし。阿那含は、略しては五下分の結を斷すと説く。廣くは九十二を斷すと説く。阿羅漢は、略しては三漏盡くと説き、廣くは一切の煩惱を斷すと説き、是を智斷と名く。智斷は皆是れ菩薩の忍なり。聲聞の人は四諦を以て道を得、菩薩は一諦を以て道に入る。佛、是の四諦を説きたまふも、皆定れ一諦にして、分別するが故に四有り。是の四諦の二乗の智斷は皆一諦の中に在り。菩薩は先づ柔順忍の中に住し、無生無滅、亦非無生非無滅を學し、有見無見、有無見非有無見等を離れ、諸の戲論を滅し、無生忍を得。無生忍とは、佛、後品の中に自ら説きたまへり。乃ち作佛に至るまで常に惡心を生せず。是の故に無生忍と名く。論者言く、是の忍を得て一切法の畢竟空を觀じ、心心數法を緣ずるとを斷じて生せず、是を無生忍と名くと。又復言く、能く聲聞辟支佛の智慧を過ぐるを無生忍と名くと。聲聞辟支佛の智慧は、色等の五衆の生滅を觀じ、心厭離して解脱を得んと欲す。菩薩は大福德の智慧を以て、生滅を觀する時、心に怖畏せず。小乗人、菩薩の如きは、慧眼を以て生滅の實定相を求むるに得べからず。先の破生品の中に説くが如し。但肉眼、塵心のみを以て、無常生滅有ることを見る。凡夫

【二】 五下分結と五上分結とを十結といふ。

の人は諸法の中に於いて常見に著し、是の著する所の法、遷つて無常に歸し、衆生は憂悲苦惱を得。是の故に、佛説きたまはく、「憂苦を離れんと欲せば、常相を觀すること莫れ」と。是の無常は常顛倒を破するが故に、無常に著することを爲さざるが故に説く。是の故に、菩薩は生滅觀を捨てて、不生不滅の中に入る。

問うて曰く、若し不生不滅に入らば、不生不滅は、即ち復た是れ常なり。云何が常顛倒を離るることを得るや。答へて曰く、無常に二種有るが如し。一には常顛倒を破して、無常に著せず。二には無常に著して戲論を生ず。無生忍も亦是の如し。一には生滅を破すと雖も、無生無滅に著せざるが故に常顛倒に墮せず。二には不生滅に著するが故に、常顛倒に墮す。眞の無生とは、諸觀を滅し、語言の道斷え、一切法を觀すること涅槃の相の如く、本より已來常に自ら無生なり。智慧を以て觀するに非ざるが故に、無生をして、是の無生無滅畢竟清淨なることを得せしむ。無常觀すら尙取らず、何に況んや生滅をや。是の如き等の相を無生法忍と名く。是の無生忍を得るが故に、即ち菩薩位に入り、菩薩位に入り已り、一切種智を以て、煩惱及び習を斷じ、種種の因縁もて一切衆生を度す。好果樹の饒益する所多きが如し。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩の道種智なるや」と。佛答へたまはく、「菩薩

- 【三】 第一問、若し不生不滅に入らば、云何が常顛倒を離るることを得んや。
- 【四】 二種の無常。
- 【五】 眞の無生の意義。

は無生忍法に住して、諸法實相を得、實相より起つて、諸法の名相語言を取り、既に自ら善く解し、衆生の爲に説いて開悟を得せしむ。菩薩は福德の因縁の故に、一切衆生の音聲語言を解し、是の音聲を以て、三千大千世界に遍くし、亦是の聲に著せず。如の響相を知る。是の音聲は即ち是れ梵音の相なり。是を以ての故に、菩薩は應に一切の道を知り、遍く衆生の心を觀じ、其の本末を知り、善法を以て利益し、不善法を遮すべし」と。經中に廣く説くが如し。菩薩は先づ諸法實相を知るが故に、二乘道に於て入出自在に觀じ已つて、直に過ぎて菩薩位に入り、衆生を度せんが爲の故に道慧を起し、衆生の爲に法を説かんと欲す。一切衆生の語言音聲を解し、梵音の聲を以て法を説く。所謂、惡道を遮し善道を聞く。惡道とは三惡道、善道とは三善道(即ち)人・天・阿修羅なり。種種の因縁もて惡道を呵し、善道を讚す。惡道を遮すとは、所謂、地獄道、地獄の因、地獄の果なり。地獄は先に説くが如し。地獄道とは上の不善道なり。地獄の因とは三毒なり。貪欲增長して貪嫉を起すは不善道なり。瞋增長して悲惱を起すは不善道なり。愚癡增長して邪見を起すは不善道なり。三毒は三不善道の因にして、三不善道は是れ七不善道の因なり。地獄の果とは、是の因を以ての故に地獄の身心を受け、種種の苦惱を受く。是を果と名く。菩薩は應に衆生に地獄の果を示し、然る後に爲に法を説き、地獄の道及び因果を斷せしむべし。十不善道に上中下有り。上とは地獄、中とは畜生、下とは餓鬼なり。十善道にも亦上中下有り。上とは天、中とは人、下とは鬼神なり。十善道に住して能く欲を離れ、色界



に生じ、色を離れて無色界に生じ、三惡道中に若く苦を受くるが故に、應に知るべし、應に遮すべしと云ふことを。天人の中には得道の因縁有り。涅槃の爲の故に、或時は遮すべし。不定なるを以ての故に、餘の助道法を説かざるが故に、應に遮を説くべからず。乃至阿耨多羅三藐三菩提を、善權能く是の如く分別し已つて、衆生の應に小乘法を以て度すべき者知らば、小乘法を以て而も之を度し、應に大乘法を以て度すべき者は、大乘法を以て而も之を度す。是の菩薩は衆生の深心の歡事、及び宿命の業因縁を知り、天未來世の果報、因縁を知り、又衆生を化すべき時節を知り、及び處所を知り、諸餘の度すべき因縁、誰く皆之を知る。是の故に所説廣しからず。是の如きの道種慧、及び諸の助道法は皆般若の中に攝在す。是の故に菩薩は應に道慧般若を行すべし。

須菩提、佛に白さく、「若し助道法、菩提、是の法は皆合せず、散せず、色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相にして、是の助道法は皆空ならば、云何が能く阿耨多羅三藐三菩提を取らん。空ならば所有無く、應に取ること無く、捨つること無かるべし。譬へば、虚空は無法なるが故に、取ること無く、捨つること無きが如し」と。須菩提の所説は眞實にして著心無きが故に、備可して、「是の如し、是の如し」と言ひ、更に因縁を説きたまはく、「衆生有り、是の如く諸法の自相空なるを知らざるが故に、爲に是の助道法を分別し、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、但三十七品の六空にして合せず散せざるには非ず。所有る色等乃至一切轉智、遮法の中に於ては亦自相空にして合せず散せず

とは、是れ畢竟空の義にして、此の中に説くが如く、一相所謂無相なり。是の法は空なりと雖も、世諦を以ての故に、衆生の爲に説いて、聖法に入ることを得せしむ。第一義には非ず。是の中の菩薩は皆應に知見を以て、是の法を學すべし。初め知るを知と名け、後深く入るを見と名く。知を未了に名け、見を已了に名く。

問うて曰く、知と見とに何の差別有りや。答へて曰く、有人は言ふ、「知にして見に非ざるもの有り。見にして知に非ざるもの有り。亦知にして亦見なるあり。知に非ず、見に非ざるあり」と。知にして見に非ざる者有りと、盡知、無生智なり。世間の正見、及び五見を除き、餘の慧を皆知と名く。是の慧は見に非ず。見にして知に非ずとは五見、世間の正見、見諦道の中の八忍なり。是は見にして知に非ず。餘の無漏の慧は慧にして、亦知とも名け、亦見とも名く。是の見と知とを離れたる餘法は見に非ず、知に非ず。

【六】第二問、知と見との差別如何。

復次に、有人は言ふ、「定心を名けて見と爲し、定と未定を通じて、名けて知と爲す。轉法輪經の中に説くが如し。苦諦は知り已つて應に見るべく、知り已り分別して是の法は應に見るべしと知る、是れ苦諦なり。是の法の應に斷すべきは是れ集諦なり。是の法の應に證すべきは是れ滅諦なり。是の法の應に修すべきは是れ道諦なり。或は煩惱の斷を知るを名けて見と爲す。九の斷の知の如し。須菩提は般若の異なる名字、所謂聖法を聞くが故に問ふ、「何等か是れ聖法なるや」と。佛答へたまはく、「聖

法中の諸の賢聖、若くは佛、若くは辟支佛、聲聞等は、欲等の諸法の不合不散を以てす。不合とは、一切の煩惱を顛倒と名く。顛倒は即ち所有無し。若し所有なくんば、云何が合すべき。若し合せずんば、云何が散すること有らん。合せざるが故に、凡人を輕んぜず、散せざるが故に自ら高からず。一切衆生に於いて不憎不愛なりしと。

又復此の中に、佛自ら不合不散の因縁を説きたまふ。所謂、是の法は皆色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相なり。無色は無色法と合せず散せず。乃至無相法は無相法と合せず散せず。何となれば、是の法は皆一性なればなり。自性は自性と合せず。是を一相無相の般若波羅蜜(多)と名く。菩薩は應に學すべく、學し已つて法の得べき相無しと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩は色相を學せざるか。乃至有爲無爲相を學せざるか。世尊よ、若し是の諸の法相を學せずんば、云何が經中に、菩薩は先づ諸法の相を學し、後、聲聞、辟支佛地を過ぐと説くや。若し聲聞辟支佛地を過ぎずんば、云何が菩薩位に入らん」と。此の中に廣く説くが如し。佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸法實に相有らば、應當に是の相を學すべし。須菩提よ、一切法は實に相無し。是の故に、菩薩は應に相を學すべからず。無相も亦應に學すべからず」と。相を取るを以ての故に、相事を破す。問相品の中に説くが如し。有佛にも無佛にも、諸法は常住一相所謂無相なり。須菩提は佛より一切法の無相を聞き、今還つて佛に問ふ、「世尊よ、若し一切法

是有相に非ず。無相に非ずんば、云何が菩薩は般若を修せん。若し有無の相は無相に因つて般若を修すべし。今相は無相なるを以て皆無因ならば、何事が般若を修することを得ん。若し般若を修せずんば、聲聞辟支佛地を過ぐることを得ること能はず、乃至三福田に安立すること能はずと。佛は其の言を可とし、「是の如し、是の如し」と。而も更に般若を修する因縁を説きたまふ。所謂菩薩は修相を以ての故に、是の般若を修せず。無相を修するが故に是れ般若を修すと。復問ふ、「世尊よ、云何が無相を修するは、是れ般若を修するや。若し無相ならば、云何が修すべき」と。佛答へたまはく、「諸法の壞を修するは、是れ般若を修するなり。諸法は壞するを以ての故に、無相の相も亦壞す。譬へば、車分壞するが故に、車相も亦滅するが如く、又、輪分壞するが故に、輪相も亦滅するが如し。是の如く乃ち微塵に至る。「世尊よ、何等か是れ諸法の破壊すべき者なるや」と。佛答へたまはく、「色法の壞を修するは、即ち是れ般若波羅蜜(多)を修するなり。乃至、斷一切煩惱習の壞を修するは、即ち是れ般若波羅蜜(多)を修するなり」と。須菩提、佛に白さく、「云何が色の壞を修し、乃至斷一切煩惱習の壞を修するは、是れ般若を修するや」と。佛答へたまはく、「菩薩は一心に薩婆若を念じ、衆生を憐愍し、正しく般若波羅蜜(多)を行することを得んと欲し、色は是れ有法なりと念せず。是の如く修するは是れ般若を修するなり」と。色は是れ定實、有相の過有るを以ての故なり。何となれば、佛此の中に自ら因縁を説きたまふ。有相の者は般若を修せず。般若の中には、無相すら尙無し。何に況んや

有法をや。是の人は般若波羅蜜(多)を修せず。亦五波羅蜜(多)をも修せず。是の人は有法の戲論に著し、布施等を修せず。是の如く著する者には、解脫有ること無く、道無く、涅槃無し。三解脱門無きが故に、解脫無く、聖人無しと言ひ、空法の故に、道無しと言ひ、道無きが故に、涅槃無し。

問うて曰く、何を以ての故に道無きや。答へて曰く、是の人は諸法を戲論し、老病死を厭はず。法に著するが故に、邪見を生じ、邪見の故に、實の如く、身の不淨等を觀すること能はず。身を觀すること能はざるが故に、身念處を修せず。身念處を修せざるが故に、受・心・法念處を修すること能はず。四念處を修せざるが故に、乃至一切種智を修すること能はず。何となれば、有法に著すればなり。

【七】 第三問、何故に道なきか。

一須菩提、佛に問ふ、「世尊よ、何等か是れ有法、何等か是れ無法なるや」と。凡人は或は有法中に於て無想を生じ、無法中に有想を生ず。是の事を分別せんと欲するが故に問へり。佛答へたまはく、「二相は是れ有、不二相は是れ無なり」と。復た問ふ、「何等か是れ二相なるや」と。佛答へたまはく、「色相を取るは、即ち是れ二なり」と。先の品中に説くが如し。色を離れて、眼無く、眼を離れて色乃至有爲、無爲性無し。何となれば、有爲を離れて無爲を説くことを得ず。無爲を離れて有爲の實相を説くことを得ず。是の故に、是の二法は相離ることを得ず。凡夫は此を謂つて二と爲す。是の故に顛倒す。佛は略して二相を説きたまへり。一切法中に相を取るは、皆是れ二なり。一切の二は皆是れ有

なり。適有なれば便ち生死有り。何となれば、有中に著心を生じ、著心の因縁もて諸の煩惱を生じ、煩惱の因縁もて生死に往來し、生死の因縁もて憂悲苦惱す。是の故に説く、適法有れば便ち生死有り。生死有れば老病憂苦を免るるを得ずと。須菩提よ、是を以て當に知るべし、二相の人は檀〔那〕波羅蜜〔多〕有ること無く、乃至順忍有ること無し。何に況んや、色の實相を見、乃至一切種智の實相を見んや。是の人、若し色等の諸法の實相を見ざれば、則ち修道無し。云何が須陀洹果乃至一切煩惱の習を斷ずること有らんやと。〔六〕波羅蜜〔多〕有二種有り、世間と出世間となり。此の人には出世間の六波羅蜜〔多〕有ること無しが故に、是の故に説く、是の有相の人には、六波羅蜜〔多〕有ること無しと。若し有らば、但世間の波羅蜜〔多〕有るのみ。此の中には世間の波羅蜜〔多〕を説かず、聲聞道の果すら尙無し。何に況んや佛道有らんや。

問うて曰く、順忍は是れ何等の順忍なりや。答へて曰く、是れ小乗の順忍なり。小乗の順忍すら尙無し、何に況んや、大乘をや。

問うて曰く、〔二〕頂法は已に不退なり。何を以てか乃ち忍法に至るまでを説くや。答へて曰く、聲聞法の中にも、亦頂の墮を説き、摩訶衍にも、亦頂の墮を説く。汝は何を以ての故に、頂法は墮せずと言ふや。有人は言ふ、頂法は墮せずと雖も、牢固ならず、一定なること能はざるが故に説かず。忍は

【八】 二種の六度——(一)世間的(二)出世間的。

【九】 第四問、順忍とは、大小乗中、孰れの順忍なるか。

【一〇】 第五問、頂法は已に不退なり、然るを忍法までも説けるは何故なるか。

是れ久住にして、已に正定に入り、未だ無漏を得ずと雖も、而も無漏と同じく、苦法忍に隨順するを以ての故に、名けて忍と爲す。未だ會て是の法を見ざるが故に、便ち能く忍を見る。是の故に忍と名く。是の人は、諸佛、聖人に於いては、小と爲し、凡夫に於いては大と爲すと。色を見るに二種有り。一には、色の實相を見ること了了なり。二には、諸色煩惱に繋るを斷ずるが故に、名けて見と爲す。色の如く、乃至一切種智、一切煩惱の習事も亦是の如し。若し人色を見、道を修するすら尙無し、何に況んや、能く須陀洹果を修し、乃至煩惱の習を斷ずることを得んや。

(二) 次第學品第七十五の上を釋す。

經

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し法相有るも尙順忍を得ず、何に況んや道を得んや。世尊よ、若し法相無ければ當に順忍を得べきや不や。若くは乾慧地、若くは性地、若くは八入地、若くは見地、若くは薄地、若くは離欲地若くは已辦地、若くは辟支佛地、若くは佛地、若くは修道、是の修道に因りて當に煩惱を斷すべきや不や。是の煩惱を以ての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入ることを得ず。若し菩薩位に入らば、則ち一切種智を得ず。一切種智を得ざれば、則ち一切煩惱の習を斷ずることを得ること能はず。世尊よ、若し法相有ること無ければ、是の諸法は即ち不生なり。若し不生なれば、是の諸法は則ち一切種智を得ること能はず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。若し法有ること無ければ、則ち順忍有り。乃至一切煩惱の習を斷ずしと。

【二】此の品には、法相なく、順忍成佛を得るを明し、菩薩の次第行、次第學、次第道の細説す。他本には品名を或は「三次第行品」又は三次品とせり。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時、法相有りや不や。所謂色相乃至識相、眼相乃至意相、色相乃至法相、眼界相乃至意識界相、四念處相乃至一切種智相、若くは色相若くは色斷相、乃至識相、識斷相、十二入、十八界も亦是の如し。若くは無明相、若くは無明斷相、乃至憂悲愁惱相、憂悲愁惱斷相、若くは欲相、若くは欲斷相、若くは瞋斷相、若くは瞋斷相、若くは癡斷相、若くは苦斷相、若くは集斷相、若くは盡斷相、若くは盡斷相、若くは道斷相、若くは道斷相、乃至一切種智相、斷一切煩惱習相(ありや不や)と。佛言はく「不なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時は、法相非法相あること無し。即ち是れ菩薩の顛忍なり。若し法相有ること無く、非法相有ること無ければ、即ち是れ修道にして、亦是れ道果なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩の有法は、是れ菩薩道なり、無法は是れ菩薩の果なり。是の因縁を以ての故に、當に知るべし、一切法は無所有の性なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は無所有の性ならば、佛は云何が一切法の無所有の性なることを知るが故に、佛と成ることを得、一切法に於いて自在力を得たまふや」と。佛は須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。一切法は無所有の性なり。我れ本菩薩道を行じ、六波羅蜜(多)を修し、諸欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂初禪に入り、乃至第四禪に入り、是の諸禪及び支に於いて相を取り、有を念ぜず。是の諸禪より禪味を受けず。是の禪を得ず。無染清淨にして四禪を行じ、我れ是の諸禪に於いて果報を受けず。四禪に依りて住し、五神通、身通、天眼、知他人心、宿命通、天眼通を起し、諸の神通に於いて相を取らず、有を念ぜず。是の神通より神通味を受けず。是の神通を得ず。我れ是の五神通に於いて分別して行ぜず。須菩提よ、我れ爾の時、一念相應の慧を用て、阿耨多羅三藐三菩提を得。所謂是れ苦聖諦、是れ集、是れ盡、是れ道聖諦なり。十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を成就し、作佛を得。三聚の衆生、正定、邪定、不定を分別す」と。



須菩提、佛に白して言さく、「云何が、世尊よ、諸法無所有の性中に於いて、四禪、六神通を起し、亦衆生無きに、而も分別して三聚と作すや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸の欲、惡不善法は當に性有るべし。若くは自性、若くは他性なり。我れ本菩薩行を爲す時、諸の欲惡不善法の無性有性を觀すること能はずして初禪に入る。(そは)諸の惡欲不善法は性、若くは自性、若くは他性有ること無く、皆是れ無所有の性なるを以てなり。我れ本菩薩道を行する時、諸の欲惡不善法を離れて初禪に入り、乃至第四禪に入る。須菩提よ、若し諸の神通に性、若くは自性、若くは他性有らば、我れ是の神通の無所有性を知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。須菩提よ、神通には所有の性、若くは自性、若くは他性無く、皆無所有の性なるを以てなり。是を以ての故に、諸佛は神通に於いて無所有の性を知り、阿耨多羅三藐三菩提を得しと。

問うて曰く、(三) 諸法の空は一義なり。何を以ての故に、須菩提は種類の因縁もて重ねて問へるや。此の中に問ふ、「法相有る者は順忍を得ず。乃至若し不生ならば、是の諸法は薩婆若を得ること能はずと。答へて曰く、是の諸法畢竟空の義は、甚深にして解し難く、説者すら尙難しとす、何に況んや受者行者をや。是の故に、須菩提は般若を以て垂れ説るも、人多く疑ひ、多く惑ふことを恐るるが故に、種類の因縁もて重ねて問へるなり。

復次に、所問の義は一なりと雖も、所因の處異なり。或は問ふ、「世尊よ、若し一切法空ならば、云何が分別して五道有らん」と。或は問ふ、「若し一切無所有の相ならば、云何が分別して三乘有らん」

と。或は問ふ、「世尊よ、相ある者は、乃至順忍を得ず。云何が八地を觀じて菩薩位に入るべきや」と。是等の如く種種に問ふ。異問の故に義は差別を得し〔こゝは〕般若に一定の相無ければなり。佛、須菩提の意を可とし、是の如し、是の如しと「宣へり」。須菩提の先に問ふ順忍は、是れ小乘の順忍なり。今、須菩提、菩薩の順忍法を問ふ。「若し菩薩般若を行する時、法相有りや不や」と。佛答へたまはく、「菩薩般若を行する時、法の是の相、若くは有無を生ずること無し。何となれば、有無の二を見るは、俱に過あればなり。則ち是れ菩薩の順忍なり。一切法の中に於て有相を生ぜざるは、即ち是れ修道なり。須菩提よ、有法は是れ菩薩道、無法は是れ果なり。有法を有爲法に名け、無〔法〕は是れ無爲法なり。有爲の八聖道を行じて諸の煩惱を斷じ、無爲の果を得と。

復次に、有人は言ふ、「五波羅蜜〔多〕を有法と名く、是れ菩薩道なり。般若波羅蜜〔多〕は畢竟空なるが故に、法有ること無く、是れ菩薩の果なり」と。有人は言ふ、「般若波羅蜜〔多〕の智慧相は有爲法なるが故に、是を道と爲す。如法性實際は因縁より生ぜず、常に有なるが故に、名けて果と無すと。是等の如き差別無きこと有り。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし。一切法は皆是れ無所有の性にして、名けて無法と爲すことをと。復た問ふ、「世尊よ、若し一切法は無所有の性ならば、佛は云何が無所有の性中に於いて、正智もて阿耨多羅三藐三菩提を得、諸法の中に於いて自在を得るや」と。佛、其の言を可としたまはく、「菩薩は無所有の智を以て、一切法を合行し、能く一切

の著を斷するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得し。此の中に、佛自ら引いて證を爲したまはく、「我れ本菩薩たりし時、六波羅蜜〔多〕を行じ、欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂して初禪に入る」と。欲を離るとは、五欲を離るるなり。惡不善法を離るとは、五蓋を離るるなり。人を將ゐて惡道に入るを名けて惡と爲し、善法を障ぐるが故に、不善と名く。有覺有觀は初禪に攝する所の善の覺觀なり。離生喜樂とは、五欲を捨離して喜樂を生ずるなり。喜樂とは色界の中に二種の樂あり、一には有喜の樂、二には無喜の樂なり。喜樂は初禪、二禪中に、無喜の樂は三禪の中なり。初禪、二禪は俱に喜樂有り、何の差別がある。初禪中の喜樂は、欲を離るるによるが故に生じ、二禪の喜樂は定より生ず。

問うて曰く、(三)亦初禪の煩惱を離れて二禪を得。何を以てか、離生を説

【三】第七問 初禪の煩惱を離れて二禪を得、何を以てか離生を説かざるや。

かざるや。答へて曰く、欲界の中は、散亂の故に定の稱無し。行者、能く欲を離るるが故に、名けて離生と爲す、初禪の中には定有り。二禪は初禪の定に因りて生ずるが故に、名けて復次に、欲界の煩惱は、不善の相なるが故に初禪を障ふ。行者、大障を離れんと欲するが故に離生を説く。色界の煩惱を無記と名け、微弱を思と爲し、覺觀の因縁を以ての故に禪を失す。是の故に、佛説きたまはく、「諸の覺觀を滅し、内心清淨なるが故に二禪を得。三禪、四禪は先に説くが如し。

我、是の諸の禪支に於て相を取り、得已つて是の禪有りと念せず。初めて禪を習ふ時、相を取り、乃

至得、得已つて著味を恐るるが故に無常を觀じ、是の禪ありと念せず。是の禪定相を得ず、亦味を受けず。染心無くして四禪を行じ、外道に異なり、是の諸の禪修に於いて、果報禪を受けず。四禪に依りて住し、五神通を起すも、亦禪法の如く其の味を受けず。宿命通の故に、一切衆生の本業の因縁を知り、是の間に來生し、天眼通力の故に、衆生の未來世の所生の處を見、其の業行に隨つて、一切衆生の本末を知り已つて、心に大悲を生ず。云何が衆生の生死相續の苦を斷せんしと。爾の時、心に廻向して漏盡通に入り、即時に一念相應の慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得。所謂、是れ苦相なり。苦の因は是れ愛なり。愛斷ずれば、苦盡きて到ることを得。苦盡くればは是れ道なり。四諦に通達するが故に、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を得、衆生を分別して三聚と爲し、三神通に住して衆生を度す。所謂、天耳、知他心、身通なり。衆生の爲に法を説き、生死を度らしむ。須菩提復た問ふ、「若し諸法、無所有ならば、云何が佛は菩薩と爲る時、四禪六神通を起し、若し衆生無くんば、云何が衆生を分別して三聚と作さん」と。佛答へたまはく、「諸欲、諸惡は若し當に性有るべし、若くは自性、若くは他性なり。我れ本菩薩たりし時、諸欲惡不善法の無所有の性を觀じて、初禪に入ること能はず」と。佛意ひたまはく、「若し諸欲不善法には、定性實法、若くは多、若くは少有り」と。自相とは、若くは身中、若くは淨、常等の性有り。(四)性に二種有り。若くは自性、若くは他性なり。自性を自身、不淨性に名け、他性を衣服等

【四】二種の性。

の莊嚴、身具に名け、此は皆無常、虛誑にして、苦性の因縁なり。内外の五欲の中には、常樂我淨の實有ること無し。若し有らば、我れ本菩薩道を行ずる時、五欲の空無所有の性を觀じて初禪に入り、欲惡不善法をして、實性、若くは自性、若くは他性有ること無からしむること能はざらん。是の故に我れ菩薩たりし時、五欲惡不善法を離れ、初禪に入り、乃至第四禪に入る。若し諸の神通に性有りて若くは自性、若くは他性ならば、我れ本菩薩道を行ずる時、神通を知ること能はざらん。所有無きが故に阿耨多羅三藐三菩提を得」と。須菩提問ふ、「若し諸法、定んで所有無く、性空ならば、佛は云何が諸法の中に於いて自在力を得ん」と。佛答へたまはく、「我れ四禪を以ての故に、諸の煩惱に於いて解脱を得、六神通の故に諸法に於いて自在を得、衆生を度す」と。須菩提意へらく、「四禪、六神通は是れ有なるを以て、云何が空に於いて自在力を得ん」と。佛示したまはく、「我れ五欲等の空虛誑にして、定相無きことを觀するが故に著せず。此の禪より而も諸の神通を起す。諸禪は有相有量なるが故に捨つべし。阿耨多羅三藐三菩提を得、初めて欲を離るる時、無所有の性を以て因と爲して、阿耨多羅三藐三菩提の果を得るも亦所有無し。若し禪定は空なるに、阿耨多羅三藐三菩提は空ならずんば、是の難有るべし。今、皆空なるが故に、應に難有るべからず。

# 卷の第八十七

## 次第學品第七十五の下を釋す。

經

須善提言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、諸法の無所有の性なるを知らば、四禪五神通に因つて阿耨多羅三藐三菩提を得。世尊よ、新學の菩薩摩訶薩は、云何が諸法の無所有の性中に於て、次第行、次第學、次第道あり、是の次第行次第學次第道を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得るや」。佛須善提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、若くは初め諸佛より聞き、若くは多く諸佛を供養せる菩薩より聞き、若くは諸の阿羅漢、若くは諸の阿那含、若くは諸の斯陀含、若くは諸の須陀洹に聞く所無所有を得るが故に是れ佛なり。無所有を得るが故に是れ阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹なり。一切の賢聖皆無所有を得るが故に名あり。一切有爲の作法は所有の性無く、乃至毫末許の如きも所有ある事なし。是の菩薩摩訶薩は、是れを聞き、已はりて、此の念を作す、若し一切の法、性有る事無ければ、無所有の性を得るが故に、是れ佛なり。乃至無所有を得るが故に、是れ須陀洹なり。我れ若し當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきも、若くは得ざるも、一切の法、常に無有性なれば、われ何を以てか發心して、阿耨多羅三藐三菩提を得ざらんや。阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、一切衆生の有相を行ずるに、當に無所有の中に住する事を得しむべきなりと。須善提よ、菩薩摩訶薩は是の如く思惟し已りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。一切衆生を度すること爲すを以ての故に、菩薩摩訶薩の行する所の次第行、次第學、次第道とは、過去の諸の菩薩摩訶薩の道を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得るが如く、是の新發意の菩薩は、應に六波羅蜜(多)を學すべし。所謂の檀波

羅蜜(多)戶羅波羅蜜(多)・摩提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)・是れなり、是の菩薩摩訶薩、若し檀波羅蜜(多)を行する時、自ら布施を行じ、亦人を教へて布施せしむ。布施の功徳を讃歎し、布施を行する者を歡喜し、讃歎し、是の布施の因縁を以ての故に大財富を得。是の菩薩は慳心(けんしん)を遠離して衆生に布施し、飲食・衣服・香華・瓔珞・房舎・臥具・燈燭・種種資生に須ふる所盡く之を給與す。菩薩摩訶薩は是の布施及び持戒を行じて、天人の中に生じ、大尊貴なる事を得。是の持戒布施を以ての故に、禪定衆を得。是の布施持戒禪定を以ての故に、智慧衆・解脫衆・解脫知見衆を得、是の菩薩は是の布施・持戒・禪定・智慧衆・解脫衆・解脫知見衆に因つての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて、菩薩位に入り已つて、佛國土を淨むることを得て、衆生を成就し、一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉じ、法輪を轉じ已りて、三乘の法を以て、衆生の生死を度脱せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩は是の布施を以て、次第行、次第學、次第道あるも、是れ皆不可得なり。何を以ての故に、自性所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、自ら持戒を行じ人を教へて持戒せしめ、持戒の功徳を讃歎し、持戒を行する者を歡喜し讃歎す。持戒の因縁の故に、天人の中に生じて大尊貴なることを得。貧窮の者を見ては、施すに財物を以てし、持戒せざる者には、教へて持戒せしむ。亂意の者には、教へて禪定をせしめ、愚癡の者には、教へて智慧あらしめ、無解脫の者には、教へて解脫あらしめ、無解脫知見の者には、教へて解脫知見あらしむ。是の持戒、禪定、智慧、解脫、解脫知見を以ての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて、菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて、佛國土を淨むることを得、佛國土を淨め已りて衆生を成就し、衆生を成就し已りて、一切種智を得。一切種智を得已りて、法輪を轉じ已りて、三乘の法を以て衆生を度す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の持戒を以て、次第行、次第學、次第道あるも、是の事は皆得べからざるなり。何を以ての故に、一切法の自性所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初めより已來、屬提波羅蜜(多)を行じ、屬提の功德を讚歎し、屬提を行ずる事を人に教へ、屬提を行ずる者を歡喜し讚歎す。屬提波羅蜜(多)を行ずる時、衆生に布施して各各満足せしめ、教へて持戒せしめ、教へて禪定せしめ、乃至解脫智見せしむ。是の布施持戒禪定智慧の因縁を以ての故に、阿羅漢辟支佛地を過ぎて、菩薩位の中に入り、菩薩位の中に入り已りて、佛世界を淨むることを得、佛世界を淨め已りて衆生を成就し、衆生を成就し已りて、一切種智を得、一切種智を得已りて、法輪を轉じ、法輪を轉じ已りて、三乘の法を以て衆生を度脱す。是の如く須菩提よ、菩薩は、屬提波羅蜜(多)を以て、次第行、次第學、次第道あるも、是の事は皆得べからざるなり。何を以ての故に、一切の法は、自性所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初より已來、毗梨耶を行じ、毗梨耶を人に行ずる事を教へ、毗梨耶を行ずる功德を讚歎し、毗梨耶を行ずる者を歡喜し讚歎す。乃至是の事皆得べからず、自性所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、初より已來、自ら禪に入りて無量心に入り、無量心に入り、亦人をも教へて禪に入り、無量心に入り無量心に入らしめ、禪に入り無量心に入り無量心に入る功德を讚歎し、禪無量心無量心を行ずる者を歡喜し讚歎す。是の菩薩は諸の禪定無量心に住して、布施の衆生をして各各満足せしめ、教へて持戒せしめ、教へて禪定智慧せしめ、是の布施、禪定、智慧、解脫解脫知見の因縁を以ての故に、阿羅漢辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて、佛世界を淨め、佛世界を淨め已りて、衆生を成就し、衆生を成就し已りて、一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉じ、法輪を轉じ已りて三乘の法を以て、一切衆生を度脱す。乃至是の事得べからず、自性所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初より已來、般若波羅蜜(多)を行じて、衆生に布施して、各各を満足せしめ、教へて持戒・禪定・智慧・解脫・解脫知見せしめ、是の菩薩の般若波羅蜜(多)を行ずる時、自ら六波羅蜜(多)を行じ、亦他人をも教へて



六波羅蜜(多)を行ぜしめ、六波羅蜜(多)の功德を讚歎せしめ、六波羅蜜(多)を行する者を歡喜し讚歎す。是の菩薩げはの檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)の因縁及び方便刀を以て、摩訶辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、乃至是の事得べからず、自性所有無きが故なり。須菩提よ、是を初發意の菩薩摩訶薩の次第行、次第學、次第道と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の次第行、次第學、次第道とは、菩薩摩訶薩は初より已來、一切種智相應の心を以て、諸法の無所有の性を信じて、六念、謂ゆる念佛・念法・念僧・念戒・念捨・念天を修するなり。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は、念佛を修するや、菩薩摩訶薩の念佛は、色を以て念せず、受想行識を以て念せず。何となれば、是れ色は自性無く、受想行識も自性なければなり。若し法自性無ければ、是を無所有と爲す、何となれば、憶するなきが故に、是を念佛となせばなり。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の念佛は、三十二相を以て念せず、亦金色身を念せず、丈光を念せず、八十隨形好を念せず。何となれば、是れ佛身は自性なきが故なり。若し法自性なければ、是を無所有と爲す。何となれば、憶する無きが故に、是を念佛となせばなり。

復次に、須菩提よ、戒衆を以て佛を念すべからず、定衆・智慧衆・解脫衆・解脫知見衆を以て佛を念すべからず。何となれば、是の衆は自性有る事なければなり。若し法自性無ければ、是を非法となす。念する所なき、是を念佛となす。

復次に、須菩提よ、應に十力を以て佛を念すべからず、四無所畏・四無礙智・十八不共法を以て佛を念すべからず。大慈大悲を以て佛を念すべからず。何となれば、是の諸法は自性無ければなり。若し法自性無ければ、是を非法となす。念する所なき、是を念佛となす。

復次に、須菩提よ、應に十二因縁の法を以て佛を念すべからず。何となれば、是の因縁の法は自性無ければなり。若し法

自性無ければ是れ非法たり、念する所なき、是を念佛とす。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、應に佛を念すべし。是を菩薩の初發意の次第行、次第學、次第道となす。是の菩薩摩訶薩は、次第行、次第學、次第道の中に住して、能く四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分を具足し、空三昧、無相無作三昧、乃至一切種智を修業す。諸法の性所有無きが故なり。是の菩薩は諸法の性所有無き事を知る。是の中に性なく無性もなし。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は應に念佛を修すべきか。須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、善法を念ぜず不善法を念ぜず、記法、無記法を念ぜず、世間法を念ぜず、出世間法を念ぜず、淨法を念ぜず、不淨法を念ぜず、聖法を念ぜず、凡夫法を念ぜず、有漏法を念ぜず、無漏法を念ぜず、欲界繫法、色界繫無色界繫法を念ぜず、有爲法、無爲法を念ぜず。何となれば、是の諸法は自性無ければなり。若し法に自性無ければ、是れ非法たり、念する所なきが故に、是を念法と爲す。念法の中に無所有の性を學するが故に、乃至應に一切種智を得べし。是の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、諸法無所有の性を得、是の無所有の性の中に、相あるに非らず、相なきに非らず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に念法を修すべきし。是の法の中に於いて、乃至小許の念なし。何に況んや念法をや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、云何が應に念僧を修すべきや。須菩提よ、菩薩摩訶薩の念僧は無爲法なるが故に、分別して佛弟子衆あり。是の中、乃至少許の念なし、何に況んや念僧をや。是の如く、菩薩摩訶薩は、應に僧を念すべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、云何が應に念戒を修すべきか。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、初發意より已來、應に聖戒、無缺戒、無障戒、無取戒、無濁戒、無著戒、自在戒、智者所讚の戒、具足戒、隨定戒を念すべし。應に是の戒は無所有の性なりと念すべし。乃至少許の念もなし、何に況んや念戒をや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、初發意より已來、應に念捨すべし。若し自ら念捨、念他捨、若くは捨財、若くは捨法、若くは捨煩惱、是の捨得べからずと觀するが故に、乃至小許の念もなし、何に況んや念捨に於てをや。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に念捨

すべし。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は應に念天すべきか。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是念を作す、四天王諸天は、信・戒・施・聞・慧ある所のもの、此の間に命終して、彼の天處に生ぜり。我も亦是の信・戒・施・聞・慧なりと。乃至他化自在天は信・戒・施・聞・慧ある所のもの、此の間に命終して、彼の天處に生ず。我も亦是の信・戒・施・聞・慧なりと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の天を念すべし。無所有の性中尙ほ少許の念もなし。何に況んや念天をや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の六念を行す。是を次第行・次第學・次第道と名づく。」

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法無所有の性なれば、所謂の色乃至識・眼乃至意、色乃至法は、是れ無所有の性なり。眼界乃至意識界も是れ無所有の性なり。檀那波羅蜜(多)乃至般若波羅蜜(多)、内空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智も、是れ無所有の性なりと念す。世尊よ、若し一切法無所有の性なれば、是れ則ち道なく、智なく、果なからんか。佛、須菩提に告げたまはく、「汝、若し諸法實有なりと見ざれば、云何が是の間を爲すや。」須菩提言さく、「世尊よ、我れ是の法に於て敢て疑ひあらず、但當來世の諸比丘にして、聲聞辟支佛道菩薩道を求むるもの爲めにす。是の人ば當に是の如く言ふべし。若し一切の法無所有の性なれば、誰か垢、誰か淨、誰か縛、誰か解なると。是を知らず、解せざるが故に、而も戒を破し、正見を破し、威儀を破し、淨命を破す。是の人ば是の事を破するが故に、正に三惡道に墮すべし。世尊よ、我れ當來世に是の如きの事あらんことを畏る。是を以ての故に佛に問ひたまはれり。世尊よ、我れ是の法の中に於て、信じて疑はず悔いざるなり。」

論

釋して曰く、須菩提は佛語を信受して、一切の諸法は空なりと雖も、而も能く四禪神通を起す。是の大菩薩の近く成佛するものは能く行ず、今未だ新發意を知らざる者は、云何が行せん。是の

故に疑つて佛に問へり。世尊よ、新發意の菩薩摩訶薩は、云何が諸法無所有の性中に於て、次第行、次第學、次第道を得るか。是の次第行を以つて、阿耨多羅三藐三菩提を得、次第行、次第學、次第道を以ての故に、當に知るべし、是の新發意の菩薩は、無量劫の意を發さずと雖も、未だ諸法實相を得ず、是れを新學と名づく。

問うて曰く、(一)若し是の如きの人は是れ新學ならば、但だ應に布施持戒等を行することを教ふべし。佛は何を以つてか教へて、無所有、畢竟空性の中に於て行せしめたまへるや。答へて曰く、今、始め

て無所有、畢竟空法に入ること、明すが故に、無所有を行せしむ。而も是の菩薩は、無所有、畢竟空なるを以つて、布施持戒等の行に和合せしむ。

譬へば小兒の藥を服するに蜜を須ふれば乃ち下すが如し。是の故に新發意も亦深空を觀すると雖も咎なし。佛、須菩提に答へたまはく、「菩薩は若

くは諸佛より聞き、若くは多く諸佛を供養する者より聞く」と。諸佛とは若くは過去若くは現在なり。多く諸佛を供養するものとは、遍吉、觀世音、得大勢菩薩、文殊師利、彌勒菩薩等なり。四種の聲聞

聖人の義は、先に説くが如し。辟支佛は説法を樂はざるが故に説かず。諸佛等の聖人は皆無所有に因るが故に是の分別あり。聖人は禪定等の諸の功德ありと雖も皆涅槃の爲の故にす。涅槃は即ち是れ

寂滅の相、無所有の法なり。是の故に諸の聖人は皆涅槃に因つて是の差別ありと説く。一切有爲の作

【一】第一問、若し是の如きの人これ新學ならば、但だ應に布施持戒等を教ふべし、佛は何を以てか無所有畢竟空性の中に於て行せしめ給ひしか。

法は因縁和合に因つて起る、故に實に定性乃至毫末許の所有あることなし。有爲に二種あり。一

には色、二には無色なり。色法は分別を破壊し、乃至微塵も定實あることなく、無色法の中にも乃至

一念の定實あることなし。破の義は上に説くが如し。是の菩薩は諸佛聖人より是の法を聞き、餘人は

多く著心を以て説く。諸の聖人は世著の心を以て説く、是の故に但聖人より聞くのみ。

爾の時、次第學の菩薩、是の法を聞いて、比智籌量を以て、決定して諸

法究竟必空を知り、皆佛所得の實相の中に入る。所謂の寂滅無戲論の相

り。我れ若し作佛を得、若し作佛せざるも、一等にして異なるなし。何を以

ての故に、諸法實相、不増不減にして、更に新法の得べきなきが故に、法

も亦失せざればなり。若し衆生を度すに、衆生は畢竟空にして本來不可得

なり。我が所聞所作の功德、及び成佛の時の神通力は、皆夢の如く幻の如

し。故に一も定實の相なく、畢竟空なり。得不得は同じと雖も、我れ何を以てか、發心し作佛せざら

んと。

問うて曰く、若し諸法は畢竟空にして、無所有なりと知らば、云何が復た我れ何を以てか發心し

作佛せずと云ふや。答へて曰く、畢竟空無所有にして、障礙する所なくんば、何ぞ發心作佛を妨げん。

復次に、若し畢竟空にして、諸の戲論を滅すと説かば、云何が發心を障へんや。若し障は即ち是れ

【二】二種の有爲——(一)色、(二)無色。

【三】第二問、若し諸法は畢竟空にして無所有なりと知らば、云何が復た我れ何を以てか、發心し作佛せざらんと云ふか。

有性ならば、云何が無所有の性と云はんや。

問うて曰く、若し發心を障へずんば、亦應に不發心をも障へざるべし。菩薩は何ぞ安住して、而

も發心し、諸の勤苦を受けざるや。答へて曰く、有る人は言ふ、是の菩薩は、種種の因縁あつて應に

發心すべし。或は多く諸の親屬知識皆聞かず知らざるを以て、是の諸法實相を得ざるなり。是の故

に、今世後世、諸の苦惱を受く。我れ幸に力あり、能く是の人を衆苦より離るることを得せしむ。譬

へば人の好食良藥を得るが如し。親里の知識、諸の病苦を受くれば、云何が與へざらん。是の故に、

菩薩は、諸法の性は無所有なりと知ると雖も、親里に因るが故に、而も發

心し衆生を利益す。菩薩は復た是の念を作す、我れ諸法實相を聞くと雖

も、未だ深く入らず、未だ禪定有らず、智慧未だ熟せず。是の故に、發心

して阿耨多羅三藐三菩提を求む。諸の功德を集め、無有所の法を以て證と

作し、自らの爲めにし、又他人の爲めにす。是の菩薩は復た大乘の深義を聞き、衆生等法等の中に住

し、別異の心なく佛を得べし。復人及び怨に中ると雖も、都て異心なし。所以は何んとなれば、是の

菩薩は畢竟空心を以て、煩惱微薄、怨親平等にして、是の念を作す。怨親は定めなく、因縁を以ての

故に、親或は怨となり、怨或は親と爲る。此の大因縁を以て、忍波羅蜜(多)を具足す。故に作佛する

ことを得。何に由つてか得るや。怨を忍ぶに由るが故なり。是を以て菩薩は怨を觀ること親の如し。

【四】 第三問、若し發心を障へずんば、不發心をも障へざるべし。菩薩は何ぞ安住して、而も發心し、諸の勤苦を受けざるや。

譬へば嶮道を過ぐるが如し。應當に導師を頂戴し敬重すべきなり。又良醫は賤しと雖も、貴者の重んずる所なるが如し。是の如く思惟し籌量し分別す、中人の怨家は我れに用なしと雖も、而も是れ佛道の因縁なり。是の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。是を一種の次第行、次第學、次第道と名く。是の故に過去の菩薩所行を以て證と爲す。

問うて曰く、(五) 次第行と、次第學と、次第道に何の差別ありや、答へて曰く、有人は言ふ、「差別なし。若くは行、若くは學、若くは道は、其の義一にして語異なる」と。有人は言ふ、「初めを行と名け、中を學と名け、後を行と名く。行をば布施と名け、學をば持戒と名け、道をば智慧と名く」と。復次に、行をば持戒に名け、學をば禪定に名け、道をば智慧に名づく。

【五】 第四問、次第行と、次第學と、次第道とに何の差別ありや。

復次に、行をば正語正業正命に名け、學をば正精進正念正定に名け、道をば正見正思惟に名く。此の八事を名けて、道と爲すと雖も、然も分別するに三分あり。正見は是れ道の體にして、是道の名を發起す。正思惟正語正業正命は正見を助益す、故に名けて行と爲す。正精進正念正定は能く正見を成就して牢固ならしむ、是を學といふ。

復次に、有人は言ふ、「檀波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)を名づけて行と爲す。初めて道に入るが故に、尸羅波羅蜜(多)を名づけて學となす。人心は常に五欲に隨て禁じ難く制し難く、須臾も停息する

なし。漸く尸羅波羅蜜〔多〕、禪波羅蜜〔多〕を以て、是の心を制伏す。是の故に學と名く。羼提波羅蜜〔多〕、般若波羅蜜〔多〕を名けて道と爲す。何となれば、忍を善と爲し、般若を智慧と爲せばなり。善と智と具足するが故に道と名く。譬へば人に眼あり足あれば、意の所至に隨ふが如し。是等の如きを名けて、三事の差別と爲す。

問うて曰く、何を以てか次第と名づくるや。答へて曰く、以ふに須菩提の意は、若し一切の法無所有なれば、初發心の菩薩は、是の空法の中に於いて、云何が能く漸く次第に學せんや。是を以ての故に、次第と説く。諸法空にして解し難しと雖も、次第に行じて力を得るが故に、能く成就することを得るなり。譬へば、縁梯一の初梯より漸く上るに、上る處高しと雖も、難しと雖も、亦た能く至ることを得るが如し。次第行とは、四種に六波羅蜜〔多〕を行するなり。經中に説くが如し。自から檀を行じ、人をして檀を行せしむ。檀の功德を讚じ、檀を行するものを歡喜し讚す。善く慳貪の根を抜き、深く檀波羅蜜〔多〕を愛し、衆生に慈悲し、諸法實相に通達す。是の因縁を以ての故に、能く四種に檀波羅蜜〔多〕を行す。或は人あり、自ら布施を行じ、人をして布施せしむる能はず。或は他の瞋を畏れ、或は己の爲めに布施せしめ、之れを以て恩と爲すを畏る。是の如き等の因縁の故に人を教ふる能はず。或は人あり、人に布施を教へて、自ら施す能はず。或は人あり、種種に布施の徳を讚歎し、人に勸めて施さしめ、而も自ら行する能はず。

【六】 第五問、何を以てか次第と名くるや。



ある人は自ら布施を行じ、亦人をして布施せしめ、布施の徳を稱讚し、而も人の布施するを見て歡喜する能はず。所以は何となれば、或は破戒の惡人あり、施を行つて見るとを喜ばず、有る人は施主を見るを喜び、而も讚歎せず、其の邪見を以て施果を識らざるが故なり。是の如く、各各に具足すること能はず、菩薩は大悲心もて、深く善法を愛するが故に、能く四事を行すること、上に説くが如し。菩薩、若し但だ自ら布施し、他人に教へざれば、但だ能く今世に少許の是の衆生を利益し、業因縁に随つて貧窮の處に墮す。是の故に菩薩は衆生に教へて言はく、「我れ財物を惜しまず、我れ多く汝に施すと雖も、汝も亦持して後世に至るとを得ず。汝今當に自ら作すべく、後當に自ら得べし。布施の實の功德、種種の因縁を以て、衆生をして、施を行せしめ、施を行する者を見ては、是れ破戒の人なりと雖も、但其の好心布施の徳を念じて、其の惡を念せず、是の故に歡喜讚歎するなり。

復次に、三寶無盡福田の中に施す、故に施福盡きず、必ず佛道に至るを見る。其の未來無盡の功德を観るが故に、歡喜して是の四種の布施を行じ、世世に財富めるなり。是の菩薩は財富の爲に布施せず。未だ阿耨多羅三藐三菩提を具足せずと雖も、六波羅蜜(多)等の法の中間にして而も財富自ら至るなり。譬へば、人は穀の爲めの故に、禾を種うれば藁艸自ら至るが如し。菩薩は財物の報を得る時、饑食の心を離れ、衆生の心に随つて布施し、食を須る、食を與ふ。

問うて曰く、是の菩薩は布施する時、先づ何等の人に施すや。答へて曰く、是の菩薩は衆生に因つて大慈悲心を起すと雖も、而も菩薩の布施は必ず先づ諸佛大菩薩辟支佛阿羅漢及び諸聖人を供養す。若し聖人なければ、次第に持戒精進禪定智慧離欲の人に施す。若し是の人無ければ、一切の出家弟子に施す。若し是の人なければ、五戒を持ち十善道を行ひ、及び一日戒三歸を持つものに施す。若し是の人なければ、次に中人の正に非ず邪に非ざる者に施す。若し此の人無ければ、次に五逆惡人に施し、及び諸の畜生に與へざるべからず。菩薩は施を以て一切衆生を攝するが故なり。有人は言ふ、「應に先づ五逆の罪人、斷善根の者、貧窮の老病、下賤乞丐の者、乃至畜生に布施すべし。譬へば、慈母の多く衆子あらんに、先づ羸病を念じ、其の所須を給するが如し。又菩薩は餓虎の子を食はんと欲するが爲の故に、身を以て之れに施すが如しと。

【七】第六問、菩薩は布施するに當り、先づ何人に施すや。  
【八】第七問、是の如く種種ならば、應に先づ何者に施すべし。

問うて曰く、是の如く種種ならば、應に先づ何者に施すべきや。答へて曰く、一切衆生は、皆是れ菩薩の福田なり。「そは」能く大慈を生ずるが故なり。菩薩は常に阿耨多羅三藐三菩提を以て衆生に施さんと欲す。何に況んや衣食等にして、而も分別あらんや。又菩薩は無生忍法を得、平等にして差無し。未だ無生忍を得ざれば、或は慈悲多く、或は分別心多し。此の二心は俱に行ずるとを得ず。悲心多ければ、先づ貧窮の惡人に施して此の念を作す、「福田の中に種うれば、果報大なり」と雖も、衆生

を憐愍するが故に、先づ貧者を利す。是の如きの田は不良なりと雖も、慈悲心を以て大果報を得るなり。分別心多ければ是の念を作す、「諸佛は無量の功德有るが故に應に先づ供養すべし」と。諸法を分別し、佛身を取著するを以ての故に心少なり。其の心小なりと雖も、福田良きが故に功德も亦大なり。若し諸法實相を得れば、般若波羅蜜〔多〕方便力の中に入りて、心自在を得、二事俱に行じて、衆生を慈愍し、又視ること皆佛の如し。是の如く菩薩は、因縁に随つて布施を行す。

問うて曰く、(九) 經に何を以てか、衣食等を與ふと言はずして、食を須むるには、食を與ふと言ふや。答へて曰く、人有り、食を須むるには飲を與へ、飲を須むるに衣を與へば、受者の心に稱はざるを以ての故に、福德少し。此の故に食を須むるには食を與ふと言ふ。

問うて曰く、(一〇) 有人は若くは羞ぢ、若くは怖れ、所須ありと雖も、言を發する能はず、云何が其の所須を知らん。答へて曰く、菩薩は其の相貌を觀て、時と所須と土地との所宜に隨ふ。或は他心を知るものありて資生の具、意に隨つて與へんに、是の人は是の布施に因つて、戒衆を成ずるとを得。復是の念を作す、「我れ衆生を憐愍し、衣食を以て布施するも、所益甚だ少なく、持戒に如かず」と。常に無惱無畏を以て衆生に施す。菩薩は此の持戒の中に住して、戒を守護せんが爲の故に、禪定の心を生

【九】 第八問、經に、衣食を與ふと言はずして、食を須むるには、食を與ふと言ふ理由如何。

【一〇】 第九問、有人は若くは羞ぢ、若くは怖れ、所須ありと雖も發言すること能はず、云何が其の所須を知らん。

じ、清淨しやうじやうを散せざるが故に慧衆えしゆ無戲論むぎろんを成ずることを得。諸著しよぢやくを捨るは是れ慧相えさうなり。是の慧えを以て諸の煩惱りちはんの縛やくを破り、解脫衆げだつしゆを得、了了りやうりやうに知見ちけんし、解脫げだつを證しやうするが故に、解脫知見衆げだつちけんしゆと名く。是の人は先づ布施ふせ及び五衆しゆの因縁いんねんを成ずるが故に、聲聞しやうもん辟支佛地びやくしふちを過ぎて、菩薩ぼさつの位くらみに入るなり。

問うて曰く、(二)菩薩ぼさつは應に六波羅蜜はろみつた「多」を行じて菩薩の位くらみに入るべし。此の中に云何が、五衆しゆを説くや。答へて曰く、法ほふは一なりと雖も、種種しゆしゆの異名いみやうを以て説く。是の故に五衆しゆを説くに各とがなし。是の人は、一の波羅蜜はろみつた「多」の中なかより、諸の波羅蜜はろみつた「多」を起さんと欲し、布施ふせを主しゆとなす。已に先に持戒衆ぢかいしゆを説いて、尸羅波羅蜜しはろみつた「多」と名け、定衆ぢやうしゆ解脫衆げだつしゆを禪波羅蜜ぜんはろみつた「多」と名け、慧衆えしゆ解脫知見衆げだつちけんしゆ、是れ般若波羅蜜はんにはらみつた「多」なり。諸の波羅蜜はろみつた「多」を行ずる時、能く諸の惡事あくじを忍ぶ。是を屬提波羅蜜せんたいはらみつた「多」名く。能く諸の波羅蜜はろみつた「多」を起して、休やすまず、息やすまず、是を毗梨耶波羅蜜びりやはらみつた「多」と名く。

問うて曰く、(三)若し爾れば何を以てか、但だ諸波羅蜜しよはろみつた「多」の名と説かずして、而も五衆しゆと説くや。答へて曰く、是の人は菩薩ぼさつの位くらみに入らんと欲す、此の中に但だ持戒禪定ぢかいぜんぢやうを以ては、和合衆わがふしゆ戒かい清淨しやうじやう戒かい無盡むじん戒かいを得ざるなり。要を以て之を言へば、一切いっさいの戒かいを攝せつするをば名けて戒衆かいしゆと爲す。能く煩惱はんなんを破り、二乗にじやうを過ぎて、菩薩ぼさつの位くらみに入る。譬へば、一人二人にんを名けて軍ぐんと爲さず、多人たにんを和合せば、乃

【一】 第一〇問、菩薩は應に六衆を行じて菩薩の位に入るべし、此の中、云何が五衆を説くや。  
 【二】 第一一問、若し爾れば何を以てか、但諸波羅蜜多の名を説かずして、而も五衆を説くや。

ち成じて軍と爲り、能く怨敵を破るが如く、餘衆も亦是の如し。菩薩は自ら禪定等衆を得、亦衆生をし  
て得せしむ。是を菩薩の衆生を教化すと名く。衆生を教化し已りて、自らの功德、及び衆生の功德を  
持して盡く淨佛國土に廻向す。此の二法を具ふれば、即ち一切種智を得て法輪を轉じ、三乘を以て衆生  
を度す。是を菩薩の次第行、次第學、次第道と名く。麤を先にし細を後にし、易を先にし、難を後にし、  
漸漸に習學するを名けて次第と爲す。餘の五波羅蜜(多)は、應に義に隨つて分別すべし。諸の法性は  
無所有なりと雖も、而も世諦に隨つて行ず、顛倒を破せんが爲の故なり。  
復次に、念佛等の六念は、是れ初めの次第行なり。易く行じ、易く得る  
を以ての故なり。

問うて曰く、(三) 六念の中に亦言ふ、「色を以て佛を念せず」と。云何が易と言ふや。答へて曰く、  
有法は共行なるが故に、名けて易と爲す。譬へば苦樂を服するに、蜜を以て之を下せば、則ち易きが  
如し。六念の義は、初品の中に廣く説くが如し。六波羅蜜(多)六念等は、柔軟易行にして邪見を生ぜ  
ず、是の菩薩は次第に法を學び、餘の三解脱門等、思惟し籌量して、或は邪見を生ずるが故に、此の  
中に説かざるなり。須菩提は、「世尊よ、若し實に無所有ならば、云何が次第行あらんや等」と難す。  
佛、須菩提に反問したまはく、「汝は聲聞の智慧を以て、色等の法を見る、是れ一定の實法なりや不  
や」と。答へて曰く、色等の一切の法を見ず、但だ因縁の和合に從つて、假りに其の名あるのみにし

【三】 第一二問、六念の中に、  
「色を以て佛を念せず」と言  
ふ、云何が易と言ふや。



多羅三藐三菩提を求むるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切法の性無所有なるを以ての故に、菩薩は衆生の爲に、阿耨多羅三藐三菩提を求むるなり。何となれば、須菩提よ、諸の得あり著ある者は、解脱すべきこと難ければなり。須菩提よ、諸の相を得る者は、道あるなく果あるなく、阿耨多羅三藐三菩提あるとなし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、相を得ること無き者は、道あり果あり、阿耨多羅三藐三菩提有りや不や」と。「須菩提よ、所得なければ即ち是れ道、是れ果、是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。〔そは〕法性壞せざるが故なり。若し無所得の法に道を得んと欲し、果を得んと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、法性を壞せんと欲すと爲す。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、無所得法は是れ道、是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なれば、云何が菩薩の初地乃至十地あり、云何が無生忍法あり、云何が報得神通あり、云何が報得の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧あり、是の果報の法中に住して、能く衆生を成就し、能く佛國土を淨め、及び諸佛に衣服・飲食・香華・瓔珞・房舎・臥具・燈燭、種種養生の所有る具を供養し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得て、是の福徳を斷ぜず、乃至般涅槃の後、舍利及び佛弟子供養を得、爾乃ち滅盡するありや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法は無所得の相なるを以ての故に、菩薩の初地乃至十地を得、報得の五神通、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧あり、衆生を成就し、佛國土を淨む。亦た善根の因縁を以ての故に、能く衆生を利益し、乃至般涅槃の後、舍利及び弟子供養を得」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は無所得の相ならば、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、諸の神通に何の差別有りや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「無所得法の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、神通に差別あることなし。衆生の布施乃至神通に著するが故に、分別して説くのみ」と。「世尊よ、云何が無所得法の布施乃至神通に差別あることなきや」と。

「須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時布施を得ず、施者受者皆不可得にして而も布施を行す、戒を得ずして戒を持し、忍を得ずして忍を行じ、精進を得ずして精進を行じ、禪を得ずして禪を行じ、智慧を得ずして智慧を行じ、神通

を得ずして神通を行じ、四念處を得ずして四念處を行じ、乃至八聖道分を得ずして八聖道分を行じ、空三昧無相無作三昧を得ずして空無相無作三昧を行じ、衆生を得ずして而も衆生を成就し、佛國土を淨むるとを得ずして佛國土を淨め、諸佛の法を得ずして而も阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に是の如く、無所得の般若波羅蜜(多)を行すべし。

菩薩摩訶薩の是の無所得の般若波羅蜜(多)を行する時、魔若くは魔天も破壞する能はずしと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、一念の中に具足して六波羅蜜(多)、四禪、四無量心、四無色定、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支分、八聖道分、三解脱門、佛の十力、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、三十二相、八十隨形好を具足し行するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の有する所の布施は、般若波羅蜜(多)を遠離せず、修する所の持戒・忍辱・精進・禪定は、般若波羅蜜(多)を遠離せず、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八十隨形好は、般若波羅蜜(多)を遠離せず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩般若波羅蜜(多)を遠離せざるが故に、一念の中に具足して六波羅蜜(多)乃至八十隨形好を具足し行するや」と。

佛の言はく、「菩薩の般若波羅蜜(多)を行する時、有する所の布施は般若波羅蜜(多)を遠離せず、不二の相なるを以てなり。持戒の時も亦不二の相なり。忍辱を修し、精進を勤め、禪定に入るも亦不二の相なり。乃至八十隨形好も亦不二の相なるを以てなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は布施する時不二の相なるや、乃至八十隨形好を修するに不二の相なるや」と。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、檀波羅蜜(多)を具足せんと欲して、檀波羅蜜(多)の中に、諸波羅蜜(多)及び四念處乃至八十隨形好を攝す」と。世尊よ、云何が菩薩の布施する時、諸の無漏法を攝するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時、無漏心に住して布施すれば、無漏心の中に於て相を見ず、所謂の誰か施し、誰か受け、施す所何物なると。是の無相心、無漏心、斷愛、斷慳、貪心を以て布施

するに不二の相なるや」と。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、檀波羅蜜(多)を具足せんと欲して、檀波羅蜜(多)の中に、諸波羅蜜(多)及び四念處乃至八十隨形好を攝す」と。世尊よ、云何が菩薩の布施する時、諸の無漏法を攝するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時、無漏心に住して布施すれば、無漏心の中に於て相を見ず、所謂の誰か施し、誰か受け、施す所何物なると。是の無相心、無漏心、斷愛、斷慳、貪心を以て布施



を行じ、是の時に布施を見ず、乃至阿耨多羅三藐三菩提の法を見ず。是の菩薩は無相心無漏心を以て持戒して、是の戒を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、忍辱して是の忍を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、精進して是の精進を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、禪定に入り、是の禪定を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、智慧を修して是の智慧を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、四念處を修して、是の四念處を見ず、乃至八十隨形好を見ず」と。世尊よ、若し諸法無相無作ならば、云何が檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、脍提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を具足するや。云何が四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分を具足するや。云何が空三昧、無相無作三昧、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を具足するや。云何が三十二相、八十隨形好を具足するや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行するや、無相心無漏心を以て布施し、食を須むるに食を與へ、乃至種種の所須盡く之を給與す。若くは内若くは外、若くは其の身を支解し、若くは國城妻子を衆生に布施す。若し人あり、來つて菩薩に語りて言く、何ぞ此の布施を用て、是の益する所なき般若波羅蜜(多)を行することを爲すやと。菩薩是の念を作す、是の人ば我が布施を來り訶すと雖も、我れ終に悔いず、我れ當に勤めて布施を行じて與へざるべからず。施し終りて、一切衆生と之れを共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、亦た是の相を見ず。誰か施し、誰か受け、施す所は何物なる、廻向者は誰なる、何等か是れ廻向法なる、何等か廻向の處、所謂る阿耨多羅三藐三菩提なる。此の相は皆見るべからず。何となれば、一切法は内空を以ての故に空なり、外空の故に空なり、内外空の故に空なり、空空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、一切法空、自性空の故に空なりと。是の如く觀じて、此の念を作す、廻向者は誰なる、何處に廻向し、何の法を用てか廻向すると。是れを正廻向と名く。爾の時に、菩薩は能く衆生を成就し、佛國土を淨め、能く

檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)、乃至三十七助道法、空無相無作三昧、乃至十八不共法を具足す。是の菩薩は、是の如く、檀波羅蜜(多)を具足して、而も世間の果報を受けざることを、譬へば、他化自在諸天の意の所須に隨つて、即ち皆之を得るが如し。菩薩も亦是の如く、心に所願を生じ、意に隨つて即ち得。是の菩薩摩訶薩は、是の布施果報を以ての故に、能く諸佛を供養し、亦た能く一切衆生、天及び人阿修羅を満足す。是の菩薩は檀波羅蜜(多)を以て衆生を攝取し、方便力を用ゐ、三乗の法を以て衆生を度脱す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相無得無作の諸法の中に於て檀波羅蜜(多)を具足す。

須菩提よ、菩薩摩訶薩は云何が無相無得無作法の中に於て、尸羅波羅蜜(多)を具足する。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜を行する時、種種の戒、所謂の聖無漏入八聖道分戒、自然戒、報得戒、受得戒、心生戒を持す。是の如き等の不缺・不雜・不濁・不著・自在戒、智所讚戒、此の戒は所取、若くは色、若くは受想行識、若くは三十二相、八十隨形好、若くは刹利の大姓、若くは婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、三十三天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天、梵天、光音天、遍淨天、廣果天、無想天、無煩天、無熱天、妙見天、喜足天、阿迦尼吒天、空處天、識處天、無所有處天、非有想非無想處天、若くは須陀洹果、若くは斯陀含果、若くは阿那含果、若くは阿羅漢果、若くは辟支佛道、若くは轉輪聖王、若くは天王無きを用て但だ一切衆生の爲に之れを共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。無相無得の無二を以て廻向す。世俗法の爲の故に第一實義にはあらず。是の菩薩は尸羅波羅蜜(多)を具足し、方便力を以て四禪を起し、味著せざるが故に五神通を得、四禪に因つて天眼を得。是の菩薩は二種の天眼(所謂)修得と報得とに住す。天眼を得已りて、東方現在の諸佛を見、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、所見の如く失せず、所見の如く失せず、南方現在の諸佛を見、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、所見の如く失せず、西方現在の諸佛を見、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、所見の如く失せず、北方現在の諸佛を見、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、所見の如く失せず、十方諸佛の説法を聞き、所聞の如く失せず、能く自ら

能益し、亦他人をも益す。此の菩薩は知他心智を以て、十方諸佛の心を知り、及び一切衆生の心を知り、亦能く一切衆生を饒益す。是の菩薩は宿命智を用て、過去の諸業因縁を知り、是の業因縁を失せざるが故に、是の衆生の在在處處に生ずるとる。悉く知る。是の菩薩は是の漏盡智を用て、衆生をして須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道を得せしめ、在在處處に能く衆生をして善法の中に入らしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は諸法の無相無得無作の中に於いて、尸羅波羅蜜(多)を具足す」と。

「世尊よ、云何が諸法は無相無作無得なるに、菩薩摩訶薩は能く尸羅波羅蜜(多)を具足するや」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より已來、乃ち道場に坐するに至るまで、其の中間に於いて、若し一切衆生來り、瓦石刀杖を以て是の菩薩に加へんに、菩薩は此の時瞋心を起さず、乃至一念をも生ぜず。爾の時に菩薩は二種の忍を修すべし。一には一切衆生の惡口罵詈、若くは刀杖瓦石を以て之を加へんに瞋心起らず、二には一切衆生無生無死法忍なり。菩薩は若し人來りて、惡口罵詈し、或は瓦石刀杖を以て之に加へんに、爾の時菩薩は是の如く思惟すべし、我を罵る者は誰ぞ、譏り訶する者は誰ぞ、誰か打擲する者なる、誰か有受者なると。是の時に菩薩は應に諸法の實相を思惟すべし。所謂の畢竟空にして法なく、衆生なく、諸法尙得べからず、何に況んや衆生あらんや」と。是の如く諸法の相を觀する時、罵る者を見ず、刺殺者を見ず、是の菩薩は、是の如く、諸法の相を觀する時、即ち無生法忍を得。云何が無生法忍と名くるや。諸法の相常に不生なれば、諸の煩惱も本より已來、亦常に不生なることを知ればなり。是の菩薩摩訶薩は、是の二忍に住して、能く四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分、三解脱門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を具足す。是の菩薩は是の聖無漏の法に住し、一切の聲聞辟支佛と共にあらずして、聖神通を具足す。聖神通に住し已りて、天眼を以て東方の諸佛を見、是の人は念佛三昧を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に斷絶せず。南西北方四維上下も亦是の如し。是の菩薩は、

天王を用て、十方諸佛の所説を聞き、所聞の如く衆生の爲に説く。是の菩薩は亦十方諸佛の心を知り、及び一切衆生の念を知り、知り已りて、其の心に隨つて而して説法す。是の菩薩は宿命智を以て一切衆生の宿世の善根を知り、衆生の爲に説法し、其をして歡喜せしむ。是の菩薩は漏盡神通を以て衆生を教化して三業を得せしむ。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以て衆生を成就し、一切種智を具足し、阿耨多羅三藐三菩提を得て法輪を轉す。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相無得無作の法中に屬提波羅蜜(多)を具足す」と。

須菩提言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は云何が諸法の無相無作無得の法中に於いて、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、身精進、心精進を成就して初禪に入り、乃至第四禪に入りて、種種の神通力を受け、能く一身を分ちて多身となし、乃至平に日日を把握す。身精進を成就するが故に、飛んで東方に到り、無量百千萬の諸佛の世界を過ぎて、諸佛に飲食衣服、醫藥臥具、香華瓔珞、種種の所須を供養し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、福徳果報終に滅盡せず。是の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時に、一切世間の天及び人は勤め設けて衣服飲食を供養し、乃至無餘涅槃に入りし後、舍利及び弟子は供養を得。亦是の神通を以ての故に、諸佛の所に至りて、法教を聽受し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に遺失せず。是の菩薩は、一切種智を修する時、佛國土を淨め、衆生を成就す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて身精進を成就し、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足す。須菩提よ、云何が菩薩は心精進を成就して、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足する。須菩提よ、菩薩摩訶薩の心精進とは、是の心精進、聖無漏入八聖道分を以て、精進して身口の不善業をして入ることを得せしめず。亦諸法の相を取らず、若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは我、若くは無我、若くは有爲、若くは無爲、若くは欲界、若くは色界、若くは無色界、若くは有漏性、若くは無漏性、若くは初禪、乃至第四禪若くは慈悲喜捨、若くは無邊虛空處乃至非有想非無想處、若くは四

念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、若くは空無相無作、若くは佛の十力、乃至十八不共法なりと相  
を取らず。若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは我、若くは無我、若くは須陀洹果、若くは斯陀含果、若く  
は阿那含果、若くは阿羅漢果、若くは辟支佛道、若くは菩薩道、若くは阿耨多羅三藐三菩提、若くは是れ須陀洹、阿那含、阿羅  
漢、若くは是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ佛なりと相を取らず。是の衆生は三結を斷するが故に須陀洹を得、是の衆生は三毒  
薄きが故に斯陀含を得、是の衆生は下分結を斷するが故に阿那含を得、是の衆生は上分結を斷するが故に阿羅漢を得、是の  
衆生は辟支佛道を以ての故に辟支佛を得、是の衆生は道種智を行するが故に菩薩と名づくるも、亦是の諸法の相を取らず。  
何となれば性を以て相を取るべからず、是れ性無なるが故なり。是の菩薩は是の心精進を以ての故に、廣く衆生を利益する  
も、亦是の衆生を得ず。是を菩薩の毗梨耶波羅蜜(多)を具足し、諸佛の法を具足し、佛國土を淨め、衆生を成就すと爲す。  
(そは)不可得なるが故なり。是の菩薩は身精進心精進を行するが故に、一切諸の善法を攝取す。是の法も亦著せざるが  
故に、一佛國より一佛國に至りて、衆生を利益せんが爲に、爲す所の神通、意に隨つて無礙なり。若くは諸華を雨らし、若  
くは諸香を散じ、若くは妙樂をなし、若くは大地を動し、若くは光明を放ち、若くは七寶莊嚴の世界を示し、若くは種種の身を  
現じ、若くは大智慧光明を放ちて聖道を知らしめ、殺生乃至邪見を遠離せしめ、或は布施を以て衆生を利益し、或は持戒を  
以て、或は身體を支解し、或は妻子を以て、或は國城を以て、或は己身を以て給施し、所に隨つて方便して衆生を利益す。  
是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、無相無作無得の諸法の中に、身心精進を用て、能く毗梨耶波羅  
蜜(多)を具足すしと。

「世尊よ、云何が菩薩は般若波羅蜜(多)を行じ、無相無作無得の法中に住して、能く禪那波羅蜜(多)を具足するや」と。「須  
菩提よ、菩薩摩訶薩は佛の諸禪定を除き、餘の一切の諸禪三昧皆能く具足す。是の菩薩は諸欲諸惡不善法を離れ、離生喜樂有

覺有觀にして初禪に入り、乃至第四禪に入る。是の慈悲喜捨の心を以て一方に遍滿し、乃至十方一切世間に遍滿す。是の菩薩は一切の色相を過ぎ、有對相を滅し、別異相を念ぜざるが故に、無邊虛空處に入り、乃至非有想非無想處に入る。是の菩薩は禪(那)波羅蜜(多)の中に於て住し、逆順に八背捨九次第定に入り、空三昧無相無作三昧に入る。或る時は無相三昧に入り、或時は如電光三昧に入り、或る時は聖正三昧に入り、或時は如金剛三昧に入る。是の菩薩は禪那波羅蜜(多)の中に住し、三十七助道法を修し、道種智を用て一切禪定に住し、乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辨地、辟支佛地を過ぎて、菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて、佛地を具足す。是の諸地の中に乃至阿耨多羅三藐三菩提を行じて中道に道果を取らず。是の菩薩は是の禪(那)波羅蜜(多)の中に住して、一佛國に至りて諸佛を供養し、諸佛の植うる所の諸善根に従つて佛國土を淨め、一佛國より一佛國に到りて衆生を利益す。或は布施を以て衆生を攝取し、或は持戒を以てし、或は三昧を以てし、或は智慧を以てし、或は解脫を以てし、或は解脫知見を以て、衆生を攝取し、衆生をして、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得せしめ、諸有の善法能く衆生の得道せしむるものをして、皆教へて得せしむ。是の菩薩は此の禪(那)波羅蜜(多)の中に住して、能く一切の陀羅尼門を生じ、四無礙智を得、報得の諸の神通を得。是の菩薩は終に母人の胞胎に入らず、終に五欲を受けず、生ず不生なく、生ずと雖も亦生法の汙す所とならず。何となれば、此の菩薩は一切の作法を見ること幻の如くにして、而も衆生を利益し、亦衆生及び一切の法を得ずして、衆生を教へて無所得の處を得せしむればなり。是れ世俗法の故にして第一實義に非らず。是の禪(那)波羅蜜(多)に住して、一切の禪定、解脫三昧を行じて、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に禪(那)波羅蜜(多)を離れず。是の菩薩は是の如く道種智を行する時、一切種智を得て一切の煩惱習を斷じ、斷じ已りて自ら其の身を益し、亦他人をも益す。自ら益し他を益し已りて、一切世間の天及び人、阿修羅の爲に福田を作す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、能く無相禪(那)波羅蜜(多)を具足すト。

「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、無相無作無得の法中に住し、般若波羅蜜(多)を修し具足するや」と。須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、諸法に於て定實の法を見ず。是の菩薩は色は不定にして實相に非ずと見、乃至識は不定にして實相に非ずと見る。色生を見ず、乃至識生を見ず。若し色生を見ず乃至識生を見ざれば、一切法、若くは有漏、若くは無漏の來處を見ず、去處を見ず、亦集處を見ず。是の如く觀する時、色性乃至識生を得ず、亦有漏無漏法性を見ず。此の菩薩は般若波羅蜜(多)を行する時、一切諸法の無所有の相を信解す、是の如く信解し已りて、内外乃至無法有法空を行じ、諸法に於いて所著なし。若くは色、若くは受想行識、乃至阿耨多羅三藐三菩提なりと。是の菩薩は無所有の般若波羅蜜(多)を行して、能く菩薩道、所謂る六波羅蜜(多)乃至三十七助道法、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、三十二相、八十隨形好を具足す。是の菩薩は空淨佛道の中、所謂る六波羅蜜(多)、三十七助道法、報得の神通に住し、是の法を以て衆生を饒益し、宜しく施を以て攝し、教へて布施せしめ、戒を以て攝し、教へて持戒せしめ、宜しく禪定、智慧、解脫、解脫知見を以て攝し、教へて禪定、智慧、解脫、解脫知見を修せしめ、宜しく諸の道法を以て教ふべきものは、教へて須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得せしめ、宜しく佛道を以て化すべき者は、教へて菩薩道を得、佛道を具足せしむ。是の如き等、其の所應の道地に隨つて、而して此を教化し、各をして(その)所を得せしむ。是の菩薩は種種の神通力を現する時、無量如恆河沙の國土を過ぎて、衆生の生死を度脱し、其の所須に隨つて皆之を供給し、各をして満足せしめ、一國土より一國土に至りて、淨妙國土を見、以て自ら己の佛國土を莊嚴す。譬へば、他化自在天の中には、資生の所須、意に隨つて自ら至るか如く、亦諸の淨佛國の求欲を離るるが如し。是の人は是の報得の檀那(波羅蜜(多))、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)、報得の五神通を以て菩薩道を行じ、道種智一切の功德を成就して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の菩薩は爾の時、色法乃至識を受け





て無所有空を以て、須菩提の所聞を破し、亦復自ら因縁を説きたまへり。「須菩提よ、心に著する者は解脱を得ること難し」と。是の人は無始生死の中より來た、一切煩惱を以ての故に、深く諸法に染著す。有を聞くも亦著し、空を聞くも亦著し、得失にも亦著す。是の如きの衆生は免出すべきこと難し。是の故に、菩薩は無上道心を發し、自ら相好を以て身を嚴り、梵音聲を得て大威徳有り。衆生の三世心の根本を知り、種種の神通力因縁譬論を以て、爲に無所有の法、空、解脱門を説き、其の心を引導す。衆生は是の如き希有の事を見て、即時に其の心柔軟にして佛を信じ、法を受く。是の故に、經に「有に著する者は、解脱を得難し、有所得の者は道無く、果無く、阿耨多羅三藐三菩提なし」と説く。須菩提、世尊に問ふ、「若し有所得の者は道なく、果なく、阿耨多羅三藐三菩提なくんば、無所得の者は道あり、果ありや不や」と。佛答へたまはく、「無所有は即ち是れ道、即ち是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり」と。若し人、是れ有所得、是れ無所得なりと分別せず、諸法實相、畢竟空の中にいれれば、是れ亦無所得にして、即ち是れ道、即ち是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。諸法實相を破壊せざるが故に法性なり、即ち是れ諸法實相なり。須菩提意に謂へらく、「法性、正行、邪行は常に破壊すべからず、何を以てか佛は法性を壊せざるは、是れ道、是れ果なりと言へるや」と。佛答へたまはく、「法性破壊すべからずと雖も、衆生の邪行を壊するが故に名けて破壊と爲す」と。虚空を雲霧土塵に染むると能はずと雖も、亦不淨と名くるが如し。人の實に虚空を染汗せんと欲するが如

きは、是の人は法性を染汚せんと欲せんと爲す。是の事なきが故に、佛は譬喩を説きたまへり。若し人法性を壊せんと欲せば、是の人は無所有の法中に於て、道を得、果を得、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すと爲す。須菩提、佛に白して言さく、「若し無所有即ち是れ道ならば、云何が十地等の諸の菩薩法ありや」と。經に廣く説くが如し。

問うて曰く、(二六)此の事は佛已に先に答へたまへり。所謂若し法空なれば、菩薩何事を見る故に發心するや。今若し法空なりと言はば、云何が初地等ありや。佛は皆空を以て答へたまひしに、今、須菩提は何を以てか更に問へるや。答へて曰く、衆生は心に著し、解し難きを以ての故に、更に問ふなり。是の衆中に新發意の菩薩有り。是の諸法實相の空なるを聞き、即ち著心を生ず。佛は其の著するをも破したまふ。須菩提は此の人の爲の故に更に問へり。佛、須菩提に答へたまはく、「無所得を以ての故に初地あり、乃至般涅槃の後、舍利は供養を得。所著ある者の中には、初地及び諸功德を説くべからず。亦無所得の因縁を以ての故に、布施より乃ち諸の神通に至るまで、差別あるとなし。差別あるとなきが故に、應に難すべからず」と。須菩提復問ふ、「云何が無所得の布施、乃至諸の神通には、差別あるとなきや」と。佛答へたまはく、「菩薩は初發心より已來、阿耨多羅三藐三菩提に似て寂滅の相なり」と。布施は畢竟空なり。所謂の施

【二六】 第一四問、若し法空なれば、菩薩何事を見るが故に發心するや。今若し法空なりと言はば、云何が初地等あるやとの間に對して、佛は皆空を以て答へ給へり。然るを今復た須菩提が之を問へるは何故なるか。

【二六】 此の事は佛已に先に答へたまへり。所謂若し法空なれば、菩薩何事を見る故に發心するや。今若し法空なりと言はば、云何が初地等ありや。佛は皆空を以て答へたまひしに、今、須菩提は何を以てか更に問へるや。答へて曰く、衆生は心に著し、解し難きを以ての故に、更に問ふなり。是の衆中に新發意の菩薩有り。是の諸法實相の空なるを聞き、即ち著心を生ず。佛は其の著するをも破したまふ。須菩提は此の人の爲の故に更に問へり。佛、須菩提に答へたまはく、「無所得を以ての故に初地あり、乃至般涅槃の後、舍利は供養を得。所著ある者の中には、初地及び諸功德を説くべからず。亦無所得の因縁を以ての故に、布施より乃ち諸の神通に至るまで、差別あるとなし。差別あるとなきが故に、應に難すべからず」と。須菩提復問ふ、「云何が無所得の布施、乃至諸の神通には、差別あるとなきや」と。佛答へたまはく、「菩薩は初發心より已來、阿耨多羅三藐三菩提に似て寂滅の相なり」と。布施は畢竟空なり。所謂の施

者受者財物を得ずして而も布施を行す。是の如きの布施の中には分別あるとなし。乃至菩提を得ずして、而も阿耨多羅三藐三菩提を得るも亦た是の如し。是を菩薩は無所得の般若波羅蜜(多)を行すと名く。是の無所得の般若波羅蜜(多)を行すれば、魔若くは魔天も破壊すること能はざるなり。一念の中に六波羅蜜(多)を行すと、〔次に説くが如し〕。

問うて曰く、(三)須菩提は何を以ての故に、一念の中に、六波羅蜜(多)等を行す諸の功德を問へるや。答へて曰く、須菩提は佛より、般若波羅蜜(多)の甚深なる無所有の相、諸法の中に於ける無礙の相を聞けり。若し爾れば、則ち所として能はざるなく、事として作さざるなし。云何が菩薩は一念の中に能く六波羅蜜(多)、乃至八十隨形好を攝せんや。初發心の時、有無に著するの心重きを以ての故に、漸漸次第に行じて、今有無悉く捨つるが故に、所として能はざるなし。是の故に問へり。佛答へたまはく、菩薩は般若波羅蜜(多)を離れず、布施等の諸の功德を行じて障礙なきが故に、能く一念の中に行す。若し般若波羅蜜(多)を遠離せば、則ち漸漸次第に行す。須菩提問ふ、「云何が不遠離と名くるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は二相を以て布施等を行せず」と。復問ふ、「云何が二相を以てせざるや」と。佛答へ

【三】 第一五問、須菩提が、一念の中に六度等を行す諸の功德を問へる理由如何。

たまはく、「菩薩は般若波羅蜜(多)を行する時、檀波羅蜜(多)を具足せんと欲し、布施の一念の中に於て一切の善法を攝す」と。先に説くが如し。何等か是れ一念なる。所謂菩薩は無生法忍を得て、一切の

煩惱を斷じ、諸の憶想分別を除き、無漏心の中に安住して一切を布施す。無漏心は是れ無相の心なり。菩薩は是の心中に住して、誰か施し、誰か受け、誰の物なるかを見ざるなり。一切の相を離るる心もて布施し、一法あることを見ず、乃至阿耨多羅三藐三菩提すら尚ほ見ざるなり、如何に況んや餘法をや、是を不二の相と名く。乃至八十隨形好も亦た是の如し。須菩提は更に異事を以て是の義を問ふ、「世尊よ、諸法は無相無作無起ならば、云何が能く檀波羅蜜〔多〕等、乃至八十隨形好を具足するや」と。佛答へたまはく、「菩薩は無相無作の法中に相を取らざるが故に、無障礙の心を以て布施し、食を須むるには食を與ふる等、經中に已に委悉せり。又先の品中にも、亦た廣く説けり。是の故に更に解せず。無漏無相の六波羅蜜〔多〕に二種あり。一には、無生法忍を得たる菩薩の所行、二には未だ無生法忍を得ざる菩薩の所行となり。無生法忍を得たる菩薩の所行は、此の中に説く所の如し。何となれば、無相無漏の心中に住して、布施等の諸法を行するが故なり。

問うて曰く、(一九) 生身の菩薩は、貪惜未だ除かざるが故に、割截すれば甚だ痛む、是れ則ち難しと爲す。無生法忍を得たる菩薩は、化人の所作の如く、割截するも痛なし、何の恩分かあらん。答へて曰く、無生法忍を得たる菩薩は是の六波羅蜜〔多〕を行するを難しと爲す。所以は何んとなれば、無生

【一八】 縮藏には、心を相に作れり。  
 【一九】 第一六問、生身の菩薩は貪惜未だ除かざるが故に、割截すれば甚だ痛む、是れ則ち難しと爲す。無生法忍を得たる菩薩は割截するも痛なし、何の恩分あらんや。

法忍寂滅の心を得れば、應に涅槃の樂を受くべければなり。此の寂滅の樂を捨てて、衆生の中に入り、種種身を受け、或は賤人となり、或は畜生等と爲る。是れ即ち難しと爲す。生身の菩薩は貪愛未だ除かず、佛身に著するが故に、身を以て布施す。是を希望にして、清淨の施にあらずと爲す。是の故に如かざるなり。

復次に、無漏無相の六波羅蜜(多)を行じ、是の時能く有漏有相を具足すれば、則ち具足すること能はず、是の故に能く具足するものは大恩分あるなり。

# 卷の第八十八

## 六喻品第七十七を釋す。

釋

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が無想・不可分別・自相空なる諸法の中に六波羅蜜(多)尸羅波羅蜜(多)・廣提波羅蜜(多)・毗梨耶波羅蜜(多)・禪(那)波羅蜜(多)・般若波羅蜜(多)を具足し修するや。世尊よ、云何が無異法の中に而も分別して異相を説くや。世尊よ、云何が般若波羅蜜(多)は壇・尸羅・廣提・精進・禪を攝するや。世尊よ、云何が異相の法を行じ、一相の道を以て得果するや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住す。是の中に住して布施を行じ、戒を持ち、忍辱を修し、精進を勤め、禪定に入り、智慧を修す。是の五陰は實に夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如し。五陰は夢の如く、無相なり、乃至化の如く無相なりと知る。何となれば夢は自性無く、響影焰幻化皆自性なし。若し法に自性なければ、是の法は無相なり、若し無相なれば、是の法は一相、所謂る無相なればなり。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、菩薩の布施は無相なり、施者は無相なり、受者も無相なりと。能く是の如く布施を知るは、是れ能く檀(那)波羅蜜(多)を具足し、乃至能く般若波羅蜜(多)を是足し、能く四念處八聖道分を是足し、能く内空乃至無法有法空を是足し、能く空三昧無相無作三昧を是足し

【一】此の品には、諸法は空にして無相なるも、能く諸の波羅蜜多を具足する旨を明す。異本には品名を、或は「夢化六度品」又は「夢幻品」とせり。

能く八背捨・九次第定・五神通・五百陀羅尼門を是足し、能く佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法を是足するなり。是の菩薩は、是の報得の無漏法の中に住し、飛んで東方世量の國土に到り、諸佛に衣服飲食を供養し、乃至其の所須に隨つて而して之を供養し、亦衆生を利益するに、布施を以て攝すべき者は、布施をもつて之を攝し、持戒を以て攝すべき者は、教へて持戒せしめ、忍辱・精進・禪定・智慧を以て攝すべき者は、教へて忍辱・精進・禪定・智慧ならしめて是を攝取し、乃至種種の善法を以て攝すべき者は、種種の善法を以て之を攝取す。是の菩薩は、是の一切の善法を成就して、世間身を受け、世間生死の汙す所とならず、衆生の爲めの故に、天上人中に於いて尊貴富樂を受け、是の尊貴富樂を以て衆生を攝取す。是の菩薩は、一切法の無相なることを知るが故に、須陀洹果を知るも亦中に住せず、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を知るも亦中に住せず、辟支佛道を知るも亦中に住せざるなり。何となれば、是の菩薩は一切種智を用て一切法を知り已りて、當に一切種智を得べく、聲聞辟支佛と共にならざればなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は一切法の無相なることを知り已りて、六波羅蜜(多)の無相なることを知り、乃至一切佛法の無相なることを知る。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住し、能く無相尸羅波羅蜜(多)を具足し、是の戒は、不飲・不啖・不離・不著にして、聖人の誦する所の無漏戒なり、八聖道分に入る。是の戒中に住して、一切の戒、所謂る名字戒、自然戒、律儀戒、作戒、無作戒、威儀戒、非威儀戒を持す。是の菩薩摩訶薩は、諸戒を成就して、此の願を作さず、我れ是の戒の因縁を以つての故に、刹利の大臣、勝波羅門の大臣、居士の大家、若くは小王家、若くは輪轉聖王家、若くは四天王天處に生じ、若くは三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天に生ぜん。是の願をなさず、我れ持戒の因縁の故に、當に須陀洹果、斯陀含果、阿羅漢果、辟支佛道を得べし。何となれば一切の法無相、所謂る一相無相の法は、能く無相の法を得ず、有相の法は能く有相の法を得ず、無相の法は能く有相の法を

得ず、有相の法は能く無相の法を得ざればなり。是の如く須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、能く無相尸羅波羅蜜を是足し而して菩薩の位に入り、菩薩の位に入り已りて、無生法忍を得、道種智を行じて報徳の五神通を得、五百陀羅尼門に住して四無礙智を得。一佛國より一佛國に到りて諸佛を供養し、衆生を成就し、佛國土を淨む、五道の中に入ると雖も、生死の業報染汙すること能はざるなり。須菩提よ、譬へば、轉輪聖王の化するに、坐臥行住すと雖も、來處を見ず、去處を見ず、住處、坐處、臥處を見ずして、而して能く衆生を利益するも、亦た衆生を得ざるが如し。菩薩も亦是の如し。須菩提よ、譬へば、須扇多佛の阿耨多羅三藐三菩提を得、三乘の爲めに法輪を輪じて、菩薩の記を得ると有ることなきものを化し、作佛し已りて、身壽命を捨てて無餘涅槃に入るが如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦是の如く、般若波羅蜜(多)を行する時、能く尸羅波羅蜜(多)を具足す。尸羅波羅蜜(多)を具足し已りて、一切の善法を攝す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住して、無相屬提波羅蜜(多)を具足す。「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は無相屬提波羅蜜(多)を具足するや。」須菩提よ、菩薩摩訶薩は二忍の中に住して、能く屬提波羅蜜(多)を具足す。何等をか二忍となす。生忍と法忍となり。初發意より乃至道場に坐するまで、其の中間に於いて、若し一切の衆生來りて、罵詈譌惡語、或は瓦石刀杖を以て、是の菩薩に加へんに、是の菩薩は屬提波羅蜜(多)を具足せんと欲するが故に、乃至一念の惡をも生ぜずして、是の菩薩は是の如く思惟す、我を罵る者は誰ぞ、我を割く者は誰ぞ、惡言を以て我に加ふる者は誰ぞ、瓦石刀杖を以て我を割く者は誰ぞと。何となれば、是の菩薩は一切法に於て、無相忍を得たるが故に、云何が是の念を作さん。是の人我を罵り、我を害すと。若し菩薩摩訶薩、是の如く行すれば、能く屬提波羅蜜(多)を具足し。是の屬提波羅蜜(多)を具足するが故に無生法忍を得。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が無生法忍なる、是の忍何をか斷する所とし、何をか知る所とするや」と。佛



須菩提に告げたまはく、「法忍を得、乃至少許の不善法を生ぜず、是の故に無生忍と名く。一切の菩薩の斷する所の煩惱の盡る、是を斷と名け、智慧を用て一切法の不生なることを知る、是を知と名くと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の聲聞辟支佛の無生法忍と菩薩摩訶薩の無生法忍とは何等の異か有る」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸の須陀洹の若くは智、若くは斷、是を菩薩の忍と名け、斷陀舍の若くは智、若くは斷、是を菩薩の忍と名け、阿羅漢の若くは智、若くは斷、是を菩薩の忍と名け、辟支佛の若くは智、若くは斷、是を菩薩の忍と名く。是れを異と爲す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の忍を成就して、一切の聲聞辟支佛に勝れ、是の報得の無生忍中に住して菩薩道を行じ、能く道種智を具足す。道種智を具足するが故に、常に三十七の助道法乃至空無相無作三昧を離れず、五神通を離れず、五神通を離れざるが故に、能く衆生を成就し、佛國土を淨む。衆生を成就し、佛國土を淨めりて、當に一切種智を得べし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、無相の屬提波羅蜜(多)を具足す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相の五陰の夢の如く、響きの如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住して、身精進心精進を行す。身精進を以ての故に神通を起し、神通を起すが故に、十方世界に到りて、諸佛を供養し、衆生を饒益す。身精進力を以て衆生を教化して三乘に住せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、能く無相の毗梨耶波羅蜜(多)を具足す、是の菩薩は心精進聖無漏精進を以て八聖道分中に入り、能く毗梨耶波羅蜜(多)を具足す。是の毗梨耶波羅蜜(多)は皆一切の善法、所謂の四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を攝す。是の中に菩薩は是の法を行じて、當に一切種智を具足すべし。一切種智を具足し已りて、一切煩惱の習を斷じ、三十二相身を具足滿じ、無等無量之光明を放つ、光明を放る已りて、三たび十二行法輪を轉ず、法輪を轉するが故に、三千大千世界は、六種に震動し、光明徧照

く三千大千世界を照らし三千大千世界中の衆生は、説法の聲を聞き、皆三乗の法を以て、而して度脱するを得。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は毗梨耶波羅蜜(多)の中に住して、能く大に饒益し、及び能く一切種智を具足す。

復次に、須菩提よ、菩薩は無相の五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住して、

能く禪(那)波羅蜜(多)を具足す。「世尊よ、云何が菩薩は五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住して、能く禪(那)波羅蜜(多)を具足するや。」須菩提よ、菩薩摩訶薩は初禪に入り、乃至第四禪に入り、慈悲

喜捨に入り、無量心に入り、無邊虚空處に入り、乃至非有想非無想處に入り、空三昧無相無作三昧に入り、如電光三昧に入り、如金剛三昧に入り、璽正三昧に入り、諸佛の三昧を除いて、諸餘の三昧、若くは聲聞辟支佛と共に三昧に入り、皆證

し皆入るも亦三昧を受けざるなり。何となれば、是の菩薩は、是の三昧の無相無所有性なることを知ればなり。云何が無相法に無相法味を受け、無所有法に無所有法味を受けん。若し味を受けざれば、即ち禪定力に隨つて、若くは色界、若くは無

色界を生ぜず。何となれば、是の菩薩は是の二界を見ず、亦入禪の者をも見ず、亦是の禪をも見ず、亦是の法を用いて入禪するものをも見ず、入禪の處をも見ざればなり。若し是の法を得ざれば、爾の時、菩薩は即ち能く無相禪(那)波羅蜜(多)を具

足す。菩薩は是の禪(那)波羅蜜(多)を用て、能く聲聞辟支佛地を過ぐし。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩は無相の禪(那)波羅蜜(多)を具足するが故に、能く聲聞辟支佛地を過ぐるや。」佛、須菩提に告げたまはく、「是の菩薩は能く内空を學し、能く外空を學し、乃至能く無法空を學し、是の諸

空に於て法の住すべき處なし。若くは須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、乃至一切種智、是の諸法の空も亦た空なり。

菩薩摩訶薩は、是の如く、諸法空を行じて、能く菩薩位に入る。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩の位なるか。云何が位にあらざるや。」須菩提よ、一切の有所得は是れ菩薩の位に非ず、一切の無所得は、是れ菩薩の位

なり。「世尊よ、何等か是れ有所得とし、何等か是れ無所得なるや」。「須菩提よ、色是れ有所得、受想行識是れ有所得、眼耳鼻舌身、乃至一切種智有所得なるは、是れ菩薩の位にあらず。須菩提よ、菩薩の位とは、是の諸法は示すべからず、説くべからざるなり。何等の法をか示すべからず、説くべからずとなす。若くは色乃至一切種智なり。何となれば、須菩提よ、色の性は示すべからず、説くべからず、乃至一切種智の性は、是れ示すべからず、説くべからざればなり。須菩提よ、是の如きを菩薩の位と名く。是の菩薩は入位中に、一切の禪定三昧具足するも、尙ほ禪定三昧に隨つて生ぜず、云何に況んや、嫉怒癡に住し、中に於いて罪業を起して生ぜんや。菩薩は只た幻の如き、法中に住して衆生を饑益するも、亦衆生を得ず、亦た幻を得ず。若し得る所なければ、是の時に能く衆生を成就し、佛國土を淨む。是の如く、須菩提よ、是れを菩薩の無相禪(那)波羅蜜(多)を具足し、乃至能く法輪を轉ずと名く。所謂るふかぞ得る法輪なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて、一切法を夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如しと知る。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何が一切法を夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如しと知るや」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時夢を見ず、夢を見る者を見ず、響を見ず、響を見る者を見ず、影を見ず、影を見る者を見ず、焰を見ず、焰を見る者を見ず、幻を見ず、幻を見る者を見ず、化を見ず、化を見る者を見ず。何となれば、是の夢響影焰幻化は、是れ凡夫愚人の顛倒の法なるが故なり。阿羅漢は夢を見ず、夢を見る者を見ず、乃至化を見ず、化を見る者を見ず、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛も亦夢を見ず、亦夢を見る者を見ず、乃至化を見ず、化を見る者を見ず。何となれば、一切の法は無所有の性にして不生不定なればなり。若し法、無所有の性にして不生不定ならば、菩薩摩訶薩は、當に云何が般若波羅蜜(多)を行じ、是の中に生相定相を取らん。是の處は然らず。何となれば若し諸法にして、少多も性有り、生有り、定あらば、般若波羅蜜(多)と名けざればなり。是の如く須菩提

よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて、色に著せず、乃至識に著せず、欲色無色界に著せず、諸禪解脫三昧に著せず、四念處乃至八聖道分に著せず、空三昧無相無作三昧に著せず、植(那)波羅蜜(多)、屠提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪(那)波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)に著せず、著せざるが故に、能く菩薩の初地を具足し、初地の中に於ても亦著を生ぜざるなり。何となれば、是の菩薩は是の地を得ず。云何が著せん。乃至十地も亦た是の如し。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行ずるも、亦般若波羅蜜(多)を得ず、若し般若波羅蜜(多)を行ずる時、般若波羅蜜(多)を得ざれば、是の時に一切法を見ず、皆般若波羅蜜(多)の中に入るも、亦是の法を得ず、何となれば、是の諸法と般若波羅蜜(多)とは無二無別なればなり。何を以ての故に、諸法は如法性實際に入るが故に、分別する事なければなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法相なく分別なければ、云何が是れ善、是れ不善、是れ有漏、是れ無漏、是れ世間、是れ出世間、是れ有爲、是れ無爲なりと説かんと。「須菩提よ、汝が心に於いて如何。諸法實相の中に法ありて是れ善、是れ不善、乃至是れ有爲、是れ無爲、是れ須陀洹果、斯陀含果、乃至阿羅漢果、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと説くべきや不や」と。「世尊よ、説くべからざるなり」と。「須菩提よ、是の因縁を以ての故に、當に知るべし、一切法は、無相、無分別、無生、無定にして、示すべからざることな。須菩提よ、我れ本菩薩道を行ぜし時も、亦た法性の、若くは色、若くは受想行識、乃至若くは有爲、須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提の得べきものあることなし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じて、初發意より乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、應に善く諸の法性を學すべし。善く諸の法性を學するが故に、是を阿耨多羅三藐三菩提と名く。是の道を行じて、能く六波羅蜜を具足し、衆生を成就し、佛國土を淨め、此の法中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得、三乘の法を以て衆生を度脱するも亦た三乘に著せず、是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相の法を以て、當に般若波羅蜜(多)を學すべし」と。

論

問うて曰く、須菩提、佛に問ふ、「若し諸法は無相無分別なれば、云何が差別して、六波羅蜜

蜜「多」を説くや」と。佛還た答へたまはく、「菩薩は是の夢の如き五衆の中に住して、能く六波羅蜜

「多」を具足す」と。須菩提は空を以つて問ひ、佛も還た空を以つて答へたまへり。此の問答は云何が

別異を得るや。答へて曰く、須菩提は問ふ、「若し諸法空なれば、今に眼に見る菩薩は六波羅蜜「多」

を行じて作佛するや」と。佛答へたまはく、「凡夫は實智慧を遠ざけて相を取り、菩薩は六波羅蜜「多」

を行じて作佛すと見る」と。是れ空法に著するが故に難す。菩薩は五衆に住すと雖も、五衆は如幻、如夢

の空法の中に住して、亦た空心を以つて布施を行す。是の故に、諸法の具

足を行すと雖も、六波羅蜜「多」は空を妨げず。譬へば、雲霧の遠く見れば

則ち見え、之れに近づけば則ち所見なきが如し。凡夫も亦た是の如く、實

相を遠ざかるが故に諸佛を見、菩薩は實相に近づくが故に皆空なりと見る、是の故に妨げず。妨げざ

るが故に、能く檀波羅蜜「多」の一念の中に於て、具足して諸の善法を行す。是の人には常に無漏の清淨

波羅蜜「多」を修するが故に、身を轉じて還つて無漏の波羅蜜「多」を報得す。報得とは、更に修行せず

自然にして得るに名づく。譬へば、報得の眼根は自然に能く色を見るが如し。是の報得の無漏波羅蜜

「多」を得已りて、能く一身を變じて、無量阿僧祇身を作り、十方の佛の所に於いて、具足して諸佛の

甚深の法を聞き、十方の衆生を度脱して漸漸に佛世界を淨め、願に隨つて作佛するなり。

【二】第一問、須菩提の問も佛の答も俱に空なり、云何が兩者の異を別つことを得るか。

問うて曰はく、<sup>三</sup>若し諸法空にして無相ならば、云何が分別せん。云何が檀波羅蜜(多)等を行ずることを知るを得て、各各餘の波羅蜜(多)を具足するや。答へて曰はく、行者は自ら分別せずと雖も、而も諸佛菩薩は其の檀を行じ、尸を行じ、諸行を具足するを説きたまへり。聲聞の人の如きは、見諦無漏、無相、無分別の法中に入り、餘の聖人も亦た其の所入の法を數へ、諸法實相、所謂の無相の相を知る、是を正見と名く。正見の力を得已るを名けて正行と爲す。是の時、衆生を惱さず、諸惡を爲さざる、是れを正語正業正命と名く。是の時、所説なく、亦所造なしと雖も、而も名けて正語正業と爲す。所以は何んとなれば、是を深妙の正語正業と名く。所謂の畢竟して、衆生を惱さざるが故なり。是の中に發心して造作する所ある、是を精進と名く。念を緣中に繋く、此を正念と名く。心を一處に攝す、是を正定と名く。身受心法、實相を見る、是を四念處と名く。乃至七覺意も亦た是の如し。四念處の中に於いても、亦た八聖道の中の諸聖人を數と爲すが如し。菩薩も亦た是の如く、是の無相、檀波羅蜜(多)を行じて、能く尸羅波羅蜜(多)等の諸善法を具足す。檀波羅蜜(多)、尸波羅蜜(多)に、諸の善法を攝することも亦た是の如し。

問うて曰はく、<sup>四</sup>上品の中に一波羅蜜(多)を以て諸波羅蜜(多)を具すると、此の無相に一切法を攝

【三】 第二問、若し諸法空ならば云何が檀波羅蜜(多)等を行ずることを知るを得て、各各餘の波羅蜜多を具するや。

【四】 第三問、上品の中に於ける、一波羅蜜多を以て諸波羅蜜多を具すると、此の品に於ける、無相に一切法を攝すると何の差別ありや。

せると何の差別ありや。答へて曰はく、上には一念の中を以て、能く諸波羅蜜〔多〕を具し、此には諸法は空にして無相なりと雖も、能く諸波羅蜜〔多〕を具するを以て異となす。

三 攝品第七十八の上を釋す。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くにして、實事あることなく、無所有性自性空なれば、云何が是れ善法、是れ不善法、是れ有爲法、是れ無漏法なりと分別し、是の法能く須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得、能く辟支佛道を得、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛須菩提に告げたまはく、「凡夫愚人は夢を得、夢を見る者を得、乃至化を得、化を見る者を得、身に意に善業・不善業・無記業を起し、福業若くは罪業を起し、不動業を作す。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜〔多〕を行じ、二空の中に住し、畢竟空無始空もて、衆生の爲に説法して、是の言を作す。諸の衆生よ、色は是れ空にして所有なし、受想行識は空にして所有なし。色は是れ夢なり、受想行識は是れ夢なり。十二入、十八界は是れ夢なり。色は是れ響なり、是れ影なり、是れ焰なり、是れ幻なり、是れ化なり、受想行識も亦た是の如し、十二入、十八界も是れ夢なり、是れ響なり、是れ影なり、是れ焰なり、是れ幻なり、是れ化なり。是の中に、陰・入・界なく、夢なく、亦た夢を見る者なく、響なく、亦た響を見る者なく、影なく、影を見る者なく、焰なく、焰を見る者なく、幻なく、幻を見る者なく、化なく、化を見る者もなく、一切法は根本實性なく所有なし、汝等は無陰の中に陰有りと見、無入に入ありと見、無界に界ありと見る。此の一切の法は和合因縁より生じ、顛倒の心を以て起り、業の果

【五】此の品には、空にして差を修する旨を明す。品名を或は「奇特品」に作るあり。

報に屬す。汝等何を以ての故に、諸法空、無根本の中に於いて、而も根本相を取るや。是の時、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜〔多〕を行じ、方便力を以ての故に、檀法の中より、衆生を拔出して、教へて檀波羅蜜〔多〕を行ぜしめ、是の布施を以て、大福報を得、大福報より拔出して、教へて持戒せしめ、持戒の功徳を以て、天上尊貴の處に生じ、復た拔出して初禪に住せしむ。初禪の功徳を以て梵天の處に生ず。二禪、三禪、四禪、無邊空處、識處、無所有處、非有想非無想處も亦た是の如し。衆生の行する是の布施及び布施の果報、持戒及び持戒の果報、禪定及び禪定の果報より、種種の因縁も亦た是の如し。衆及び涅槃道の中に安置す。謂ゆる、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空解脫門、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法なり。衆生をして安隱に聖無漏法・無色無形・無對法の中に住せしめ、須陀洹果を得べき者あらば、安隱教化して、須陀洹果に住せしめ、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得べき者ならば、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道に住せしめ、阿耨多羅三藐三菩提の中に住せしむ。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は、甚だ希有にして及び難し、能く是の深般若波羅蜜〔多〕を行じ、諸法は無所有性、畢竟空、無始空にして、而も諸法を、是れ善、是れ不善、是れ有漏、是れ無漏、乃至是れ有爲、是れ無爲なりと分別す。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸の菩薩摩訶薩は、甚だ希有にして及び難し、能く是の深般若波羅蜜〔多〕を行じ、諸法は無所有性、畢竟空、無始空なるに、而も諸法を分別す。

須菩提よ、汝等若し是の菩薩摩訶薩の希有にして、及び難き法を知らば、即ち一切の聲聞辟支佛も報ゆる能はざるを知る、如何に況んや餘人をや」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等をか是れ菩薩摩訶薩の希有にして、及び難き法にして、諸の聲聞辟支佛の有るとなき所となすや。」佛、須菩提に告げたまはく、「一心に諦聽せよ、菩薩摩訶薩ありて、般



若波羅蜜(多)を行じ、報得の六波羅蜜(多)中に住し、及び報得の五神通・三十七助道法に住し、諸の陀羅尼、諸の無礙智に住して、十方の國土に至り、布施を以て度すべき者は、布施を以て之を攝し、持戒を以て度すべき者は、持戒を以て是を攝し、忍辱・精進・禪定・智慧を以て度すべき者は、其の所應に隨つて而して之を攝取し、初禪を以て度すべき者は、初禪を以て之を攝し、二禪、三禪、四禪、無邊空處、無邊識處、無所有處、非有想非無想處を以て度すべき者は、其の所應に隨つて之を攝取し、慈悲喜捨心を以て度すべき者は、慈悲喜捨心を以て、而して是れを攝取し、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空三昧、無相無作三昧を以て度すべき者は、其の所應に隨つて、而して之を攝取す」と。  
「世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何が布施を以て、衆生を饒益するや。」「須菩提よ、菩薩は般若波羅蜜(多)を行する時、其の所に隨つて、布施し、飯食、衣服、車馬、香華、瓔珞、種種の所須、盡く是れを給與す。若くは供養するに、佛、辟支佛、阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹等、等しうして異なることなく、若くは施すに正道中に入れる人、及び凡人、下禽獸に至るまで、皆分別することなく第一に布施す。何となれば、一切法は不異分別なるが故なり。是の菩薩は異なることなく、分別することなく、布施し終りて、當に無分別法の報、所謂の一切種智を得べし。須菩提よ、菩薩摩訶薩、乞丐するものを見れば、我れ是の心を生ず。佛は是れ福田なり、我れ當に供養すべし、禽獸は福田にあらざれば供養すべからずと。是れ菩薩の法にあらず。何となれば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提心を發して此の念を爲さず、是の衆生は應に布施を以て饒益すべく、是は是の衆生に布施すべからず。布施の因縁の故に、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家に生じ、乃至是の布施の因縁を以て、三乘法を以て是れを度して、無餘涅槃に入らしむべしと。若し衆生來りて菩薩に隨つて乞はんに、亦異心を生じて、是れに與ふべく、是れに與ふべからずと分別せず。何となれば、是の菩薩は是の衆生の爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發せばなり。若し分別し簡擇せば、便ち諸佛、菩薩、辟支佛、學、無學人、一切世間の天、及び人の呵責する所

に墮す。誰か請はん、汝一切衆生を救ひ、汝一切衆生の舎、一切衆生の護、一切衆生の依となりて、而も與ふべきと與ふべからざるとを分別し簡擇せよと。

復次に、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、若くは人、若くは非人來りて、菩薩の身體肢節を求乞せんと欲するに、是の時、二心を生ずべからず。若くは與へ、若くは與へずと。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、衆生の爲めの故に身を受け、衆生來りて取る、何ぞ與へざるべけんや。我れ衆生を饒益するを以ての故に、是の身を受く、衆生乞はざるも自らこれと與ふべし、何に況はんや、乞はれて而も與へざらんや。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、應に是の如く學すべし。

復次に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩乞ふ者あるを見れば、應に是の念を生ずべし、是の中に誰か與へ、誰か受け、施す所何物なるか。是れ一切法の自性は皆得べからず、畢竟空なるを以ての故なり。空想法は與ふるなく、奪ふなし。何となれば畢竟空の故に、内空の故に、外空、内外空、大空、第一義空、自相空の故なり。是の諸空の故に住して依施せば、是の時に檀波羅蜜(多)を具足す。檀波羅蜜(多)を具足するが故に、若くは内外法を斷する時に是の念を爲す、我を截るものは誰か、我を割く者は誰かと。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て、東方如恆河沙等の諸の菩薩摩訶薩を見るに、大地獄に入りて火を滅し、湯を冷かならしめ、三事を以て教化す、一には神通力、二には知他心、三には說法なり。是の菩薩は神通力を以て、大地獄の火を滅し湯を冷かならしめ、知他心を以て慈悲喜捨し、意に隨つて說法す。是の衆生は菩薩に於いて清淨心を生じ、地獄より脱するを得て、漸く三乘法を以て苦際を盡すことを得。南西北方四維上下も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て、十方世界を觀じ、如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を觀るに、諸佛の爲に給使し、諸佛に供給し、隨意に愛樂し尊敬し、若くは諸佛の所説盡く受持し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を終に忘失せず。復次に

に、須菩提よ、我れ佛眼を以て、十方如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を觀するに、畜生の爲めの故に、其の壽命を捨て、身體を割截して諸方に分散す。諸の衆生ありて、是の諸の菩薩摩訶薩の肉を食ふ者は、皆菩薩を愛敬す。愛敬するを以ての故に、即ち畜生道を離るるを得て諸佛に値遇し、佛の説法を聞いて説の如く修行し、漸く三乘聲聞辟支佛法を以て、無餘涅槃に於て而して般涅槃す。是の如く、須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩の益する所甚だ多く、衆生を教化して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、説の如く修行し、乃至無餘涅槃に於て而して般涅槃す。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て十方如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を見るに、諸の餓鬼の飢渴の苦を除く。是の諸の餓鬼は皆菩薩を愛敬す。愛敬するを以ての故に、餓鬼道を離るることを得て諸佛に値遇し、諸佛の説法を聞いて説の如く修行し、漸く三乘聲聞辟支佛法を以て而して般涅槃し、乃至無餘涅槃す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生を度せんが爲の故に大悲悲心を行す。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て見るに、諸の菩薩摩訶薩は、四天王天上に在りて説法し、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天上に在りて説法す。諸天は菩薩の説法を聞いて、漸く三乘を以て、而して滅度することを得。須菩提よ、是の諸天衆の中に五欲に耽著する者あれば、是の菩薩は火起り、其の宮殿を燒くことを示現し、而して爲めに説法して、是の言を作す。諸天よ、一切有爲の法は悉く皆無常なり、誰か安らかなる者を得んと。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て十方世界を觀じ、如恆河沙等の國土の中を見るに、諸の梵天は邪見に著す。諸の菩薩摩訶薩は、數へて邪見を遠離せしめて、是の言を爲す、汝等云何が空相虛妄の諸法中に於いて而も邪見を生ずると。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は大慈悲に住して、衆生の爲めに説法す。須菩提よ、是を諸菩薩の希有にして、及び難きの法と爲す。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て十方世界如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を觀するに、四事を以て衆生を攝取す。何等をか四となす。布施と愛語と利益と同事となり。云何が菩薩は布施を以て衆生を攝する。須菩提よ、菩薩は二種の施を以て衆生を攝取す、財施と法施となり。何等の財施か衆生を攝する。須菩提よ、菩薩摩訶薩は金銀琉璃頗梨眞珠珂貝珊瑚等の諸の寶物を以てし、或は飲食・衣服・臥具・房舍・燈燭・華香・瓔珞・若くは男、若くは女、若くは牛羊象馬車乘を以てし、若くは己身を以て衆生に給施し、衆生に語りて曰く、「汝等若し所須有らば、各來りてこれを取れ、己の物を取ることが如くにして疑難を得る事なかれ」と。此の佛は施し已りて、教へて三歸依(即ち)歸依佛、歸依法、歸依僧せしむ。或は教へて五戒を受けしめ、或は教へて一日戒(を受け)しむ。或は教へて初禪(を)あらしめ、乃至教へて非有想非無想定(を)あらしめ、或は教へて慈悲喜捨(を)あらしめ、或は教へて念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天(を)あらしめ、或は教へて不淨觀(を)あらしめ、或は安那般那觀、或は相、或は觸(を)あらしめ、或は教へて四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空三昧、無相無作三昧、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、三十二相、八十隨形好(を)あらしめ、或は教へて須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果(を)あらしめ、或は教へて辟支佛道(を)あらしめ、或は教へて阿耨多羅三藐三菩提(を)あらしむ。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以て衆生に教へ、財施し已りて、復教へて無上安穩涅槃を得せしむ。須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を希有にして及び難きの法と名く。

須菩提、菩薩は云何が法施を以て衆生を攝取する。須菩提よ、法施に二種あり、一には世間、二には出世間なり。何等をか世間の法施となし、世間法を敷演し顯示する。所謂の不淨觀、安那般那念、四禪、四無量心、四無色定、是の如き等の世間法、及び諸餘の凡夫と共に行ずる所の法、是を世間の法施と名く。是の菩薩は是の如きの世間法を施し已りて、種種の因縁を以て、教化して世間法を遠離せしむ。世間法を遠離し已りて、方便力を以て、聖無漏法及び聖無漏法果を得しむ。何等を

か是れ聖無漏法とし、何等をか是れ聖無漏法果なり爲す。聖無漏法とは三十七助道法三解脱門なり。聖無漏法果とは須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の聖無漏法は須陀洹果中の智慧、乃至阿羅漢果中の智慧、辟支佛道中の智慧、三十七助道法中の智慧、六波羅蜜(多)中の智慧、乃至大慈大悲中の智慧、是の如き等の一切の法、若くは世間、若くは出世間の智慧、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲、是の法中の一切の種智、是を菩薩摩訶薩の聖無漏法と名く。何等をか聖無漏法果と爲す。一切煩惱の習を斷する、是を聖無漏法果と名く。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は一切種智を得るや不や」。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は一切種智を得と」。須菩提言さく、「菩薩と佛とは何の異りあるや」。佛の言はく、「異りあり。菩薩摩訶薩は一切種智を得たる、是を名けて佛となす。所以は何んとなれば、菩薩心と佛心とは異りあるとなければなり。菩薩は是の一切種智の中に住して、一切法に於て照明せざるなし。是を菩薩摩訶薩の世間の法施と名く。須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生を教へて世間法を得しめ、方便力を以て教へて出世間法を得しむ。須菩提よ、何等をか是れ菩提の出世間法と爲す。凡夫法と共に同ぜざる、所謂の四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脱門、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、三十二相、八十隨形好、五百陀羅尼門、是を出世間の法と名く。

須菩提よ、云何が四念處と爲す。菩薩摩訶薩は、内身循身觀を觀じ、外身循身觀を觀じ、内外身循身觀を觀じ、勤めて精進し、一身に智慧觀を以てし、身の集因縁生なることを觀じ、身の滅を觀じ、身の集生滅を觀じて、是の道を行するに所依なく、世間に於て所受なし、受心法念處も亦是の如し。須菩提よ、云何が四正勤と爲す。未生の惡不善法を生ぜざらしめんが爲めの故に勤めて生欲精進す。已生の惡不善法を斷ぜんが爲めの故に、勤めて生欲精進す。未生の善法を生ぜしめんが爲

めの故に、勤めて生欲精進す。已生の諸の善法を増長し、修し、具足せんが爲めの故に、勤めて生欲精進す。是れを四正勤となす。須菩提よ、云何が四如意足と爲す。欲三昧をもて斷行して、初めて如意足を成就し、精進三昧、心三昧、思惟三昧をもて斷行して如意足を成就す。云何が五根と爲す。信根、精進根、念根、定根、慧根なり。云何が五力と爲す。信力、精進力、念力、定力、慧力なり。云何が七覺分と爲す。念覺分、擇法覺分、精進覺分、喜覺分、除息覺分、定覺分、捨覺分なり。云何が八聖道分と爲す。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。

云何が三昧となす。空三昧門、無相無作三昧門なり。云何が空三昧と爲す。空行無我行を以て心を攝す、是を空三昧と名く。云何が無相三昧と爲す。寂滅行離行を以て心を攝す、是れを無相三昧と爲す。云何が無作三昧と爲す。無常行、苦行を以て心を攝す、是れを無作三昧と名く。云何が八背捨と爲す。内に色相ありて外色を觀ず、是れ初背捨なり。内色相なく外色を觀ず、是れ二背者なり。淨背者はれ三背者なり。一切の色相を過ぎ、有對相を滅し、一切の異相を念ぜざるが故に、無邊虚空を觀じて、無邊虚空處に入り、乃至一切の非有想無想處を過ぎて、滅受想背者に入る、是を八背者と名く。云何が九次第定とする。行者、欲、惡、不善法を離れ、有覺有觀にして離生喜樂あり、禪初に入り、第二禪、第三禪、第四禪乃至非有想非無想處を過ぎて、滅受想定に入る、是を九次第定と名く。

云何が佛の十力と爲す。是處不是處を如實に知り、衆生の過去現在未來の諸行諸受法を知り、造業の處を知り、因縁を知り、報を知り、諸の禪定解脫三昧の垢淨分前相を如實に知り、他の衆生の諸根上下の相を知り、世間種種無数の性を知り、一切到道相を知り、種種の宿命を知り、一世乃至無量劫を如實に知り、他の衆生の種種の欲解を知り、天眼もて衆生の乃至善惡道に生ずるを見、漏盡くるが故に、無漏心解脫を如實に知る、是を佛の十力と爲す。云何が四無所畏と爲す。佛、誠言を爲したまはく、我は是れ一切正智人なりと。我は沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは亦餘衆有りて、實の如く是

の法を知らずと云ふも、乃至是の微畏相を見ず。是を以ての故に、我安穩を得、無所畏を得、聖主の所に安住し、大衆の中にありて師子吼を作し、能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは亦餘衆の實に轉ずる能はざるは、一の無畏なり。佛誠言を作したまはく、我は一切漏盡くと。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは梵、若くは魔、若くは亦餘衆ありて、實の如く是の漏盡きすと云ふも、乃至是の微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安穩を得、無所畏を得、聖主の所に安住し、大衆の中にありて師子吼を爲し、能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは梵、若くは魔、若くは亦餘衆の實に轉ずる能はざるは、二の無畏なり。佛誠言を作したまはく、我は障法を説くと。若くは波羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは餘衆有りて、實の如く是の法を得て、道を障へずと云ふも、乃至是の微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安穩を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて、師子吼を作し、能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復餘衆の實に轉ずる能はざるは、三の無畏なり。佛誠言を作したまはく、我が説く所の聖道は能く世間を出で、是の行に隨つて能く苦を盡すと。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、復た餘衆ありて、實の如く是の道を行するも、世間を出づること能はず、苦を盡すこと能はずと言ふも、乃至是の微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安穩を得、無所畏を得、聖主の所に安住し、大衆中にありて師子吼を作し、能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆の實に轉ずる能はざるは、四の無畏なり。

云何が四無礙と爲す。一には義無礙智、二には法無礙智、三には辭無礙智、四には樂説無礙智なり。云何が義無礙智と爲す。義に依る智慧、是れを義無礙智と爲す。云何が法無礙智と爲す。法に依る智慧、是れを法無礙智と爲す。云何が辭無礙智と爲す。辭に依る智慧、是れを辭無礙智と爲す。云何が樂説無礙智となす。樂説に依る智慧、是れを樂説無礙智と爲す。

云何が十八不共法と爲す。一には諸佛の身に失なく、二には目に失なく、三には念に失なく、四には異想なく、五には不定の心なく、六には不知已捨の心なく、七には欲滅するなく、八には精進滅するなく、九には念滅するなく、十には慧滅するなく、十一には解脫滅するなく、十二には解脫知見滅するなく、十三には一切の身業智慧に隨つて行じ、十四には一切の口業智慧に隨つて行じ、十五には一切の意業智慧に隨つて行じ、十六には智慧もて過去世を知るも無礙、十七には智慧もて未來世を知るも無礙、十八には智慧もて現在世を知るも無礙なり。云何が三十二相となす。一には足下安平立平にして畜底の如し。二には足下に干輻輪相を具足す。三には手足の指長きを餘人に勝る。四には四足柔軟にして餘の身分に勝る。五には足跟廣くして具足滿好なり。六には手足の指合し、縷網紗好餘人に勝る。七には足趺高平にして能く跟と相稱ふ。八には伊泥延鹿鬚纖好、伊泥鹿王の如し。九には平住して兩手掌を摩す。十には陰藏の相馬王象王の如し。十一には身は縱廣等しく、尼俱盧樹の如し。十二には一の孔より一毛生じ、色青く柔軟にして右旋す。十三には毛上向し、青色柔軟にして右旋す。十四には金色相其の色微妙にして鬪浮檀金に勝る。十五には身光の面一丈なり。十六には皮薄く細く滑かにして塵垢を受けず、蚊蚋を停めず。十七にた七處滿じ、兩足の下、兩手の中、兩肩の上、頂中、皆滿字相分明なり。十八には兩腋の下滿す。十九には上身師子の如し。二十には身廣く端直なり。二十一には肩圓好なり。二十二には四十齒あり。二十三には齒白く齊密にして根深し。二十四には四牙最も白くして大なり。二十五には方頬車師子の如し。二十六には味中に上味を得、咽中の二處津液流出す。二十七には舌大きく、輕薄にして、能く覆面して、耳髮の際に至る。二十八には梵音深遠にして、迦蘭頻の聲の如し。二十九には眼色金精の如し。三十には眼障半玉の如し。三十一には眉間の白毫相、輒白にして、兜羅面の如し。三十二には頂髻肉骨より成る。是の三十二相は佛身に成就し、光明徧く三千大千世界を照らす。若し廣く照らさんと欲すれば、即ち徧く十方無量阿僧祇の世界に滿ち、衆生の爲めの故に、丈光を受く。若し無量光を放てば、即ち日月時



節度敷なし。佛の音聲は徧く三千大千世界に滿ち、若し大聲を欲すれば、即ち十方世界阿僧祇の世界に滿つ。衆生の多少に隨つて音聲徧く至る。

論

問うて曰く、上來已に處處に諸法の性は空なりと説けり。云何が善不善ありと分別するや。須菩提は何を以てか後より已來、品品の中の義は異なるなきに、而も種種の名を作して問へるや。答へて曰く、是の事上に已に答へたり。

復次に、衆生は無始生死より已來、著心深くして解すると難きが故に、須菩提は復た是の重問を作せり。復次に、是の般若波羅蜜「多」、是の空の義を要説せんと欲するが故に數數問へり。

復次に、佛世に在す時は、衆生は利根にして悟り易し、佛の滅後五百年

の後、像法の中の衆生は、佛法に愛著し、著法の中に墮して、若し諸法皆空にして、夢の如く、幻の如くならば、何を以ての故に、善不善ありと言ふや。是を以ての故に、須菩提は未來の衆生の鈍根にして、解せざるを憐愍するが故に、重ねて世尊に問へるなり。若し諸法皆空なれば、云何が善不善等ありと分別せん。是の中に佛自ら因縁を説きたまはく、凡夫は顛倒の心の故に、法に於て皆顛倒の異見を爲し、乃至一法の是れ實なるを見ず。凡夫は夢中に於て夢に著して夢を得、夢を見る者も亦た夢中所見の事に著す。是の人若し罪福を信ぜざれば、三種の不善業を起す。若し罪福を信せば、三種の善

【六】 第四問、已に處處に諸法の性の空なるを説けり、然るを須菩提が種種の名を作して問へるは何故なるか。

業を起す、善と不善と不動となり。善とは欲界の中の善法、喜樂、果報に名け、不善とは憂愁苦惱の果報に名け、不動とは色無色界に生ずる因縁業に名く。菩薩は是の三種の業の皆是れ虚誑不實なるを知り、二空の中に住して、衆生の爲めに法を説く。畢竟空は諸法を破し、無始空は衆生の相を破し、中道に住して衆生の爲に法を説く。所謂五衆十二入十八界は皆是れ空にして、夢の如く、幻の如く、乃至化の如し。是の法の中には夢なく、亦た夢を見る者もなし。菩薩、衆生に語るらく、「汝等は空法に於て顛倒心の故に諸の著を生ず。經の中に廣く説くが如し。是の菩薩は方便力の故に顛倒の中より衆生を拔出し、顛倒の法を破する中に著す。譬へば、慳貪の如きは是れ顛倒なれば、布施を以て慳貪の法を破す。而も衆生は是の布施に著するが故に、爲めに布施の果報を無常にして實に空なりと説き、布施より衆生を拔出して、持戒せしめ、持戒及び持戒の果報の中より衆生を拔出し、衆生に語つて言はく、「天福盡る時は無常にして苦惱なり」と。衆生を拔出し、欲を離れて禪定を行せしむ。而も爲に禪定及び果報の虚誑不實を説き。能く人をして顛倒の中に墮せしめ、種種の因縁もて、爲めに布施持戒禪定の無常の過失を説き、涅槃に住せしめ、涅槃の方便を得せしむるが如し。所謂の四念處乃至十八不共法なり。衆生をして是の法の中に住せしむ。若し布施持戒禪定、是れ定實の法なれば、則ち應に遠離せしめず。布施持戒等の凡夫の法を破するが如く、此は即ち顛倒に因つて生ず。少時衆生を益すると雖も、久しければ則ち變異して能く苦惱を生ずるが故に、亦た教へて捨離せしむ。菩薩

は方便力の故に、先づ衆生をして罪を捨てしめ、持戒布施の福德を稱讚す。

復次に、爲めに持戒布施を説くも、亦未だ無常苦惱を免れず。然る後、爲めに諸法の空を説き、但だ實法を稱讚す。所謂る無餘涅槃なり。是の時、須菩提は甚だ希有なりと歡喜す。菩薩は能く是の如く、是の諸法實相を知る。所謂る畢竟空なり、而も衆生の爲に說法して無餘涅槃に至らしむ。佛の言はく、「是れ一希有の間なり。更に菩薩の希有の法を知らんと欲し、一切聲聞辟支佛は是の菩薩に報ふること能はず、何に況んや餘人をや」と。須菩提問ふ、「何等か是れ更に希有の法ありや」と。佛の答は經の中に説くが如し。

問うて曰く、(七) 經の中に教へて布施持戒禪定せしむると、今亦更に説くと、更に何等の異りあるや。答て曰く、先には生身の菩薩を説き、今は變化身を説く。先には一國土を説き、今は無量世界を説く。是の如き等の差別あり。

問うて曰く、(八) 若し菩薩、「佛は是れ福田、衆生は福田にあらず」と知らば、是れ菩薩の法に非らず、菩薩は何の力を以ての故に、能く佛をして畜生と等しからしむるや。答へて曰く、菩薩は般若波羅蜜(多)の力を以ての故に、一切法の中に畢竟空心を修す。是の故に一切法に於て分別なし。畜生

【七】 第五問、經中に教へて布施持戒禪定せしむると、今復た更に説くと、何等の相異ありや。

【八】 第六問、若し菩薩、「佛は是れ福田、衆生は是れ福田にあらず」と知らば、是れ菩薩の法にあらず。菩薩は何の力を以て、能く佛をして畜生と等しからしむるか。

の、五衆、十二入、十八界和合して、生るるを名けて畜生となすが如し。佛も亦是の如く、諸の善法の和合より、假りに名けて佛となす。若し人衆生を憐愍せば、無量の福德を得、佛に於て著心せば、諸惡の因縁を起して無量の罪を得。是の故に一切の法は畢竟空なりと知る。故に畜生を輕んぜず、佛に著心し貴ばざるなり。

復次に、諸法實相は、是れ一切法無相なり。是の無相の中に、是れ佛、是れ畜生なりと分別せず。若し分別せば、是れ即ち取相なり。是の故に等しく觀す。

復次に、菩薩に二法門あり、一には畢竟空法門、二には分別好惡法門なり。入空の法門には即ち等觀を得て、分別法門に入る。諸の阿羅漢、辟支佛、尚ほ佛に及ばず、何に況んや畜生をや。其の衆生を輕んじ、憐愍し布施せざるが爲めの故に不分別を教ゆるなり。

【九】菩薩の二法門。  
【一〇】第七問、菩薩の身は木石にあらず、云何が衆生來りて割截するに、而も異心を生ぜざるや。

問うて曰く、(一〇)菩薩の身は木石にあらず、云何が衆生來りて割截するに、而も異心を生ぜざるや。答へて曰く、有人は言ふ、「菩薩は久しく屬提波羅蜜(多)を修するが故に能く愁惱せず、屬提仙人の手足を截られて、血皆乳となるが如し」と。有人は言ふ、「菩薩無量世より來た、深く大慈悲心を生ずるが故に、割截ありと雖も亦愁憂せず。譬へば、草木に傾心あるとなきが如し」と。有人は言ふ、「菩薩は深く般若波羅蜜(多)を修し、身を轉じて般若波羅蜜(多)の果報を得。心を空しうするが故に了

了に空を知り、身を割截する時、心亦動せず、外、物に動せざるが如く、内も亦是の如し。般若の果報を得るが故に、諸法の中に於て分別する所なし」と。有人は言ふ、「是の菩薩は生死の身にあらず、是れ三界を出でたる法性生身なり。無漏の聖心もて果報の中に住するが故に、身木石の如し。而して能く割截するものを慈念す。是の菩薩は能く是の如き心を生ずるが故に、内外の法を劫奪割截する時、其の心動せず、是を菩薩の希有の法となす」と。

復次に、希有の法とは、經中に説くが如し。我れ佛眼を以て十方如恆河沙等の世界の中の菩薩を見、地獄の中に入り、火をして滅せしめ、湯をして冷かならしめ、三事を以て衆生を教化す。經中に説くが如し。

問うて曰く、(二)若し爾らば應に三惡道有るべからずや。答へて曰く、三惡道の衆生は無邊無量なり。菩薩は無邊世量なりと雖も、衆生は倍多く、無量の菩薩は、衆生の度すべき因縁に隨ふ。若し三惡道の中に於いて、餘の功德あれば、菩薩は即ち度す。重罪なれば、即ち菩薩を見ず。菩薩は一相にして分別心なきが故に、一一に衆生を求覓せず。譬へば、大赦に及ぶものは得脱し、及ばざる者は則ち蒙らざるが如し。

問うて曰く、(三)若し衆生、菩薩を割截し、或は其の肉を食はば、當に罪あるべし、云何が得度せんや。答へて曰く、此れ菩薩の本願なり。若し衆生ありて、我が肉を食はば、當に得度せしむべしと。

【一】第八問、若し爾らば應に三惡道あるべからざるにあらすや。

【二】第九問、若し衆生、菩薩を割截して其の肉を食はば、當に罪あるべし、云何が得度せんや。

經中に説くが如し。衆生、菩薩の肉を食はば、則ち慈心を生ずと。譬へば、色聲香觸あり、人間見すれば則ち喜び、復聞見なければ則ち瞋るが如く、味も亦是の如し。瞋る者あれば、慈心を起す者あり、毗摩羅結經に説くが如し。香飯を服食し、七日にして道を得るものあり、得ざる者あり。肉を啖ふを以ての故に、得度にあらず。慈心を起發するを以ての故に、畜生を免る事を得、善處に生じて佛の得度に値ふ。菩薩あり、無量阿僧祇劫に於いて、深く慈心を行じ、外物を給施するも、衆生の意向は満たす、並に自ら身を以て布施するに、乃ち満足せり。法華經の中に、「藥王菩薩、外物珍寶もて佛に供養するに、意猶ほ満たす、身を以て燈となし、佛に供養するに、爾乃ち足り満つ」と「説くが」如し。

復次に、人は外物を得ると多しと雖も、以て恩となさず、所以は何んと  
なれば、愛重する所に非らざるが故に、其の身を得る時、乃ち能く驚感す  
ればなり。是の故に、身を以て布施す。菩薩は又天上の諸人の爲に説法す。經中に廣く説くが如し。

人は四事を以て之を攝す、布施と愛語と利益と同事となり。布施に二事あり、經中に廣く説くが如し。問うて曰く、(三) 何を以てか、略して餘の四道を説き、而して廣く人道の中の法を説くや。答へて曰く、三惡道の中には、苦多きが故に、衆生は少しく疑ふ。若し菩薩の大神通、希有の事を見れば、則ち直に信じ、愛著して得度す。諸天は天眼有るが故に、自ら罪福の因縁 果報を見、菩薩少しく神

【三】 第一〇問、人道を詳説し、餘の四道を略説する理由如何。

【四】 縮藏には果報の二字なし。

足を現すれば、則ち解す。人は肉眼を以て、罪福の因縁果報を見ず、又多く外道邪師、及び邪見の經書に著す。諸の煩惱に二分有り、一は見に屬し、二は愛に屬す。若し但た一事あれば、則ち大罪を成ずると能はず。三毒の人は邪見の力を得て能く盡く重惡を作し、邪見の人は貪欲瞋恚を得て能く大に罪事を作す。須陀洹には三毒有りと雖も、邪見なきが故に、三惡道に墮して、重罪を作さざるが如し。是の故に、人中には多く三毒邪見あり。又眼に罪福の因縁を見ざるが故に度し難し、度し難きが故に多く説けり。

問うて曰く、(二五) 若し爾れば、四事の中、何を以てか多く布施を説き、餘の三は略して説くや。答へて曰く、布施の中に三事を攝すが故に、財施法施を以て衆生を教化すれば、則ち攝せざる所なきなり。復次に、四事の中、初めに廣く布施を開けば、則ち餘の三も亦是の如しと知る。

問うて曰く、(二六) 爾らば何を以てか略して財施を説き、而も廣く法施を説くや。答へて曰く、財施は少く、法施は廣きが故なり。所以は何んとなれば、財施は有量の果報にして、法施は無量の果報なり。財施は欲界繫の果報にして、法施は亦三界繫の果報、亦是れ三界を出生づるの果報なり。財施は能く三界の富樂を興へ、法施は能く涅槃の常樂を興ふ。又財施は法施より生ず、法を開けば則ち施すが故なり。

【二五】 煩惱の二分類。

【二六】 第一一問、四事の中、多く布施を説き、餘の三は略して説く理由如何。

【二七】 四事とは、布施と愛語と同事と利行となり。

【二八】 第一二問、財施を略説して、法施を廣説する理由如何。

復次に、財施の果報は、但だ富樂にして種種なきも、法施は亦富樂あり、亦餘事あり、乃至佛道涅槃の果報に至る。是等の因縁を以ての故に、廣く法施を説けり。二施の義は經中に佛自ら廣く説きたまへるが如し。

問うて曰く、(一九)經中に、須菩提は何を以ての故に、菩薩は一切種智を得るや不やと問へるや。答へて曰く、須菩提意へらく、「若し菩薩の時、一切種智を得ば、則ち菩薩と名けず、云何が未だ佛を得ずして、能く一切種智を得ん。一切種智を得るが故に名けて佛となす。若し先つ作佛せば、一切種智を用つて何かせん」と。佛答へたまはく、「今一切種智を得るを名けて菩薩と爲し、已に一切種智を得たるを名けて佛と爲す。菩薩の時、佛の因縁を具足して生じ、心に一切種智を得んと欲す。得已れば名けて佛と爲す。眞實に之を言へば、菩薩も得ず、佛も亦得ざるなり。何となれば、菩薩は未だ佛を得ず、得已れば更に復得ざればなり。世俗の法の故に、菩薩は今佛を得、得已竟んぬと説く。第一義中には則ち一切法なし、何に況はんや、佛及び菩薩をや。」又經の中に言はく、「佛心は菩薩に異らず、菩薩は佛心に異らず。次第に相續して斷せざるが故に三心あり」と。

〔そは〕異なきが如く、分別無きが故なり。

問うて曰く、(三〇)九次第定、三十二相、八十隨形好、此は此れ世間共有の法なり。何を以ての故に、

【一九】 第一三問、須菩提が、菩薩は一切種智を得るや不やを問へる理由如何。

【二〇】 第一四問、九次第定、三十二相等を出世間不共の法と名くる理由如何。



なづ名けて出世間不共の法と爲すや。答へて曰く、四禪、四無色定、滅受想を九次第と名け、滅受定は但だ聖人のみ能く得。四禪、四無色定は初禪より起り、更に餘心を離へずして、禪に入る。二禪よりすなは滅受定に至るまで、念念の中の受に餘心を離へざるを名けて次第と爲す。凡夫は是れ罪人にして鈍根なり、云何が能く三十二相を得ん。轉輪聖王、提婆達、難陀所得の相の如し。名字は同じと雖も威徳具足し淨潔の得處は佛と同じからず。先に轉輪聖王と佛相との不同を分別せる中に説くが如し。又是の相は聖無漏法の果報なるが故に、自在にして意に隨つて無量無邊なり。轉輪聖王等の相は、是れ福德業の因縁なるも、自在なる能はず、量有り、限有るなり。

復次に、提婆達、難陀には三十相ありて三十二相なし。轉輪聖王には三十二相有りと雖も、威徳なく、具足せず、處を得ず、愛等の煩惱と俱なり。

八十隨形好の具足は、唯だ佛菩薩にのみ之れあり。餘人は正に少許あるべし。或は指纖長、或は失腹、是の如き等の無威徳の好有るも言ふに足らず。是の故に説いて、出世間にして凡夫の法を共にせずと言ふも咎なし。

問うて曰く、(三)初めより來た、處處に諸法五衆、乃至一切種智を説き、是の三十二相八十隨形好を説かず。今經竟らんと欲するに、何を以てか品品の中に説くや。答へて曰く、(三)佛に二種の身あり、

【三】 第一五問、初めより來た處處に諸法、五衆、乃至一切種智を説き、三十二相及び八十隨形好を説かず、今經竟はらんと欲するに、何を以てか品品の中に説くや。

【三】 佛に二種の身あり。

法身ほつしんと生身しやうしんとなり。二身にしんの中に於おいては法身ほつしんを大だいとす。法身ほつしんは大だいにして、益やくする所ところ多おほきが故ゆゑに、上來じやうらい廣ひろく説とけり。今いま、經きやうを訖おはらんと欲ほつするが故ゆゑに、生身しやうしんの義ぎは應まさに説とくべし。是この故ゆゑに今いま説とけり。

復次またつぎに、是この生身しやうしんは相好さうがう莊嚴しやうごんなり、是れ聖しやう無漏むろ法の果報くわほうなり。今次第いましだいに説とく。上かみには諸もろの波羅蜜はらみつ〔多た〕を雜まじへて、四念處等ねんじよとうの諸法しよほふの義ぎを説とく。先まきに十力等しゆりきとうを説とくが如ごとし。是この佛法ぶつぽふ甚深じんじんの義ぎは、今當いままさに更さらに略りやくして説とくべし。

問とうて曰いはく、(三)佛ぶつの十力じゆりきとは、若もし總相そうさうの説せつなれば、則すなはち一力りき、所謂いはゆる一切種智いつぱんしちりき力りきなり。若もし別相べつさうの説せつなれば、千萬億種まんおくしゆりき力りきなり。法ほふに隨したがつて名みやうを爲なす。今何いまなにを以もつてか但ただ十力じゆりきを説とくや。答こたへて曰いはく、佛ぶつは實じつに無量むりやうの智力ちりき有あり、但ただ衆生しゆじやうは得あたること能あたはず、行ぎやうずること能あたはずるを以もつての故ゆゑに説とかざるなり。是この十力じゆりきもて衆生しゆじやうを度あすべきの事辦ことべんず。所ゆ

【三】 第一六問、佛の力を但だ十力に限る理由如何。

以もて何いかとなれば、佛ぶつは是處非處ぜしよひしよみ力りきを用もつて、定ただんて一切法中いつぱんほふちゆうの因果いんぐわを知しりたまふ。所謂いはゆる惡業あくごふを行ぎやうずれば、惡道あくだうに墮だす、是れ處ことわりあり。惡業あくごふを行ぎやうじて、天上てんじやうに生やうずるは、是れ處ことわりなきなり。善ぜんも亦是またの如ごとし。五蓋ごがいを離はなれず、七覺しちかくを修しゆせずして、道だうを得うる者は、是れ處ことわりあるとなし。五蓋ごがいを離はなれ、七覺しちかくを修しゆして、道だうを得うるは、是れ處ことわりあり。餘よの九力りきは盡ことごとく是この力ちからの中なかに入る。佛ぶつは是この力ちからを以もつて、十方六道じうぱんりくだうの中なかの衆生しゆじやうの度あすべき者と度あすべからざる者ものとを籌量ちゆうりやうしたまふ。度あすべき者は、種種しゆじゆの因緣いんねん、神通變化じんづちへんげを以もつて之これを度脫だつし、度あすべからざる者は、是この人中にんちゆうに於おいて捨心しやしんを修しゆす。譬たとへば、良醫らういの其その病相びやうさうを觀み、

審定して、其の活すべきを知れば、則ち是れを活し、活すべからざる者は、則ち之れを捨つるが如し。衆生を度する方便は、所謂の二力なり。業力と定力もて其の業因縁の生處を求む。人は業因縁を以ての故に身を受け、世間に縛著し、禪定の因縁の故に解脱を得。行者は必ず當に苦を求むべし、何に従つてか生じ、何に由つてか滅すと。是の故に二力を用ふ。業力に二分あり、一には淨業、能く惡業を斷ず。二には垢業なり。淨業とは禪定解脱、諸の三昧に名づけ、不淨業とは能く三界の中に身を受く。人に二種有り、鈍根は身を受けんが爲めの故に業を作し、利根は身を滅せんが爲めの故に業を作す。

問うて曰く、(二六)若し爾れば、何を以てか皆淨業を作さしめざるや。答へて曰く、衆生の根に利鈍あるを以ての故なり。

問うて曰く、(二七)衆生には何の因縁の故に利鈍あるや。答へて曰く、種種の欲力あるを以ての故なり。惡欲の衆生は、常に惡に入るが故に鈍なり。欲を嗜好と名づく、罪事を嗜好し、惡業を生ずるが故に鈍なり。善欲の者は道を樂しみ、助道法を修するが故に利なり。

問うて曰く、(二八)衆生は何を以てか、皆善欲をなさざるや。答へて曰く、是の故に佛は世間の種種の性を説きたまへり。惡性と善性となり。惡性の者は惡欲なり。惡欲の故に根鈍なり、火は熱性、水は

- 【二四】業力の二分——(一)淨業、(二)垢業。
- 【二五】二種の人間——(一)鈍根、(二)利根。
- 【二六】第一七問、人をして皆淨業を作さしめざる理由如何。
- 【二七】第一八問、衆生の根に利鈍の差別ある理由如何。
- 【二八】第一九問、衆生の皆善欲を作さざる理由如何。

濕性なるが如し、其の所以を責むべからず。

問うて曰く、(元)惡欲即ち是れ惡性ならば、何の差別ありてか二力を作すや。答へて曰く、性、先づ欲あり、因縁を得て生ず。譬へば、先づ瘡ありて、觸の因縁ありて、則ち血出づるが如し。性は内にあり、欲は外にあり、性は重く、欲は軽く、性は除き難く、欲は捨て易く、性は深く、欲は淺し。性をを用つて業と作せば、必ず當に報を受くべく、欲を用つて業を作せば、必ずしも報を受けず。是の如き等の差別あり。復た有人の言はく、「欲は常に習へば增長して、遂に成じて性と爲り、性も亦た能く欲を生ず」と。是の人、若くは今世、若くは後世、常に是の欲を習へば、即ち成じて性と爲る。是の性の中に住して、惡を作し、害を作す。若し善性に住すれば則ち度すべく、若し惡性に住すれば則ち度すべからず。佛既に衆生の二種の性を知り、已に其の果報の善道、惡道、種種の差別を知りたまへり。惡性は三惡道に墮し、善性は四種道〔所謂〕人天・阿修羅・涅槃道あり。

問うて曰く、一切到處道力と、天眼力と何の差別ありや、答へて曰く、天眼は但だ生死の時を見る。是の中、未だ死せざる時を知らず。因を見て果を知るは天眼なり。現前に罪福の果を見る、是を名づけて一切到處力といふ。

【二元】 第二〇問、惡性即ち惡欲ならば、何の差別ありてか二力を作すや。

【三〇】 第二二問、一切到處道力と天眼力との差別如何。

問うて曰く、(三) 聲聞辟支佛も亦涅槃を得たるも、亦能く衆生を化す。何を以てか是の力無きや。答へて曰く、是の故に後の三力を説くなり。三世の中の衆生の事、盡く能く通達し遍く知る。宿命力を以て、一切衆生の過去の事、本末悉く知る。天眼、生死智力を以ての故に、一切衆生未來世の中の無量の事、盡く能く遍く知る。是の知を作し已りて、現世の中の衆生の度すべき者を知り、爲に漏盡法を説く。是を以ての故に、但だ佛のみ是の力あり、二乗には無き所なり。一人あり、即日、應に阿羅漢を得。舍利弗、日中の時、汝は得道の因縁なしと言語し、捨てて度せざるに、喟時に佛、宿命神道を以て見たまへば、過去八萬劫の前に得道の因縁あり。今應に成就すべし。喟時に法を説くに、即ち阿羅漢道を得たるが如し。

【三】 第二三問、二乗も亦涅槃を得、亦た能く衆生を化す、何を以てか是の方なきや。

復次に、佛は初力を以て、衆生の度すべく、度すべからざる相を知り、第二次を以て、衆生三障の爲に、覆はれ、覆はるなき者を知り、第三次を以て、衆生の禪定解脱淨淨の者を知り、第四力を以て、衆生の根に利あり、鈍あり、能く法性に通せるもの、通せざる者を知り、第五力を以て、衆生の根の利鈍の因縁、善惡の欲を知り、第六力を以て、二欲の因縁、種種の性を知り、第七力を以て、衆生利鈍の根、善惡果報の處、七種の道を知り、第八力を以て、衆生宿世の善惡の業、障不障を知り、第九力を以て、衆生の今世には未だ度すべからず、未來世の生處に度すべき者を知り、第十力を以て、是の人は空解脱門を以て、涅槃に入り、無相無作門もて涅槃に入るを

知り、是の人は見諦道、思惟道の中に於いて、念念の中に、若干の結使を斷ずるを知る。是の十力を以て、衆の所應の度縁を籌量して、而も爲に法を説きたまふ。是の故に説法は初めより空言なし。

問うて曰く、三佛の智慧は無量なり、身相も亦無量なるべし。又佛身は諸の天王に勝る、何を以てか、正しく轉輪聖王と同じく、三十二相ありや。答へて曰く、三十二相は多からず、少なからざるの義、先に説けるが如し。

復次に、有人の言はく、「佛菩薩の相は定まらず」と。是の中に説くが如くんば、衆生の好む所に隨つて、以て其の心を引導すべき者には、爲に相を現す。衆生の金を貴ばずして、而も餘色の琉璃頗梨金剛等を貴べば、是の如き世界の人には、佛則ち金色を現せず、其の好む所を觀じて、則ち爲に色を現す。又衆生、纖長指及び網縵を貴ばず、長指利爪を以て羅刹相を爲し、網縵を以て水鳥の相を爲す、造事便ならず、手に衣を著げざるが如し。何ぞ是れを用ふることを爲さんや。罽賓國の彌帝隸力利菩薩の如きは、手に網縵あり、其の父彼を惡み以て怪と爲し、刀を以て之を割いて言はく、我が子は何の縁ありてか鳥の如くなるやと。有人は、肩の圓大なるを好まず、以て腫に似たりと爲し、以て腹現せざるあり、腹無ければ餓相の如し。亦有人は青眼を以て好まずと爲す、但だ白黒分明を好む。是の故に、佛は衆生の好む所に隨つて、而も爲めに相好を現す。是の如き等は常に定りあることなし。

【三】 第二三問、佛は智慧も無量、身も亦無量にして、諸の天王に勝る。然るを轉輪聖王と同じく三十二相ある理由如何。

有人の言はく、「是の三十二相は實に定んで神通力、變化身を以て、衆生の好む所に随つて、爲に相を現すと。有人の言はく、「佛、ある時は神通變化し、有る時は世界の處に隨ふ。當生の處には神通變化を言ふことを得ず。又三千大千世界の中に於いて、度すべき衆生の處に隨つて生ずれば、則ち爲めに相を現すと。密迹經の中に説くが如し。或は金色を現じ、或は銀色を現じ、或は日月星宿色、或は長、或は短、引導すべき衆生に隨つて、則ち爲に相を現す。此の間、閻浮提の中、天竺國の人の好む所に隨つて爲に三十二相を現す。天竺國の人は今、故に肩膊を治め、厚大の頭上に皆髻あらしむるを好しと爲す。人相の中に五處の長きを好しと爲すが如し。眼と鼻と舌と臂と指と手と足との相なり。若くは輪、若くは蓮華、若くは具、若くは日月、是の故に佛の手足には千輻輪、繖長指有り、鼻高好、舌廣長にして薄し、是の如き等は皆先に貴ぶ所の者に勝るが故に、恭敬心を起す國土あれば佛は爲めに千萬の相、或は無量阿僧祇相、或は五六三四の相を現じたまふ。天竺の好む所に隨ふが故に三十二相、八十種隨形好を現するなり。

# 卷の第八十九

## 四攝品第七十八の下を釋す。



云何が八十隨形好と爲す。一には無見頂、二には鼻直高好にして孔現はれず。三には眉初生の月の如くにして、紺瑠璃色なり。四には耳輪埵成し、五には身堅實にして、那羅延の如し。六には骨際鈎鎖の如し。七には身一時に廻すること、象王の如し。八には行く時、足の地を去ること四寸にして印文現す。九には爪赤銅色の如く、薄くして潤澤あり、十には膝骨堅著にして圓好なり。十一には身淨潔なり。十二には身柔軟なり。十三には身曲らず。十四には指長く纖圓なり。十五には指文莊嚴なり。十六には脈深し。十七には蹠見えす。十八には身潤澤なり。十九には身自ら持して蹶逸せず。二十には身満足す。二十一には識満足す。二十二には容儀備足す。二十三には住處安かにして、能く動かすものなし。二十四には威一切に振ふ。二十五には一切樂纏す。二十六には面大長ならず。二十七には容貌を正うして色を撻さす。二十八には面具足し満足す。二十九には唇赤くして頻婆果の色の如し。三十には音響深し。三十一には臍深くして圓好なり。三十二には毛右旋す。三十三には手足満足す。三十四には手足意の如し。三十五には手文明直なり。三十六には手文長し。三十七には手文勵ぜず。三十八には一切惡心の衆生と見れば和悦す。三十九には面廣く姝好なり。四十には面淨滿して月の如し。四十一には衆生の三のしたか、和悦して與に語る。四十二には毛孔より香氣を出す。四十三には口より無上香を出す。四十四には儀容師子の意に隨つて、和悦して與に語る。四十五には蓮止象王の如し。四十六には行法鵝王の如し。四十七には頭摩陀那果の如し。四十八には一切の聲分具足



す。四十九には牙利とし。五十には舌の色赤し。五十一には舌薄し。五十二には毛紅色なり。五十三には毛潔淨なり。五十四には廣長の眼なり。五十五には孔門相具足す。五十六には手足赤白にして蓮華の色如し。五十七には臍出です。五十八には腹現れず。五十九には細腹なり。六十には身傾動せず。六十一には身を持すると重し。六十二には其の身分大なり。六十三には身長し。六十四には手足淨潔にして頓澤なり。六十五には邊光各一丈なり。六十六には光身を照して而して行く。六十七には等しく衆生を見る。六十八には衆生を輕んぜず。六十九には衆生に隨つて音聲過ぎず減ぜず。七十には說法して著せず。七十一には衆生の語言に隨つて而して說法をなす。七十二には一發音も衆聲に報ゆ。七十三には次第あつて回緣說法す。七十四には一切衆生觀相を盡すこと能はず。七十五には觀る者厭足することなし。七十六には髮長好なり。七十七には髮亂れず。七十八には髮旋好なり。七十九には髮の色青珠の如し。八十には手足に徳相あり。須菩提よ、是を八十隨形好となし、佛身に成就すること、是の如し。

須菩提よ、菩薩摩訶薩は二施を以て衆生を攝取す。所謂る財施と法施となり。是を菩薩の希有にして、及び難き事と爲す。云何が菩薩摩訶薩は愛語もて衆生を攝取すと爲すや。菩薩摩訶薩は六波羅蜜(多)を以て衆生の爲めに說法し、此の言を作す。汝六波羅蜜(多)を行じて、一切善法を攝す可しと。云何が菩薩摩訶薩は利行もて衆生を攝取すと爲すや。菩薩摩訶薩は長夜に衆生を教化して六波羅蜜(多)を行ぜしむ。云何が菩薩摩訶薩は同事もて衆生を攝取すと爲すや。菩薩摩訶薩は六神通力を以ての故に、種種變化して六道の中に入り、衆生と與に同事す。此の同事を以て而して之を攝取す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行ずる時衆生を教化す。善男子よ、當に學して諸字を分別すべし。亦當に善く一字乃至四十二字を知るべし。一切の語言は皆初字門に入り、一切の語言は亦第二字門乃至第四十二字門に入り、一切の語言は皆其の中に入り、一字皆四十二字に入り、四十二字も亦一字に入る。是れ衆生應に是の如く善く四十二字を

學し已りて能善く字法を説き、善く字法を説き已りて善く無字法を説く。須菩提よ、佛の善く法を知り、善く字を知り、善く無字を知り。無字法の爲めの故に、字法を説くが如くすべし。何となれば、須菩提よ、一切の名字法を過ぐるが故に名けて佛法となせばなりし。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し衆生畢竟して得べからずんば、法も亦得べからず、法性も亦得べからず。畢竟空、無始空なるが故なり。世尊よ、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜(多)を行じ、禪波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、屠提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀(那)波羅蜜(多)を行する時、四禪、四無量心、四無色定、三十七助道法、十八空を行じ、空無相三昧、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、三十二相、八十隨形好を行ぜん。云何が報得五神通に住して、衆生の爲めに説法するや。衆生は實に得可らず。衆生得べからざるが故に、色得べからず、乃至識も亦得べからず。

五陰得べからざるが故に、六波羅蜜(多)乃至八十隨形好も亦得べからず。是の不可得中に衆生なく、色なく、乃至八十隨形好なければなり。世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、衆生の爲めに説法するや。世尊よ、菩薩の般若波羅蜜(多)を行する時、菩薩も尙得べからず、何に云んや當に菩薩法ある可けんや。」

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、衆生得べからざるが故に、當に知るべし、是れ内空、外空、内外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、諸法空、自相空、性空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空なりと。衆生得べからざるが故に、當に知るべし、五陰空、十二入空、十八界空、十二因緣空、四禪

空、我空、壽者、命者、生者、養者、育者、衆數者、入者、作者、使作者、起者、使起者、受者、使受者、知者、見者、皆空なりと。衆生得べからざるが故に、當に知るべし、四禪空、四無量心空、四無色定空なりと。當に知るべし、四念處空、乃至八聖道分空、空空、無相空、無作空、八背捨空、九次第定空なりと。衆生得べからざるが故に、當に知るべし、佛の十

力空、四無所畏空、四無礙智空、十八不共法空なりと。當に知るべし、須陀洹果空、斯陀含果空、阿那含果空、阿羅漢果空、辟支佛道空なりと。當に知るべし、菩薩地空、阿耨多羅三藐三菩提空なりと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く觀する時、一切法無礙を知る。一切法無礙なることを見、衆生の爲めに説法して、諸空の相を失せず。是の菩薩は是の如く觀する時、一切法無礙を知る。一切法無礙を知り已りて、諸法相の不二不分別なることを壞せず、但だ衆生の爲めに實の如く説法す。譬へば、佛の所化人は、化人復千萬億人を化作して、教へて布施せしむるものあり、教へて持戒せしむるものあり、教へて忍辱せしむるものあり、教へて精進せしむるものあり、教へて禪定せしむるものあり、教へて智慧せしむるものあり、教へて四禪、四無量心、四無色定せしむるものあるが如し。汝の意に於て云何。佛の所化人諸法を分別し、破壞するとありや不や。須菩提言さく、不なり、世尊よ、是の化人は心なく心數法なし、云何が諸法を分別し破壞せんと。是を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行し、衆生の爲めに當應に説法し、衆生を顛倒地より拔出し、衆生をして各所應の如く住地を得しむ。不縛不脫法を以ての故なり。何となれば、須菩提よ、色は不縛不脫なり、受想行識は不縛不脫なり。色の不縛不脫なる是れ色ならず、受想行識の無縛無脫なる是れ色ならず。何を以ての故に、色は畢竟清淨なるが故なり。受想行識乃至一切法、若くは有爲、若くは無爲も亦畢竟清淨なるが故なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生の爲に説法するも、亦衆生及び一切法を得ず。一切法得べからざるが故に、菩薩は法に住せざるを以ての故に、諸法の相中、所謂の色空乃至有爲無爲法空に住す。何となれば、色乃至有爲無爲の法は自性得べからざるが故に、住處ある事なければなり。無所有法は無所有法に住せず、自性法は自性法に住せず、他性法は他性法に住せず。何を以ての故に、是の一切の法は皆得べからざるが故に、不可得の法當に何處にか住すべけん。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、是の諸空を以て能く是の如く説法し、是の如く般若波羅蜜(多)を行じ、諸佛及び辟支佛に於て過あるをなし。何を以ての故に、諸佛及び菩薩辟支佛阿羅漢は是の法

を得已りて、衆生の爲めに説法するも、亦諸法の相に轉ぜず。何を以ての故に、如法性實際は轉すべからざるが故なり。所以は何となれば、諸法を得已りて、性無きが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し法性、如、實際轉ぜざれば、色と法性とは異なるや不や。色と如、實際とは異なるや不や。受想行識、乃至有爲、無有法、世間出世間、有漏無漏異なるや不や」と。佛の言はく、「不なり。色は法性と異なるや、如と異ならず、實際と異ならず、受想行識乃至有漏無漏も亦異なるはず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し色は法性と異ならず、如と異ならず、實際と異ならず、受想行識、乃至有漏無漏異なるはずんば、云何が黒法を分別し、黒報所謂地獄餓鬼畜生あらん。白法の白報、所謂諸天及び人あらん。黒白法の黒白報あらん。不黒不白法の不黒不白報、所謂須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提あらん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「世諦の故に分別して果報ありと説くは第一義には非ず。第一義の中には因縁果報を説く可らざればなり。何を以ての故に、是の第一義は實に相あることなく、分別あること無く、亦言説も無し、所謂の色乃至有漏無漏法は不生不滅相、不垢不淨にして畢竟無始空なるが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し世諦を以ての故に分別して果報ありと説き、第一義に非ずんば、一切凡夫人は應に須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提あるべし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於いて云何。凡夫人は是れ世諦なり、是れ第一義なりと知ると爲すや不や。若し是を知れば、凡夫人は應に是れ須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提なるべし。須菩提よ、凡夫人は實に世諦を知らず、第一義諦を知らず、道を知らず、分別道果を知らざるを以て、云何が當に諸果あらん。須菩提よ、聖人は世諦を知り、第一義諦を知り、道あり、修道あり、是を以ての故に聖人は差別して諸果あり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、修道せば果を得るや不や」と。佛の言はく、

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し世諦を以ての故に分別して果報ありと説き、第一義に非ずんば、一切凡夫人は應に須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提あるべし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於いて云何。凡夫人は是れ世諦なり、是れ第一義なりと知ると爲すや不や。若し是を知れば、凡夫人は應に是れ須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提なるべし。須菩提よ、凡夫人は實に世諦を知らず、第一義諦を知らず、道を知らず、分別道果を知らざるを以て、云何が當に諸果あらん。須菩提よ、聖人は世諦を知り、第一義諦を知り、道あり、修道あり、是を以ての故に聖人は差別して諸果あり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、修道せば果を得るや不や」と。佛の言はく、

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し世諦を以ての故に分別して果報ありと説き、第一義に非ずんば、一切凡夫人は應に須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提あるべし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於いて云何。凡夫人は是れ世諦なり、是れ第一義なりと知ると爲すや不や。若し是を知れば、凡夫人は應に是れ須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提なるべし。須菩提よ、凡夫人は實に世諦を知らず、第一義諦を知らず、道を知らず、分別道果を知らざるを以て、云何が當に諸果あらん。須菩提よ、聖人は世諦を知り、第一義諦を知り、道あり、修道あり、是を以ての故に聖人は差別して諸果あり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、修道せば果を得るや不や」と。佛の言はく、

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し世諦を以ての故に分別して果報ありと説き、第一義に非ずんば、一切凡夫人は應に須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提あるべし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於いて云何。凡夫人は是れ世諦なり、是れ第一義なりと知ると爲すや不や。若し是を知れば、凡夫人は應に是れ須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提なるべし。須菩提よ、凡夫人は實に世諦を知らず、第一義諦を知らず、道を知らず、分別道果を知らざるを以て、云何が當に諸果あらん。須菩提よ、聖人は世諦を知り、第一義諦を知り、道あり、修道あり、是を以ての故に聖人は差別して諸果あり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、修道せば果を得るや不や」と。佛の言はく、

「不なり、須菩提よ、修道するも果を得ず、修道せざるも亦果を得ず。又道を離れざるも果を得、亦道中に住せざるも果を得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、衆生の爲めに諸果を分別するも、又是の有爲性と無爲性とを分別せず」と。「世尊よ、若し有爲性と無爲性とを分別せずして諸果を得れば、云何が世尊は自ら三結を説き盡すが故に、須陀洹と名け、淫慾薄さが故に斯陀含果と名け、五此間結の盡くるを阿那含と名け、五彼間結の盡くるを阿羅漢と名け、所有の集法皆滅散する相を辟支佛道と名け、一切煩惱の習を斷するが故に阿耨多羅三藐三菩提と名けん。世尊よ、われ當に、云何が有爲性と無爲性とを分別せずして、諸果を得るとを知るべけんや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を以て、是の諸果は是れ有爲なり、是れ無爲なりとせん」と。須菩提言さく、「世尊よ、皆是無有なり」と。「須菩提よ、無爲法中に分別ありや不や」と。「不なり、世尊よ、若し善男子善女人、一切法若くは有爲、若くは無爲、一相、所謂無相なりと通達せば、是の時、若くは有爲、若くは無爲なりと分別するもありや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は、衆生の爲に説法して、諸法を分別せず。所謂内空の故に、乃至無法有法空の故に、是の菩薩は自ら無所著の法を得、亦人に教へて無所著の法、若くは檀(那)波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)、初禪乃至第四禪、慈悲喜捨、無邊空と處、乃至非有想非無想處、若くは四念處乃至一切種智を得せしむ。是の菩薩は自ら著せざるが故に、又他を教へて無所著を得せしむ、無所著の故に礙ふる處なし。譬へば、佛の所化人の布施するも亦布施を受けず、但だ衆生を度せんが爲めの故に、乃至一切種智を行して、一切種智の報を受けざるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、六波羅蜜(多)乃至一切法、有漏無漏有爲無爲を行じて住せず、亦法をも受けず、但だ衆生を度せんが爲めの故なり。何を以ての故に、此の菩薩摩訶薩は能く一切諸法の相に達するが故なり」と。

論

問うて曰はく、八十隨形好は是れ身法を莊嚴し、識満足す、何を以ての故に隨好形の中にあるや。答へて曰はく、此の識は是れ果報生の識にして、世間の好醜は自然にして知る。凡人は識具足せざるが故に、人法を學んで乃ち知る。佛は一歳具足し滿じて乃ち生る、故に身識皆具足す。餘人は若くは八月、若くは九月、胎に處す。總じて十月と言ふ。菩薩は胎に處すること十月、總じて一歳を得、身根具足するが故に、果報得の識も亦具足す。

問うて曰はく、足安立住處と安住處と、何の異りあるや。答へて曰はく、住處安きは白衣勇士の器仗を牢持し、住處に安據すれば則ち動すべからざるが如し。又出家の時、魔民惡鬼の能く動轉して退敗する者なし。四十二の義は摩訶衍の中に説くが如し。一字盡く諸字を入るとは、譬へば、兩一合するが故に二となり、三一の故に三となり、四一を四と爲すが如し。是の如くにして千萬に至る。又阿字の定んで、阿變じて羅となり、亦變じて波となるが如し。是の如くにして盡く四十二字に入る。四十二字一字に入るとは、四十二字は盡く阿の分なり、阿の分還つて阿の中に入る。善く字を知るが故に、善く諸法の名を知る。善く諸法の名を知るが故に、諸法の義を知る。無學即ち是れ諸法實相の義なり。所以は何んとなれば諸法義の中には諸の名字なし。須菩提問ふ、「若し諸法畢竟空にして名字なくんば、云何が菩薩は果報の六神通に住して、衆生の爲めに諸

【一】 第一問、八十隨形好は、身法を莊嚴し、識満足す、何を以てか隨形好の中にあるや。

【二】 第二問、足安立住處と安住處との相異如何。

法を説くや。若し畢竟衆生無ければ、則ち法あることなげん」と。佛、須菩提を可して言はく、「是の如く、十八空を以ての故に、一切法は不可得なり。我れ衆生、乃至知者、見者、乃至當に、佛、菩薩の皆空なることを知るべし」と。是の如く知り已つて、衆生の爲に是の空法を説く。若し衆生是れ有にして而も爲に空を説かば、是れ即ち衆生は空なるを以て、但顛倒に従つてのみ有りとすべからず。是の故に、菩薩は空を失せずして而も爲に法を説く。不失とは、諸法皆空、所説不空を作さざるなり。若し所説不空を以てせば則ち空相を失すと爲す。若し口に空を説いて而も心是れ有ならば、是れ又失と爲す。是の中に、佛自ら不二を説きたまへり。「そは」法相を壊せざればなり。是の事を明了にせんと欲して譬喩を説く。佛の所化の如きは、化人と作つて而も爲に持戒、布施、諸の功德を説法す。若し是の如きの方便を以て法を説かば、是れ則ち咎なく、則ち能く衆生を顛倒より拔出するなり。「そは」無縛無解の故なり。第一義の中には縛なく解なし。世諦の故に縛あり解あり。是の中に、佛自ら因縁を説きたまはく、色は不縛不解なり。何となれば是の不縛不解の中には色相なきが故なり。乃至識も亦是の如し。菩薩は是の如く、不住の法を用ての故に、空法の中に住して、衆生の爲に説法す。衆生は不可得、衆生及び一切法は不可得なるが故なり。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、謂所無所有の法は無所有に住せず、譬へば、虚空は虚空に住せざるが如し。自性法は自性法に住せず、譬へば、火は火の中に住せざるが如し。他性法は他性法に住せず、譬へば、水性の中に火性なきが如し。又他性不定の

故なり。若し能く是の如く清淨に法を説かば、是の菩薩は諸佛賢聖に於いて、則ち過あることなげん。何となれば、諸佛賢聖は一切法に著せず、法を説く者も亦一切法を著せず、諸佛賢聖は畢竟空にして、皆寂滅相を以て心の所行と爲せばなり。法を説く者も亦是の如し。諸佛賢聖は三解脱門に入り、一切法の實性を得。所謂無餘涅槃なり。法を説く者は是の法に隨ふが故に咎なしと。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、諸佛賢聖は是の法を得已つて、衆生の爲に法を説き法性を轉せず、法性は空無相の故なりと。須菩提問ふ、「若し法性を轉せざれば、色等の諸法と法性とは異なるや不や」と。佛は「不なり」こ答へたまふ。何となれば色等の諸法實相は即ち是れ法性なるが故なり。佛意ひたまはく、菩薩は説法する時も亦法性を壞せずと。須菩提問ふ、「色等の諸法も亦法性と異ならずんば、何を以ての故に但法性を費ぶや」と。佛答へたまはく、「色は法性と異らざるを以ての故なり」と。須菩提難すらく、「若し異ならずんば云何が分別して善惡白黒、須陀洹等の諸果有らん」と。佛答へたまはく、「色等の法は法性を離れずと雖も、世諦を以ての故に分別あり。第一義の中に於ては分別なし。何となれば第一義を得たる聖人は分別する所なく、有所得を聞いて喜ばず、無所得を聞いて憂ひず、空無相の證を得るが故なり。乃至微細の法すら尙相を取らず、何に況んや、分別して善惡ならんや。未だ實相を得ざる者は、第一義を得んと欲するが故に分別する所あり」と。佛は是の中に自ら因縁を説きたまはく、「是の法は言説も無く、亦生滅垢淨法もなし。所謂畢竟空、無始空なり」と。



問うて曰はく、三此の中に何を以てか但だ二空を説いて名けて法と爲すや。答へて曰はく、一切の有は、若くは法、若くは衆生は、若し畢竟空なりと言はば、則ち諸法を破す。若し無始空なりと言はば則ち衆生を破す。此の二法を破し已れば、則ち一切法盡く破す。此の中、菩薩は衆生の爲に説法す。是の故に、二空を以て、二事を破す。餘空有りと雖も、畢竟空の甚深にして、能く盡すに如かず。餘空は火の木を焼いて尙灰盡あるが如く、畢竟空は灰なく燼なし。有人の言はく、「若し十八空を説くも咎なし。略して説くが故に二空を説く」と。須菩提言さく、「若し世諦を以ての故に、分別して善惡白黑及び諸の聖果あらば、第一義の中に、凡夫人は應に須陀洹等の聖果有るべし。何となれば若し世諦を以てせば、虚妄中に分別して諸の賢聖あらんも、第一義の中には凡夫人は應に賢聖と作ればなり。須菩提は分別して實相と凡夫とを異となす。佛の言はく、「第一義は一相なり」と。是の故に須菩提言さく、「凡夫は是れ應に是れ聖人なるべし」と。爾の時、佛答へたまはく、「若し凡夫、分別して是れ第一義、是れ世諦なりと知らば、凡夫人は應に須陀洹等の諸の聖果あるべし。凡夫は實に道を知らず、道を分別するを知らず、道を行するを知らず、道を修するとを知らず、何に況んや道果を得んや」と。佛の言はく「聖人は能く是の分別を爲すが故に、是の聖果を説く」と。爾の時に、須菩提は自ら失あることを知るが故に言く、「無量無相無動の性中に、我れ云何が相を取り無量の法を量らんと欲するや。云何が強

【三】 第三問、二空のみを説いて、名けて法と爲す理由如何。

ひて凡夫の法を以て聖果と爲さんや」と。爾の時に佛語を受けて、道を行する者は果を得、道を行せざる者は果を得ざることを知る。是の故に佛に白さく、「道を修して果を得るや不や」と。佛の言はく「不なり」と。

問うて曰く、佛は上に分別して道を修し、道果を得と説く。今云何が不なりと言ふや。答へて曰

く、佛は先に非著心を説き、今や須菩提は著心を以て問ひ、道中より果を出さんと欲すること、麻中より油を出すが如し。若し爾れば道と果とは同じく虚誑となる。是の故に不なりと言ふ。聽者は念を生ぜん、「若し修して得ずんば、修せざれば當應に得べきや」と。是の故に佛の言はく、修するすら尙得ず、何に況んや修せざるをや。譬へば、二人の到る所有らんと欲して、一は住して行かず、二は道を失せば二俱に到らざるが如し。若し道を修せざれば、尙は少許の攝心の樂すらなし、何に況んや道果をや。若し心に相を取り道を修せば、心を攝して禪定の樂有りとし、雖も、道果有ることなし。若し相を取らず、著心せずして道を修せば、則ち道果あり。是の故に佛説きたまはく、「菩薩は般若波羅蜜(多)を行じて、有爲無爲の性を分別せざるが故に、道果の差別あり」と。爾の時、須菩提問ふ、「若し爾らば、佛は何を以ての故に、三結を斷じて須陀洹を得、是の如き等の分別有りと説くや」と。佛反問を以て答へたまはく、汝が意に於て云何。汝須陀洹果等を以て、是れ有爲是れ無爲と爲すや」と。須菩提言さく、「是れ無爲な

【四】 第四問、上に佛は道を修すれば果ありと説き、今何を以てか果無しと言ふや。

り」と。佛の言はく、「若し爾れば、無爲の中に差別ありや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ」と。「若し分別なくんば、汝、云何が難を爲すや」と。又復た須菩提に問ふ、「若し善男子善女人、一切法の一相、謂ゆる無相に通達して、三解脱門の中に住し、涅槃を證す、是の時、法の若くは有爲、若くは無爲と分別するものありや不や」と。答へて言さく、「不なり」と。佛意は、唯た是の心を眞實となす。餘は時に皆虚誑なり。汝云何が難を作すや。菩薩は般若波羅蜜(多)を行じて、一切法を分別せず、内空等の諸空の中に住して、是れ大清淨なり。自ら著せず、又衆生に教へて、所著なからしむ。謂ゆる檀波羅蜜(多)、乃至一切種智なり。菩薩は道中に皆教へて、著せざらしむ。譬へば、佛の所化人の如きは、布施等を行じて、亦布施等を分別せず、亦布施等の法の果報を受けず、但た衆生を利益し、度せんが爲の故なり。菩薩の心も亦是の如し。何となれば、善く諸法の性に通達するが故なり。善く通達すれば、法性の相を取らず、亦法性の中に住せず、法性に於いて疑はず問はず、而も法を説き罣なく、礙なく、遮なし。是れ則ち法性に通達するなり。

〔五〕善達品第七十九を釋す。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩は善く諸法の相に達するや。」佛、須菩提に告げたまはく、「譬へば化人の

【五】此の品の目的は、「前品の終に善く一切諸法の相に達すしと云へるを承けて、其の義を分別するにあり。

嫉怒癡を行ぜず、色乃至識を行ぜず、内外法を行ぜず、諸の煩惱結使を行ぜず、有漏法無漏法、世間法出世間法、有爲法無爲法を行ぜず、亦聖果もなきが如し。菩薩も亦是の如く、是のことあることなく、又是の法を分別せざる、是を善く諸法の相に達すと名く。須菩提言さく、「世尊よ、化人は云何が修道あらん」。佛の言はく、「化人の修道は垢ならず、淨ならず、亦五道生死にもあらず。須菩提よ、汝の意に於て云何。佛の所化人は、根本實事有りて、垢あり淨ありや不や」。須菩提言さく、「不なり、佛の所化人は、根本實事あることなく、亦垢なく、亦淨なく、亦五道生死にもあらず」。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の善く諸法の相に達するも亦是の如し。須菩提言さく、「世尊よ、一切の色は化の如くなるや不や。一切の受想行識は化の如くなるや不や」。佛の言はく、「一切の色は化の如く、一切の受想行識は化の如し」。世尊よ、若し一切の色は化の如く、一切の受想行識は化の如く、一切法は化の如くんば、化人は色なく、受想行識なく、垢なく、淨なく、五道生死もなく、亦解脱處もなし。菩薩は何等の功用があらん」。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の心に於て云何。菩薩摩訶薩の本菩薩道を行する時、若し衆生ありて、地獄、餓鬼、畜生、人天中より解脱を得ることを見るや不や」。須菩提言さく、「不なり、世尊よ。佛言はく、「是の如し、如の是し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、衆生の三界より解脱を得るを見ず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、一切の法は幻の如く、化の如しと見知すればなり」。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、一切諸法は幻の如く、化の如しと見知せば、何事の爲の故に、六波羅蜜(多)、四禪、四無量心、四無色定、三十七助道法を行じ、乃至大慈大悲、淨佛國土、成就衆生を行するや」。佛、須菩提に告げたまはく、「若し衆生自ら、諸法は幻の如く、化の如しと知らば、菩薩摩訶薩は遂に阿僧祇劫に於て衆生の爲に、菩薩道を行ぜず。須菩提よ、衆生は自ら諸法の幻の如く、化の如くなるを知らざるを以て、是の故に、菩薩摩訶薩は、無量阿僧祇劫に於いて、六波羅蜜(多)を行じ、衆生を成就し、佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法、夢の如く、響の如く、影の如く、

焰の如く、幻の如く化の如くなれば、衆生は何處にありてか住し、菩薩は九波羅蜜(多)を行じて、而も之を拔出せんや。」  
「須菩提よ、衆生は但だ名相虚妄憶想分別の中に住す。是の故に菩薩は般若波羅蜜(多)を行じ、名相虚妄の中に於て衆生を拔出すし。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ名、何等か是れ相なるや。佛の言はく、「是の名は強ひて假の施設と作す。所謂の此れ色、是れ愛想行識、此れ男、是れ女、是れ大、是れ小、是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ人、是れ天、是れ有爲、是れ無爲なり。是は此れ須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道なり、是れ佛道なり」と。須菩提よ、一切の相合法は、皆是れ假名なり。名を以て諸法を取る、是の故に名となす。一切の有爲法は、只名相あるのみ、凡提よ、一切の相合法は、皆是れ假名なり。名を以て諸法を取る、是の故に名となす。一切の有爲法は、只名相あるのみ、凡夫愚人は、中に於て著を生ず。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以ての故に、名字中に於て教へて遠離せしめ、是の言を爲す、諸の衆生、是の名は但だ空名あるのみ。虚妄憶想分別中に生じて、汝等虚妄憶想到著するとなかれ。是のこと本来皆無自性空なるが故に、智者の著せざる所なりと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以ての故に、衆生の爲に說法す。須菩提よ、是れを名となす。何等をか相となす。須菩提よ、二種の相あり。凡夫人所著の所なり。何等をか二となす。一には色相、二には無色相なり。須菩提よ、何等をか色相と名くる。諸の所有の色、若くは塵、若くは觸、若くは好、若くは醜、皆是れ空なり。此の空法の中に憶想分別し著心取相す。是を名づけて色相となす。何等か是れ無色相なるや。諸の無色法は、憶想分別し、著心取相するが故に煩惱を生ず。是を無色相と名づく。是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以ての故に、衆生をして、是の相著を遠離せしめ、無相法中に二相、所謂は是れ相、是れ無相なりと墮せざらしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、衆生をして相を遠離し、無相性中に住せしむ」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法但だ名相あるのみなれば、云何が菩薩は般若

若波羅蜜(多)を行じて、善く自ら饒益し、又他人をして善利を得しめ。云何が菩薩は、諸地を具足し、一地より一地に至りて、衆生を教化して三乗を得しむるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸法の根本、定んで有にして、但た名相のみにあらずれば、菩薩は般若波羅蜜(多)を行ずる時、自ら益すること能はず、又他人を利益すること能はざらん。須菩提よ、諸法は根本の實事あることなく、但だ名相あるのみ。是の故に、菩薩は般若波羅蜜(多)を行ずる時、能く禪那(波羅蜜)〔多〕を具足す、無相なるが故なり。毗梨耶波羅蜜(多)、屠提波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)〔具足〕す、無相なるが故なり。四禪那波羅蜜(多)、四無量心波羅蜜(多)、四無色定波羅蜜(多)を具足す、無相なるが故なり。四念處波羅蜜(多)を具足す、無相なるが故なり。乃至八聖道分波羅蜜(多)を具足す、無相なるが故なり。内空波羅蜜(多)を具足す、無相なるが故なり。乃至無法有法空波羅蜜(多)を具足す、無相なるが故なり。八背捨波羅蜜(多)を具足す、無相なるが故なり。九次第定波羅蜜(多)を具足す、無相なるが故なり。佛の十力波羅蜜(多)を具足し、乃至十八不共法波羅蜜(多)を具足す、無相なるが故なり。是の菩薩は無相なるが故に、自ら是の諸の善法を具足し、亦他人を教化して善法を具足せしむ。無相なるが故に、須菩提よ、若し諸法の相、當に實有なる毫釐許の如くなる者あるべく、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、諸法の無相無憶念なることを知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、亦衆生をして、無漏法を得しむること能はず。何を以ての故に、一切無漏法は無相無憶念なるが故なり。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、無漏法を以て衆生を利益す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法、無相無憶念なれば、云何なる數か是れ辟支佛法、是れ辟支佛法、是れ菩薩法、是れ佛法なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於て云何。無相法と聲聞法とは異なるや不や」。不なり、世尊よ。佛、須菩提に告げたまはく、「無相の法は即ち是れ須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛法、菩薩法、佛法なりや」。須菩提言さく、「是の如し、

世尊よ、須菩提よ、是の因縁を以ての故に、當に皆是れ一切法は無相なりと知るべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の一切法の無相を學し、善法、所謂る六波羅蜜(多)四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至十八不共法を増益するを得。何となれば、菩薩は餘法を以て要となすと、三解脱門、所謂空、無相、無作の如くならず。所以は何んとなれば、一切善法皆三解脱門に入ればなり。何を以ての故に、一切法の自相空、是を空解脱門と名け、一切法の無相、是を無相解脱門と名け、一切法の無相無起相、是を無作解脱門と名ければなり。若し菩薩摩訶薩三解脱門を學せば、是の時、能く五陰相を學し、能く十二入相を學し、能く十八界相を學し、能く四聖諦十二因緣法を學し、能く内空、外空、乃至無法有法空を學し、能く六波羅蜜(多)、四念處、乃至八聖道分を學し、能く佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を學すと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、能く五受陰相を學するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、色の相を知り、色の生滅を知り、色の如を知る。云何が色の相を知ると爲す。云何が色の生滅を知るや。色の生ずる時、從つて來る所なく、去つて至る所なし。若し來不去なれば、是を識の生滅相を知るとす。云何が色の如を知る。是の色の如は生ぜず滅せず、來らず去らず、増せず減せず、垢ならず、淨ならず、是を色の如を知ると名く。須菩提よ、如の名、如の實、虚しからず。如の前後中も亦爾なり、當にして異らず。是を色の如を知ると爲す。云何が受の相を知り、云何が受の生滅を知り、云何が受の相を知る。菩薩は諸受の相、水中の泡の一起一滅するが如くなるを知る。是を受の相を知るとす。受の生滅を知るとは、是の受は從て來る處なく、去つて到る處なき、是を受の生滅を知るとす。受の如を知るとは、是の如は生ぜず滅せず、來らず去らず、増せず減せず、垢ならず、淨ならず、是を受の如を知るとす。云何が想の相を知り、云何が想の生滅を知り、云何が想の如を知る。想の相を知ると

は、是の相は焰水の得べからずして、而も妄に水想を生ずるが如し、是を想の相を知るとなす。想の生滅を知るとは、是の想は從つて來る所なく、去つて至る所なし。是を想の生滅を知るとなす。想の如を知るとは、諸の想の如は生ぜず滅ぜず、來らず去らず、増せず減ぜず、垢ならず淨ならず、實相に於て轉ぜず、是を想の如を知るとなす。云何が行の相を知り、云何が行の生滅を知り、云何が行の如を知るとは、行は芭蕉の葉葉除却するが如く、堅實なることを得ず、是を行の相を知るとなす。行の生滅を知るとは、諸行の生ずるや、從つて來る所なく、去つて至る所なき、是を行の生滅を知るとなす。行の如を知るとは、諸行は生ぜず滅ぜず、來らず去らず、増さず減ぜず、垢ならず淨ならず、是を行の如を知るとなす。云何が識の相を知り、云何が識の生滅を知り、云何が識の如を知るとは、幻師の四種の兵を幻作するが如く、實の識あるとなきも亦是の如し、是を識の相を知るとなす。識の生滅を知るとは、是の識の生ずる時、從つて來る所なく、滅する時去る所なし、是を識の生滅を知るとなす。識の如を知るとは、識は生ぜず滅ぜず、來らず去らず、垢ならず淨ならず、増せず減ぜずと知る、是を識の如を知るとなす。云何が諸の入、眼の眼性空、乃至意の意性空、色の色性空、乃至法の法性空を知り、云何が眼界の眼界空、色の色界空、眼識の眼識界空、乃至意識界も亦是の如しと知るや。云何が四聖諦を知る。苦聖諦を知る時、二法を遠離して、苦諦の不二不別なることを知る、是を苦聖諦と名く。集盡道も亦是の如し。云何が苦の如を知る。苦聖諦即ち是れ如なり。如は即ち是れ苦聖諦なりと知る。集盡道も亦是の如し。云何が十二因縁を知る。十二因縁の不生を知る、是を十二因縁を知ると名くと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時、各各分別して諸法を知らば、將に色性を以て法性を壞し、乃至一切種智性も法性を壞すると無きや。佛、須菩提に告げたまはく、「若し法性の外に更に法あれば、應に法性を壞すべし。法性の外に法得べからず、是の故に壞せず。何を以ての故に、須菩提よ、佛及び佛弟子は法性の



外に法の得べからざることを知る。法得べからざるが故に、法性の外に法有りと言くべからず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて、應に法性を學すべし。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、若し法性を學すれば、學する所なしとなすか」。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は法性を學すれば即ち一切法を學す。何を以ての故に、一切法は即ち是れ法性なればなり」。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因縁の故に一切法即ち是れ法性なりや」。佛の言はく、「一切法皆無相無爲性の中に入る。是の因縁を以ての故に、般若波羅蜜(多)、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法即ち是れ法性なれば、菩薩摩訶薩は何を以ての故に、般若波羅蜜(多)、毘梨耶波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、檀波羅蜜(多)を學し、菩薩摩訶薩は、何を以ての故に、初禪、第二、第三、第四禪を學し、菩薩摩訶薩は、何を以てか、慈悲喜捨を學し、何を以てか、無邊虛空處、無邊色處、無所有所、非有想非無想處を學し、何を以てか、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分を學し、何を以てか、空、無相無作解脫門を學し、何を以てか、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を學し、何を以てか、六神通を學し、何を以てか、三十二相、八十隨形好を學し、何を以てか、學して刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家に生じ、何を以てか、學して四天王天處、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天に生じ、何を以てか、學して梵天王住處、光音天、徧淨天、廣果天、無想天、淨居天に生じ、何を以てか、學して無邊空處に生じ、無邊識處に生じ、無所有處に生じ、非有想非無想處に生ぜん、何を以てか、初發意、第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十地を學し、何を以てか、聲聞地、辟支佛地、菩薩摩訶薩法位を學し、何を以てか、成就衆生淨佛國土を學し、何を以てか、諸の陀羅尼を學し、何を以てか、樂說法を學し、何を以てか、阿耨多羅三藐三菩提を學し、已に一切種智を得、一切法を知るや。世尊よ、諸法の法性中には是の分別なし。世尊よ、將に菩薩は非道中に墮するとならんか。何を以ての故に、世尊よ、法性

の中に是の如きの分別なく、法性中に、是の如きの分別なく、法性中に色なく、受想行識なく、諸の法性も、赤色受想行識を遠離せず、色は即ち是れ法性、法性即ち是れ色なり。受想行識も亦爾り。一切法も亦是の如くなればなり。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、色は即ち是れ法性、受想行識は即ち是れ法性なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行ずる時、若し法性の外に法あるを見ば、阿耨多羅三藐三菩提を求めずと爲す。菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行ずる時、一切法性は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと知る。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行す時、一切法は即ち是れ法性ありと知り已つて、無名相の法を以て、名相を以て説く。所謂る是れ色なり。是れ受想行識なり、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提なり」と。須菩提よ、譬へば、工なる幻師、若くに幻師の弟子の多人の處に立ちて、種種の形色、男女、象馬、端嚴、園林及び諸の盧館、流泉、浴池、衣服、臥具、香華、環珞、簡牘、飯食を幻作し、衆の娯樂を作して以て衆人を樂ましむるが如し。又復人を幻作して、布施、若くは持戒忍辱、精進禪定智慧を修ぜしめ、是の幻師は亦刹利の大家、婆羅門居士の大家、四天王天處、須彌山、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天を幻作して、以て衆人に示す。復梵衆天、乃至非有想非無想天を幻作し、又復須陀洹、斯陀含、阿那含、辟支佛、菩薩摩訶薩の初發意より、檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)を行じ、初地を行じ、乃至十地を行じて、菩薩位に入り、神通に遊戲して、衆生を成就し佛國土を淨め、諸禪解脫三昧に遊戲し、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を行じて、佛身の三十二相、八十隨形好を具足するを幻作して、以て衆人に示す。是の中、無智の人は、未曾有なり、是の人は多能にして巧に衆事を爲して衆人を娯樂せしむ。種種の形色乃至三十二相八十隨形好もて身佛を莊嚴すと嘆す。其の中、有智の士は思惟して言はく、未曾有なり、是の中に實事有るとなし。而も無所有の法を以て、衆人を娯樂せしめ、形相あらしむ。事の事相なく、有の有相なしと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、法性を

離れて法有るを見ず。般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以ての故に、衆生を得ずと雖も、而も自ら布施し、亦人を教へて施さしめ、施法を讃歎し、布施を行するものを歡喜し讃歎す。自ら持戒し、又人を教へて持戒せしめ、自ら忍辱し、又人を教へて忍辱せしめ、自ら精進し、亦人を教へて精進せしめ、自ら禪を行じ、亦人を教へて禪を行ぜしめ、自ら智慧を修し、亦人を教へて智慧を修せしめ、智慧を修するものを歡喜し讃歎す。自ら十善を行じ、又人を教へて十善を行ぜしめ、十善を行する法を讃歎し、十善を行するものを歡喜し讃歎す。自ら五戒を受行し、亦他人を教へて五戒を受行せしめ、五戒の法を讃歎し、五戒を受行するものを歡喜し讃歎す。自ら八齋戒を受け、亦他人を教へて、八齋戒を受けしめ、八齋戒の法を讃歎し、八齋戒を行するものを讃歎し歡喜す。自ら初禪を行じ、乃至自ら第四禪を行じ、自ら慈悲喜捨を行じ、自ら無邊空處、乃至非有想處非無想處を行じ、又他人を教へて行ぜしむ。自ら四念處乃至八聖道分を行じ、自ら三解脱門、佛の十力を行じ、乃至自ら十八不共法を行じ、亦他人を教へて十八不共法を行ぜしめ、十八不共法を讃歎し、十八不共法を行するものを歡喜し讃歎す。須菩提よ、若し法性前後中に異有らば、是の菩薩摩訶薩は、方便力を以ての故に法性を示し、衆生を成就すること能はず。須菩提よ、法性前後中に異なきを以て、是の故に菩薩は般若波羅蜜(多)を行じ、衆生を利益せんが爲めの故に、菩薩道を行するなれしと。

論

問うて曰く、佛は品品の中に、諸法の相に通達するを説きたまり。今須菩提は何を以てか更に問へるや。答へて曰く、是の般若波羅蜜(多)には一定の相なし。無言説の故に、數數聞くと雖も

【六】 第五問、佛は已に各品の中に、善く諸法の相に通達するを説けり。然るを今復た須菩提が更に問へるは何故なるか。

【七】 他本には、問を問に作れり。

猶未だ足らず、是の故に更に問へり。譬へば犢子は大善母の美乳を飲むと雖も、猶止まざるが如し。佛の大慈悲は猶ほ善母の如く、般若波羅蜜〔多〕は美乳の如く、須菩提は犢子の如し。數諸法の相を聞くと雖も、猶未だ厭足せざるなり。

復次に、唯だ佛、一切智のみ、能く諸法實相に通達し、餘人は達すると雖も、究盡すること能はず。

是の故に問へり。餘の菩薩は未だ作佛せず、云何が能く通達せんや。佛、譬喩を以て答へたまはく、

「幻化の人の如きは、三毒、諸の煩惱、結使なく、心心數法なく、内外有漏無漏の法中に攝せざる所、

凡夫の法に墮せず、亦聖果の中に墮せず。是れ須陀洹等、亦能く他心の善惡を發すと言ふことを得

ず、爲す所の變化の事、必ず能く成就せしむ。是の變化は其れ實に垢ならず、淨ならず、六道の攝せ

ざる所、菩薩の身も亦是の如し。三毒等の煩惱なく、是の心心數法は、皆是れ先世の虛誑顛倒の法に

して、因縁の生ずることを知るが故に、信せず墮せず、能く是の如きの行を逐ふ。是を善く諸法の相

に通達すと爲す。是の時、須菩提は能く空を知り、以て佛法を尊重し、貴敬すと雖も、佛法を限量す

ること能はず、故に佛に問へり。「世尊よ一切の色等の法は皆空なると化の如きや」と。佛答へたまは

く、「一切の色等の法は皆化の如し。汝、佛を貴重するが故に敢て空と言はず、我は一切智を以ての

故に、能く諸法の空を説く。餘人は師子の力を貴び、師子は自ら其の力を貴ばざるが如し」と。爾の時

に、須菩提言さく、「若し一切法は畢竟空にして、皆化の如くならば、佛は何を以てか、種種に菩薩

の功德を讚じ、菩薩に因るが故に、三惡道を斷じ、能く衆生を拔出し、涅槃を得せしむるや」と。佛  
反問したまはく、「須菩提よ、汝が意に於て云何。菩薩は本菩薩道を行する時、定んで衆生の五道の  
中より拔出するを見るや不や」と。須菩提言さく、「無し」と。佛、其の心を可として、是の如し、是の如  
し」と宣へり。何となれば菩薩は無生法忍を得る時、一切法の如く幻の如く化の如しと知見すればなり。  
須菩提言さく、「若し爾れは菩薩は何事を以ての故に、六波羅蜜(多)等を行するや」と。佛答へたま  
はく、「若し衆生自ら諸法は空にして夢の如く、幻の如しと知らば、菩薩は則ち功夫なけん」と。  
復次に、若し諸法決定して空相ならば、則ち菩薩は功夫なく、諸法を非實非空ならしむ。諸の語言  
の道を過ぎ、畢竟空にして寂滅相なり。衆生は是の事を知らざるが故に、吾我の心を生じ、惡罪業  
を起し、無量の苦を受く。是の故に菩薩は諸法實相を知り、大慈悲心を生ず。長者に子有り、盲にして  
毒を飲んとす。長者は其の必ず死せん事を知り、種種に方便を起し、遮つて飲ましめざるが如し。菩薩  
も亦是の如く、衆生を見るに顛倒にして明無く、盲の故に三毒を飲めば、則ち大慈悲心を生ず。無量  
阿僧祇劫に於いて、六波羅蜜(多)を修し、佛國土を淨め、衆生を教化す」と。須菩提、是を聞き已り  
て、更に佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切の法は空にして根本なく、夢の如く、幻等の如くな  
らば、衆生は何の處に有つてか住し、而も菩薩は拔出するや」と。須菩提、意に謂へらく、「人の深泥  
に没して、拔出することを得るが如し」と。佛答へたまはく、「衆生は但名相、虛誑、憶想分別の中に

住するのみ。佛意ひたまふに、一切法の中には決定して實なる者無し、但凡夫は虚誑の故に著するのみ。人の闇中に、人に似たる物を見て、是を實の人と謂ひ、畏怖を生ずるが如し。又惡狗の井に臨んで自ら其の影に吠ゆ、水中に狗なく、但だ其の相のみあり、而も惡心を生じて、井に投じて死するが如し。衆生も亦是の如く、四大和合の故に名けて身と爲す。因縁生の識和合の故に動作語言す。凡夫の人は中に於て人相を起し、愛を生じ、悲を生じ、罪業を起して、三惡道に墮すと。菩薩は般若波羅蜜(多)を行ずる時、衆生を憐愍して種種の因縁もて教化し、空法を知り、而して之れを拔出せしめ、是の言を作す、是の法は皆畢竟空にして無所有なり、衆生は顛倒虚誑等の故に、有に似たるが如しと見るも、化の如く、幻の如く、乾闥婆城の如くにして、實事有ることなく、唯だ人の眼を誑惑するのみと。

復次に、一切の法は唯だ名字より和合し、更に餘名あり、頭足腹背の和合の故に、假に名けて身と爲すが如く、髮眼耳鼻口皮骨の和合の故に、假に名けて頭と爲すが如く、諸毛和合の故に、名けて髮と爲し、分分和合の故に、假に名けて毛と爲し、分も亦諸分を相合するが故に微塵と名くるが如し。

問うて曰く、微塵は第一微細の故に、分と作すことを得ず、分無きが故に和合なし。是れ則ち定法なり。是の故に、一切は空にして、定法あることなしと言ふことを得ず。答へて曰く、若し微塵是

【八】第六問、微塵は分なきが故に定法なれば、一切法は空なりと言ひ得ざるにあらずや。

れ色なれば、則ち應に分あるべし。何となれば、一切の色は皆虚空の中にあり、皆十方あればなり。  
 若し微塵是れ色なれば、則ち十分あり。若し十分あれば、云何が是れ極微ならん。若し汝の説くが如  
 く、微塵は分なければ、則ち色に非ず。何となれば色相を出づるが故なり。又復た色を五情の得べき  
 に名く、若し微塵五情の得る所にあらざれば、云何が是れ色なりと知ることを得ん。是の故に、微塵  
 は但だ虚名のみあり、眼見の塵色すら、尙破して空ならしむべし、何に泥んや不可見、不可觸をや。  
 問うて曰く、微塵は細なるが故に、五情の得ること能はざる所ならん  
 も、聖人天眼を得れば、則ち見ん。答へて曰く、天眼にして見ば、細なりと  
 雖も、是れ色相なるが故に、應に分あるべし。若し分なければ、則ち色に  
 あらず。色に非ざれば、則ち天眼も見ず。是を以ての故に、天眼も亦た虚  
 誑の妄見のみ。是の故に、聖人は慧眼を以て、世間を觀じて、則ち得道す。微塵は先に説くが如し。但  
 名のみありて實なし。微塵は無なるが故に、一切法は名字和合するが故に、更に假名のみありて、  
 實定あることなし。而も衆生は妄に貪著を生じ、貪欲瞋恚の因縁の故に、惡業を起し、無量阿僧祇劫、  
 三惡道に在りて苦を受く。若し諸法實に定らば、尙ほ貪欲瞋恚、罪の因縁を作すべからず。何に泥んは  
 んや、虚誑にして無實なるをや。若し能く虚誑の名相を捨てて、空法に著せざれば、則ち涅槃常樂を  
 受けん。

【九】第七問、微塵は細なるが  
 故に、五情の得ること能はざ  
 る所ならんも、聖人天眼を得  
 ば、則ち見得べきにあらずや。

問うて曰く、<sup>二〇</sup>名と相とに何の差別ありや。答へて曰く、名は是れ衆物の字、熱物の字を火と爲すが如し。相とは烟を見て是れ火相と知るが如し。熱は是れ火の體なり。

復次に、五衆和合の中の男女の如きは、是を名と爲し、身貌の男女を分つべき、是を相となす。是の相を見るが故に、名字を作して、名けて男女となす。

問うて曰く、<sup>二一</sup>若し爾らば、名と相とは異なることなけん。所以は何となれば、相を見るが故に名を得、名を知るが故に相を得ればなり。答へて曰く、汝、我が説く所を解

せざるか。先づ男女の貌を見て、然る後名けて男女と爲す、相は本たり、名は末たり。又復た人の眼に色を見るが如し。偏に好む所の相を取りて、

而も著を生ずるも、餘人に於ては則ち然らず。其の能く染著の心を生ずるを以て、是を名けて相とす。

復次に、此の中に、佛自ら名と相との分別を説きたまへり。名とは假の名、名を以て諸法を取る。經中に廣く説くが如し。須菩提問ふ、「若し一切法但名と相のみあらば、菩薩は云何が自ら利し、人を

利せん」と。佛答へたまはく、「若し諸法の根本、定んで有ならば、菩薩は般若を行する時、自らを利し人を利すること能はざらん。何となれば、若し諸法の性、定んで實有ならば、即ち是れ無生なればな

り。何を以ての故に、性は先づ定んで有るが故なり。若し是の法、因縁の和合より生ぜば、即ち是れ

【一〇】 第八問・名と相に何の差別あるや。  
【一一】 第九問、相を見るが故に名を得、名を知るが故に相を得、是の故に名と相とは差別なきにあらずや。



定性なし。若し性定るあれば、即ち因縁の和合を成るす。若し爾れば即ち無生なり。無生の故に無滅なり。無滅の故に罪福なし。無常を知るを以ての故に、即ち罪を捨て福を修す。若し常なれば、縛なく解なく、世間なく涅槃等なけん。是の故に、佛須菩提に告げたまはく、「若し法、定んで有にしてい但だ名相のみにあらざれば、菩薩は般若波羅蜜多の自利人を行せず、禪波羅蜜多等の自利人を行せざらん。無相の故に。是の菩薩は自ら是の善法を具足し、亦善法を以て衆生を利益す。無生を以ての故に。佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸法當に實に毫釐の如き許りも有らば、菩薩は道場に坐する時、一切法の空、無相、無所有を觀じ、阿耨多羅三藐三菩提を成ずること得ること能はざらん。亦能く是の法を以て、衆生を利益すること能はざらん。何となれば、是の菩薩は、道場に坐する時、一切法の第一眞實を觀じて、若し少しも錯らば、應に阿耨多羅三藐三菩提を得べからず、亦能く衆生の爲に是の空、無相の法を説く能はざればなり。所以は何んとなれば、法、若し定んで有らば、佛は云何が衆生を誑はして一切法の無漏。無相、無憶念とせん。

問うて曰く、(三) 四諦の中の三諦は皆な有相なり、苦諦は則ち苦相あり、集諦は則ち集相あり、道諦は則ち道相あり、但滅諦のみ無相なり。又是れ無相涅槃なりと憶念す。汝何を以てか、一切無漏の法は無相、無憶念なりと言ふや。答へて曰く、摩訶衍の法は聲聞法と異り、摩訶衍の法中には、一切の

【三】第一〇問、四諦の中、苦・集・道の三諦は皆相あり、滅諦のみ無相なり、然るを今何故に一切の無漏法は無相無憶念なりと言ふか。

無漏法は無相無憶念なりと説く。

復次に、有相、有憶念は皆是れ虛誑不空なり。若し虚誑不實なれば則ち是れ諸の煩惱漏る。云何が是れ無漏ならん。

復次に、此の三諦は皆滅諦に隨ふ。苦を見ては即ち捨て、集を見ては即ち斷じ、實に定んで道を見るときは、此「そは」滅に趣くが爲の故なり。亦是の道中に住せず、盡く是の住を滅す。滅盡の法は無相無緣なり、云何が憶念あらんや。憶念は皆是れ緣の相にして法に著す。是の故に、無漏法は皆無相無憶念なり。須菩提意へらく、「若し無漏の法是れ第一實にして、無相無憶念ならんば、一切の法性も亦應に無相無憶念なるべし。但凡夫は顛倒の故に相あり、憶念あるなり」と。是の故に、佛に問ふ、「若し一切の法、無相無憶念ならば、云何が是れ聲聞法、是れ辟支佛法、是れ菩薩法、是れ佛法なりと數へん」と。佛、須菩提に反問したまはく、「三乗の法と無相の法とは、異なるや不や」と。須菩提答へて言さく、「諸煩惱滅すれば即ち是れ斷なり、斷は即ち是れ無爲法なり。亦滅道諦即ち是れ無漏無相なりと知る。是の故に三乗は無相の法と異らず」と。佛、復問ひたまはく、「須陀洹乃至佛法は、即ち是れ無相の法なりや」。答へて言さく、「是れ是の因縁を以ての故に、當に知るべし、一切法は皆是れ無相なるを」と。「若し無相ならば、汝云何が難じて諸道ありと言ふや」。正に無相なるを以ての故に、三乗の諸道あり。佛の言はく、若し菩薩能く是の如く無相の法を學せば、則ち能く諸善法、所謂る六

波羅蜜〔多〕、乃至十八不共法を増益せん。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「菩薩は但だ三解脱門に住し、餘法を以て要となさず」と。所以は何んとなれば、三解脱門は是れ實法、餘の四念處等の法は實なりと雖も、皆方便の説なればなり。三解脱門は涅槃に近づき、亦能く一切の實善法を攝す。是の故に、菩薩は應に學すべしと説くなり。

問うて曰く、(二三) 若し菩薩、此の三解脱門を學するに、即ち五衆、十二入、十八界等を學せば、是の三解脱門は、皆空にして無相無分別なり。是の五衆の諸法は、皆是れ有相有分別の法なり。云何が三解脱門を學ぶが故に、是の餘法を學ぶや。答へて曰く、菩薩、是の三解脱門を學べば、則ち三界を出でて、三漏を盡すが故に、諸法の中に於いて、實智慧を得て、通せざる所なし。先來の五衆の中は、皆虛妄邪行なり。今

【二三】 第一一問、菩薩の三解脱門を學するに、餘法を學する理由如何。

此の三解脱門を得るが故に正通達を得。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「菩薩は此の三解脱門無相の法を行する時、色の生を知り、色の滅を知り、色の如を知る。乃至識も亦爾なり」と。經中に廣く説くが如し。須菩提復た問ふ、佛の言ふ所の如く、菩薩は色等の相を知り、色等の生を知り、色等の滅を知り、色等の如を知る。若し是の如く分別せば、將に色性を無みし、法性を壞せん」と。佛答へたまはく、若し法の法性を出づる者あらば、色性は應に法性を壞すべし。一切法の實相を名けて法性と爲す。是の故に一切法皆法性中に入る。色性の實相は即ち是れ法性同一性なり。云何が色性、能く法

性を壞せん」と。佛更に因縁を説きたまはく、「諸佛賢聖は最も信すべくんば、菩薩は應に是の如く法性を學すべし。須菩提、佛に白故に説かず」と。諸佛賢聖は最も信すべくんば、菩薩は應に是の如く法性を學すべし。須菩提、佛に白さく、「若し菩薩法性を學せば、是れ學する所無しと爲す。所以は何んとなれば、法性は無性なればなり」と。佛答へたまはく、法性無性とは、若し菩薩法性を學せば一切法を學すと爲す。若し法性なれば當に有性を別つべし。若し無性はれ性なれば當に但法性を學して一切法を學せざるべし。今法性は實に別性なし、亦無性も無きが故に、遍く一切法を學す。但諸法實相は是れ法性なり。是の故に實相を得れば、則ち正しく遍く一切法を學するなり」と。爾の時に須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法則ち是れ法性なれば、菩薩摩訶薩は何等を以ての故に、六波羅蜜(多)乃至陀羅尼門を學し、何を以ての故に諸法實相即ち是れ法性なるや。若し一切法即ち是れ法性ならば、菩薩は更に何の求むる所かある」と。

復次に、法性の中には、是の六波羅蜜(多)、乃至陀羅尼を分別するとなし。今菩薩分別して是の法を行せば、將に顛倒の中に墮するなげん。佛、須菩提の意を可して答へたまはく、「若し菩薩法性を出でて法有りと思へば阿耨多羅三藐三菩提を求めざらん。何となれば、法性を出でて法有らば、是れ常顛倒なり。無明は轉じて實なからしむべからず。云何か一切法の中の無明を斷じて作佛を得ん。菩薩は一切法よ即ち是れ畢竟空、常寂滅の相なりと知り、戲論なく、名字なし。衆生を憐愍して、方便力

を以ての故に、名相を説く。謂ゆる「是れ色、是れ受想行識、乃至阿耨多羅三藐三菩提なり」と。經中に説く所の幻喻の如し。幻師は即ち是れ菩薩、幻法は即ち是れ六波羅蜜(多)等の諸法なり。是の諸法を行すと雖も、著心なきこと、幻師の種種の物を幻作すと雖も、其の實なきことを知りて、而も著心なきが如し。智者は是れ佛及び大菩薩、無智者は凡夫人及び新發意なり。而して大に歡喜し未曾有なりと歎す。菩薩は菩薩道を行じ、法性を出づと雖も、更に有法を見ず、亦一定の衆生あるを見ず。而も大に自身及び衆生を利益す。經中に説くが如し。是の菩薩は自ら布施等を行じ、亦他人をして布施の法を讚歎し、布施を行するを歡喜し讚歎せしむ。乃至十八不共法も亦是の如し。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「若し法性、先無にして後有ならば、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざらん。亦方便力を以て説くと能はざらん。所以は何んとなれば、若し法性先無後有にして因縁より生ぜば、即ち凡夫の法と異なるなし。若し法性先有後無ならば、衆生及び諸法は則ち斷滅に墮す。法性は先に空なるを以て中後も亦爾なり。智慧力の故に空ならしむるに非ず。衆生及び諸法は、無餘涅槃に入る時を以て、即ち空なるにあらず、本より已來常に空なり。菩薩は衆生を教ふ。何を以てか其の實性を觀せずして而も顛倒に著せんや。若し諸法は畢竟空性なりと觀せば、即ち本より已來常に空にして、今失する所なしと知る。是の如く、般若波羅蜜(多)を行する菩薩は即ち能く衆生を福利す」と。

# 卷の第九十

## 實際品第八十を釋す。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し衆生畢竟して得べからずんば、菩薩は誰の爲めの故に、般若波羅蜜(多)を行す  
るや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩は實際の爲めの故に、般若波羅蜜(多)を行す。須菩提よ、實際と衆生と異なれば、菩薩は般若波羅蜜(多)を行せず。須菩提よ、實際と衆生とは異ならず。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、衆生を利益せんが爲めの故に、般若波羅蜜(多)を行す。

【一】此の品には、法性即ち實際なるが故に、般若を行する旨の明す。他本には品名を「建立品」とせり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩般若波羅蜜(多)を行するは、實際の法を壊せざるを以て、衆生を實際の中に立つ。須菩提よ、佛に白して言さく、「世尊よ、若し實際即ち是れ衆生實際なれば、菩薩は即ち實際を實際に於て建立すと爲す。世尊よ、若し實際を實際に於いて建立せば、即ち自性に於いて建立すと爲す。世尊よ、自性は自性に於いて建立することを得ず。世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、衆生を實際に於て建立するや。」佛、須菩提に告げたまはく、「實際は實際に於て建立すべからず。自性は自性に於て建立すべからず。須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便を以ての故に衆生を實際に於て建立す。實際も亦衆生實際と異ならず、實際と衆生實際とは二なく別なきなり。」須菩提、

佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ諸の菩薩摩訶薩の方便力なる。是の方便力を用て、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、衆生を實際に於て建立するも、又實際の法を壞せらざるや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、方便力を以ての故に、衆生を布施に於いて建立し已れば、布施の先後際の相空となることを説いて是の言を爲す、是の如きの布施は前際空なり、後際空なり、中際も亦空なり、施者も亦空なり、施報も亦空なり、受者も亦空なり」と。諸の善男子善女人、是の一切法は實際の中に得べからず。汝等布施異・施者異・施報異・受者異を念ずること勿れ。若し汝等布施異・施法異・受者異を念ざれば、是の時、布施は善く甘露味を取り、甘露味の果を得。汝等善男子よ、是の布施を以ての故に、色に著すること勿れ。受想行識に著すること勿れ。何を以ての故に、是れ布施は布施相空、施者は施者空、報者は報者空、受者は受者空なればなり。空中には布施も得べからず、施者も得べからず、施報も得べからず、受者も得べからざるなり。何を以ての故に、是の諸法は畢竟して自性空なるが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、方便力を以ての故に、衆生を教へて持戒せしめ、衆生に語つて言はく、汝善男子よ、殺生法を除捨し、乃至邪見法を除捨せよ。何を以ての故に、善男子よ、汝の分別する所の如く、是の諸法は是の如きの性無ければなり。汝善男子、當に諦かに思惟すべし、何等か是れ衆生にして命を奪はんと欲し、何等の物を用てか命を奪はん。乃至邪見もかくの如しと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの方便もて衆生を成熟す。是の菩薩摩訶薩は、即ち衆生の爲めに布施持戒の果報を説く。是の布施持戒の果報は自性空なり。布施持戒の果報の自性空なることを知り已りて是の中に著せず、著せざるが故に心散ぜずして能く智慧を生じ、是の智慧を以て一切結使の煩惱を斷じて無餘涅槃に入る。是れ世俗の報にして第一實義にあらず。何を以ての故に、空中には滅することあることなく、亦滅せしむるも

のもなく、諸法は畢竟して空なり、即ち是れ涅槃なればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生の瞋恚惱心を見て教へて言はく、汝善男子よ、來りて忍辱を修行せよ。忍辱を爲す人は當に忍辱を樂しむべし。汝の瞋る所のものは自性空なり。汝來れ、善男子よ、是の如く思惟せよ、我れ何の法中に於てか瞋る、誰か瞋者なる、瞋る所の者は誰ぞ。是の法は皆空なり、是の性は空なり、法として空ならざるなし。時に是の空は諸佛の作にあらず、辟支佛聲聞の作にあらず、菩薩摩訶薩の作にあらず、諸天・鬼神・龍王・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽等と非ず、四天王天にあらず、乃至他化自在天にあらず、梵衆天にあらず、乃至淨居天にあらず、無邊空處、乃至非有想非無想處諸天の諸作に非ずと。汝當に斯の如く思惟すべし、誰か瞋り、誰か瞋者なる。何等か是れ瞋事なる。是の一切法は性空なり、性空法中に瞋る所有るなしと。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、是の因緣法を以て、衆生を性空に於いて建立し、次第し、漸漸に示教利喜して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ。是れ世俗の法にして、第一實義にはあらず。何を以ての故に、是の性空の中には得者あることなく、得法あることなく、得處有ることなければなり。須菩提よ、是れを實際性空の法と名づく。菩薩摩訶薩は衆生の爲めの故に、是の法を行じ、衆生も亦得べからず。何を以ての故に、一切の法は衆生の相を離るればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆空にして、性空に過ぎたるものなければ、汝等身精進心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること勿れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脱三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること勿れ。諸の善男子よ、是

の法は衆生の相を離るればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆空にして、性空に過ぎたるものなければ、汝等身精進心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること勿れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脱三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること勿れ。諸の善男子よ、是

の法は衆生の相を離るればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆空にして、性空に過ぎたるものなければ、汝等身精進心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること勿れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脱三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること勿れ。諸の善男子よ、是

の法は衆生の相を離るればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆空にして、性空に過ぎたるものなければ、汝等身精進心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること勿れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脱三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること勿れ。諸の善男子よ、是

の法は衆生の相を離るればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆空にして、性空に過ぎたるものなければ、汝等身精進心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること勿れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脱三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること勿れ。諸の善男子よ、是

の法は衆生の相を離るればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆空にして、性空に過ぎたるものなければ、汝等身精進心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること勿れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脱三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること勿れ。諸の善男子よ、是

の法は衆生の相を離るればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆空にして、性空に過ぎたるものなければ、汝等身精進心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること勿れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脱三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること勿れ。諸の善男子よ、是

の法は衆生の相を離るればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆空にして、性空に過ぎたるものなければ、汝等身精進心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること勿れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脱三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること勿れ。諸の善男子よ、是



の一切法性空の中に當に相を礙ふるべきなきを知るべし。無礙法の中に懈怠者なく懈怠法なし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、衆生を教へて性空に住し、二法に墮せざらしむ。何を以ての故に、是の性空の中に、二なく別なきが故なり。是れ無二法なれば、則ち著すべき所なし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、衆生をして精進せしめ、是の言を爲す、諸の善男子よ、勤めて精進せよ。若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは禪定解脫三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門無相無作解脫門、若くは佛の十力、若くは四無礙智、若くは十八不共法、若くは大悲、是の諸法に於て、汝等相を念すること勿れ。何を以ての故に、是の法性は皆空にして、是の性空の法は二相を用つて念すべからざればなりと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以ての故に、衆生を成就し、衆生を成就し已りて、次第に教へて須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得せしめ、菩薩位に入りて、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、衆生の亂心するを見て、方便力を以て、衆生を利益せんが爲めの故に、是の言を爲す、諸の善男子よ、當に禪定を修すべし。汝亂相を生ずるとなく、當に一心を生ずべし。何となれば、是の法性は皆空にして、性空の中には、法の若くは亂、若くは一心として、得べきものあるもなければなりと。汝等是の三昧に住して、所有る作業、若くは身、若くは口、若くは意に、若くは布施し、若くは持戒し、若くは忍辱を行じ、若くは勤めて精進し、若くは禪定を行じ、若くは智慧を修し、若くは四念處を行じ、乃至若くは八聖道分を行じ、若くは諸解脫次第定を行じ、若くは佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大悲、三十二相、八十隨形好を行じ、若くは聲聞道、若くは辟支佛道、若くは菩薩道、若くは佛道、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、若くは一切

種智、若くは成就衆生、若くは成佛國土、汝等當に所願に從つて得べし。性空に住するが故に。是の如く、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以て、衆生を利益せんが爲めの故に、初發意より終に懈廢せず。常に善法を求めて衆生を利益して、佛國土に至りて諸佛を供養し、諸佛に隨つて法を聞き、捨身し、受身し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、遂に望失せざれば、是の菩薩は常に諸の陀羅尼を得て、諸根具足す。謂ゆる身根語根意根なり。何を以ての故に、是の菩薩摩訶薩は常に一切種智を修し、一切種智を修するが故に、一切の諸道皆修す。若くは聲聞道、若くは辟支佛道、若くは菩薩道、若くは菩薩の神通道なり。神通道を行じて、菩薩は常に衆生を利益し、終に忘失せず。是の菩薩は報得神通に住して、衆生を利益し、生死五道に入るも、終に耗滅せざればなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて性空に住し、禪定を以て衆生を利益す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じて、性空に住し、方便力を以ての故に、衆生を利益して是の言を爲す。「汝等諸の善男子よ、一切法の性空を觀ぜよ。善男子よ、汝等當に諸業の、若くは身業、若くは口業、若くは意業をなして、甘露味に趣き、甘露果を得べし。性空の中には法として退する有ることなし。何を以ての故に、性空は退せず、亦退するもの無ければなり。性空は法にもあらず、亦非法にもあざるを以て、無所有法の中に於て、云何が當に退するともあるべけん」と。須菩提よ、菩薩摩訶薩般若波羅蜜(多)を行する時、是の如く衆生を教へて、常に懈廢せざらしむ。是の菩薩は自ら十善を行じ、亦他人をも教へて十善を行ぜしむ。五善戒八戒の成就も亦是の如くす。自ら初禪を行じ、亦他人を教へて初禪を行ぜしめ、乃至第四禪をも亦是の如くす。常に自ら慈心を行じ、亦他を教へて慈心を行ぜしめ、乃至亦捨心も是の如くす。自ら無邊空處を行じ、他人をも教へて無邊空處を行ぜしめ、乃至非有想非無想處も亦是の如くす。自ら四念處を行じ、他人をも教へて四念處をも行ぜしめ、乃至八聖道分、佛の十力、乃至八十隨形如も亦是の如くす。自ら須陀洹果の中

に於て智慧を生ずるも亦是の中に住せず、亦他人をも教へて須陀洹果を轉せしめ、乃至阿羅漢も亦是の如くす。自ら辟支佛道の中に於て智慧を生ずるも亦是の中に住せず、亦他人をも教へて辟支佛道を轉せしむ。自ら阿耨多羅三藐三菩提道に至り、亦他人をも教へて、阿耨多羅三藐三菩提道に至らしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力の故に、遂に離廢せざるなりと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法の性常に空なれば、常空の中に衆生は得べからず、法非法も亦得べからざるなり。菩薩は云何が一切賢智を求めん。」佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、諸法の性皆空なれば、空中に衆生得べからず、法非法も亦得べからざるなり。須菩提よ、若し一切法の性空ならずば、菩薩摩訶薩は性空に依りて、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、衆生の爲めに性空の法を説かざらん。須菩提よ、色は性空、受想行識は性空なれば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、五陰性空の法を説き、十二入、十八界性空の法を説き、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分の性空の法を説き、三解脱門、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法・大善大悲・三十二相・八十隨形好、性空の法を説き、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、一切種智を説き、煩惱を斷じ、性空の法を習ふ。須菩提よ、若し内空の性空ならず、外空、乃至無法有法空の性空ならずば、即ち空性を壞す。是の性空なれば、不常不斷なり。何を以ての故に、是の性空なれば住處なく、亦隨つて來る所なく、また隨つて去る所もなければなり。須菩提よ、是を法の住相と名く。是の中に法なく、聚無く、散なく、増なく、減なく、生なく、滅なく、垢なく、淨なし。是を諸法の相となす。菩薩摩訶薩は此の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、法として發する所あるを見ず、無發無住なり。是れを法の住相と名く。是の菩薩摩訶薩般若波羅蜜(多)を行する時、一切法の性空なるを見、阿耨多羅三藐三菩提を轉ぜず。何を以ての故に、是の菩薩は、法の能く障礙するもの有る事を見ず、當に何處にか疑を生ずべし

ん。是れを阿耨多羅三藐三菩提と名く。性空なれば衆生を得ず、我を得ず、人を得ず、壽を得ず、命を得ず、乃至知者、賢者を得ざるなり。性空の中には色は得べからず、受想行識は得べからず、乃至八十隨形好は得べからず。須菩提よ、譬へば佛の四象、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を化作して、常に是の諸衆の爲に法を説いて、千萬億劫斷ぜざるが如し。

佛須菩提に告げたまはく、「此の諸の化衆は、常に須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得、阿耨多羅三藐三菩提の記を得べきや不や」。須菩提言さく、「不なり。世尊よ、何を以ての故に、是の諸の化衆は、根本實事有ることなきが故に、一切諸法性空にして、亦根本實事なし。何等か此の衆生は、須陀洹果、乃至阿羅漢果を得、阿耨多羅三藐三菩提の記を得ん。」

須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如し。衆生の爲に性空の法を説くも、是の衆生は實に得べからず。衆生の顛倒に墮するを以ての故に、衆生を抜いて不顛倒に住せしむ。顛倒は即ち是れ無顛倒なり。顛倒不顛倒一相なりと雖も、而も多く顛倒し、少なく顛倒せず。無顛倒處の中には、即ち我なく、衆生無く、乃至知者見者なし。無顛倒處の中には、般若波行識無く、十二入なく、乃至阿耨多羅三藐三菩提もなし。是れを諸法の空性と名く。菩薩摩訶薩は是の中に住して、般若波羅蜜(多)を行する時、衆生の相難倒中に於て衆生を拔出す。謂ゆる無衆生な有衆生相中より拔出し、乃至知者、見者相中より拔出し、色なき色相中、受想行識なき受想行識相中より衆生を拔出す。十二入、十八界、乃至一切の有漏も亦是の如し。

須菩提よ、亦諸の無漏法、所謂る、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分有り。是の如き等の法は、無漏法なりと雖も、亦第一義相に如かず。第一義相とは、無作、無爲、無生、無相、無說なり。是れを第一義と名け、亦性空と名け、亦諸佛の道とも名く。是の中に衆生を得ず、乃至知者見者を得ず、色受想行識を得ず、乃至八十隨形好を得ず。

何を以ての故に、菩薩摩訶薩は道法の爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提を求むるにあらず。諸法實相性空の爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む。是の性空の前際も亦是れ性空なり、後際も亦是れ性空なり、中際も亦是れ性空なり。常に性空に

阿耨多羅三藐三菩提を求む。是の性空の前際も亦是れ性空なり、後際も亦是れ性空なり、中際も亦是れ性空なり。常に性空に

して、性空ならざる時は無ければなり。菩薩摩訶薩は是の性空般若波羅蜜(多)を行じて、衆生の衆生相に著するを拔出せんと欲するが故に、道種智を求む。道種智を求むる時、徧く一切道、若くは聲聞道、若くは辟支佛道、若くは菩薩道を行す。是の菩薩は、一切道を具足し、衆生を邪相著より拔出し、佛國土を淨め已りて、其の壽命に隨つて阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、過去十方の諸佛の道は、所謂る性空なり。未來現在十方の諸佛の道も、所謂る性空なり。性空を離れては世間に道なく道果なし。要す諸佛に親近するに從り、此の諸法の性空なるを聞き、是の法を行じて、薩婆若を失せざれ。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、甚だ希有なり、諸の菩薩摩訶薩有つて、此の性空の法を行ずるも、亦性空の相を壞せず。所謂る、色と性空と異なり、受想行識と性空と異なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提と性空と異るとは、「須菩提よ、色は即ち是れ性空なり、性空は即ち是れ色なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提は是れ性空なり、性空は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり」。佛、須菩提に告げたまはく、「若し色と性空と異り、若し受想行識と性空と異り、乃至阿耨多羅三藐三菩提と性空と異ならば、菩薩摩訶薩は一切種智を得ること能はず。須菩提よ、今色は性空に異らず、乃至阿耨多羅三藐三菩提は性空に異らず、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は一切法の性空なることを知り、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求む。何を以ての故に、此の中に法の若くは實、若くは常有ることなければなり。但だ凡夫は色受想行識に著し、凡夫は色相を取り、受相行識相を取り、我心ありて内外の法に著するが故に、後身の色受想行識を受、是の因縁を以ての故に、生老病死の憂憂苦惱を脱することを得ずして五道に往來す。是の事を以ての故に、菩薩摩訶薩は、性空波羅蜜(多)を行じて、色等の諸法相を壞せず、若くは空、若くは不空なり。何を以ての故に、色性空相は色を壞せず、所謂る是の色は色空なり。是の受想行識乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如し。譬へば虚空の虚空を壞せず、内虚空の外虚空を壞せず、外虚空の内虚空を壞せざるが如し。是の如く、須菩提よ、色は色の空相を壞せず、色の空相は色を壞せざるなり。何を以ての故に、是の二法は性ある

ことなければ、能く壞する所あらんや。所謂る是れ空なり、是れ非空なりと。乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如し。須菩提、佛に白くて言さく、「世尊よ、若し一切の法空にして分別するなければ、云何が菩薩摩訶薩は初發意より已來、是の願を爲す、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。世尊よ、若し一切の法分別するなければ、云何が菩薩は發心して、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと言ふや。世尊よ、若し諸法を分別せば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。若し菩薩摩訶薩、二相を行すれば、阿耨多羅三藐三菩提なし。若し分別して二分と作さば、阿耨多羅三藐三菩提なし。若し諸法を二とせず、分別せざれば、則ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。菩提は是れ不二相、不壞相なり。須菩提よ、是の菩薩は色の中に行ぜず、受想行識の中に行ぜざるなり。何を以ての故に、色は即ち是れ菩提なり、菩提は即ち是れ色にして二ならず、分別すべからざればなり。乃至十八不共法も亦是の如し。是の菩提は非取の故に行じ、非捨の故に行ず。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、菩提を非取の故に行じ、非捨の故に行ぜば、菩薩摩訶薩は何處に行するや。」佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於て云何。佛の所化人の如き何處にありて行じ、若くは取中に行じ、若くは捨中に行するや。」須菩提言さく、「世尊よ、非取中に行じ、非捨中に行するなり。」佛の言はく、「菩薩摩訶薩の菩提も是の如く、非捨中に行じ、非取中に行す。須菩提よ、汝の意に於て云何。阿羅漢の夢中の菩薩何處に行じ、若くは取中に行じ、若くは捨中に行するや不や。」不なり、世尊よ、非捨中に行じ、非取中に行するなり。何を以ての故に、阿羅漢は畢竟不眠なり。云何が夢中に菩提を、若くは取中に行じ、若くは捨中に行ぜんや。須菩提よ、菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如く、非取中に行じ、非捨中に行じ、所謂る色の中に行じ、乃至一切種智の中に行するなり。」「世尊よ、將に菩薩摩訶薩は、十地を行ぜず、六波羅蜜(多)を行ぜず、三十七助道法を行ぜず、十四空を行ぜず、諸禪定解脫三

味を行ぜず、佛の十力、乃至八十隨形好を行ぜずんば、五神通に住し、佛國土を淨め、衆生を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を得ること無けん。」

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し。是の如し。汝の言ふ所の如く、今菩薩は菩提の處行なしと雖も、若し十地六波羅蜜(多)、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分、空無相無作解脫、佛の十力、乃至八十隨形好を具足せず。

常捨行、不誑法、不錯謬法、是の諸の法を具足せざれば、終に阿耨多羅三藐三菩提を得ず。此の菩薩摩訶薩は、色相中に住し、受想行識相中に住し、乃至阿耨多羅三藐三菩提相中に住して、能く十地を具足し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。是の相は常に寂滅にして、法として能く増し、能く減し、能く生じ、能く滅し、能く垢き、能く淨く、能く得道し、能く得果する

あることなし。世諦の法なるが故に、菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得るは第一實義にあらず。何を以ての故に、第一義中には色有ることなく、乃至阿耨多羅三藐三菩提なく、又阿耨多羅三藐三菩提を行するものもなければなり。是の一切の法は皆世諦を以ての故に、第一義にはあらずと説く。須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より已來、阿耨多羅三藐三菩提を行す

るも、菩提も亦増さず、衆生も亦減せず。菩薩も亦た増減なし。須菩提よ、汝の意に於て云何。若し人初めて得道する時、世間三昧に住し、無漏根成就し、若くは須陀洹果、若くは斯陀含果、若くは阿那含果、若くは阿羅漢果を得れば、汝爾の時に、若くは夢、若くは心、若くは道、若くは道果を所得する有りや不や。」

須菩提言さく、「世尊よ、得ざるなり。」佛、須菩提に告げたまはく、「云何が當に阿羅漢果を得たる者と知るべきや。」世尊よ、世諦の法なるが故に、分別して阿羅漢道と名く。佛の言はく、是の如し、是の如し。須菩提よ、世諦の故に説いて菩薩と名け、説いて色受想行識乃至一切種智と名く。是の菩提の中には、法の若くは増、若くは減を得べきなし。(そは)諸法の性空なるを以ての故なり。諸法性空尙ほ得べからず、何に況んや初發心乃至十地心・六波羅蜜(多)・三十七助道法・空三昧・無

相無作三昧、乃至一切の佛法を得んや。當に所得あらば、是の處あることなるべし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を行じ、阿耨多羅三藐三菩提の法を得て衆生を利益するなり。

釋して曰く、上品の中に、須菩提は種種の因縁もて難せり。若し諸法空ならば、云何が五道の

生死、善不善の法あらんと。今衆生を難じて是の言を作す、「世尊よ、若し衆生畢竟不可得ならば、菩薩は誰が爲の故に般若を行するや。先に法を難じて衆生の爲にし、今は衆生を難じて法の爲にするが故に」と。佛答へたまはく、「實際の爲の故に、菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行す」と。須菩提意に謂へらく、「菩薩は衆生を度せんが爲の故に般若波羅蜜〔多〕を行す」と。佛意ひたまはく、「衆生は假名にして虚誑、畢竟不可得なり。菩薩は一切實法の爲の故に、般若波羅蜜〔多〕を行する實法は即ち是れ實際なり」と。

【二】 第一問、一切の菩薩は衆生の苦惱を見て、衆生を度せんが爲の故に大悲心を發せば、今何を以てか實際と爲すと言ふや。

問うて曰く、一切の菩薩は、衆生の苦惱を見て、衆生を度せんが爲の故に大悲心を發せば、今何を以てか實際と爲すと言ふや。答へて曰く、初發意の菩薩は、但た衆生の苦を滅せんが爲の故に大悲心を發す。苦とは、所謂る老病死等、及び身心の衰惱なり。云何が是の苦を滅せん。「そは」苦の由つて生ずる因縁を尋ぬるが故なり。佛、十二因縁の中に説きたまへるが如くんば、何の因縁の故に老病死ありや。生あるを以ての故なり。



問うて曰く、一切衆生皆生の因縁は是れ苦なりと知らば、菩薩は何の奇特かあらん。答へて曰く、衆生は生に由つて苦あることを知らず、若し苦に遭ふ時は、但だ人を怨恨し、自ら將た適せざれば、初め生を怨まず。是を以ての故に、結使を増長し、重ねて生法を増して、眞實の苦因を知らざるなり。人あり鞭杖刀兵、諸の愁惱の苦なくして、而も死苦あり、此の死は何の所よりか來る。生に従つて而も有るなり。

復次に、鞭杖刀兵の愁惱は皆生に由るが故にあり。餘法は或は苦あり或は苦なし。是の生法は必ず定んで苦有り、正使、大智及び諸天は、生有れば必ず死あり、死あれば必ず苦あり。是の故に、生は定て是れ苦の本なりと知る。草木の生有るが故に必ず焚燒すべきが如し。若し當に生ぜずんば、猛火大風ありと雖も、燒害する所なし。菩薩は既に苦の因縁を得、復生の因縁を推す。生の因縁とは有なり。(四) 有に三種あり、欲有と色有と無色有となり。是の三有に著して善惡業を起す、是れ生因なり。有の因は四種の取なり。取因縁は愛等の諸煩惱なり。小なる者は能く未だ業を起さざる故に名けて愛となし、増長して能く業を起すが故に名けて取と爲す。欲取、見取、戒取、我語取、是の四事に取著するが故に能く種種の業を起す。愛の因縁は三種の受なり。受の因縁は眼等の六種の觸なり。觸は受等の諸の心數法に名く。情塵識の三事都合するが故に心中に受等の心數法を生ず。根本に三事都合の故

【三】 第二問、一切衆生皆生の因縁は是れ苦なりと知らば、菩薩は何の奇特かあらん。

【四】 三種の有——(一)欲有、(二)色有、(三)無色有。

に觸を生ずと雖も、六情の依止住處と爲すが故に但だ六入を説く。六入の因縁は名色なり。六入は即ち是れ名色の分なりと雖も、成就を六入と名け、未だ成就せざるを名色と名く。色成就を五入と名け、名成就を一入と名く。是の胎中の時、因縁次第を名色と名け、名色の因縁は是れ識なり。若し識胎に入らざれば、胎は初めに則ち爛壞せん。識を中陰と名く、中の五衆は是の五衆細なるが故に但だ名けて識と爲す。若し識入らずして胎成せば、一切和合の時のごとく、皆應に胎を成すべし。

問うて曰く、識は何の因縁の故に胎に入るや。答へて曰く、行の因縁なり。行は即ち是れ過去三種の業なり。業は識を將ゐて胎に入らしむ。風の焰を吹き絶ち、空中に去るも、焰は則ち風に依止するが如し。先世に人身と作る時、然も六識の故に命終る時、業識を將ゐて胎に入らしむ。

問うて曰く、上に業を何を以てか有と名け、今業を何を以てか行と名くるや。答へて曰く、上は是れ今世の業なり、未來の有の爲の故に名けて有と爲す。今の業は過去世に已に滅盡して、但だ名のみあるを名けて行と爲す。是の行の因縁を無明と名づく。一切の煩惱は、是れ過去の業因縁なりと雖も、無明は是れ根本なるが故に但だ無明と名く。今世現在は愛取に著すること多きが故に愛取の名を受け、過去世の中には是れ疑邪見處の故に但だ無明と名く。今一切の苦惱の根本を得るは是れ無明なり。

【五】 第三問、識の胎に入る理由如何。  
 【六】 第四問、上には業を有と名け、今また業を行と名くる理由如何。

問うて曰く、無始の生死は展轉して甚だ多し。何を以てか、止た無明に齊るや。答へて曰く、此の事は先に已に答へたり。菩薩思惟すらく、人の苦より脱せんことを得んが爲の故に、苦の因縁を求む。衆生の過去現在老死等の苦は除くことを得べからず、未來世の老死苦を除かんが爲に、相續を斷じて復た生せしめず。良醫も過去の病は治すべからず、現在の病も亦治すべからず、服薬は但だ能く應に起るべきの病を治し、其の冷熱を破して、復た起らしめざるが如し。又火を失して舍を燒くが如し。已に過ぎ去れる火の爲の故に勤めて滅せず、現在の火の爲の故に勤めて滅せず、但未來の火をして更に燒かしめざらんが爲の故に勤めて滅するなり。良醫、滅火、人勤、方便も亦虚からず。菩薩の衆生の苦惱を滅するも亦是の如し。過去の苦已に滅すれば亦能く現在に苦惱する所なし。先世の因縁は成就せるが故に却くべからず。但未來世の老死等の苦の因縁を破するが故に、是の生法老死等の苦を破し、自然に永く滅す」と。是の故に菩薩は未來世の老死等の苦の因縁生を滅せんと欲して、現在に有等の八因縁を得。一には有漏業と名け、二には現在世の諸の煩惱。所謂の四取一愛に名く。是の二種の煩惱は二の心數法より生ず。所謂の受と及び觸となり。觸は能く一切の心數法を生じ、受より前に生ずるが故に名を得。觸は是れ受の因縁なり、受は能く三毒を生ずと雖も、一切衆生是の舊煩惱を愛す。觸の因縁は内の六入なり、先に説くが如し。外の六入ありと雖も、内の六入なきが故に、觸等の心數法に生ぜざ

【七】 第五問、無始の生死は展轉して甚だ多し、何を以てか止た無明に齊るや。

るなり。是の故に内の六入の名を得。名色は是れ六入の因縁なり、此の中に説くが如く、初めて胎に入るの識は是れ名色の因縁なり。識と名色とは胎中に在り、此の中に六入有りと雖も、未だ成就せず、未だ用ふべからざるが故に、未だ名字を得ず。既に生ずるの嬰孩にして未だ所作あること能はず。但だ六入のみありて、轉じて大にして六觸あり。小兒の火を踏み、氷を履むも、但だ觸あるのみにして、未だ苦樂を知らず、轉じて大にして苦樂を受くるも、未だ深く愛著なきが如し。小兒は瞋ると雖も未だ殺等の惡業を起すと能はず、喜ぶと雖も未だ施等の善業を起すと能はざるが如し。年成人に及んで苦を得ては悲を生じ、樂を得ては愛を生ず。樂具を求むるが故に、欲等の四取を取り、取る時能く善惡の業を起す。若し先に一世の無明業因縁を知れば、則ち億萬世も知るべし。譬へば、現在の火の熱するが如く、過去未來の火も亦是の如し。若し無明の因縁は、更に其の本を求むれば則ち無窮なり。即ち邊見に墮し、涅槃の道を失す。是の故に當に求むべからず。若し更に求めば則ち戲論に墮す、是れ佛法にあらず。菩薩は無明を斷せんと欲するが故に無明の體相を求む。求むる時は即ち畢竟空に入る。何となれば佛經に「無明の相は内法も知らず、外法も知らず、内外法も知らず」と説けばなり。菩薩は内空を以て内法を觀するに内法は即ち空なり、外空を以て外法を觀するに外法は即ち空なり、内外空を以て内外法を觀するに内外法は即ち空なり。是等の如く、一切は是れ無明の相なり。先品、徳女經中に破無明を廣く説くが如し。

復次に、菩薩無明の體を求むるに、即時に是れ明なり。所謂る諸法實相を名けて實際と爲す。諸法を觀するに如幻如化なり。衆生は顛倒因縁の故に諸煩惱を起し、惡罪業を作して、五道を輪轉し生死の苦を受く。譬へば、蠶の糸を出し、自ら裹み縛して沸湯火炙に入るが如く、凡夫衆生も亦是の如し。初めて生ずる時未だ諸の煩惱あらず、後自ら貪欲瞋恚等の諸の煩惱を生ず。是の煩惱の因縁の故に眞の智慧を覆ひ、身を轉じて地獄の火燒湯炙を受く。菩薩は是の法の本末皆空なるを知る。但だ衆生は顛倒して錯るが故に是の如きの苦を受く。菩薩は是の衆生に於て大悲心を起し、是の顛倒を破せんと欲するが故に、實法を求めて般若波羅蜜〔多〕を行じ、實際に通達し、種種の因縁もて衆生を教化し、實際に住せしむ。是の故に實際に住して咎なきなり。

復次に、經の中に説く、「若し衆生と實際と異らば、菩薩は當に般若波羅蜜〔多〕を行ずべし。異なるれば、實際は是れ畢竟空にして、衆生實際は是れ決定有なり」と。若し爾れば應に難すべし、若し諸法實際の相空なれば、菩薩は云何が衆生の爲の故に是の實際を修するや。若し衆生は畢竟空にして、實際は定んで有ならば、衆生なければ則ち利益する所なけん。誰の爲の故に實際を行せん。今衆生實際は實際と異らざるが故に般若波羅蜜〔多〕を行じ、狂惑顛倒の凡夫を覺悟せんと欲するが故に、般若波羅蜜〔多〕を行じて、衆生をして實際の中に住せしめて、而も實際を壞せざるなり。是の時、須菩提更に問ふ、「若し衆生際と實際と異らざれば、云何が實際を以て實際に著するや、自性は應に自性の中に

住すべからず、指端は自ら指端に觸るる能はざるが如し」と。佛是の意を可とし、菩薩は方便を以ての故に、衆生を實際に建立し、而も衆生と實際の一異は亦不可得なりと。若し是れ一なれば、則ち實際の相を壞す。何んとなれば、是の一性を得るが故に、菩薩は是の二法は、一にあらざらず、二にあらざらず、亦一にあらざるにあらざらず、亦二にあらざるにあらざらず、畢竟寂滅にして戲論相なしと知る。菩薩は大悲心を生じ、但だ衆生を拔出して、顛倒より離れしめんと欲するが故に衆生を教化す。又問ふ、「云何が方便と名くるや」と。佛の言はく、「菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、方便力を以ての故に、衆生を檀の中に建立して是の檀を説く」と。實際後際空なり、中際も亦爾なり、經中に廣く説くが如し。菩薩實際を知れば衆生の邊に到る。先の檀品の中に説くが如し。衆生は聞き已つて發心し、煩惱を拆薄して深く布施に著す。菩薩衆生を憐愍して、我れ慳中より拔出するに今復た布施に著す。衆生若し布施を受け、福盡き諸の苦惱を受け、又福德富貴の因縁を受けて、大罪を作すを得て則ち地獄に墮す。是の故に是の衆生の小許の時樂を得て、苦を受くること長久なるを慙む。是の故に菩薩は爲に布施の實相所謂る畢竟空を説いて、是の言を作す、「是の布施は過去には已に滅して見るべからず、得るべからず、用ふべからず、但だ憶念すべきのみ、夢の見る所の如きと異なるなし。未來は未だ生ぜざるが故に、亦所有なく、畢竟空なり。是の布施は先後際なきが故に中際も亦なきなり。破六塵の中、破色法の中に説くが如し。現在の布施は眼に見ゆと雖も、分分に破折して、乃ち微塵に至れば、不可得

なり。布施は三世空なり。施者、受者、果報も亦是の如し。菩薩施者に語りて言はく、「布施等の法は是れ初めて佛法に入るの門なり。實際の中には實際の相も亦無し、何に況はんや布施をや。汝布施等の法を念ずる莫れ著する莫れ」と。若し念せず著せざれば布施の體相の如し。是の如きの布施は則ち甘露味と甘露果とを得。甘露味とは是れ八聖道分にして、甘露果とは是れ涅槃なり。菩薩は實際の中に住すと雖も、方便力布施門を以て衆生を度す。餘の波羅蜜「多」も亦是の如し。經中に廣く説くが如し。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法性空ならば性空の中には法及び法もなく、亦た衆生もなし。菩薩は云何が是の空中に住して一切種智を求むるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は性空の中に安立するが故に、能く是の布施等の諸法を行す。又問ふ、「性空は一切法を破し、悉く盡して餘すとなし。云何が菩薩は性空の中に住して、能く布施等の諸の善法を行するや」と。佛、須菩提の意を可とし、而して因縁を説きたまはく、「菩薩は諸法實相を知りて此の中に住し、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。諸法實相とは、即ち是れ性空なり。若し一切法性不空なれば、菩薩は應に是の諸法性空の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得べからず」と。已に衆生の爲に性空の法、所謂色性空、受想行識性空なりと説く。乃至衆生の爲に一切種智は煩惱の習を斷する性空の法なりと説く。

復次に、須菩提よ、十八空、若し性不空なれば、是れ空體を壞すと爲す。何となれば十八空は能く一切の法をして空ならしむればなり。若し自ら不空なれば、即ち虚誑と爲す。又若し不空なれば則ち

常邊に墮し、著處に能く煩惱を生ず。性空は實に住處なく、從來する所なく、去つて至る所なし。是を常住の法相と名く。常住の法相は是れ性空の異名なり、亦諸法實相と名く。是の相中には生なく、滅なく、増なく、減なく、垢なく、淨なし。菩薩は此の中に住して、一切法の性空を見、阿耨多羅三藐三菩提に於いて、退かず、疑はず、悔いざるなり。何となれば諸法の能く障礙するものを見ず、方便力を以ての故に、衆生を度すればなり。方便力とは、畢竟して法もなく、亦衆生もなきに、而も衆生を度するなり。

問うて曰く、若し衆生及び法は、従本已來た無爲ならば、誰か方便を作し、誰をか度脱すと爲すや。答へて曰く、性空は名空にして、性も亦無なり。汝何を以てか是の空の性相を取つて難をなすや。若し性に空相あらば、應當に難を作すべし。

復次に、諸法實相とは是れ性空なりと知ることを得ば、是の人は則ち諸法の性空にして、法なく、衆生なしと知る。凡夫は未だ實相を得ざるが故に、種種憶想分別す。譬へば、狂人の妄に所見あるを以て、實有と爲すが如し。凡夫狂人を度せんが爲の故に衆生の爲に説いて、狂法の中には是れ諸法の分別あり。實相の中には則ち無し。菩薩は本願を滿さんと欲するが故に、又性空に著せざるが故に、衆生を度すと言ふも、此の中應に難すべからず。

【八】 第六問、若し衆生及び法は、従本已來無爲ならば、誰か方便を作し、誰をか度脱すと爲すや。



復次に、此の經の中に、佛自ら因縁を説きたまはく、「性空の中には衆生は不可得なり、知者見者も亦不可得なり、乃至八十隨形好も亦是の如し。而も菩薩は是の法を立てて衆生の爲に、是の世諦を説くが故に是れ實にあらざ」と。此の中に佛譬喩を説きたまはく、「佛化人と作り、化して又四部の衆と作り、而も爲に法を説くが如きは、道を得るものありや不や」と。須菩提言さく、「不なり。何んとなれば、定んで根本實事なくんば、何ぞ須陀洹を得、乃至佛を得る者あらんや。菩薩の法を説いて衆生を度するも亦是の如し」と。衆生は定んで實あるとなし。但だ顛倒の中に於て、衆生の著を拔出せんと欲す。無顛倒の中には、顛倒の法も無く、亦た處所もなく、此の中には衆生もなく、乃至知者見者もなし。空性は一相なりと雖も、而も顛倒は多く、不顛倒は少なし。是の故に、是の性空不顛倒の法を貴ぶ。菩薩は此の中に住して、但だ衆生の妄想を破して衆生を破せず。又無漏法乃至八聖道分は是れ無漏なりと雖も、生滅を以ての故に第一義に如かず。須菩提は、是れ性空なり、一切諸佛は但だ是の道ありて更に異道なし。何となれば、諸佛は皆實智不壞不異の法を求めて、十力四無所畏諸の異法有りと雖も名けて一道と爲さず。所以は何んとなれば、此は皆是れ有爲の法にして轉變して無常なるが故なり。是の性空の中には、衆生もなく、亦色等の諸法もなし。菩薩は菩薩道の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めず、但だ性空の爲の故なり。問うて曰く、何等か是れ性空にして、何等か是れ菩薩道なるや。答へて曰く、第一義の中には、

【九】第七問、性空とは何ぞや、菩薩道とは何ぞや。

分別なく、世諦の中には、分別あり、諸法實相を性空と名づく。餘の布施等、乃至八十隨形好は是れ菩薩道なり。是の法を行すと雖も、此の法の爲に性空を求むと爲さざるが故なり。是の故に、菩薩道の爲の故に是の性空を行ぜずと説く。先も亦性空、中も亦性空、後も復性空なり。本より已來、常に空にして作者あるとなし。是れ福徳力の故に空ならしむるに非ず、亦智慧力の故に空ならしむるに非ず、但だ性自ら爾るが故なり、諸佛賢聖は大禮徳智慧方便力を以ての故に、衆生心中の顛倒を破りて性空を知らしむ。譬へば虚空の性は常に清淨にして、垢闇に著せざるも、或る時は風雲闇翳なれば、世人便ち虚空不淨なりと言ひ、更に猛風吹いて風雲を除けば便ち虚空清淨なりと言ふが如し。而も虚空には實に垢もなく淨もなし。諸佛も亦是の如し、説法の猛風を以て、顛倒の雲翳を吹却して清淨を得しむ。而も諸法の性は常に自ら無垢無淨なり。是の菩薩は一切法の性空を知るが故に、能く一切種道を行じて衆生を度し、一切の道を具足し、佛國土を淨め、衆生を教化し、阿耨多羅三藐三菩提を得るとき、意に隨つて壽命す。意に隨つて壽命すとは、菩薩は無生忍法を得て、如幻の菩薩道に入り、能く一時に變化して、千億萬身と作り、十方に周遍して、一切菩薩道を具足し行す。處處の國土の中の衆生の壽命の長短に隨つて其の形を受くるなり。釋迦文尼佛の是の國土に於ては壽命百年なるも、莊嚴佛國に於ては壽七百阿僧祇劫なるが如し。佛法は五不可思議の中に於て、是れ第一不可思議なり。佛須菩提に告げたまはく、「一切法の性空は是れ諸佛の眞法なり。若し是の法を得れば、則ち名けて佛

と爲す。若し是の法を説けば、名けて衆生を度すと爲す。三世の佛も皆亦た是の如し。是の性空を離るれば、則ち道なく果なし。道とは八聖道分、果とは七種の果なり。所以は何んとなれば、若し性空を離れて、別に定法あれば、則ち相を取つて著を生ず、著するが故に、亦離欲なく、離欲なきが故に、則ち道果なし。若し性空を離るれば、布施持戒を行じ、慈悲等の善法力を行するが故に、惡道に墮せずして、天に生ずと雖も、果盡くれば還た惡道に墮し、本の如くにして異ならず。性空の法を行じ、亦性空に著せざるは即ち是れ涅槃なり。餘法を行すれば著心を生じ、退失あるも、若し此の法を行すれば退失なし」と。須菩提、歡喜して佛に白して言さく、「甚だ希有なり、菩薩は是の性空の法を行するも亦性空の相を壞せず」と。佛答へたまはく、「若し色等の法と性空と異なれば、菩薩は則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ざらん。何となれば空法あれば則ち離を得べからざればなり。須菩提よ、今色等の諸法は實に空なり、菩薩は是の法を知り已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得。所以は何んとなれば、此の中には一法の定んで是れ常なるものあるなく、但凡夫我心を生ずるが故に内外の法に著し、生老病死を脱することを得ざればなり。是の故に菩薩は是の性空を行じて、六波羅蜜〔多〕に和合して、色等の諸法の相を壞せず。所謂る、若くは空、若くは不空、若くは空不空、若くは非空非不空なり」と。是の如く諸法の相を示すとを作さず、是を不壞と名く。所以は何んとなれば、色の實相即ち是れ性空なり、性空云何ぞ自ら性空を壞せん、乃至菩提も亦是の如し。是の中に佛譬喩を説きたまは

く、内の虚空の外の虚空を壊せざるは、同體なるを以ての故なるが如しと。須菩提問ふ、「世尊よ、

若し諸法性空にして別異なくんば、菩薩は何の所に於てか、阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と。佛其の

意を可として、「是の如し」と言へり。若し二相ありと分別せば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ず。阿

耨多羅三藐三菩提を實智慧と名く。色法の中に於て行せず、所謂る不著不染なり。所以は何んとなれ

ば、是の智慧は色を取るが故に行することゝ爲さず、是の故に色中行せず。須菩提復問ふ、「若し

菩提は中行を取らず、中行を捨てずんば、當に何れの所に於てか行せん。取を實法と名け、捨を空法

と名く。取を著行と名け、捨を不著行と名く。取を二行と名け、捨を不二

行と名く、是の如き等に分別す」と。佛反問したまはく、「須菩提よ、汝の意に

於て云何。佛は所化の人なり、何處に行すとせん」と。須菩提の言さく、「是

の化人は行する處なし。化人は心なく心數法もなきが故なり。菩薩も亦是の如し」と。復問ひたまは

く、「汝が意に於て云何。阿羅漢の夢中の菩提は何處に在つてか行すとすや」と。須菩提言さく、「阿

羅漢は尙ほ眠らず、何に況んや、夢中の菩提に行處あらんや。」

問うて曰く、「二〇菩提に三種あり。阿羅漢の菩提と、辟支佛の菩提と、佛の菩提となり。阿羅漢の菩

提は有漏心中、無記心の中に在つて行せず、但だ無漏心の中に在りて行す。佛は何を以ての故に、

阿羅漢の夢中の菩提は何處に行すと問ひたまひしや。答へて曰く、阿羅漢は、是れ一切漏盡の聖人に

【二〇】第八問、佛が阿羅漢の夢中の菩提は何處に在つて行するやと問ひ給ひし理由如何。

して即ち夢なし。佛は必ず處なきを以ての故に、問うて必ず行法なきことを明さんと欲す。

問うて曰く、(二)乃至佛猶尙眠あり、何を以てか之れを知る。佛嘗て阿難に命じて、汝四襲の優多

羅僧を敷け、我れ小らく眠らんと欲す。汝諸の比丘の爲に法を説けと。又薩遮尼乾、佛に問ふ、

佛自ら晝日眠あることを念するや、不やと。佛の言はく、春の末、夏の初めは、時に熱を以ての故

に、小しく眠息す、食患を除かんが故なりと。薩遮尼乾、佛に白さく、餘人は晝日眠るを是れ癡相な

りと言ふありと。佛の言はく、汝置け、汝癡相を別たす。諸漏能く生じ、後身相續して斷せざる、是

を癡相と名く。常に眠らずと雖も、亦是れ癡なり。若し諸漏永く滅して餘

すことなければ、眠ると雖も癡と名けず。是の如き等は、經中に處處に説

けり。須菩提は何を以てか阿羅漢すら尙ほ眠らずと言ふや。答へて曰く、

眠に二種あり、一には眠つて夢みると、(三)二には眠つて夢みざるとなり。阿

羅漢は安隱にして樂に著するが故に眠るにあらず、但だ四大身法を受けて當に食つて息ひ、眠覺有る

べし。是の故に少許の時息を名けて眠と爲し、夢眠と爲さず。故に須菩提は阿羅漢すら尙眠らずと言

へり。有人の言はく、離欲の者は禪定を得て、色界繫の四大身中に入り、身心歡樂なれば即ち眠ある

ことなし。慧解説の阿羅漢は色界の四大身中に入らざるが故に眠有り。此の故に、須菩提は阿羅漢す

ら尙ほ眠らずと言へりと。是の故に阿羅漢には眠有り、不眠あり。佛は方便力を以て、衆生を度せん

【二】第九問、須菩提が阿羅漢すら尙ほ眠らずと言ひし理由如何。  
【三】二種の眠。

爲に人法を受るが故に眠を現す。須菩提復た問ふ、若し行せざれば、云何が菩薩は一地より十地に至り、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得んやと。佛其の意を可とし、菩提は處行なしと雖も、未だ六波羅蜜〔多〕の諸法を具足せざれば、終に阿耨多羅三藐三菩提を得ず。是の菩薩は色相に住し、乃至菩薩相の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得。色等の法を捨てず、亦菩提の相に著せず、色等の法は即ち是れ菩提なり、常寂滅にして法なしと知る。若くは増、若くは減、若くは垢、若くは淨、若くは得道、若くは得果は、但だ世諦の故に、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得と説く。第一義の中には色、乃至菩提有るとなしと。佛是の事を明さんと欲するが故に反問したまはく、須菩提よ、汝が意に於て云何。汝煩惱を斷じて道を得る時、所得ありや不や。所謂る夢等の五衆、若くは道、若くは道果の如きは、決定して一法なりや不やと。須菩提言さく、得ざるなりと。所以は何んとなれば、須菩提意へらく、無相門の中に住して道に入る、云何が相を取らんと。佛の言はく、汝若し乃至微細少法だも得ずんば、云何が説いて、汝は阿羅漢と爲すやと。須菩提言さく、世諦法の故に説いて阿羅漢と言ふ。凡夫顛倒法の中には、得あり、失あり、衆生あり、法ありと。佛の言はく、菩提も亦是の如し。世諦法の故に、菩薩ありと説き、色等乃至菩提ありと説くも、菩提の中には、定法あることなく、亦衆生もななく、亦菩提もなし。菩薩は是の菩提には増あることなく、減あるとなしと観ず。所以は何んとなれば諸法性は是の如くなればなり。菩薩も亦是の諸法の性を得ず、何に況んや初發意乃至十地及び六波羅

蜜〔多〕、三十七品、乃至十八不共法あらんやと。當に所得あるべくんば、是の處あるとなし。所以は  
何んとなれば、諸法の性は是れ一切法の根本なるすら尙不可得なり、何に況んや、六波羅蜜〔多〕等あ  
らんや。是の作法は當に定實あるべし。是の如く、菩薩は是の諸法の性を行じて、佛を得る時、能く  
大に衆生を利益す。

# 卷の第九十一

## （二）照明品第八十一を釋す。

經

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜(多)、十八空、三十七助道法、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を行するも、菩薩道を具せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ると能はず。世尊よ、菩薩摩訶薩は、當に云何が菩薩道を具足して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得べきや」と。佛、須菩提に告げて言は

く、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時、方便力を以ての故に、檀波羅蜜(多)を行するに施を得ず、施者を得ず、受者を得ず、亦た是の法を遠離せずして、檀波羅蜜(多)を行す。是れ則ち菩薩道を照明するなり。是の如く、須菩提よ、菩薩は方便力を以ての故に、菩薩道を具足し、具足し已つて能く阿耨多羅三藐三菩提を得。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、乃至十八不共法も亦た是の如し」と。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を習ふや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行するや、方便力を以ての故に色を壞せず色に隨はず。何となれば是の色性は、無なるが故に壞せず隨はず、乃至識も亦是の如し。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行するや、方便力を以ての故に檀波羅蜜(多)を壞せず隨はず、何となれば、檀波羅蜜(多)の性は無なるが故に、乃至十八不共法も亦た是の如し。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は自性の壞すべく隨ふべきもの無くんば、云何が菩薩摩訶薩は能く般若波羅

【一】此の品には、菩薩道を具足する義を明す。他本には、品名を「具足品」又は「成就辨生品」とせり。

蜜(多)を具足して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得べきや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時、方便力を以ての故に、檀波羅蜜(多)を行するに施を得ず、施者を得ず、受者を得ず、亦た是の法を遠離せずして、檀波羅蜜(多)を行す。是れ則ち菩薩道を照明するなり。是の如く、須菩提よ、菩薩は方便力を以ての故に、菩薩道を具足し、具足し已つて能く阿耨多羅三藐三菩提を得。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、乃至十八不共法も亦た是の如し」と。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を習ふや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行するや、方便力を以ての故に色を壞せず色に隨はず。何となれば是の色性は、無なるが故に壞せず隨はず、乃至識も亦是の如し。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行するや、方便力を以ての故に檀波羅蜜(多)を壞せず隨はず、何となれば、檀波羅蜜(多)の性は無なるが故に、乃至十八不共法も亦た是の如し。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は自性の壞すべく隨ふべきもの無くんば、云何が菩薩摩訶薩は能く般若波羅



蜜(多)諸の菩薩摩訶薩の所學の處を習ふや。何となれば、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得るも能はざればなりしと。佛、舍利弗に告げたまはく、「汝が言ふ所の如く、菩薩は般若波羅蜜(多)を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、方便力を離れざるが故に得べし。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行じ若し一法の得べきあらば、應當に取るべし。若し得べからざれば、何の取る所ありて、所謂、此れは是れ般若波羅蜜(多)なり、是れ禪波羅蜜(多)なり、是れ毗梨耶波羅蜜(多)なり、是れ塵提波羅蜜(多)なり、是れ尸羅波羅蜜(多)なり、是れ檀波羅蜜(多)なり、是れ色受想行識、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとせんや。舍利弗よ、是の般若波羅蜜(多)は相を取る可からず、乃至一切諸佛の法は相を取るべからず。舍利弗よ、是を般若波羅蜜(多)乃至佛法を取らずと名く。是れ菩薩摩訶薩の學すべき所にして、菩薩摩訶薩は是の中に於て學する時、學する相も亦得べからず。何に況んや般若波羅蜜(多)佛法、菩薩法、辟支佛法、聲聞法、凡夫人法をや。何となれば、舍利弗よ、諸法は一法として性あることなければなり。是の如きの無性の諸法、何等をか是れ凡夫人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛とせんや。若し是の諸の賢聖無くんば、云何が法あらん、是の法を知るが故に、分別して是れ凡夫人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛なりと説く。

舍利弗佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は性なく、實なく、根本なければ、云何が是れ凡夫人なり、乃至是れ佛なりと知らん」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「凡夫人所著の處、色性あり、實ありや不や」と。「不なり。世尊よ、但だ顛倒心を以ての故に、受想行識、乃至十八不共法も亦是の如し」と。「舍利弗よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、方便力を以ての故に、諸法の性なく、根本なきことを見るが故に、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す」と。舍利弗、佛に白して言さく、「云何が菩薩摩訶薩般若波羅蜜(多)を行する時、方便力を以ての故に諸法の性なく、根本なきことを見るが故に、阿耨多

羅三藐三菩提心を發すや。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、諸法の根本を見、中に住して退没し、憍怠の心を生ぜず。舍利弗よ、諸法の根本は實に無我なり、無所有なり、性常に空なり、但だ顛倒愚癡の故に衆生險入界に著す。是の菩薩摩訶薩は諸法の所有なく、性常に空にして、自相空なることを見る時、般若波羅蜜(多)を行じ、自ら立つて幻師の如く、衆生の爲めに法を説き、憍者には爲に布施の法を説き、破戒の者の爲には持戒の法を説き、瞋る者には爲に忍辱の法を説き、憍怠の者に、爲に精進の法を説き、亂想の者には爲に禪定の法を説き、愚癡の者には爲に智慧の法を説き、衆生をして布施乃至智慧に住せしめ、然して後、爲めに聖法を説き、能く苦を出す。是の法を用ての故に、須陀洹果を得、乃至、阿羅漢果、辟支佛道乃至阿耨多羅三藐三菩提を得しと。

舍利弗、佛に白して言さく、世尊よ、菩薩摩訶薩は是の衆生、無所有を得て、教へて布施、持戒、乃至智慧あらしめ、然して後、爲に聖法を説き、能く苦を出す。是の法を用ての故に、須陀洹果乃至阿耨多羅三藐三菩提を得しと。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、有所得の過罪あることなし。何となれば、舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行する時に、衆生を得ず、但だ空法相續の故に、名けて衆生となせばなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は二諦の中に住して、衆生のために世諦と第一義諦とを説法す。舍利弗よ、二諦の中には衆生は不可得なりと雖も、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行するに、方便力を以ての故に、衆生の爲に法を説く。衆生是の法を聞くも、今世の吾我尙ほ不可得なり、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提及び所用の法を得べけんや。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便力を以ての故に衆生の爲に法を説くと。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩摩訶薩の心曠大にして、法の若くは一相若くは異相、若くは別相として得べきものあることなし。而も能く是の如く大に莊嚴す。是の莊嚴を用ての故に、欲界に生ぜず、色界に生ぜず、無色界に生ぜず、有爲性を見ず、無爲性を見ず、而も三界の中に於て衆生を度脱

するも、亦た衆生を得ず。何となれば、衆生は不縛不解なればなり。衆生は不縛不解なるが故に、無垢無淨なり。無垢無淨の故に、五道を分別するとなし。五道を分別するとなきが故に、業なく煩惱なし。業なく煩惱なきが故に、亦果報もあるべからず。是の果報を以ての故に、三界の中に生ず」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、若し衆生先後無ならは諸佛菩薩は則ち過罪あり。諸法五道生れ亦是の如し。先後無なれば諸佛菩薩は則ち過罪あり。舍利弗よ、今、有佛にも無佛にも、諸法の相は常住にして異らず。是の法相の中、尙我無く、衆生無く、壽命無く、乃至知者無く、賢者無し。何に況んや、當に色受想行識あるべけんや。若し是の法なくんば、云何が當に五道を往來して、衆生を拔出する處あるべけんや。舍利弗よ、是の諸法の性は常に空なり。是を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩は過去の佛より是の法相を開き、阿耨多羅三藐三菩提の意を發す。是の中に法の我として當に得べきものあることなく、亦衆生の定んで著する處の法あることなく、出す可からず、但だ衆生の顛倒を以ての故に著するのみ。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は大莊嚴を發し、常に阿耨多羅三藐三菩提を退せざるなり。是の菩薩は我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得ざるべきや、我れ必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきやを疑はず。阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、實法を用て、衆生を利益し、顛倒を出でしむ。舍利弗よ、譬へば幻師の百億萬人を幻作して、種種の飲食を與へ、飽滿し、歡喜し、唱へて我れ大福を得たり、我れ大福を得たりと言はしむるが如し。汝の意に於て云何。是の中に人有り、食飲飽滿するや不や。」不なり、世尊よ。」佛の言はく、「是の如く舍利弗よ、菩薩摩訶薩は初發意より已來、六波羅蜜(多)、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分、十四空、三解脱門、八背捨、九次第定、佛の十力、乃至十八不共法を行じ、菩薩道を具足し、衆生を成就して、佛國土を淨むるも、衆生の法として度すべきなし。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等をか是れ菩薩摩訶薩の道とし、菩薩は是の道を行じて、能く衆生を成就し、佛國土を淨むるや。」佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は初發意より已來、檀波羅蜜(多)を

行じ、尸羅、瞿提、毗梨耶、禪那、般若波羅蜜(多)を行じ、乃至十八不共法を行じて、衆生を成就し、佛國土を淨む。須  
 菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)を行じ、衆生を成就するや。」佛、須菩提に告げたま  
 はく、「菩薩摩訶薩ありて、檀波羅蜜(多)を行する時、自ら布施し、亦衆生をして布施せしめて此の言を作す。諸の善男子、  
 汝等布施に著するも莫れ。汝布施に著するが故に、當に更に身を受くべし。更に身を受くるが故に多く衆の苦を受くるなり。  
 諸の善男子よ、諸法の相の中には施す所なく、施者なく、受者なし。此の三法は性皆空なり。是の性空の法は取る可から  
 す、取るべからざるの相は是れ性空なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜(多)を行する時、衆生に布施する  
 も、是の中に布施を得ず、施者を得ず、受者を得ず。何となれば、無所得の檀波羅蜜(多)は、是を名けて、檀波羅蜜(多)と爲  
 せばなり。是の菩薩は是の三法を得ざるが故に、能く衆生をして、須陀洹果を得せしめ、乃至阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多  
 羅三藐三菩提を得せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)を行する時、衆生を成就す。是の菩薩自ら布施  
 を行じ、亦他人をして布施を行ぜしめ、布施の法を讚歎し、布施を行ふ者を歡喜し讚歎す。是の菩薩は是の如く布施し已り  
 て、刹利大姓、婆羅門大姓、居士大家に生じ、若くは小王、若くは轉輪聖王となる。是の時、四事を以て衆生を攝取す。何  
 等をか四となす。布施、愛語、利行、同事なり。是の四事もて衆生を攝し已りて、衆生漸漸に戒、四禪、四無量心、四無色  
 定、四念處、乃至八聖道分、空、無相、無作三昧に住し、正位の中に入ることを得、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果を得、若  
 くは辟支佛道を得、若くは歡へて阿耨多羅三藐三菩提を得せしめて、是の言を作す、諸の善男子よ、汝等當に阿耨多羅三藐  
 三菩提心を發すべし。阿耨多羅三藐三菩提は得易きのみ。何となれば、定法として衆生所著の處あることなく、但だ顛倒  
 の故に衆生著するのみなればなり。是の故に、汝等自ら生死を離れ、亦他をして生死を離れしむべし。汝等當に發心して、  
 能く自ら利益し、亦當に他人をも利益すべしと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く、檀波羅蜜(多)を行すべし。是の檀

波羅蜜(多)を行ずる因縁の故に、初發意より已來、終に惡道に墮せず、常に轉輪聖王と作る。何となれば、其の種うる所に隨つて、大果報を得ればなり。是の菩薩は、轉輪聖王となる時、乞者あるを見て、是の念を作さく、我れ餘事の爲の故に、轉輪聖王の果を受けず、但だ一切衆生を利益せんが爲めの故のみと。是の時に、是の言を作す、此は是れ汝の物なり。汝自ら之を取れ、難する所あること莫れ。我れ惜しむ所なし、我れ衆生の爲めの故に生死を受く。汝等を憐愍するが故に大悲を具足す。是の大悲を行じて衆生を饑益するも、亦實に定んで衆生相を得ず。但だ假名あるが故に是の衆生を説くべきのみ。是の名字も亦た空にして、響摩の如く、實に相を説くべからず。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く、檀波羅蜜(多)を行じ、衆生の中に於て惜む所なく、乃至自身の肌肉をも惜まず、何に泥んや外物をや。是の法を以ての故に、衆生をして生死を出す。何等をか是の法となすや。所謂檀波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、毘梨耶波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)般若波羅蜜(多)、乃至十八不共法もて、衆生をして生死の中より得脱せしむ。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)の中に住し、布施し已つて是の言を作さく、諸の善男子よ、汝等來りて戒を持つべし。我れ當に汝等に供給して、乏短するところなからしむべし。衣服、臥具、乃至資生、須ふるところは盡く當に汝に給すべし。汝等乏の故に戒を破る。我れ當に汝に所須を給し、若くは飲食乃至七寶乏する所なからしむべし。汝等是の戒律儀の中に住し、漸漸に當に苦を盡すことを得、三乘に乗じて、而して度脱することを得べし。(三乘とは)若くは聲聞乘、若くは辟支佛乘、若くは佛乘なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)の中に住し、若し衆生の瞋惱するを見れば、是の言を作す、諸の善男子よ、汝等何の因縁を以ての故に瞋惱するや、我れ當に汝が須ふる所を與ふべし。汝等の欲する所、我より之を取れ、悉く當に汝に給して、汝をして若くは飲食、衣服、乃至資生の所須を乏する所なからしむべしと。是の菩薩は檀波羅蜜(多)の中に住し、衆

生を教へて忍辱せしめ、是の言を作す、一切法の中に堅實なるものあることなし、汝等の瞋る所、是の因縁は空にして、堅實なるなく、皆虛妄憶想より生ず、汝等根本あることなきを以て、瞋恚し、壞心し、惡口し、罵詈し、刀杖もて、相加へて以て命を害ふるに至る。汝等是の虚妄の法を以て、瞋を起すが故に、地獄、畜生、餓鬼の中、及び餘の惡道に墮し、無量の苦を受くること莫れ。汝等是の虚妄無實の諸法を以ての故に、而も罪業を作すこと莫れ。是の罪業を以ての故に尙ほ人身すら得ず、何に況んや佛世に生ずるとを得んや。諸人、佛世には値ひ難く、人身は得難し。汝等好時を失ふも莫れ。若し好時を失はば、則ち救ふべからずと。是の菩薩摩訶薩は、是の如く衆生を教化して、自ら忍辱を行じ、亦他人をして教へて忍辱を行はしめ、忍辱の法を讚歎し、忍辱を行する者を觀喜し讚歎す。是の菩薩は衆生をして、忍辱の中に住せしめ、漸く三乘を以て衆苦を盡くすとな得せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)に住し、衆生をして忍辱に住せしむ。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)に住し衆生をして精進せしむるや。須菩提よ、菩薩は衆生の憍怠なるを見て、是の如く言ふ、汝等何を以てか憍怠するや。衆生の言はく、因縁少きが故なりと。是の菩薩は檀波羅蜜(多)を行する時、諸人に語つて言はく、我れ當に汝の因縁をして具足せしむべし、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、是の如き等の因縁の故に、汝をして具足せしむべし。是の衆生、菩薩の利益因縁を得るが故に、身精進し、口精進し、心精進す。身精進し、口精進し、心精進するが故に、一切の善法を具足し、聖無漏の法を修す。聖無漏の法を修するが故に、當に須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道を得、若くは阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)を行する時、精進波羅蜜(多)に住して、衆生を攝取す。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)を行する時、衆生を教化し、禪波羅蜜(多)を修せしむるやと。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩衆生の亂心を見るや是の言を作す、汝等禪定を修すべしと。衆生の言はく、我等の因縁具足せざるが故にと。菩薩の言はく、我れ當に汝等のために因縁と作るべし。是の因縁を以ての故に、汝が

心をして覺觀に隨はざらしめ、心をして隨散せざらしめんと。衆生は是の因縁を以ての故に、覺觀を斷じ、初禪、二禪、三禪、四禪に入り、慈悲喜捨の心を行す。衆生は是の禪無量心の因縁を以ての故に、能く四念處、乃至八聖道分を修し、三七助道法を修する時、漸く三乘に入り、而して涅槃を得、終に道を失はず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜〔多〕を行する時、檀波羅蜜〔多〕を以て、衆生を攝取し、禪波羅蜜〔多〕を行ぜしむ。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜〔多〕を行じ、般若波羅蜜〔多〕を以て、衆生を攝取するや。須菩提よ、菩薩は衆生の愚癡にして智慧あることなきを見て、是の言を作す、汝等何を以ての故に、智慧を修せざるや。衆生の言はく、因縁未だ具足せざるの故にと。菩薩は檀波羅蜜〔多〕の中に住して是の言を作す。汝等の所須の智慧を具足することを得んとせば、我れより之を取れ、所謂布施、持戒、忍辱、精進、禪定、此の因縁具足し已りて、汝等は是の如く思惟すべし。般若波羅蜜〔多〕を思惟する時、法の得べきもの有りや不や。若くは我、若くは衆生、若くは壽命乃至知者、只者得べきや不や、若くは色受想行識、若くは欲界色界無色界、若くは六波羅蜜〔多〕、若くは三十七助道法、若くは須陀洹果、若くは斯陀含、阿那含、阿羅漢果、辟支佛道、若くは阿耨多羅三藐三菩提を得べき不やと。是の衆生は、是の如く思惟する時、般若波羅蜜〔多〕の中に於て、法の得べく、著すべき處あるとなし。若し諸法に著せざれば、是の時、法の生あり、滅あり、垢あり、淨あるを見ず。是れ地獄なり、是れ畜生なり、是れ餓鬼なり、是れ阿修羅衆なり、是れ天人なり、是れ人なり、是れ持戒なり、是れ破戒なり、是れ須陀洹なり、是れ斯陀含なり、是れ阿那含なり、是れ阿羅漢なり、是れ佛支佛なり、是れ佛なりと分別せず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜〔多〕を行する時、般若波羅蜜〔多〕を以て衆生を攝取す。須菩提よ、云何が菩薩摩訶薩は檀波羅蜜〔多〕の中に住し、尸羅波羅蜜〔多〕、屠提波羅蜜〔多〕、毗梨耶波羅蜜〔多〕、禪波羅蜜〔多〕、般若波羅蜜〔多〕乃至三十七助道法を以て衆生を攝取するや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜〔多〕の中に住し、供養の具を以て衆生を利益す。是の利益の因縁を以て故に、衆生は能く四念處、四

正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道を修し、衆生は是の三十七助道法を行じ、生死の中に於て解脱することを得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無漏の聖法を以て衆生を攝取す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生を教化する時、是の如く言ふ、諸の善男子よ、汝等我より所須の物を取れ。若くは飲食、衣服、臥具、香華、乃至七寶等の種種の資生の須ふる所のもの、汝等是れを以て衆生を攝取し、汝等長夜に利益し、安樂にして、是の念を作すこと莫れ、是の物は我が所有に非ず、われ長夜に衆生の爲の故に、此の諸物を集む。汝等當に是の物を己の物と異なることなきが如く取り、衆生を教化して、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を行ぜしめ、乃至三十七助道法、佛の十力、乃至十八不共法を得せしめ、亦諸の無漏法、所謂、須陀洹、乃至阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむべし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜(多)を行する時、應に是の如く衆生を教化して、三惡道及び一切生死の往來の苦を離るることを得せしむべし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜(多)に住して衆生を教化し、是の言を作す、衆生よ、汝等何の因縁少きが故に戒を破るや、われ當に汝の與めに因縁、若くは布施、乃至智慧及び種種の資生の所須を具足することを作すべしと。是の菩薩は尸羅波羅蜜(多)に住して衆生を利益し、十善道を行じ、十不善道を遠離せしむ。是の諸の衆生は、諸の戒を持して破戒せず、缺戒せず、濁戒せず、取戒せず、漸く三乘を以て而して苦を盡くすことを得。尸羅波羅蜜(多)を首となし、檀波羅蜜(多)に説くが如く、餘の四波羅蜜(多)も亦是の如しと。

論 問うて曰く、(三)先に菩薩は六波羅蜜(多)等の諸の助道法を行するも、菩薩道を具せざれば則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ると能はずと説けり。今須菩提は應に自ら六波羅蜜(多)等を行じて菩薩道を具

【二】第一問、須菩提は已に六度を行じて菩薩道を具足し、無上正等覺を得べきことを知れり、然るを今更に問へるは何故なるか。



足し阿耨多羅三藐三菩提を得べきことを知るべし、何を以てか更に問へるや。答へて曰く、須菩提は云  
 何にしてか、阿耨多羅三藐三菩提を得るやを疑はず。今は但だ云何が菩薩道を具足して、阿耨多羅三  
 藐三菩提を得るかを問ふなり。佛答たまはく、若し菩薩は六波羅蜜(多)等の諸法を用ふれば、方便力  
 の和合を以ての故に能く行ず、是の時菩薩道を具足す、方便力は決定して是の布施等の三事を得ず、  
 亦是の三事を離れずして、檀波羅蜜(多)を行す。是の時、菩薩道を照明す、照明と具足とは、是れ  
 義なり。若し菩薩、決定して、布施等の三事を得ば、直に常顛倒、取相、  
 著法等の過罪に墮す。若し是の三事を得ずんば、則ち斷滅の邊、著空に  
 墮し、還た邪見等の諸の煩惱を起して、便ち菩薩道を離る。若し菩薩是  
 の二邊を離るれば、空に因りて是の施等の假名字の虛誑の法を捨て、諸  
 法實相に因りて是の著空を離るれば、施者なく、受者もなく、阿耨多羅三藐三菩提相の如し。是の布  
 施を觀するも、亦爾くして異るとなし、是の如き布施を名けて具足と爲す。乃至十八不共法も亦是の  
 如し。舍利弗は會中に在りて、佛須菩提の與に般若は甚深なれば、果報大に利益あり、利益ありと雖  
 も決定性なし、云何が習ふべきやと説くに、佛、菩薩は般若波羅蜜(多)を行する時、色を壞せず、色に  
 隨はず、是の如きを般若波羅蜜(多)を習ふと名くと説きたまふを聞く。菩薩は初發心より、實法を知  
 ると爲すが故に、常に般若波羅蜜(多)を行じ、次第に其の宜しき所に隨つて布施等の諸法を行す。是の

- 【三】一義。同一義の意。  
 【四】二邊とは、斷と常とな  
 り。  
 【五】實法。諸法の實相をい  
 ふ。

故に常に菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、布施等の諸法を行す。色を壊せずとは、是の色は無常なりと言はず、是の色は空なりとも言はず、所有無き、是を色を名く。色に隨はずとは、眼に色を見、相を取り、著を生ずるが如きにあらざるなり。

復次に、是の色は、若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂等と説かず、是を色に隨はずと名づく。常、無常等は皆な色の實相にあらざるなり。

復次に、是の色の根本は、世性の中より來り、若くは微塵の中より來り、大自在天の中より來ると説かず、亦、時より來ると説かず、亦、自然に生ずると説かず、亦、無因無緣にし

て而も強て生ずると説かず、是の如き等を名づけて隨はず壊せずとなす。是の中に佛自ら因縁を説たまはく、是の色は性無なるが故に隨はず壊せずと。性無なりとは、是の色は、一切の四大和合の假名より名づけて色となす。是の中に、定んで一法の名けて色となすものなし。先の色を破する中に

- 【六】 所有無き。一切の色法に於て有又は空等の一偏に定りたる性なきをいふ。
- 【七】 世性、邪因邪果の計をなす世性外道の稱ふる説にして此の世界、即ち世諦にのみ執著し、之れを以て世界の根本となし、他に業力等を認めざるをいふ。
- 【八】 微塵。世界の根本を極微となす説にして、微塵生外道之れを唱ふ。
- 【九】 大自在天(Mahesvara)。印度教に於て尊崇する神の名。
- 【一〇】 時より來る。世界の本體は時より成るとなす説、時外道之れを稱ふ。
- 【一一】 自然に生ず。自然外道の説く所にして、世界の根本を自然に求むるなり。
- 【一二】 無因無緣。世界は因なく、亦緣くして生ぜしものと説くもの即ち無因外道の所説にして自然外道の一派なり。

説くが如し。是の色は、因縁和合より生ずるが故に、即ち是れ無性なり、無性は即ち是れ性空なり。若し是の色相の性空を得ば、即ち是れ般若波羅蜜〔多〕を習ふなり、乃至十八不共法も亦是の如し。復問ふ、世尊よ、若し諸法に自性の壞すべく隨ふべきもの無くんば、云何が菩薩は般若波羅蜜〔多〕を習はん。般若波羅蜜〔多〕を學ばずんば、阿耨多羅三藐三菩提を得ざらんと。佛、舍利弗の意を可し、自ら因縁を説きたまはく、若し菩薩方便力を用て六波羅蜜〔多〕を行せば、是の人は諸法の空なることを知ると雖も、而も能く般若波羅蜜〔多〕を起すと。舍利弗よ、若し菩薩一切の法を求めて、若し少許の定性を得ば、則ち取るべく著すべし。今菩薩は實に一切の法を求覓して定實を得ず。所謂是れ般若波羅蜜〔多〕、是れ禪波羅蜜〔多〕、乃至是れ十八不共法なり。是の諸法は皆な不可得なり、不可得の故に何の取る所あらん。舍利弗よ、是を菩薩の無取般若波羅蜜〔多〕と名く。菩薩應に無取般若波羅蜜〔多〕を學すべし。無取すら尙不可得なり、何に況んや般若等の諸法をや。「そは」一切法は無性なるが故なり。舍利弗復問ふ。若し一切法無性ならば、云何が是れ凡人乃至佛たることを知るやと。佛答へたまはく、一切の法は根本定相無しと雖も、但凡人顛倒の故に著す。菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行する時、方便力を以ての故に、一切の法は根本無きを見て、而も阿耨多羅三藐三菩提心を發す。是の菩薩は深く諸法の性空を行するが故に、一切の法に根本あるを見ず、見ざるが故に解せず退せず、了了に一切法の無我、無所有性、性常に空なることを知る。但衆生は愚癡顛倒の故に是の陰界入に著するのみ。是の時に、菩薩は諸法の

甚深寂滅の相を思惟し籌量するも、而も衆生は深く虚誑顛倒に著す。「故に」菩薩は自ら立つて、幻師の如く、種種に神通變化して法を説き、人を度す。幻の所作の如く、憎なく、愛なくして、等心に法を説く、所謂、憍者には施等の六法を教へ、復爲めに轉た勝れる法を説いて生死を出で、須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得せしむと。

問うて曰く、(二三) 六波羅蜜「多」の外に、更に何の法あつてか勝れたりとなすや。何を以てか更に爲めに勝法を説くと言ふや。答へて曰く、此の中には波羅蜜「多」を説かず、但憍者には爲に施を説き、乃至癡者には爲に智慧を説く、諸佛菩薩の法は初あり後あり、初法は所謂布施、持戒なり。受戒施の果報は天上の福樂を得、爲めに五欲の味を説く、利は少く失は多し。世間の身を愛くれば衰苦のみあり、世間を遠離し、愛法を斷ずるを讚歎し、然る後爲めに四諦を説いて須陀洹果を得せしむ。此の中に菩薩は但だ説いて衆生をして佛道を得せしめんと欲するが故に、先づ教へて (三四) 六法を行せしむ。此の中の善智慧をば名づけて三解脱門の所攝となさず。是の善智慧は能く布施等の善法を生じ、能く慳貪瞋恚等の惡法を滅し、能く衆生をして天上に生ずることを得せしむ。何を以てか是れを知るや、更に勝法あるが故なり。勝法とは、所謂、四諦の聖法なり、出法一切の聖人所行の法を名づけて聖法となし、三界の生死を出づるを名づけて出法となす。是の四縛を以て法を説く、故に衆生の

【二三】 第二問、六度の外に、更に何等の勝法ありや。

【三四】 六法。六波羅蜜(多)の法をいふ。

(二) 根因縁に随つて須陀洹果を得、乃至一切種智を得せしむ。此の中に初の六法を説かずと雖も布施等<sup>と</sup>を説く。當<sup>ま</sup>に知るべし、已<sup>す</sup>に攝<sup>せつ</sup>すと。

復次<sup>またつぎ</sup>に、菩薩<sup>ぼつさつ</sup>は、佛道<sup>ぶつだう</sup>の爲<sup>ため</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に是<sup>こ</sup>の六法<sup>はくはふ</sup>を説く。但<sup>た</sup>だ衆生<sup>しゆじやう</sup>の意劣<sup>いじやく</sup>るが故<sup>ゆゑ</sup>に自ら小乘<sup>せうじやう</sup>を取<sup>と</sup>る。是<sup>こ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に布施<sup>せせ</sup>、持戒<sup>ぢかい</sup>、生天<sup>しやうてん</sup>、受報<sup>じゆほう</sup>等の初<sup>はじめ</sup>の六法<sup>はくはふ</sup>を説かず。舍利弗<sup>せりふ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>に白<sup>まを</sup>して言<sup>い</sup>さく、世尊<sup>せそん</sup>よ、先に菩薩<sup>ぼつさつ</sup>は是<sup>こ</sup>の畢竟<sup>ひつきやう</sup>不可得<sup>ふかとく</sup>の法<sup>はふ</sup>を説き、今<sup>いま</sup>無所有<sup>むしやう</sup>の衆生<sup>しゆじやう</sup>の爲<sup>ため</sup>に法<sup>はふ</sup>を説いて無所有<sup>むしやう</sup>の法<sup>はふ</sup>を得<sup>え</sup>せしむ。所謂<sup>いはゆる</sup>、須陀洹<sup>しゆたゑん</sup>果<sup>くわ</sup>乃至<sup>なんぞ</sup>一切種智<sup>いっさいしゆち</sup>なり。世尊<sup>せそん</sup>よ、菩薩<sup>ぼつさつ</sup>は今<sup>いま</sup>無所有<sup>むしやう</sup>の法<sup>はふ</sup>を得<sup>え</sup>るが故<sup>ゆゑ</sup>に、能<sup>よ</sup>く衆生<sup>しゆじやう</sup>をして無所有<sup>むしやう</sup>の法<sup>はふ</sup>を得<sup>え</sup>せしむ。無所得<sup>むしよく</sup>は是<sup>こ</sup>れ有<sup>う</sup>しよ得<sup>とく</sup>なりや。佛答<sup>ほとけこた</sup>へたまはく、菩薩<sup>ぼつさつ</sup>は般若波羅蜜<sup>はんにやほらみつ</sup>(多<sup>た</sup>)を行<sup>ぎやう</sup>する時<sup>とき</sup>、衆生<sup>しゆじやう</sup>及び法<sup>はふ</sup>をあるとなし。何<sup>なん</sup>となれば菩薩<sup>ぼつさつ</sup>は般若波羅蜜<sup>はんにやほらみつ</sup>(多<sup>た</sup>)を行<sup>ぎやう</sup>する時<sup>とき</sup>、衆生<sup>しゆじやう</sup>及び法<sup>はふ</sup>を見<sup>み</sup>ず、但<sup>ただ</sup>諸<sup>しよ</sup>の因縁<sup>いんねん</sup>和合<sup>わがふ</sup>せる假名<sup>けみやう</sup>の衆生<sup>しゆじやう</sup>のみなり。菩薩<sup>ぼつさつ</sup>は二諦<sup>たい</sup>の中<sup>なか</sup>に住<sup>じゆう</sup>して衆生<sup>しゆじやう</sup>の爲<sup>ため</sup>に法<sup>はふ</sup>を説<sup>と</sup>くも、但<sup>た</sup>だ空<sup>くう</sup>のみを説かず、但<sup>た</sup>だ有<sup>う</sup>のみを説かず。愛著<sup>あいぢやく</sup>の衆生<sup>しゆじやう</sup>の爲<sup>ため</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に空<sup>くう</sup>と説<sup>と</sup>き、取相<sup>しゆさう</sup>著空<sup>ぢやくくう</sup>の衆生<sup>しゆじやう</sup>の爲<sup>ため</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に有<sup>う</sup>と説いて、有<sup>う</sup>無<sup>む</sup>の中<sup>なか</sup>の二處<sup>じよ</sup>に染<sup>ぜん</sup>せず。是<sup>こ</sup>の如<sup>かく</sup>きの方<sup>はう</sup>便<sup>べん</sup>りもて、衆生<sup>しゆじやう</sup>の爲<sup>ため</sup>に説法<sup>せつぽふ</sup>す。衆生<sup>しゆじやう</sup>は現<sup>げん</sup>在<sup>ざい</sup>の我身<sup>がしん</sup>及び我<sup>が</sup>すら尙<sup>な</sup>ほ不可得<sup>ふかとく</sup>なり、何<sup>いか</sup>に況<sup>いは</sup>んや、當<sup>まさ</sup>に阿耨多羅三藐<sup>あうたらからみやく</sup>三菩提<sup>さんぼだい</sup>を得<sup>え</sup>べけんやと。舍利弗<sup>せりふ</sup>歡喜<sup>くわんぎ</sup>して、佛<sup>ほとけ</sup>に白<sup>まを</sup>して言<sup>い</sup>さく、世尊<sup>せそん</sup>よ、曠大<sup>くわうだい</sup>の心<sup>こころ</sup>は是<sup>こ</sup>れ菩薩<sup>ぼつさつ</sup>なり。曠大<sup>くわうだい</sup>の心<sup>こころ</sup>とは、此<sup>こ</sup>の中<sup>なか</sup>に自<sup>みづか</sup>ら因縁<sup>いんねん</sup>を説<sup>と</sup>く、所謂<sup>いはゆる</sup>、法<sup>はふ</sup>として若<sup>もし</sup>くは一相<sup>さう</sup>、若<sup>もし</sup>くは異相<sup>いさう</sup>得<sup>え</sup>べきのあることなし。人<sup>ひと</sup>の市<sup>いち</sup>に買<sup>か</sup>ふに必<sup>かなら</sup>ず交<sup>かう</sup>易<sup>やく</sup>を須<sup>もち</sup>ふるが如<sup>ごと</sup>し。大心<sup>だいしん</sup>の人<sup>ひと</sup>は則<sup>すなは</sup>ち然<sup>しか</sup>らず、依止<sup>えし</sup>する所<sup>ところ</sup>なくして、

【二五】 根因縁。根機と因縁となり。

而も能く大莊嚴を發す。大莊嚴の故に三界に生ぜず、亦衆生を抜いて三界を出でしむ。而も衆生は不可得なり、不縛不解の故に一切の法は空なり。久遠より已來、煩惱顛倒するは皆是れ虚誑不實なり、是の故に無縛と名づく。無縛の故に亦解もなし。縛は即ち是れ垢、解は即ち是れ淨、無淨無垢の故に六道の別なし。六道を分別せざるが故に罪福の業なし、罪福の業なきが故に煩惱なし。能く罪福の業を起す者は罪福の業を起さず、亦果報あるべからず。是の如く諸法畢竟空の中に、而も大莊嚴を作す、是を希有と爲す。譬へば、人の虚空の中に樹を種ゑて、樹葉華果利益する所多きが如し。佛、舍利弗の意を可し、舍利弗の是の空を難するが故に佛亦答へて亦可す。其の空を説くを以ての故に可し、其空を難するを以ての故に答ふ。所謂舍利弗、若し衆生及び諸法先に有にして今無ならば、諸佛賢聖に過罪あり。過罪とは所謂衆生をして 無餘涅槃に入らしめ、永く色等の一切の法を滅して、皆空中に入らしめ、皆無所有ならしめ、衆生及び一切法を斷滅するを以ての故に罪過ありと。舍利弗よ、衆生及び一切の法は先に來るとなし。若し有佛にも無佛にも常住にして異らざれば、是れ諸法實相なり。是の故に六道の生死なく亦衆生の拔出すべきなし。舍利弗よ、一切の法は先より空なり、是の故に、菩薩は諸佛の所に於て、諸法の是の如きの相を聞く。故に阿耨多羅三藐三菩提心を發して、是の念を作す、菩提の中に、亦法として得べきもの有ることなく、亦實定の法の衆生をして著して而も度すべからざるしめ、

【二六】 無餘涅槃。亦無餘依涅槃  
 ともいふ。苦の依たる身及び  
 智共に滅するをいふ。

但衆生癡狂顛倒の故に、是の虚誑の法に著するのみと。是の故に菩薩は大莊嚴を發し、阿耨多羅三藐三菩提を轉せずして、是の念を作す、我れ必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。得ざるに非ず、得已つて實法を用て衆生を利益す。衆生を利益するが故に、衆生顛倒より出づるを得し、是の事を明了ならしめんと欲するが故に、經の中に幻師の喩譬を説く。幻師は即ち是れ菩薩なり、幻師の所作の園林  
 度の衆生なり。幻師の一身は幻力を以ての故に、衆生、園林、虚觀等を幻作して、衆人を娛樂するが如し。若し幻師、所幻の作事を以て實と爲し、所幻の人に於て其の恩恵を求むれば、即ち是れ狂人なり。菩薩も亦是の如く、諸佛に従つて、一切の法性は、空なること幻の如しと聞いて、而も布施等を以て衆生を利益するや、恩恵福報を求めんと欲す、即ち是れ顛倒なり。

問うて曰く、(二八)幻法呪術は實有なれども、幻の所作の物は虚なるべし。衆生の空なるが如く、菩薩も亦空なり。菩薩は衆生を化作せず、何ぞ喩となすことを得んや。答へて曰く、諸法實相の中には法すら尙なし、何に況んや衆生をや。衆生の異名を名づけて幻師となす。幻師は實に無し、何を以てか幻師は有にして、所幻のものは無しと言ふや。如し汝は幻師を以て實に有り、所幻のものは無しとい

【二七】虚觀。園庭に於ける物見臺をいふ。

【二八】第三問、幻法呪術は實有なるも、幻の所作の物は虚なり。衆生の空なるが如く、菩薩も亦空なり。菩薩は衆生を化作せず、何ぞ喩となすことを得んや。

ばば、聖人は幻師及び所幻の物を觀るに異らず、事を明了にするを以ての故に譬喩を説き、其の少許の相似の處を取つて喩と爲すなり。何を以てか盡く取つて難をなさん。師子を王に喩ふるが如きは、師子は獸中に於て畏ることなく、王は群下に於て自在無難なるが故に、以ての故に以て喩となすなり。復た何ぞ四脚にして毛を負ふを異となすを責むべけんや。佛、性空の法を説いて諸法皆空なりとなすに猶ほ衆生あり、是の故に幻を説いて喩となす。我れ今喩を説いて以て衆生を破す、汝云何が復衆生を以て難となすや。爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、世尊よ、何等か是れ衆生を成就し、佛國土を淨むる道なるやと。須菩提は菩薩道を知ると雖も、中に甚深性空の理を説くを以ての故に聽者疑を生ず、是の故に問を發するなり。佛答へたまはく、菩薩は初發心より、六波羅蜜〔多〕、乃至十八不共法を行す。是の菩薩は是の道を行じて、衆生を成就し、佛國土を淨む。須菩提復た問ふ、云何が是の法を行じて、衆生を成就するやと。須菩提意へらく、若し是の法、性空にして、衆生も亦性空ならば、云何が成就すべきやと。佛答へたまはく、方便力を以ての故に、布施の法を以て衆生を教化し、教へて布施に著せしめざるを以て眞實となすと。方便とは、菩薩、衆生に語るらく、汝曹善男子よ、來つて布施するも、是の布施に著すと莫れ。經の中に説くが如しと。衆生は布施を以て貴樂の處に生じ、貴樂の因縁の故に我と憍慢とを生ず。我と憍慢と增長するが故に善法を破す。善法を破るが故に

【一九】三惡道。地獄、餓鬼、畜生のこと。

二九

三惡道に墮す。是の故に菩薩



は、先に教へて言へり、布施に著すること莫れと。但此の布施に因つて、持戒等の善法を修し、皆な是の法を廻らして涅槃に向ふ。所以は何となれば、是の性空なる諸法實相は、不可得の相なればなり。是の如く、菩薩は方便力もて、衆生を教化して、須陀洹果、乃至佛道を得せしむ。是の菩薩は自ら布施を行じ、亦た衆生をして布施せしむ。若し自ら施さざれば、或は人有つて言はん、若し施にして、是れ好法ならば、何ぞ自ら行せざるやと、是の故に菩薩は先づ自ら布施す。

復次に、菩薩は深く善法を愛す。布施は是れ初門なり、是の故に是の布施を行す。又菩薩は深く衆生を慈悲するに、慈悲心大なりと雖も、而も能く衆生を充滿すること能はざるを以て、是の故に先づ布施を行じ、其の心をして軟ならしめ、以て引導すべからしむ。布施の因縁をもて、(三〇) 四姓に生じ、及び轉輪王となる。(三一) 四攝法を以て衆生を攝取し、漸漸に三乗の法を以て涅槃を得せしめ、他に布施を教へて布施の法を讃歎せしめ、布施を行する者を歡喜し讃歎せしむ。是れ深く布施を愛し、同行を見るが故に歡喜し讃歎するなり。

復次に、心に衆生を憐愍して、若し修福を見れば、則ち之れが爲めに歡喜すること、慈父の子の善を行ふを見て、心則ち歡喜するが如し。是の人(三二) 四種に布施を行じ、刹利等の貴姓の中に

【三〇】 四姓。印度に於ける民族の階級にして、婆羅門、刹帝利、吠舍、首陀羅をいふ。  
【三一】 四攝法。布施、愛語、利行、同事の四をいひ、菩薩の衆生を救済する方法なり。  
【三二】 四種に布施を行ふ。一筆、二墨、三綵、四說法なり、其の人の欲する處に隨て之れを施して以て之れを導く。

生ず。布施を以て攝し已つて、漸漸に教へて持戒、禪定等、乃至辟支佛道を得せしむ。或は衆生の大心ある者、少許の慈悲心あり、是の人生死の長遠を怖畏するが故に其の心懈怠するを見れば、菩薩は方便力の故に是の衆生に語るらく、咄、衆生よ、阿耨多羅三藐三菩提は得易し、汝等何を以てか難しとなすや。衆生所著の處は、此の中に定實の法の能く遮する者、解し難き者あるとなし。汝等當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。既に自ら度脱し、復能く衆生を度脱せしむべしと。衆生を度脱すとは、菩薩は自ら大乘に乗して度を得、三乘を以て、衆生の度すべき所に隨つて之れを度し、既に自ら利益し、復た他人を利益す。他人を利益すとは、既に自ら佛を得、而も三乘を以て衆生を度脱するなり。若し菩薩、能く是の如く般若波羅蜜多二を行せば、初發心より終に三惡道に墮せず、常に轉輪聖王と作りては菩薩は多く欲界に生ず。何となれば、無色界の中には、形なきを以ての故に教化すべからず。色界の中には多く禪定の樂に味著し、厭惡の心なきが故に化し難ければなり。亦た欲天に生ぜず。何となれば、妙なる五欲に著すること多きが故に化し難く、人中に在つては、世世に四事を以て、衆生を攝するが故に、轉輪聖王と作るなり。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、其の種うる所に隨つて大果報等を得と。經の中に布施の相を説くが如し。復菩薩ありて檀波羅蜜多を行する時、衆生の破戒を見て、是の言を作す、汝曹、因縁具足せざるを以ての故に戒を破る。我れ當に汝の所須を給して乏少なからしむべしと。破戒の人に二

【三】二種の破戒の人。

種あり。一には持戒の因縁具足せざるが故に、貧窮人の如く飢寒急なるが故に賊と作る。二には持戒の因縁を具足すと雖も、悪心を習ふを以ての故に、好んで悪事を行ふ。貧窮にして戒を破る者には、菩薩之に語つて言はく、汝但戒を持て、我れ當に汝に所須を給すべし。汝等持戒の中に住し、漸漸に三乗を以て而も度脱することを得よ、是れを布施に因りて戒を生ずと名づく。衆生は不如意の事を以ての故に瞋り、若くは物を求めて意の如くならざるを以ての故に瞋り、人の意に稱はざるが故に瞋る。菩薩は檀の中に住し、其の意に随つて之れを給足す。

問うて曰く、若し貧乏の者に給施して、瞋らしめざるとは爾るべし、

人の意に稱ふを得ず、之を惱まして瞋らしめば復た云何。答へて曰く、如意珠を以て之に施せば、則ち人をして皆な「其の」意に稱はしむ。珠の威徳の故に、人の瞋る者無し。行者の慈三昧に入るが故に、人の瞋る者なきが如し。是の故に少しく、何の因縁の故に瞋るやを説き、我れ當に汝が少く所を具足せしむべし。

復次に、一切の法性は皆な空にして無所有なり。汝の瞋るところの因縁も、亦虚誑にして定まることなし。汝云何が虚誑の事を以ての故に瞋罵し、害を加へ、乃至命を奪ふや。此の重罪業を起すが故に、三惡道に墮し、無量の苦を受く。汝虚誑無實の事を以ての故に、而も大罪を受くること莫れ。山中に一の佛圖あるが如し。彼の中に一の別房あり、中に鬼あり、來つて道人を恐惱せしむるが故に、

【三】 第四問、貧乏の者に給施して瞋らしめざることば爾るべし。人の意に稱はず、之を惱ましめば復た云何。

諸の道人皆な房を捨てて去る。一の客僧の來るあり、維那處分して此の房に住せしめ、而も之に語つて言はく、此の房の中に鬼神あり、喜んで人を惱す、能く中に住せる者は住せよと。客僧自ら持戒の力多聞なるを以ての故に、小鬼何ぞ能くする所ぞ、我れ當に之を伏すべしと言ひ、即ち房に入つて住す。暮に更に一僧あり來つて住處を求む。維那亦此の房に在つて住せしめ、亦鬼ありて、人を惱ますと語る。其の人も亦た小鬼何ぞ、能くする所ぞ、我れ當に之を伏すべしと言ふ。先に入りし者は戸を閉ぢ、端坐して鬼を待つ。後に來る者夜闇に戸を打つて入ることを求むるに、先に入る者は謂つて是れを鬼となし、爲めに戸を開けず。後に來る者力を極めて戸を打ち、内にある道人は力を以つて之を拒む。外なる者勝つとを得て、戸を排して入ることを得し。内の者之れを打ち、外なる者亦力を極めて熟熟打つ。明旦に至つて相見るに、乃ち是れ故舊の同學なり、各相に愧謝す。衆人雲の如く集り笑て之を怪しむ。衆生も亦是の如し。五衆俱は我なく、人なく、空なるに、相を取つて鬪諍を致す。若し支解して地に在くに、但だ骨肉のみあり、人なく、我なし。是の故に菩薩は衆生に語つて言はく、汝根本空の中に於いて鬪諍して罪を作すこと莫れ。鬪諍の故に人身すら尙ほ得べからず、何に況んや佛に値ふことをや。當に知るべし、人身は得難く、佛世には値ひ難く、好時過ぎ易きことを。一たび諸難に墮せば永く治すべからず。若し地獄に墮して燒炙屠割せらるれば、何ぞ教化すべき。若し畜生に墮せば其相に殘害して亦た化すべからず。若し餓鬼に墮せば飢渴熱惱して亦た化すべからず。若し

長壽天(二五)に生しやうぜば、千萬まんの佛過ほとけすくるとも、禪定ぜんぢやうの味あじに著ちやくするが故ゆゑに皆みなな覺知かくちせず。(二六)安息國あんしこくの如ごとき、諸もろの邊地へんちに生しやうずる者ものは、皆みなな是これ人身にんしんの牛ごにして教化けうけすべからず。(二七)中國ちゆうこくに生しやうずると雖いへども或あるは六情ろくじやうを具ぐせず、或あるは四肢しし完まからず、或あるは盲聾瘖瘂まうろうかんお、或あるは義理ぎりを識しらず、或ある時は六情具足ろくじやうぐそくし、諸根しよこん通利つうりし而しかも深ふかく邪見じやけんに著ちやくし、罪福ざいふくなしと言いふ、「之これ亦また」教化けうけすべからず。是この故ゆゑに爲ために説とく、好時かうじは過すぎ易やすし、諸難しよなんの中なかに墮だすれば、度どを得うべからずと。餘よの波羅蜜はらみつた「多た」は、經きやうの中なかに廣ひろく説とくが如ごとし。故ゆゑに復またた之これを解げせざるなり。

問とうて曰いはく、(二八)檀波羅蜜だんはらみつた「多た」に住じやうして、五波羅蜜はらみつた「多た」を行ぎやうじ訖をほす。何なにを以もつてか復またた更さらに六波羅蜜はらみつた「多た」を説とくや。答こたへて曰いはく、上かみに一度ひとの中なかに、次第しだいに五ごを具足ぐそくすれば、今いまは即すなはち一時いちじに總説そうせつするなり。

復次またつぎに、先さきには但ただた六波羅蜜はらみつた「多た」を説とき、今いまは通つうじて三十七品さんじちひん及び諸もろの道果だうくわを説とく。

問とうて曰いはく、(二九)三十七品さんじちひんは、自心じしんより出いづ、云何いかんが是この因縁いんねんを與あたふ可べけんや。答こたへて曰いはく、菩薩はつさつは、坐禪ざぜんのものには、衣服いふく、飲食おんじき、醫藥いやく、

【二五】長壽天。色界第四禪無想天及び、無色界の第四非想非非想天をいふ。前者は壽命五百大劫にして色界の最長壽、後者は八萬劫にして三界中の最長壽なり。

【二六】安息國。波斯の北方、婁海の南岸に存せし古王國にして、印度より見る時は、極めて邊地の故に、教化すべからずといふ。

【二七】中國。須彌四洲中の南閻浮州にして現に吾人の住する所をいふ。

【二八】六情。眼、耳、鼻、舌、身、意の六をいふ。

【二九】第五問。布施波羅蜜「多」に住して、他の五波羅蜜「多」を行じ訖る。何を以てか復た更なる六波羅蜜「多」を説くや。

【三〇】第六問。三十七品は自心より出づ、何ぞ是の因縁を與ふべけんや。

三 法杖、三 禪毬、三 禪鎮を供給し、好師の教詔を得せしめ、好き弟子を

得て化を受けしめ、骨人に與へて觀せしめ、禪經を與へて人をして爲に禪

法を説かしむ。是の如き等は三十七助道法の因縁なり。又人をして爲に摩

訶衍の法を説かしむ。汝等所須の衣服、飲食を盡し來つて是を取れ、便ち

自物の如くして、自ら疑難することを莫れ、汝等是の物を得已つて、自ら

六波羅蜜〔多〕を行じ、亦教へて他人を化して、六波羅蜜〔多〕を行せしむ。

是の布施の性は皆な空なり、汝等是の施及び果報を以て著すること莫

れ。衆生は是の性を得ば、漸漸に阿耨多羅三藐三菩提を得て、無餘涅槃に

入る。布施を首となして、五波羅蜜〔多〕を生ずるが如く、餘の波羅蜜〔多〕

も亦是の如し。

〔二〕 法杖・禪杖のこ、坐禪中  
昏睡あれば之を以つて打つ。

〔三〕 禪毬。坐禪の時睡眠する  
者あれば擲ちて警覺せしむる  
ために用ゐたる毛毯なり。

〔三〕 禪鎮。木版にて爲る、形  
量笏に似、中に孔を作し、  
紐を施して耳下に串き頭に戴  
く、額を去ること四指、坐禪  
人若し昏睡して頭傾く時は墮  
つ、以つて自ら警むと。

卷の第九十二

淨佛國土品第八十二の上を釋す。



爾の時に、須菩提是の念を作す、「何等なか是れ菩薩摩訶薩の道とし、菩薩は是の道に住して、能く是の如きの大誓莊嚴を作すや」と。佛、須菩提の心の所念を知つて、須菩提に告げたまはく、「六波羅蜜(多)は是れ菩薩摩訶薩の道なり、三十七の助道法は是れ菩薩摩訶薩の道なり、十八空は是れ菩薩摩訶薩の道なり、八背捨、九次第定は是れ菩薩摩訶薩の道なり、佛の十力、乃至十八不共法は是れ菩薩摩訶薩の道なり、一切法も亦是れ菩薩摩訶薩の道なり。須菩提よ、汝が意に於て云何、頗し法として、菩薩の學せざる所あらば、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや不や。須菩提よ、法として菩薩の學すべからざるところのものあることなし。何となれば若し菩薩、一切の法を學せざれば、一切種智を得ること能はざればなり」と。須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切の法は空なりとせば、云何が菩薩は一切の法を學すと云ひ、將た、世尊よ、無戲論の中に戲論を作すなきや。所謂是れ此、是れ彼、是れ世間法、是れ出世間法、是れ有漏法、是れ無漏法、是れ無爲法、是れ凡夫人法、是れ阿羅漢法、是れ辟支佛法、是れ佛法なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。一切の法は實に空なり。須菩提よ、若し一切の法空ならずんば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得ず。須菩提よ、今一切の法は實に空なるが故に、菩薩摩訶薩は能く阿耨多羅三藐三菩提を得る」と。

【一】此の品には、前品に續き菩薩道を行じ、佛國土を淨むることを明す。異本には、品名を「淨土品」、又は「淨佛國品」とせり。

捉を得。須菩提よ、汝の言ふところの如し。若し一切の法空ならば、將た佛は無戲論の中に於て戲論を作すなきや。彼此を  
 分別せば、是れ世間の法、是れ出世間の法、乃至是れ佛法なり。須菩提よ、若し世間の衆生、一切法の空なるを知らば、  
 菩薩摩訶薩は、一切の法を學ばずして一切種を得ん。須菩提よ、今衆生は、實に一切法の空なることを知らず、是を以ての  
 故に、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、諸法を分別して、衆生の爲めに説く。須菩提よ、是の菩薩道に於て、  
 初より已來、應に是の如く思惟すべし、一切諸法の中に定性得べからず、但た和合の因縁に従つて法を起すが故に、名字  
 の諸法あるのみと。我れ當に思惟すべし、諸法の實性として著する所若くは六波羅蜜性若くは三十七助道法、若くは須陀  
 洹果、乃至阿羅漢、若くは辟支佛道、若くは阿耨多羅三藐三菩提なしと。何となれば、一切の法、一切法性空なり、(故に)  
 空は空に著せず、空亦不可得なり、何に況や、空の中に著するとあらんや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く思惟し、一切  
 法に著せずして、而も一切法を學し、此の學の中に住して、衆生の心行を觀す。是の衆生心は何れの處にあつてか行す  
 る。衆生の虛妄不實の中に行するを知る。是の時菩薩は是の念を作す、是の衆生は不實虛妄の法に著す、度し易きのみと。  
 是の時菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)の中に住し、方便力を以ての故に是の如く衆生を教化して言ふ。汝諸の衆生よ、當に  
 布施を行じ、徳財を得べくも、亦布施の果報を恃みて、自ら高ぶること莫るべし。何となれば、是の中に堅實あるが故  
 なり。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧も亦是の如し。諸の衆生よ、是の法を行じて、須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道、  
 佛道を得べくも、是の法ありと念するも莫るべしと。是の如く教化し、菩薩道を行じて而も所著なし、是の中に堅實あると  
 なきが故なり。若し是の如く教化すれば、是を菩薩道を行ずと名く。諸法に於て著するところなきが故なり。何となれば、  
 一切の法は所著相なければなり。性無なきを以ての故、性空なるが故なり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、是の如く菩薩  
 道を行する時、住する所なし、是の菩薩は不住の法を用ての故に、檀波羅蜜(多)を行するも亦是の中に住せず、尸羅波羅蜜





菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に菩提道を生じて、是の道を用て、衆生の生死を拔出す。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、生道を用て菩提を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、不生道を用て菩提を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、不生非不生道を用て菩提を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何が當に菩提を得べきや」と。佛の言はく、「道を用て菩提を得るにあらず、亦非道を用て菩提を得るにもあらず。須菩提よ、菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なりといはば、今菩薩は未だ作佛せざる時、應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。云何が諸佛を多陀阿伽度、阿羅呵、三藐三佛陀と説き、三十二相、八十隨形好、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲ありや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何。佛は菩提を得るや不や」と。「不なり。世尊よ、佛は菩提を得ず。何となれば、佛は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ佛なればなり」と。須菩提の問ふ所の如くんば、菩薩の時も亦應に菩提を得べし。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩、六波羅蜜(多)、三十七助道法を具足し、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を具足し、金剛三昧を具足して住し、一念相應の慧を用て、阿耨多羅三藐三菩提を得。是の時を名づけて佛となす。一切法の中に自在を得」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ云何が菩薩摩訶薩は佛國土を淨むるや」と。佛の言はく、「菩薩あり、初發意より已來、自ら身の塵業を除き、口の塵業を除き、意の塵業を除き、亦他人の身口意の塵業を淨む。世尊よ、何等をか是れ菩薩摩訶薩の身口意の塵業と名づく。口塵業、意塵業とをすや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「不善業、若くは殺生、乃至邪見、是を菩薩摩訶薩の身口意の塵業と名づく。」

復次に、須菩提よ、悭貪心、破戒心、瞋心、憍怠心、亂心、愚痴心、是を菩薩の意の塵業と名づく。復次に、戒不淨、是を菩薩の身口の塵業と名づく。復次に、須菩提よ、若し菩薩、四念處の行を遠離せば、是を菩薩の塵業と名づく。四正勤

四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空三昧、無相無作三昧を造難するも亦菩薩の饕菜と名づく。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、須陀洹果の證を食す、乃至阿羅漢果、辟支佛道を食する、是れを菩薩摩訶薩の饕菜と名づく。

釋して曰く、上來須菩提は常に種種に空法を問ひ、時を以て會疑ふ。其れ已に寂滅無戲論の

法を體し、猶ほ復た多く問へり。是を以て問はずして而も心に念す。

復次に、菩薩及び諸天あり、深く禪定に入りて語言を好まず、而も法利を得んと欲す。是の故に須

菩提は言を發せずして而も心に念せり。

問うて曰く、須菩提言なしと雖も而も世尊は言を以て答へたまへり。

答へて曰く、佛の身色は觀て厭足なし、色に厭なきが如く、聲も亦是の如

し。語ると雖も而も細なる禪定の行を妨げず、是の故に佛は言を以て答へたまへり。

復次に、佛は寂滅の相に安立し、阿耨多羅三藐三菩提の中に於て住し、一切の法の若くは善、若く

は不善等を分別したまはず、而も衆生の疑あつて問ふあれば、佛は所問所念に隨つて答へたまへり。

是の故に須菩提と同じからず。須菩提は是の六波羅蜜多等の諸法甚深の義を聞くも、其の邊を得ると

能はず。是の故に問ふ、何等か是れ菩薩道なりや。是の道を行じ、清淨にして著する所なく、六波羅

蜜多等の諸の善法莊嚴の如くなるやと。佛其の意を知り、須菩提に於ては益する所少しと雖も、諸

【二】第一問、須菩提は無言なりと雖も、而も世尊は言を以て答へ給ひしにあらすや。

の菩薩を増益せんが爲の故に答へたまはく、六波羅蜜(多)等は是れ菩薩の道なり、六波羅蜜(多)は是れ菩薩初發心の道なりと。次に四禪、八背捨、九次第定及び三十七の道品を行じて、但だ涅槃、十八空、佛の十力等を求め、微細に但だ佛道を求む。六波羅蜜の道は多く衆生のための故に(行じ)、三七品等は、但だ涅槃を求め(んがための故に行じ)、十八空等は涅槃の中に於て、聲聞(及び)辟支佛地を出過して、菩薩位の道に入る。是の三種は皆な是れ法性、生身の菩薩の所行なり。所以は何んとなれば、諸法を分別するが故なり。今又一切の法は皆な是れ菩薩道なり。

是の法性、生身の菩薩の所行は、諸法に好惡あるを見ず、諸法平等の相に安立するが故なり、此の中に佛自ら因縁を説きたまへり。菩薩は應に一切の法を學すべし、若し一法をも學せざれば則ち一切種智を得ること能はず、一切の法を學する者は、一切種門を用つて思惟し、籌量し、修觀し、通達す。須菩提、佛に白

さく、若し一切の法は一相、所謂空ならば、云何が菩薩は一切法を學して、將た、無戲論相の法中に於て戲論を爲すこと無きや。所謂此彼の諸法は、略して是れ戲論の相、此は東、彼は西、是れ上、是れ下、是れ常、是れ無常、是れ實、是れ虛、是れ世間、是れ出世間、乃至是れ二乘法、是れ佛法と説く。佛其の説を可し、一切の法は空相なり、若し法實に定んで空ならざるもの有らば、即ち是れ無生無滅なり。無生無滅の故に四諦なく、四諦なきが故に佛法僧寶なし。是の如く三寶等の諸法は皆な壞

【三】 生身の菩薩、菩薩、衆生濟度の爲めに父母に托して胎生する肉身をいふ。

【四】 一切種門、一切種智に同じ。

す。今諸法は實に空なり。乃至空相も亦空なり、衆生は愚癡顛倒の故に著す。是の故に、衆生の中に於て、悲心を起こし、拔出せんと欲するが故に、佛の身力を求め、衆生をして其の語を信受せしめ、顛倒を捨てて、諸法の實相に入らしめんと欲す。是の故に、菩薩は諸法は空なりと知ると雖も、而も衆生を利益せんが爲めに分別して説く。若し衆生自ら諸法の空なることを知らば、菩薩は但自ら空相の中に住し、一切法を學し分別することを須るす。菩薩は菩薩道を行する時、初發意より已來、是の如く思惟す、「一切の法は、定實の法なく、但た因縁和合より起り、是の衆因縁も亦各和合より起り、乃至畢竟空に到る。畢竟空唯是の一法のみ實にして、餘は無性の故に皆な虚誑なり。我れ無始世より來た、是の虚誑の法に著し、六道の中に於て、苦惱を受くるを厭うて、我れ今三世十萬の佛子となる。般若は是れ我が母なり、今復た虚誑の法を隨逐すべからず」と。是の故に菩薩は、乃至畢竟空の中にも亦著せず、何に況んや餘法、所謂檀波羅蜜等をや。爾の時に、菩薩は菩薩の道を照明し、其の心安穩にして、自ら念ずらく、「我れ但た著心を斷するに、道は自然にして至る」と。是のこゝとを知り已つて念ずらく、「衆生は深く世間に著するも、而も畢竟空なり、亦空も無性にして住處あることなし、衆生信受すべきこと難し。衆生をして是の法を信受せしめんが爲の故に、一切の法を學す。修行の生起は、是れ衆生を度する方便の法なり。衆生の心行の趣く所を觀、何の法を好み、

【五】 一法のみ實。諸法は皆空にして實性なきも、諸法畢竟空といふことのみは實なりといふことなり。

何の法を念ずるかを知りて、「衆生の」志す所の願を観る時、悉く衆生所著の處を知る。皆な是れ  
 虚誑、顛倒、憶想、分別の故に著して、根本の實事あることなし。爾の時に菩薩は、大に歡喜して是の  
 念をなす、「衆生は度し易きのみ」と。所以は何となれば、衆生の著する所は、皆な是れ虚誑無實  
 なればなり。譬へば、人に一子有り、喜んで不淨の中にありて、戯れて土を聚めて穀となし、草木を  
 以て鳥獸となし、而も愛著を生じ、人の「之を」奪ふ者あれば、瞋恚し、啼哭す。其の父知り已つて此  
 の子今愛著すと雖も、此の二と離れ易きのみと「なして」、以て大に自ら休するが如し。何となれば、  
 此の物は眞にあらざるが故なり。菩薩も亦是の如し。衆生の不淨の臭身、

【六】五善根。信、進、念、定、慧  
 ないふ。

及び五欲に愛著するは、是れ無常にして種種の苦の因なりと觀じ、是の衆  
 生は信等の 五善根成就する時、即ち能く捨離するを得るを知る。若し小兒の著する所、實に是れ  
 眞物ならば、復た年百歳に至ると雖も、之に著すること轉た深うして、捨つることを得べからず。若  
 し衆生の著する所の物定んで實有ならば、信等の五根を得と雖も、之れに著すること轉た深うして、  
 亦離ること能はず。諸法は皆空にして虚誑不實なるを以ての故に、無漏清淨智の眼を得る時、即ち  
 能く所著を遠離し、大に自ら慙愧す。譬へば、狂病の所作は法にあらず、醒語の後羞慙して顔なきが  
 如し。菩薩は衆生の度し易きを知り已つて、般若の中に安住し、方便力を以て衆生を教化す。汝等當  
 に布施を行じて、隨財を得べし。是の布施の果報を得んで、自ら橋り高ぶること莫れ。此の中に堅實

あることなく、皆當に破壊すべし。未だ布施せざる時と異なることなし。持戒等乃至十八不共法も亦是の如し。是の諸法は清淨にして大に益する所ありと雖も、皆な是れ有爲法にして、因縁より生じ、自性あることなし。汝等若し是の法に著せば、能く苦惱を生ず。譬へば熱したる金丸は是れ寶物なりと雖も、捉ふれば則ち手を焼くが如し。是の如く、菩薩は衆生を教化し、菩薩の道を行じて、自ら所著なく、亦衆生のために無所著を説く。無著の心を以て、檀波羅蜜(多)を行すが故に、檀の中に住せざるなり。住せずとは、所謂布施の時、三種の相を取らず、亦果報に著せず、而も自ら高うして、罪業を生ず、布施の果報滅壞の時も亦惱を生ぜず。尸羅波羅蜜(多)、乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如し。此の中に、佛自ら不住の因縁を説くに二種あり。一には菩薩は深く空に入り、諸法の性を見ざるが故に住せず。二には小事を以て足れりとせざるが故に住せず。是の菩薩は異心あることな

く、但だ一向に能く菩提の道を生ず。須菩提、佛に白さく、若し一切の法無生ならば、云何が菩薩は能く菩提の道を生ぜんやと。佛、須菩提の意を可とし、「一切の法は無生なり、我れ實に處處に諸法の無生を説くも、凡夫のために説くにあらず、但だ無作の解脱を得て、三種の業を起さざる者のため

に説く」と。復問ふ、世尊よ、佛、自ら有佛にも無佛にも、諸法の法相は常住と説く。聖人の法相な

るが如く、凡人も亦是の如きやと。佛其の所説を可とし、「諸法の實相は常住なり、衆生は「之を」知ら

【七】 三種の相。布施に就ての三條件、即ち施物、施者、受者之れなり。

【八】 三種の業。貪、瞋、癡の三業をいふ。

す、解せざるを以ての故に菩提の道を起す。但だ凡夫の顛倒の法を除かんがための故に名づけて道となす。若し決定して道として著す可きものあれば、即ち復た是れ顛倒なり。道、非道の平等なる、即ち是れ道なり。是の故に難すべからず」と。須菩提復問ふ、「云何が菩提を得べきや。生道を用ふるが故に得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。何となれば生道とは、菩薩、是の有爲法を生滅の相なりと觀じて是を實〔相〕と謂ふ、是の故に不なり。先に熱せる金丸の喩を説けるが如し。不生の法は即ち是れ無爲無作の法なるが故に、亦以て菩提を得べからず。生、不生の二俱に化あるが故なり。非生非不生は菩提を得るや。答へて言はく、不なり。

問うて曰く、若し生、不生二つ俱に過あり、非生非不生復た應せずして過あらば、何を以てか得ずと言ふや。答へて曰く、若し非生、非不生は是れ好なり、是れ醜なりと分別すれば、相を取つて著を生ずるが故なり。

故に過ありと言ふ。若し能く著せざれば、則ち是れ菩提の道なり。須菩提問ふ、若し四句を以て得ざれば云何が道を得るや。佛答へたまはく、道を以てせず、非道を以てせざれば、則ち菩提を得と。何となれば、(一)菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なればなり。菩提を諸法の實相と名くるは、是れ諸佛所得の究竟實相にして變異あるとなく、一切の法菩提の中に入つて、皆な寂滅の相なると、一切の水の大海の中に入れば、同じく一味となるが如し。是の故に佛は、菩提の性は即ち是れ道の性と説き

【九】 第二問、生不生二ともに過あり、非生非不生も亦た過あらば、何を以てか得ずと言ふか。  
 【一〇】 菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なり。



たまへり。若し菩提の性と道の性と異らば、名けて菩提を、無戲論寂滅の相と爲さず。是の故に菩提即ち是れ道、道即ち是れ菩提と説くなり。

復次に、(二) 是の二法異らば、道を行するも菩提に到るべからず。「何となれば」諸法の因果は不一異なるが故なり。須菩提復た問ふ、若し爾らば、菩薩、道を行すれば、便ち是れ佛なるべし。所以は何となれば、道は即ち是れ菩提なればなり。又佛は是れ菩薩なるべし、何となれば、菩提は即ち是れ道なればなり。今何を以てか差別あり、佛に十力等、三十二相、八十隨形好ありと説くや。須菩提、新學の菩薩の爲の故に、分別して佛を難じて、菩薩は即ち是れ佛なるべしと。佛、反問を以て答へたまはく、「佛は菩提を得るや不や」と、答へて言さく、「不なり、何となれば、菩提は佛を離れず、佛は菩提を離れず、二法和合するが故に、是れ佛なり、是れ菩提なり。是の故に難じて、菩薩は即ち是れ佛なりと言ふべからず」と。此は總相の答なり。

問うて曰く、(三) 佛は是れ衆生、菩提は是れ法なり、云何が佛は即ち是れ菩薩なりと言ふや。答へて曰く、先づ三十二相ありて身を莊嚴し、六波羅蜜多等の功德ありて心を莊嚴するに、而も名づけて佛となさず。菩提を得るが故に、之を名づけて佛となす。是の故に、佛と菩提と異らずと言ふ。微妙清淨なる五衆和合を假に名けて、佛法と爲す、即ち是れ五衆なり。五衆は假名を離れず、菩提は即ち

【一】此の二法。菩提と道となり。  
【二】佛は是れ衆生、菩提は是れ法なり、云何が佛は即ち之れ菩提なりと言ふや。

是れ五衆の實相なり。一切の法は皆な菩提に入るが故に、是の故に佛は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ佛なり。但だ凡夫の心中に異りありと分別するのみ。

問うて曰く、三 汝先に論議の中に説いて、菩提と道とは不一不異なりと言へり。經の中に何を以てか、道は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ道、佛は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ佛なりと説くや。答

へて曰く、一 異は俱に實なりと雖も、而も多く一を用ふるが故に、此の中に菩提即ち是れ道、道即ち是れ菩提と説くに咎なし。常、無常は是の二邊の

如く、常は多く煩惱を生ずるが故に用ゐず、無常は能く顛倒を破するが故に多く用ゐる、事既に成辦すれば亦無常をも捨つ。此の中亦是の如く、若し種

種の別異の法を觀するを以ての故に、多く著心を生ず。若し諸法は一相、若くは無常、若くに空等と觀すれば、是の時は煩惱生ぜず、一何となれば、

著心少なきが故なり。是の故に多く是の一を用ふ。實義の中に於ては一も亦用ゐず。若し一に著すれば、即ち復た是れ患なり。復た次に、別異は無なるが故に、一も亦不可得なり。相待の法なるが故に、

但だ不著の心を以て一相を取らず、故に説くに咎なし。一は實ならざるが故に、菩薩即ち是れ佛とすることを得ず。

復次に、今佛更に答へたまふに、須菩提自ら因縁を説く。菩提は寂滅の相なりと雖も、而も菩薩は能

【三】 第四問、經中に、道は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ道、佛は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ佛と説ける理由如何  
【四】 一多の中には多く一を用ゐる、常無常の中には多く無常を用ふ。

六波羅蜜多等の諸の功徳を具足し、金剛三昧に住し、一念相應の慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得。爾の時に、一切法の中に於て自在なるを名づけて佛となすを得。菩薩は道及び菩提の異らざることを知ると雖も、未だ諸の功徳を具足せざるが故に名づけて佛となさず。又佛は諸事畢竟し、願行満足するが故に名づけて菩薩となさず。得るものは是れ佛法なり、是れ菩提なり。菩提を求むるものは是れ菩薩なり。須菩提は佛より菩提の相「及び」道の相を聞き衆生を成就し已れり。今は 淨佛國土の事を問ふは、諸の阿羅漢、辟支佛は力あつて佛國土を淨むることを知ることなし、是の故に問ふなり。

問うて曰く、何等か是れ佛土を淨むるや。答へて曰く、佛土とは、百億の日月、百億の須彌山、百億の 四天王等の諸天、是を三千大千世界と名づく。是の如き等の無量無邊の三千大千世界を名づけて一佛土となし、佛此の中に於て佛事を施作す。佛常に晝三時、夜三時に、佛眼を以て、遍く衆生を觀じたまはく、「誰か善根を種うべき、誰か善根を成熟し增長する、誰か善根を成就して度を得べき」と。是れを見已つて、神通力を以て、所見に隨つて衆生を教化す。心は外縁に隨逐するも、隨意の事を得れば、則ち煩惱を生ぜず。不淨無常等の因縁を得れば、則ち貪欲等の煩惱を生ぜず。若し無所有、空の因縁を得れば、則ち癡等の諸の煩惱を生ぜず。是の故に諸の菩薩は、佛土を莊嚴し、

【一五】 淨佛土の事。

【一六】 第五問、淨佛國土とは何ぞや。

【一七】 四天王、持國天王、廣目天王、增長天王、多聞天王之れなり、須彌山の半腹六欲天に住し正法を守護す。

衆生をして、度し易からしめんが爲めの故に、國土の中に乏少する所なし。心無我の故に則ち慳貪、瞋恚等の煩惱を生ぜず。佛國土は一切の樹木ありて、常に諸法實相の音聲を出だす。所謂無生、無滅、無起、無作等「是れ」なり。衆生は但だ是の妙音を聞いて異聲を聞かず、衆生利根なる故に便ち諸法實相を得。是の如き等の佛土を莊嚴するを名けて、佛土を淨むとなす。〔一八〕阿彌陀等の諸經の中に説くが如し。佛答へたまはく、「菩薩は初發意より來た、自ら麤の身口意業を淨め、亦他人をして麤の身口意業を淨めしむ」と。問うて曰く、「〔一九〕若し菩薩、佛土を淨むるに、是の菩薩は、無生法忍を淨むと言ふや。」

〔二〇〕無生法忍。略して無生忍といふ。生滅を遠離せる眞如實相の理體に安住して動かざるをいふ。初地又は七八九地に於て得る悟なり。

〔二一〕國土に淨穢ある因縁。

得、神通波羅蜜多に住し、然る後能く佛土を淨めば、今何を以てか初發意より來た、麤の身口意業を淨むと言ふや。答へて曰く、三業の清淨なるは、但だ佛土を淨めんが爲のみにあらず、一切の菩薩道は皆此の三業を淨む。「即ち」初に身口意業を淨め、後佛土を淨めんが爲に、自身を淨め亦他人を淨む。何となれば、但だ一人のみ國土の中に生ずるものに非ず、皆共に因縁と作り、内法と外法と因縁と作り。若くは善、若くは不善なり。惡口の業多きが故に、地に荆棘を生じ、詭証して心を曲ぐるが故に、地は則ち高下不平なり。慳貪多きが故に則ち水旱れ調はさして、地に砂磔を生ず。上の諸惡を作さざるが故に、地は則ち平正にして、多く珍寶を出し、彌勒佛

の出づる時の如く、人皆な十善を行するが故に地に珍寶多し。

問うて曰く、(三)若し布施等の諸の善法、佛土を淨むるの果報を得ば、何を以てか但だ三業を淨むるを説くや。答へて曰く、善惡の諸法は、是れ苦樂の因縁なりと知ると雖も、一切の心心數法の中の如くんば、(三)得道の時は智慧を大となし、攝心の中には定を大となし、作業の時は思を大となす。是の思業を得已つて身口の業、布施、禪定等を起すに思を以て首となす。譬へば衣を縫ふに、針を以て導となすが如し。後世の果報を受くる時は業力を大となす。是の故に三業を説くに、則ち一切の業法を攝す。意業の中には盡く一切の心數法を攝し、身口は則ち一切の色法を攝入す、(三)身行三種の福德具足すれば則ち國土清淨なり。内法淨きが故に、外法も亦淨し。譬へば、面淨きが故に、鏡中の像も亦淨きが如し。毗摩羅語經の中に、不殺生の故に、人皆な長壽なること、是の如し等と説くが如し。

問うて曰く、(三)身口意の麤業は是の事知り易し。須菩提は何を以ての故に問へるや。答へて曰く、(三)麤細不定の故に問ふなり。求道の人の中には、布施に是れ麤善なるも、白衣に於ては細善となすが如し。小乗の中には不善業を麤となし、善業を細とみなすも、摩訶衍の中

【三】第七問、若し布施等の善法、佛土を淨むるの果報を得ば、何を以てか但だ三業を淨むるのみを説くか。  
【三】得道の時は慧の心所を大となし、攝心の時定の心所を大となし、作業の時は思の心所を大と爲す。  
【三】身行三種の福德、不殺生不偷盜、不邪淫の三をいふ。  
【三】第八問、身口意の麤業は知り易し、須菩提が之を問へる理由如何。  
【三】身口意の業は麤細不定なり。

には、取善の法相、乃至涅槃、皆な名づけて麤そとはすが如ごとく、麤細不定なるを以ての故に問ふなり。  
 佛次第に爲に麤業の相を説きたまはく、「所謂奪命乃至邪見〔等〕」、是の三種の身業、四種の口業、三種の意業を、皆な名けて麤となす」と。復た次に、菩薩は六波羅蜜〔多〕の法を破する慳貪等を、皆な名けて麤となす。

問うて曰く、先に十不善道を説き已つて慳貪等を攝す、何を以てか復た別説するや。答へて曰く、是の六法は十不善道に入らず、十不善道は皆な是れ衆生を惱す法なり。是の六法は、但だ衆生を惱すと爲さず、慳心の如きは、但だ自ら財を惜んで衆生を惱さざるなり。貪心に二種あり、一には但だ他の財を貪つて、未だ衆生を惱さず。二には貪心轉じて盛にして求めて得ざれば則ち毀害せんと欲す、是を業道と名づく。能く業を起すを以ての故なり。瞋心も亦た是の如し。小なるものは業道と名づけず、其の能く惡處に趣くを以ての故に道となす。是の故に別して六法を説くに咎なし。

問うて曰く、六波羅蜜〔多〕の中に已に戒を説けり。今何を以てか復た戒不淨を説くや。答へて曰く、言はれ戒の法は是れ殺生等の麤業、戒不淨は是れ微細の罪にして衆生を惱さず、飲酒等を十不善道に入れざるが如し。

【元】第九問、已に十不善道の中に慳貪等を攝せり、今これを別説する理由如何。

【二】二種の貪心。

【元】第一〇問、六度の中に已に戒を説けり、今それ更に戒不淨を説くは何故なるか。

【三】戒不淨の意義。

復次に、五衆戒を破するを名づけて破戒とす。所受の戒を破せず、常に三毒のために覆はれて、心に戒を憶念せず、天福邪見に廻向して戒を持す、是の如き等を名づけて戒不淨となす。

復次に、若し菩薩、心に四念處等の三十七品、三解脱門を遠離すれば、是れを麤業と名づく。所以は何んとなれば、此の中、心は皆實法を觀じ、涅槃に隨ひ、世間に隨はず。若し四念處等の法を出づれば、心則ち散亂す。譬へば蛇の行くに、本性は曲を好むも、若し竹筍に入るれば則ち直けれども、

筍を出づれば還た曲るが如し。

復次に、若し菩薩、須陀洹果の證を貪れば、是を麤業となす。人、佛の須陀洹果は、三惡道に墮せず、無量の苦を盡くすと、五十由旬の池水の如く、餘に在る者は、一滴二滴の如しと説くを聞けば、

則ち貪心を生ずるが如し。其の心牢固ならざるを以て、本より作佛を求むるに衆生の爲めにす。今自身の爲めに證を取らんと欲す、是を佛を欺くとなし、亦衆生に負むるとなす、是の故に麤と名く。譬へば、人の客を請じて、飲食を設けん欲して、竟に與へざれば、是れ則ち妄語して、客に負むくが如し。

菩薩も亦是の如く、初發心の時、「我れ當に作佛して、一切衆生を度すべし」との願を作して、須陀洹を貪れば、是れ則ち一切衆生に負くなり。須陀洹果を貪るが如く、乃至辟支佛道を貪るも亦是の如し。

# 卷の第九十三

## 淨佛國土品第八十三の下を釋す。

釋

復次に、須菩提よ、菩薩の色相、受想行識相、眼相、耳鼻舌身意相、色聲香味觸法相、男相、女相、欲界相、色界相、無色界相、善法相、不善法相、有爲法相、無爲法相、是を菩薩の塵業と名づく。菩薩摩訶薩は、皆な是の如き塵業の相を遠離し、自ら布施し、亦他人をして布施せしめ、食を須する(者)には食を與へ、衣を須する(者)には衣を與へ、乃至種種の資生の須ゆる所は盡く之を給與し、亦他人をして種種に布施せしむ。是の福德を持つて、一切衆生と之を共にす、淨佛國土に廻向するが故なり。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧も亦是の如し。是の菩薩摩訶薩は、或は三千大千界の國土の中に滿つる珍寶を以て、三尊に施與し、是の願を作して言はく、我れ善根の因縁を以ての故に、我が國土をして皆な七寶を以て成ぜしめん。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は天の伎樂を以て、佛及び佛塔を願ひ、是の願を作して言はく、是の善根の因縁を以ての故に、我が國土の中に常に天樂を聞かんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、三千大千の國土の中に滿つる天香を以て、諸佛及び諸佛の塔を供養し、是の願を作して言はく、是の善根の因縁を以ての故に、我が國土の中に常に天香あらしめん。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は百味の食を以て、佛及び僧に施し、是の願を作して言はく、是の善根の因縁を以ての故



に、我が國土の中の衆生をして皆な百味の食を得せしめんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、天香の細滑を以て、佛及び僧に施し、是の願を作して言はく、是の善根の因縁を以て、我が國土の中の一切の衆生をして、天香の細滑を受けしめんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、意に隨ふところの五欲を以て、佛及び僧並に一切衆生に施し、是の願を作して言はく、是の善根の因縁を以ての故に、我が國土の中の弟子及び一切衆生をして、皆意に隨ふところの五欲を得せしめんと。

是の菩薩は、意に隨ふところの五欲を以て、一切衆生と共に、淨佛國土に廻向し、是の願を作して言はく、我れ佛を得るの時、是の國土の中に天の五欲の心に應じて至るが如くせん。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、是の願を作して言はく、我れ當に自ら初禪に入り、亦一切衆生をして初禪に入らしめん。第二、第三、第四禪、慈悲喜捨心、乃至三十七助道法も、亦是の如し。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、一切衆生をして、四禪を遠離せず、乃至三十七品助道法を遠離せざらしめんと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は能く佛國土を淨む。是の菩薩は爾所に隨つて菩薩道を行じ、諸願を満足す。是の菩薩は自ら一切の善法を成就し、亦た一切衆生の善法をも成就せしむ。是の菩薩は身を受くること端正にして、化するところの衆生も亦た端正なることを得。所以は何んとなれば、福德の因縁厚きが故なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く佛國土を淨め、是の國土の中に、乃至三惡道の名なく、亦邪見、三毒、二乘、聲聞、辟支佛の名なく、耳に無常、苦、空の聲あるを聞かず、亦我の所有なく、乃至諸の結使煩惱の名もなく、亦た諸果を分別するの名もなく、風は七寶の樹を吹き、度すべき所に隨つて音聲を出す。所謂、空、無相、無作、諸法實相の音の如し。有佛無佛、一切法一切法相空、空の中に相あるとなく、無相の中には則ち作出なし。是の如きの法音あり、若くは晝、若くは夜、若くは坐、若くは臥、若くは立、若くは行、常に此の法を聞く。

是の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、十方國土の中の諸佛に讚歎したまふ。衆生は是の佛名を聞いて、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時に説法す。衆生の聞くもの信ぜずして疑を生じ、法を是れ非法なりと言ふものあることなし。何となれば、諸法實相の中には、皆是れ法にして非法あることなけれどもなり。諸有の薄徳の人は、諸佛及ぶ弟子の中に於て、善根を種えず、善知識に隨はず、我見の中に没在し、乃至一切の種種の見の中に没在し、邊見所謂若くは斷、若くは常に墮在す。是の如き人は、邪見を以ての故に、非佛を佛と言ひ、佛を非佛と言ふ。非法を法と言ひ、法を非法と言ふ。是の如き人は、法を破るが故に、身壞し、命終つて惡道地獄の中に墮す。諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、此の衆生の五道を往來するを見て、邪聚を離れ、正定聚の中に立たしめて、更に惡道に墮せざらしむ。

是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の淨佛國土の中の衆生は、雜穢の心、若くは世間法、若くは出世間法、若くは有漏(法)、若くは無漏(法)、若くは有爲(法)、若くは無爲(法)なり、乃至是の國土の中の衆生は、畢竟して阿耨多羅三藐三菩提に至る。須菩提よ、是れを菩薩摩訶薩の佛國土を淨むとなす」と。

釋して曰く、復た塵業あり、諸法畢竟空の中に於て、相を取り、著

心を生ず。所謂色相、受想行識相、眼相、乃至意相、色相、乃至法相、男相、女相、三界の善不善、有爲無爲の相等を取るなり。

問うて曰く、(一) 男女相は是れ虛妄不實なるべし、餘の色等の善不善の法は、若し相を取らずんば、云何が能く色等を厭ひ、善法を成就せんや。答へて曰く、佛法の中に (二) 二種の空あり、一には衆生

- 【一】 第一問、若し相を取らずんば、云何が能く色等を厭ひ、善法を成就せんや。
- 【二】 二種の空——(一) 衆生空、(二) 法空。

空、二には法空なり。衆生空を以て衆生相を破す、「是れ」所謂男女等の相なり。法空を以て色等の法の中の虚妄の相を破す、一切の法空を破す中に説くが如し。能く色等の善法を觀るに、幻の如く、化の如くにして、定實の相を取らず。厭心を得れば、則ち戲論常無常等を捨つ、是を名けて取相と爲さす。又色等及び善法は、皆な和合の性なり、空を行ずるが故に諸の惱煩を生ぜず。

問うて曰く、一切の有爲法は假名和合の故に取るべからず。無爲法は是れ眞實の法なり。所謂の如・法性・實際なり、何を以てか取らざるや。答へて曰く、不取の相は是れ無爲法にして、無相なるを以て、名けて無爲法門となす。若し取相便ち是れ有爲ならば、是の如き等の一切の虚誑の取相は不實にして、麤の身口意業を遠離す。菩薩は淨佛土を行せんと欲し、是の如き等の麤の身口意業を遠離して、自ら六波羅蜜多を行じ、亦他人をして行せしむ。清淨の因縁を共にするが故に則ち佛土清淨なり。上は總相の説、下は別相の説なり。是の菩薩は三千大千世界に滿つる七寶を以て、佛及び僧に施し、是の願を作す、「我れ是の布施の因縁を以て、我が國土をして皆は七寶莊嚴たらしめん」と。

問うて曰く、若し三千大千世界に滿つる珍寶は、何れの處より得るや、又諸佛賢聖は少欲知足な

【三】 第二問、有爲法の取るべからざるは則ち可なり、無爲法——如・法性・實際——を取るべからずと言ふは、何故なるか。

【四】 第三問、三千大千世界に滿つる珍寶は、何の處より來り、誰か之を受くる者ぞ。若し凡夫は厭足なければ、何ぞ能く三千世界の物を受けんや。

り、誰か是れを受くる者ぞ。若し凡人は厭足なければ、何ぞ能く三千世界の物を受けんや。答へて曰く、是の菩薩は是れ法性生身なり。具足神通波羅蜜の中に住して、十方の佛に供養せんが爲めの故に、三千世界の珍寶を以て供養するなり。又其の寶物は神通力の所作なれば、輕細にして妨げなきこと、第三禪(天)の遍淨天の六十人、一針頭に坐して法を聽くに相妨礙せざるが如し。何に況んや大菩薩の、深く神通に入りて作る所の寶物をや。或は菩薩あり、身を變ずると須彌山の如く、十方の佛前に逼じて以て燈炷と爲り、佛若くは佛の塔廟を供養し、而も願を作して言はく、「我が國土をして常に光明あらしめ、日月の燈燭を須るす」と。或は菩薩あり、諸の華香、幡蓋、環絡を雨らして以て供養をなし、復た是の願を作す、「我が國土の衆生をして端正にして、華の如く身相嚴淨にして、醜陋あることなからしめん」と。是の如き等の種種の好色の因縁あり。復た菩薩あり、天の伎樂を以て、佛若くは佛の塔廟を娛樂す。是の菩薩は或る時は、神通力を以ての故に、天の伎樂を作し、或は天輪聖王の伎樂を作し、或は阿修羅神龍王等と作りて、天の伎樂もて供養し、我が國土の中に常に好音を聞かんことを願ふ。

問うて曰く、諸佛賢聖は是れ離欲の人なり、則ち音樂歌舞を須るす、何を以てか伎樂を供養するや。答へて曰く、諸佛は一切法の中に於て、心に著するところなく、世間法に於て盡く須ふる所なし

【五】 第四問、諸佛賢聖は離欲の人なり、則ち音樂歌舞を須るす、何を以てか伎樂を供養するか。

と雖も、諸佛は衆生を憐愍するが故に世に出で、應に供養する者に隨ひ、願に隨つて福を得せしむべきが故に愛く。華香を以て供養するが如きは、亦佛の須ふる所に非ず、佛身は常に妙香ありて、諸天の及ばざる所なるも、衆生を利益せんが爲めの故に愛く。是の菩薩は、佛土を淨めんと欲するが故に、好き音聲を求め、國土の中の衆生をして、好き音聲を聞いて、其の心を柔軟ならしめんと欲す。

心柔軟なるが故に、化を受くべきこと易し。是の故に、音聲の因縁を以て而も佛を供養す。或は菩薩あり、三千大千世界に滿つる香もて諸佛若しくは塔に供養す。一即ち根香、莖香、葉香、末香、若しくは天香、若しくは變化香、若しくは菩薩果報生の香なり。「是の如く供養して是の願を作す、我が國土の中に常に好香あつて、作者あることなからしめん」と。或は菩薩あり、百味を以て諸佛及び僧を供養す。有人の言はく、「能く百種の羹を以て供養するを、是を百味と名く」と。有人の言はく、「餅種の數五百にして其の味百あり、是を百味と名く」と。有人の言はく、「百種の藥草藥果を以て、歡喜丸を作る、是を百味と名く」と。有人の言はく、「飲食羹餅に總べて百味あり」と。有人の言はく、「飯食に種種備足するが故に、稱して百味となす」と。人の飲食の故に百味なり。天の飲食は則ち百千種味なり。菩薩の福德生の果報の食、及び神通力の變化の食には則ち無量味ありて、能く人心を轉じて離欲清淨ならしむ。是の四種の食も

【六】 百味の供養、百味に關する數數の説。

【七】 歡喜丸。又は歡喜團。餅菓子の名にして酥と麴と蜜と薑と胡椒と華芡と蒲と胡桃と石榴と桜子とを和合して作りしもの。

て、菩薩は因縁に隨つて、佛及び僧を供養す。是の故に國土の中に、自然に百味の飲食あり。或は菩薩あり、天の塗香を以てす。天竺は國熱く、又身臭きを以ての故に、香を以て身に塗り、諸佛及び僧を供養す。此の因縁を以ての故に、我が國土の衆生をして、天香細滑を受けしむるなり。

問うて曰く、沙彌戒、乃至一日戒を受くるに尙ほ香を以て身に塗らず、云何が香を以て、佛及び僧を供養するや。答へて曰く、是の菩薩は、身の貴ぶ所の物を以て、所須に隨つて、時に用ゐて以て供養す。或は以て地を塗り、壁及び行坐の處に塗るなり。又隨意の五欲を以て、諸佛、及び僧、及び餘の衆生に供養す。是の菩薩は好き車馬、妻妾、伎樂、旃蓋、金銀、衣服、珍寶を以て、出家の人の受けざる所は、則ち諸の衆生に施し、願を作して言はく、「我が國土の衆生をして、常に隨意に五欲を得せしめん」と。

問うて曰く、此の五欲を佛は火の如く、坑の如く、瘡の如く、獄の如く、怨の如く、賊の如くにして、能く人の善根を奪ふと説きたまへり、菩薩は何を以て衆生をして五欲を得せしめんと願するや。又佛は、「弟子よ、

【八】 印度は熱し、隨て身より臭氣を放つ、故に香を以て身に塗る。

【九】 第五問、沙彌戒一日戒を受くるに、尙ほ身に香を塗らず、云何が香を以て、佛及び僧に供養するか。

【一〇】 沙彌戒とは、沙彌の持つべき戒法にして、八種別解脫戒の一なり。殺生、偷盜、非梵行、妄語、飲酒、塗飾、香鬘、歌舞觀聽、眠坐高廣、嚴麗牀座、食非時食、受蓄金銀等寶の十過非を防止するをいふなり。

【一一】 第六問、佛説によれば、此の五欲は火の如く、坑等の如し。然るを菩薩は何故に衆生をして之を得せしめんと願するか。

應に納衣にして乞食し、林樹の下に坐すべし」と説きたまへり。菩薩は何を以てか衆生の爲めに五欲を得んことを求むるや。答へて曰く、三三天上人中の五欲は是れ福德の果報なり。若くは今世、若くは後世、貧窮薄福の者は、自ら活すこと能はざれば、則ち劫盜を行ひ、或は物の主となりて害せられ、或は賊と爲りて他を殺し、或は詰問せらるるも妄言して作さずといふ。是の如く、次第に十不善を爲すは、皆な貧窮に由るが故に作すなり。若し人、五欲を具足すれば、則ち欲するところ意に隨ひ、則ち十不善を行せず、「是の故に菩薩、衆生の爲めに五欲を得んことを求むるなり」。菩薩の國土は、衆生豊樂なれば、自ら恣ままにして、乏少するところなく、則ち衆惡なし。但だ愛慢等の三三輒結使あるも、若し佛の所説を聞き、或は弟子の所説を聞けば、心柔軟なるを以ての故に、法を聞いて道を得べきこと易し。著心多しと雖も、利根の故に、無常、苦、空等を聞けば即便ち道を得。譬へば三四垢膩の衣は、則ち灰泥を以て之れを滌ふも、宿を経て水を以て之れを洗へば、一時に都て去るが如し。菩薩は衆生をして、著せしめんと欲せざるが故に五欲を以て施す。但だ一時に捨てしめんと欲するが故に、之を與ふるのみ。汝が先きに説けるが如く、佛は弟子に納衣乞食を教へたまへり。宿罪の因縁によりて、生れて惡世に在り、染著の心多し。若し好衣美食を得れば著心則ち深し。又好衣食を求めんとするが故

**【三三】** 天人の五欲には衆惡ありと雖も、菩薩のそれには衆惡なし。  
**【三四】** 輒結使。力强劣ならざる煩惱をいふ。  
**【三五】** 欲を以て欲を捨てしむるは、泥を以て垢衣を滌ふも、宿を経て之を洗へば、一時に都て去るが如し。

に行動を防護するなり 一五 是の菩薩は佛國土を淨むるに、衆生無量なれば福德成就し、五欲一等の故に復た貴著せず。亦更に求めざるが故に妨ぐるところなし。又復た若し行者五欲を離れ、苦行を修すれば、則ち瞋恚を増長し、又復た五欲を憶念すれば、則ち煩惱を生ず。爾の時、則ち向ふ所なし。是の故に佛の言はく、「苦樂を捨て、智慧を用ゐ、中道に處せよ」と。是の故に佛國土を淨め、五欲の施に妨なし。

問うて曰く、「若し爾らば、毗尼の中に、何を以てか、一比丘の「我れ佛法の義を知れば、五欲を受くるに道を妨げず」と言へるに、是の比丘は呵すること乃ち三たびに至り、止めずして擯出せしや。答へて曰く、「佛法に二種あり、小乗と大乘となり。小乗の中には薄福の人は三毒偏に多し。婆差經の中に佛の説きたまふが如し。「我が白衣の弟子は一に非ず、二に非ず、乃至五百人を出づ。亦梅檀を受けて身に塗り、及び好香華を受けて妻子と共に臥し、奴婢をして結を斷じて須陀洹を得、三世の苦を盡し、三毒を薄くして斯陀含を得せしむ。是の阿梨陀比丘は

- 【一五】 菩薩は五欲を施すも妨なし。
- 【一六】 第七問、若し爾らば、毗尼の中に、「一比丘の我れ佛法の義を知る、五欲を受くるも妨げず」と言へるに、呵すること三たびにして擯出する理由如何。
- 【一七】 毗尼。又は毗奈耶、譯して離行、調伏、滅等といふ。律のことなり。
- 【一八】 二種の佛法——(一)小乗、(二)大乘。
- 【一九】 婆差經とは犢子部の經典なり。
- 【二〇】 赤梅檀。梅檀に赤、白、紫の三種ある中の赤梅檀にして梅檀は香木の一種なり。譯して興樂といひ、此の木僅かに芽を出せば臭木も遂に其の惡臭を失ふといふ。
- 【二一】 三結。三界の見惑のこと。を云ふ。
- 【二二】 阿梨陀比丘の因縁。

五百人を出づ。亦梅檀を受けて身に塗り、及び好香華を受けて妻子と共に臥し、奴婢をして結を斷じて須陀洹を得、三世の苦を盡し、三毒を薄くして斯陀含を得せしむ。是の阿梨陀比丘は



是の事を聞いて即ち言はく、「五欲を受くと雖も而も道を妨げず。是の事を知らず、佛は誰がためにか説くや」と。佛は白衣のために説き、此の比丘は、出家法の中に持著して説くなり。是の須陀洹、斯陀含等は是の言を作さず、「我れ形壽を盡くすまで欲を犯さず、有餘の三毒を以ての故に時時に道を忘れて而も姪心を發す。出家の人とは、僧の中に於いて、口に自ら誓つて言はく、「我れ形壽を盡くすまで姪欲を犯さず」と。佛の言はく、「若し出家の人、欲を犯せば則ち棄つ」と。是の比丘は自ら誓て而も犯す、是れ一罪なり。佛の所制を知つて、而も故らに違犯す、是れ二罪なり。是の比丘は白衣の得道を見るが故に、而も自身を以て彼れと同じうす、是の故に罪に墮す」と。佛國土を淨むるに 二種の衆生あり、若くは出家、若くは在家なり。在家は五欲を受くと雖も罪なく、亦妨ぐる所なし。兜率陀の諸天、及び鬱單曰の人の如く、五欲を受くと雖も重罪を起さず。出家の衆生は佛に聽くとこのに隨へば、出家は五欲を受くも亦過咎なし。小乘法の中に、阿梨陀比丘の爲めに説く、薄福重罪の人は心多く悔ゆるが故なり。佛國土を淨むるとは、世世に六波羅蜜「多」、三解脱門を習行し、五欲を得と雖も亦染著せず。經の中に説くが如し、「所謂菩薩摩訶薩は般若波羅蜜「多」を行じて是の念を作す、「我れ當に自ら初禪に入るべく、亦當に衆生を教化し

【三】 有餘の三毒、其實究竟ならざる有餘といふ。有餘の故に三毒あり、但し其の力弱少なり。  
 【四】 佛國土を淨むるに二種の衆生あり。  
 【五】 兜率天、並に北州の人は五欲を受くと雖も、重罪を起さず。  
 【六】 鬱單曰。又は鬱單越、譯して勝生。須彌四洲の一にして北俱盧洲のこと。

て初禪しょぜんに入らしむべし。四禪ぜん、四無量心むりやうしん、乃至三十七品さんじちちひん亦是の如し。是の菩薩ぼさつは是の願ぐわんを作す、一いっも妨さまたげを爲すと能はず。是の菩薩ぼさつは無量阿僧祇むりやうあそうぎの願ぐわんを作し、爾所の時そこばくときに隨つて道だうを行じ、盡く是の願ぐわんを具足ぐそくす。是の菩薩ぼさつは一切の善法ぜんぽう皆成就いっさいじゆじゆじゆし、及び成就じゆじゆじゆせる所の衆生しゆじやうは、一切の善法ぜんぽう成就じゆじゆじゆするが故に、身端正だんしやうなることを得て、見る者み厭ふことなく、亦た衆生しゆじやうを成就じゆじゆじゆして、端正だんしやうなることを得せしむ。須菩提しゆはだいよ、菩薩ぼさつは應まさに是の如くにして佛國土ぶつこくどを淨きよむべし。復次に、佛土ぶつどを淨きよむれば、乃至三惡さんあくの名なすらなし、何いかに況いはんや三惡さんあく道のだうあらんや。

問とうて曰いく、諸佛しよぶつは大慈悲心だいじひしんを以て、苦惱くなうの衆生しゆじやうの爲めための故ゆゑに出世しゆつせす。若し三惡道さんあくだうなくんば何ぞ憐愍れんみんする所ところあらんや。答こたへて曰いく、云い佛ぶつの出いでたまへるは、衆生しゆじやうを度とせんが爲ための故ゆゑなり。三惡道さんあくだうの衆生しゆじやうは度とすべからず、但ただ善根ぜんこんを種うゑしむべきのみ。是の故ゆゑに佛ぶつを天人師てんにんしと名なづくるなり。若し天人てんにんなくして、但ただ三惡道さんあくだうのみあらば、應まさに難なんあるべく、應まさに是の間このとひを作なすべきなり。

問とうて曰いく、云い佛ぶつは衆生しゆじやうを憐愍れんみんして佛國土ぶつこくどの中なかを淨きよむ、何なにを以てか三惡道さんあくだうの衆生しゆじやうなきや。答こたへて曰いく、一切衆生いっさいしゆじやうを憐愍れんみんすること平等びやうとうにして異ことなりあることなく、此この中に清淨しやうじやうの業因緣ごういんねんを説とけば、是の國こく

【七】 第八問、諸佛の出世は苦惱せる衆生を救はんが爲めなり。若し三惡道なくんば、何ぞ憐愍する所あらんや。

【六】 佛を天人師と名づくる所以。

【五】 第九問、佛は衆生を憐愍して佛國土を淨む、何を以てか三惡道の衆生なきや。

土の中に三惡道なきなり。又佛には但一國土のみに非ず、乃ち十方恆河沙の國土あり、佛に清淨國土あり、雜國土あり、雜國土の中に則ち具に五道あり。佛國土を淨むるに或は人天の別異あり、佛國土を淨むるに或は人天の別異あることなし。過去天王佛の國土中の如きも、唯だ佛世尊のみを以て法王となす。是の故に名づけて天王佛となし、復た國土あるも三毒邪見なし。

問うて曰く、三諸佛は但だ衆生の煩惱を除かんが爲めの故に出世す。邪見三毒は即ち是れ煩惱なり。若し煩惱なくんば、出でて何の爲す所かあらん。答へて曰く、有人は言はく、「是の中には、大福德の因縁の故に、邪見三毒發らず、かるが故に「煩惱」無しと言ふ」として。

復次に、有人の言はく、「是の中の諸の菩薩は、皆みな無生法忍を得、常に六波羅蜜多等の諸の功徳を修し、常に十方に遊んで衆生を度脱し、諸佛の修習する所の諸佛の三昧に於て、無数の聲聞、辟支佛を教化するに勝り、亦三阿鞞跋致の菩薩、衆生を成就する菩薩、淨佛土の菩薩を教化するに勝り、佛道に近づ、が爲めの故に利益轉大なり。是の國土には二乗の名なしとは、「次に説くが如し」。

問うて曰く、餘佛に三乗の教化あり、豈に獨り劣らんや。答へて曰く、

【二】佛國には淨國雜國等の不同あり。

【三】第一問、若し煩惱なくんば、諸佛出世するも、何の爲す所かあらんや。

【三】無生法忍とは不生不滅の眞如法性を認知して決定安住する位をいふ。即ち七地、八地、九地の菩薩は即ち是の位なり。

【三】阿鞞跋致の菩薩、不退轉の菩薩のこと、即ち佛に成るに定まりて菩薩の位地あり、而も再び凡地に退くことなき位なり。

【四】第一問、餘佛に三乗の教化あり、豈に獨り劣らんや。

佛は五濁惡世に出で、一道に於て分つて三乘となすなり。

問うて曰く、若し爾らば阿彌陀佛、阿閼佛等は五濁の世に生ぜず、何

を以てか三乘あるや。答へて曰く、諸佛は初發心の時、諸佛の三乘を以て

衆生を度するを見て、自ら願を發して言はく、「我れ亦當に三乘を以て衆

生を度すべし」と。亦無常、苦、空、無我の名なしとは、衆生の深く常

樂等の顛倒に著するを以ての故に、爲に無常苦(等)の法を説くも、是の中

には、常樂等の倒なきが故に無常苦を須めず、病なければ則ち藥を須めざ

るが如し。亦我の所有なく、乃至諸の煩惱結使なきも亦是の如し。二一乘

なきが故に、亦須陀洹等の諸果なく、但だ一向に諸法實相に著す。先きに

無生法忍を得る者は、諸の三昧陀羅尼門を得、轉た復、諸地等の功德を増益す。風七寶の樹を吹き、

度すべき所に隨つて聲を出すとは、是の菩薩は衆生をして、法を聞き易すからしめんと欲するが故

に、七寶の樹、法の音聲を出すなり。寶樹は遍く國土に滿つるが故に、衆生は生れながらにして便

ち法を聞きて餘心を生ぜず、但だ法心を生ずるのみなり。

問うて曰く、諸佛は無量不思議の神通力あり、何を以てか變じて無量の身を化作し、説法して衆

生を度せざるや。何ぞ樹木の音聲を須ふるや。答へて曰く、衆生は甚だ多し。若し佛處處に身を現す

や。

【一五】 五濁惡世とは、劫濁、見

濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の

五相現れて、惡事繁き世の中

をいふ。

【一六】 第一二問、阿彌陀佛、阿

閼佛等は五濁惡世に生ぜず、

何を以てか三乘あるや。

【一七】 第一三問、諸佛は無量不

可思議の神通力あり、何ぞ無

量の身を現じて衆生を度せざ

るや。又何ぞ樹木の音聲を須

ふるや。

する時は衆生信せず、幻化なりと謂つて心に敬重せず。有る衆生は、人より法を聞いて心に開悟せず、若し畜生より法を聞けば則便ち信受す。本生經に説くが如し、「菩薩は畜生の身を受けて人の爲めに法を説くに、人希有なるを以ての故に信受せざるなし」と。又謂はく、「畜生は心直くして誑はざるが故に」。有人の謂はく、「畜生は是れ有情の物にして皆な欺誑あり、樹木は無心にして而も音聲あれば則ち皆な信受す」と。所謂る空、無相、無作、有佛、無佛、一切法常空なり。空なるが故に無相、無相なるが故に無作無起なり。是の如き等の法は晝夜に常に出づ。餘の國土には神通力、口力を以て種種に變化するも、此の中には、常に自然の音聲あつて佛國土を淨め、佛は常に諸佛の爲めに讚せられて、大に功德を作すが故に、能く是の如きの淨國を得。若し淨國の佛名を聞けば則ち畢定して作佛するなり。問うて曰く、餘佛は種種に勤苦して説法するも衆生尙ほ道を得ず、何を以てか但だ佛の名を聞くのみにして便ち道を得るや。答へて曰く、餘處の佛、種種に法を説くに、衆生或は道を得、或は善根を得て、説を空しうせず。若し是の佛の名を聞けば畢に阿鞞跋致に至る。今「道を」得とは言はず。問うて曰く、一切の佛は若し人好心もて名を聞けば、皆な當に佛に至るべし。法華經の中に説く

【六】有る衆生は人より法を聞いて信受せず、却て畜生より

法を聞いて信受す。

【七】第一四問、餘佛は種種に勤苦して説法するも、衆生尙ほ道を得ず、何を以てか但だ佛名を聞くのみにして便ち道を得るか。

【八】第一五問、法華經の中に説くが如くば、福德の大なるも、若くは小なるも、皆當に作佛すべし、何を以てか獨り淨佛國土のみを説くや。

が如くんば、福德の若くは大なるも、若くは小なるも、皆當に作佛すべし。何を以てか獨り淨國の佛の  
 みを説くや。答へて曰く、人は餘佛の名字を聞くも、受生して人と異なることなく、但だ一切智あつ  
 て道を得るを異れりと爲すと謂ひ、心に敬重せざるが故に、善根を種うと雖も、亦深きこと能はず。  
 是の中には、是れ法性身の佛、身に無量無邊の光明ありて、説法の音聲遍く十方國土に滿ち、國中  
 の衆生は皆な是れ佛道に近づく者、無量阿僧祇由旬なり。衆中の説法は、無量阿僧祇の日月の光明  
 に勝る。常に身より佛を出し、衆生をして是れを見せしむれば、則ち見ることを得、若し聽かざる時  
 は則ち見ず。是の佛は一一の毛孔の邊より、常に無量無邊阿僧祇の佛を出  
 だし、一一の諸佛は等うして異なることなく、化佛の邊に於いて展轉して  
 復た出だす。度すべき衆生に隨つて、佛を見るに優劣あり、根本の眞佛に  
 は大小の異りを分別することあることなし。是の如き等をば若くは見、若くは名を聞き、若くは是の  
 如き功德を聞いて深信敬重するが故に、種うる所の善根、云何が畢定して作佛せざることあらんや。  
 復次に、是の佛の法を説く時、疑有る者あるとなく、乃至一人の是の法を非となすと云ふとなし。  
 佛の口づから説きたまふところは悉く皆な是れ法なり。

問うて曰く、四人は釋迦文尼佛より法を聞いて、疑を生ずる者多し(何を以て爾るや)。答へて曰く、  
 佛は此の中に自ら因縁を説きたまはく、人あり、薄福にして善根を種えず。善知識を得ざるが故に疑

【四】 第一六問、人の釋尊より  
 法を聞いて、疑を生ずる者多  
 き理由如何。

を生じ、我見、邊見、邪見等に著す。諸の煩惱覆ふが故に。佛にあらざるを是れ佛なりと言ひ、佛を  
 是れ佛にあらすと言ひ、深く善根を種ゑず、善師に順はず、三毒邪見一時に發起して依る所なし。意  
 に任せて自ら恣にするに隨ひ、若くは邪見を見て、其の意に順ふが故に、是れを一切智と言ふ。諸  
 佛の畢竟空と説きたまふを見て、其の意に順はざれば便ち非佛なりと言ひ、法にあらざるを法なりと  
 言ひ、法を非法と言ふ。是の如きの人は、諸佛の所に於て多く疑を生ず。多く疑を生ずるが故に心に  
 悔あり。是の淨佛國の中には、是の如きの罪人なきが故に疑を生ぜずと。  
 佛の言はく、「是の如きの罪人は、諸法實相を破するが故に、死して地獄  
 惡道の中に墮つ。諸の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の罪人の生  
 死の中に往來するを見、佛の神通力を以て衆生を拔出し、正定聚の中に住  
 せしめ、三惡道に墮せしめず、是れを淨佛土と名く」と。是の佛土の中には  
 是の如き諸の過なく、具足せざることなく、世間、出世間、有漏、無漏、有爲、無爲等の中に於て障  
 礙あるとなし。所謂る國土は七寶、衆生の身は端正にして、相好を莊嚴し、無量の光明あり、常に法  
 音を聞き、常に六波羅蜜(多)乃至十八不共法を遠離せず。是の中の衆生は皆な畢竟して阿耨多羅三  
 藐三菩提に至る。

問うて曰く、(四)上に佛の名を聞けば畢竟して佛に至る(と言ひ)、此には諸法に於て障礙なければ必

【四】第一七問、上には佛の名  
 を聞けば、畢竟して佛に至る  
 と言ひ、今は諸法に於いて障  
 礙なければ、必らず作佛す  
 言ふ。是の間、何等の差別あ  
 りや。

作佛を得ると言ふ。是れに「何の差別ありや。答へて曰はく、此の中の衆生は、常に佛を見、常に法を聞いて深く善根を種る、多く佛法を集むるが故に、疾かに作佛を得。「佛の名を聞くものは、俱に畢定して、而も小なりと雖も、如かず。是の如き等を名けて淨佛國土の相となす。十地の中に、菩提樹を莊嚴すと説くが如し。

【四三】畢定品第八十三を釋す。

【釋】

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、畢定と爲すや、畢定せずとなすや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩摩訶薩は、畢定にして不畢定にあらず」と。

「何處にか畢定する。聲聞道の中とや爲ん、辟支佛道の中とや爲ん」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は、聲聞辟支佛道の中に畢定するに非ず、是れ佛道の中に畢定す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、初發意の菩薩の畢定とや爲ん、最後身の菩薩の畢定とや爲ん」と。佛の言はく、「初發意の菩薩も亦た畢定し、阿鞞跋致の菩薩も亦た畢定し、後身の菩薩も亦畢定す」と。世尊よ、畢定の菩薩は隨して惡道の中に生ずるや不や」と。「不なり、須菩提よ。

汝が意に於て云何、若くは八人、若くは須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛は惡道の中に生ずるや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、初發意より已來、布施、持戒、忍辱、精進して禪定を行じ、智慧を修し、一切の不善業を斷するに、若くは惡道に墮し、若くは長壽夭、若くは善法を修することを得ざる處に生じ、若くは邊

【四三】此の品には、菩薩の必定究竟すべきを明す。他本には品名を「必定品」とせり。

國に生じ、若くは惡邪見家、無作見家に生ず。是の中には佛の名なく、法の名なく、僧の名なく、是の處あることなし。類



善提よ、初發意の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提に於て、深心を以て十不善道を行ぜば、是の處あることなし」と。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、是の如きの善根の功徳の成就するありて、佛の如く自ら本生を説き、不善の果報を受けば、是の時、善根何の所にか在りとなすや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩摩訶薩は、衆生を利益せんが爲めの故に、隨つて身を受け、是の身を以て衆生を利益す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、畜生となる時、大方便力あり、若し怨賊の來つて殺害せんを欲せば、是の無上の忍辱、無上の慈悲心を以て、身を捨て、怨賊を愍す。汝諸の聲聞、辟支佛は是の力あることなし。是を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、菩薩摩訶薩は、大慈悲心を具足せんと欲し、衆生を憐愍し、利益せんが爲めの故に、畜生の身を受く」と。

須菩提、佛に白して言はく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、何等の善根の中に住してか、是の如きの諸の身を受くるや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩摩訶薩は、初發意より乃至道場に至るまで、其の中間に於て、善根の具足せざる者あることなく、具足し已つて當に、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、初發意より、應當に學して言はく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、是の如きの白淨無漏法を成就して、而も惡道畜生の中に生ずるや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「汝が意に於て云何。佛は白淨無漏法を成就するや不や」と。須菩提言はく、「佛は一切の白淨無漏法を成就す」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩も亦た是の如く、白淨無漏法を成就し、衆生を度せんが爲め」と。須菩提言はく、「不なり」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩も亦た是の如く、白淨無漏法を成就し、衆生を度せんが爲めの故に、畜生の身をうけ、是の身を用つて衆生を教化す」と。佛、須菩提に告げて言はく、「阿羅漢の如きに、變化身を作して、能く衆生をして歡喜せしむるや不や」と。須菩提言はく、「能くす」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、

菩薩摩訶薩は、是の白淨無漏法を用つて、度すべき衆生に隨つて身を受け、是の身を以て衆生を利益するも、亦た苦痛を受けず。須菩提よ、汝が意に於て不何、幻師の種種の形、若くは象馬、牛羊、男女等を幻作し、以て衆人に示す。須菩提よ、是の象馬、牛羊、男女等は實ありや不やしと。須菩提言さく、「實ならざるなり。世尊よ」と。佛の言はく、「是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、白淨無漏法を成就して、種種の身を現作し、以て衆生に示すが故に、是の身を以て一切を饒益するも、亦た衆苦を受けざるなりしと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の方便力は、聖無漏の智慧を得て、度すべき所の衆生の身に隨つて、種種の形を作し、以て衆生を度す。

論

問うて曰く、上の阿鞞跋致品の中に、是の如きの相は、是れ阿鞞跋致、是の如きの相は阿鞞跋致にあらず、阿鞞跋致は即ち是れ畢定なりと説けり。「然るに」須菩提は、今何を以てか更に問へるや。答へて曰く、是の般若波羅蜜(多)には種種の門あり、種種の道あり。阿鞞跋致は是れ一門の中に説く。今畢定を問ふは、異門を問へるなり。

復次に、佛心の中には、一切の衆生、一切の法皆な畢定なり。人は智及ばざるを以ての故に、名づけて不畢定となし、佛智は無量阿僧祇劫の大功德を積むと雖も、必ず退いて小乗者と作る。亦た微細の昆蟲には未だ善心あらずと雖も、爾所の劫を過ぎて發心し、後ち當に作佛すべきを定んで知る。一切の法は皆な是の如く、是の因に従つて、是の果を得ることを。是の故に佛は、一切法の中に無礙

【四四】 第一八問、已に是の如きの相は不退轉、是の如きの相は不退轉にあらず、不退轉は是れ畢定なりと説けり、然るに須菩提が今更に問へるは何故なるか。

なりと名づく。「そは」畢定して知るを以ての故なり。

復次に、須菩提は、法華經に、「佛の作す所の少功德に於て、乃至戲笑にも、一たび南無佛と

稱する時は、漸漸に必ず當に作佛すべし」と説くを聞き、又阿鞞跋致品の中には、退不退ありと「説

くを」聞き、又復た聲聞の人は、皆な當に作佛すべしと聞き、若し爾れば、退あり、不退あり。法華

經の中に説くが如きは畢定なり、餘經の説は退あり、不退あり。是の故に

今畢定とやせん、不畢定とやせんと問へり。是の如き等の種種の因縁の故

に定不定を問へり。佛答へたまはく、菩薩は是れ畢定なりと。須菩提は、

心に入涅槃を以て畢定となす、是の故に、何の道の中にか畢定と爲すやと

問へり。佛答へたまはく、「不畢定は二乘なり、但大乘の中に於ては畢

定なり」と。佛道を求むる者には上中下あり、是の故に、初發意とせんや、

阿鞞跋致とせんや、最後身の畢定とせんやと問へり。須菩提意に謂へらく、

「阿鞞跋致已上は畢定なり、佛道の中に住するが故に」と。佛は、「三種の菩

薩は皆な畢定なり」と答へたまへり。畢定とは、必ず當に作佛すべきなり。

問うて曰く、上の品の中に説くが如くんば、佛は佛眼を以て十方の菩薩を見るに、佛を求むるこ

と恆河沙の如くにして、阿鞞跋致を得る者は、若くは一人、若くは二人なり。今何を以てか三種の菩

【四五】 法華經は畢定佛の説にして、餘經は退あり不退ありと説く。  
【四六】 二乘は不畢定、大乘は畢定なり。  
【四七】 第一九問、佛を求むる者は恆河沙の如く多きも、不退轉を得る者は、一人乃至二人に過ぎず、然るを今三種の菩薩は、皆盡く畢定すと言へる理由如何。

薩は盡く皆な畢定すと言ふや。答へて曰く、我れ先きに已に般若は甚深にして無量の門ありと説けり。説くものあり一言はく、「諸の菩薩は退いて不畢定なり」と。有る處には説けり、「菩薩は畢定して不退なり、阿鞞跋致品の中の如し」と。須菩提佛に問ふ、「菩薩の退する者は何れの處に於て退するや。色に從ふとやせん、受想行識乃至十八不共法に從ふとやせん。畢竟空の故に諸法皆な不退なり、此の中に佛は何を以てか更に不退を説くや」と。

問て曰く、是の二義の中何か是れ實なるや。答へて曰く、二事皆な實なり、佛の口づから説きたる所は實ならざる者なし。佛、或は諸法は空にして所有なしと説き、或は布施持戒等は是れ有爲なりと説く。初發心の者には、諸法は有爲なりと説き、久學の人の善法に著する者には、諸法は空にして所有なしと、説きたまへるが如し。阿耨多羅三藐三菩提を懈怠して牢固ならざる者、是の如き人は、聲聞道に從つて得度し、而も聲聞を求めず、久しく生死の中に於て苦を受くべし。是の故に、「發心は恆河沙の如きも、阿鞞跋致を得る者は、若くは一、若くは二なり」と説く。衆生是を聞き已つて、能く衆苦を受くるに堪ふる者は、阿耨多羅三藐三菩提を畢定し、若し能はざる者は、聲聞辟支佛道を取るなり。人あつて、佛を得るの任に堪へ而も大悲心薄く、自ら身を愛すると重ければ、此の人は佛の得難く、多く退く者ありと聞いて、是の念を作す、「我れ或は佛を得ること能はずんば、早く涅槃を取らんには如かず、何を以てか、世

【四六】第二〇問、是の二義の中、何れか是れ實なるや。

世に勤苦を受くることをなさん」と。是の人の爲めの故に、一切の菩薩は乃至初發心に皆な畢定すと説くこと、法華經の中に説くが如し。

問うて曰く、**【四九】** 若し菩薩皆な定んで佛ならば、何を以ての故に種種に二乗を呵し、菩薩は二乗の證を取るを聽かざるや。答へて曰く、佛道を求むる者は、應に遍ねく法性を知るべし。是の人は老病死を畏るるが故に、法性に於いて少分に證を取る。便ち自ら止息して佛道を捨てて衆生を度せず、諸佛菩薩の呵責する所たり。汝は捨て去らんと欲するも會して離るることを得ず、阿羅漢の證を得る時は、諸の菩薩は深三昧を求めず、又廣く衆生を化せず、是れ則ち佛道を迂廻して稽留するなり。

問うて曰く、**【五〇】** 阿羅漢の先世の因縁により受くる所の身は、必ず應當に滅すべし、何の處に住んじてか佛道を具足するや。答へて曰く、阿羅漢を得る時は、三界の諸漏の因縁盡きて、更に復た三界に生ぜず。淨き佛土あり、三界を出でて乃ち煩惱の名なし。是の國土の佛の所に於て法華經を聞き、佛道を具足す、法華經に説くが如し、**【五一】** 阿羅漢あり、若し法華經を聞かすして、自ら滅度を得と謂はば、我れ餘國に於て爲めに是のことを説かん、汝皆な當に作佛すべし」と。

**【四九】** 第二一問、菩薩も畢定して佛ならば、何を以てか種種に二乗を呵し、菩薩の二乗の證を取るを聽かざるか。  
**【五〇】** 阿羅漢は佛道を迂廻し稽留す。  
**【五一】** 第二二問、阿羅漢の先世の因縁により受くる所の身は應に滅すべし、何の處に住んじてか佛道を具足するや。

問うて曰く、**三**若し阿羅漢、淨佛國土に往いて法性身を受け、是の如く疾かに作佛し得べしとせば、何を以てか迂廻し稽留すと言ふや。答へて曰く、是の人、小乘に著するの因縁もて、衆生を捨て、佛道を捨て、又復た道を得と虚言す。是の因縁を以ての故に生死の苦惱を受けずと雖も、菩薩に於て鈍根にして、疾かに佛道を成ずること能はず、直往の菩薩に如かざるなり。

復次に、佛法は **五**不可思議の中に於いて最も第一なり。 **番**今漏盡の阿羅漢還つて作佛し、唯だ佛のみ能く知りたまふ。論議は正しく論ずべ

く、其の事測り知ること能はずと言ふ。是の故に應に戲論すべからず。若し求めて佛を得る時は乃ち能く了知す、餘人は信ずべきも、而も未だ知るべからず。畢定の菩薩三惡道の中に墮するや不やとは、須菩提、佛の無量

の本生の因縁、或は象、鹿、兪、鶴、孔雀、鸚鵡等の種種の苦を受くと説くを聞く。是の故に佛に問ふ、「世尊よ、若し菩薩、是の如き等の畜生の身を受けば、云何が、一切菩薩は畢定すと言ふや。畢定とは、即ち是れ阿鞞跋致とは、

三惡道に墮せざるなり」と。佛は反問して答へたまはく、「汝が意に於いて云何。八人等の聖人は三惡道に墮すとなすや不や」と。須菩提思惟すらく、「是の諸の聖人は聖道に入るが故に、三惡道に墮するの因縁なし」と。斯く思惟し已つて答へて曰く、「不なり」と。佛の言はく、「菩薩も亦た是の如し。

【五】 第二三問、若し阿羅漢にして、淨佛國土に往いて法性身を受け、是の如く速かに作佛することを得ば、何を以てか迂廻し稽留すと言ふか。

【六】 五不可思議とは衆生の多少、業果報、坐禪人の力、諸龍の力、諸佛の力の五種の不可思議をいふ。

【尚】 漏盡の阿羅漢還つて作佛し、佛のみ能く知り給ふ。

三惡道に墮するの因縁盡くるが故に、云何ぞ三惡道に墮せん」と。三惡道に墮する因縁とは、所謂の諸の不善法なり。是の菩薩は、初發心より已來、布施、持戒等の諸の善法を修習して、諸の殺生等の十不善道を斷ず。若し是の人にして三惡道に墮せんは、是の處あることなし。何となれば、諸の惡法を滅して善法を増益するが故なり。不善道に上中下あり、上は地獄に墮ち、中は畜生に墮ち、下は餓鬼に墮つ。是の菩薩は三種已に盡き、深心に衆生を悲念す、是の故に墮せざるなり。

問うて曰く、(五) 若し爾らば三惡道の中に於て生ぜざるべし、是の菩薩は福德多し、何を以てか長壽天の中に生ぜざるや。答へて曰く、是の菩薩は衆生を憐愍し、六波羅蜜(多)を行じて、能く禪波羅蜜(多)に入ると雖も、慈悲行に和合して禪味に著せず、命終り盡きんと欲し、欲界の法を念ふが故に禪道を退く。彼の中に苦惱なきを以て深く禪味に著して、得度すべきこと難きが故に、長壽天に生ぜず。(五) 邊國には障礙ありて、善法を修するを得ざるが故に生ぜず。所以は何んとなれば、是の菩薩は悟法の根本を拔出し、悟法の因縁の故に邊國に生じて法處を知らざればなり。

復次に、是の菩薩常に中道を好み、二邊を捨つるが故に邊國に生ぜず。邊國には三寶の名なく、七

【五】 第二四問、若し爾らば此の菩薩は何故に長壽天に生ぜざるか。  
【五】 初發意の菩薩は中國に生じて邊國に生ぜず。  
【五】 七衆とは、一比丘、二比丘尼、三沙彌、四沙彌尼、五式叉摩那、六優婆塞、七優婆夷をいふ。

衆を誡しらず、但ただ今世こんぜの現事げんじを貴たふんで、福德ふくとく道法どうぼうを貴たふはざるが故ゆゑに邊地へんちと名なづけ、但ただ邊國へんこくに生しやうぜざるが故ゆゑに名なづけて邊地へんちとなす。若もし三寶さんぼうを誡しれば、罪福ざいふく相續さうぞくの因緣いんねんを知しり、諸法しよぼうの實相じつさうを解げす。是この人は閻浮提えんぶだいの外ほかに生しやうずと雖いへども、名なづけて邊へんとなさず、何いかに況いはんや閻浮提えんぶだいの中なかに生しやうずるをや。是この菩薩ぼさつは常つねに樂たのしんで、他の爲ために說法せつぼうし、亦また深く善法ぜんぼうを愛あいするが故ゆゑに、意こころに隨したがつて衆生しよじやうを善よくくし、共生きやうじやうすることを得う。所謂いはゆるこ是れ中國ちゆうこくの人ひとなり。中國ちゆうこくに於おいても邪見じやけんの家に生しやうぜず。何なんとなれば、是この菩薩ぼさつは世世せせに常つねに自ら正見しやうけんを行ぎやうじ、亦またたをして正見しやうけんならしめ、正見しやうけんの法ぼうを讚さんし、正見しやうけんを行ぎやうする者を歡喜くわんぎし讚歎さんたんす。是この故ゆゑに惡邪見あくじやけんの家に生しやうぜず。

問とうて曰いはく、是この菩薩ぼさつは六福徳智慧ろくふくとくぢぢゑの力ちからもて、應まさに邊地へんち邪見じやけんの家に生しやうじ、而しかして之これを教化けうげすべし。何を以もつてか畏おそれて生しやうぜざるや。答こたへて曰いはく、

菩薩ぼさつに二種にしゆあり、一ひとには大力たうりきを成就じやうじゆする菩薩ぼさつ、二ふたには因緣いんねんに屬まする新發意しんぱつぎの菩薩ぼさつなり。大力たうりきの菩薩ぼさつは、衆生しよじやうの爲ために、度どすべき所に隨したがつて身みを受け、邊地へんち邪見じやけんの「家いへ」を避ひけす。新發意しんぱつぎの菩薩ぼさつは、若もし是この處ところに生しやうすれば、既すで人に度ひとすこと能あたはず、又また自ら敗壞はいわいす。是この故ゆゑに生しやうぜず。譬たとへば、眞金しんこんは泥でい「中ちゆう」にあるも終つひに敗壞はいわいせず、銅鐵どうてつは則すなはち

【六〇】 新發意の菩薩は、惡處に生ぜず。  
 【六一】 眞金は泥中に在つて壞せず、銅鐵は則ち壞す。

【六〇】 初發意の菩薩は中國に生じ、惡邪見の家に生ぜず。  
 【六一】 第二五問、菩薩は大福德智慧の力もて、應に邊地邪見の家に生じ、而して之を教化すべし、何を以てか畏れて生ぜざるや。  
 【六二】 二種の菩薩——(一)大力を成就する菩薩、(二)因緣に屬する新發意の菩薩。  
 【六三】 大力の菩薩は、惡處に生ず。  
 【六四】 新發意の菩薩は、惡處に生ぜず。  
 【六五】 眞金は泥中に在つて壞せず、銅鐵は則ち壞す。



壞するが如し。邪見とは所謂の無作の見なり。六十二種ありと雖も、皆な是れ邪見にして、無作最も重し。所以は何んとなれば、無作の言は功徳を作して涅槃を求むべからざるが故なり。若くは天作と言ひ、若くは世界始來と言ふは、是れ邪見なりと雖も、而も福徳を作すを遮せず、大惡を作すことなきを以ての故に生ぜず。又初發心の菩薩は、深く惡心を起して、十不善道を行ずといふは、是の處あることなし。何となれば、是の菩薩は一心に廻向し、阿耨多羅三藐三菩提を貴重して、世間の法を貴ばず。是の人は未だ欲の因縁を離れざるが故に、諸の煩惱を起すと雖も、終に深心に惡を作さず。杖楚を加ふと雖も終に命を奪はず、他の財を取るも、其をして命を失はしめず。是の菩薩は一切の不善法を斷じ、一切の善法を修集するが故に、八難處に生ぜず、常に八好處を得。須菩提問ふ、「若し菩薩あり、是の如く善根を成就せば、云何が本生の因縁もて鹿馬等となるや」と。佛答へたまはく、菩薩は實に福徳の善根を成就し、衆生を利益せんが爲めの故に畜生の形を受くるも、亦畜生の罪なし。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、謂所る菩薩は畜生の中にありて賊を慈愍するも、阿羅漢辟支佛は是れあるとなし。

【六二】六十二見の中無作見最も重し。

【六三】八難處とは見佛閉法に就て障難ある八處なり、所謂、一地獄、二餓鬼、三畜生、四鬱單越、五長壽天、六犍盲暗症、七世智辯聰、八佛前佛後是れなり。

【六四】八好處とは又は八勝處といふ。勝知勝見を發して食愛を捨つる八種の禪定なり。所謂、一内有色想觀外色少勝處、二内有色想觀外色多勝處、三内無色想觀外色少勝處、四内無色想觀外色多勝處、五青勝處、六黃勝處、七赤勝處、八白勝處是なり。

【六五】菩薩は怨賊に於いて慈愍し、二乗は怨賊に於いて但だ報を加へず。

羅漢時支佛は怨賊來つて害すれば、報を加へずと雖も、愛念し供養し供給すると能はず。菩薩の本身の如きは、六牙の白象となり、獵師の毒箭を以て骨を射るや、爾の時に菩薩たりし象は、鼻を以て獵者を擁抱して、餘象をして害することを得せしめず。雌象に語て曰く、「汝は菩薩の婦たり、何に縁つてか悪心を生ずるや」と。獵師は是れ煩惱の罪にして人の過にはあらざるなり。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得ば、當に其の煩惱の罪を滅除すべし。譬へば鬼の人に著くや、呪師來つて但だ鬼を治して人を賑らざるが如し。是の故に其の罪を求むることなく、徐ろに獵者に問ふ、「汝何を以てか我れを射るや」と。答へて曰はく、「我れ汝が牙を須めんがためなり」と。象即ち石に就きて牙を罅抜して之を興ふ。血肉俱に出づれども以て痛となさず、餓食を供給して道徑を示語す。是の如き等の慈悲は、阿羅漢時支佛には有ること無き處なり。是の如き好心、云何が畜生の身を受くるや、當に知るべし、是れ變化して衆生を度すべきことを。

問うて曰く、(六五) 何を以てか、人身と作りて爲めに說法せずして、而も此の獸身と作るや。答へて曰く、有時は、衆生人身を見れば則ち信受せず、畜生身の說法するを見れば、則ち信樂を生じ、其の教化を受く。又菩薩の大慈悲を具足せんと欲し、心に其の實事を行せんと欲するや、衆生是れを見て驚喜し、皆な道に入ること得ればなり。

【六六】 六牙の白象、還つて獵者を擁抱せし因縁。

【六七】 第二六問、菩薩の獸身と作る理由如何。

# 巻の第九十四

畢定品第八十三の餘を釋す。

經

「世尊よ、菩薩摩訶薩は何等の白淨法に住してか、能く是の如きの方便を作して、而も染汙を受けざるや」と。佛の言はく、  
「菩薩は般若波羅蜜(多)を用つて、是の如きの方便力を作し、十方の恆河沙の如き國土の中に於いて、衆生を饒益するも亦た是の身を貪著せず。何となれば、著者、著法、著處、是の三法は皆な自性空にして不可得なるが故なり。空は空に著せず、空中には著者なく、亦著處もなし。何となれば、空中には空相不可得なるが故なり。須菩提よ、是れを不可得空と名づく。菩薩は是の中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るなり」と。「世尊よ、菩薩は但だ般若波羅蜜(多)の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得、餘法の中に住せざるや」と。「須菩提よ、頗し法として般若波羅蜜(多)に入らざるものありや不や」と。「世尊よ、若し般若波羅蜜(多)の自性空なれば、云何が一切の法は皆な般若波羅蜜(多)の中に入るや。世尊よ、空の中に、法として若くは入り、若くは入らざるものあることなし」と。「須菩提よ、一切法の一切法相は空なりや不や」と。「世尊よ、空なり」と。「須菩提よ、若し一切法の一切法相空ならば、云何が一切法は空中に入らずと言ふや」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、一切法空の中に住して能く神通波羅蜜(多)を起し、是の神通波羅蜜(多)の中に住して、十方の恆河沙等の如き國土に到り、現在の諸佛を供養し、諸佛の説法を聞き、諸佛の處に於て善根を種うるや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、是の十方の恆河沙等の

如き國土を觀するに皆な空なり。是の國土の中の諸佛も亦性空なり。但だ名字を假るが故に諸佛身を現するのみ。假る所の名字も亦た空なり。若し十方の國土及び諸佛の性空ならずんば空に偏ありとなすなり。(然るに)空は不偏なるを以ての故に、一切法の一切法相は空なり。是の故に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、方便法を用つて神通波羅蜜(多)を生じ、是の神通波羅蜜(多)の中に住し、天眼、天耳、如意足、他心、宿命智を起して衆生の生死を知る。若し菩薩、神通波羅蜜(多)を遠離せば、轉じて衆生を饒益すること能はず、亦阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。是の菩薩摩訶薩の神通波羅蜜(多)は、是れ阿耨多羅三藐三菩提の利益道なり。何となれば、是の天眼を用つて、自ら諸の善法を見、亦他人を教へて諸の善法を得せしめ、善法に於て亦た著せず。諸の善法は自性空なるが故に、空は著する處なければなり。若し著すれば則ち味を受くるも、是の空の中には味あることなし。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行する時、能く是の如きの天眼を生じ、是の天眼を用つて一切法空を觀じ、是の法空を見て、相を取らず、業を作らず、亦衆生の爲めに是の法を説くも、亦衆生の相を得ず。衆生の名を得ず。是の如く菩薩摩訶薩は、無所得の法を用つての故に、神通波羅蜜(多)を起す。是の神通波羅蜜(多)を用つて、神通の作すべき所の者を能く作す。是の菩薩は天眼通を用つて人眼に過ぎ、十方國土を見る。見已りて衆んで十方に到り、衆生を饒益するに、或は布施を以てし、或は持戒を以てし、或は忍辱を以てし、或は精進を以てし、或は禪定を以てし、或は智慧を以てして衆生を饒益す。或は三十七助道法を以てし、或は諸禪解脫三昧を以てし、或は聲聞法を以てし、或は辟支佛法を以てし、或は菩薩法を以てし、或は佛法を以てして衆生を饒益す。(復た)憍者の爲めには是の如きの法を説く、(諸の衆生よ、當に布施を行すべし、貧窮は是れ苦惱の法なり。貧窮の人は自ら益すること能はず、何ぞ能く他を益せん。是を以ての故に、汝等當きに勤めて布施し、自身にも樂を得、亦能く他をして樂を得せしめ、貧窮を以ての故に共に相食讃すること具ばらしむべし。(それは)三惡道を離るることを得ざればなり)と(復次に)破戒の者の爲めには説法

すらく、「諸の衆生破戒の法は大苦惱なり。破戒の人は自ら益すること能はず、何ぞ能く他を益せん。破戒の法は苦果の報を受け、若くは地獄に在り、若くは餓鬼に在り、若くは畜生に在り。汝等三惡道の中に墮せば、自ら救ふこと能はず、何んぞ能く他人を救はん。是を以ての故に、汝等破戒の心に隨ひ、死する時悔あるべからず。若し共に相ひ贖淨する者あらば、是の如きの法を説け、諸の衆生よ、共に相ひ贖り、人心を亂して、善法に順ぜざらしむること莫れ。汝等今共に相贖りて心を亂せば、或は地獄、若くは餓鬼、畜生の中に墮せん。是を以ての故に、汝等應に一念の瞋恚心をも生ずべからず、何に況んや多(念)をや。懈怠の衆生の爲めには、諸法して精進を得せしめ、散亂の衆生には禪定を得せしめ、愚痴の衆生には智慧を得せしむるも、亦た是の如し。婬欲を行する者には不淨を觀ぜしめ、瞋恚の者には慈心を觀ぜしめ、愚癡の衆生には十二因縁を觀ぜしめ、非道を行する衆生には正道、所謂の聲聞道、辟支佛道に入らしめ、是の衆生の爲めに是の如く説法す、汝等の著する所の是の法は性空なり、性空の法の中には、著すること得べからず。不著の相は是れ空相なりと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、神通波羅蜜(多)の中に住して、衆生の爲めに利益を作す。須菩提よ、菩薩若し神通を遠離せば、衆生の意に隨つて善く法を説くこと能はず。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、應に神通を起すべし。須菩提よ、譬へば、鳥の翅なければ、高く翔けること能はざるが如く、菩薩は神通なければ、意に隨つて衆生を教化すること能はず。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、應に諸の神通を起すべし。諸の神通を起し已りて、若し衆生を饒益せんと欲せば、意に隨つて能く益す。是の菩薩は天眼を用て、恆河沙等の如き諸の國土を見、及び是の國土の中の衆生を見、見已りて神通力を用て其の所に到り、衆生の心を知り、其所應に隨つて、爲めに法を説く。(即ち)或は布施を説き、或は持戒を説き、或は禪定を説き、乃至涅槃法を説くなり。是の菩薩は、天耳を用て二種の音聲、若くは人、若くは非人を聞き、天耳を用て、十方の諸佛の説きたまふ

所の法を聞き、皆な能く受持し、聞く所の法の如く、衆生の爲めに説く、(即ち)或は布施を説き、乃至或は涅槃を説くなり。是の菩薩は、(又)他心智を淨め、他心智を用つて衆生の心を知り、其の所應に隨つて爲めに説法す。(乃ち)或は布施を説き、乃至或は涅槃を説くなり。是の菩薩の宿命智は、種種の本生の處を憶念し、亦自ら憶し、亦他人を憶し、是の宿命智を用つて、過去在在處處の諸佛の名字及び弟子衆を憶念し、衆生あつて、宿命を信樂せば、爲めに宿命の事を現じて、説法を爲し、或は布施を説き、乃至或は涅槃を説く。如意神通力を用つて、種種無量の諸佛の國土に到り、諸佛を供養し、諸佛に従つて善根を種ふ、還本國に來り、是の菩薩は漏盡神通智を證す。是の漏盡神通智の證を用つての故に、衆生のため に應に隨つて法を説く。或は布施を説き、乃至或は涅槃を説く。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行ずる時、應に是の如きの諸の神通を起すべし。菩薩は是の神通を修するを用つての故に、意に隨つて身を受くるも苦樂に染まざるなり。譬へば、佛の所化の人の、一切の事をなすも、而も苦樂に染まざるが如し。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行ずる時、是の如く、神通に遊戲し、能く佛國土を淨め、衆生を成就すべし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、佛國土を淨めず、衆生を成就せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。何となれば、因縁を具せざるが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざるなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等をか是れ菩薩摩訶薩の、因縁を具足し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得ると爲すや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「一切の善法は、是れ菩薩の阿耨多羅三藐三菩提の因縁なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「何等をか是れ善法とし、是の善法を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を得ると爲すや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩は初發意より已來、檀波羅蜜(多)は是れ善法の因縁なり。是の中に是れ施者なり、是れ受者なりと分別するなし、(そは)性空なるを以てなり。是の檀波羅蜜(多)を用つて、能く自ら利益し、亦能く衆生を利益して、生死より拔出し、涅槃を得せしむ。是の諸の善法は皆な是れ善

薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の因縁なり。是の道を行じ得る過去、未來、現在の諸の菩薩摩訶薩は生死を得度す。已に度し、今度し、當さに度すべし。尸羅波羅蜜(多)、尸羅提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪波羅蜜(多)、般若波羅蜜(多)、四無所畏、四無礙智、十八不共法、是の如き等の功德は、皆な是れ阿耨多羅三藐三菩提の道なり。須菩提よ、是れを善法と名づく。菩薩摩訶薩は、是の善法を具足し已つて、當に一切種智を得べし。一切種智を得已つて、當に法輪を轉すべし。法輪を轉じ已つて、當に衆生を度すべし。

論

釋して曰く、爾の時に須菩提問ふ、「何等の善根に住するが故に能く此の身を受くるや」と。佛答へたまはく、「菩薩摩訶薩は、一切の善根を具足す」と。乃至、須菩提大に歡喜して佛に白して言さく、「菩薩摩訶薩の大方便成就の力は、何等の聖無漏法に住してか、能く此の身を受け、而も畜身のために染せられざるや。譬へば幻師の如く、亦變化の如く、何等の白淨法に住してか、能く是の如きの方便をなすや」と。佛答へたまはく、「菩薩は般若波羅蜜(多)の力を以ての故に、能く是の如きの方便を成就し、種種の身を作して、能く十方國土の中の衆生を利益し、亦是の身を貪らず」と。佛は、此の中に因縁を説きたまはく、「是の菩薩の三法は、不可得なり、一には是れ菩薩の身、二には作す所の鹿馬、三には用ふる所の法なり」と。何となれば、是の法は、皆な性空なるが故に、空

【一】菩薩は方便力を成就するが故に、能く十方國土の衆生を利益するも亦た此の身を貪らず。  
 【二】菩薩の三法は不可得なり。

も亦た著せず、空空の中亦た貪著なし。法なるが故に衆生なく、衆生無きが故に法も亦たなし。此の中に佛因縁を説きたまはく、「空の中には空は不可得なり。不可得なるが故に、菩薩は云何ぞ是の智慧を貪らん。是れを無所得空般若波羅蜜(多)と名づく。菩薩は是の中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。障礙なきを以ての故に得易し。須菩提問ふ、「菩薩は六波羅蜜(多)、乃至十八不共法に住す、今何を以てか、但だ無所得の般若波羅蜜(多)の中に住して得と説くや」と。佛答へたまはく、「須菩提よ、何の法か般若の中に入らざらん。一切の法は皆な般若波羅蜜(多)の中に入る。若し般若波羅蜜(多)に住すれば、則ち一切の法に住するなり」と。「須菩提」復た問ふ、「若し般若波羅蜜(多)の性空ならば、云何が一切の法は皆な(其の)中に入るや。」此の中に須菩提自ら因縁を説いて言はく、「一切法の性空の中に、法ありて出づるとなく、法ありて入ることなし」と。佛、須菩提に告げて言はく、「一切法、一切法相は空なりや」と。「須菩提言さく」、「世尊よ、空なり」と。「佛の言はく」、「須菩提よ、若し一切法、一切法相空ならば、一切法は應に空の中に入る可し。汝云何が、空の中には法の出入するものあることなしと言ふや」と。爾の時に、須菩提心に伏して解を受け、是の菩薩の身を化して衆生を度するを聞き、今世尊に問ふ、「菩薩は云何が一切法空の中に住して、能く神通波羅蜜(多)を起し、十方の恆河沙の如き國土に到りて、佛を供養し、法を聽き、甚深の善根を種うるや」と。善根とは、諸の陀羅尼三昧門無礙解脱の根本なり。須菩提の意へらく、「般若波羅蜜(多)は性空なり、



「然るに」云何が菩薩は性空の波羅蜜「多」の中に安住して、能く是の神通有法を行ずるや」と。佛の言はく、「空の故に能く行ずるなり。所以は何んとなれば、須菩提よ、菩薩は般若を行ずる時、十方の恆河沙の如き國土は、皆な空なり、是の國土の諸佛も亦た空なりと觀す。

問うて曰く、若し國土空ならば、佛も亦た應に空なるべし、何を以てか別説するや。答へて曰く、佛は無量阿僧祇劫の實功德を以て是の身を得、能く一足の指を以て十方の恆河沙の如き國土を動かす。又菩薩は、世世より來、深く佛を愛重し、疾かに觀じて空ならしむること能はず。是の故に、國土と共に合して説かざるなり。此の中に佛、自ら因縁を説きたまはく、

「若し十方の國土及び諸佛空ならずんば、空に偏ありと爲す。偏あるを有空、不空の處と名く。今實に偏せざるが故に、一切の法、一切の法相は空なり。菩薩は般若波羅蜜「多」を行ずるに、一切の法は無礙なり。肉眼を以て色を見るに通せず、上を見れば下を見ず、前を見れば後を見ず。通すれば見え、障れば見えず。晝は見え、夜は見えず。肉眼力の少なるを知るが故に、方便を以て更に天眼を求む。方便力とは、他界の四大をして、來つて身中に在らしむるなり。天眼を用ふるの義は先に説けるが如し。天耳、如意足、他心智、宿命智を生じて、衆生の生死の趣く所等を知る。菩薩若し神通なければ、衆生を饒益するを得ること能はず。何となれば、若し神通無くんば、云何が能く衆生をして發心せしめん。菩薩神通あるも、猶尙盡く衆

【三】 第一問、若し國土空ならば、佛も亦た應に空なるべし、何を以てか別説するや。

生をして發心せしむること能はず、何に況んや無きをや。是の故に、神通波羅蜜〔多〕は是れ菩薩所行道なり。菩薩は自ら善法を見、亦他人をして善法を見ることを得せしめ、亦是の善法に著せず。何となれば、是の法性は皆な空なるが故なり。

問うて曰く、天眼は色を見るべし、云何が善法を見、又一切法の性空なるを見ると言ふや。答へて曰く、因中に果を説き、天眼を以て見る。自ら己身を見、及び十方の衆生を見、然る後、他心智、宿命智を用つて、其の今世後世の善根を求む。是の善根及び果報は久しうして皆な磨滅す、磨滅するが故に空を見る。是の善根は、皆な是れ有爲法にして自性なし、自性なきが故に空なり、空なるが故に著すべからず。又味を受くべからず、味を受くべからざるが故に著せず。譬へば、蠅の處として著せざるなきも、唯だ火窟には著せざるが如し。衆生の愛著も亦た是の如く、善不善の法の中には皆な著す、乃至非有想、非無想にも著するが故に涅槃に入ること能はず。唯だ般若波羅蜜〔多〕の性空の火のみに著すること能はず。所以は何となれば、般若波羅蜜〔多〕の相は空なればなり。若し般若波羅蜜〔多〕空ならざれば、即ち是れ味にして、是れ著すべき處なり。菩薩は是の智慧の中に住して有漏の業を起さず、衆生の爲めに法を説き、亦た衆生の假名不可得を知り、是の無所得般若波羅蜜〔多〕の中に安住して、而も能く神通の事を具足す。若し菩薩、是の無障礙の般若を得ざれば、則ち無礙神通を得

【四】 第二問、天眼は色を見るべきに、善法又は一切法の性空を見る理由如何。

ること能はざらん。菩薩は是の無障礙空神通を得て、飛んで十方の國土に到り、衆生を利益す。經の中に廣く説くが如し。或は布施を以てし、或は持戒等を以てす。慳者には爲めに布施等を説く。六波羅蜜の義は、此の中に佛自ら廣く説きたまへるが如し。此の中に譬喩を説くが如く、鳥の翅なくんば能く飛翔すると能はざるが如し。菩薩も亦是の如く、神通波羅蜜(多)なくんば、衆生を教化すること能はず。菩薩は天眼を以て、十方國土の諸佛、及び一切衆生を見、天耳力を以て、諸佛に從つて法を聞き、如意神通力を以て、大光明を放ち、或は水火を現じて、種種の變化をなし、奇特の事を現じて、衆生をして希有尊重の心を發さしむ。他心力を以ての故に、他の信心數法の著する處、厭ふ處、度すべく、度すべからざる、是れ利、是れ鈍、是れ善根成就、是れ未成就なりと知る。是の如き等は、他の衆生の心を知つて、善根成就の者の度すべき者あるを攝取するなり。宿命智、生死智を以て、其の本末、何所より從來するか、何の善根を種ゑしか、好む所の行の何なるや、此より終に當に何れの所に生すべきや、何れの時にか當に解脱を得べきかを觀す。是の如く籌量し思惟して度すべき者を知り、過去の業因縁、未來世の果報は、復た神通力を以てす。是の人は、應に恐怖を以て度すべきには地獄を以て之れに示さば、汝當に此の中に生ずべし。應に歡喜を以て度すべきには、示すに天堂を以てすれば、眼に是の事を見、心に驚怖歡喜を懷いて世間を厭患す。爾の時に、漏盡神通を以て、漏盡の法を説く。衆生は是の法を聞いて、其の著心を破し、三乘を以て而も涅槃を得。譬へ

ば、白鷺の魚を取らんと欲する時、籌量し進止して期會を失せず、其の得べきを知れば、即便ち之れを取りて終に空しからざるが如し。菩薩も亦た是の如く、神通力を以ての故に、衆生の本末、度すべきの因縁、國土時節を觀じ、其の信等の諸根の増利、諸の因縁具足を知つて、爲めに説法すれば則ち、空しからざるなり。是の故に菩薩は神通を離れては、衆生を饒益すると能はざること、鳥の翅なきが如しと説く。餘の神力は佛の自ら説きたまふが如し。天眼を以ては十方の衆生の生死を見、亦衆生の心を知つて意に隨つて説法し、乃至善く神通力を修して而も衆生の爲めに身を受け、苦樂の爲めに染せられず。是の菩薩は衆生の中に於いて、或は父となり、或は子となり、或は師となり、或は弟子となる。或は主となり、或は奴となり、或は象馬となり、或は象馬に乗る者となり、或時は富貴にして力勢あり、或時は貧賤となるも、此の諸の事に於いて亦た染汚せられず。譬へば、佛の、所化の人の〔爲めに〕一切の事をなすも、苦樂に染汚せられざるが如し。一切の事とは、先に種種阿僧祇の身と作し、衆生を度するが如し。苦樂に染せられずとは、樂の中に愛心を生せず、苦の中に瞋心を生せざるなり。生死の衆生の、處に隨つて煩惱を起すが如きにはあらず。菩薩は、應に是の如く遊戯神通し、衆生を成就し、佛國土を淨むべし。

問うて曰く、菩薩の神通力には所作あり、何を以てか遊戯と名くるや。答へて曰く、「戲とは、幻

【五】 他本には増を猛に作れり。

【六】 第三問、菩薩の神通を遊戯と名くる理由如何。

師の種種に現變するが如きに名く。菩薩は神通もて種種に現化す、之れを名けて戲となす。

復次に、佛法の中の三三昧には空を名づけて上行となす。何となれば、涅槃の著する所なく、得る所なきに似如するが故なり。餘の諸の行法は、皆な名けて下となす、下は小兒の如し。是の故に神通力を説いて、名けて遊戯となすなり。衆生を成就し、佛土を淨むる中に於て最も要用たり、衆生を成就す。是の中に、佛土を淨め、共に善根を修すと説くが如し。

問うて曰く、何の必要ありてか、用つて衆生を成就し、佛國土を淨むるや。答へて曰く、佛自ら因縁を説きたまはく、「衆生を成就し、佛國土を淨めざれば無上道を得ると能はず。何となれば因縁具足せざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざるが故なり」と。因縁とは、所謂る一切の善法なり、初發意、檀波羅蜜(多)、乃至十八不共法を行じ、是の行法の中に於いては、是れは施者、是れは財物、是れは受者等との憶想分別なく、乃至十八不共法も亦た是の如し。若し菩薩、心に著せずして分別する所なく、六波羅蜜(多)乃至十八不共法を行ずれば、是れを阿耨多羅三藐三菩提の因縁となす。是の道をもつて、阿耨多羅三藐三菩提を得、亦能く自ら度し、又能く衆生を度す。

問うて曰く、菩薩若し著心もて布施せば、何等の過あつてか、而も具足と名づけざるや。著心の

【七】 三三昧とは空三昧、無相三昧、無願三昧の稱にして、空、無相、無願と觀するがために住する定をいふ。

【八】 第四問、何の必要ありてか、衆生を成就し、佛土を淨むるか。

【九】 第五問、菩薩もし著心もて布施せば、何等の過ありてか、具足と名づけざるや。

布施は受者の恩重からん。答へて曰く、小利ありと雖も、而も大過あり、美食に毒を雜ふるに、美の利ありと雖も、而も自ら命を喪ふが如し。

問うて曰く、(一)何者か是れ過なるや。答へて曰く、若し著心の布施は、意に稱はざることあれば、則ち慧怒を生じ、若し受者其の恩を感せざれば、則ち怨嫌を成す。若し著心もて善人に供養するも、少しく凶衰あれば則ち嫌ひ、布施に應ずることなく、施す所を悔惜す。若し布施して心に悔あれば、受くる所の果報則ち清淨ならず。

復次に、著心の布施は、深心に財物に貪著す。若し侵奪せらるることあれば、則便ち害を加へて自ら念へらく、「我れ福德好事の爲に財を集む、汝何故に侵奪するや」と。先づ財物を貪つて、今世の事の爲にし、而も能く布施して後世の事の爲にし、愛惜轉た深し。深く著するを以ての故に、若し侵奪せらるることあれば、能く罪を重くす。重罪の因縁の故に、三惡道の苦を受く。

復次に、貪著の因縁の故に瞋恚を生じ、瞋恚の因縁の故に刀杖を加ふ。刀杖し殺害すれば、諸の苦惱を受く。

復次に、人愚癡の業を起せば大に安穩ならず。此の虚誑不實の事を行ずるが故に後に、必ず大患を致す。十方の諸佛は皆な、無相解脱門を説き、諸法無相の相、是を實となす。若し人、是の財物を

【一〇】 第六問、その過は如何。  
【一一】 無相解脱門。三解脱門の  
一、萬有に差別の相なしと觀するをいふ。

取らば虚誑不實の相なり。然して後、心著す。心著するが故に、大果報を期するも、而も能く施與す。譬へば、人の多收を求めんと欲するが故に、大に穀子を用ふるが如し。是の如く、著心の布施は、果報少にして不淨なり。終に盡に歸して、諸の憂惱を受くること稱説すべからず。皆な相を取るに由るが故に是の如きの過あり。若し如實の相を以て布施を行せば、是の如きの過あることなく、無量阿僧祇の生死の中に、諸の福樂を受けて而も亦盡きず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。

復次に、(三) 若し人著心を以て善法を行せば、是の人若し諸法の畢竟空を聞くや、即時に所行の法を捨てて是の空法に著して相を取り、此を以て實となし、先きの者を虚誑となす。是の人は則ち二種の法を失ひ、先きの善法を失して、邪見に墮す。

心に著する者は是の如きの過あり。譬へば重病の人の、衆くの藥ありて、之を療するに損なしと雖も、藥は復た病をなすが如し。著心もて諸の功德を行すれば、是の如き等の過罪あり。菩薩は著心を捨てて空相を取らず、如法性・實際の如し。布施等の法に於ても亦た是の如く、一切衆生の爲めに阿耨多羅三藐三菩提に廻向するを見る。

復次に、菩薩は布施する時、是の念を作す、「十方三世の諸佛の、畢竟清淨の智慧もて、諸法の實相を知り、亦た是の布施の相を知るが如く、我も亦た是の性を以て廻向せん」と。

復次に、是の菩薩は、一切の (三) 五情を心心數法の中に用ゐず行せず、諸法の相を知ること能はざ

【三】 著心を以て善法を行する者は、二種の法を失ひ、而して邪見に墮す。  
【三】 五情とは、此處にては五欲を指すなり。

るが故に、是の法は皆な是れ因縁の邊より生じ、虚誑にして自性あるとなきが故に、我れ今諸法の實相を知らんと欲し、是の諸の虚誑を廻向して、實相の中に入るに皆な異りあることなし。我れ今、未だ諸法清淨の實智慧を得ること能はざるが故に、是れは虚、是れは實なりと分別する所あり。清淨の智慧を以て之れを知れば、則ち皆な第一義諦となす。第一義諦の中に入れば、皆な清淨にして別異なることなしと爲す。是の如く布施等を廻向して直ちに佛道に至る。是の故に、分別する所なきの心もて能く布施等を行する、是れを眞の菩薩道と名くと説く。

【二四】 四諦品第八十四を釋す。

釋

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し是の諸法、是れ菩薩法ならば、何等か是れ佛法となすや。」佛、須菩提に告げて言はく、「汝の間ふ所の如く、是の諸法は是れ菩薩法ならば、何等をか是れ佛法となすや。」

佛、須菩提よ、菩薩法も亦是れ佛法なり、若し一切種を知れば是れ一切種智を得、一切煩惱の習を斷ず、菩薩は當に是の法を得べく、佛は一念相應の慧を以つて、一切の法を知り已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。須菩提よ、是れを菩薩と佛との差別となす。譬へば向道と得果と異なるが如し。是の二人は俱に聖人なるも、而も得向の異りあり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の無礙道中に行する、是れを菩薩摩訶薩と名く。解脫道の中に一切の闇蔽なき、是れを佛となす。」須菩提、佛に白して言さく、「若し一切法自相空ならば、自相空の法の中に云何が差別の異りあらん、是れ地獄、是れ餓鬼、是れ畜生、

【二四】 此の品には、初段に差別を明し、後段に四諦を辨す。他本には品名を「差別品」とせり。



是れ天、是れ人、是れ性地人、是れ八人地人、是れ須陀洹、是れ斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、是れ菩薩、是れ多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀なりと。世尊よ、諸人の不可得なるが如く、業因縁も亦不可得なり、果報亦た不可得なりと。佛の言はく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、自相空法の中には、衆生なく、業因縁なく、果報なし。須菩提よ、衆生は是の諸法の自相空なることを知らざれば、是の衆生は業因縁、若くは善、若くは惡、若くは無動を作り。罪業の因縁の故に三惡道の中に墮し、福徳の因縁の故に人天の中にありて生じ、無動業の因縁の故に色無色界の中に生ず。是の菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜(多)乃至十八不共法を行する時、盡く受けて是の助道法を行じ、如金剛三昧に入り、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、衆生を饒益す。是の利常に失はざるが故に、五道生死の中に墮せず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、五道の生死を得るや不や」と。佛の言はく、「得ざるなり」と。須菩提言さく、「世尊よ、業の若くは黑、若くは白、若くは不白を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、若し得ざれば、云何が是れ地獄、餓鬼、畜生、人天、須陀洹、乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、諸佛なりと説かんと。」須菩提よ、若し衆生、諸法の自相空なるを知れば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を求めず、亦た衆生を三惡趣、乃至五道に往來する生死の中より抜かず。須菩提よ、衆生は實に諸法の自性空なるを知らざるを以ての故に、五道生死を脱することを得ず。是の菩薩は、諸佛の所に從つて、諸法の自相空を聞き、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求む。須菩提よ、諸法は爾かく凡人の著する所の如くならず。衆生は無所有の法の中に於て、顛倒妄想分別して法を得。無衆生に衆生相あり、無色に色相あり、無受想行識に受想行識相あり、乃至一切有爲法無所有なるに、顛倒妄想の心を用つて、身口意業の因縁を作し、五道生死の中に往來して、脱することを得ず。是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜(多)を行する時、一切の善法は般若波羅蜜(多)の中に内り、菩薩道を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得。阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、衆生の爲

めに四聖諦、苦、苦果、苦滅、苦滅道を説き開示し分別す。一切の助道善法は皆な四聖諦の中に入る。是の助道善法を用つての故に分別するに三寶あり。何等をか三となす、佛寶と、法寶と、僧寶となり。是の三寶を拒逆して信ぜざるが故に、五道の生死を離るることを得ざるなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、苦聖諦を用つて得度するや、苦智を用つて得度するや。集聖諦を用つて得度し、佛集智を用つて得度し、滅聖諦を用つて得度し、滅智を用つて得度し、道聖諦を用つて得度し、道智を用つて得度するや」と。佛須菩提に告げたまはく、「苦聖諦もて得度するにあらず、亦苦智もて得度するにあらず。乃至道聖諦もて得度するにあらず、亦道智もて得度するにあらず。須菩提よ、是の四聖諦は平等なるが故に、我れ説く、即ち是れ涅槃なりと。苦聖諦を以てせず、集、滅、道聖諦を以てせず、又苦智を以てせず、集、滅、道智を以てせずして涅槃を得」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等をか是れ四聖諦平等の相となすや」と。「須菩提よ、若し苦なく、苦智なく、集なく、集智なく、滅なく、滅智なく、道なく、道智なければ、是を四聖諦の平等と名づく。

復次に、須菩提よ、是の四聖諦は如にして異ならず。法相、法性、法住、法位、實際、有佛にも、無佛にも、法相常住なり。(そは)不誑不失なればなり。是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、實諦に通達せんが爲の故に般若波羅蜜(多)を行す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何が菩薩摩訶薩は、實諦に通達せんが爲の故に般若波羅蜜(多)を行じ、實諦に通達するが故に、聲聞辟支佛地に墮せずして直ちに菩薩位の中に入るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、實の如く諸法を見、見已りて無所有の法を得、無所有の法を得已りて一切法空、四聖諦の所攝、四聖諦の所不攝法皆な空なりと見る。若し是の如く觀すれば是の時便ち菩薩位の中に入る。是を菩薩の性地中に住して頂墮に從はずと爲す。是の頂墮を用ての故に、聲聞、辟支佛地に墮す。是の菩薩は性地の中に住して、能く四禪、四無量心、四無色定

を生ず。是の菩薩は是の初定地の中に住して、一切諸法を分別し、四聖諦に通過し、苦不生、緣苦心を知り、乃至道不生、緣道心を知り、但阿耨多羅三藐三菩提に順じて、心に諸法の如實の相を觀す」と。「世尊よ、云何が諸法の如實の相を觀するや」と。佛の言はく、「諸法の空なることを觀するなり」と。「世尊よ、何等か空なるや」と。佛の言はく、「自相空なり。是の菩薩は是の如きの智慧を用つて、一切法空を觀じ、法性として見るべきなく、是の法性中に住して阿耨多羅三藐三菩提を得。何となれば性相なければなり。是の阿耨多羅三藐三菩提は、諸佛の所作にあらず、辟支佛の所作にあらず、亦た阿羅漢の所作にあらず、亦た向道の人の所作にあらず、亦た得果の人の所作にあらず、亦た菩薩の所作にもあらず、但た衆生の諸法の如實の相を知らず見す。是の事を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜(多)を行じ、方便力を以ての故に、是の衆生の爲めに法を説くなり。」

論

問うて曰く、(一) 佛法と菩薩法とは大に差別あり。佛は是れ一切智、菩薩は未だ是れ一切智ならず。須菩提は何が故に疑を生じて、佛に何等か是れ諸の菩薩法なりや、何等か是れ佛法なりやと問へるや。答へて曰はく、此の中に佛は菩薩に、佛の所行の如くせしめ、應に是の如く六波羅蜜(多)等乃至一切種智を行すべしと教へたまへり。是の故に須菩提問ふ、「若し佛の如く行せば、佛と何の異りありや」と。佛其の意を可とし、應に是の如く問ふべしと(宣へり)。「色等の諸法の行處は是れ同じ、但た智慧の利鈍に異りあり。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、(二) 菩薩は實の如く六波羅蜜(多)を行すと雖も、而も未だ能く周遍すると能はず、

【一五】 第七問、須菩提が佛法と菩薩法との差別を問へる理由如何。  
【一六】 佛と菩薩との差異。

未だ一切の門に入ること能はず、是の故に名づけて佛と爲さざるなり。若し菩薩已に一切種智の門に入り、諸法實相の中に入り、一念相應の智慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切煩惱の習を斷じ、諸法の中に自在力を得ば、爾の時名づけて佛と爲す」と。(七七)

月の十四日十五日は同じく月たりと雖も、十四日は大海の水をして潮たらしむること能はざるが如し。菩薩も亦た是の如く、清淨なる實智慧ありと雖も、未だ諸佛の法を具足すること能はざるが故に一切十方の衆生を動かすこと能はず。月の十五日は、光明盛んにして滿つる時、能く大海の水をして潮たらしむ。菩薩の成就も亦た是の如く、大光明を放ちて能く十方國土の衆生を動かす。此の中に佛自ら譬喩を説きたまはく、「向道得果は同じく聖人たるも、而も差別あるが如く、

【七】 佛は十五日の月の如く、菩薩は十四日の月の如し。

菩薩も亦た是の如く、行者を名づけて菩薩と爲す。初發心より乃ち金剛三昧に至つて、佛は已に果を得、一切の法の中の疑を斷じて、了せざる所なきが故に名づけて佛と爲す。須菩提復た問ふ、「自相空法の中には差別は不可得なり、所謂る是れ地獄乃至天、是れ性人、八人、是れ須陀洹、乃至佛なり。世尊よ、地獄等の如く、衆生不可得なれば業因縁も亦た不可得なるべし。何となれば、作業者不可得なるが故なり。業不可得の故に、果報も亦不可得なるべし。佛は云何が佛と菩薩と差別ありと説きたまふや」と。佛、須菩提の意を可とし、還つて所問を以て答へたまはく、須菩提よ、衆生は自性空の法を知らざるが故に、能く善惡の業を起すと、經中に廣く説くが如し。衆生とは凡夫の未だ正位に

入らざる人なり。是の人、我心顛倒し、煩惱の因縁の故に諸の業を起す。業とは、三種あり、身(業)と、口(業)と、意(業)となり。是の三種の業に二種あり、若くは善、若くは悪、若くは有漏、若くは無漏なり。悪業の故に三惡趣に墮し、善業の故に天人の中に生ず。(二) 善業に復た二種あり、一には欲界繫、二には色無色界繫なり。色無色界繫に生ずる業を不動と名づけ、不動業の故に色無色界に生ず。若し衆生自ら諸法の性空を知らば、即ち時に著心を生せず。著心を生せざるが故に業を起さず、乃至色無色界に生ぜず。實に知らざるを以ての故に生ず。是の事を以ての故に、菩薩摩訶薩は盡く布施等の法、乃至十八不共法を受け、行じて失ふ所なく少くる所なし。乃至如金剛三昧を用つて阿耨多羅三藐三菩提を得、大に衆生を饒益す。衆生は是の利益を得るが故に、復た五道の生死に往來せず。須菩提復た問ふ、「佛は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、實に是の五道を得るや不や」と。佛の言はく、「得ず」と。

問うて曰く、佛は先きに大利益の故に五道に墮せずと説き、今云何が得ずと説きたまへるや。答へて曰く、決定して相を取るは邪見なり、邪見は五道の生死に墮して得ず、但だ凡夫人は顛倒の因縁を以て業を起し、假りに六道の生死ありと名く。其は實に幻の如く夢の如し。復た問ふ、「黑白等の四種の業を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。黒業とは是れ不善業

【二〇】 三種の業——(一)身業、(二)口業、(三)意業。此の三種に又二業あり、所謂善業、惡業及び有漏、無漏となり。

【二一】 善業に二種あり、欲界繫と色無色界繫なり。

【二二】 第八問、佛は先に大利益の故に五道に墮せずと説き給ひしに、今云何が得ずと説き給へるか。

の果報にして、地獄等の苦惱を受くる處なり。是の中の衆生は大に苦惱し、悶極するが故に名づけて黒となす。善業の果報を受くる處は所謂諸天にして、其の樂を受くると、意に隨つて自在明了なるを以ての故に、名づけて白業となす。是の業は是れ三界の天なり。善、不善業の果報を受くる處は所謂の人なり。阿修羅等の八部、此の處は、亦是樂を受け、亦是苦を受くるが故に、黑白業と名づく。無漏業は能く不善を破し、有漏業は能く衆生を抜いて、善惡の果報の中を離れしむ。

問うて曰く、三三 無漏業は是れ白なるべし、何を以てか非白非黒と言ふや。答へて曰く、無漏の法は清淨無垢なりと雖も、空は無相無作なるを以ての故に分別する所なし、故に白と云ふとを得ず。黑白は是れ相待の法なり、此の中に相待なきが故に白と言ふべからず。

【三】 阿修羅等の八部とは、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽をいふ。

【三】 第九問。無漏業を非白非黒といふ理由如何。

復次に、無漏業は能く一切の諸觀を滅し、觀の中に分別するが故に、黑白あり。此の中には觀なきが故に黑白なし。須菩提復た問ふ、「若し是の四種の業を得ずんば、云何が是れ地獄、乃至阿羅漢を分別せん。若し黒業なくんば、云何が是れ地獄、餓鬼、畜生を説くや。若し白業なくんば、云何が是れ天人を説くや。若し黒白業なくんば、云何が是れ阿修羅道を説くや。若し不白不黒業なくんば、云何が是れ須陀洹乃至阿羅漢を説くや」と。佛答へたまはく、「若し一切衆生自ら諸法の自性空を知らば、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の意を發さず。亦た六道の中に於て衆生を

拔出せず、何となれば、衆生自ら諸法の性空なることを知らば、則ち度すべき所なきが故なり。譬へば、病なければ則ち薬を須ゐず、闇なければ則ち燈明を須ゐるが如し。須菩提よ、今衆生は實に自相空法を知らざるが故に、心に随つて相を取り著を生ず。著するを以ての故に染み、染むが故に五欲に随ひ、五欲に随ふが故に貪の爲めに覆はる。貪の因縁の故に慳み、虚誑し、嫉妬し、瞋恚し、鬪諍す。瞋恚を以ての故に諸の罪業を起して識知する所なし。是の故に壽終るまで、業因縁に随つて、彼の處に生じ、續いて生死の業を作し、常に六道の中に往來して、復た窮まり已むことなし。是の故に菩薩は、諸佛及び弟子の所に於て、諸法の空なることを説くを聞いて衆生を慈愍す。衆生は狂愚顛倒なるを以ての故に著を生ず。我れ當に作佛して衆生の顛倒を破し、諸法の空相を解せしむべし。所以は何んとなれば、諸法に爾かく凡人所著の如くならざればなり。衆生の法は定んで實あることなく、但だ自ら無所有の中に於て、憶想分別して、妄りに所得ありとし、無衆生の中に衆生想を起し、無色の中に色想を起し、無受想行識の中に識想を起す。狂顛倒を以ての故に、是の人は能く身口意の業を起し、六道生死に於て得脱すると能はざるなり。若し但だ衆生法想を生ずるは、結縛猶ほ輕易にして度するを得べし。貪欲瞋恚を生ずるは、是の中に於て諸の重業を起す、是を重縛と爲す。此の業、果報を受くれば則ち度することを得べきこと難し。譬へば、微塵を積んで山を成すや、是を移動し得べきと難きが如し。菩薩は是の衆生の爲めの故に、其の生死の因縁、果報を破せんと欲するが故

に、般若の中に於いて、一切の善法を攝し、菩薩道を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得、衆生の爲めに四聖諦を説く。所謂る苦、苦集、苦滅、苦滅道、種種の因縁を開示し敷演するなり。

問うて曰く、佛は無量阿僧祇劫より已來、微妙の法を習ふ。所謂る十八不共法、乃至無礙解脫

〔等〕諸の甚深の業なり。何を以てか但だ苦集滅道を説きたまへるや。答へ

て曰く、衆生の畏るると急なる所の者は、苦に過ぐるることなし。〔故に〕爲

めに苦を除き已つて、然る後、示すに佛道を以てす。〔譬へば〕、人重病な

らば、先づ病を除くを以て急と爲し、然る後實物衣服を以て、其の身を莊

嚴するが如し。苦とは 五受衆の身を受くるなり。是れ苦の本にして、

性即ち是れ苦なり。是の苦は略して是を言へば、是れ生老病等なり。

經の中に處處に廣く苦を説くが如し。集とは愛等の諸の煩惱なり。愛は是

れ 心中の舊法なり。是の故に佛は、「愛は能く後〔世〕の身を生ず」と説

きたまへり、故に是れ苦の因なり。苦の因は即ち是れ果なり。若し人、苦を

捨てんと欲せば、先づ當に愛を斷すべし。愛を斷すれば苦則ち滅す、斷愛は即ち是れ苦滅なり。苦滅

は即ち是れ道なり。是の五衆の種種の因縁、苦及び苦集の過罪を觀するは、是れ所謂る無常、苦、空、

無我にして、病の如く、瘡の如く、怨の如く、賊の如し。八聖道分の中に於ては正と爲し、餘の七事

【三】 第一〇問、佛は無數劫より已來、微妙の法を習ふ。何を以てか、但だ苦集滅道を説き給へるか。

【四】 五受衆の身とは五受によりて成りし身の意にして、通常吾人の身は即ち之れなり、五受とは、一憂受、二喜受、三苦受、四樂受、五捨受是れなり。

【五】 心中の舊法とは心中に本來具有する法なること。



を見て、助成し發起して、能く一切法の中の愛を斷ず。酒を以て薬を發するが如し。此の人は一切世間に於いて、復た貪る所なく、苦火を離るることを得て、然る後示すに妙法を以てするなり。

復次に、此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「所謂る四聖諦の中に於いて一切の善法を攝す」と。有人の言はく、「佛は何を以てか但た苦等の四法を説くや」と。是を以ての故に、佛は一切助道の善法を説き、皆な四諦の中に攝在す。助道の善法の因縁の故に分別するに三寶あり。衆生は三寶を信せざるが故に、六通の生死を離るることを得ず。

問うて曰く、「須菩提は何を以てか是の麤問を作すや、〔即ち〕苦滅を以て苦智滅し、集滅を以て集智滅すと爲すと言ふや。答へて曰く、此れ麤問にあらず。今の問は苦等の

【三】 第一問、須菩提が是の麤問をなせる理由如何。

四諦の體を見るが故に滅し、智を用ふるが爲めの故に滅す。愛等の諸の煩惱滅するが故に有餘涅槃と名づく。若し苦諦を以て道を得ば、一切衆生〔及び〕牛羊等も亦た道を得べし。若し苦智を用つて道を得ば、則ち苦を離れて智なし。苦智を離るるを名づけて苦となさず、但名づけて苦と爲すのみ。苦諦苦智和合するが故に生ず。〔故に〕但だ苦滅を以てし、但だ智滅を以てすと言ふを得ず。乃至道諦も亦た是の如し。佛答へたまはく、苦諦を以ても滅せず、亦た苦智を以ても滅せず、乃至道諦道智も亦た是の如し。我れ是に四諦の平等を説く、即ち是の滅は苦諦滅乃至道諦滅を用ゐず。何となれば、是の苦等の四法は皆な因縁より生じ、虛妄不實にして自性あることなきが故

なり。「是の故に」名づけて實となさず、不實の故に云何が能く滅せん。

問うて曰く、二諦は有漏、凡夫の行する所の法なるが故に、是れ虚誑不實なるべし。道諦は是れ無漏法にして、著する所なし。因縁和合によつて生ずと雖も、而も虚誑ならず。又滅諦は無爲法にして、因縁に従つてあるにあらず。云何が四法は皆な是れ虚誑なりと言ふや。答へて曰く、初に道を得るや、二諦は是れ虚誑なることを知り、將に無餘涅槃に入らんとするや、亦た道諦の虚誑なることを知り、空空三昧等を以て道諦を捨離す、椽の喩を説くが如し。滅諦も亦無なれば、無爲も滅す。經の中に説くが如し、「有爲を離れて無爲なく、有爲に因るが故に無爲と説く」と。苦の滅は燈の滅するが如し、戲論して其の處る所を求むべからず。是の故に佛説いて、以て苦を用ゐ、乃至道を用ゐて滅を得ずとなす。須菩提、佛に問ふ、「何者が是れ四諦平等なるや」と。佛答へたまはく、「若し 八法處所謂る四諦は四諦智なくんば、是れ則ち平等なり」と。

「復次に、須菩提よ、四諦は如實、不誑不異、如法性法相法位實際、若くは有佛、無佛、法相常住にして、心心數法及び諸觀を用ゐず。但だ衆生を誑はさざらんが爲の故に一切餘法に住す。皆顛倒して妄りに著し、顛倒の果報生ずるが故に、能く人に大喜樂を興ふと雖も、久しうして皆な虚誑變異し、

【七】 第一二問、苦集二諦は有漏法なれば虚誑不實なるべきも、道諦は無漏法、滅諦は無爲法、云何が虚誑不實といはん。

【八】 八法處なくとは四諦及び四諦智は共に固定せるものにあらずといふこと。

但だ一法のみあり、所謂る諸法實相なり。誑はさざるを以ての故に、常住にして滅せず」と。是の如く菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行じ、諸法の實諦に通達す。須菩提復た問ふ、「云何が菩薩は、通達して實諦を得、聲聞辟支佛を過ぎて菩薩の位に入るや」と。佛答へて言はく、「苦し菩薩思惟し籌量して諸法を求むるに、一法として定相を得べきものあることなく、一切法を見るに皆な空なり、若くは四諦あり、若くは四諦あらず。四諦にあらざる虚空は數數縁を盡くるにあらず、餘は四諦あり」と。若し是の如く法空を觀すれば、爾の時に菩薩の位に入るなり。

問うて曰く、(元)何を以てか空亦是空觀を説かずして菩薩の位に入るや。

答へて曰く、是の説を須あらず。何となれば、若し諸法の空を説かば、即ち是れ空にして、空も亦た空なり。若し是の空、空ならずんば、名づけて一切空となさず。是の故に、是の空を行すれば菩薩の位に入ることを得るなり。菩薩は是の性地の中に住す。性地に墮頂せずとは、所謂る菩薩の法位なり。

【二九】第一三問、空亦是空觀を説かずして、菩薩の位に入る理由如何。  
【三〇】聲聞法中の煖、頂、忍、世第一を性地と名く。

聲聞法中の煖法、頂法、忍法、世第一法の如きを名づけて性地となす。是の法は無漏道に隨順するが故に名づけて性とす。是の中に住すれば、必ず望んで道を得。菩薩も亦た是の如く、是の性地の中に安住して必ず望んで作佛し、能く四禪、四無量心、四無色定を生ず。是の菩薩は、禪地の中に在住して心を攝め、諸法を分別し、思惟し、籌量して四諦に通達す。所謂る、苦を知見し、亦苦を縁するにあらず、心を生じて苦を知る、是

れ凡夫の身を受くる〔所以〕なり。苦の因縁に著するが故に諸の憂惱を受く。是〔れ等〕の人身は皆な賊の如く怨の如し。無常、空等を得、是れを得已つて即時に捨てて苦相を取らず、亦苦諦を縁せず、〔是れ〕菩薩法位の力の故なり。乃至道諦も亦是の如し。但だ一心に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向して、是の四諦を知り、薬病相待して亦た是の四諦に著せず。但だ諸法の如實相を觀じて四種の分別觀を作さず。須菩提問ふ、「云何が實の如く、諸法を觀するや」と。佛の言はく、「空を觀せよ。須菩提よ、若し菩薩、能く一切の法の若くは大、若くは小を皆な〔悉く〕空なりと觀すれば、是れを如實觀と名づく」と。復た問ふ、「何等の空を用ふるや」と。佛答へて言はく、「自相空を用ふべし」と。

問うて曰く、**〔三〕** 十八空の中に、佛は何を以てか、但だ自相空を説くや。

【三】 第一四問、佛、十八空の中に但だ自相空を説き給へる理由如何。

答へて曰く、是れ中道空、内外空等なり、是れ小空、畢竟空、無所得空等なり、是れ甚深空、自相空なり、是れ中空なり。自相は理あるものを破るが故に〔自相空を説く〕。而も心没せずして、能く甚深空の中に入る。是の菩薩は是の如きの法を得て、一切の法は皆な空なりと觀じ、乃至、一法の性として住すべきものあるを見ず。阿耨多羅三藐三菩提を得て諸法を觀するに、阿耨多羅三藐三菩提の如し。阿耨多羅三藐三菩提も、亦た自性空にして、佛の所作にあらず、大菩薩の所作にあらず、阿羅漢辟支佛の所作にあらず、常に寂滅の相にして戲論の語言なし。〔而も〕衆生は實相の如く知見すること

能はず。是の故に菩薩は般若を行じ、方便力を以て衆生のために法を説く。方便力とは、菩薩無性  
 法忍を得て、菩薩の位に入り、菩薩の第一義諦觀を通達するなり。是の道相は、甚深微妙にして得な  
 く捨なく、妙智力を用ふるすら「尙ほ」不可得なり、何に況んや口説し得べけんや。大悲心もて深く衆  
 生を念ずるも、「衆生は」空事を以ての故に三惡道に墮して大劇苦を受く。若し我れ是の法を直説する  
 に、則ち信せず受けざれば、則ち法を破壊して地獄に墮す。「是の故に」我れ今當に一切の善法を成  
 就し、身の三十二相を莊嚴して衆生を引導し、無量無邊の諸佛の神通力を起して佛道を成すること  
 を得、一切衆生の中に、諸法に於いて自在を得せしむべし。若し惡法を讚ずる衆生すら、猶尙受く  
 べし、何に況や實法をや。是の菩薩は所願の如く思惟し、行じ、「以て」衆  
 生の爲めに説いて皆な得脱せしむ。

【三】方便力の義解。

# 卷の第九十五

## 七譬喩品第八十五を釋す。

經

須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法の性は無所有にして佛の所作にあらず、辟支佛の所作にあらず、阿羅漢の所作にあらず、阿那含の所作にあらず、斯陀含、須陀洹の所作にあらず、向道人(の所作)にあらず、得果人(の所作)にあらず、諸の菩薩の所作にあらずんば、云何が分別して、にあらす、是の業因縁を用つての故に、地獄に生ずる者ありと知り、是の業因縁の故に畜生諸法の異あつて、是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ人、是れ天、乃至非有想非無想天とせん。是の業因縁を用つての故に、地獄に生ずる者ありと知り、是の業因縁の故に畜生餓鬼に生ずる者ありと知り、是の業因縁の故に人中に生じ、四天王天に生じ、乃至非有想非無想天に生ずる者ありと知り、是の業因縁の故に須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛を得る者ありと知り、是の業因縁の故に、是れ諸の菩薩摩訶薩なりと知り、是の業因縁の故に、是れ多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀なりと知らんや。世尊よ、無性法の中には、業用あることなければ、作業の因縁の故に、若くは地獄餓鬼畜生に墮し、若くは人天に生じ、乃至非有想非無想天に生ず。是の業因縁を以ての故に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩を得、菩薩道を行じて、當さに一切種智を得べく、一切種智を得るが故に、能く衆生を生死の中より拔出すとせんや」と。佛、須菩提に告げて言ばく、「是の如し、是の如し。無性法中には業なく果報なし。須菩提よ、凡夫人は聖法に入らず、諸法の無性相を知

【一】此の品には前品所説の性空にして差別するを譬喩もて示すなり。他本には品名を「性空品」、「譬喩品」、「七譬品」等とせり。

らずして、顛倒愚痴の故に種種の業因縁を起す。是の諸の衆生は、業に随つて身を得。〔即ち〕若くは地獄身、若くは畜生身、若くは餓鬼身、若くは人身、若くは天身、四天王身、乃至非有想非無想天身なり。是の無性法は業なく果報なく、無性は常に是れ無性なり。須菩提よ、〔汝の〕言ふ所の如く、若し一切法は無性ならば、云何が是れ須陀洹乃至諸佛は一切種智を得んやとは、須菩提よ、汝が意に於ては云何。道は是れ無性なりや不や。須陀洹果乃至諸佛は一切種智は無性なりや不や。須菩提の言さく、「世尊よ、道は無性なり、須陀洹果も亦た無性なり、乃至諸佛は一切種智も亦た無性なり」と。「須菩提よ、無性の法は能く無性の法を得るや不や」と。「不なり、世尊よ」。佛、須菩提に告げて言はく、「有性の法能く有性の法を得るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、無性の法及び道等、是の一切法は皆合せ散ぜず、色なく形なく、對するなく、一相所謂無相なり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜〔多〕を行する時、方便力を以て衆生を見るに、顛倒を以ての故に、五衆に著す。無常の中に常相を見、苦の中に樂相を見、不淨の中に淨相を見、無我の中に我相ありとし、無所有處に著す。是の菩薩は方便力を以ての故に、無所有の中に於て衆生を拔出すと。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、凡夫人の著する所、頗し實に不異不著の故に業を起し、業因縁の故に、五道生死の中より脱することを得ざるありや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「凡夫人の著する所、及び業を起す所は、毛髮許りの如きも實のことなし。但だ顛倒の故なり。

須菩提よ、今汝の爲めに譬喩を説かん、智者は譬喩を以て解することを得。須菩提よ、汝が意に於て云何。夢中に見る所の人の五欲の樂を受くるが如きは、實に住處ありや不や」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、夢尙ほ虚妄不可得なり、何に況んや夢中に住して五欲の樂を受くるをや」と。「汝が意に於ては云何、諸法の若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲、頗し夢の如くならざるものありや不や」と。「世尊よ、諸法の若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若く

は無爲にして、夢の如くならざる者なし」と。佛、須菩提に告げて言はく、「汝が意に於て云何、夢中に五道生死の往來ありや不や」と。「世尊よ、無なり」と。「汝が意に於て云何、夢中に道を修することあつて、是の修道を用つて、若くは垢に著し、若くは淨を得ることありや不や」と。「不なり、世尊よ。何となれば是の夢法は實事あることなく、垢淨を説くべからざればなり」と。「汝が意に於て云何、鏡中の像は實事ありや不や。能く業因縁を起し、是の業因縁を用つて、地獄餓鬼畜生の中に墮し、若くは人、若くは天四天王天處、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。須菩提の言さく、「不なり、世尊よ。是の像に實事あることなく、但だ小兒を誑はすのみ。是の事云何が當さに業因縁あるべき、是の業因縁を用つて當に地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の鏡中の像に修道ありて、是の修道を用つて、若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。須菩提の言さく、「不なり、世尊よ。何となれば是の像は空にして實事なく垢淨を説くべからざればなり」と。「汝が意に於て云何、深澗の中に響あるが如きは、是の響に業因縁あり。是の業因縁を用つて若くは地獄に墮し、乃至若くは非有想非無想處に生ずるや不や」と。須菩提の言さく、「不なり、世尊よ。是の事は空にして實の音聲あることなし。云何が當に業因縁あり、是の業因縁を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の響に頗し修道ありて、是の修道を用つて、若くは苦に著し、若くは淨を得るや不や」と。「汝が意に於て云何、焔の如し、水は木相に非ず、河は河相に非ず、是の焔、頗し業因縁あり、是の業因縁を用つて、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。「不なり、世尊よ。焔の中に、水は畢竟得べからず、但無智の人の眼を誑はすのみ。云何が當に業因縁あり、是の業を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の焔に修道あつて、是の修道を用つて若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。「不なり、世尊よ。是の焔に實事あることなく、垢淨を説くべからず」と。「汝



が意に於て云何、毘閻婆城の、日の出づる時、毘閻婆城を見るが如き、無智の人は城なきに城ありと思ひ、盧觀なきに盧觀ありと思ひ、園なきに園ありと思ふ。是の毘閻婆城、頗し業因縁あり。是の業因縁を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。「不なり、世尊よ。是の毘閻婆城は畢竟得べからず、但だ愚夫の眼を誑はすのみ。云何が當に業因縁あり、是の業因縁を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の捷園婆城に修造あり、是の修造を用つて若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と、「不なり。世尊よ、是の捷園婆城に實事あることなく、垢淨を説くべからず」と。「須菩提よ、汝が意に於て云何、幻師の幻作する種種のもの、若くは象、若くは馬、若くは牛、若くは羊、若くは男、若くは女等は、汝が意に於て云何、是の幻は業因縁あり、是の業因縁を用つて、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。「不なり、世尊よ。是の幻法は空にして實事なし。云何が當に業因縁あり、是の業因縁を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の幻、修造ありて、是の修造を用つて、若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。「不なり、世尊よ。(何となれば)是の法は實事あることなく、垢淨を説くべからず」と。「須菩提よ、汝が意に於て云何、佛の所化人の人の如き、是の化人業因縁あり、是の業因縁を用つて、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。「不なり。世尊よ、是の化人は實事あることなし、云何が當に業因縁あるべく、是の業因縁を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の化人、修造ありて、是の修造を用つて若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。「不なり、世尊よ。是の事實あることなく、垢淨を説くべからず」と。佛、須菩提に告げて言はく、「汝が意に於て云何、是の空相の中に於て、垢者あり、淨者ありや不や」と。「不なり、世尊よ。是の中に所有あることなく、垢に著する者あることなく、淨を得る者ある事なし。須菩提よ、垢に著する者あることなく、淨を得る者あることなきが如く、是の因縁を以ての故に、亦た垢淨なし。何となれば、我我所に住す

る衆生は垢あり淨あり、實を見る者は垢ならず淨ならず、實に見る者の垢ならず淨ならざるが如く、是の如く亦た垢淨あることなきが故なり」と。

問うて曰く、三佛已に處處に是の事を答ふ。今須菩提は何を以てか復た問ふや。答へて曰く、

義は一なりと雖も所因の事の異なるが故なり。所謂一切の法は、若くは佛あるも、若くは佛なきも、諸法の性は常住にして空に所有なく、賢聖の所作にあらず。般若波羅蜜〔多〕は甚深微妙にして解し難く量り難し。有量を以て能く知るべからず。諸佛賢聖は衆生を憐愍するが故に種種の語言・名字・譬喩を以て爲に説きたまへり。利根の者は聖人の意を解し、鈍根の者は處處に著を生ず。語言名字に著して、若し空と説くを聞かば則ち空に著し、空も亦空と説くを聞かば亦復た著を生ず。若し一切法は寂滅の相にして、語言の道斷ゆと聞くと、而も亦復た自心に著して清淨ならざるが故に、聖人の法を聞いて清淨ならずとなす。〔譬へば〕、人の目瞶にして清淨の珠を視るに、其の目の影を見て、便ち珠を不淨なりといふが如し。佛種種の因縁を説きたまふに、過罪あるを見て、疑を生じ、是の言をなす。「若し一切の法は空、空も亦空ならば、云何が六道ありて常に生ずと分別せんや」と。是の如き等の疑難あるが故に、須菩提は經の將に訖らんとするを以て、衆生の爲めに所所に是の事を問ふ。是の故に重ねて問ひ、佛は須菩提の意を可したまふなり。

【二】第一問、佛は處處に已に此の事に就き答へ給へり、然るを須菩提が復た問へるは何故なるか。

問うて曰く、須菩提は有を以て空を難ず、佛は云何が其の意を可したまふや。答へて曰く、佛は其の説を可し、諸法は空にして常住なり、佛あるも、佛なきも異らずと。其の難を可さずんば、云何が六道等ありと分別せん。何となれば、其の難を以て空を破せんと欲するが故なり。是の中に佛其所難を解したまふ。所謂凡夫の人は聖法に入らず、未だ聖道を得ず、無所有の性を知らず、善く空三昧を修習せざるが故なり。顛倒とは四顛倒なり。愚癡とは、三界繋の無明なり。餘の煩惱を説かずと雖も、而も此の二法は虚誑不實にして顛倒せり。即ち是れ妄語虚誑なり。若し顛倒所生の業及び果報に従へば、根本不實なるを以ての故に、衆生染著すと雖も、亦た實なし。是を以ての故に、五道は皆な空にして但だ假名のみあり。又汝諸の賢聖を難するも、是の諸の賢聖は、顛倒差別を斷するが故に異名あり、顛倒不實なるを以ての故に斷する所なし。又復た無所有を滅失するが故に、名づけて斷と爲す。若し實に法として斷すべきあるも、尚ほ法を斷することなし、何に況んや顛倒をや。是の故に、一切賢聖の果は、皆な是れ無所有なり。顛倒を斷すれば、即ち是れ聖人の果なり。果は即ち是の斷を果とす。修する所の道も亦だ同じく無所有なり。是の故に道を修する時は、必ず當に空無相無作を用ふべし。道と果とは分別あるが故に賢聖に差別あり、今實に無所有の法は無

【三】 第二問、須菩提は有を以て空を難ず、佛は何故に其の意を可し給へるや。

【四】 四顛倒。二種あり、生死の無常、無樂、無我、無淨に於て常樂我淨と執するを凡夫の四顛倒と稱し、涅槃に於ける常樂我淨を無常、無樂、無我、無淨と執するを二乗の四顛倒といふ。

所有を得ると能はず、云何が差別あらんや。是の故に難に應せず。須菩提の意へらく、若し但だ顛倒するが故に世間あり。若し顛倒あらば亦た應に實あるべし、虛實相待するが故なりと。是の故に問ふ、「世尊よ、凡夫の著する所、頗し實に有りて生じ、若し業を起さば、是の業因縁の故に六道の生死解脱するを得ず」と。佛は答へて言はく、「不なり」と。何となれば、此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、即ち但だ顛倒の故に著を生ず、若し顛倒なくんば、云何が相待の實法あらん、乃至毫釐許りの實事もなく、畢竟無なるが故なりと。

問うて曰く、(三) 此は是れ諸佛所行の實義なり、所謂畢竟空なり。此は實にあらざるか。答へて曰く、是の第一義空も亦た分別に因り、凡夫の顛倒の故に説く。若し顛倒なくんば、亦第一義なし。若し凡夫の顛倒に多少許りも實あらば、第一義も亦た應に實あるべし。

問うて曰く、(云) 若し二つ俱に實ならざれば云何が解脱を得ん。人の手の垢を洗ふに還つて垢を以てするが如きは云何が淨なるを得んや。答へて曰く、諸法の實相は畢竟空、第一義にして、實に清淨なり。凡夫は顛倒して不清淨の法あるを以ての故に、此の清淨の法あり。破壊すべからず、變異せざるが故に、人の諸法實相に於て著欲を起し、煩惱を生ずるを以て、是の故に、是の法性を空にして所有なしと説くなり。所有なきが故に實なし。二法皆不實なりと雖も、而も不實の中に差別あり。十善

【五】 第三問、諸佛所行の實義なる畢竟空は此は實にあらざるか。

【六】 第四問、若し二俱に實ならずんば、云何が解脱するこゝとを得ん。

十不善の二事の如く、皆な有爲法の故に、虚誑不實にして、善不善の差別あり。殺生法の故に惡道に墮し、不殺の故に天上に生ず。布施、偷盜の二事「も亦た是の」如し。相を取り心に著すと雖も、是れ虚誑不實にして、亦た差別あり。衆生、乃至知者、見者も所有なきも、而も衆生を惱せば、大罪あり。衆生を慈悲せば大福あるが如し。慈の能く瞋を破し、施の能く慳を破するが如し。二事俱に是れ不實なりと雖も、而も能く相破す。是の故に佛説きたまはく、「諸法は根本定實にして、毫釐許りの如きも所有あることなし」と。是の事を證明せんと欲するが故に、夢中に五欲を受くるの譬喩を説く、須菩提の意へらく、若し一切法は畢竟空にして無所有の性ならば、今何を以ての故に、現に眼に見、耳に法を聞くことあるや」と。是を以ての故に佛は夢の譬喩を説きたまへり。人の夢力の故に、實事なしと雖も而も種種の聞見、瞋處、喜處あり。覺めたる人の傍にあるに、則ち見る所なきが如く。是の如し。凡夫の人は、無明顛倒の力の故に、妄りに見る所あり。聖人は覺悟すれば則ち見る所なし。一切法は、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲にして、皆な不實虚誑の故に見聞あり。又夢中に六道の生死往來を見るが如く、須陀洹乃至阿羅漢を見る。夢中には是の法なきも而も夢見るなり。夢中には實に淨もなく、垢もなく、業、果報、六道も亦た是の如し。顛倒の因縁の故に業を起す、業、果報も亦た應に空なるべし。顛倒を除却するが故に名づけて道となす。顛倒は實なきが故に、道も亦た實なるべからず、鏡中の

【七】夢中に五欲を受くるの譬喩を説く理由。

像、響、焰乃至化の如きも亦た是の如し。佛、須菩提に反問したまはく、「是の法の中に於て、垢なる者あり、淨なる者ありや不や」と。須菩提の意へらく、「一切法の中には我なし、云何が當に垢あり、淨ありと説くべけんや」と。是の故に無といふ。佛の言はく、「若し垢を受け、淨を受くる者なくば、垢淨も亦無けん」と。

問うて曰く、若し諸法を分別すれば、阿毗曇等の經の中には、垢あり、淨あり、但だ垢淨を受くる者なし。三毒等の諸の煩惱は是れ垢、三解脱門、諸の助道法等は是れ淨なりと「説くにあらずや」。答へて曰く、是の説

ありと雖も是の事は然らず。若し衆生の法、所屬なければ、亦た作者なし。若し作者なくんば、亦作法なく、縛なく、解なし。人の火の爲めに燒かるるや、畏れて之れを捨離す、火の火を離るるに非ず。衆生も亦た是の

如く、五衆の苦を畏るるが故に捨離す、苦の苦を離るるに非ず。若し垢淨なければ解脱あるとなし。復次に、佛此の中に自ら因縁を説きたまはく、所謂我我所の中に住するが故に、衆生は垢を受け、淨を受く。我は畢竟無なるが故に、垢淨に住處なく、住處なきが故に、垢なく淨なしと。

問うて曰く、我に我見なしと雖も、實に凡人あつて此の中に住して諸の煩惱を起す。答へて曰く、若し我に我見なくんば所縁なし。所縁なくんば、云何が生ずることを得ん。

【八】 第五問、阿毗曇等の經中には、「垢あり、淨あり、但だ垢淨を受くる者なし、三毒等は是れ垢、三解脱門等は是れ淨と説くにあらずや。」

【九】 第六問、我に我見なしと雖も、實に凡人の人あり、此の中に住して、諸の煩惱を起すは如何。

問うて曰く、(一〇)我なしと雖も、五衆の中に於て邪行す。謂はく我ありて我見を生じ、五衆は是れ我我所なりと。答へて曰く、若し五衆の中に定んで我見を生ずる因縁を以てせば、他の五衆の中に於て何を以ての故に生ぜざらん。若し他の五衆に於て生ぜば、則ち大に錯亂を爲す。是の故に我見に定處あるとなく、但だ顛倒の故に生ずるなり。

問うて曰く、(一一)若し顛倒して生ぜば、何を以ての故に但だ自ら己身に於て見を生ずるや。答へて曰く、是れ顛倒狂錯して其の實事を求むべからず。又復た無始の生死の中より來かた、自ら相續する五衆の中に於て著を生ず。是の故に佛説きたまはく、我心に住する衆生は、垢を受け、淨を受く。又實に見る者は、垢ならず淨ならずしと。是の因縁を以ての故に、垢なく淨なし。垢なく淨なしとは、諸法の實相を見たる人なり。諸法の實相に於て亦た著せず、是の故に無垢なり。諸法の實相は、相として取るべきなし、是の故に無淨なり。復次に、八聖道の中に著せざる、是を無淨と名づく。諸の煩惱を除き、顛倒に著せざる、是を無垢と名づく。

(一一) 平等品第八十六を釋す。

【一〇】 第七問、我なしと雖も五蘊の中に於て邪行す、五蘊はこれ我我所にあらずや。  
【一一】 第八問、若し顛倒して生ぜば、何を以てか但だ己身に於いて見を生ずるや。  
【一二】 此の品も前品に續きて、諸法平等にして成佛すべき義を明す。他本には品名を「無垢無淨品」に作れり。

須菩提

須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、實を見る者は亦た垢不淨なり。何となれば、一切の法性は所有なきが故なり。世尊よ、無所有の中に垢なく淨なければ、所有の中にも亦垢なく淨なし。世尊よ、無所有の中にも、有所有の中にも亦た垢なく淨なし。世尊よ、云何が如實語の者の垢不淨なるに、不實語の者も亦た垢不淨なりや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「是の諸法平等の相は、我れ是れを淨なりと説くと。須菩提よ、何等か是れ諸法平等となす。所謂る不異、不誑、法相、法性、法住、法位實際の如き有佛無佛にも法性常住なり。是れを淨と名づく。世諦の故に説く、最第一義にあらず、最第一義は、一切の語言、論議、音聲を超ゆ」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は空にして説くべからずんば、夢の如く、響の如く、影の如く、幻の如く、化の如くならん。菩薩摩訶薩は云何にしてか是の夢の如く、響の如く、影の如く、幻の如く、化の如き法を用つて、根本定實あることなきや。云何が能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是の願を作すや。我れ當に檀波羅蜜(多)を具足し、乃至般若波羅蜜(多)を具足すべし。我れ當に神通波羅蜜(多)を具足し、智波羅蜜(多)を具足し、四禪、四無量心、四無色定、四念處を具足し、乃至八聖道分を具足すべし。我れ當に三解脱門、八背捨、九次第定を具足すべし。我れ當に佛の十方を具足し、乃至十八不共法を具足すべし。我れ當に三十二相、八十隨形好を具足すべく、我當に諸の陀羅尼門、諸の三昧門を具足すべく、我れ當に大光明を放ちて遍く十方を照し、諸の衆生の心を知り、如應に法を説くべしとせんや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「汝が意に於ては云何、汝が説く所の諸法は、夢の如く、響の如く、影の如く、幻の如く、化の如くなりや不や」と。須菩提言さく、「爾り、世尊よ、若し一切の法は、夢の如く乃至化の如くならば、菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜(多)を行せん。世尊よ、是の夢乃至化は虛妄不實なり。世尊よ、是の不實虛妄の法を用つて、能く檀波羅蜜(多)乃至十八不共法を具足すべからず」と。佛、須菩提に告げて言はく、「是の如し、是の如し。不實虛妄の法は、檀波羅蜜(多)乃至十八不共法を



具足すること能はず。是の不實虚妄の法を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。須菩提よ、是の一切の法は、皆な是れ憶想思惟の作法なり。是の思惟憶想の作法を用つては、一切種智を得ること能はず。須菩提よ、是の一切の法は、助道法を能くして其の果を益すること能はず。所謂る是の諸法は、無生、無出、無相なり。菩薩の初發意より已來た、作す所の善業、若くは檀波羅蜜(多)乃至一切種智は、何を以ての故に、諸法皆な夢の如く、乃至化の如しと知るや。是の如き等の法は、檀波羅蜜(多)乃至一切種智を具足せず、衆生を成就し、佛國土を淨むることを得、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。是の菩薩摩訶薩の作る所の善業、檀波羅蜜(多)乃至一切種智は、夢の如く、乃至化の如しと知り、亦た一切衆生も、夢の中に行する如しと知り、乃至化の中に行する如しと知る。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を是れ不法なりとして取らず。是の不取を用つての故に、一切種智を得、是の諸法は、夢の如くにして取る所なく、乃至諸の法は化の如くにして取る所なしと知る。何となれば、般若波羅蜜(多)は、是れ取るべからざるの相、禪波羅蜜(多)乃至、十八不共法は、是れ取るべからざるの相なればなり。是の菩薩摩訶薩は一切法は、是れ取るべからざるの相なりと知り已りて、發心して阿耨多羅三藐三菩提を求む。何となれば、一切法の取るべからざるの相にして、根本定實なく、夢の如く、乃至化の如く、取るべからざるの相法を用つて、取るべからざるの相法を得ること能はざるが故なり。但だ衆生は是の如き諸法の相を知らず、又見ざるを以て、是の菩薩摩訶薩は、是の衆生の爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む。是の菩薩は、初發意より已來た、所有る布施は、一切衆生の爲めの故に、乃至修習する所の所有の智慧は、皆な一切衆生の爲めにして己身の爲めにせず。菩薩摩訶薩は、餘事の爲めにせざるが故に阿耨多羅三藐三菩提を求む。但だ一切衆生の爲めの故なり。是の菩薩般若波羅蜜(多)を行する時、衆生を見るも衆生なく、但だ衆生相の中に住し、乃至知者なく見者なく、知見の中に住して、衆生をして顛倒を遠離せしむ。遠離し已つて、甘錦性の中に置いて住す。是の中に住するも、妄相、所謂る衆生相、乃至知者見者相あることな

し。是の時に、菩薩は動心、念心、愚論心(等)を皆な捨てて、常に不動心、不念心、不戲論心を行す。須菩提よ、是の方便力を以ての故に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、自ら著する所なく、亦た一切衆生をして著する所なからしむ。世諦の故に第一義にあらずし。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、諸の佛を得。世諦なるを以ての故に得るや、第一義の中なるを以て得るや」と。佛の言はく、「世諦なるを以ての故に、佛、是の法を得たりと説く。是の法の中に法を得て、是の人は是の法を得たりとすべきものあることなし。何となれば、是の人の是の法を得るは、是を大有所得となし、二法を用ふるは道なく果なければなり」と。須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、若し二法を行じて、道なく果なくんば、不二法を行ずるは道あり果ありや不や」と。佛の言はく、「二法を行じて、道なく果なくんば、不二法を行するも亦た道なく果なし。若し二法なければ、不二法もなし。即ち是れ道、即ち是れ果なりとせんや。何となれば、是の如きの法を用つて道を得果を得、是の法を用つて道を得ず果を得ずと(爲すは)、是れを戲論と爲せばなり。諸の平等法の中には戲論あるとなし。無戲論の相は是れ諸法平等なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸法は無所有の性なれば、是の中、何等なか是れ平等となす」と。佛の言はく、「若し有法なくんば、無法あることなし。亦た諸法平等相をも説かず、平等を除いて更に餘法

なり、一切の法を離るるは平等相なり。平等相とは、若くは凡夫、若くは聖人も、行する能はず、到る能はざるなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、乃至佛も亦た行する能はず、到る能はざるや」と。佛の言はく、「是の諸法の平等は、一切の聖人も皆な行する能はず、亦た到る能はざるなり。所離る諸の須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、諸の菩薩摩訶薩及び諸佛なりとも、(皆行すること能はず、亦到ること能はざるなり)」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は一切諸法の中に自行自在なり。云何にしてか佛も亦行する能はず、到る能は

ず、到る能はず、到る能はざるなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は一切諸法の中に自行自在なり。云何にしてか佛も亦行する能はず、到る能は

すと説くや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「若し諸法平等と佛と異りあらば、應當に是の如く問ふべし、須菩提よ、今諸の凡夫人は平等なり、諸の須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、諸の菩薩摩訶薩、諸佛及び聖法皆な平等なり。是れ一平等にして無二なりや」と。所謂は凡夫人は是れ須陀洹乃至佛なり。是の一切法平等の中に皆な不可得なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法平等の中には皆是れ凡夫人乃至是れ佛ならば、世尊よ、凡夫人と、須陀洹、乃至佛と、分別あることなしと爲すや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「是の如し、是の如し。諸法平等の中には、是れ凡夫人、是れ須陀洹、乃至、是れ佛世尊なりと分別することなし」と。「世尊よ、若し諸の凡夫人、須陀洹、乃至、佛の分別なくんば、云何が三寶ありと分別せん。現に世間に於て佛寶、法寶、僧寶あり」と。佛の言はく、「意に於て云何、佛寶、法寶、僧寶と諸法等と異るや不や」と。須菩提、佛に白して言さく、「我れ佛より聞く所の義の如くんば、佛寶、法寶、僧寶と、諸法等と異りあることなし。世尊よ、是の佛寶、法寶、僧寶は即ち是れ平等なり。この法は、皆な合せず散せず、色なく形なく、對なく、一相、所謂の無相なり。佛は是の力あつて、能く無相諸法處の所を分別す。是れ凡夫人、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩摩訶薩、是れ諸佛なり」と。佛、須菩提に告げて言はく、「是の如し是の如し。諸佛、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸法を分別せざれば、當に是れ地獄、是れ餓鬼、是れ畜生、是れ人、是れ天、是れ四天王天、乃至是れ他化自在天、是れ梵天、乃至是れ非有想非無想處天、是れ四念處乃至八聖道分、是れ內空乃至是れ無法有法空、是れ佛の十力乃至是れ十八不共法なりと知るべきや不や」と。須菩提言はく、「知らざるなり、世尊よ」と。「是を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、佛に大恩力あつて、諸法平等の中に於て、動ぜずして而も諸法を分別す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛の諸法平等の中に於て動ぜざるが如く、凡夫人も亦た諸法平等の中に於て動ぜ

す、須陀洹乃至辟支佛も亦た諸法平等の中に於て動ぜず。世尊よ、若し諸法等相なれば、即ち之れ凡夫人の相、即ち是れ須陀洹の相、乃至諸佛、即ち是れ平等の相なり。世尊よ、今諸法は各々の相、所謂る色相の異、受想行識相の異、眼相の異、耳鼻舌身意相の異、地相の異、水火風空識相の異、欲相の異、瞋癡相の異、邪見相の異、禪相の異、無量心相の異、無色定相の異、四念處の相異、乃至、八聖道分相の異、檀波羅蜜(多)相の異、乃至、般若波羅蜜(多)相の異、三解脱門相の異、十入空相の異、佛の十力相の異、四無所畏相の異、四無礙智相の異、十八不共法相の異、有爲法性の異、無爲法性の異、是の凡夫人相の異乃至佛相の異ありて、諸法各々の相異なる。云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、諸法の異相の中に分別を作さざらん。若し分別を作さずんば、般若波羅蜜(多)を行すること能はず。若し般若波羅蜜(多)を行せざれば、一地より一地に至ること能はず。若し一地より一地に至らざれば、菩薩の位に入ること能はず。菩薩の位に入ること能はざるが故に、聲聞辟支佛地を過ぐることを能はず。聲聞辟支佛地を過ぐることを能はざるが故に、神通波羅蜜(多)を具足すること能はず。神通波羅蜜(多)を具足せざれば、檀波羅蜜(多)を具足すること能はず。一佛國より一佛國に至つて諸佛を供養し、諸佛の所に於て善根を種ふ、是の善根を用つて、能く衆生を成就し、佛國土を淨むること能はず」と。佛、須菩提に告げて言はく、「汝が問ふ所の如く、是の諸法相も亦是れ凡夫人なり、亦是れ須陀洹乃至佛なり」と。世尊よ、是の諸法は各々の相、所謂る色相の異、乃至有爲無爲相の異なるに、云何が菩薩摩訶薩は、一相を觀じて分別を作さざるや」と。「須菩提よ、汝が意に於て云何、是の色相は空なりや不や、乃至諸佛の相は(亦)空なりや不や」と。「世尊よ、實に空なり」と。「須菩提よ、空の中に各々の相法は得べきや不や。所謂る色相乃至諸佛相なり」と。須菩提の言さく、「得べからず」と。佛の言はく、「是の因縁を以ての故に、當に知るべし、諸法平等の中には、凡夫人にあらず、亦た凡夫人をも離れず、乃至佛にあらず、亦佛をも離れず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の平等は、是

れ有爲法とやせん、是れ無爲法とやせん」と。佛の言はく、「有爲法にあらず、無爲法にあらず。何となれば、有爲法を離れて無爲法を得べからず、無爲法を離れて有爲法を得べからざるが故なり。須菩提よ、是の有爲性無爲性、是の二法は、合せず散ぜず、色なく形なく、對なく、一相、所謂無相なり。佛も亦た世諦なるを以ての故に説く、第一義を以てするにあらず。何となれば、第一義の中には身行なく、口行なく、意行なく、亦た身口意の行を離れずして第一義を得ればなり。是の諸の有爲法、無爲法の平等相、即ち是れ第一義なり。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜(多)を行する時、第一義の中に動ぜずして、而も菩薩の事を行じ、衆生を饒益す」と。

論

釋して曰く、須菩提は、佛の「實見の者と妄見の者と異なることなし。何となれば、垢淨の見なきが故なり」と答へたまへるを思惟し、思惟し已つて佛に問ふ、實を見る者は無垢無淨にして、不實を見る者も亦不垢不淨なりやと。一切の法性は無所有なるが故に無所有の中には無垢無淨にして、所有の中にも亦無垢無淨なり。斷滅の見ある所なきが故に垢淨あるべからず。所有の中には常見の故に、垢淨あるべからず。所有若し決定して是れ有ならば、則ち因縁より生ぜず、因縁より生ぜざるが故に常なり、常の故に無垢無淨なり。須菩提、佛に白して、「實に見ると、實に見ざるとは、是の義云何」と。佛答へたまはく、「垢淨に別相なしと雖も、諸法の平等を説くべきが故に、是れを名づけて淨となす」と。若し分別して垢淨の相を説かば、是の事は然らず。一切の法は平等なるが故に、我れ説いて淨と名づく。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法實相、如、法性、法住、法位、實際は是れ平等なり。

菩薩は是等の中に入りて、心に憎愛なく。是の法は佛あるも、佛なきも常住にして、作法皆な是れ虚誑なり。是の故に無作法と説き、佛あるも、佛なきも常住なりと説く。聽く者、心に即ち相を取つて是の諸法は平等なりと著す。人の指を以て月を指すに、知らざる者は、ただ其の指を視て月を視ざるが如し。是の故に佛説きたまはく、「諸法平等の相も亦た是の如く皆な世諦なり」と。世諦は實にあらす、但だ事を成辦するが故に説くなり。譬へば、金を以て草と買ふるが如し。知らざる者の言はく、何を以てか貴きを以て賤しきに易ふるやと。答へて曰く、我れ事に用ふべきが故なりと。是の平等は不可説にして、一切の名字、語言、音聲、悉く斷ず。何となれば、諸法平等は是れ無戲論寂滅の相にして、但だ覺觀せる散心の中に語言あるのみなるが故に所説あるなり。須菩提は佛に従つて、諸法平等の相を聞き、其の旨趣を解し、諸の新發意の菩薩の爲めの故に問ふ、「世尊よ、若し一切法は空にして説くべからざること夢の如く、乃至化の如くならば、云何が菩薩は無根本法の中に於て、而も心を生じて、是の願を作すや。〔即ち〕我れ當に檀波羅蜜〔多〕を具足すべし、乃至衆生の爲めに應ずる如く法を説くべし」と。佛は反問を以て答へたまはく、「須菩提よ、布施等、乃至陀羅尼門の説法等、此の諸の法は、幻の如く、夢の如き等にあらずや」と。須菩提言さく、「實に爾なり。是の諸の法は、利益ありと雖も、而も夢の如きの法を出でず」と。須菩提復た問ふ、「世尊よ、夢等の法は、皆な虚妄不實なり。菩薩は實法を求めんが爲めの故に、般若波羅蜜〔多〕を行じて佛道を得。〔然るを〕云何が不實

法を行するや、不實法は檀波羅蜜〔多〕等を行する能はず」と。佛、須菩提の言を可して言はく、「是の如し、是の如し。布施等の法は、皆な是れ思惟し、憶想し、分別して生法を作起す。是の如き法の中に住せば、一切種智を成ずることを得ず、即時に衆中の聽く者、心に懈怠を生ず」と。是の故に佛説きたまはく、「是の一切の法は皆な是れ助道の因縁なり。若し是の法の中に於て邪行謬錯すれば、是を不實と名づく。若し直行して謬らざれば、即ち是れ助道法なり。是の法を助道と爲すが故に、果と爲さず」と。是の布施等は是れ有爲法、道も亦た有爲なり、同相の故に道果を相益する者なり。所謂、諸法は實に無生を出づるなく、一相無相にして寂滅涅槃なり。是の故に、涅槃に於て益あること能はず。譬へば、時雨の能く草木を益して虚空を益せざるが如し。是の故に菩薩は、是の助道法及び道果を知つて、初發心より已來た、所作の善法布施等は、皆な是れ畢竟空にして、夢の如く乃至化の如しと知る。

【三】第九問、若し菩薩、諸法實相を知らば、布施等を行じて何かせん。

問うて曰く、(三)若し菩薩、諸法實相を知らば、何を用つてか布施等を行することをなさんや。答へて曰く、佛は此の中に布施等を具足せざれば、衆生を成就すると能はず、菩薩は、身及び音聲、語言を莊嚴して佛の神通力を得、種種の方便力を以て能く衆生を引導すと説きたまふ。是の故に菩薩は、衆生を成就せんが爲めの故に檀波羅蜜〔多〕を行するも、亦た檀波羅蜜〔多〕を取らず。若くは有、若くは無相も亦た戲論せず、夢の如き等の諸法を直ちに行じ、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。何となれ

ば、般若波羅蜜〔多〕は相を取るべからず、乃至十八不共法も亦た相を取るべからざるが故なり。一切の相の取るべからざるを知り已つて發心し、阿耨多羅三藐三菩提を求めて是の念を作す、「一切は無根本にして相を取るべからず。夢の如く、乃至化の如く、取るべからざるの法を以て、取るべからざるの相法を得ること能はず。但だ衆生は、是の法を知らざるを以ての故に、われ是の衆生の爲めに、阿耨多羅三藐三菩提を求む」と。是の菩薩は、初發心より來た、有所る布施は、一切衆生の爲にす。所謂布施等の諸の善法は、一切衆生の爲の故に修す。自らの身の爲にあらす。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、餘事の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求むるにあらず。但だ一切衆生の爲の故に求むるなり。所以は何となれば、是の菩薩は、衆生を憐愍する心を遠離し、但だ般若波羅蜜〔多〕を行じて、諸法實相を求め、或は邪見の中に墮す。是の人は未だ一切智を得ず、求むる所の一切智の事、心未だ調柔ならざるが故に諸邊に墮し、諸法實相の得難ければなり。是の故に佛説きたまはく、「菩薩は初發心より、衆生を憐愍するが故に、著心漸く薄く、畢竟空、若し空ならば此の過あり、若し不空ならば彼の過あり等と戲論せず。

【四】第一〇問、菩薩の利他的方面のみを説いて、自利的面を説かざる理由如何。

問うて曰く、餘處の菩薩の如きは、自ら利益し、亦衆生を利益す。此の中、何を以てか、但だ衆生を利益することを説いて、自利を説かざるや。自ら利し、人を利せば何の咎ありや。答へて曰く、

と



菩薩の善道を行ずるは一切衆生の爲めにす。此は是れ實義なり。餘處に、自ら利し、亦衆生を利益すと説くは、是れ凡夫人の爲めに是の説を作し、然る後能く菩薩道を行ず。入道の人に下中上あり、下は但だ自度の爲めの故に善法を行じ、中は自らの爲めにし、亦他の爲めにし、上は但だ他人の爲めの故に善法を行ずるなり。

問うて曰く、(二六) 是の事は然らず。下は但だ自ら身の爲めにし、中は但だ衆生の爲めにし、上は自ら利し、亦他人を利す。若し但だ利他のみならば、自ら利すると能はず、云何か上と言はんや。答へて曰く、然らず。世間の法は爾り、自ら供養する者は其の福を得ず、自ら其の身を害するも而も罪を得ず。是を以ての故に、自身の爲めに道を行ずるを名づけて下人となす。一切の世人は、但だ自ら「其の」身を利して、他の爲めにすると能はず。若し自ら身の爲に道を行すれば、是れ則ち斷滅にして、自ら愛著するが爲めの故なり。若し能く自ら己が樂を捨て、但だ一切衆生の爲めの故に善法を行せば、是を上人と名づく、「是れ」一切衆生と異なるが故なり。若し但だ衆生の爲めの故に善法を行せば、衆生は未だ成就せざるも、自利は則ち具足をなす。若し自ら利益し、又衆生の爲めにせば是を雜行と爲す。(二七) 佛道を求むる者に三種あり。一には但だ佛を愛念するが故に自ら己身成佛をなし、二には己身のためにし、亦衆生のためにし、三には但

【二五】 入道の人に上中下あり。  
【二六】 第一一問、若し但だ利他のみならば自らを利する能はず、云何が上の人といはん。  
【二七】 三種の求道者——(一)但自ら成佛の爲にし、(二)自他の成佛の爲にし、(三)但だ他の成佛の爲にす。

だ衆生の爲めにす。是の人清淨に道を行じ、我顛倒を破するが故に、是の菩薩は般若波羅蜜(多)を行する時、衆生なく、乃至知者見者なし。是の中に安住して衆生を拔出するに、甘露性の中に於てす。甘露性とは、所謂一切助道法なり。何となれば是の法を行じて、涅槃に至るを得るが故なり。涅槃を甘露と名づけ、是の甘露性の中に住すれば、我等の妄想復た生ぜず。是の菩薩自ら無所著を得、亦た衆生をして無所著を得せしむ。是を第一利益衆生と名づく。

問うて曰く、(二)上には但た衆生を利益するが爲めの故に道を行すと説けり。今何を以ての故に自ら無所著を得、衆生をして無所著を得せしむるや。答へて曰く、已むことを得ざるが故なり。若し自ら智慧なくんば、何を能く人を利せん。是を以ての故に、先づ自ら無所著を得て、然る後に、人をして得せしめ、若くは是の功德を他に與ふることを得べし。如し財物なれば、諸佛大菩薩は、所有の功德、皆な他に與へ、乃至調達の怨賊にも皆な之れを與ふべく、然る後、更に自ら功德を修集すべし。但だ是の事のみならず、我が作にして而も他は得べからず。是れ亦た世俗の説にして、第一義にあらす。何となれば、第一義の中には衆生なく、一もなく異もなく、等しく諸法の相を分別するが故なり。此の中に亦所著の處なしと説く。

【二】第一二問、自ら無所著を得て、衆生をして無所著を得せしむる理由如何。

復次に、先に説くが如く、相の説く可からざるは是れ第一義なり。此の中に説くべきが故に世俗な

り。爾の時に須菩提、佛に問ふ、「道場に於て得る所の法は、世諦を用つての故に得と爲すや、第一義諦を用ふると爲すや」と。須菩提の意へらく、「若し世諦を以ての故に得ば、即ち是れ虚妄不實なり。若し第一義を以ての故に得ば、第一義の中には得ることなく、得る者なく、説くべからず、受くべからず」と。佛答へたまはく、「世俗の語言を以ての故に、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得と説く。是の中に得る者なく、得法あることなし。何となれば、若し是の人、是の法を得ば即ち是れ二法なり。二法の中には道もなく、果もなし。二法とは是れ菩薩、是れ得阿耨多羅三藐三菩提なり。是の如きの二法は皆な是れ世諦なるが故に有り、若し二ならば、佛法何ぞ虚妄ならざるを得ん。若し人ありて第一義を得ず、但だ二法を以て諸法を分別せば、是れ則ち虚妄なり。諸佛大菩薩は、第一義を得るが故に、衆生を度せんが爲めに、第一義を得せしむ。諸法を分別すと雖も、是れ虚妄にはあらざるなり。須菩提復た問ふ、「世尊よ、若し二法を用つて道なく、果なくんば、今不二の法を以ての故に、道あり果ありや」と。佛答へたまはく、「二法(を用つても)、道なく果なく、不二の法(を用つても)亦道なく果なし」と。

問うて曰く、(二也) 餘處には、二法は是れ凡夫の法、不二の法は是れ賢聖の法なりと説く。毗摩羅詰經の不二入法門の中に説くが如し。答へて曰く、不二入は是れ眞實の聖法なり。或は新發意の菩薩ありて、未だ諸法實相を得ざる者は、是の不二の法を聞いて相を取り著を生ず。是の故に、或は不二の法

【一九】 第一三問、餘處には、二法は凡夫の法、不二の法は賢聖の法と説くにあらずや。

を稱讚し、或時は毀訾す。又佛は是の二邊を遮して中道を説く。所謂、非二、非不二なり。二法各各別の相なる不二を一相空と名づく。是の一相空を以て、各各別異の相を破す、破し已つて事訖れば、還た不二の相を捨つ。是れ即ち是れ道なり、是れ果なり。何となれば、諸の賢聖は、無二の法を讚歎すと雖も著せざるが故に、是の法を用つて道を得果を得、是の法を用つては道なく果なし。即ち是れ戲論無戲論、是れ平等法なり。須菩提佛に白して言さく、「若し諸法は無所有性ならば、何等か是れ平等なるや」と。佛答へたまはく、「若し有性無性を離るれば、假りに名づけて平等となす。若し菩薩、一切法有を説かざれば、一切法性を説かず、一切法相等を説かず、顯示して亦た、無法、無法性、無法相等を説かず、顯示して亦た是の二邊を離れて、更に平等の相ありと説かず、一切處に平等の相を取らず、亦た是の平等なしと言ふを憂へず、諸の善法を妨げざれば、是を諸法平等と名づく。復次に、諸法平等とは、所謂一切法を出過するなり。問うて曰く、(三〇)先には處處に、諸法は即ち是れ平等の相なり、平等は即ち諸法の實なり。名異にして義同じ、色如は色に非ず、色を離るるにあらざると説き、今何を以てか平等を出過すと説くや。答へて曰く、(三一)一切法に二種あり、一には色等の諸法の體、二には色等の法の中の行是れなり。凡夫は邪行、賢聖は正行なり。此の中には、平等を説いて、凡夫行の中を出でて色等の中を出づと言はず。

【三〇】 第一四問、先に諸法は即ち平等の相、平等は即ち諸法の實、名異にして義同じと説けり、今それ平等は一切法を出過すと説くは何故なるか。

【三一】 一切法に二種あり。

また次に平等は、能く行ずることなく、能く到ることなし。是に於て須菩提は驚いて佛に問ふも、亦た行ずること能はず、到ること能はず。須菩提の謂へらく、「是の法は甚深微妙にして、行じ難しと雖も、是の事は佛、應に得べし」と。佛答へたまはく、「須陀洹より乃ち佛に至るまで、皆な能く行ずることなく、能く到ることなし」と。佛意へらく、「三世十方の佛も、能く行ずること能はず、能く到ること能はず、何に況や一佛平等の性自ら爾るをや」と。故に須菩提復た問ふ、「佛は一切法の中に於て、行力自在なり。佛の無礙の智慧は、處として到らざるとなし、云何が能く行ずること能はず、能く到ること能はずと言ふや」と。佛答へたまはく、「若し佛と平等と異ならば、應に是の難あるべし、何を以てか、行ずる能はず到る能はざらんと。今凡夫の平等、須陀洹の平等、佛の平等〔等〕は皆な一平等にして二なく分別なし。是の凡夫より乃ち佛に至るまで、自性は自性の中に行ずると能はず、自性の中に行ずると能はず。自性は他性の中に行ずべし。是の故に佛説きたまはく、「若し佛と平等と異ならば、佛は平等を行すべし。但だ佛は即ち是れ平等なるが故に、行せず到らず。何となれば、智慧の少きを以てにあらざるが故なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「若し平等にして、凡夫より佛に至るまで、異なることを得べからずんば、今凡夫と聖人とは、差別あるべからず」と。佛、須菩提の問を可し〔て宣はく〕、「平等の中には差別なし。世諦の故に、凡夫法の中に差別あり」と。復た問ふ、「若し凡夫より乃ち佛に至るまで、差別あることなくんば、云何が三寶世間に現れ、大に衆生

を利益するや」と。佛答へたまはく、「平等は即ち是れ法寶なり、法寶は即ち是れ佛寶なり、僧寶なり。何となれば、未だ法を得ざる時は、名づけて佛と爲さず。平等法を得るが故に名づけて佛と爲すが故なり。是の平等法を得るが故に、分別して須陀洹等の差別あるなり」と。須菩提、佛の教を受け、是の法は皆な合なく散なく、色なく形なく、對なく一相、所謂無相なり。佛是の力ありと雖も、而も尙ほ空無相の中に於て、是れ凡夫、是れ聖人と分別するや」と問ふ。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。若し諸佛、是の法を分別せずんば、云何が當に地獄乃至、十八不共法ありと知るべけんや」と。

問うて曰く、(三) 諸法は日出の如く、高きものを下くし、下き者を高からしむること能はず。但だ能く萬物を照明して、眼ある者をして識別せしむ。諸佛も亦た是の如く、諸法の相を轉せず、但だ一切智を以て照し、人の爲めに演説して知らしむ。汝何を以てか、若し佛諸法を分別せずんば、云何が地獄乃至、十八不共法あることを知らんと言ふや。今畜生等は、現に目の見る所、人皆な識知するが如し。何を佛説を須たんや。答へて曰く、佛は好醜を作らずと雖も、而も諸事を演説して人に示す。(三) 知に二種あり、一には凡夫の虚妄知、二には如實知なり。畜生等の相は、是れ凡夫の虚妄知なり。佛は實相を知ると爲

【三】 第一五問、諸佛は諸法を轉ぜず、但一切智を以て照し、人の爲に演説す。汝今何を以てか、若し佛諸法を分別せずんば、云何が地獄乃至十八不共法あることを知らんと言ふや。畜生等は現に人の眼に見る所、何ぞ佛の説を須たんや。

【三】 二種の知——(一) 凡夫の虚妄知、(二) 如實知。

すが故に、佛諸法を分別せずんば、云何が地獄等あることを知ると言はん。

復次に、諸佛の法は寂滅の相にして無戲論なり。此の中に、若し地獄等の相ありと分別せば、名づ

けて寂滅不二無戲論の法と爲さず。佛は寂滅不二の相を知ると雖も、亦た能く寂滅の相の中に於て、

諸法を分別して而も戲論に墮せず。諸法實相を離るる者は、眼に畜生等を見ると雖も、亦た能く實の

如く、其の相を知ること能はず。牛の角、足、尾等の諸分邊和合して、更に牛法の生することあるが

如し。是を一となさば、諸の分は多なり。牛法は一なり、一は多を作さず、多は一を作さず。有人の

言はく、「此の説は非なり、此の諸の分を除いて更に牛法あるべく、力用見るべし」と。牛法は、衆分

和合して生じ、而も牛法は衆分に異らず。何となれば、此の衆分合するを見るが故に、名づけて牛を

見ると爲す。更に餘物の牛と爲ると見ず。異は一を破し、一は異を破し、不一不異は一異を破す。若

し一異なくんば、云何が不一不異あらん。若し是の諸法平等の中に入らば、爾の時、始めて實の如く

牛相を得。是の故に言はく、「若し佛諸法の相を分別せず、二諦を説かすんば、云何が善く畜生等を

説かん」と。所謂平等に於て動せずして、而も諸法を分別す。動せずとは、諸法を分別する時、一異

の相に著せざるなり。須菩提、佛に白して言さく、「佛の諸法等の中に於て、動せざるが如く、辟

支佛乃至凡夫も、諸法等の中に於て亦動せず。何となれば諸佛は平等相にして、乃至凡夫も亦平等

相なればなり。世尊よ、若し爾れば、佛は云何が諸法是れ色異、色性異、受性異、乃至有爲無爲

性異と分別するや。若し諸法を分別せざれば、菩薩は般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、一地より一地に至り、乃至、佛國土を淨むることを得ざらん」と。佛答へたまはく、「汝が意に於て云何、色等の相を推尋するに、是れ空と爲すや不や」と。「世尊よ、實に爾なり、空なり」と。「空の中に異法ありや不や」と。答ふ。「不なり。何となれば、是の畢竟空は、無相の智慧を以て解すべきが故に、是の中に云何が異相あらん」と。佛、須菩提に語りたまはく、「若し空の中に異相なくんば、空便ち是れ實なり。是の故に汝云何が、空の中に於て諸法を分別して是の難を爲すや。畢竟空の中には、空も亦不可得なり、各各の相も亦た不可得なり。汝云何が空と各各の相を以て難を爲すや。是の因縁を以ての故に當に知るべし、諸法平等の中に分別なきが故に凡夫人なし、但だ凡夫人は實相にあらず、實相を離れず、凡夫の實相即ち是れ聖人の相なることを。是の故に不と言ふ」と。但だ凡夫は凡夫を離れず、乃至佛も亦た是の如し。須菩提は、平等の相を以て大に利益し、平等の定相を知らんと欲す。是の故に問ふ、「是れ有爲とやせん、是れ無爲とやせん」と。佛答へたまはく、「有爲にあらず、無爲にあらず。何となれば、若し有爲ならば、皆是れ虚誑の作法なり、若し無爲ならば、無爲法は生住滅なきが故に無法なり、無法なるが故に無爲の名を得ず、有爲に因るが故に無爲ありと爲せばなり。經の中に説くが如し。有爲無爲を離るれば不可得なり、長を離れて短なきが如し、是れ相待の義なり。



問うて曰く、<sup>(四)</sup>有爲法は是れ無常、無爲法は是れ常なり。云何が、有爲は無爲を離るることを得べからずと言ふや。答へて曰く、無爲法は無分別の故に無相なり。若し常相を説かば、無相と言ふことを得ず。有爲法を破するが故に無爲と名づく、更に異なきなり。人の牢獄に閉在し、墻を穿つて出づることを得。壁を破するは是れ空なり、更に異なる空なきが如し。空も亦た因縁より生ぜず、無爲法も亦た是の如し。有爲法の中に、先づ無爲の性あつて有爲を破す、即ち是れ無爲なり。是の故に有爲は無爲を離れては得べからずと説く。是の有爲無爲性は、皆な合せず散せず、一相所謂無相なり。佛は世諦を以ての故に是の事を説く、第一義にははあらず。何を以ての故に佛自ら因縁を説きたまふなや。第一義の中には身口意行なきが故なり。有爲無爲法は平等なり、即ち是れ第一義なり。是の有爲無爲法の平等を觀すれば亦一相に著せず。菩薩は第一義の中に於て、動せずして衆生を利益す、方便力の故に、種種の因縁もて衆生の爲めに説法するなり。

【四】 第一六問、有爲法は無常、無爲法は常なり。云何が有爲法は無爲を離るることを得ずと言ふか。

# 卷の第九十六

## 涅槃如化品第八十七を釋す。

經

須菩提、佛に白して言さく、世尊よ、若し諸法平等にして、爲作する所なくんば、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜(多)を行じ、平等の中に於て、動ぜずして、而も菩薩事を行じ、布施、愛語、利益、同事を以てせんしと。佛、須菩提に告げて言はく、「是の如し是の如し。汝が説く所の如し。是の諸法は平等にして所作なし。若し是の衆生、自ら諸法の平等なることを知らば、佛は神力を用ゐずして、諸法平等の中に於て、動ぜずして而も衆生の吾我の相を拔出す。空を以て五道の生死、乃至知者見者の相を度し、色相、乃至識相、眼相、乃至意相、地種相、乃至識種相を度し、有爲性相を遠離して、無爲性相を得せしむ。無爲性相は、即ち是れ空なり」と。須菩提の言さく、「世尊よ、何等の空を用つての故に、一切の法は空なる」と。佛の言はく、「菩薩は、一切の法相を遠離す。是の空を用つての故に、一切法は空なり。須菩提よ、汝が意に於て如何、若し化人あつて、化人を作らば、是の化は隨し實事にして空ならざる者ありやなしと。須菩提言さく、「不なり、世尊よ。是の化人は、實事あつて空ならざることなし。是の空及び化人の二事は合せず散ぜず、空も空なるを以ての故に空なり。是れ空、是れ化なりと分別すべからず。何となれば、是の二事は等しく空の中に得べからず。所謂る是れ空なり、是れ化なればなり。所以は何んとなれば、須菩提よ、色は即ち是れ化なり、受想行識は即ち是れ化なり、乃至一切種智も、

【一】此の品には、前品の諸法平等に就て、化の如しとして説明せり。他本には品名を「如化品」に作る。

即ち是れ化なればなり。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し世間法は是れ化ならば、出世間法も亦た復た化なりや不  
や。所謂の四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脱門、佛の十方、四無所畏、四無礙智、十八不共法、並  
に諸法の果、及び賢聖人、所謂の須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛なり。世尊よ、是の法も亦た化  
なりや不や」と。佛、須菩提に告げて言はく、「一切の法は皆な是れ化なり。是の法の中に於いて、聲聞法の變化あり、辟支  
佛法の變化あり、菩薩摩訶薩法の變化あり、諸佛法の變化あり、煩惱法の變化あり、業因緣法の變化あり。是の因緣を以つ  
ての故に、須菩提よ、一切法は皆な是れ化なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の諸の煩惱斷なる、所謂の  
須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道の、諸の煩惱の習を斷する、皆な是れ變化なりや不や」と。佛、須菩  
提に告げて言はく、「若し法に生滅の相あらば、皆な是れ變化なり」と。須菩提の言さく、「世尊よ、何等の法をか變化にあ  
すと爲す」と。佛の言はく、「若し法にして生なく滅なければ、是れ變化にあらず」と。須菩提の言さく、「何等をか是れ不生  
不滅にして變化にあらずと爲す」と。佛の言はく、「無誑相の涅槃、是の法は變化にあらず」と。「世尊よ、佛の自ら説きたま  
ふが如き諸法平等は、聲聞の作にあらず、辟支佛の作にあらず、諸の菩薩摩訶薩の作にあらず、諸佛の作にあらず。有佛にも  
無佛にも諸法の性は、常に空にして性空、即ち是れ涅槃なり。云何が涅槃の一法を化の如くにあらずと云ふや」と。佛、須菩  
提に告げて言はく、「是の如し、是の如し。諸法の平等は、聲聞の所作にあらず、乃至性空は即ち是れ涅槃なり。若し新發意  
の菩薩、是の一切法皆な畢竟して性空なり、乃至涅槃も亦た皆な化の如しと聞かば、心則ち驚怖せん。是の新發意の菩  
薩の爲の故に、分別して、生滅は化の如く、不生不滅は、化の如くならず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云  
何が、新發意の菩薩を教へて、性空なることを知らしめんと。佛、須菩提に告げて言はく、「諸法は本有りて、今無き  
や」と。

論

問うて曰く、三の事は、佛、先きに已に答へたまへり。須菩提は今何を以てか更に問へるや。所謂、「世尊よ、若し諸法平等にして作爲する所なくんば、云何が菩薩は諸法平等の中に於て、動せ

ずして大に衆生を利益するや」と。答へて曰く、是の事は解し難きを以て

の故に、先きに説くと雖も而も更に問ふなり。又經に將に訖らんとして、

佛深空を説きたまふも、凡夫聖人の行する能はざる所、到る能はざる所

なり。是の故に須菩提は、一切法の平等相、定相を知つて、而も云何が

菩薩は、是の中に住して、而も能く衆生を利益するや。平等法は無作相に

して、是の有作相を利益するや〔を問へり〕。佛、須菩提の意を可し、須菩

提の問うて而も答ふるを以て、其の平等の答を可す。其れ衆生を利益する

は、所謂若し衆生自ら諸法の平等、畢竟空を知らば、佛に恩力なし、

病人自ら將に適するを知れば、則ち藥師に功なきが若し。須菩提復た問

ふ、若し諸法の實相畢竟空にして、能く作す所なくんば、菩薩は何を以て

か是の中に住して而も衆生を利益するや、若し菩薩、是の平等を用つて衆生を利益せば、即ち實相を

壞せんと。佛答へたまはく、菩薩は諸法實相を以て衆生を利益せず。但衆生は畢竟空を知らざるが故

に、菩薩は教詔して知らしむるなり。菩薩の衆生を教化する、是を對治悉檀と爲す。須菩提は第一

【一】 第一問、此の事は佛已に説き給へり、今それ須菩提が更に問へる理由如何。  
【二】 對治悉檀。四悉檀の一、常見を破する爲めに空教を説き、斷見を破する爲めに有門を説く如く、彼此の執を對治するが爲めに、種種の法を説き、以て破鈿の益を成するをいふ。悉檀とは成就の意也。  
【四】 第一義悉檀。四悉檀の一、實中道の理を説いて衆生をして斷惡證理せしむる佛の善巧をいふ。

一義悉檀の利益なきを以て難と爲す。佛答へたまはく、衆生は顛倒して知らず、佛は但だ其の顛倒を破して、是を實と言はず。是の故に菩薩は、是の平等相の中に住して、我相、乃至知者見者相を遠離す、是を衆生空と名づく。是を以て一切吾法の、衆生を教化することなし。衆生に二種あり、一には愛多、二には見多なり。愛多の者は、是の無我の法を得れば、則ち厭心を生じ、欲を離れて是の念をなす、「若し無我ならば何ぞ餘物を用るん」と。見多の者は、無我法を知ると雖も、色等の法の中に於て、若くは常、若くは無常等を戲論す。是の故に次に色相、五衆、十二入、十八界を説き、乃至有爲の性相を遠離して無爲の性相を得せしむ。

無爲の性相は即ち是れ空なり、是れを法空と名づく。

問うて曰く、須菩提は何を以てか是の間を作すや、又何等の空を用つての故に一切法は空なるや。答へて曰く、空に種種あり、火中に水なく、水中に火なきが如きも亦是れ空なり、五衆の中に我なきも亦た是の如し、或は衆生空あり、或は法空あり。法空の中に、或は有人の言はく、「諸法は空なりと雖も亦盡く空ならず。色空の中に微塵の根本在ることあるが如し」と。是の故に須菩提問ふ、「何等の空を以ての故に一切法は空なるや」と。佛答へたまはく、「無所得にして畢竟空なるを以ての故に、一切の相を遠離す」と。是の故に、是の中には衆生空と法空とを説けり。是の二空なるが故に、一切法は空ならざることなし。

- 【五】 二種の衆生——(一)愛多、(二)見多。
- 【六】 法空の義解。
- 【七】 第二問、一切法の空なる理由如何。
- 【八】 空に種種あり。

問うて曰く、若し爾らば、此の中に何を以てか、一切の法は相を離ると説くや。答へて曰く、一切の法は盡く壞すべからず、但其の邪憶想を離るれば、一切法は自ら離るるなり。神通人の如きは、色相を壞するが故に、則ち石壁も礙ふることなし。佛の説きたまへるが如し、「汝等當に五衆の中に於て、正憶念を修して貪欲を斷じ、正解脱を得べきが故に離相を説く」と。須菩提は是を聞き已つて心に驚き、云何が一切の法、若くは大、若くは小、都て本實なく、凡夫人は虚妄にして、實事なかるべく、聖人は少許りの實あるべしと。須菩提は是れ阿羅漢にして、深く佛法を貴ぶと雖も、亦新發意の菩薩の爲めの故に問へり。佛、須菩提の意を知り、是の事を明了ならしめんと欲するが故に、譬喩を説いて、反つて須菩提に問ひたまふ、「汝が意に於いては云何、化人の復化を作すが如く、是の化は本實あつて空ならざるや不や」と。答へて言さく、「不なり。是の化は實事あるとなきも、而も空ならざれば、空及び化人の二事合せず散せず、皆空の故に空なり、空空を用つての故に空なり」と。

問うて曰く、何を以てか空空の故に、名づけて空となすや。答へて曰く、十八事實を破せんが爲めの故に十八空あり。衆生の心中に變化する空法を破するが故に空空を用ふ。世間の人は皆な幻化の法は久しく住せずして能く作す所なきを知るが故に空と名く。是の故に空空の故に空なりと言ふ。是れ空にして、是れ化なりと分別すべからず。

(一) 凡夫の人は、變化は是れ空にして實ならずと知るも、

【九】 第三問、一切の法は相を離ると説く理由如何。

【一〇】 第四問、空空の故に名けて空と爲す理由如何。

【一一】 化を以て譬となす所以。

餘法を實と爲すと謂へり。是の故に化を以て喩と爲す。當に知るべし、餘法と化と異なることなきことを。聖人の解する所の如くんば、化を以て喩と爲すを得ず、分別する所なきを以ての故なり。一切法を名づけて五衆となす。佛の言はく、「色受想行識は、是れ化ならざることなし。」何となれば、色受想行識は是れ空なるを以ての故なり」と。須菩提、佛に白して言はく、「世尊よ、凡夫の法は虚妄にして化の如くなるべし。出世間法も亦た變化の如くなるや。所謂る四念處、乃至十八不共法、若くは四念處法等は、因縁邊より生ずるが故に化の如し。是の法果は所謂る涅槃なり。〔是の涅槃も〕亦た復た化の如くなるや。若し能く是の行を起す者、所謂る須陀洹、乃至佛も亦た復た化の如くなるや」と。佛の答へたまはく、「若くは有爲、若くは無爲、及び諸の賢聖は皆な是れ化なり。〔そは〕畢竟空なるが故なり。是の義は、初めより已來、處處に廣く説く所、是の故に一切法は空にして皆な化の如しと言ふ。

問うて曰く、(三) 若し一切法皆空にして化の如くならば、何を以ての故に種種諸法の別異ありや。答へて曰く、佛の所化、及び餘人の所化は、實ならずと雖も、而も種種形像の別異あるが如し。夢中に見の種種〔の形像〕も亦た是の如し。人の夢中に好惡の事を見て、喜を生ずる者あり、怖を生ずる者あり。鏡中の像の如く、實事なしと雖も、而も本の形像に隨つて好醜あり。諸法も亦た是の如く、空なりと雖も、而も各々に因縁あると、佛の此の中に説きたまへるが如し。是の化法の中には、聲聞の變

【三】第五問、若し一切法空にして化の如くならば、諸法に種種の別異ある理由如何。

化あり、辟支佛の變化あり、菩薩の變化あり、佛の變化あり、煩惱の變化あり、業の變化あり。是の故に一切法は皆な是れ變化なり。(三) 聲聞の變化とは、三十七品、四聖諦、乃至三解脫門なり。何となれば、聲聞の人は、持戒の中に住し、禪定攝心して涅槃を求め、内外身の不淨を觀ず、是を身念處と名づく。是等の如き法を涅槃と爲すが故なり。勤めて精進して、是の法を起さば、本無うして而も今あり、已に有つて還た無なり、是を聲聞變化と爲す。(四) 辟支佛の變化とは、所謂十二因緣等の諸法を觀するなり。所以は何んとなれば、辟支佛の智慧は聲聞の人より深きが故なり。(五) 菩薩の變化とは、所謂六波羅蜜(多)及び二種の神通、報得及び修得なり。(六) 佛の變化とは、三十二相、八十隨形好、十力、一切種智等の無量の佛法なり。(七) 煩惱の變化とは、煩惱は種種の業を起す、善不善無記業、畢定業、不畢定業、善不善無動業等の無量の諸業[等]なり。

問うて曰く、(一) 諸の煩惱は是れ惡法なり、云何が能く善業無動業を生ずるや。答へて曰く、(二) 二種の因あり、一には近因、二には遠因なり。人に我心ありて、後身の富樂

の爲めの故に、布施を修するは是れ近因なり。欲界の衰惱不淨身を離れんが爲めの故に、禪定を修するは是を遠因と爲す。復た有人は言ふ、「一切の凡夫は皆な我心の和合を以ての故に業を起す」と。有

- 【三】 聲聞の變化の義解。
- 【四】 辟支佛の變化の義解。
- 【五】 菩薩の變化の義解。
- 【六】 佛の變化の義解。
- 【七】 煩惱の變化の義解。
- 【八】 第六問、諸の煩惱は是れ惡法なり、云何が能く善業無動業を生ずるや。
- 【九】 二種の因——(一)近因、(二)遠因。



人は言ふ、「我心を離るれば、第六識を起すことあるとなし、我心に住するが故に、第六識を起すなり、我心は即ち是れ諸の煩惱の根本なり」と。

問うて曰く、(二〇) 煩惱は是れ垢心、善心は是れ淨心なり。垢淨は和合することを得ず、何を以てか我心の中に住して能く善業を起すと云ふや。答へて曰く、爾らず。一切の心は皆な慧と俱に生ずるが故に、無明心の中にも亦た慧あるべし。慧と無明とは相違の法なり、而も一心の中に淨を起す、垢も亦た是の如し。凡夫は未だ聖道を得ず、云何が能く我心を離るるとを得て、而も善を行せんや。曠等の煩惱の中には則ち善を行するとを得ず。「そは」我心は無起柔軟なるが故なり。是の故に煩惱心の中に善業、無動業、無咎業を生ずるなり。變化とは、一切果報を生ずるの法、所謂六道なり。(二一) 惡業の果報は是れ三惡道、善業の果報は是れ三善道なり。惡業に上中下あり、上とは地獄、中とは畜生、下とは餓鬼なり。善業にも亦た上中下あり、上とは天、中とは人、下とは阿修羅等なり。上善業に種種輕重等の分別あり、上惡業にも亦た輕重の差別あり。其の次第輕重は、地獄の中に説くが如し。餘道は亦た分別業品の中に説くが如し。

問うて曰く、(二三) 若し業に従つて「果報」あらば、何を以てか變化と言ふや。答へて曰く、凡夫の人は

【二〇】 第七問、煩惱は是れ垢心にして、善心は是れ淨心なり。

垢と淨とは和合するを得ず、何を以てか我心の中に住して能く善業を起すといふや。

【二一】 善道惡道、善惡業に各上中下あり。

【二三】 第八問、若し業に従つて果報あらば、云何が變化といふや。

諸法を見ること化の如くならず、聖人は畢竟空の相を知るが故に、天眼を以て衆生を見るに、皆な始終、中間あつて、化主の遠處に之れを作るが如し。變化業も亦是の如く、過去世の中にあつて作すなり。今身の變化は、變化の事の如く、能く種種に人をして憂喜怖畏を生ぜしむ。智者は之れを見るに皆な實あることなし。而も人の横ままに憂喜を生ず、是の人笑ふべし。業も亦た是の如し、是の故に業變化を説く。

問うて曰く、是の諸の變化は、皆な業の所作なれば、何を以てか但だ業變化のみを説かざるや。答へて曰く、(一)業に二種あり、淨業と垢業となり。淨業とは、聲聞の變化、乃至佛の變化なり。垢業とは、是れ凡夫の變化なり。

復次に、二種の業あり、(二)凡夫の業と聖人の業となり。凡夫の業は是れ煩惱の變化にして、聖人の業は須陀洹乃至佛なり。是の故に、皆な是れ業變化なりと雖も、而も廣く分別するに咎なし。是の故に、須菩提よ、當に知るべし、一切の法は空にして、皆な化の如くなることをと。須菩提復た問うて言はく、「世尊よ、是の諸の聖人は煩惱を斷ず所謂須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道(等)は一切煩惱の習を斷ず。是の諸斷皆な化の如くなるや不

や」と。須菩提意へらく、有爲法は虚誑なるが故に變化の如く、無爲法は眞實無作の故に、是れ化なる

【三】 第九問、諸の變化は皆業の所作ならば、何を以てか但だ業變化のみを説かざるや。  
 【四】 二種の業——(一)淨業、(二)垢業。  
 【五】 二種の業——(一)凡夫の業、(二)聖人の業。

べからずと。是の故に問へり。佛答へたまはく、「一切法は若くは生じ、若くは滅して、皆化の如し。何となれば本無今有、今有後無にして、人心を誑惑するが故なり」と。佛意ひたまはく、一切は因縁より生ずる法にして皆な自性なく、自性なきが故に畢竟空なり、畢竟空なるが故に皆な化の如しと。須菩提は諸法實相を求むるの意猶ほ息まざるが故に佛に問ふ、「何等の法か化の如くならざるや」と。須菩提意に謂へらく、「一決定の實法ありて他の如くならず、是の法に依つて而も精進すべし」と。佛答へたまはく、「若し法あつて、無生無滅ならば即ち是れ化にあらず。何となれば、是れ所謂の無誑相涅槃なるが故なり。是の法は無生の故に無滅なり、無滅の故に人をして憂を生せしむること能はず。佛は、一切の有爲法は畢竟空にして皆な化の如し、唯だ涅槃の一法のみあつて化の如くにあらずと分別したまへり。爾の時に須菩提佛に白して言さく、「佛の説きたまふが如くんば、平等法は佛の所作にあらず、聲聞辟支佛の所作にあらず。有佛にも無佛にも諸法は常住にして性空の相なり。性空の相は即ち是れ涅槃なり」と。須菩提意に謂へらく、「深く般若波羅蜜(多)の中に入れて、涅槃も亦空なると、上品の中に處處に説く〔が如し〕。今佛は何を以てか、唯だ一の涅槃のみ、化の如くにあらずと説くや」と。是の故に佛の語を引いて難を爲す、「諸法の實相は性空、法は常住なれども、諸佛は但人の爲に演説す。性空とは即ち是れ涅槃なり。今何を以てか生滅の法の中に於て、別して無誑相涅槃は化の如くならずと説くや」と。佛答へたまはく、「諸法は平等常住にして賢聖の所作に非ず」と。若し新

學の菩薩、是を聞かば則ち恐怖す。是の故に分別して、生滅は化の如く、不生滅は化の如くにあらすと説くなり。

問うて曰く、(二六) 唯だ佛一人のみ是れ無誑の人なり。一切の人は皆な佛の所に於て實事を求めんと欲す。今佛は何を以てか、一切法は都て空なりと説き、或は都て空ならずと説くや。答へて曰く、佛は此の中に自ら因縁を説き、新發意の菩薩のため

の故に涅槃は化の如くならずと説きたまふなり。  
問うて曰く、(二七) 人の爲の故に諸法の相を轉すべきや。答へて曰く、此の中に佛説きたまはく、「諸法の相は性空なり、性空ならば云何が轉すべき」と。  
佛初て是の諸法實相を得る時、心但だ涅槃寂滅に趣向す。是の時、十方の諸佛諸天は、佛の涅槃に入りたまふこと莫く、一切衆生の苦惱、當に度脱すべしと請ふ。佛即ち請を受く。佛は但だ衆生を度せんが爲の故に住

す。是の故に知んぬ、利益すべき衆生あれば事に隨つて爲に説くと。諸の有爲法の虚誑なるを觀するが故に、涅槃は實に不變不異となす。(二八) 新發意の菩薩あり、是の涅槃に著するや、是の著に因つて諸の煩惱を起す、是の著を斷せんが爲の故に、涅槃は化の如しと説き、若し著心無くんば是の時は即ち涅槃は化の如くにあらずと説かん。

【二六】 第一〇問、唯佛のみは無誑の人なり。然るに佛が或は都て空なりと説き、又は都て空ならずと説き給へる理由如何。

【二七】 第一一問、人の爲の故に諸法の相を轉すべきや如何。

【二八】 新發意の菩薩、涅槃に著すれば、則ち涅槃は化の如しと説き、著せざれば、則ち化の如くならずと説く。

復次に、(二) 二道あり、一には小乗道、二には大乘道なり。小乗の論議は涅槃を以て實となし、大乘の論議は利智慧を以て深く入るが故に、色等の諸法を觀て皆な涅槃の如くなりとす。是の故に二説は各なきなり。須菩提復た問ふ、「云何が新發意の菩薩を教化して平等性空を知らしむるや」と。須菩提意に謂へらく、「性空の法は是れ凡夫人の大に怖畏するところにして、性空無所有を聞くや深坑に臨むが如し。何となれば、一切の未だ道を得ざる者は、我心に深く著する所あるが故なり。是の故に空法を怖畏して是の念をなす、「佛は人を教へて善行を勤修せしめ、終に歸して無所有の中に入らしむ」と。是を以つての故に、須菩提は「何の方便を以てか是の新發意の者を教誨せんや」と問ふ。佛答へたまはく、「諸法は先有にして今無なりや」と。佛は意に、新發意の者の、後に當に無なるべきを怖畏するを以ての故に、諸法は先に有りて今無きやと問ひたまふなり。須菩提は自ら了了に、諸法の先にも自ら無く今も亦た無きことを知るも、但だ新學の者の、我見を以て心を覆ふが故に驚怖を生じ、顛倒を除いて實見を得せしめんが爲の故に、竟に失ふ所なく、諸の煩惱顛倒の實相所謂性空を知るなり。是の時は則ち恐怖なし。是の如き等の法は、新發意の者を教ふべし。若し法先にありしも、道を行するが故に無かりせば、應當に恐怖すべし。初めよりなきが故に恐怖すべからず、但だ顛倒を除かんがためのみ。

【二】二道——(一)小乗道、(二)大乘道。

薩陀波崙品第八十八の上を釋す。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を求め、當に薩陀波崙菩薩摩訶薩、是の菩薩の今大雷音佛の所にありて菩薩道を行ずるが如くすべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、薩陀波崙菩薩は云何が般若波羅蜜を求むるや」と。佛の言はく、「薩陀波崙菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を求むるに、身命を惜まず、名利を求めず、空閑林の中に於て、空中の聲を聞く。言はく、汝善男子よ、是れより東に行き、疲極を念すること莫れ、睡眠を念すること莫れ、飲食を念すること莫れ、晝夜を念すること莫れ、寒熱を念すること莫れ、内外を念すること莫れ。善男子よ、行く時左右を觀ること莫れ、汝行く時に身相を壞すること莫れ、色相を壞すること莫れ、受想行識を壞すること莫れ。

何となれば、若し是の諸相を壞すれば則ち佛法に於て癡ありと爲す。若し佛法に於て癡あれば、便ち五道生死の中に往來し、亦般若波羅蜜を得ること能はざればなり。爾の時

に、薩陀波崙菩薩、空中の聲に報へて言はく、我れ當に教に従ふべし。何となれば、我れ一切衆生のために大明たらんと欲し、一切諸佛の法を集めんと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲するが故なり。薩陀波崙菩薩は復た空中の聲を聞く、言はく、善哉、善哉、善男子よ。汝、空無相無作の法に於て、汝信心を生ずべし。相を離るるの心を以て般若波羅蜜を求め、我相を離れ、乃至知者、見者相を離るべし。當に惡知識を遠離すべし。當に善知識に親近し供養すべし。何等をか是れ善知識となすや。能く空、無相無作、無生無滅の法、及び一切種智を説いて、人の心をして歡喜し信樂に入らしむ、是れ善知識となす。善男子よ、汝若し是の如く行ざば、久しからずして當に般若波羅蜜を聞くべし。若くは經卷の中より聞き、若くは菩薩の所説に従つて聞く、善男子よ、汝が従つて聞く所の是の般若波羅蜜の處に、應に心に如佛の想を生ずべし。善男子よ、汝當に恩を知つて是の念をなすべし、従つて聞く所

【三〇】此の品には、前品の終に明せる「先無今有性空」の解し難きが爲に常啼菩薩の本縁を述べて證となし、般若求行の義を明す。

の是の般若波羅蜜は、即ち是れ我が善知識なり、我れ是の法を聞くを用つての故に、疾かに不退轉を得、阿耨多羅三藐三菩提に於て、諸佛に親近し、常に有佛の國土に生じて、衆難を遠離し、無難處を具足することを得。善男子よ、當に是の功德を思惟し、籌量し、従つて聞く所の法處に於て、心に如佛の想を生ずべし。汝善男子よ、世利の心を以ての故に、法師に隨逐すること莫れ。但だ法を愛し、法を恭敬するが爲の故に、説法の菩薩に隨逐せよ、爾の時に、當に魔事を覺知すべし。若し惡魔、説法の菩薩の與めに、五欲の因縁を作し、假爲法の爲の故に受けしむるも、若し説法の菩薩、實法門に入らば、功德力を以ての故に、受けて而も染する所なし。又三事を以ての故に、衆生をして善根を種ふしめんと欲するが故に、衆生と其の事を同じうせんと欲するが故に愛く。汝是の中に於て汚心を生ずるとなく、當に淨想を起し、自ら念すべし。我れ未だ漏和拘舍羅を得ず。大師、方便法を以て衆生を度し、福德を得せしめんが爲の故に、是の諸の欲を受け、菩薩智慧に於て著することなく、礙ふることなく、欲染をなきすと。善男子よ、即ち當に諸法實相を觀すべし。諸法實相とは、所謂一切法の不垢不淨なり。何となれば、一切法は自性空にして衆生なく、人なく、我なく、一切法は幻の如く、夢の如く、響の如く、影の如く、燄の如く、化の如くなるが故なり。善男子よ、是の諸法實相を觀じ已りて當に法師に隨ふべし。汝は久しからずして當に般若波羅蜜を成就すべし。

復次に、善男子よ、汝當に復た魔事を覺知すべし。若し説法の菩薩、般若波羅蜜を受けんと欲する人を見て、意に存念せざるも、汝心に怨恨を起すべからず。汝但だ當に法を以ての故に恭敬心を生じ、厭悔の意を起すこと莫く、常に應に法師に隨逐すべし。



釋して曰く、上品の中に説かく、新發意の菩薩には、云何が性空の法を教ふるや。性空の法は

畢竟無所有空にして解し難く、得難きが故なりと。佛答へたまはく、法は先有今無なりやと。佛の意は性空の法は、得難く知り難きにあらず。何となれば、本來常に無にして更らに新に異ることなきが故なり。

汝何を以てか、心に驚いて、謂て得難しとなすや。是の性空の法は甚深なりと雖も、菩薩は但だ能く一心に勤めて精進して身命を惜ます。是の如く、一心に求むることをなさば便ち得べしと。此の中に、薩陀波崙の本生を説いて證となす。佛法に十二部經あり。或は修妬路偈經、本生經に因つて得度す。今佛は本生經を以て證となす。若し聞く者ありて是の念をなさば、彼の人能く得、我れも亦得べし。是の故に薩陀波崙菩薩の本生の因縁を説く。佛、須菩提に告げたまはく、菩薩は般若波羅蜜〔多〕を求むること、應に薩陀波崙の如くすべしと。

問うて曰く、若し般若波羅蜜〔多〕は無相畢竟空ならば、禪定を行するも猶尙得難し。何に況んや憂愁啼哭し、散心に求覓して而も當に得んや。答へて曰く、新發意の菩薩の爲に薩陀波崙を説くなり。

問うて曰く、若し薩陀波崙、是れ新發意ならば、十方の諸佛は、其の前に現在して、諸の三昧を得、身を惜まざるや。曇無竭を見るに及んで、復た無量阿僧祇の三昧を得

【一】 Sadāpāraṃbha は譯して常啼といふ。

【二】 第一二問、若し智度は無相畢竟空にして、禪定を行するも、尙ほ得難くんば、散心もて求覓して、云何が之を得べけんや。

【三】 第一三問、若し常啼これ新發意ならば、十方の諸佛は何故に其の前に現在して、諸の三昧を得、身命を惜まざるか。

【四】 曇無竭、菩薩の名、譯して法盛、法上等といふ。衆香城主となりて常に般若波羅蜜を宣説す、薩陀波崙菩薩は此に到つて般若を聽く。



得。云何にしてか新發意と名づくるや、答へて曰く、(三)新學の菩薩に二種あり。一には深心に世間の樂に著し、輕心に發意するなり、二には深心に發意して、世間に著せざるなり。(三)輕心發意の者は佛

は以て發心となさず、深心に發意する者を乃ち名づけて發心となす。聲聞法の中に、佛二人の比丘に語りたまへるが如し、「我が法の中に於ては、乃至毛釐の如きも煖法なし」と。佛は是の輕法を觀する

を以て最も微小なりとなし、凡人は之を觀するを以て大なりとなす。譬へば、國王の一張の氎を見て

以て多しとなさず、貧者は之を見て、以て多しとなすが如し。一心に身に

惜まざるを以ての故に、薩陀波崙を説いて證となすなり。

問うて曰く、(三)若し薩陀波崙菩薩、能く是の如きの苦行を作さば、曇無

竭に從つて諸の三昧を得て應當に作佛すべし。今何を以ての故に、大雷音

佛の所にあつて菩薩の行を修するや。答へて曰く、佛法は無量無邊なり。

若し千萬阿僧祇劫、勤めて苦行を修するも猶ほ得べからず、況んや薩陀波崙一世の苦行をや。復菩薩

あつて、菩薩道、十力、四無所畏等を具足するも、衆生の爲の故に世間に住して未だ實際を取らず、

文殊師利等の如し。薩陀波崙も或は能く是の如きが故に未だ作佛せず、菩薩の三昧は十方國土の中の

塵數の如く、薩陀波崙の所得は六萬の三昧なり、何ぞ多しとなすに足らん。大雷音佛は、應に大龍王

の將に雨を降さんと欲して、大雷音を震ふに、鳥雀小蟲悉く皆な怖畏するが如くなるべし。是の佛

【三五】 二種の新學の菩薩、(一)深  
心著樂發意、(二)深心發意。  
【三六】 發心の意義。  
【三七】 第一四問、常啼菩薩が大  
雷音佛の所に於いて菩薩の行  
を修せし理由如何。

初めて法輪を轉する時、十方の衆生皆な發心し、外道邪見皆な恐怖懾伏す。是の故に天人、衆生は佛を稱して大雷音となす。是の佛今に現在せり。須菩提問ふ、薩陀波崙菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜〔多〕を求むるやと。

問うて曰く、薩陀波崙は未だ阿鞞跋致を得ず、何を以ての故に菩薩摩訶薩と名づくるや。答へて曰く、大菩薩あるを以ての故に小者も亦た大と名づく。何となれば、其の未だ實智慧を得ずと雖も、而も能く深く般若波羅蜜を念するを以ての故なり。又身命を惜まず、大功德あるが故に亦た菩薩摩訶薩となす。

問うて曰く、何を以て薩陀波崙と名づくるや。是れ父母の與へて名字と作すが爲めなりや、是れ因縁の名字なりや。答へて曰く、有る人の言はく、「其の小時に喜んで啼きしを以ての故に常啼と名づく」と。有る人の言はく、「此の菩薩は、大悲柔軟を行するが故に、衆生の惡世に生在して貧窮し、老病し、憂苦するを見て、之れがために悲泣す、是の故に衆人號して薩陀波崙となす」と。有る人の言はく、「是の菩薩は佛道を求むるが故に人衆を遠離し、空閑の處にあつて心の遠離を求め、一心に思惟籌量して佛道を勤求する時、世に佛なし。是の菩薩世に慈悲心を行じ、小因縁を以ての故に無佛の世に生ず。是の人は悲心もて、衆生に於て、精進して失はざらんと欲す。是の故に空閑林の中にあり。是の人、先世の

【三〇】第一五問、常啼は未だ不退轉を得ず、何を以てか菩薩大菩薩と名づくるか。

【三一】第一六問、薩陀波崙と名くる所以如何。

福德の因縁、及び今世の一心を以て大欲し大精進す。是の二の因縁を以ての故に空中に教聲を聞き、  
 久しからずして便ち滅す。即ち復た心に念ずらく、我れ云何が問はざると。是の因縁を以ての故に、  
 憂愁啼哭すること七日七夜なり。是に因るが故に、天龍鬼神は號して常啼と曰ふと。佛、須菩提に  
 答へたまはく、「過去世に薩陀波密菩薩あり、身命を惜まず、財利を貪らず、般若波羅蜜〔多〕を求むる  
 時、空閑林の中にあつて空中の聲を聞く」と。空林の中に到ることは上に説けるが如し。  
 問うて曰く、〔四〕空中の聲とは是れ何の聲となすや。答へて曰く、若し諸佛菩薩、諸天龍王、衆生を憐  
 愍するが故に、是の人は世間法に著せず、一心に佛道を求むるを見るも、  
 時に、佛法なきを以て、其の般若を得るの因縁を示さんと欲するが故に、  
 空中に聲を發するなり。有る人の言はく、「是の薩陀波密は、先世の善根の因縁に因りて、此の林中  
 にあつて鬼神となり、其の愁苦を見る。其れ是の先世の因縁を以ての故に、又是の神も、亦た佛道を求  
 む。是の二の因縁を以ての故に聲を發すること蜜膊婆羅門の如く、須達多の爲めに王舍城に至り、大  
 長者の家に詣で兒婦を求むる時、蜜膊は王舍城大婆羅門衆の中に於て、飲食度を過ぎ、腹脹りて死し  
 て鬼神となり、王舍城城門の上に住す。須達多は是の婆羅門の已に死するを聞き、自ら長者の家に  
 往いて宿す。長者後夜に於て、起つて飲食を辨具するや、須達多問うて言はく、「汝何の事あつてか  
 婦を娶り、女を嫁せんと欲することをなし、大國王に請はんと欲することをなし、是の邑會のために

【四】 第一七問、空中の聲とは  
 是れ何の聲なるか。

何ぞ其れ忽忽として事を營むと乃ち爾るや」と。長者答へて言はく、「我れ佛及び僧に請はんと欲す。須達多佛の名を聞いて、驚喜し毛を豎つ。長者先づ道跡を得、其れが爲めに廣く佛徳を説く。須達多聞き已つて、愛樂の情至り、甚だ佛乘を見んことを欲し、佛心を念じて小睡す。念佛の情至るを以ての故に、須臾に便ち覺む。夜月光を見るや、謂つて日出となし、即ち起ちて門に趣き、城門を見るに已に王舍城の門を開く。初夜に未だ閉さざるに客來るが爲めの故に後夜早く開く。客去るが爲めの故に既に門の開くを見る。即ち直ちに佛に向ふ。佛時に寒林の中において住す。其の中路に於いて、月没して還た闌し。須達多悔い躊躇して、還つて城に入らんと欲する時、靈膊神は身に光明を放ち、諸の林野を照して、居士に告げて言はく、「居士よ、怖るること莫れ、畏るること莫れ、但だ去つて還り去ること莫ければ大利を得ん、乃ち彼の經中の偈に廣く説くが如し」と。須達多は佛を見、須陀洹道を得て、佛及び僧に請ひ、舍衛に於て形盡くるまで佛を供養す。舍利弗をして須達多の師たらしめ、舍衛に於て精舎を作り、須達は知識神の示導の如くす。薩陀波崙の知識の示導も亦た是の如し。是の故に、其の愁苦を見て、而して之れを示導し是の言をなす。「謂く」、善男子よ、汝是れより東に行け、行く時は疲極等を念ふこと莫れと。

問うて曰く、(四) 疲極、飢渴の交來つて身を切るに、云何が念はざるや。答へて曰く、是れ欲及び

【四】 第一八問、疲極飢渴の交來つて身を切るに、云何が念はざるや。

精進力の故に、一心に佛道を愛樂し、身命を惜まず、飲食等を休息するは、皆な是れ助身の法なり。是の事來ると雖も心を亂さず、皆な虚誑にして無常無實なること、賊の如く怨の如し。但だ身樂の爲めの故に何ぞ念を存するに足らん。飢渴疲極等の爲めの故に、而も佛道を捨つること莫れ。晝夜を念ふこと莫れとは、晝は是れ法を行し、夜は「是れを」止息すべしと念ふこと莫くんば、實に晝夜なきなり。所以は何んとなれば、日は須彌に依るも、影の「是れを」翳すが故に夜と名づくるのみなるが故なり。内外を念ふこと莫れとは、衆生は多く内法に著す。内法を名づけて身となし、外法を五欲と名づく。内外法は不定性空の故に著すべからず。左右を觀すること莫れとは、人は心を散じて道を行ずるが故に左右を顧看す。行者緣なくして後を觀じ、前に當れば則ち得ず。得ざるが故に但だ左右を顧看すること莫しと言ふ。

復次に、魔は常に行者を惑亂して或は種種の形をなし、或は好色をなし、或は畏獸をなして道の左右にあるが故に觀ること莫れと言ふ。是れ皆な其の麤念を止めん〔が爲なり〕。身相色等の相を壞すること莫れとは、五衆和合の故に假りに名づけて身となす。若し別に説かば更に決定して身法あり、是れ則ち身相を壞するなり。若し無身法に著すれば、是れ亦た身相を壞す。是の一異有無等の邊を離れ中道を行すれば、則ち疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に身相を壞すること莫れ等と説く。此の中に佛自ら因縁を説く。若し是の諸相を壞すれば、則ち佛法に於て疑あり。佛法に疑あれば、則ち

五道生死の中に往來して、般若波羅蜜〔多〕を得ること能はず。薩陀波崙空中の聲に報へて言はく、而も自ら因縁を説く、所謂薩陀波崙は、一切衆生の、無明黑闇の中に墮在するを見て、我れ然も智慧の光明たらんと欲し、一切衆生に煩惱あれば、我れ一切佛法の樂を設けんと欲し、一切衆生皆な邪道に墮せば、我れ是の衆生の爲めの故に無上道を求む。是の三種の願は、般若波羅蜜〔多〕を得れば則ち能く具足す。是の故に教を受くと云ふ。

問うて曰く、薩陀波崙は其の形を見ず、但だ其の聲を聞くのみ。何を以てか便ち教を受くと云ふや。答へて曰く、人の求むる所のことの急なるが故に、聲を聞けば則ち應ず、薩陀波崙も亦た是の如し。

復次に、其の説く所の理の好きを聞けば、其の人亦好きを知るが故に、

眼を以て見ることを須むず。黒闇の中に種種の衆生あつて、眼に見ずと雖も其の聲を聞けば則ち其の種類を知るが如し。爾の時に、空中の聲復た讃じて善哉といふ、其を以て形を見ずと雖も、而も能く善語を信受するが故に、又復た其の一切衆生を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めて懈らず息まざるなり。是の如き等の因縁の故に、讃じて善哉といふ。三解脱門の中に於て信心を生ずべしとは、是の門は諸法實相所入の門なり。是の三門を離るれば、皆な是れ虚誑にして實ある者なし。汝未だ得ずと雖も、應に大信根力を生ずべし。信根力の故に漸く諸根を具す。相心を離るるを以て、

【四】 第一九問、常啼は其の形を見ず、但だその聲を聞くのみ、何を以てか便ち教を受くと云ふや。

般若波羅蜜〔多〕を求むとは、所謂諸法の畢竟空を觀じ、衆生相を離れ、法相を離るるなり。

問うて曰く、**三解脱門**は般若の中に攝在するや不や、若し攝〔在〕せば何を以て別に説くや、若し攝せずんば云何が經の中に、一切の助道法は皆な般若の中に攝在すと説くや。答へて曰く、一切法は皆な般若の中に入るなり。人皆な苦を畏るるが故に解脱を求む、是の故に般若分の中に於て前に三解脱門を説くなり。何の因縁を以てか此の解脱を得、諸の二邊、所謂衆生相・法相を離るるや。般若波羅蜜〔多〕を行するが故なり。

問うて曰く、**初**には精進を教へ、後には三解脱門を教ふ。般若は今復

た何事をなさんと欲するが故に、善知識に親近することを教ふるや。答へて曰く、好法ありと雖も若し教ふる者なくんば、行する時多く錯る。譬へば、好き藥ありと雖も、亦た良醫を須つが如し。又薩陀波崙は是れ新發意

の菩薩にして、般若波羅蜜〔多〕は甚深なり。云何が空中の略教を聞いて、而も能く自ら具足せん。是の故に語つて善知識に親近することを教ふるなり。善知識の義は先に説くが如し、今略して二相を説く、是れ善知識なり。一には一心に薩婆若に向ふを教へ、二には空無相無作、無生無滅等の般若波羅蜜〔多〕の法を教ふ。若し能く是の如くなれば、久しからずして般若波羅蜜〔多〕を得。藥師の病者の爲に服藥の法を説くが如し。汝能く法の如く服すれば病則ち差ゆることを得。若くは經卷より聞き、菩

【三】 第二〇問、三解脱門は般若の中に攝在するや如何。

【四】 第二一問、初に精進を教へ、後には三解脱門を教ふ、般若は今復た何事をなさんと欲するが故に、善知識に親近することを教ふるや。

薩の説くに從つて聞くとは、薩陀波崙を遣して曇無竭菩薩の處に至るに、彼の中に二處に般若あり。一には寶臺上の金牒書、二には曇無竭の所説なり。若し人、福德多き者は、曇無竭の所説に從つて聞き、福德少き者は經卷に從つて聞く。師に於て佛の想を生じ、能く佛道を教ふる因縁を以ての故に、世間の小人は因縁の事訖れば、則ち其の恩義を忘れ是の念をなす、人の船に乗つて水を渡るが如し。彼岸に到れば、何ぞ船を用ふることをなさんと。是の故に説く、「汝當に恩を知り、是の念をなすべし」と。從つて聞く所の般若とは、即ち是れ我が善知識なり。一切諸利の中、般若の利は最勝なり。是の般若を行せば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得て退轉せず。又復た般若を行する因縁の故に、諸佛に親近し、常に有佛の國の中に生じ、八難を離れ、佛の在世に値ふ。菩薩は是の念をなすべし、「我れ是の如き等の諸の功德を得るは、皆な般若に從ふがためなり」。般若波羅蜜〔多〕を得るは、師に從つて得るなり、是の故に師を視ること佛の如く想へ」と。人あつて、能く般若波羅蜜〔多〕を説く者は、大福德あつて知識多く、多く供養を得。弟子は初に般若のための故に隨逐し、後ち漸漸に供養のために利を得、是の故に世の利を以ての故に、法師を隨逐すること莫れと説くなり。

問うて曰く、何を以てか但だ善知識に親近すと説かずして、而も是の種種の因縁を説くや。答へて曰く、人あり、既に善知識を得るも、其の意を得ずして反つて讐訛を成じて地獄に墮し、更に相謗毀

【四五】 第二二問、但だ善知識に親近すと説かずして、種種の因縁を説く理由如何。



するが故に、唯だ佛一人のみ過失あることなし。餘人は誰か能くなき者あらん。弟子にして師の過を見ば、若くは實なるも、若くは虚なるも、自ら壞して復た能く法利を得ず。是の故に、空中の聲の教は、若し師の過を見るも嫌恨を起すことなし。汝應に是の念をなすべし。我れ先世の福徳を具足せざるが故に、佛に値ふことを得ずして今是の雜行の師に値ふ。我れ應に其の過失を念うて、而も自ら般若を妨失せざるべし。師の過失は我に著かず、我は但だ師に従つて般若波羅蜜多を受くるのみ。譬へば、狗皮の囊に好き寶物を盛るに、囊を以ての故に而も其の寶の棄つべからざるが如し。又罪人の燭を執つて道を照すに、人の罪あるを以ての故に其の明を受けずして自ら溝壑に墜つべからざるが如し。又行くに、小人を遣して道を導くに、人の小なるを以ての故に其の語に隨はざるべからざるが如し。是の如き等の因縁を以て師を遠離すべからず。師若し實に罪あるも尚ほ離るべからず、何に況んや、此の中に魔の因縁をなし、説法する者をして、深妙の五欲あらしめ、弟子をして、著法に染めざらしむるをや。説法する者は方便を以ての故に現に受く。方便とは所謂衆生をして福徳の因縁を種らしめんと欲するなり。亦た同事の爲めに衆生を攝するが故に、復諸の菩薩あり、諸法實相に通達するが故に、障礙する所なく、過罪あるとなし。過罪あることなしと雖も亦た妨ぐる所なし、人壯年なれば力盛にして、腹中の火熱するを以て、食すと雖も適せざることなく、飲食の病を生ずること能はざるが如し。又好薬あれば、惡毒を被ると雖も害をなすこと能はざるが如し。是の如き等の因縁の故に

汝師なんぢしの所ところに於おいて嫌恨けんこんを起おこし、而しかも自ら般若はんにやを失うしなふこと莫なれ。經きやうの中うちに説とくが如ごとし。復またた説法せつぽうする者ものあり、戒かいを持たもつこと清淨しやうじやうにして五欲よくを離はなれ、多知多識たちたしきにして好名聞かうみやうもんあり、威德ゐとく尊重そんじやうならんには、弟子てし法ほふを受けうて願録ころくせず。汝是なんぢこの中うちに於おいて、怨恨そんこんを生しやうずることなく是この念おもひをなすべし。我われ宿世しゆくせの罪つみの故ゆゑに今いま小人せうじんとなるも師しは我われを輕かろんせず、我われ自ら福みづかなくして道だうを得うること能あたはず、又また我われ師しの所ところに於おいて憍慢けうまんを破やぶるべしと。法利ほふりを求もとむるを以もつて、是かくの如ごとき等の種種しゆじゆの諸師しよしあり。菩薩ぼさつは般若はんにやは羅蜜らみつ「多た」を求もとむるが爲ための故ゆゑに、但ただ一心しんに恭敬くぎやうして其その長短ちやうたんを念おもはず。若もし能よく是かくの如ごとく師しを忍辱にんにくし、一心しんに増減ぞうげんを起おこさずんば、汝師なんぢしの所ところに於おいて盡ことごとく好法めうほふを得えること、完牢くわんらうの器きの受うくる所ところを漏もらさざるが如ごとし。薩陀波崙さつたはろんの空くう中の聲しやうを聞き已やつて、是これより東ひがしに行くことゆは、經きやうの中うちに廣ひろく説とけるが如ごとし。

# 巻の第九十七

薩陀波崙品第八十八の中を釋す。

釋

爾の時に、薩陀波崙菩薩、是の空中の教を受け已りて、是れより東に行くこと久しからずして、是の念をなす。我れ云何が空中の聲に聞はざりし、我れ當に何處に去るべき、去ること當に遠近なるべき、當に誰に従つてか般若波羅蜜(多)を聞くべきと。是の時、即ち啼哭憂愁に住して、是の念を作す、我れ是の中に住し、一日一夜、若くは二、三、四、五、六、七日七夜を過ぎ、是の中に住して疲極を念はず、乃至、飢渴寒熱を念はず、般若波羅蜜(多)を聽受する因縁を聞かすんば、終に起たざるなりと。須菩提よ、譬へば、人の一子あつて卒に死するや、憂愁し苦毒して、唯だ懊惱を懷き、餘念を生ぜざるが如し、是の如く、須菩提よ、薩陀波崙菩薩は爾の時に異心あることなく、但だ念すらく、我れ何れの時か當に般若波羅蜜(多)聞くことを得へきや、我れ云何が空中の聲に聞はざりし、我れ應に何處に去るべき、去ること當に遠近なるべきや、當に誰に従つてか般若波羅蜜(多)を聞くべきと。須菩提よ、薩陀波崙菩薩の是の如く愁念する時、空中に佛あつて薩陀波崙菩薩に語つて言はく、善哉、善哉、善男子よ、過去の諸佛の菩薩道を行する時に、般若波羅蜜(多)を求めしも亦汝が今日の如し。善男子よ、汝は是を勤めて精進し、法を愛樂するが故に、是れより東に行き、此を去ること五百由旬にして城あり、衆香と名づく、其の城七重にして、七寶を以て莊嚴せり。臺觀欄楯皆な七寶を以て校飾し、七寶の壘、七寶の行樹の周布すること七重なり。其の城は、縱廣十二由旬、豐樂安靜にして、人民熾盛なり。五百の市里、街巷相當し、端嚴にして畫の如く、橋

津は地の如く電博にして清淨なり、七重の城の上には皆七寶の樓閣あり、寶樹行列し、黄金、白銀、車磔、磔磔、珊瑚、瑠璃、琥珀、紅色の眞珠以て枝葉と爲る。寶繩連綿し、金は鈴網と爲り以て城の上を覆ふ。風鈴を吹くや、聲其の音と和雅して、衆生を娛樂せしむ。譬へば、巧に五樂なまなば、甚だ悦喜すべきが如し。金網、寶鈴、其の音是の如きを以て衆生を樂します。其の城の四邊に流池、清淨にして冷暖調適なり、中に諸船ありて七寶を以て嚴飾す、是れ諸の衆生、宿業の致す所にし、是の寶船に乗じて娛樂遊戯す。諸の池水の中に種種の蓮華あつて青黄赤白なり。〔其の外〕衆の雜好華、遍く水上を覆ひ、是の三千大千世界所有の樂華皆な其の中にあり。其の城の四邊に五百の圍觀ありて七寶をもて莊嚴して甚だ愛樂すべし。この園中に各五百の池あり、池の各縱廣十里、皆な七寶を以て校成し、雜色莊嚴せり、諸の池水の中に亦青黄赤白の蓮華ありて水上に彌覆し、其の諸の蓮華の大き車輪の如く、〔其の色〕青光、青光、黄色、黄色、赤色、赤光、白色、白光なり。諸の池水の中に鳧雁、鴛鴦〔等〕異類の衆鳥あつて音聲相和す。是の諸の圍觀は適くとして所屬なきは、是の諸の衆生、宿業の致す所に因つて長夜に深法を信樂し、般若波羅蜜〔多〕を行する因縁の故に是の果報を受く。善男子よ、是の衆香城の中に大高臺あつて、曇無竭菩薩摩訶薩の宮舍上にあり。其の宮の縱廣一由旬にして、七寶を以て校成し、雜色をもて莊嚴して甚だ喜樂すべし。垣墻七重にして皆な亦た七寶なり。七寶の欄楯、七寶の樓閣、寶璽七重にして皆な亦た七寶なり。深潭七重疊成し、七重の行樹は七重の枝葉にて七重に圍遮せり。其の宮舍の中に四種の娛樂園あり、一には常喜と名づけ、二には離憂と名づけ、三には華飾と名づけ、四には香飾と名づく。一一の園中に各八池あり、一には賢と名づけ、二には賢上と名づけ、三には歡喜と名づけ、四には喜上と名づけ、五には安穩と名づけ、六には多安穩と名づけ、七には遠離と名づけ、八には阿彌跋致と名づく。諸池の四邊の面は各一寶なり、黄金、白銀、琉璃、玻璃、玳瑁を以つて、池底となし、其の上に金沙を布く。一一の池の側に入つての梯階ありて、種種の妙寶を以て嚴飾を爲し、諸の梯階の間には、闍浮檀

金の芭蕉の行樹あり。一切の池の中には種種の蓮華の青黄赤白あつて水上に彌覆し、諸池の四邊には好華樹を生じ、風は諸華を吹いて池水の中に墜つるや、其の池、八種の功德香を成就し、若くは栴檀色味を具足して軽く且つ柔輭なり。曇無竭菩薩は六萬八千の婬女と共に五欲を具足し共に相娛樂す、善男子よ、曇無竭菩薩は、諸の婬女と共に遊戯娛樂し已つて、日三時般若波羅蜜(多)を説く。衆香城内の男女、大小、其の城中に於て多く人の聚る處に大法座を敷く。其の座四足あつて或は黄金を以てし、或は白銀を以てし、或は琉璃を以てし、玻璃を以てす。敷くに純雜色の茵褥を以てし、諸の幃帯を垂る。妙白氈を以て而も其の上を覆ひ、散するに雜妙の華香を以てす。座の高さ五里にして白珠の張るを以てし、其の地の四邊に五色の華を散じ、衆の名香を燒き、澤香を地に塗る、般若波羅蜜(多)を供養し恭敬するが故なり。曇無竭菩薩此の座上に於て般若波羅蜜(多)を説く。彼の諸の人衆、是の如く曇無竭を恭敬し供養し、般若波羅蜜(多)を聞かんがための故に、是の大會に於て百千萬衆の諸天世人一處に和集す。中に聽く者あり、中に受くる者あり、中に持つ者あり、中に誦する者あり、中に書する者あり、中に正しく觀する者あり、中に説の如く行ふ者あり。是の時に衆生是の因縁を以ての故に皆な惡道に墮せず、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。汝善男子よ、曇無竭菩薩に往詣して、當に般若波羅蜜(多)を聞くべし。善男子よ、曇無竭菩薩は、世世に是れ汝が善知識にして、能く汝に阿耨多羅三藐三菩提を教へて、示教利喜す。是の曇無竭菩薩、本般若波羅蜜(多)を求むる時、亦た汝の如し。今汝去つて晝夜を計ること莫く、障礙心を生ずること莫くんば、汝久しからずして當に般若波羅蜜(多)を聞くを得べし。

爾の時に薩陀波崙菩薩摩訶薩、歡喜心に悦んで是の念をなす、我當に何れの時にか是の善男子を見ることを得て、般若波羅蜜(多)を聞くを得べきやと。須菩提よ、譬へば人あつて、毒箭に中てらるるが如く、更らに餘念なく唯だ念へらく、何れの時にか當に良醫を得て、毒箭を拔出し、我が此の苦を除くことを得べきと。是の如く須菩提よ、薩陀波崙菩薩摩訶薩は更

に餘念なく但だ是の願をなす、〔謂く〕我れ何れの時に曇無竭菩薩を見ることを得て、我れをして般若波羅蜜〔多〕を聞くを得せしむべきや、我れ是の般若波羅蜜〔多〕を聞いて諸人の心を斷ぜん。是の時薩陀波崙菩薩是の處に住し、曇無竭菩薩を念じ、一切法の中に於て無礙の知見を得て、即ち無量の三昧門の現在前するを得。所謂諸法性觀三昧・諸法性不可得三昧・破諸法無明三昧・諸法不異三昧・諸法不壞自在三昧・諸法能照明三昧・諸法離闇三昧・諸法無異相續三昧・諸法不可得三昧・散華三昧・諸法無我三昧・如幻威勢三昧・得如鏡像三昧・得一切衆生語言三昧・一切衆生歡喜三昧・入分別音聲三昧・得種種語言字句莊嚴三昧・無畏三昧・性三常曜然三昧・得無礙解脫三昧・離塵垢三昧・名字語句莊嚴三昧・見諸法三昧・諸法無礙頂三昧・如虛空三昧・如金剛三昧・不畏著色三昧・得勝三昧・轉眼三昧・畢法性三昧・能與安穩三昧・師子吼三昧・勝一切衆生三昧・華莊嚴三昧・斷疑三昧・隨一切堅固三昧・出諸法得神通力無畏三昧・能達諸法三昧・諸法財印三昧・諸法無分別見三昧・離諸見三昧・離一切闇三昧・離一切相三昧・解脫一切著三昧・除一切懈怠三昧・得深法明三昧・不可奪三昧・破魔三昧・不著三界三昧・起光明三昧・見諸佛三昧なり。是の如く薩陀波崙菩薩は、是の諸の三昧の中に住して、即ち十方無量阿僧祇の諸佛を見、諸の菩薩摩訶薩のために般若波羅蜜〔多〕を説く。

問うて曰く、薩陀波崙は、何を以てか、忘れて空中の聲に問はざるや。答へて曰く、薩陀波崙は大に歡喜して心を覆ふが故に忘れたり。人の大に憂愁し、大に歡喜せば、此の二の事を以ての故に忘るるが如し。

【一】 第一問、常啼は忘れて空中の聲を問はざりし理由如何。

問うて曰く、三空中の聲已に滅す、何を以てか此に住すると七日にして、更に問處を求めざるや。答へて曰く、本、空閑の處に於て、一心に般若を求むるが故に空中に聲あるが如く、今も亦た一心に本の如くならんと欲し、更に聲を聞いて其の疑ふ處を斷せんとと冀ふ。

復次に、薩陀波崙は、世の樂に於て已に捨てて佛道に入るも、愛樂の情至るや、空中の聲告げて少しく開示するも、竟に未だ疑を斷せざるが故に其の聲便ち滅す。小兒の少しく美味を得ば、味に著するが故に、復啼泣して而も之を得んと欲するが如し。薩陀波崙も亦た是の如く、般若波羅蜜「多」の因縁の味を得るも通達すること能はず、那に去るやを知らず、是の故に住して而も啼泣するなり。

問うて曰く、何を以てか乃ち七日に至りて佛身乃ち現するや。答へて曰く、譬へば、人の大に渴するが故に、乃ち水の美「味」を知るが如し。若くは二日、「若くは」三日の精進は欲未だ深からず、若し七日を過ぐれば其の憂愁心を妨げて、道を求むむことを任せざるを恐る、是の故に七日憂愁す。譬喩經の中に説くが如し。

問うて曰く、四薩陀波崙は何を以てか憂愁すると、乃ち爾かく愛子を喪ふが如くなるや。答へて曰く、般若波羅蜜「多」は諸法の中に於て第一なり、實に是れ十方の諸佛の眞實の法寶なり。薩陀波崙は

- 【一】 第二問、空中の聲已に滅す、何を以てか此に住すると七日にして、更に問處を求めざるや。
- 【二】 第三問、七日に至りて佛身乃ち現する理由如何。
- 【四】 第四問、常啼が爾かく憂愁せし理由如何。

少しく氣味を得るも、未だ具足せざるが故に、憂愁すること愛子を喪ふが如し。其の長大して、成辦  
 する處多きを念じ、其の力を得んことを冀ふ。菩薩も亦た是の如く、般若波羅蜜〔多〕を増益し、阿鞞  
 跋致を得已つて、佛事を成就せんと念ず。子の父に於て孝行し、身を終るまで異心あることなきが如  
 し。般若波羅蜜〔多〕の菩薩に於けるも亦た是の如し。若し能く入るを得ば、乃至成佛まで、終に遠離  
 せざると、父の子を見て心即ち歡喜するが如し。菩薩は種種の諸法を得と雖も、般若波羅蜜〔多〕を見  
 るの歡喜に如かず。子の假りに其の名をなすが如く、般若波羅蜜〔多〕も亦た是の如し。空にして定實  
 なく、但だ假名のみあり。是の如き等は是れ總相の因縁なり。父は子を愛すと雖も、尙ほ頭目を以て  
 之に與ふること能はず。菩薩は般若波羅蜜〔多〕のための故に、無量世の中に、頭目髓腦を以て衆生に  
 施與す。子の父に於けるや、或は恩を報ずること能はず、若し能く恩を報せば、正に現世に小しく、衣  
 食歡樂等を利すべきのみ。菩薩の般若波羅蜜〔多〕に於けるや、乃至一切の智慧として得ざる所なし、  
 何に況や菩薩の力勢をや。世間の富樂なるも、子の父の恩を報ずるは一世に極まり、般若の益は無量  
 世にして乃至成佛に至る。子の父に於けるや、或は好、或は惡あるも、般若波羅蜜〔多〕は諸の不可ある  
 なし。子は但是れ假名にして虚誑不實の法なるに、般若波羅蜜〔多〕は眞實の聖法にして、虚誑量りな  
 し。子の報恩は現世の小樂を得と雖も、而も憂愁苦惱の無量の苦あり、般若波羅蜜〔多〕は但だ歡喜實  
 樂、乃至佛樂を得るのみ。子は但だ能く供養を以て、父を利益するも、其の生老病死を免ると能



はず、般若波羅蜜(多)は、菩薩をして畢竟清淨にして、復た老病死の患なからしむ。子は但た能く父をして世樂自在を得せしめ、般若波羅蜜(多)は、能く菩薩をして一切世間に於て天下の主たらしむ。是の如き等の種種の因縁、譬喩、差別の相あり。世の人の子を喪ふの憂愁を知るが故に、此を以て喩となす。

問うて曰く、空中に佛の現するは是れ何等の佛ぞや。先に何を以てか但た音聲のみあつて而も今身を現するや。佛既に身を現せば、何を以てか即ち度せずして方に遣して曇無竭の所に至るや。答へて曰く、有人の言はく、眞佛にあらず、但た是れ像を現するのみ。或は諸佛の化を遣はし、或は大菩薩の現作し、先には善根福德未だ成就せざるを以つての故に、但た聲を聞くも、今は七日七夜、一心に佛を念じて功德成就するが故に、佛身を見ることを得るなり。

【五】第五問、空中に現するは是れ何等の佛なるか。先に音聲のみありて、今、身を現するは何故なるか。既に現せば何を以てか即ち度せずして、曇無竭の所に至るや。

佛の即ち度せざる所以は、其れを曇無竭に興へ、世世の因縁もて應當に彼に従つて度すべきを以ての故なり。人あり、舍利弗に従つて度すべき者には、假使ひ諸佛身を現するとも悟らしむること能はず、佛讀して善哉と言ふは、薩陀波備に至り、意に去る處を求知し、般若を聞くの因縁なるを以ての故に、佛、身を現じて善哉と讚す。過去の諸佛は菩薩の道を行する時、此の般若を求むること亦た是の如く種種に勤苦す。初發心には、先づ罪厚重にして、福德未だ集まらざるが故に、佛其の心を安慰し、汝

般若波羅蜜(多)を求めて勤苦すと雖も、懈怠すること莫れ、退没の心を生ずると莫れ、一切衆生の行果は、因の時に皆な苦を受け、果の時に樂しむ。當に諸佛無量の功德を果報思惟して、以て自ら勸勉すべし。是の如く安んじ已つて是の言を作す、汝はより東に行き、此を去ると五百由旬にして城あり、衆香城と名づく、乃至久しからずして般若波羅蜜(多)を聞くべしと。

問うて曰く、衆香城は何れの處にありや。答へて曰く、過去の佛、滅度の後、但だ遺法あるも、是の法闍浮提に周遍せず、衆生聞法の因縁の處あれば即ち到る。爾の時に衆香國土豐樂にして、多く七寶を出だすが故に、七寶を以て城となす。時に、薩陀波崙同じく闍浮提にありと雖も、而も佛法なく、七寶なき處にありて生じ、但だ佛名及び般若波羅蜜(多)是れ佛道なりと傳聞す。是の人は先世に廣く福德を集めて、煩惱輕微なるが故に、聞いて即ち信樂し、惡世の樂を厭ひ、其の親屬を捨てて、空林の中に住し、佛法ある國土に到らむと欲す。音聲示語すとは、恐らくは其れ異(方)に去らば、曇無竭菩薩の所に到るを得ざらん。是の故に之れを語り、次に後佛ために身を現して其の去る處を示すなり。

問うて曰く、薩陀波崙の因縁は已に具さに上に於て聞く、今曇無竭の因縁云何。答へて曰く、鬱伽陀、秦には盛と言ひ、達磨、秦には法と言ふ。此の菩薩は衆香城の中において、衆生のために意に

- 【六】 第六問、衆香城の所在地は何の處なりや。
- 【七】 第七問、曇無竭の因縁は如何。
- 【八】 鬱伽陀 (Uddaka)
- 【九】 達磨 (Dharma)

隨つて法を説き、衆生をして廣く善根を種ゑしむるが故に、法盛と號す。其の國に王なく、此の中の人民皆吾我なきこと鬱單越の人の如く、唯だ曇無竭菩薩を以て主となす。其の國は到ること難きも、薩陀波崙は身命を惜まず、又諸佛菩薩の接助を得て能く到れり。大菩薩は衆生を度せんがための故に是の如き國の中に生ず。「其の中の」衆生は乏短する所なし。何となれば、其の心調柔にして得度すべきこと易ければなり。

問うて曰く、曇無竭菩薩は是れ生身となすや、是れ法身と爲すや、衆生を度せんがための故に、神通力を以て此の身を化作せしものとなすや。若し化身なりとなせば、何ぞ六萬の姪女、圍觀浴池等種種の莊嚴を用つて而も自ら娛樂するや。若し是れ生身なりとなせば、云何能く薩陀波崙の供養をして、具さに空中にあつて化して大臺を成せし

【二〇】第八問、曇無竭は是れ生身なりや、法身なりや。

め、諸の三昧に入つて乃至七歳を経るや。答へて曰く、有人の曰く、「是れ生身の菩薩なり。諸法實相及び、禪定神通力を得るが故に、是の城中の衆生を度せんと欲し、餘の菩薩の如く、利根なるが故に、能く禪定に入り、亦た能く欲界の法に入る。衆生を攝せんがための故に、五欲を受けて而も禪定を失はず。人の熱を避くるが故に、泥中にあつて臥するも、起きて還つて洗ふときは、則ち故の如くなるが如し。凡人は鈍根の故に能く是の如くなること能はず。是の故に、神通力を以て、華臺を化作して、七歲定に入り、又方便力を以ての故に、能く五欲を受くること、先の義に説くが如し。菩薩

は但だ一道のみを行せず、衆生のための故に種種の道を行じて、之れを引導すること、龍の雲を起して、能く大雨を降らし、雷電霹靂をなすが如し、菩薩も亦た是の如く、是の生身未だ煩惱を離れずと雖も、而も能く善法を修行し、衆生のための故に結使を盡さず」と。有人の言はく、「是の菩薩は是れ法性生身なり、衆香城の人を度せんが爲の故に變化して度す。若し生身ならば、云何が能く十方の佛稱讃して、薩陀波崙を遣はし、從つて法を受けて六萬の三昧を得せしめんや」と。是の故に知んぬ、是の大菩薩は是れ變化身なるとを。譬へば大海の中の龍の死相出づる時の如く、果の熟して應に墮するや、金翅鳥則ち來つて之を食するが如し。衆生も亦た是の如く、行業因緣熟するが故に、大菩薩來つて之れを度す。爾の時に薩陀波崙、空中の佛の教を聞いて大に歡喜し、大に欲心を生ず、「我れ何の時に當に曇無竭菩薩の般若波羅蜜〔多〕を説くを聞くを得べき」と。能く心中の愛見等の煩惱の箭を出ださしめ、是の事を明かにせんと欲するが故に、此の中に佛は毒箭の譬喩を説く。人毒箭の身に在るや、更に餘念なきが如く、一には苦痛急に、二には毒疾出でざれば、則ち身中に遍滿して、而も命を失ふ。薩陀波崙も亦た是の如く、諸の邪疑等の箭の心に入り、貪欲等の毒を箭に塗り、曇無竭菩薩、能く此の箭を拔出するを聞くや、是の人邪見の箭の毒を以て心を傷け、又貪欲等の毒、遍ねく身中に入つて智慧の命を奪ひ、凡人と同じく死することを畏る。是の故に、急に曇無竭菩薩を見んと欲して、復た餘念なし。此の中に諸の所有の心を斷ずるを説く。所有の心とは相を取つて著するなり。

乃至善法の中にも亦た是の病あり、薩陀波崙は目に佛身を觀、先に未だ見ざる所、佛に従つて教を聞き、法喜を得るが故に、五欲の喜を離れ、即ち一切法の中に無礙の知見を得。無礙の知見とは、薩陀波崙の力の所得の如く無礙なり、佛の無礙にあらず。是の時に諸の三昧門に入ることを得。諸法性觀三昧とは、能く一切諸法の實性を觀するなり。實性とは、先に種種の因縁を説けるが如し。諸法性不可得三昧とは、初めて三昧を得るものにして、所謂空無生無滅なり。今是の三昧を得れば、是の性に著せざるなり。其の決定相を得と謂ふにあらず。(一)破諸法無明三昧とは、諸法は凡夫の人の心の中に於て、無明の因縁を以ての故に、邪曲にして正しからず、所謂常樂我淨なり。是の三昧を得るが故に、常等の顛倒相應の無明を破し、但だ一切法は無常空無我なりと觀するなり。

問うて曰く、(一)若し是の菩薩、一切法の中の無明を破さば、此の人は尙

ほ佛すら見るを須むず。何を用つてか曇無竭菩薩の所に至らんや。答へて曰く、無明を破すると唯一種にあらず、遮して起らざらしむるも、亦名づけて破となすとあり。諸法實相を得ることあるが故に無明を破す。又無明の種數甚だ多く、菩薩の破する所の分あり、佛の破する所の分あり、小菩薩の破する所の分あり、大菩薩の破する所の分あること、先に燈の譬喩を説けるが如し。又須陀洹をも亦た

- 【一】 諸法性觀三昧の義解。
- 【二】 諸法性不可得三昧の義解。
- 【三】 破諸法無明三昧の義解。
- 【四】 第九問、若し是の菩薩、一切法の中の無明を破さば、此の人は尙ほ佛すら見るを須むず、何を以てか曇無竭の所に至らんや。

無明を破すと名づけ、乃至阿羅漢は方に是れ實破なり。大乘法の中も亦た是の如し。新發意の菩薩は諸法の實相を得るが故に、亦た無明を破すと名づけ、乃至佛は無明盡く破して餘すことなし。是の故に薩陀波菴は、佛法の中に於て邪見、無明及び我見等皆な盡くすが故に、破無明三昧と名づくることを得るに咎なし。

【二五】 諸法不異三昧とは、是の三昧を得れば、一切法一相なりと觀ず。所謂、無相の諸法なり。【二六】 不壞自在三昧とは、是の三昧を得て、一切法は如性・實際・無爲の相なりと觀ずるが故に不壞と名づく。是の法を得已つて自在を得、了了に諸法を知るも佛道のための故に是れを證せざるなり。

【二七】 諸法能照明三昧とは、總相別相を以て一切法を知るなり。【二八】 諸法離闇三昧とは、無明に二種あり、一には厚、二には薄なり。薄とは無明に名づけ、厚とは黒闇に名づく。厚き無明を破するが故に離闇と名づく。先づ薄き無明を破するが故に、破諸法無明と名づく。【二九】 諸法無異相續三昧とは、五衆念心に滅し、相似に相續して生ず。死する時相續し、生じて而も相似せず。是の三昧を得て、諸法の念念相續して、法の異ならざるを知る。【三〇】 諸法不可得三昧とは、即ち是れ一切法空にして三昧と相應するなり。【三一】 散華三昧とは、是の三昧を得る者は、十方の佛前に於て能く七寶の華を以て佛に散ずるを得るなり。【三二】 諸法

- 【二五】 諸法不異三昧の義解。
- 【二六】 不壞自在三昧の義解。
- 【二七】 諸法能照三昧の義解。
- 【二八】 諸法離闇三昧の義解。
- 【二九】 二種の無明、(一)厚、(二)薄、解。
- 【三〇】 諸法無異相續三昧の義解。
- 【三一】 諸法不可得三昧の義解。
- 【三二】 散華三昧の義解。
- 【三三】 諸法無我三昧の義解。

無我三昧とは、一切法の無我を觀するなり。(四)如幻威勢三昧とは、是の三昧を得る者は、能く種種に身を變化すること、大幻師の如く、能く衆生を引導して希有の心を發さしむると、大幻師の如し。幻力を以ての故に、能く一國の人の心を轉ず。

(三)得如鏡三昧とは、是の三昧を得る者は、三界の所有を觀じて、鏡

中の像の虚誑にして、實なきが如し。(三)得一切衆生語言三昧とは、是の如きの三昧を得るが故に、能く一切衆生の語言を解するをいふ。(七)一切衆

生歡喜三昧とは、是の三昧に入れば能く衆生の瞋心を轉じて歡喜せしむるなり。(二)入分別音聲三昧とは、是の三昧の中に入れば、皆な能く天人の

音聲の大小麤細等を分別して、種種の語言字句を得。(五)莊嚴三昧とは、是の三昧を得る者は、義理淺しと雖も、能く字句語言を莊嚴して、人をして

歡喜せしむ、何に況んや深義をや。(三)無畏三昧とは、是の三昧を得る者は一切の魔民、外道の論師、及び諸の煩惱の性を畏れず。(三)常嘿然三昧とは

是の三昧に入る者は、常に嘿然攝心し、衆生を度せんがための故に、所應の聞に隨つて、而も音聲を出たすこと、恰も天の伎樂の音に應じて出づるが如し。

(三)無礙解脫三昧とは、是の三昧を得る者は、一切法の中に於て無礙の智慧を得るなり。(三)離塵垢

- 【四】 如幻威勢三昧の義解。
- 【五】 得如鏡三昧の義解。
- 【六】 得一切衆生語言三昧の義解。
- 【七】 一切衆生歡喜三昧の義解。
- 【八】 入分別音聲三昧の義解。
- 【九】 莊嚴三昧の義解。
- 【一〇】 無畏三昧の義解。
- 【一一】 常嘿然三昧の義解。
- 【一二】 無礙解脫三昧の義解。
- 【一三】 離塵垢三昧の義解。

三昧とは、是の三昧を得る者は、諸の煩惱の結使塵垢皆滅す、即ち是れ無生法忍三昧なり。【三】名字

語句莊嚴三昧とは、是の三昧を得る者は、能く種種に偈句語言を莊嚴して說法す。【四】見諸法三昧とは

是の三昧に入る者は、世諦及び第一義を以て諸法を知るなり。【五】諸法無礙

頂三昧とは、人の山頂にあつて遍ねく四方を觀するが如く、菩薩は是の三

昧の中に住して、普ねく一切諸法の無礙を見るなり。【六】如虛空三昧とは、

是の三昧に入る者は、身及び外法皆な虛空の如く自在を得るなり。【七】如金

剛三昧とは、金剛の能く諸山を破するが如く、是の三昧も亦た是の如く、

能く障礙を破し、六波羅蜜(多)の法もて直に佛道に至るなり。【八】

【九】不畏著色三昧とは、是の三昧を得れば、乃至天色すら尙ほ著せず、

何に泥んや餘色をや。【十】得勝三昧とは、所作あらんと欲するに、皆な能く

勝つて負けざるを得るなり。【十一】轉眼三昧とは、是の三昧を得る者は、魔及

び魔民、菩薩の短を見んと欲する者をして、之れを轉じて好く見ることを

作さしむるなり。【十二】畢法性三昧とは、是の三昧を得る者は、一切の法を見て、畢く法性の中に入る

るなり。【十三】能與安穩三昧とは、是の三昧を得ば、六道に往來して廻轉すと雖も、自ら必ず當に作佛

すべしと知るなり。【十四】安樂無憂師子吼三昧とは、是の三昧に入る者は、皆な能く一切の魔民を降伏し

【三】 名字語句莊嚴三昧の義解。

【四】 見諸法三昧の義解。

【五】 諸法無礙頂三昧の義解。

【六】 如虛空三昧の義解。

【七】 如金剛三昧の義解。

【八】 不畏著色三昧の義解。

【九】 得勝三昧の義解。

【十】 轉眼三昧の義解。

【十一】 畢法性三昧の義解。

【十二】 能與安穩三昧の義解。

【十三】 安樂無憂師子吼三昧の義解。



外道も敢て之れに當る者なし。

【四六】一切に二種あり、一には勝一切衆生三昧とは、是の三昧を得ば、一切衆生に於て最勝なり。【四七】一切に二種あり、一には

名字一切、二には實一切是れなり。三界に於て著心の凡夫、及び聲聞、辟支佛、及び初發意の菩薩の未だ是の三昧を得ざる者の中に於て、勝るが故に一切と言ふ。【四七】華嚴三昧とは、是の三昧を得る者は、十方の佛の七寶蓮華の上に坐し、虚空の中に於て、寶蓮華を諸佛の上に兩らすを見るなり。【四八】斷疑三昧とは、未だ佛を得ずと雖も能く一切衆生の所疑を斷するなり。【四九】隨一切堅固三昧とは、諸法實相の堅固なるに名く。是の三昧を得る者は、諸法の實相に隨つて餘法に隨はず。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧とは、是の三昧を得る者は、一切凡夫の法を過出し、菩薩の六神通、十力、四無所畏を得るなり。【五一】能達諸法三昧とは、是の三昧を得る者は、乃至諸法の如法性實際の中に通達し、乃至諸法平等に住せず。

【四六】勝一切衆生三昧とは、是の三昧を得ば、一切衆生に於て最勝なり。【四七】一切に二種あり、一には名字一切、二には實一切是れなり。三界に於て著心の凡夫、及び聲聞、辟支佛、及び初發意の菩薩の未だ是の三昧を得ざる者の中に於て、勝るが故に一切と言ふ。【四七】華嚴三昧とは、是の三昧を得る者は、十方の佛の七寶蓮華の上に坐し、虚空の中に於て、寶蓮華を諸佛の上に兩らすを見るなり。【四八】斷疑三昧とは、未だ佛を得ずと雖も能く一切衆生の所疑を斷するなり。【四九】隨一切堅固三昧とは、諸法實相の堅固なるに名く。是の三昧を得る者は、諸法の實相に隨つて餘法に隨はず。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧とは、是の三昧を得る者は、一切凡夫の法を過出し、菩薩の六神通、十力、四無所畏を得るなり。【五一】能達諸法三昧とは、是の三昧を得る者は、乃至諸法の如法性實際の中に通達し、乃至諸法平等に住せず。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

【四六】勝一切衆生三昧の義解。【四七】二種は一切——(一)名字一切、(二)實一切。【四八】華嚴三昧の義解。【四九】隨一切堅固三昧の義解。【五〇】出諸法得神通力無畏三昧の義解。【五一】能達諸法三昧の義解。【五二】諸法財印三昧の義解。【五三】諸法無分別見三昧の義解。

ざるなり。離諸見三昧とは、六十二の邪見、及び色等の法の中に相を取り、乃至佛見、法見、僧見、涅槃見(等)皆名づけて見となす。所以は何んとなれば、相を取れば能く著心を生ずるが故なり。(重り一切相三昧とは、即ち是れ無相解脫門相應の三昧なり。離一切著三昧とは、一切の相を離るるが故に、一切法に於て亦た著せざるなり。除一切懈怠三昧とは、是の三昧を得る者は、此の中に説くが如く、乃至七歳の(間)坐せず臥せず、菩薩定の三昧を得ば、常に懈怠の心なく、乃至佛を得て、初めて止息せざるなり。得深法明三昧とは、深法を名けて佛法一切智慧等と謂ふ。菩薩は是の三昧を得るが故に、能く遙に佛法を見、思惟し籌量して、深妙無比なるを知りたまふ。

不可奪三昧とは、是の三昧を得る者は、菩薩の法を行ずるに、能く其の志を奪ふ者なし。破魔三昧とは、是の三昧力を得ば、魔は是れ欲界の主なりと雖も、菩薩は人身を以て能く魔事を破するなり。不著三界三昧とは、是の三昧を得る者は、身は三界の中にありと雖も、心は常に涅槃にあるが故なり。不著起光明三昧とは、是の三昧を得る者は、能く無量の光明を放ちて十方を照す。見諸佛三昧とは、是の三昧を得ば、天眼天耳を得ずと雖も、而も能く十方の諸佛を見、十方の諸佛の所説の法を聞いて、疑ふ所を諮問するなり。薩陀

- 【五四】 離諸見三昧の義解。
- 【五五】 離一切相三昧の義解。
- 【五六】 離一切著三昧の義解。
- 【五七】 除一切懈怠三昧の義解。
- 【五八】 得深法明三昧の義解。
- 【五九】 不可奪三昧の義解。
- 【六〇】 破魔三昧の義解。
- 【六一】 不著三界三昧の義解。
- 【六二】 不著起光明三昧の義解。
- 【六三】 見諸佛三昧の義解。

波崙は、是の如き等の三昧の中に住して、  
即ち十方無量阿僧祇の諸佛を見、大衆の中にありて、諸の  
菩薩の爲に般若波羅蜜(多)を説きたまふ。

# 卷の第九十八

## 薩陀波羅品第八十八の下を釋す。

是の時十方の諸佛は薩陀波羅菩薩を安慰して言はく、善哉善哉善男子よ、我等は本菩薩道を行する時、般若波羅蜜多を求め、是の諸の三昧を得ると亦汝が今得る所の如し。我等は是の諸の三昧を得て善く般若波羅蜜多に入り、方便力を成就して阿耨跋地に住す。我等是の諸の三昧を觀するに、法として三昧を出で三昧に入る者あるを見ず、亦た佛道を行する者を見ず、亦た阿耨多羅三藐三菩提を得る者を見ず。善男子よ、是れは般若波羅蜜多と名づく。所謂是の諸の法あるを念はざるなり。善男子よ、我等は無所念の法の中に住して是の金色身、丈六の光明、三十二相八十隨形好、不可思議の智慧、無上戒、無上三昧、無上智慧を得て、一切の功德を悉皆具足す。一切の功德を具足するが故に、佛すら尙ほ相を取りて説き盡すこと能はず、何に況んや、聲聞辟支佛及び諸の餘人をや。是を以ての故に、善男子よ、是の佛法の中に於て、倍恭敬し愛念して清淨の心を生ずべく、善知識の中に於て佛の如き想を生ずべし。何となれば、善知識を守護せんがための故に、善薩は疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。是の時薩陀波羅菩薩十方の諸佛に白して言さく、「何等か是れ我が善知識として親近し供養すべき所の者なるや。」諸佛薩陀波羅菩薩に告げて言はく、「汝善男子よ、曇無竭菩薩は世世に教化し、汝をして阿耨多羅三藐三菩提を成就せしめ、汝を守護し、汝に般若波羅蜜多方便力を教ふ、是れ汝が善知識なり。汝曇無竭菩薩を供養して若くは一劫、若くは二劫、若くは三劫、乃至百千劫を過ぐるまで頂戴し恭敬せよ。一切の樂具及び、三

千世界の中の所有の妙なる色聲香味觸を以て、盡く以て供養すとも未だ須臾の恩をも報ゆること能はず。何となれば、曇無竭菩薩摩訶薩は因縁（を以て）の故に、汝をして是の如き等の諸の三昧を得て、般若波羅蜜（多）の方便力を得せしむればなり。諸佛は是の如く教化し安んず、薩陀波耆菩薩をして歡喜せしめ已つて、忽然として現ぜず。是の時薩陀波耆菩薩は三昧より起ち已つて、復佛を見ずして是の念を作す、是の諸の佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るや、復た諸佛を見ざるが故に惆悵して樂まず誰れか我が死を斷ぜん。復た是の念を作す、曇無竭菩薩は久遠より已來た、常に般若波羅蜜（多）を行じて方便力を得、及び諸の陀羅尼を得、菩薩法の中に於て自在を得て、多くの過去の諸佛を供養し、世世に我が師と爲り、常に我れを利益すと。我れ當に曇無竭菩薩に問ふべし、諸佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るやと。爾の時に薩陀波耆菩薩は、曇無竭菩薩に恭敬要樂尊重の心を生じて是の念を作す、我れ當に何を以てか曇無竭菩薩を供養すべきや、今我れ貧窮にして華香、瓔珞、燒香、檀香、衣服、幡蓋、金銀、眞珠、瑠璃、玻璃、珊瑚、琥珀なく、是の如き等を以て般若波羅蜜（多）及び説法の師たる曇無竭菩薩を供養すべきことあることなし。我が法は空しく曇無竭菩薩の所に往くべからず、我れ若し空しく往かば、喜悅の心生ぜず。我れ當に身を賣り財を得て、般若波羅蜜（多）の爲の故に、法師曇無竭菩薩を供養すべし。何となれば、我れ世世に身を喪ふこと無數にして、無始生死の中に或は死し、或は賣り、或は欲の因縁の爲の故に、世世に地獄の中にあつて無量の苦惱を受けて未だ會つて清淨の法と爲らざるが故に、是の故に説法の師を供養せんが爲に身を喪ふと。是の時薩陀波耆菩薩は中道に一大城に入り、市肆の上に至りて高聲に唱へて言はく、誰か人を須めんと欲するや、誰か人を須めんと欲するや、誰か人を買んと欲するやと。爾の時に惡魔は是の念を作す、是の薩陀波耆は法を愛するが故に自ら身を賣り、般若波羅蜜（多）の爲の故に、曇無竭菩薩を供養せん。當に般若波羅蜜（多）及び方便力を正問することを得べし。云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜（多）を行じて、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得、當に多聞具

足を得可きこと大海水の如し。是の時に沮壞すべからず、一切の功德を具足するを得、諸の菩薩摩訶薩を饑益し、阿耨多羅三藐三菩提のための故に我が境界を過ぎ、亦た餘人を教へて我が境界を出でて阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。我れ今當に其の事を壞すべし」と。爾の時に惡魔は隱蔽して諸の婆羅門居士をして其の自ら賣る聲を聞かざらしむるも、一長者の女は魔も蔽ふと能はず、其の宿(世)の因縁を以ての故なり。爾の時に薩陀波崙は身を賣るに售れず、憂愁啼哭して一面にあつて立ちて啼泣して言く、「我れ大罪の爲に身を賣るに售れず、我れ自ら身を賣り、般若波羅蜜(多)の爲の故に曇無竭菩薩を供養せん」と。爾の時に釋提桓因は是の念を作す、「是の薩陀波崙菩薩は法を愛して自ら其の身を賣り、般若波羅蜜(多)の故に、曇無竭菩薩を供養せん」と欲す、我れ當に之を試むべし、是の善男子は實に深心を以て法を愛するが故に是の身を捨つるや不やを知らん」と。

是の時に釋提桓因は婆羅門の身を化作し、薩陀波崙菩薩の邊にあつて行いて問うて言く、「汝善男子よ、何を以て憂愁啼哭し、顔色憔悴して一面にあつて立つや」。答て言はく、「婆羅門よ、我れ法を愛敬するが故に自ら身を賣り、般若波羅蜜(多)の爲に曇無竭菩薩を供養せん」と欲し、今我れ身を賣るに買ふ者あるとなし。「是の故に」自ら念へらく、薄福にして財貨物なし、自ら身を賣り般若波羅蜜(多)及び曇無竭菩薩に供養せん」と欲するに而も買ふ者なし」と。爾の時に婆羅門薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善男子よ、我れ人を須めず、我れは今天に祠せんと欲して、當に人の心、人の血、人の髓を須むべし、汝能く賣つて我れに與ふるや不や」。爾時に薩陀波崙菩薩は是の念を作す、「我れは大利を得第一利を得、我れ今便ち般若波羅蜜(多)の方便力を具足せんが爲に是の心、血、髓を買ふ者を得ん」と。是の時に心大に歡喜し悅樂して憂なく、柔和の心を以て婆羅門に語つて言はく、「汝の須むる所の者は我れ盡く汝に與へん」と。婆羅門の言はく、「善男子よ、汝何の價を須むるや」。答へて言はく、「汝の意に隨つて我れに與へよ」と。即時に薩陀波崙は右の手に利刀を執り左の臂を刺して血を出し、右

の骨肉を割いて、復骨を破り髓を出さんと欲する時、一長者の女あり、關上にあつて遙かに薩陀波耆菩薩の、自ら身體を割いて壽命を惜まざるを見て是の念を作す、是の善男子は何の因縁の故に其の身を困苦するや、我れ當に往いて問ふべしと。

長者の女即ち聞より下り、薩陀波耆の所に到つて問うて言はく、「善男子よ、何の因縁あつてか其の身を困苦し是の心、血、髓を用て何等をかなすや。」薩陀波耆答へて言はく、「般若波羅蜜(多)の爲の故に婆羅門に賣與して曇無竭菩薩を供養せんが爲なり。」長者の女の言はく、「善男子よ、是の身を賣らんとして自ら心、血、髓を出して曇無竭菩薩を供養せんと欲するに何等の功德利を得るや。」薩陀波耆答へて言はく、「善女人よ、是の人は善く般若波羅蜜(多)及び方便法を學す、是の人は當に我が爲に菩薩の作すべき所菩薩の行すべき所の道を説くべし。我れ是の法を學び、是の道を學んで阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に依止となつて、當に金色身、三十二相八十隨形好、大光無量明、大慈大悲、大喜大捨、四無所畏、佛の十力、四無礙智、十八不共法、六神通、不可思議清淨の戒、禪定智慧を得べし。阿耨多羅三藐三菩提を得て諸法の中に於て無礙一切の智見を得、無上の法寶を以て、分布して一切衆生に與ふ。是の如き等の諸の功德の利は我れ當に彼れに従つて之を得べし」と。是の時に長者の女は是の上妙なる佛法を聞いて、大に歡喜し心驚いて毛墜ら、薩陀波耆菩薩に語つて言はく、「善男子よ、甚だ希有なり、汝の説く所の者は、微妙にして値ひ難し、是の一一の功德法の爲の故に、應に恆河沙等の如き身を捨つべし。何となれば、汝の説く所の者は、甚だ微妙なるが故なり。汝善男子よ、汝が今須むる所に盡く當に相與すべし。金、銀、眞珠、瑠璃、琥珀、玻璃、珊瑚、瑪瑙等の諸の珍寶物及び香華、瓔珞、塗香、燒香、幡蓋、衣服、伎樂等の供養の具をもて、般若波羅蜜(多)及び曇無竭菩薩を供養せよ。汝善男子よ、自ら其身を困苦するを莫れ、我も亦曇無竭菩薩の所に往き、汝と共に諸の善根を植ゑて、是の如き微妙の法を汝が説く所の如く得んと欲するが故なり。」爾の時に釋提桓因は即ち本身に復し、薩陀波耆菩薩を講して言はく、「善哉善哉善男子よ、汝堅く是の事を受けて其の心を動ぜず、諸の過去の佛

の菩薩道を行する時も、亦た是の如く般若波羅蜜(多)及び方便力を求め、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。善男子よ、我れ  
 實には人の心、血、髓を用ゐず、但だ來つて汝が顔を相試むるのみ、我れ何等をか當に相與ふべきや。薩陀波菴の言は  
 く、「我れに阿耨多羅三藐三菩提を與へよ」。釋提桓因の言はく、「此れ我が力の辦する所にあらず、是れ諸佛の境界なり、  
 必ず相供養せん、更に餘願を索めよ」。薩陀波菴の言はく、「汝若し此れに於て力なく、汝必ず供養を見んとせば、我が是の  
 身を以て、平復して故の如くならしめよ」と。是の時に薩陀波菴、即ち平復して瘡痂あることなく、本の如くにして異ら  
 す。釋提桓因は其の願を與へ已つて忽然として現せず、爾の時に長者の女薩陀波菴菩薩に語つて言はく、「善男子よ、我が  
 舍に來到し、須むる所のものあらば、我が父母に従つて之を索めよ、盡く當に相與ふべし、我れも亦た當に我が父母を辭  
 し、諸の侍女と共に往いて、曇無竭菩薩を供養すべし、法を求めんがための故なり。即時に薩陀波菴菩薩は、長者の女と  
 俱に其の舍に到り、門外にあつて住す。長者の女入つて、父母に白さく、我れに衆くの妙なる華香及び諸の瓔珞、塗香、  
 幡蓋、衣服、金、銀、瓔珞、玻璃、琥珀、眞珠、珊瑚、琥珀及び諸の伎樂供養の具を與へよ。亦た我が身と、及び五百の侍女の先き  
 に給仕する所の者とをして、薩陀波菴菩薩と共に、曇無竭菩薩の所に到ることを聽(許)したまへ。般若波羅蜜(多)を供養せ  
 んがための故なり、曇無竭菩薩は當に我等がために法を説くべし、我れ當に説の如く行すべし、當に諸佛の法を得べし」と。  
 女の父母、女に語つて言はく、「薩陀波菴菩薩とは是れ何等の人なるや」と。女の言はく、「是の人今門外にあり、是の善  
 男子は深心な以て阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の無量の生死の苦を度せん欲す。是の善男子は、法のための故に自  
 ら其の身を賣りて般若波羅蜜(多)を供養す。般若波羅蜜(多)を菩薩所學の道と名づく。此の般若波羅蜜(多)を供養し、及び  
 曇無竭菩薩を供養せんがための故に市肆の上にあつて高聲に唱へて、誰れか人を須むるや、誰れか人を須むるや、誰れか人を買  
 はんと言ふも、身を賣るに售れず、一面にあつて立ちて憂愁啼哭す。是の時に釋提桓因、化して婆羅門となり、



來つて之を試みんと欲して問うて言はく、善男子よ、何を以て憂愁啼哭して一面に立つや。答て言はく、婆羅門よ、我が身を  
 賣らんと欲するは、般若波羅蜜(多)及び曇無竭菩薩摩訶薩を供養せんがための故なり。而も我れ薄福にして、身を賣るに售  
 れずと。時に婆羅門是の善男子に語つて言はく、我れは人を求めざるも、我れ天に祠せんと欲す、當に人の心、人の血、人  
 の髓を用ふべし、汝能く賣るや不やと。是の時この善男子、復た憂愁せず、其の心和悦して、是の婆羅門に語つて言は  
 く、汝が須むる所は我れ即ち相與へんと。婆羅門の言はく、汝何の價を求むるやと。答へて言はく、汝が意に隨つて我れに與  
 へよと。即時に是の善男子は右の手を以て利刀を執り左の臂を刺して血を出し、右の髀肉を割きて復骨を破り髓を出さんと  
 欲す。我れ闍土にありて遙かに是の事を見、我れ爾の時に是の念をなす、是の人は何故に其の身を困苦するや、我れ當に往  
 いて問ふべしと。我れ即ち闍より下り往いて問ふ、善男子よ、汝何の因縁を以ての故にか自ら其の身を困苦するや。是の善  
 男子我れに答へて言はく、姉よ、我れは是れ法の爲の故に般若波羅蜜(多)及び曇無竭菩薩なる説法者を供養せんと欲する  
 も、我貧窮にして所有なく金、銀、珊瑚、琉璃、瑪瑙、琥珀、玻璃、眞珠、華香、伎樂なし。姉よ、我れ法を供養せん  
 がために、自ら其の身を賣るに、今買ふ者を待たるに人の心、人の血、人の髓を須む。我れ是の價を用つて、般若波羅蜜  
 (多)及び曇無竭菩薩なる説法者を供養せんとすと。我れ問うて言はく、善男子よ、汝今自ら身より心、血、髓を出だして曇  
 無竭菩薩を供養せんと欲するに何の功德を得るや。是の善男子の言はく、曇無竭菩薩は當に我がために般若波羅蜜(多)及  
 び方便力を説くべし。此れは是れ菩薩の學ぶべき所、菩薩の作すべき所、菩薩の住すべき所、菩薩の行すべき道なり。我れ  
 當に是の道を學び、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切衆生の依止となるべし。我れ當に金色身、三十二相八十隨形好、大  
 光無量明、大慈大悲、大喜大捨、四無所畏、四無礙智、佛の十力、十八不共法、六神通、不可思議清淨の戒、及び禪定智  
 慧を得、阿耨多羅三藐三菩提を得べし、諸法の中に於て無礙一切の智見を得、無上の法寶を以て分布して一切衆生に與ふ。

是の如き等の微妙の大法を我れ當に彼れに従つて得べしと。我れ是の微妙不可思議の諸佛の功德を聞き、其の大願を聞いて  
 わが心歡喜して、是の念をなす、是の清淨微妙の大願は甚だ希有なること乃ち是の如し、一一の法のための故に恆河沙等  
 の如き等の身命を捨つべしと。今善男子は、法のために能く苦行難事を受けて、所謂身命を惜まず。我れに多の妙寶あり、  
 云何が願を生じて是の如きの法を勤求し、般若波羅蜜(多)及び曇無竭菩薩を供養せざらんやと。我れ是の如く思惟し已つて  
 薩陀波崙菩薩に語つて言はく、汝善男子よ、其の身を困苦すること莫れ、我れ當に我が父母に白して多く汝に金銀、珊瑚、  
 砗磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、玻璃、琉璃、眞珠、華香、瓔珞、塗香、末香、衣服、幡蓋及び諸の伎樂等を與ふべし、般若波羅蜜(多)  
 及び曇無竭菩薩なる說法者を供養せよ。我れも亦父母に求めて諸の侍女と共に汝と共に去りて曇無竭菩薩なる說法者を供養  
 し、汝と共に諸の善根を植ふ、是の如き等の微妙清淨の法を汝が所説の如く得ることとせんと。父母よ、今我れ並に五百の  
 侍女の先に給する所の者を聽許したまへ。亦我れに衆の妙なる華香、瓔珞、塗香、末香、衣服、幡蓋、伎樂、金銀、珊瑚等  
 の供養の具を持つことを聽したまへ。何となれば薩陀波崙菩薩と共に去つて、般若波羅蜜(多)及び曇無竭菩薩なる說法者を  
 供養せん、是の如き等の清淨微妙の諸の佛法を得んが爲の故なり。爾時に父母は女に報へて言はく、「汝の讀する所の者は  
 希有にして説くとも及び難し。是の善男子は法の爲に精進し大に法相を樂しむ。及び是の諸の佛法は不可思議にして一切世  
 間に於て最第一となし、一切衆生歡樂の因縁なり。是の善男子は是の法の爲の故に大に莊嚴す。我等は、汝の往いて曇無  
 竭菩薩に見えて、親近し供養すること聽すべし。汝大心を發し、諸の佛法を得んが爲の故に是の如く精進す、我等云何にし  
 てか當に隨喜せざるべき」と。是の女は曇無竭菩薩を供養せんが爲の故に、聽許を蒙むことを得て、父母に報へて言はく、  
 「我等も亦た是れに隨つて心歡喜す、我れ終に人の善法の因縁を斷ぜざるべし」と。

是の時に長者の女は七寶の車五百乘に、身及び侍女と共に種種の寶物供養の具を莊嚴し、種種の水陸の生華及び金銀の寶

華、衆色の寶衣、好者の綺香、淫香、瑠璃及び衆味の飲食を持し、薩陀波耆菩薩を五百の侍女と共に各一車に載せ恭敬圍繞し、漸漸に東に去つて摩香城を見るに、七寶もて莊嚴し、七重に圍繞し、七寶の軒、七寶の行樹皆亦七重なり。其の城の縱廣は十二由旬、豐樂安靜にして甚だ喜樂すべし。人民熾盛にして五百の市里街巷相當り、端嚴にして畫の如く、橋津は地の如くにして寬博清淨なり。遙かに衆香城を見るに、既に城中に入り曇無竭菩薩の高臺法座の上に坐するを見、無量百千萬億の衆恭敬圍繞して說法す。薩陀波耆菩薩曇無竭菩薩を見る時、心即ち歡喜す、譬ば比丘の第三禪に入るや心を攝して安穩なるが如し。見已つて是の念を作す、我等儀げ、車に載つて曇無竭菩薩への處に趣くべからずと、是の念を作し已つて、車より下り歩み進む。長者の女並に五百の侍女皆な亦た車より下る。薩陀波耆菩薩は、長者の女及び五百の侍女と共に、衆寶を莊嚴し、圍繞恭敬して俱に曇無竭菩薩の所に到る。爾の時に曇無竭菩薩訶摩羅は、七寶の臺あつて赤牛頭の栴檀を以て莊嚴をなし、眞珠の纏纏を以て臺上を覆ひ、四角には皆な摩尼寶珠を懸けて以て燈明となし、及び四寶の香爐には常に名香を焼いて散若波羅蜜、多を供養するが故に、其の臺の中に七寶の大牀あり。四寶の小牀を重ねて其の上に敷き、黃金摩書の般若波羅蜜「多」を以て小牀の上に置き、種種の幡蓋を莊嚴して其の上を垂覆す。薩陀波耆菩薩及び諸の女人は、是の妙臺の衆寶もて嚴飾せるを見、及び釋提桓因の無量百千萬の諸天と共に天の曼陀羅華、栴檀、磨衆の寶屑を以て臺上に散じ、天の妙樂を鼓つて虛空の中に於て此の臺に於て娛樂するを見る。爾の時に薩陀波耆菩薩釋提桓因に問う言はく、橋戸遍は何の因縁の故に、無量百千萬の諸天と共に、天の曼陀羅華、栴檀、磨衆の寶屑を以て臺上に散じ、天の妙樂を鼓る、虛空の中に於て此の臺上に娛樂するや。釋提桓因答へて言はく、「汝善男子知らざるや、此は是れ摩訶般若波羅蜜多なり、是れ諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く諸佛を生じ菩薩を攝持す。菩薩は是の般若波羅蜜多を以て、一切の功德を成就して諸佛の法一切種智を得し。是の時に薩陀波耆菩薩即ち歡喜して釋提桓因に問ふ、「橋戸遍は、般若波羅蜜多」は、諸の菩薩摩訶薩の母

にして、能く諸佛を生じ菩薩を攝持す。菩薩は是の般若波羅蜜(多)を學び、一切の功德を成就して、諸佛の法及び一切種智を得と、今何れの處にあるや。釋提桓因の言はく、「善男子よ、是の臺の中に七寶の大牀あり、四方の小牀を其の上に重敷し、黄金腰書の般若波羅蜜(多)を以て小牀の上に置き、曇無竭菩薩七寶の印を以て之を印す、我等は開き得て以て汝に示すと能はずしと。是の時に薩陀波崙は長者の女及び五百の侍女と共に、供養の具なる華香瓔珞幡蓋を取つて分つて二分となし、一分を般若波羅蜜(多)に供養し、一分を法座の上の曇無竭菩薩に供養す。爾の時に薩陀波崙五百の女人と共に華香、瓔珞、幡蓋、伎樂及び諸の珍寶を持して般若波羅蜜(多)を供養し已つて、然る後曇無竭菩薩の所に到り、到り已つて曇無竭菩薩を見るに法座の上にあつて座し、諸の華香、瓔珞、拈香、摩香、金銀、寶華、幡蓋、寶衣を以て、其の曇無竭菩薩の上に散じ、法の爲の故に供養す。是の時に諸の華香寶衣は曇無竭菩薩の上なる、虚空の中に於て化して華臺となり、碎末の栴檀、寶屑及び金銀の寶華は化して寶帳となり、寶帳の上には種種の寶衣は化して寶蓋となり、寶蓋の四邊に諸の寶幡を垂る。薩陀波崙及び諸の女人は、曇無竭菩薩所作の變化を見て大に歡喜して是の念をなす、是れ未だ曾て有らざる所なり、曇無竭大師の神徳乃ち稱なり。菩薩道を行する時の神通力すら尙ほ能く是の如し、何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得る時なやと。是の時に、長者の女及び五百の女人は清淨に信心し、曇無竭菩薩を敬重して甚な阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是の願をなして言はく、「曇無竭菩薩の如くに菩薩の諸の深法を得、曇無竭菩薩の如くに般若波羅蜜(多)を供養し、曇無竭菩薩の如くに大衆の中に於て般若波羅蜜(多)の義を演説し顯示し、曇無竭菩薩の如くに薩陀波崙菩薩及び五百の女人は、華香寶物を以て般若波羅蜜(多)及び曇無竭菩薩に供養し、已つて頭面に曇無竭菩薩を禮し、合掌恭敬して一面に立ち、一面に立ち已つて曇無竭菩薩に白して言さく、「我れ本般若波羅蜜(多)を求むる時、空閑林中に於て空申の聲を聞くに言く、「善男子よ、

汝はより東に行け、當に般若波羅蜜(多)を聞くを得べしと。我れ是の語を受けて東に行き、東に行くこと久しからずして是の念をなす、我れ何ぞ空中の聲に問はざるや、我れは當に何の處に去る可きや、是れより去ること遠きや近きや、當に誰に従つて聞くべきやと。我れ是の時に大に憂愁し啼哭し、是の處に於て住し、七日七夜憂愁するが故に、乃至飲食を念はず、但だ念すらく、我れ何の時に般若波羅蜜(多)を聞くを得べきと。我れ是の如く憂愁し、一心に般若波羅蜜(多)を念じ、佛身を見るに虚空の中において、我れに語つて言はく、善男子よ、汝大欲大精進の心をして放捨すること莫れ。是以て大欲大精進の心を以て、是より東に行き、是を去ること五百由旬にして城あり、象香と名づけ、是の中に菩薩摩訶薩ありて曇無竭と名づく。是の人の所に従つて、當に般若波羅蜜(多)を聞くことを得べし。是の菩薩は、世世に是れ汝が善知識なり、常に汝を守護せんと。我れ佛に従つて教誨を受け已つて、便ち東に行きて更に餘念なし、但だ念すらく、我れ何の時にか當に曇無竭菩薩の我がために般若波羅蜜(多)を説くを見るべきやと。我れ爾の時中道に住し、一切法の中に於て無礙の知見を得、諸の法性等の諸三昧を觀することを得、現在前に是の三昧に住し已つて、十方無量阿僧祇の諸佛の是の般若波羅蜜(多)を説くを見る。諸佛我れを讚して言はく、善哉、善哉、善男子よ、我れ本般若波羅蜜(多)を求むる時、諸の三昧を得ること亦た汝が今日の如しと。是の諸の三昧を得已つて、遍れく諸の佛法を得るに、諸佛我がために廣く法を説き、我れを安慰し已つて忽然として現ぜず。我れ三昧より起つて是の念をなす、諸佛は何れの處より來り、去つて何れの處に至るやと。我れ諸佛を見ざるが故に大に憂愁し復た是の念をなす、曇無竭菩薩は先づ佛を供養し、衆の善根を植ゑ、久しく般若波羅蜜(多)を行じ、善く方便力を知つて菩薩道の中に於て自在を得、是れ我が善知識にして我れを守護せんと。我れ當に曇無竭菩薩に是の事を問ふべし、諸佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るやと。我れ今大師に問ふ、是の諸の佛は何れの處より來り、去つて何れの處に至るや、大師よ願くは我がために諸佛の所從の來所、至處を説いて、我れをして知るとを得せし

め、知り已つて亦た常に諸佛を見ることを離れざらしめよ。

釋

釋して曰く、薩陀波崙は渴仰して、般若を聞かんと欲するが故に、十方諸佛の大衆のために法を説くを見て、其の心歡喜し、其の意滿つることを得たり。諸佛は其の信力の堅固にして精進し、動じ難きを以ての故に、其の心を安慰して讚じて、「善哉、我れ本初めて菩薩道を行じて般若を求むる時も亦た汝が今の如し、汝憂愁して自ら徳の薄きを謂ふこと莫れ」と言へり。爾の時に、薩陀波崙は大に諸の三昧力を得て其の心深く著す。是の故に、諸佛ために諸の三昧性を求めて實體を見ず、亦た三昧に入り三昧を出づる者を見ずと説く。

〔そは〕衆生は空にして法も亦空なるが故なり。諸佛は爲に、略して般若波羅蜜〔多〕の相を説いて是の法あるを念せず。所謂、一切法は無相の故に念

著すべからず、我等は是の無所念の法の中に住して、能く六波羅蜜〔多〕を具足するが故に、金色身を得ること、經の中に説くが如し。諸佛は教化し、利喜して其の心を安慰す。

問うて曰く、上に化佛已にために、曇無竭は是れ汝が世世の善知識なりと説けり、今何を以てか、復た何等か是我が善知識なりやと問ふや。答へて曰く、佛勅を以て善知識の中に於て、倍恭敬愛念すべきが故なり。又十方の佛の所に於て、曇無竭の功徳を聞かんと欲して、自ら信心堅固にして疑はざらしめんと欲するを以ての故に問ひ、十方の佛答へて經の中に説くが如しと説く。薩陀波崙は、是

【一】 第一問、上に已に曇無竭は是れ汝が善知識なりと説けり、今何を以てか「何等か是我が善知識なり」と問ふや、

曇無竭の度する所の因縁の人なるが故に諸佛佐助し示導す。或は諸の菩薩あつて、佛の度すべき所の者を佐助して佛の所に至らしむ。

問うて曰く、三上に虚空の聲を聞いて問はざるが故に七日啼哭す、今十方の佛を見ず、何を以てか、大に憂愁して、更に佛を見んことを求めずして、但だ曇無竭の所に於て諸佛去來のことを問はんと欲するや。答へて曰く、薩陀波崙は先時に肉眼あり、未だ三昧を得ず、深心を以て信じ、善法に著するが故に大に啼哭す。今や諸の三昧力を得て又十方の佛を見、諸の煩惱微薄し、著心已に離るるが故に、但だ一心に念ずらく、「我れ當に何の時に曇無竭を見るべきや」と。

問うて曰く、若し薩陀波崙は是の三昧力を得ば、何を以てか、還つて三昧に入らずして、十方の諸佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るかを問ひ、而も見んと欲することを曇無竭に問へるや。答へて曰く、十方の佛は尙ほ種種の因縁を以て、曇無竭を讚じて世世に是れ汝が師なり」と謂ふ、是の故に問はんと欲するなり。是の時に薩陀波崙、曇無竭菩薩を念ずらく、「是れ我が先世の因縁なり、是の故に恭敬尊重の心を生じ、大功徳あるを以ての故に尊重す、是れ先世の因縁の故に恭敬愛樂す」と。

【二】 第二問、上に虚空の聲を聞いて問はざるが故に七日啼哭す、今十方の佛を見ず、何を以てか大憂愁して佛を見んことを求めず、但曇無竭の所に於て、諸佛去來の事を問はんと欲するや。

【三】 第三問、若し常啼是の三昧力を得ば、何を以てか諸佛の去來を曇無竭に問へるか。

問うて曰く、先には薩陀波崙大に世間の事に著せず、深く般若波羅蜜(多)を愛するが故に愁憂啼哭すと説けり。今何を以てか自ら貧窮にして供養なきを鄙むや。但だ好心を以て師の意に隨はば、則ち是れ法供養なり、華香を用つて何かせんや。答へて曰く、法供養は上なりと雖も、而も世間の衆生の遠くより來つて法を求むるを見るに、空にして所有なければ、則ち喜心を發さず、世法を以ての故に、供養の具を求むるなり。

復次に、五波羅蜜(多)は般若波羅蜜(多)の法を助となし、助法の中には、檀波羅蜜(多)を首となす。薩陀波崙思惟すらく、「我れ福田を尊重することを得ば、曇無竭菩薩は當に助道法の根本を以て供養すべく、亦爲に起つて衆人に發さんと欲す」と。薩陀波崙は是れ智人なり、善人なり、貧窮にして而も能く供養す、何に況んや我等に於てをや。

復次に、諸の善法を行する時、思惟する時、其の味各異なり。薩陀波崙は布施味を行せんと欲す、是の故に供養の具を求むるなり。

問うて曰く、薩陀波崙は是れ大菩薩にして能く十方の佛を見、又諸の深三昧を得、何を以てか貧窮なるや。答へて曰く、有人の言はく、「此の人は家を捨てて佛道を求め、富家に生ずと雖も、道里

【四】 第四問、先には常啼大に世間の事に著せず、深く般若波羅蜜(多)を愛するが故に愁憂すと説き、今何を以てか自ら貧窮にして以て供養無きを鄙むや。但だ好心を以て師の意に隨はば則ち是れ法供養なり、華香を用つて何かせん。

【五】 五波羅蜜(多)。檀那波羅蜜(多)、尸羅波羅蜜(多)、羼提波羅蜜(多)、毗梨耶波羅蜜(多)、禪那波羅蜜(多)の五をいふ。

【六】 第五問、大菩薩たる常啼の貧窮なる理由如何。



懸遠にして、一身獨去し、財物を齎らさず」と。有人の言はく、「是れ夫人なりと雖も、宿世の小罪の因縁の故に貧窮の家に生ず」と。有人の言はく、「是れ小人なりと雖も、先世に少しく布施を行せし因縁の故に、大富家に生ず、蘇陀夷尼他等の如し。是れ諸天の供養する所の人にして、而も小家に生ずるなり」と。貧に二種あり、一には財貧、二には功德法貧なり。功德法貧は、最も大に恥づべし。財貧は好人にも亦あり、法貧は好人にはなき所なり。華香あることなしとは、上妙の寶華あることなきなり、又少なきを以ての故になしと言ふ。我れ若し空しく往かば、師は我が心を須めずと雖も大喜を得ず、是の故に、身を賣らんと欲するなり。

問うて曰く、若し身を賣りて他に與へば、誰か此の物を買うて、往いて師を供養せんや。答へて曰く、捨身即ち是れ大供養なり、去住あるとなし。有人の言はく、「是の人は身を賣り、財を取つて、人に因つて供養す。

我は供養せんが爲の故に、身を賣つて奴となる」と。又有人の言はく、「爾の時に、世の好人皆な法の如く自ら身を賣ると雖も、主は必ず能く之を聽し供養して而も還らんとす。復次に、是の人深心を發し、檀波羅蜜〔多〕を行せんと欲して、法及び法師を供養せんとするも、而

【七】蘇陀夷尼他。又は須陀那、譯して善施、佛弟子の名なり。

【八】二種の貧——(一)財貧、(二)法貧。  
【九】第六問、若し身を賣りて他に與へば、誰か此の物を買ひ、往いて師を供養せんや。

も外物なく唯だ己が身のみあり。是の故に身を賣る、是れ内物なり。外〔物〕内物の中に於ては内物を重しとなし、之を惜むと深きが故に、是の故に布施の願を破らざらんと欲し、身を賣りて供養す。此の中に自ら不悔の因縁を説く、我れ世世に身を喪ふこと無數なりとも、未だ曾て清淨法となさざるが故に、今説法者を供養せんがための故に、是の身を喪ふも、而も大に法利を得るなり。薩陀波崙は心を定めて身意を貪惜することを斷ち、道中に於て一大城に入り、賣買を得んと欲するに意の如くなるが故に、此の大城に入りて、一心に身を賣んと欲す。羞愧を除き、憍慢を破するが故に唱へて言はく、「誰か人を須めんとするや」と。

問うて曰く、(一〇) 魔は何を以て其の意を破せんと欲するや。答へて曰く、魔は常に諸佛菩薩の怨家となるが故に、來つて破せんと欲するなり。

復次に、諸の小菩薩は未だ諸法實相を得ざれば、魔及び惡人能く之を壞す。若し無生法忍を得ば、諸の菩薩神通力に住するも能く破する者なし。喩へば、小樹を栽うるに、小兒も能く破するも、大〔樹〕は之を破すべからざるが如し。

復次に、此の中に自ら魔の破する因縁を説く、所謂、是の薩陀波崙は法を愛するが故に、自ら身を賣つて般若波羅蜜〔多〕及び、(二) 法盛菩薩を供養す。當に正しく般若波羅蜜〔多〕を聞くを得べきこと、經の中に廣く説くが如し。

【一〇】 第七問、魔は何を以て其の意を破せんと欲するや。  
 【一一】 法盛菩薩、曇無竭菩薩の譯名。

問うて曰く、(二三) 若し魔にして薩陀波崙を壊せんと欲せば、先に來りて空中の聲を聞き、及び十方の佛を見る時、何を以てか壊せざるや。又今方に諸の婆羅門居士を隱蔽して、其の聲を聞かざらしむるや。答へて曰く、薩陀波崙は先に心未だ定まらずして身を惜み、未だ盡く十方の佛を見ず。已に諸の三昧を得て、其の心乃ち定り、今定心の相現す、是の故に魔驚く。若し菩薩の心未だ定らざれば、未だ能く魔を動かすこと能はず、若し大菩薩其の心已に定まれば、魔亦來らず。薩陀波崙は今心を定めて魔の境界を出でんと欲す、是の故に魔來る。

譬へば、負債者の未だ遠く去ることを欲せざれば、債主は之を遮らざるも、〔若し〕他界に出でんと欲するや、即ち其の去ることを聽さざるが如し。

問うて曰く、(二三) 魔は大力あり、何を以てか、此の菩薩を殺さずして但だ破壊するや。答へて曰く、魔は本より其の壽命を嫉まず、但だ其の佛心を憎むが故に、壊せんと欲するなり。又復た諸の天神の法は、人に重罪なくんば、妄りに殺すことを得ず、但だ壞亂し恐怖することを得るのみ。若し神に此の法なくんば、則ち人にして活くる者なからん、是の故に殺さす。婆羅門性の中に生じて戒を受くるが故に婆羅門と名づく。此を除けば通じて居士と名づく、眞に是れ居舎の主なり、四姓の中の居士にあらず。一の長者の女を除くとは、其は佛道の爲に、世世に功德を集むるを以ての故に、魔は蔽ふこと能はざるなり。復

【三】 第八問、若し魔にして常啼を壊せんと欲せば、先に來りて空中の聲を聞き、十方の佛を見る時、何を以てか壊せざるや。又婆羅門居士に聞かしめざる理由如何。

【三】 第九問、魔の菩薩を殺さず、但破壊するは如何。

た有人の言はく、「是の薩陀波崙は死すべからざるが故に、一の女人をして聞かしむ」と。有人の言はく、「是の曇無竭菩薩の神通力の故に、長者の女をして聞くことを得せしむるなり」と。是の如く三たび唱ふるに、人の買ふ者なく、便ち大に愁憂せり。

問うて曰く、「薩陀波崙は既に身を惜まず、人の買ふなしと雖も、亦た愁ふべからずや。答へて曰く、既に大心を發すも、其の願を滿せず、是の故に、大に愁ふるなり。釋提桓因は是の念をなす、薩陀波崙其の身を賣らんと欲すれども、買ふ者あることなしと。經の中に廣く説くが如し。

問うて曰く、「釋提桓因は報得の知他心を得、應に薩陀波崙の心已に決定せしを知るべし、今何を以てか來つて試むるや。答へて曰く、諸天は但だ世間の人心を知るのみ、作佛不作佛の心は其の知る所にあらず、佛を除いては能く其の佛道のための故に、授記を與ふることを知るあることなし。

復次に、釋提桓因は、多く引導する所あることを欲するが故に來つて之を試む。人の聞見する者をして皆な發心し佛を求めしむ。又金銀等の諸寶は、以て輕賤せざるが故に、燒鍛磨打するが如く、菩薩も亦た是の如し。若し能く肉を割いて血を出だし、骨を破つて髓を出だすに、其の心動せざれば、是れ正定の菩薩なり。是の故に、天帝來つて之れを試むるなり。

【一四】 第一〇問、常啼は身を惜まず、買ふ人なしと雖も、又愁ふ可らざるにあらずや。  
【一五】 第一一問、釋提桓因は報得の知他心あり、何を以てか今來つて常啼を試むるや。

問うて曰く、(一六)帝釋は是れ大天王なり、何を以てか妄語して是の言を作すや。我れ天を祠らんと欲して、人の心血髓を須むと。答へて曰く、若し慳貪瞋恚の煩惱を以てすれば、自利を求めんと欲するが故に妄語す。是の故に罪となす。帝釋にして若し實身に實語をなさば、菩薩則ち信せず。是の故に、其の國法の如く、天祠の須むる所は、其がために信受するが故に、「妄語をなすななり」。是の時に、薩陀波崙は、其の語を信じ、大に歡喜して、我れ大利を得(と)言ふ。大利とは、阿鞞跋致地なり、第一利とは、是れ佛道なり。大利とは、五波羅蜜(多)なり、第一利とは、般若波羅蜜(多)なり。大利とは、般若波羅蜜(多)なり、第一利とは、般若波羅蜜(多)なり。大第一利とは、般若波羅蜜(多)の方便力なり。大利とは菩薩の(一七)初地なり、第一利とは(一八)十地なり。大利とは、初地乃至十地なり、第一利とは(一九)第十地なり。大利とは、佛地なり。是の如く、次第に分別し、未だ具足せずと雖も、已に具足の因縁に住するが故に、便ち具足をなすと云ふ。

【一六】 第二二問、帝釋は是れ大天王なり、何を以てか我れ天を祠らんと欲して、人の心血髓を須むと妄語するや。

【一七】 初地。菩薩十地の中の初地即ち歡喜地のこと。

【一八】 十地とは、大乘菩薩の十地にして、一歡喜地、二離垢地、三發光地、四乾慧地、五極難勝地、六現前地、七遠行地、八不動地、九善慧地、十法雲地なり。

【一九】 第十地。法雲地にして智波羅蜜(多)を成就し、修惑を斷じて無邊の功徳を具足するをいふ。

【二〇】 菩薩地。通教十地の第九、佛果の因行を修する位なり。

【二一】 佛地。通教十地の第十位、第九の菩薩位の最後に煩惱、所知の二障の習氣を頓に斷じて成道せし位をいふ。

問うて曰く、**【三】**若し釋提桓因身を化して來らば、何を以てか汝は何等の價をか須むと言ふや。答へて曰く、其は曇無竭菩薩を供養して、其の願を滿せんことを欲するを知るが故なり。又復た釋提桓因は、薩陀波崙を苦困するが故に、其の索むる所の者大なるを畏る。是の故に、何等の價をか須むるやと言へり。汝が意に隨つて我に與へよとは、汝に於て大に貪惜せず、悔恨を致さざるものを以て我に與へよと言ふ**【意】**なり。薩陀波崙は力勢なく、**【三】**梅陀羅を使ふとを得ること能はざるが故に自ら刀を提り、波羅門も亦た罪を畏るるが故に破すること能はず、是を以て自ら刀を執つて身を破するなり。

問うて曰く、**【四】**若し長者の女、聲を聞かば、何を以てか來つて問はざるや、汝何を以てか自ら身を賣ると。答へて曰く、但だ空しく身を賣る事は輕く、身を破つて心髓を出だすとは重きを言ふ。故に長者の女は發心せり。長者の女は閣上に住在して、遙かに是の人の自ら割刺するを見て、是の念をなす、**【一】**一切衆生は皆樂を求め、苦を畏れて其の身を貪愛す、薩陀波崙は而も自ら割刺す、是れ希有なりとなす」と。又先世の福德因縁の牽く所を以ての故に、即ち其の所に往到して問ふ。薩陀波崙は曇無竭菩薩に供養せんと欲すと答ふ。復た問ふ、何等の利を得るやと。答へて言はく、般若波

を賣ると。**【三】**梅陀羅。印度にて最劣等階級に屬する賤民にして首陀羅族を父とし婆羅門族を母として生れ、常に屠殺等の賤業に従來す。**【四】**第一四問。若し長者の女、聲を聞かば、何ぞ來つて問はざるや、汝何を以てか身を賣ると。

般若波

羅蜜(多)を菩薩の所學と名づく。當に彼に從つて聞くべし、我れ是の道を學んで、當に作佛を得、一切衆生のために依止となるべし。譬へば、厚葉樹は蔭覆する所多きが如く、又熱き時に、曠野の險道〔に於ける〕清涼の大池の如し。佛は功德現るる事を説いて、以て發心すべきもののためにす、所謂、金色身、三十二相大光、無量光大光なり。閻浮提を惡世の衆生と爲す。諸佛の眞實の光明に限量あることなし。大慈、乃至六神通の義は、前に説くが如し。不可思議清淨の戒、禪定智慧は、佛戒等の五衆の中に説くが如し。諸法の中に於て、一切無礙の智見を得とは、諸佛は無礙の解脱あり、是れ解脱相應の智見なり。一切法の中に礙ふる所なき智見の分別は先きに説くが如し。薩陀波崙言はく、「我是の如く無量の佛の功德を得、無上の法寶を以て分布して一切衆生に與ふ」と。無上の寶とは、有人の言はく、「三寶の中の法寶なり」と。有人の言はく、「一切八萬四千の法衆、是を法寶となし、是を得るが故に、諸の煩惱を除き、諸の戲論を滅して、一切の苦を脱することを得」と。有人の言はく、「無上の法寶は、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり、更に過上の者なきが故なり」と。有人の言はく、「涅槃は是れ無上の法寶なり、何となれば一切有爲法には皆な上あり、阿毗曇に言ふが如く、一切有爲法及び虚空の非數縁の盡くるを名づけて有上の法となし、數縁盡くる、是を無上の法となす、數縁盡くるは即ち是れ涅槃の別名なるが故なり」と。有人の言はく、「涅槃の道は有爲なりと雖も、其を以て涅槃となすが故に、有爲法の中に於ては無上なりとなす」と。是の如き等の法寶を分布して、三乘

となし「以て」衆生に與ふ。是の如き等の無量の佛法は、當に師に從つて之を得べし。是の故に、我は是の老病生死所住の處なる不淨臭穢の身を捨つるなり。般若波羅蜜(多)を供養せんがための故に、佛身金色等を得べきことは、先に説くが如し。長者の女は、世世に諸佛を供養し、善根を種ゑて智慧明利なり。是の法を聞くや、其の心深く入り、大に法喜を得、乃至、心驚き毛豎ち、薩陀波崙に語つて言く、「甚だ希有なりとなす。汝の讚する所の法は大に微妙なり、是の一一の法のための故に、恆河沙等の如き身を捨つべし、何に況や一身をや」と。長者の女は、何の因縁の故に其の身を困苦するやを知らざるも、而も之を憐愍し心に不可なりと謂ふ。今是の無量無邊無比清淨の佛法を聞き、是の因縁を以て得べきが故に大に喜ぶ。是の故に是の法のための故に、恆河沙の如き身を捨つべしと説く。女の言はく、「汝は貧なるを以ての故に、自ら其の身を困苦す、今に於て止むべし、汝が須むる所を恣にせよ、當に以て相與ふべし、我れも又汝に隨つて而も此の道を求めん」と。

問うて曰く、(三五) 是の菩薩は既に自ら身體を割截す、云何が能く長者の女の與めに多く佛法を説くや。答へて曰く、是の菩薩は、心力大にして、身に苦ありと雖も、心を覆ふこと能はず。是の菩薩は始めに刀を以て肉を割き、血を流し、方に骨を破らんと欲するも、而も長者の女來つて未だ大に悶えざるが故に、能く法を説くことを得。釋提桓因は其の心の定まるを知つて、而も之を試むるのみ。故

【三五】 第一五問、是の菩薩は既に自ら身を割截す、云何が能く長者の女とともに多く佛法を説かんや。



に言ふ所なく、即ち本身に復つて讀して善哉と言ふ。汝が心堅く此の事を受くとは、帝釋意へらく、  
如し汝今の生死の肉身は未だ佛道を得ざるも、能く是の如く身を惜まざれば、汝は久しからずして當  
に一切法の中に於て、所著なきを得べく、無生法忍の中に住して、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得る  
と、過去の佛を以て證となさんと。是の如き等の種種の因縁をもて其の心を安慰す。我は是れ天王な  
り、佛道を愛樂するが故に來つて相試み、汝が心の堅軟云何を知らんと欲し、汝をして信せしめん  
と欲するが故に、人の心體を須めて天を祠らんと言ふも、實には須めざるなり。何等か汝の願なる  
や、當に以て相與ふべしとは、汝は是れ好人、是の佛種のために、當に相擁護すべしと「の意」なり。  
薩陀波崙は心直信善軟にして、深く佛道に著するが故に衆生を分別せず、帝釋の語を聞いて便ち言は  
く、「我に阿耨多羅三藐三菩提を與へよ」と。帝釋の言はく、「此れ我が力の能く辦する所にあらず、  
是れ佛の境界なり」と。

復次に、有人の言はく、「帝釋は大に薩陀波崙を苦困す、今此の語を以て之を謝するなり。帝釋の  
意へらく、「金銀寶物を求むるを謂うて、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を索むるとを知らず、既に與ふ  
ること能はずと愧負するのみ」と。復た更に語つて言はく、「更に餘願を索めよ、必ず相供養せん」と。  
帝釋の語る意は、「我れ既に大に相苦困するが故に、直ちに爾ることを得ず、而も去つて相供養する  
ことを要す」と。薩陀波崙は身を惜しむにあらずと雖も、此の身を以て曇無竭菩薩を供養し、般若波

羅蜜(多)を聞かんと欲するを以て、是の故に語つて言はく、「若し汝に此の力なくんば、我が身體をして平復なること故の如くせしめよ」と。帝釋言はく、「汝の言ふ所の如く、瘡は即ち平滿して、本と異なることなし」と。

問うて曰く、(二七) 先に已に肉を割く、云何が平滿なるを得せしむるや。答へて曰く、佛説に五の不思議あり。龍事の所作すら尙ほ不可思議なり、何に況んや天をや。又虚空の中には微塵充滿し、帝釋の福德より生ずる心は便ち能く和合平滿す。諸天及び地獄の身の如きは是れ胎生の身にあらす、罪福因縁の故に和合して便ちあるなり。是の時に帝釋は其の心の堅きを知り、願を與へ已つて即時に滅し去る。爾の時に、薩陀波崙は宿世の微罪已に畢つて福德明に盛なり、是の故に長者の女は將に歸らんとす、須むる所のものあらば、我が父母に従つて是を索めよと、經の中に廣く説くが如し。

問うて曰く、(二七) 是の女は先に、「汝が須むる所の者は盡く我に従つて之を索めよ」と言ひ、今何を以てか我が父母に従つて索めよと言ふや。答へて曰く、今既に將に歸りて舍に到らんとす、薩陀波崙に目あたりに見えて舍に入り、父母に従つて之を得るを以て愧ぢて前の言を稱へず、是の故に先づ自ら父母に従つて之を索めよと説くなり。又女の力は能く寶を得と雖も、子女の法なるを以ての故に、

【二六】 第一六問、已に肉を割く、云何が平滿を得せしむるか。

【二七】 第一七問、是の女は先に「汝が須むる所のものは盡く我に従つて之を索めよ」といひ、今何を以てか我が父母に従つて索めよといふか。

父母に從つて之を索め、女既に舎に入るや、先に許す所の如く、父母に從つて索め、「而る後之を」與ふ。其の國に佛法あることなし、是の故に女に問ふ、「阿誰か是れ薩陀波崙菩薩なるや」と。「時に」女は見し所の如く、已に聞きし所の如く、盡く父母に向つて、薩陀波崙の事を説き、父母は我と薩陀波崙菩薩と俱に、五百の侍女、併に供養の具を以て、曇無竭菩薩を供養することを聽すべし。父母は其の言を聞いて、即ち聽して女の意の如くせり。

問うて曰く、長者は貴くして而も力あり、云何が先に薩陀波崙を識らず、其の功德を聞くが故に、便ち能く女及び其の眷屬寶物を之に與へて俱に去らしむるや。答へて曰く、長者も亦た徳本を植うるも、因縁少なきを以ての故に、無佛國に生じ、暫らく佛徳を聞くや、其の宿識を發して、心即ち開悟するが故に能く發遣す。譬へば、蓮華の生長し具足するや、日を見て開敷するが如し。父母は女の心の淳熟して不淨の行なく、操を持して忘れず、世の樂を樂しまずして、但だ法利を求むるを知り、其の心至つて制止すべからざるを知る。若し其の意に違へば、恐らくは自害せんと思惟し籌量し已つて、既に其の意を全うし、自ら功德を得、歡喜して去らしむ。世間の因縁は深く著して解き難きも、愛の至るが故に尙ほ違ふこと能はず、何かに況んや佛道のため

【二六】 第一八問、長者は貴くして力あり、云何が先に常暗を識らず、其の功德を聞くが故に、便ち能く女、及び眷屬寶物を之に與へ、俱に去らしむるか。

にするを聽さるるを以て、寶物を惜まず、亦た隨喜の心を以て、之がために歡喜す。爾の時に衆の心既に定まり、七寶の車を莊嚴し、大衆と共に圍遶して稍稍東に行く。是の時、五百の女の親屬及び城中の衆人は、其の希有にして及び難きの事を見て、皆な亦隨ひ去る。人衆既に集り、歡悅して共に行き、衆香城を渴仰すること、渴する者の飲を思ふが如し。漸漸に路を進み、遙に衆香城を見るや、乃至長者の女及び五百人と共に、恭敬圍遶して、曇無竭の所に往かんと欲す。

問うて曰く、曇無竭は是れ大菩薩にして、聞持等の諸の陀羅尼を得、般若波羅蜜(多)の義は、已に自ら通利し憶持す、何ぞ七寶の臺に書する般若の經卷を用つて中に著いて供養するや。答へて曰く、種種の因縁ありと雖も、略して説くに二義あり。一には衆生の心行不同なるにより、或は

【元】 第一九問、曇無竭は已に般若の義に通達せり、何ぞ七寶の臺に書する般若の經卷を用つて、中に著いて供養する

經卷を見んことを樂ひ、或は演説を聞かんことを樂ふがためなり。二には曇無竭の身、白衣となつて現れて家屬にあり、鈍根の衆生は或は是の念を作す、「此れ居家にあれば必ず染著あり、何ぞ能く畢竟清淨無著の般若波羅蜜(多)を以て、衆生を利益せん、自ら無著ならず、何ぞ能く無著の法を以て教化せんや」と。是の故に、其の經文を書して七寶の牒上に著け、衆寶を供養するに、諸の天龍鬼神も皆な亦た共に來つて恭敬し、華香幡蓋を供養し、七寶を雨らし、衆生の「之を」見る者は信根を増益す。則ち此の法を以て佛語を示傳し、文を案じ、教を演じて、一切寶臺莊嚴の具、及び薩陀波崙を

勸發す。問ふ、釋提桓因は經の中に七寶の印を説くが如し、印とは是れ曇無竭眞寶の印なり。常に自ら手に執つて以て經を印す。有人の言はく、「七寶の印とは、佛道を求むるに七大神あり、是れ執金剛の杵にして、常に曇無竭菩薩に給して、經文を守護せしめ、魔及び魔民をして、改めて更に錯亂せしめず。般若を貴敬するが爲の故に、人は但だ演説を聞いて、發心する所の者あり、人其の莊嚴の文字を見て、而も歡喜發心する者あり。是の故に、寶臺を莊嚴し、金牒書七寶印を用つて印す。

問うて曰く、臺上に書寫する所の般若と、曇無竭菩薩の口に演説する所の般若と二處俱にありと雖も、而も書寫する處のものは、能く人を益すること能はず、何を以て先づ臺の所に至るや。答へて曰く、書する所の般若は法寶の中に入る。佛寶の次第は法寶にあるが故に、一人應に先づ供養すべし。曇無竭は一人なるが故に、僧寶には攝せざる所なり、是の故に、

先づ法寶を供養す。又曇無竭菩薩の所説は是れ法なりと雖も、而も衆生は人相を取るが故に多く著心を生ず。若し書する所の般若を見て人相を生ぜざれば、餘相を取つて著心を生ずと雖も、人に著して患を生ずると少し、是の故に先づ經を供養す。經法は諸佛すら尙ほ供養す、何に況んや曇無竭及び薩陀波崙をや。曇無竭は、般若波羅蜜(多)に因るが故に、所因の本を供養することを得。何ぞ先づ供養せざることを得ん。是の故に、供養する所を分つて、具に二分となすなり。

【三〇】 第二〇問、臺上に書寫する般若と法盛の演説する般若と、二處俱に力ありと雖も、而も書寫する處のものは人を益する能はず、何を以てか先づ臺の所に至るや。

問うて曰く、**三**曇無竭には六萬の姝女と五欲の宮殿とあり、云何が能く散する所の花物を以て、化して花臺となすや。答へて曰く、有人の言はく、「諸佛の神力は、薩陀波崙の供養する所に因つて變化をなす」と。有人の言はく、「曇無竭は是れ大菩薩にして法性生身なり、衆生を度せんが爲の故に五欲を受く。曇無竭菩薩の名字義の中に説くが如し。

問うて曰く、**三**菩薩の法は先づ衆生の中に於て悲心を起し、衆生の苦を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む、今は但だ曇無竭の神力威徳を見て云何が發心するや。答へて曰く、**三**發心に種種あり、説法を聞いて而も發心する者あり、衆生に於て慈悲を起して而も發心する者あり、神通力大威徳を見て而も發心する者あり。然る後漸漸に而も悲心を生ず、智印經の中に説くが如し。愛に依つて而も愛を斷じ、慢に依つて而も慢を斷ずること、人の道法を聞いて是の法に愛著するが如し、故に五欲を捨てて出家す。又某甲の阿羅漢道を得と聞いて、高心を生ずるや、此の人は我が事に勝ることなし。彼すら尚ほ能く爾なり、「阿羅漢道を得」。我にして何ぞ能はざらんと。而も大精進を生じて阿羅漢道を得。佛道の中も亦是の如し。長者の女等及び五百の女人は、常に深く貪り、勢力自在に樂しむ。聞くならく、「往古に人あり、神力變化して寶物具足し、人中に天の樂を受け、後に曇無竭の臺觀宮

【三】 第二一問、法盛には六萬の姝女と五欲の宮殿とあり、云何が能く散する所の花物を以て、化して華臺とすや。

【三】 第二二問、菩薩の法は先づ衆生の中に於いて悲心を起し、衆生の苦を度せんと欲するが故に、無上正等正覺を求む。今は但曇無竭の神力威徳を見て、云何が發心するや。

【三】 發心に種種あり。

殿を見、大法座の上に在つて、坐して天人を供養す。又供養する所のものを見て、虚空の中に於て化して大臺を成じ、心即ち大に喜んで遭ひ難きの想を發す」と。皆な福徳の因縁より是の事を辨すべきを知る。是の故に皆な佛心を發作し、聞いて發心する所の者皆な次第行を行す。毗摩羅結經の中に説くが如し。愛慢等の諸の煩惱は皆な是れ佛道の根本なり。是の故に女人の是の事を見るや、已に愛樂の心を生じ、福徳の因縁を以て、是の事を得べきを知るが故に皆な發心す。是の愛慢によつて、後に清淨の好心を得るが故に、佛道の根本なりと言ふ。譬へば、蓮華の汗泥より生ずるが如し。發心して已に願をなすこと曇無竭のなす所の如く、我等も亦た當に是れを得べし。爾の時に、薩陀波崙等、頭面に曇無竭菩薩を禮す。華香の供養は貴からざるが故に先にし、身を供養することは貴重なるが故に後に禮拜す。禮拜し已つて、本般若を求むる因縁を説く、經の中に説くが如し。

「我もと般若を求むる時、空中の聲を聞く、乃至我れ今大師に問ふ、諸佛は何れの所よりか來り、去つて何れの處にか至る」と。

問うて曰く、(三) 薩陀波崙は諸の大三昧を得て、所謂、破無明、觀諸法性等なり、云何が空を知らず、而も佛相を取つて深く著を生ずるや。答へて曰く、新發意の菩薩は、能く總相、諸法の空無相を知ると雖も、諸佛の所に於て深く愛著するが故に、佛相の畢竟空なることを解すること能はず。空を

【三】 第二三問、常啼は諸の大  
三昧を得て、云何が空を知ら  
ず、又佛相を取つて深く著す  
るや。

知ると雖も、而も空と合すること能はず。何となれば、諸佛には無量無邊の實功德あればなり。是の菩薩は利根なるが故に深く入り深く著す。若し佛是の菩薩のために空を説かざれば、是の菩薩は佛を愛するがための故に能く自ら親族を滅す、何に況んや餘人をや。但だ空を解するを以ての故に是のことなし。薩陀波崙は深く諸佛に著するが故に、知ること能はずして、而も今大師に問ふ。今我が爲に諸佛來去の相を説きたまへ、我れ佛身を見て厭足なきが故に、常に諸佛を見ることを離れずと。



# 卷の第九十九

## 曇無竭品第八十九の上を釋す。



爾の時に曇無竭菩薩摩訶薩、薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善男子よ、諸佛は從つて來る所なく亦去つて至る所なし。何となれば諸法如は不動相にして、且つ諸法如は即ち是れ佛なるが故なり。善男子よ、無生の法は無來無去なり、無生の法は即ち是れ佛なり。無滅の法は無來無去なり、無滅の法は即ち是れ佛なり。實際法は無來無去なり、實際法は即ち是れ佛なり。空は無來無去なり、空は即ち是れ佛なり。善男子よ、無染は無來無去なり、無染は即ち是れ佛なり。寂滅は無來無去なり、寂滅は即ち是れ佛なり。虛空は無來無去なり、虛空は即ち是れ佛なり。善男子よ、是の諸の法を離れて、更に佛なく、諸佛如と諸法如は、一如にして分別なし。善男子よ、是の如く常にして二なく三なし。何となれば諸の數法を出すに所有なきが故なり。譬ば春の末月の日中熱する時、人あつて煽動を見ても之を返ふに、水を求め得んと望むが如し。汝が意に於ては云何。是の水は何れの池、何れの山、何れの泉より來つて、今何れの處に去るや。若くは東海、若くは西海、若くは南海、若くは北海に入るや」と。薩陀波崙の言はく、「大師よ、煽の中にすら尚ほ水なし、云何にしてか、當に來處、去處のあるべきや」と。曇無竭菩薩薩陀波崙に語つて言はく、「善男子よ、愚夫は無智なるを以て、熱湯の爲に逼まられて煽動を見て、水なきに水の想ひを生ずるや。善男子よ、人あつて諸佛を以て來あり去ありと分別せば、當に知るべし是の人ば皆な

【一】此の品にも前品に續き、曇無竭の常啼に對する説法の物語を説けり。他本には品名を「法尙品」とせり。

是れ愚夫なりと。何となれば、善男子よ、諸佛は色身を以ては見るべからず、諸佛の法身は無來無去なり、諸佛の來處去處も亦た是の如くなるが故なり。善男子よ、譬へば幻師の種種の若くは象、若くは馬、若くは牛、若くは羊、若くは男、若くは女等を幻作するが如し。是の如き等の種種の諸物、汝が意に於て云何。是の幻事は何の處より來り、去つて何の處に至るや」と。薩陀波耆の言はく、「大師よ、幻事は實なし、いかにしてか當に來去の處あるべき」と。「善男子よ、是の人の佛に來る(處)あり、去る(處)ありと分別すること亦た是の如し。善男子よ、譬へば夢中に若くは象、若くは馬、若くは牛、若くは羊、若くは男、若くは女等を見るが如きは汝が意に於て云何。夢中に見る所は來處あり去處ありや不や」と。薩陀波耆の言はく、「大師よ、是の夢中に見る所は虛妄なり、云何が當に來去あるべき。善男子よ、是の人の佛に來り去ありと分別すること亦是の如し。善男子よ、佛の説きたまはく、諸法は夢の如くにして、若し衆生あつて是の諸法の義を知らざれば、各字色身を以て佛に著し、是の人は諸佛に來あり、去ありと分別す。諸法實際の相を知らざるが故に。昔な是れ愚夫無智の數なり。是の人は數數五道を往來し、般若波羅蜜(多)を遠離し、諸の佛法を遠離す。善男子よ、佛の説きたまはく、諸法は幻の如く夢の如し、若し衆生あつて實の如く知らば、是の人は諸法は若くは來り、若くは去り、若くは生じ、若くは滅すと分別せず。若し諸法を若くは來り、若くは去り、若くは生じ、若くは滅すと分別せずんば、即ち能く佛の説く所の諸法實相を知るなり。是の人の般若波羅蜜(多)を行じ、阿耨多羅三藐三菩提に近づくと名づけて眞の佛弟子となす。虛妄にして人の信施を食せず。是の人は應に修養を受けて、世間の福田となるべし。善男子よ、譬へば大海の水の中の諸寶は、東方より來らず、南方西方北方四維上下より來らざるが如し。衆生の善根の因縁の故に海より此の寶を生ずるも、此の寶は亦た因縁なくして而も生ぜず。是の寶は昔な是れ因縁和合より生ず。是の寶は若し滅するとも、亦た至つて十方に去らず。諸緣合するが故にあり、諸緣離るるが故に滅す。善男子よ、諸佛の身も亦た是の如く、本より業因縁の果報より生じ、生ずるに十方より來らず、滅する時も

亦た去つて十方に至らず。但だ諸の縁合するが故にあり、諸の縁離るるが故に滅す。善男子よ、譬ば雲霞の聲の出づる時に來る處なく、滅する時に去る處なく、衆縁和合するが故に生ずるが如し。槽あり、頭あり、皮あり、絃あり、柱あり、椗あり。人あつて手を以て之れを鼓つに、衆縁和合して而も聲あり。是の聲は亦た槽より出づるにあらず、頭より出づるにあらず、皮より出づるにあらず、絃より出づるにあらず、柱より出づるにあらず、亦人の手より出づるにもあらず。衆縁和合して爾も乃ち聲あり。是の因縁離るる時は亦た去る處なし。善男子よ、諸佛の身も亦た是の如く無量の功德の因縁より生ず、一因一縁一功德より生ずるにあらず、亦た因縁なきにもあらず、衆縁の和合あるが故にあり、諸佛の身に獨り一事より成るにあらず、來るに所來なく、去るに所至なし。善男子よ、當に是の如く諸佛の來相去相を知るべし。善男子よ、亦た當に一切法に來去の相なきを知るべし。汝若し諸佛、及び諸法の無來、無去、無生、無滅の相を知らば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得、亦た能く般若波羅蜜、多及び方便力を行ぜん。爾の時に釋提桓因の曼陀羅華を以て、薩陀波密菩薩摩訶薩に與に是の言をなす、「善男子よ、是の華を以て曇無竭菩薩摩訶薩に供養せよ、我れ當に守護し、汝に供養すべし。所以は何んとなれば、汝は因縁力を以ての故に今日百千萬億の衆生を饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむるが故なり。善男子よ、是の如き善人には甚だ過ひ難しとなし、一切衆生を饒益せんが爲の故に無量阿僧祇劫の間諸の勤苦を受く」と。薩陀波密菩薩摩訶薩は釋提桓因の曼陀羅華を受け、曇無竭菩薩の上に散じて白して言さく、「大師よ、我れ今日より身を以て師に屬して供給し供養せん」と。是の如く三たび白し已つて掌を合せて師の前に立つ。是の時に長者の女及び五百の侍女、薩陀波密菩薩に白して言さく、「我等は今日より身を以て師に屬せん、我等は是の善根の因縁を以ての故に、當に是の如きの法を得べし。亦た師の得る所の如く、師と共に世世に諸佛を供養し、世世に常に師を供養せん」と。是の時薩陀波密菩薩は長者の女及び五百の女人に語つて言く、「若し汝等至誠心を以て我れに屬せば我當に汝を受くべし。」諸の女の言はく、「我等は誠心

を以て師に屬し、當に師の教に隨ふべし」と。是の時に薩陀波耆菩薩は五百の女人並に請の莊嚴の寶物、上妙の供具及び五百乘の七寶の車を曇無竭菩薩に奉上して白して言さく、「大師よ、われ是の五百の女人を持して大師に奉給し、是の五百の車を以て師の所用に隨はしめん」と。爾の時に釋提桓因薩陀波耆菩薩を讀して言はく、「善哉善哉、善男子よ、菩薩摩訶薩は一切の所有を捨つると應に是の如くなるべし。是の如きの布施は疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是の如く法を説く人を供養せば、必ず般若波羅蜜(多)及び方便力を聞くを得む、過去の諸佛の、本菩薩道を行する時も亦た是の如く、布施の中に住して般若波羅蜜(多)及び方便力を聞くことを得て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり」。

爾の時に曇無竭菩薩は、薩陀波耆菩薩をして善根を具足せしめんと欲するが故に、五百乘の車と、長者の女及び五百の侍女となを受け、受け已つて還た薩陀波耆菩薩に與ふ。是の時に曇無竭菩薩は法を説き、日没に至つて起つて宮中に入るや、薩陀波耆菩薩摩訶薩是の念をなす、「我れ法の爲めの故に來る、應に坐臥すべからず。二事を以てすべし、(即ち)若くは行じ、若くは立つて、以て法師の宮中より出でて法を説くを聞かん」と。爾の時に曇無竭菩薩は七歳一心に無量阿僧祇の菩薩三昧に入り、及び般若波羅蜜(多)方便力を行するや、薩陀波耆菩薩も亦七歳、經行し住立して、坐せず臥せず睡眠あることなし。欲悲惱なく、心味に著せずして但だ曇無竭菩薩摩訶薩を念じて、何れの時にか三昧より起ち、出でて而も法を説くべきやと。薩陀波耆菩薩は、七歳を過ぎ已つて是の念をなす、我れ當に曇無竭菩薩摩訶薩の爲めに、說法の座を敷くべし、曇無竭菩薩摩訶薩は當に上に坐して法を説くべし、我れ當に地に灑いて清淨にし、種種の華を敷じて、是の處を莊嚴すべし。曇無竭菩薩摩訶薩の當に般若波羅蜜(多)及び方便力を説くべき爲めの故なりと。是の時に薩陀波耆菩薩と、長者の女、及び五百の侍女とは、曇無竭菩薩摩訶薩の爲めに七寶の粧を敷き、五百の女人は各各上衣を脱して以て座上に敷いて是の念をなす、曇無竭菩薩摩訶薩よ、當に此の座の上に坐して、般若波羅蜜(多)及び方便力を説くべしと。薩陀波耆菩薩は座を敷き已

つて、水を求めて地に灑がんとするも而も得ると能はず。所以は何人となれば、惡魔の隱蔽して水を現きざらむるが故なり。魔は是の念をなす、薩陀波耑菩薩は水を求むるに得ず、阿耨多羅三藐三菩提を行するに、乃至一念の劣心異心を生ずれば則ち善根も増さず智慧も照さず、一切智に於て而も稽留ありと。爾時に薩陀波耑菩薩是の念をなす、我れ當に自ら其の身を刺し、血を以て地に灑ぎ、塵土の來つて大師を笠すとなからしむべし。我れ何ぞ此の身を用ゐん、此の身は必ず當に破壊すべし、我れ無始の生死より已來數身を喪ふも未だ曾て法の爲にせずと。即ち利刀を以て自ら刺して血を出して地に灑ぐに薩陀波耑菩薩、及び長者の女並に五百の侍女も皆な異心なければ、惡魔も亦便を得ること能はず。是の時に釋提桓因是の念をなす、未だ曾てあらざる所なり、薩陀波耑菩薩の法を愛すること乃ち爾なり。刀を以て自ら刺し、血を出だして地に灑ぐに、薩陀波耑及び衆の女人の心動轉せざれば、惡魔波旬も其の善根を壞すること能はず、其の心堅固にして大莊嚴を發し、身命を惜まず、深心を以て阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の無量生死の苦を度せんと思ふと欲すと。釋提桓因薩陀波耑菩薩を讚して言はく、「善哉善哉善男子よ、汝の精進力大に堅固にして動じ難きと不可思議なり、汝は法を愛し、法を求むるを以て最も無上なりとなす。善男子よ、過去の諸佛も亦是の如く、深心を以て法を愛し法を惜み法を重じ、諸の功德を集めて阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。薩陀波耑菩薩是の念をなす、我れ曇無竭菩薩摩訶薩の爲に法座を敷き、掃灑清淨にして已訖れり、當に何れの處に於てか、好名の華を得て此の地を莊嚴すべき。若し曇無竭菩薩摩訶薩法座の上に座して法を説く時あらば、亦當に華を散じて供養すべしと。釋提桓因は薩陀波耑菩薩の心に念ふ所を知り、即ち三千石の天の曼陀羅華を以て薩陀波耑菩薩に與ふ。薩陀波耑菩薩華を受け已つて半を以て地に散じ、半を留めて曇無竭菩薩摩訶薩法座の上に坐して法を説く時待つて當に供養すべし。爾の時に曇無竭菩薩摩訶薩七歳を過ぎ已つて諸の三昧より起つて、般若波羅蜜(多)を説かんが爲の故に、無量百千萬の衆に恭敬圍遶せられ法座の上に往いて坐す、薩陀波耑菩薩曇無竭菩薩を見る時、心に悅樂を

得ること譬へて比丘の第三禪に入るが如し。

釋して曰く、薩陀波崙菩薩は、諸法の空にして來去なきの相を知ると雖も、未だ能く深く入ること能はず、亦た種種の法門を解すること能はず、諸佛の身に於ては恭敬深重なるが故に空を觀する

こと能はざることを、譬へば、大海の水波は其の力大なりと雖も、須彌山の邊に到れば、則ち退いて用

なきが如し。薩陀波崙菩薩も亦た是の如く、大空の智力ありと雖も、佛の所に到れば、則ち亦た用ふ

ること無し。是の故に、曇無竭菩薩は今「薩陀波崙菩薩の」爲めに説いて、

「諸佛は從來する所なく、去るに亦た所至なし」と。此の中に、曇無竭は自ら因縁を説く、所謂、「諸法は如にして不動の相なり、諸法如は即ち是れ佛なり」と。

問うて曰く、(三)何等か是れ諸法如なるや。答へて曰く、諸法實相、所謂

性空、無所得空等の諸の法門なり。

問うて曰く、三摩訶般若波羅蜜多は佛法大乘六波羅蜜多の中に於て第一の法なり。若し佛なき

くんば、則ち般若を説くものなけん。三十二相、八十隨形好、十力、四無所畏等、色無色等の淨妙の

五衆和合す、是の故に名づけて佛となす。五指の和合するを名づけて拳となし、無拳と言ふことを得

ざるが如し。名字既に異にして形亦た異り、力用も亦た異れども、無拳と言ふことを得ず。是の故に

【三】 第二問、三十二相、八十隨好形、十力、四無所畏等和合するが故に佛ありと知るや如何。

【二】 第一問、諸法如とは何ぞや。

佛あるを知るや。答へて曰く、然らず。佛法の中には二諦あり、一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の故に、佛は般若波羅蜜〔多〕を説くと言ひ、第一義諦の故に諸佛は空、無來、無去と説く。汝が説く所の如きは、清淨の五衆和合するが故に名づけて佛となす。若し和合するが故に有なれば是れ即ち無となす。經の中に佛自ら因縁を説くが如し。五衆は佛に非らず、五衆を離るも亦佛なし、五衆は佛の中に在るにあらず、佛は五衆の中に在るにあらず。佛は五衆の有にあらず。何となれば、五衆は是れ五にして、佛は是れ一なり。一は五をなさず五は一をなさざるが故なり。又五衆には自性なきが故に虚誑不實なり。佛自ら説きたまはく、「一切の無誑法の中にて我は最も第一なり、是の故に五衆は即ち是れ佛にあらず」と。復次に、若し五衆即ち是れ佛ならば、諸有の五衆は、皆な應に是れ佛なるべし。

問うて曰く、是の難を以ての故に我先に説けり、「第一清淨の五衆三十二相等を名づけて佛となすや」と。答へて曰く、三十二相等は菩薩の時も亦たあり、何を以てか名づけて佛となさざらん。

問うて曰く、爾の時に、相好あつて身を莊嚴すと雖も、而も一切種智なし。若し一切種智にして第一妙色身の中にあれば即ち是を名づけて佛となすや。答へて曰く、一切種智は、般若の中に是れ寂

【四】 二諦——(一)世諦、(二)第一義諦。

【五】 第三問、是の故に我先に「第一清淨の五衆、三十二相等を名づけて佛となすや」と問ひしにあらずや。

【六】 第四問、若し一切種智にして第一妙色身の中にあれば、即ち是を佛と名くるや如何。

滅めつの相さうにして無戲論むげろんなりと説く。若し是この法ほふを得えば則すなはち無所得むしよとくと名づけ、無所得むしよとくの故ゆゑに名づけ佛ほとけとなす。佛ほとけは即すなはち是これ空くうなり。是かくの如ごとき等とうの因縁いんねんの故ゆゑに、五衆しゆは即すなはち是これ佛ほとけなることを得えず、是この五衆しゆを離はなるるも亦また佛ほとけなし。所以ゆゑは何いかんとなれば是この五衆しゆを離はなれて更さらに餘法よほふの説とくべきなきが故ゆゑなり。五指しを離はなれて更さらに拳法けんぽふとして説とくべきなきが如ごとし。

問とうて曰いはく、何なにを以もつての故ゆゑに拳法けんぽふなきや。形かたち亦また異ことなり、力用りきゆうも亦また異ことなり、若もし但ただ是これ指しは異ことなるべからず。五指合しがつするに因よるが故ゆゑに拳法けんぽふ生しやうじ、是この拳法けんぽふは無常生滅むじやうしやうめつすと雖いんども、無むと言いふことを得えず。答こたへて曰いはく、是この拳法けんぽふ若もし定さだんであらば、五指しを除のぞいて更さらに拳けんとして見るべきものあつて、亦また五指しに因よるを須もちむざるべし。是この如ごとき等とうの因縁いんねんを以もつて、五指しを離はなれて更さらに拳けんあることなし。佛ほとけも亦また是かくの如ごとき、五衆しゆを離はなれば則すなはち佛ほとけあることなし。佛ほとけは五衆しゆの中なかにあるにあらず、五衆しゆは佛ほとけの中なかにあるにあらず。何なんとなれば異いうべからざるが故ゆゑなり。若もし五衆しゆ、佛ほとけに異ことなれば、佛ほとけは五衆しゆの中なかにあるべし、但是ただこの事こと然しからず、佛ほとけも亦また五衆しゆの中なかにあるにあらず。所以ゆゑは何いかん、五衆しゆを離はなれて佛ほとけなく、佛ほとけを離はなれて亦また五衆しゆなければなり。譬たとへば、比丘びくに三衣鉢さんいはつあるが故ゆゑに、有うと言いふことを得えべきが如ごとく、但ただ佛ほとけと五衆しゆと別異べつなりとなすことを得えず。是この故ゆゑに佛ほとけに五衆しゆありと言いふを得えざるなり。是かくの如ごとき、五衆しゆに佛ほとけを求もとむるに不可得ふかなるが故ゆゑに、當まさに知しるべし佛ほとけなしと。佛ほとけなきが故ゆゑに無來無去むらいむこなり。

【七】 第五問、何故に拳法なしと言ふか。



問うて曰く、若し佛なくんば即ち是れ邪見なり、云何が菩薩は發心して作佛を求むるや。答へて曰く、此の中に佛なしと言ふは、佛の想に著することを破するのみにして、無佛の想を取るとは言はざるなり。若し有佛すら尙取らしめず、何かに況んや無佛の邪見を取らんや。又佛は常に寂滅にして無戲論の相なり。若し人常に寂滅の事を分別し戲論せば、是の人も亦た邪見に墮せん。是の有無の二邊を離れて、中道に處する、即ち是れ諸法實相なり。諸法實相は即ち是れ佛なり。何となれば、是の諸法實相を得るを名づけて、佛を得るとなせばなり。

復次に、色等の法の如相即ち是佛なり。色等の法は性空是れ如相なり。諸佛如も亦性空なり。是を以ての故に、來不去、不生不滅、法性實際、空無染寂滅なり。虚空の性も亦是の如く、無來無去如なり。乃至虚空性の如と、佛の如と、是の如は一にして二なく、三等の別異なし。此の中に自ら因縁を説く、何となれば諸の數法を出すに所有なきが故なり。如等の法は是れ實にして、是の中に憶想分別して、相の取るべきもの有ることなし。「是の」故に名字あり、名字の中に數あり、此の中に自ら因縁を説く、何となれば空は實にあらずして所有なきが故なり。問うて曰く、若し是の法、無所有ならば云何が見るべく、聞くべく、苦あり、樂あり、縛あり、

- 【八】第六問、若し佛無しと言はば、即ち是れ邪見なり、云何が菩薩は發心して作佛を求むるや。
- 【九】諸法實相は即ち是れ佛なり。
- 【一〇】色等の法の如相即ち是れ佛なり。
- 【一一】第七問、若し是の法、無所有ならば、云何が見るべく、聞くべく、苦あり、樂あり、縛あり、諸の異を分別するか。

脱あり等と、諸の異を分別するや。答へて曰く、此の中に曇無竭は自ら種種に分別して、譬喩を説けり、所謂春の末月に焰を見、乃至是の人は諸法を分別して、若くは來、若くは去となさざるが如し。焰等の中には、實事なしと雖も、亦た能く人の自らを誑はして苦樂の事を生ずるが如し。諸法も亦た是の如く、空にして無所有なりと雖も、亦た能く人をして苦樂憂喜の事を得せしむ。夢等の法も亦た是の如し。

復次に、(三)佛に二種の身あり、一には法身、二には色身是れなり。法身は是れ眞佛なり、色身は世

諦の爲めの故にあり。佛は法身の相の上に於て、種種の因縁を以て諸法實相を説く。是の諸法實相も亦た無來無去なり、是の故に諸佛は從來する所なく去るも亦た至る所なしと説く。若し人あり、諸佛法身の相を得ば、是れ阿耨多羅三藐三菩提に近づくと名づく。未だ一切智を得ざるが故に名づけて近づくとす。「是れ」と相似するを以ての故に般若波羅蜜「多」を諸法實相と名づく。若し能く是の如く行せば、是を般若波羅蜜「多」を行するとなし、

【三】二種の佛身——(一)法身、(二)色身。

眞の佛弟子なり。眞の佛弟子とは、諸法實相を得るを名づけて佛となし、諸法實相の差別を得るが故に、須陀洹乃至辟支佛大菩薩あり。須陀洹等乃至大菩薩、是を眞の佛弟子と名く。虚妄に人の信施を食せずとは、畜生に布施して百倍の果報を得と雖も、而も此の福は盡くることあり、量あつて、衆生の生死を度すること能はず、故に名けて虚しく食すとす。須陀洹等乃至佛「及び」諸の賢聖は、人の

信施を受くるに、此の福果報は、乃至涅槃まで盡くすることなく、量ることなし。是の故に「虚妄に人の信施を食せず」と説くなり。是の人は應に一切衆生の供養を受くべし。若し須陀洹にして、一切凡夫人の供養を受くべくんば、斯陀含は應に凡夫人乃至須陀洹の供養を受くべく、阿那含は凡夫人及び須陀洹斯陀含の供養を受くべく、阿羅漢は凡夫人須陀洹斯陀含阿那含の供養を受くべく、辟支佛は凡夫人及び須陀洹乃至阿羅漢の供養を受くべく、成佛に近き大菩薩は凡夫人及び聲聞辟支佛の供養を受くべし。世間の福田たりとは、種を良田に植うれば、成收必ず多きが如く、持戒禪定智慧は福田なり。衆生福を植うれば果を獲ること無量なり。上に諸佛は來ることなく、去ることなしと説けり。薩陀波崙、及び諸の聽く者意に謂へらく、一諸佛すら尙ほ無し、諸法も皆な亦た應に滅すべし、則ち斷滅に墮すと。是の故に今因縁法の譬喩を説く、曇無竭、薩陀波崙に示して、汝の著する處の如く意は實に有りと謂ふは、衆生を度することなきが故なり。因縁の和合するに従つて則ち像現することあり、此の事を證明せんと欲するが故に譬喩を説く。大海の中に生ずる寶の十方より來るにあらず、滅するも亦た去る所なく、亦た因縁なくしては生ぜざるが如く、四天下の衆生の福德の因縁を以ての故に、海に此の寶を生ず。若し劫盡き滅する時あるも亦た去る處なし。譬へば、燈の滅すれば焰の至る所なきが如し。佛身も亦爾なり、初發心より種うる處の善根功德は、皆な是れ佛身相好の因縁なり。佛身も亦自在ならざるは、皆な是れ本因縁に屬する業果報の故なり。是の因縁を生じて久しく性に住すと

雖も、是れ有爲法の故に必ず無常に歸す、散壞すれば、則ち身なし。譬へば、射を善くするの人の仰いで虚空を射るは、箭去つて遠しと雖も必ず當に地に墮つるが如し。諸佛の身も亦是の如く、相好光明福徳成就し、名稱無量にして、人を度すること限りなしと雖も、亦た磨滅に歸す。

問うて曰く、(三) 若し衆生の福徳の因縁の故に、海に珍寶を生せば、何を以てか近く衆生の處に生ぜずして、而も乃ち大海難得の處に在るや。答へて曰く、海中にも亦た衆生あり、龍阿修羅等の是の寶を用ふればなり。

復次に、若し寶、人中の濁世に生せば、貧者は覆藏して人をして得せしめざん。若し好世の時は珍寶自ら生じて人間に惜む者あるとなげん。彌勒佛の時の如きは、珍寶も瓦礫の如くなりき。懈怠懶惰なるを以て、人は身を惜み、強ひて願をなして樂を求むるが故に、寶大海にあるも得ること能はず。若し大心にして

【三】 第八問、若し衆生の福徳の因縁の故に海に珍寶を生ぜば、云何が衆生の近邊に生ぜずして、大海難得の處に生ずるや。

身命を惜まず勤求する者は乃ち得。大海の水をば十方六道の國土に喩ふれば、諸の珍寶は即ち是れ諸佛なり。珍寶の如き、一切衆生の爲めの故に生ずるも、而も懈怠懶惰なる者は得ること能はざる所なり。諸佛も亦た是の如く、衆生の爲の故に世に出づと雖も、懈怠小心にして身を貪り、我に著する者は度することを得ず。所以は何んとなれば、諸法は皆な衆縁の和合するより生ずればなり。衆生は二の因縁あるが故に得度す。一には内に正見あり、二には外に善く法を説く者あるなり。諸佛は善く法

を説くと雖も、衆生は内に正見を具せざるが故に盡く度すること能はず、寶物は衆生の爲めに出づと雖も、而も貧窮の衆生あるが如し。諸佛も亦是の如く、衆生の爲めに出づと雖も、而も衆生に内に正見少きが故に、亦度するを得ず。復塗篋の譬喩あつて、槽あり、頸あり、皮あり、絃あり、柱あり、椀あり、手を以て之を鼓つに、衆縁和合して而も聲あり。「是の」聲の如きは亦衆縁の中に在るにあらす、「而も」衆縁を離れては亦聲なし、因縁和合するを以ての故に聲の聞くべきあり。諸佛の身も亦是の如く、六波羅蜜〔多〕及び方便力〔等の〕衆の因縁和合する邊より佛身を生ず。「而も」六波羅蜜〔多〕等の法のの中に在るにあらす、亦六波羅蜜〔多〕等の法を離るるにあらす、聲の一の因縁を以てせず、亦無因縁にも非ざるが如し。佛身も亦是の如く、無因縁に從はず、亦少因縁にも從はず、諸の善法の因縁具足するが故に、諸の佛身を生ず。鏡中の像の如きは、衆の因縁和合するが故にあり、衆縁を離るるが故に無し。諸佛も亦是の如く、諸の因縁あるが故に出現し、諸の因縁散するが故に滅す。善男子よ、應に是の如く諸佛去來の相を觀すべく、一切諸法の相も亦應に是の如く知るべし。曇無竭、薩陀波崙に語つて言はく、善男子よ、汝能く諸法の相の不來不去を知らば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得て退轉せず、亦必ず能く般若波羅蜜〔多〕及び方便力を行すべし。何となれば一切法は障礙なきが故なりと。

問うて曰く、〔四〕釋提桓因は何を以てか曼陀羅華を化作して薩陀波崙に與ふるや。答へて曰く、釋

【四】第九問、帝釋が曼陀羅華を化作して、薩陀波崙に與へたる理由如何。

提桓因は佛道を愛樂するが故に常に諸の菩薩を供養するなり。

復次に、釋提桓因は衆生を攝して佛道に入らしめん欲するが故に、天王の身を現じて華を以て薩陀

波崙に與ふ。薩陀波崙は一心に佛道を求むるが故に、諸天來つて供養し、衆生の「是を」見る者も亦た

發心す。釋提桓因は衆生を引導せんが爲の故に薩陀波崙を供養するなり。有人の言はく、「釋提桓因

は深く薩陀波崙を愛敬し、上の品に來つて試み、試み已つて身體をして平復ならしめ、今復た華を以

て之に與ふ」と。釋提桓因の力は能く一切の人に華を與ふる「ことを得る」も、衆生は福力なきを以て

の故に、設ひ「之を」與ふるも華は即ち變壞すべし。薩陀波崙は福德を成就

するが故に必ず變せざることを得、是の故に與ふ。若し一切の菩薩の師を

供養する時は、盡く與へざれども供養者を守護すべし、先に已に因縁を説

く、所謂肉を割き血を出して、試みて以て親となり、舊きが故に守護す。

復次に、釋提桓因は此の中に、自ら因縁を説く、所謂、汝は因縁力の故に、百千等の衆生を饒益す

と。薩陀波崙華を取つて其の意の如く曇無竭を供養す。薩陀波崙初めは師の名のみを聞き、後には眼

に見、法を聞いて疑はざるが故に身を以て供養す。長者の女等も亦た薩陀波崙に効ひ、身を以て薩陀

波崙に施す。

問うて曰く、「一五薩陀波崙は身を以て曇無竭に供養す、曇無竭は福田大なり、女は何を以てか身を以

【一五】 第一〇問、長者の女が身を以て曇無竭に供養せずして薩陀波崙に與へし理由如何。

て供養せずして而も薩陀波崙に與ふるや。答へて曰く、女人は智短にして著多きが故に、本師を捨てて他を供養することを用ゐず。又女身は罪穢なるを以て、心清淨なりと雖も、外に譏謗あるが爲の故なり。

問うて曰く、(二六)長者の女は初め父母を捨てて已に薩陀波崙に屬す、今何を以てか復身を以て施すや。答へて曰く、初に父母を捨て薩陀波崙と共に曇無竭に詣す。「是れ」法の爲めの故に供養するも、亦た自ら身を以て曇無竭に施さず、父母も亦た「身を」以て薩陀波崙に施さず。今薩陀波崙甚深の義を問ふに曇無竭は爲めに解説し、釋提桓因の歡喜し供養するを見る。是の故に觀喜の心を發し身を以て供養するなり。「是れ」自在の心を以ての故なり。又一切の女人は繫屬する處なければ則ち惡名を受く。(二七)女人の禮は幼なれば則ち父母に従ひ、少しては則ち夫に従ひ、老いては則ち子に従ふ。是の長者の女等は、道路を共にして來ると雖も、久しく屬する所なきを得ず。是の故に自ら身を以て施し、而も是の願をなす、師の得る所の如きは、我等も亦た之れを得べしと。爾の時に薩陀波崙は、此の女を以て曇無竭を供養せんと欲し、其の嫌恨を慮るが故に問ふ。「汝等實に誠心を以て我を供養すれば當に受くべし、汝誠心ならば自ら心を用ゐずして、處分する所に隨つて無心の物の如くなれ」と。諸の女人等の言はく、「實に誠心を以てす。」即

【六】第一問、長者の女は初め父母を捨てて已に薩陀波崙に屬す、今何を以てか復た身を以て施すや。

【七】幼にしては父母に従ひ、少にしては夫に従ひ、老いては子に従ふ、これ女人の禮なり。

時に薩陀波崙は長者の女并に諸の侍女及び五百乗の車を以て曇無竭に奉<sub>レ</sub>上<sub>ス</sub>。薩陀波崙は世の人の常<sub>ニ</sub>疑<sub>フ</sub>て、其の長者を欺誑<sub>シテ</sub>諸女を將<sub>ル</sub>來<sub>ル</sub>と謂<sub>フ</sub>を除<sub>ク</sub>んと欲<sub>ス</sub>。是の故に盡<sub>ク</sub>以<sub>テ</sub>布施<sub>シ</sub>已<sub>ツ</sub>つて著<sub>ク</sub>無<sub>キ</sub>を明<sub>ニ</sub>す。

復次に、薩陀波崙、空中の聲に聞く所の如<sub>ク</sub>解<sub>ヲ</sub>得<sub>テ</sub>歡喜<sub>シ</sub>、世人の貴<sub>ブ</sub>所の内外の物を盡<sub>ク</sub>以<sub>テ</sub>供養<sub>ス</sub>するが如<sub>キ</sub>は、深く檀波羅蜜〔多〕門に入<sub>リ</sub>んと欲<sub>ス</sub>するが故<sub>ナリ</sub>。釋提桓因は、薩陀波崙の貪愛等の煩惱は未<sub>ダ</sub>盡<sub>キ</sub>ざるも、而も能<sub>ク</sub>盡<sub>ク</sub>内外を捨<sub>テ</sub>、布施<sub>シテ</sub>復<sub>タ</sub>遺餘<sub>ナ</sub>きを知<sub>ル</sub>るが故<sub>ニ</sub>、讚<sub>シテ</sub>善哉<sub>ト</sub>といふ。過去<sub>ノ</sub>佛<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>喩<sub>ト</sub>とな<sub>シテ</sub>難事<sub>ヲ</sub>行<sub>フ</sub>するが故<sub>ニ</sub>得<sub>テ</sub>難<sub>キ</sub>果報<sub>ヲ</sub>得<sub>テ</sub>、所謂〔是れ〕阿耨多羅三藐三菩提<sub>ナリ</sub>。

問<sub>ウ</sub>て曰<sub>ク</sub>、(二)若し曇無竭は薩陀波崙をして善根<sub>ヲ</sub>具足<sub>セ</sub>しめんと欲<sub>ス</sub>するが故<sub>ニ</sub>受けば、善根<sub>ハ</sub>所謂<sub>ル</sub>檀波羅蜜〔多〕を具足<sub>ス</sub>、何を以<sub>テ</sub>の故<sub>ニ</sub>還<sub>ツ</sub>て薩陀波崙に與<sub>ル</sub>るや。

答<sub>ヘ</sub>て曰<sub>ク</sub>、曇無竭は大智方便<sub>ナリ</sub>、薩陀波崙をして夫に福德<sub>ヲ</sub>得<sub>テ</sub>而も失<sub>フ</sub>所<sub>ナ</sub>からしむ。是を上<sub>ニ</sub>受<sub>テ</sub>と謂<sub>フ</sub>。薩陀波崙の至誠<sub>ノ</sub>心の施<sub>ハ</sub>、諸の貪著<sub>ヲ</sub>斷<sub>ジテ</sub>還<sub>ツ</sub>て福德<sub>ノ</sub>具足<sub>ヲ</sub>得<sub>ル</sub>とを望<sub>ム</sub>ます。曇無竭思惟<sub>ス</sub>らく、「薩陀波崙は遠<sub>ク</sub>より來<sub>ツ</sub>て、而も五欲<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>心に染著<sub>セ</sub>ず」と。舊<sub>レ</sub>人の供養<sub>ヲ</sub>善<sub>ト</sub>とな<sub>ス</sub>、是の故<sub>ニ</sub>還<sub>ツ</sub>て與<sub>フ</sub>。又聞<sub>ク</sub>、「諸女先<sub>ニ</sub>づ身を以<sub>テ</sub>薩陀波崙に上<sub>ル</sub>るも、〔是れ〕人は財物<sub>ニ</sub>あらず、〔但<sub>ダ</sub>〕其の本意<sub>ヲ</sub>遂<sub>ゲ</sub>んと欲<sub>ス</sub>るが故<sub>ナリ</sub>」と。又是の諸女<sub>ヲ</sub>して世世<sub>ニ</sub>薩陀波崙の弟子<sub>ト</sub>らしめんが爲<sub>ト</sub>

【八】 第一二問 若し曇無竭、常啼<sub>ヲ</sub>して善根<sub>ヲ</sub>具足<sub>セ</sub>しめんと欲<sub>セ</sub>ば、何を何<sub>テ</sub>還<sub>ツ</sub>て常啼<sub>ニ</sub>與<sub>ル</sub>るや。



めに、是の如き等の因縁の故に、還つて薩陀波崙に與ふるなり。

問うて曰く、「二五」諸の大菩薩は法を説いて疲極すべからず、何を以てか宮に入るや。答へて曰く、

世人の法に隨ふが故なり。又衆香城の中の衆生は常に道を求めず、或時は厭足して五欲の樂を受く、

諸天は常に五欲を受くるが故に求道を妨廢す。有る菩薩は所住の國に於て常に勤めて精進して五欲を

受けず。「然るに今」是の衆香城の衆生は、本より願つて「五欲を」難受す。曇無竭其の志願に隨つて、

之を引導せんと欲するが故に、其の國に生ず。是の故に衆生の法を聽いて

疲倦するを以て、起つて宮中に入るなり。又未だ道を得ざる者の法は微妙

なりと雖も、常に聞くが故に疲厭の心を生ず、是の衆中には是の人あるが故

に「起つて宮中に入る」、又曇無竭は、是の中に富樂の人の法を受くるもの

あるが故に、日没すれば應に息むべし、「是の故に起つて宮中に入る」。是

の時に薩陀波崙、是の念をなす、「我れ法の爲めに來るが故に」應に坐臥すべからず」と。

問うて曰く、「二〇」法の爲めの故には何を以てか坐臥すべからざるや。答へて曰く、是れ定法なきも、

此の人は大欲大精進にして法を恭敬するが故に、自ら是の念をなす、「我れ若し坐臥すれば、則ち是

れ懶惰なり、我れ初めて法を求めし時は、身すら尚ほ惜まず、何に泥んや疲倦あらんや」と。是の

故に坐臥せず。何となれば、大欲大精進と坐臥とは相違するが故なり。又坐臥すれば則ち勤力せず、

【二〇】 第一三問、諸の大菩薩は法を説いて疲極すべからず、何を以てか宮に入るや。

【二一】 第一四問、法の爲めならば、何故に坐臥すべからざるか。

行立は則ち勤力精進す、是の故に常に二威儀に住して、以て師の出づるを待つなり。

問うて曰く、三薩陀波菴は先に師の七歳出でざるを知るや不や。答へて曰く、初より來かた知らざりしが故に、又復た曇無竭も亦た常に七歳出でず、因縁を以ての故に、自ら誓つて七歳入定す。薩陀波菴自ら師出でざれば終に坐臥せずと誓ふ。又大人世間の法すら尚ほ自ら違せず、何に況んや道法をや。又初めて法を求むる時すら尚ほ身を惜まず、

今立つこと七歳なるも、何ぞ難しとするに足らんや。

問うて曰く、人身は軟弱なり、何ぞ能く七歳〔の間〕坐せず臥せざることを得るや。答へて曰く、是の時の人は壽命長く、復た七歳といふと雖も今の七日の如し。又好世の人身は福德の力大なり、立つこと七歳なりと雖も以て難しとなさず。脇比丘の如きは年六十にして始めて出家し、而も自ら結誓して我が脇を席に著けず、要らず盡く聲聞の得べき所のことを得、乃至、六神通の阿羅漢を得て、四阿含の優婆提舍を作り、今に於て大に世に行はる。此の人は惡世に於てすら尚ほ爾なり、何に況んや薩陀波菴は好世に生ずに於てをや。又身力は弱しと雖も、心強きを以ての故に其の事を辦す。

復次に、一心に佛道を求むる者は、十方の諸佛、念ずる所の諸大菩薩、及び佛道を求むる諸天〔等〕

【三】 第一五問、常啼は先に師の七歳出でざりしを知りしや不や。

【三】 第一六問、人身は軟弱なり、何ぞ能く七歳坐臥せざることを得んや。

【三】 脇比丘。西天第十祖、梵音婆栗濕縛、譯して難生といふ。出家の後、伏駄尊者に値ひ、左右に侍して誓て脇を席に著けて睡らず故に此名あり。

其の氣力を益して圍遶守護す。是の故に、住立すること七歳なりと雖も而も疲極せず。

問うて曰く、(西)曇無竭は三昧に入り、何を以てか乃ち七歳に至るや。答へて曰く、先に已に答ふる

「が如く」、好世の人は壽長くして七歳と雖も以て久しとなさず。又曇無竭の宮殿の採女の微妙の五欲

は天と相似し、薩陀波崙等の新發意の者は、心未だ柔軟ならずして曇無竭を疑ひ、空法を説いて離欲

を讚歎すと雖も、其の心未だ捨つること能はざるを謂ふ。是の故に七歳の三昧を以て衆の疑を除かん

と欲す。「薩陀波崙等」貴敬の心を生じ、曇無竭の七歳の三昧は心口相應して能く説き、能く行するを

聞くや、則ち其の語を信受して、度し得べきこと易し。譬へば、癰瘡未だ

熱せざれば、醫は則ち破らず、但だ藥を以て「是に」塗つて熱せしむれば、

則ち破ること易きが如し。

復次に、心に生ずる實樂を受けんと欲するが故に、無量の三昧に入る。

復次に、説法に二種あり、(一)一には口説法、二には身現法なり。今は身を以て法を現せんと欲するが

故に無量の三昧に入り、衆生をして心を攝して、慧に入るとを知らしめて如實智を得せしむ。菩薩三

昧とは、菩薩義の中に説くが如し。般若の方便力を行ずとは、方便品の中に説くが如し。薩陀波崙は

七歳の中に於て、三惡の覺觀を生ぜず、味を味ははず、是の人未だ煩惱を破せずと雖も、而も諸の善法

を集むるが故に、諸の煩惱を制して生ずるとを得せしめず、但だ一心に曇無竭を念じ、何れの時か當

【西】 第一七問、法盛が七歳の  
間三昧に入りし理由如何。

【五】 二種の説法——(一)口の説  
法、(二)身に法を現す。

に出づべきや、我れ當に從つて般若を聞くべし。七歳を過ぎ已つて是の念をなす、我當に曇無竭のた  
めに坐處を敷いて掃灑莊嚴すべしと。

問うて曰く、(二六)薩陀波崙は云何が七歳を過ぎ已つて、曇無竭の當に出づべきを知るを得しや。答へ  
て曰く、有人の言はく、「先に曾て七歳展轉して聞知す」と。有人の言く、「曇無竭初て三昧に入る時、  
自ら説いて七歳を〔以て〕限りとなせり」と。釋迦文尼佛、阿難に告げて、我れ一月二月、禪定に入ら  
んと欲すと〔宣ひ〕、阿難は以て四衆に告げしが如し。薩陀波崙は深く佛法を愛し、曇無竭を敬重する  
が故に、供養して說法の處を莊嚴す。出家の菩薩は但だ其の心を莊嚴し、  
師に詣して法を受け、在家の菩薩は則ち說法の處を莊嚴して華香を供養す。

復次に、薩陀波崙は是の莊嚴をなし、曇無竭をして其の法を愛し、法を

【三】 第一八問、常啼は云何が  
七歳を過ぎ已つて、法盛の當  
に出づべきを知りしや。

欲するの相を知らしめんと欲し、深く心に信樂するが故に是の事を現す。是の故に心を生じ、五百  
の女等と共に力を展べて掃灑し、自ら其の金銀珍寶を以て座に敷く、薩陀波崙等は自ら妙好の茵蔕あ  
りと雖も、愛法的情至るがための故に、身に著くる所の上衣を以て座に敷き、水を求めて地に灑が  
とするも、魔の隱蔽するが故に、求むるも得ること能はず。此の中に自ら因縁を説く、魔は是の念を  
なす、「若し薩陀波崙、水を求めて得ずんば、其の心則ち劣にして、志願滿せざるが故に、又自ら  
其の身を鄙しめ、我れ福德薄きが故に、法を供養せんがための故に水を求むるに得ずと。自ら輕んじ

憂愁して、心を覆ふを以ての故に、福德増さず智慧照さず」と。不明とは、諸の憂愁煩惱の心を覆ふが故に、諸の福德智慧は能く照すこと能はざるなり。譬へば、日を障礙するが故に其の照すこと明かならざるが如し。魔は其の心を知るも大に沮壞すべからず、但少しく沮壞して其をして稽留せしむ。爾の時に、薩陀波崙は自ら其の身を刺し、血を出して地に灑ぎ、以て塵を淹はんと欲す。人の血肉は臭しと雖も、其の至心に水を求めて得ざるを以て、意に香臭好惡を分別せず。塵を淹はんと欲するが爲に身を惜まず、又薩陀波崙は深心に般若波羅蜜〔多〕に愛著するが故に、身を愛惜する所なし。有人の言はく、「多くの諸天龍鬼神等あり、常に薩陀波崙に隨逐して、佐助し守護す。是の故に出づる所の血は變じて香水となること、屢提仙人の割截を被る時、血化して乳となるが如し」と。又無量の福德を成就するを以ての故に、願に隨つて即ち成就するなり。

問うて曰く、(三七) 若し福德成就し、願に隨つて即ち得ば、魔は其の水を隱蔽せざるべし。答へて曰く、是の新發意の菩薩は能く小願を成ずるも、未だ能く魔を却くること能はず。此の中に薩陀波崙自ら出血の因縁を説く、「我れ無始生死より已來、數數身を喪ふも、未だ曾て法のためにせず」と。

問うて曰く、(三八) 薩陀波崙は法を愛して、身を刺して血を出す、若し其の身死せば、誰か復た法を聽

【三七】 第一九問、若し福德成就し、願に隨つて即ち得ば、魔は其の水を隱蔽せざるべきにあらずや。

【三八】 第二〇問、若し常啼法を愛するの念盛んなるが爲め、肉を刺し、血を出し、身死せば、誰か法を聽かん。

かんや。答へて曰く、是の事は破骨出髓の中に答ふるが如し。又此の中に諸天大菩薩守護するが故に。其をして死せざらしむ。又復た惡魔は其の心を知つて、沮壞すべからざれば、水則ち還つて出でん。薩陀波崙等皆な異心なしとは、人の初めて慈心を習ふが如く、衆生のため、及び般若波羅蜜〔多〕のためにせんと欲するが故に身命を惜まず。既に利刀を得て身を割くに、以て痛自ら逼るが故に心に悔恨を生ず、是を異と名づく。是の菩薩は信力大なるが故に、阿耨多羅三藐三菩提の果報を得んと欲するが故に、是の苦を計らず、又慈悲心を以て衆生を愛念し、種種の苦惱を受くと雖も、以て難となさず。譬へば、慈母の子を愛するに、子のために長く勤苦不淨を受くと雖も、以て惡しとなさざるが如し。又復た諸法の實相畢竟空を見るが故に、是の身は但だ是れ虚誑の和合なるを知り、是の虚誑を破するが故に、身を割截する時も、阿耨多羅三藐三菩提を妨げず。魔は其の便を得ずとは、人にして瘡あれば、則ち毒を受くるが如く、菩薩若し貪欲憂愁の瘡あれば、魔は其の便を得るも、血を出だし、地に灑ぐを以て、心憂愁せざるが故に、魔便を得ず。薩陀波崙の心、五百の女人の心の如きも、亦た是の如し。薩陀波崙を敬重するが故に、其の身を刺すを見て憂愁あるべく、其の願を満することを得るを以ての故に以て愁となさず。爾の時に、釋提桓因、是の事を見已つて、未曾有なりと歎ずとは、是人未だ無生忍を得ず、未だ諸の煩惱を斷せざるも、法を供養せんがための故に、身命を惜しまざること、諸の離欲の人と異なることなきが如く、其の身を割截すること草木を斷つが如し。初心にして既に

爾り後心は轉た増さん。

復次に、未曾有とは、此の中に釋提桓因自ら因縁を説く、「薩陀波崙の法を要する乃ち爾なり、刀を以て自ら刺す等なり」と。釋提桓因は是の心をなし、歡喜し已つて讀して善哉と言ひ、「其の法を愛し法を樂ひ勤心精進するを讀し、過去の佛を以て喩となし、但汝のみ今辛苦するにあらず、過去の諸佛の般若を求むる時も亦爾かなり」と。薩陀波崙、釋提桓因の語を聞き、其の心を安慰し已つて、火の酥を得て轉た更に熾盛なるが如く、是の念をなす、「我れ既に座を敷き地に灑ぐ、當に何れの處に於てか、好名華を得て、法處を莊嚴することを得べし」と。

問うて曰く、(二)水を見ざる時何を以てか是の念をなさざるや、「當に何れの處に於てか、水を得て地に灑ぐべきや」と。答へて曰く、薩陀波崙は先に水ある處も即時に皆なきを以て、魔の所作なることを知る。是の故に自ら四大分の中に於て、水分を刺して地に灑ぐ、身中の水種多しと雖も、血は是れ命の在る所なるを以て、是の故に(身を)刺して以て地に灑ぐ。華は自らあるにあらず、曇無竭の出づる時は至らんと欲すれども、遠く求むることを容れられず。又須むる所も復た多くして、當に以て遍ねく其の地を覆ふべし。是の故に、念を生じて得んと欲す。帝釋は其の念を知り、即ち天華の中の妙なるものを以て、

【二】 第二問、水を得ざる時何を以てか、「當に何の處に於いてか水を得て地に灑ぐ」との念をなさざりしか。

【三】 四大分。地水火風の四大にして、人の身は此の四元素より成るなり。

曼陀羅と名づけ、三千石を之に與ふるに、以て事を周うするに足れり。帝釋は以て人に華を以て與へざる所以とは、「人を以て」希有の心を發せしめんと欲するが故にして、薩陀波宿華を受け已つて、分つて二分となし、好者を留めて以て法を説く時散じ、餘は地を覆ふ。其の國の俗法は、華を以て地を覆ひ、其の上に行せしむるを以て、供養となす。爾の時に、曇無竭は其の先の要〔誓〕の如く、七歳を滿じ已つて三昧より起ち、無量百千の衆のために圍遶せられて直ちに法座に趣く。「そは」般若を説かんながための故なり。

問うて曰く、**【三】**若し諸の菩薩微妙三昧の中に入らば、誰か能く起たしめんや。答へて曰く、行者初めて入る時は、自ら限齊をなし、然して後入定の時に至り、其の心自在にして三昧より起つても、悲心の故に而も覺觀を生ず。一比丘の如きは **【三】**減受定三昧に入る時、自ら期して 韃槌を聞く時當に起つべしとなす、既に入り已る時僧坊火を失するや、諸の比丘惶懼として韃槌を打せずして去る。爾の時に、十二歳を過ぎ已つて檀越更に和合して、衆僧をして僧坊より起たしめんと欲して、方に韃槌を打つ、韃槌の聲を聞くや、起つて即ち身を散じて死す。後諸の得道者の説くこと其れ此の如し。

**【三】** 第二二問、若し諸の菩薩、微妙三昧の中に入らば、誰か能く起たしめんや。  
**【三】** 減受定三昧。減盡定三昧に同じ、一切の心想を盡く減じて寂靜となる定にして、無色界の第四非想非非想處天に屬する禪定なり。不還果已上の聖者が心身の過勞を厭ひて閑寂の樂を模擬せんがために修する定をいふ。  
**【三】** 韃槌。又は韃椎、韃椎に作る、鐘、磬、打木等凡て打つて聲をなすべき物の通稱なり。



復次に、有人の言く、「法性生身の大菩薩は、諸佛の如く常に三昧に入つて散亂塵心なく、神通力を以ての故に能く法を説き、飛行して衆生を度脱す。世俗の法なるが故に三昧の相に入らず、是の故に微妙三昧に入ると雖も而も能く還出す。〔そは〕大悲心を牽くを以ての故なり。譬へば、咒術して龍を出すが如し。大衆圍遶すとは、内の眷屬恭敬し、散華燒香隨從して出づるなり。般若波羅蜜〔多〕を説かんが爲の故に、般若波羅蜜〔多〕を説くとは、世諦の名字語言に依つて、衆生に第一義不動の相を示さんと欲するが故なり。薩陀密波は曇無竭を見て、即ち清淨の歡喜を得、樂み其身に遍すると〔恰も〕比丘の三禪に入るが如し。所以は何んとなれば、多欲の衆生は淨妙にあらずと雖も、猶喜樂を得、何に況んや、眞の功德を見るときを得て、身を莊嚴する者をや。薩陀密波空中の佛に從つて、曇無竭の即ち大欲を生じ、諸の三昧を得て十方の諸佛に見ゆるを聞き。復十方の諸佛の先世の因縁を説くを聞くに、唯曇無竭のあつて能く汝を度するのみ」と。是を聞いて已に其の心を増益し、渴仰して見んと欲す。是の故に中道に身を賣つて供養せんと欲す。今衆香城に於て七歳、坐せず臥せずして曇無竭を見んと欲す。是の如く渴仰して樂欲し來ると久し。人の熱渴に逼まらるる所の如く、濁煖潦水を得るも猶尙歡喜す、何に況んや、清冷の美水を得るに於てをや。既に以て渴仰の情久し、又曇無竭は功德大なり。是の故に悅樂す。問うて曰く、〔三〕樂に四種あり、何を以てか但だ第三禪の樂を説いて、上地の定樂及び解脫樂を説か

【三】第二三問、四樂の中、但だ第三禪の樂のみを説く理由如何。

ざるや。答へて曰く、欲界の衆生は三受の中に於て多く樂受を貪るを以て、涅槃樂は無所有なりと聞  
 いて、見ち心に樂喜せず。上の四禪の中には、苦樂を斷するが故に、心亦樂します、第三禪の中の樂  
 は樂の極なるが故なり。復有人の言はく、「薩陀波崙新發意は未だ細深妙定に入らざるが故に、曇無  
 竭を見て大歡喜を發すと、三禪の樂に似如す」と。薩陀波崙は自ら我れ大に歡喜を覺ゆるが故に、即  
 時に喜を捨て、清淨の法性を得て、遍身安樂なり。是の故に三禪の樂に以て喩となすなり。

巻の第一百

曇無竭品第八十九の下を釋す。

釋

爾の時に陸陀波耆菩薩摩訶薩及び長者の女並に五百の侍女、曇無竭菩薩摩訶薩の所に到つて天の曼陀羅華を散し、頭面に禮し畢つて退いて一面に坐す。曇無竭菩薩は其の坐し已るを見て、陸陀波耆菩薩に告げて言はく、「善男子諦かに聽き、諦かに受けよ、今當に汝が爲に般若波羅蜜(多)の相を説くべし。善男子よ、諸法は等しきが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦等しと。諸法は離るるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦離ると。諸法は不動なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦不動なることを。諸法は無念なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無念なることを。諸法は無畏なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無畏なることを。諸法は一味の故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦一味なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無畏なることを。諸法は一味の故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦一味なることを。諸法は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無邊なることを。諸法は無生なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無生なることを。諸法は無減なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無減なることを。諸法は無分別なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無分別なることを。色は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無邊なることを。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦無邊なることを。地種は無邊なるが故に當

に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦た無邊なるを。水種火種風種は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦た無邊なることを、空種は無邊なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦た無邊なることを、金鋼の如く等しきが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦た等しきことを。諸法は無分別なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦た無分別なるを、諸法の性は不可得なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)の性も亦た不可得なるを、諸法は無所有なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦た無所有なるを。諸法は無作なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜(多)も亦た無作なるを。是の時に降陀波耆菩薩摩訶薩は即ち座上に於て諸の三昧を得、所謂諸法等三昧、諸法離三昧、諸法無三昧、諸法一味三昧、諸法無邊三昧、諸法無生三昧、諸法無滅三昧、虛空無邊三昧、大海水無邊三昧、須彌山莊嚴三昧、虛空無分別三昧、色無邊三昧、受想行識無邊三昧、地種無邊三昧、水種火種風種空種無邊三昧、如金剛等三昧、諸法無分別三昧、諸法不可思議三昧なり。是の如き等の六百萬の諸の三昧門を得。

爾時に佛須菩提に告げたまはく、「我れ今三千大千世界の中に於て、諸の比丘僧の與に圍遶せらるるに、是の相を以てし、是の像貌を以てし、是の名字を以てして、般若波羅蜜(多)を説くが如く、降陀波耆も是の六百萬の三昧門を得、東西南北四維上下に恆河沙等の三千大千世界の中の諸佛を見、諸の比丘のために圍遶せらるるに是の如きの相を以てし、是の如きの像貌を以てし、是の如きの名字を以てして、是の摩訶般若波羅蜜(多)を説くこと亦是の如し。降陀波耆菩薩は是れより已後、多聞の智慧は不可思議にして、大海水の如く、常に諸佛を離れず、有佛土の中に生じ、乃至夢中にも、未だ曾つて佛を見ざる時なく、一切の衆難は皆な悉く已に斷じ、所在の佛土は願に隨つて往生す。須菩提よ、當に知るべし、是の般若波羅蜜(多)の因縁は、能く菩薩摩訶薩の一切の功德を成就し、一切種智を得るを。是を以ての故に須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩、若し六

波羅蜜(多)を學ばんと欲し、深く諸佛の智慧に入らんと欲し、一切種智を得んと欲せば、應に是の般若波羅蜜(多)を受持し讀誦し正憶念して、廣く人の爲に説き、亦經卷を書寫し、香華乃至伎樂を以て供養し、尊重し讚歎すべし。何となれば般若波羅蜜(多)は是れ過去未來現在の十分の諸佛の母にして、十方の諸佛に尊重せらるるが故なり。

論 釋して曰く、曇無竭既に出でて法座の所に至つて己に勝る者なきを徧觀し、是に於て坐す。爾

の時に薩陀波崙菩薩、坐し已つて定まるを知り、曇無竭の所に到り、頭面に足を禮して一面に坐す。

禮に三種あり、一には口禮、二には膝を屈するも頭地に至らしめず、三には頭を地に至らしむ、是を上禮と爲す。人の一身は頭を最上となし、足を最下となす、頭を以て足を禮するは、恭敬の至なり。曇無竭其の坐するを見已つて、「其の」遠より

【一】三種の禮。

來つて身命を惜まず、種種に勤苦して法を聞かんと欲するがためなることを知る。初めて相見する時は、日垂れて没せんと欲せしを以て、少時法を聞き、曇無竭は日没を以ての故に起つて宮中に入れり。今法のための故に、七歳渴仰して異心を生ぜず、「曇無竭の」出でんと欲する時に垂として、血を以て地に灑ぎ、其の法のために身命を惜まず、其の心退かず、決定して疑なく、教化を受くるに堪ふることを知る。是の故に告げて言はく、善男子よ、一心に諦かに聽け、上に諸佛の來去を疑ふこと已に斷じ、今は但だ甚深の般若波羅蜜(多)を聞かんと欲するのみ。是の故に爲に般若波羅蜜(多)の相を説く。般若波羅蜜(多)の相とは、先に諸法平等の義の中に説けるが如し。或は有人の言はく、「般若波羅

蜜〔多〕の力の故に諸法は皆な平等なりと觀す、諸法の性は性自ら平等なるにはあらず」と。是の故に曇無竭の言はく、「諸法平等なるが故に般若波羅蜜〔多〕は平等なり。所以は何んとなれば、因果相似するが故なり。初めて諸法の平等を觀するは是れ因なり、心を決定して般若波羅蜜〔多〕を得るは、是れ果なり。

問うて曰く、三諸法平等を觀するは即ち是れ般若なり、般若は即ち是れ平等なり、何を以てか分別して因果となすや。答へて曰く、般若及び諸法は一相にして二なく別なしと雖も、行者の初めて觀する時は是れ因にして、觀じ竟れば名づけて果となす。須陀洹道に向を得るが如し。又有漏の五衆の如く、因の時を集と名づけ、果の時を苦と名づく。色等の一切の法平等ならば、即ち是れ般若波羅蜜は〔多〕平等なり。

【一】 第一問、諸法平等と般若とを區別して因果となす理由如何。

【二】 第二問、般若波羅蜜〔多〕の相を説かずして、平等を説く理由如何。

問うて曰く、三應に般若波羅蜜〔多〕の相を説くべし、今何を以てか平等を説くや。因不平〔等〕の故に平〔等〕あり、因平〔等〕の故に不平〔等〕あり、般若の中に於ても亦た一相ならず、亦た異相ならず。汝何を以ての故に一相を取らんと欲するや。答へて曰く、般若波羅蜜〔多〕は甚深微妙にして、方便を以て解くにあらざれば則ち解する者なし。是の故に若し不平〔等〕等を分別すれば、則ち諸の煩惱を生じ三毒増長す。所謂、怨を憎み親を愛し、善を愛し不善を憎む。菩薩は是の二等の中に住し、一切法を

觀じて、皆な平等となす。衆生〔平〕等の中に住するに、怨親憎愛、皆な悉く平等なり。福德の門を開き、諸の惡趣を閉ぢて、法等の中に住し、一切法の中に於て、意想分別し、著心に相を取り、皆な滅を除き、但だ諸法の空を見るに、空は即ち是れ平等なり。人あり、是の諸法の平等空を得ば、直ちに菩薩道に趣きて空に於て戲論せず。人あり、平等を得と雖も、而も戲論を生ず。若し都て空を觀ずれば、是の如きの失あり。是の如きの人は、平等に於て即ち是れ不〔平〕等なり、是の故に此の中に眞平等のための故に、般若波羅蜜〔多〕等を説く。是れ戲論にあらずして、平等不平等の二邊を離る、是れ般若波羅蜜〔多〕の相なり。

問うて曰く、〔四〕 平等なれば、般若波羅蜜〔多〕に於て相已に具足す。何を以ての故に、更に離等は是れ般若波羅蜜〔多〕の相なりと説くや。答へて曰く、經の中には但だ諸法等しと説くが故に、般若も等し。行者は是の平等の相を取つて而も著を生ず。是の故に般若波羅蜜〔多〕は平等の相にして自性を離ると説く。色等の諸法は自相を離るるが故なり。離の義は相無相品の中に説けるが如し。此の諸法平等を得るや、又平等離に於て空の中に安住す。空の中には則ち動せず、戲論も動すること能はず、諸の煩惱の山も亦た動すること能はず、無常の時も亦動すること能はず、所以は何んとなれば、一切法に於て實相を得るが故なり。菩薩は是の二空に住して、不動般若波羅蜜〔多〕を得ば、是れ則ち究竟なり。若し念あらば即ち是れ相著する處あり、是

【四】 第三問、離等は是れ般若波羅蜜〔多〕の相なりと説く理由如何。

の故に諸法無念と説く。かるが故に當に知るべし、般若波羅蜜〔多〕も亦た無念無動の相なり、是れ般若波羅蜜〔多〕なりと。般若波羅蜜〔多〕は諸の相を滅するが故に、若し是の般若を念せざれば、或は迷悶して趣向する所なし。戲論ある者は、大衆の中に在りて則ち怖畏を生じ、或は涅槃の中に於て了ぜざるが故に亦怖畏を生ず。是の故に怖畏の相なしと説く。是れ般若波羅蜜〔多〕なり。是の人は決定して諸法の相を取らずと雖も、而も深く法性に入るが故に、大衆の中に於て諸相を論難するあり。心に畏るる所なく、諸法に於て無相を得るが故に、又無生法忍に入るの時、一切法は不可得なりと知る。是の中に於ても、亦た畏るる所なし、所以は何んとなれば、是の菩薩は善く一切法に通達するが故なり。

復次に、一切法は一相なり、所謂、性空なり。是の故に般若波羅蜜〔多〕は一切法に隨ふ、故に亦た性空も一味なり。

問うて曰く、上に已に諸法平等と説き、今何を以てか更らに一味を説くや。答へて曰く、空は或る時は味あり、或る時は味なし。若し行者諸の見を取りて分別し、好醜を籌量すれば、爾の時には諸法平等の空を得て、心大に歡喜するが故に名づけて味となす、譬へば、人の熱渴のために逼まられて、清冷の水を得て、以て其の味を無比と爲すが如し。時に隨つて用ふるが故に味と名づく眞實畢竟空には則ち味不味なし。

【五】第四問、上に已に諸法平等と説き、今復た諸法一味と説く理由如何。



復次に、一味とは、菩薩般若波羅蜜〔多〕を行ずる時、緣する所、觀する所、皆な一味と爲る。空の智力大なるが故に餘法皆な隨ふも而も空となす。譬へば石蜜を煮て、熟せんと欲する時、異物と合すと雖も、皆石蜜となるが如し。又大海の如きは百川之に歸して皆な一味と爲る、所謂畢竟空味なり。色等の諸法も亦た是の如く、凡夫の心中は各各別異なるも、般若波羅蜜〔多〕の中に入れば、皆な一味となる。邊を名づけて相となす。若くは有、若くは無なり。實に色等の諸法を觀するに有にあらす、無にあらす、かるが故に無相なり。無相は即ち是れ無邊なり、是を觀じ已れば、是れ無邊般若波羅蜜〔多〕なり。

復次に、有人の言はく、「邊に二種あり、常邊と斷邊、世間邊と涅槃邊、惡邊と善邊等なり。此の中には是の如き等の諸邊なきが故に、名づけて無邊般若波羅蜜〔多〕となす」と。

復次に、有人の言はく、「邊をば前際後際と名づけ、世間は無始なるが故に前際なく、無餘涅槃に入るが故に前際あり、復た更らに出でざるが故に後際なし」と。是等の如く諸邊を分別し、世間に著するが故に涅槃を畏る。是の故に般若波羅蜜〔多〕の中には是の一切邊なく、但た諸法實相を聞いて入ることなく、「亦た」出づることなし。

問うて曰く、諸法平等、諸法離は皆な是れ無邊なり。何を以てか別説するや。答へて曰く、人あ

【六】二種の邊——(一)常邊、(二)斷邊。(一)世間邊、(二)涅槃邊。  
【七】第五問、諸法平等と諸法離とを別説する理由如何。

り、諸法平等を知り、諸法離を知れば、則ち説くことを須ゐず。若し人あり、相を取りて是の一味に著するが故に無邊を説く。曇無竭は但だ薩陀波崙のためのみにあらざるが故に説き、薩陀波崙も亦た

自のたのみにあらざるが故に問ふ。但だ衆生に種種の心、種種の行あるがための故に、般若波羅蜜〔多〕の相の中に於て略して無生無滅を説く。

先に種種の因縁もて生滅を破する中に虚空の無邊なるを説けるが如し。摩訶衍虚空譬喩の中に説くが如く、大海水無邊、須彌莊嚴は先に未だ説かざるが故に、今當に略して説くべし。

問うて曰く、虚空は無爲にして常法なるが故に、其の邊を得る者なければ、無邊と言ふべし。大海水は、四天の中にあつて、須彌山を繞りて由旬

の數量あり。人あり、能く〔是を〕渡る、何を以てか無邊と言ふや。答へて曰く、無邊に二種あり、一には實の無邊、二には人の到ること能はざるが

故に無邊なり。海に亦た二種あり、一には渡る〔ことを得〕べきもの、二には須彌山を繞つて

九寶山の裏にあつて廣さ八萬二千由旬なり、世間の人は邊を得ること能はざるが故に、無邊と言ふ。小海は船の力を以て渡るべく、大海水は船の力を以

ては渡るべからず。但だ神通あるものの能く渡る〔ことを得る〕が如し。外道凡夫の如きは、能く禪定

【八】第六問、大海を無邊といふ理由如何。

【九】四天。天下のこと、即ち須彌四洲の別稱にして、東弗婆提、新に東毘提訶。南閻浮提、新に南閻浮提。西瞿耶尼、新に西瞿陀尼。北鬱單越、新に北瞿盧洲を指す。

【一〇】二種の無邊。

【一一】九寶山。須彌山及び其周圍にある諸山の總稱。須彌山、雙持山、持軸山、擔木山、善見山、馬耳山、象鼻山、持邊山、鐵圍山にし皆な珍寶にて成る、故に九寶山といふ。

の船を生じて欲界色界の海を渡るも、無色界は大海の深廣なるが如くなるが故に則ち渡ると能はず。我が心を破ること能はざるが故に、諸の賢聖人は智慧禪定の超力を以て、諸法の邪相を破して實相を得るが故に能く度す、是の故に大海の譬喩を説くなり。

問うて曰く、(三) 須彌山は一色なり、何を以てか莊嚴と言ふや。答へて曰く、(三) 外書に須彌山は一色にして、純ら是れ黄金なりと説くも、六足阿毗曇の中には、「須彌山の四邊は各各一寶を以て成り、金、銀、玻璃、琉璃もて莊嚴せり。若し諸鳥(あつて過ぐれば、其の)所至の方に隨つて各各其の色を同うす。難陀、婆難陀の龍王の兄弟身を以て圍遶すると七市、山の頂に三十三天宮あり、其の城七重なり、名づけて喜見となす。九百九十九門あり、一一の門の邊に皆十六の青衣大力の鬼神あつて城中を守護す。高處に殿を作る、名けて最勝と曰ふ。四邊に四大園四天王のある在り。四邊に山あり、遊乾陀と名づけ、各の高さ四萬二千由旬なり、四天王其の上を治む。四大海水、諸の阿修羅宮及び諸の龍王の宮殿、遊乾陀等の九寶山、日月五星二十八宿及び諸餘の星ありて圍遶莊嚴す。是の如き等の種種の雜飾を以て莊嚴をなし、之を視るに厭ふことなし」と説く。般若波羅蜜(多)も亦た是の如し。六波羅蜜(多)の果報の故に(二四) 轉輪

【三】 第七問、須彌山は一色なり、何を以てか、莊嚴といふや。

【二】 外書とは、外道の書物のこと。

【一】 轉輪王。須彌四洲を統領する王にして、王位に即く時感得する輪寶の種別に、より金輪王(須彌四天下を領す)、銀輪王(東南西南の三洲を領す)、銅輪王(東南二洲を領す)、鐵輪王(南閻浮提を領す)の別あり。輪寶を轉じて一切を威服するが故に轉輪王といひ、三十二相を具へ、人壽無量歳よ

王、(二五)梵釋天王、(二六)淨居天王、(二七)大自在天となる。是の如き等の果報は、  
 般若波羅蜜〔多〕を行ずるも、未だ具足せざる時、此の果報莊嚴を受く。般  
 若波羅蜜〔多〕を具足する時は、則ち須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅  
 漢果、辟支佛道、阿毗跋致の菩薩、諸佛道果の莊嚴あり。須彌山の上下の  
 如きは皆な莊嚴あり、般若波羅蜜〔多〕の莊嚴も亦た爾なり。未だ具足せざ  
 る時は、諸の天王等を莊嚴し、具足し已れば諸道果を莊嚴す。須彌山の如  
 きは、劫の初めて立つ時、四邊の大風地の精味を吹き聚めて積んで須彌山  
 をなす、更に風あり、吹いて堅からしめて而も寶を成ず。般若波羅蜜〔多〕  
 も亦た是の如く、一切善法の中に、第一堅實牢固和合するを以て般若とな  
 す。須彌山の如きは、四邊に大風吹けども、大海水の波も動かすこと能は  
 ざる所なり。般若波羅蜜〔多〕も亦た是の如く、邪見外道戲論及び諸の魔民  
 の動かすこと能はざる所なり。須彌山頂の四圍の如きは、諸天の到る者は  
 種種の樂を受く、般若も亦是の如く、行者能く般若の頂きに登れば、四禪等の諸定の園の中に到つて  
 種種の樂を受く。

復次に、有人の言はく、「須彌山に衆鳥到れば皆な同じく一色なり、般若波羅蜜〔多〕も亦是の如く、

リ八萬歳の時まで出で、再後  
 出現せずといふ。  
 【二五】 梵釋天王。又は大梵天と  
 いふ。色界初禪天の主にして  
 又三界の主なり、色界大梵天  
 中の高樓閣中に住す。  
 【二六】 淨居天王。摩醯首羅の一  
 種にして淨居摩醯首羅とい  
 ひ、第十地の菩薩將さに成佛  
 せんとする時、色界の頂淨居  
 天の上に於て大自在天子の勝  
 報を現じ、勝妙の天形を以て  
 佛位を紹介灌頂を行ふといふ  
 なり。  
 【二七】 大自在天。梵名摩醯首羅  
 といひ、色界の頂にありて三  
 千界を主り、自在天外道の主  
 神なり。

諸法〔其の〕中に入れば、皆な同じく一相なり、所謂無相なり。虚空の分別なきが如しとは、虚空には是れ内、是れ外、是れ遠、是れ近、是れ長、是れ短、是れ淨、是れ不淨等の分別なし。般若波羅蜜〔多〕も亦た是の如く、諸法は般若の中に入れば、亦た内外善不善等の分別なきなり。五衆の無邊なるが如しとは、五衆は常に遍なく世間に滿つ、般若波羅蜜〔多〕も亦た是の如く、五衆を遠離せず、五衆の實相は、即ち是れ般若波羅蜜〔多〕なり。

復次に、色等の法の如きは、分析破裂して乃至微塵に至つて則ち無方なり、無方なるが故に無邊なり。無色法無形の故に彼此なし、彼此なきが故に無邊なり。般若波羅蜜〔多〕も亦た是の如く、一切法に於て、色を分別して乃ち微塵に至り、無色法を分別して乃ち一念の中に至るも、決定して常樂我淨あるを見ず。是の故に色無邊と説き、色無邊の故に、般若無邊と説

く、乃ち虚空に至るまでの六種も亦た是の如し。如金剛等とは、天王の執る所の金剛の如きは、憎なく愛なく、〔又〕所用の處に隨つて、摧碎せざることなし。諸佛は一切智の前心に、此の心中の三昧能く一切結使の煩惱顛倒を斷じ、及び二習をも皆な滅するが故に、名づけて如金剛となす。如金剛三昧相應の智慧は、一切法を見るに皆な平等なり、般若波羅蜜〔多〕の諸法平等を觀するも亦是の如し。何となれば、般若は先づ諸法の平等を觀じ、然る後に是の三昧を得るが故なり。諸法無分別とは、世間

【二】習とは、習氣にして慣習の氣分の義なり。數數煩惱を起したるによりて習慣づきたる煩惱の餘薰をいふ。煩惱の體すでに盡きたる後も、尙ほ其後に殘る習慣性なり。

の凡夫は煩惱力の故に種種に諸法を分別し、諸法の實相を得れば則ち皆な破壞變異す。是の故に聖人は般若波羅蜜〔多〕を得るに、憶想分別の諸法に隨はずして空、無相、無作三昧の中に入る。若し諸法の變異を得る時も則ち憂愁せず。〔何となれば〕先より來かた、分別して諸法の相を取らざるを以ての故なり。

諸法の性不可得とは、一切の法は皆な因縁和合より生ず、因縁なしといふことあることなし。若し少因縁にして起るとも、若し因縁より生ぜば即ち自性なし。自性とは本有決定の實事に名づく。若し性因縁和合の邊より生ぜば當に知るべし、未だ和合せざる時は則ち無きことを。若し先きに無にして今因縁和合よりして有ならば則ち性なきことを知る。若し因縁より而も性を生ぜば、性は即ち是れ作法の性にして、不相待、不相因と名く。常に應に獨りあるべし。是の如く有爲法は、則ち無なり。是の故に、一切諸法の性は不可得なりと言ふ。般若波羅蜜〔多〕の性も亦た爾なり。諸法は無所有等の故にとは、諸法の性は不可得なるが故に、衆の因縁も亦た不可得なり、衆の因縁不可得なるが故に、皆な是れ無所有なり、無所有の中に入るが故に、則ち是れ平等なり。所以は何んとなれば、有の故に分別あり、無の故に分別なく、草香と栴檀香との焼く時は分別あり、滅する時は分別なきが如し。諸法無作とは、衆生空なり、法空の故に則ち皆な無作なり。衆生の所作とは、所謂、十善十不善等の法なり。作とは、所謂火は燃え、水は流れ、風は動き、識は能く知る。是の如く、法には各各に自らの力

有り。衆生なく、乃至。知者見者なく、色等乃至一切種智なきことは、已に先に破せり。衆生を破するが故に、作者なく、法を破するが故に、所作なきなり。但だ凡夫の人は顛倒して覆ふが故に、我に所作ありと言ふ。諸法不可思議とは、色等の一切法は、若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは實、若くは空、若くは我、若くは無我、若くは生滅、若くは不生滅、若くは寂滅、若くは不寂滅、若くは離、若くは不離、若くは有、若くは無等ありて決定するを得ず。種種門の分別も亦是の如く思議するを得べからず、所以は何んとなれば、是の法は皆ん心中の憶想分別より生じて亦決定すべからざるが故なり。一切法の實性は皆ん心心數法を過ぎ、名字語言の道を出づること、前品に説くが如し。一切諸法の平等は一切の賢聖も行すること能はず、到ること能はず、是の故に不可思議なり。般若波羅蜜「多」も亦た爾なり、是の法を觀するが故に生ず。是の時に、薩陀波崙菩薩は即ち坐上に於て諸の三昧を得。

問うて曰く、(一九)薩陀波崙は先に已に諸法の空相を知る、今種種に勤苦して住立すること七歳にして曇無竭を見て、何等の利益を得るや。答へて曰く、薩陀波崙は先に諸佛の諸の三昧を得、般若波羅蜜「多」を貴重して著相を生ずるを見、今曇無竭七歳にして定より起ち、爲めに般若を説いて其の著相を破するなり。一切の法性は自ら空なり、般若波羅蜜「多」あつて其れをして空ならしむるにあらず。是

【一九】第八問・常啼は已に諸法の空相を知れり、今それ種種に勤苦して七歳住立し、法盛に見えて何等の利益を得たりしや。

の故に諸法等を説く、故に般若波羅蜜(多)等は諸法の相を離る(と説くなり)。乃至諸法は不可思議の故に般若も不可思議なり。餘法を輕賤して般若を貴重せしむるにあらず。何となれば、般若に因るが故に更に垢著を生ぜしめざるが故なり。般若波羅蜜(多)は畢竟清淨にして饒益する所多しと雖も、復た相を取つて著心を生ず可からず。金を熱するが如し。好ましと雖も手に捉ふるべからず。薩陀波崙は是の教化を得て般若の中の著心を斷じ、即ち諸法等の三昧を得て句く解脱す。散亂心の中には但た智慧のみあり、三昧と名づけず。今師より聞き已つて一心に思惟するを名づけて三昧となす。心を攝して散ぜざれば智慧變じて三昧を成ず。風中の燈は能く明かに照すこと能はざるも、靜室にあつて門を閉づれば明乃ち遍ねく照すが如し。先づ已に欲界の心散亂するが故に智慧の力未だ成就せず、今攝心の中に入り、聞く所の諸法を皆な三昧と名づけ、能く諸の煩惱等及び魔人民を破す。水寒けれども風未だ至らざれば未だ氷とならずして則ち堅用なし、若し凍を成ずれば能く踏む所あるが如し。是の如き等の六百萬の三昧門を得て、薩陀波崙は曇無竭所説の法を聞くことを得、諸法の中の大智慧明を得。所謂種種の諸法實相の門は諸法平等なり、平等は是れ智慧なり、薩陀波崙の禪定の心中に入つて變じて三昧となる。今三昧智慧を説かんと欲す。「そは」今世後世の果報の故なり。

爾の時に、佛須菩提に告げたまはく、我れ今大衆の中にありて般若を説くに、是の相を以てし、是の像貌を以てし、是の名字を以て、般若波羅蜜(多)を説くが如く、薩陀波崙は曇無竭より是の三昧を



得、三昧の中に於て、十方の佛を見、大衆の中にありて、般若を説くも亦た是の如し。須菩提よ、薩  
 陀波崙は是より以後、深く法を愛樂するが故に、多く諸の經を集めて廣く誦し、多く聞くこと阿難の  
 佛の所説を皆な能く持つが如し。薩陀波崙も亦た是の如く、多聞の智慧、不可思議にして、大海水の  
 如く、即ち是の世に於て常に佛を離れず、是の如き等を名づけて今世の果報となす。身を捨てて常に  
 有佛の國の中に生じ、好んで念佛三昧を修行するが故に、乃至夢中にも初めて佛を見ることを離れず。  
 地獄等の諸難皆な已に永く絶し、意に随つて諸佛の國土に往生す。其の深く般若波羅蜜〔多〕に入りて  
 無量の功德を集むるが故に業に随つて生ぜず。薩陀波崙は一佛土より一佛土に至つて諸佛を供養し、  
 衆生を度脱し、無量の功德を集む。譬へば、豪貴の長者の如く、一會より一會に至りて乃至今は大雷  
 音佛の所にありて淨く梵行を修す。若し般若波羅蜜〔多〕を求めんと欲することあらば、當に薩陀波崙  
 菩薩の如く、一心に堅く正して傾動す可からず。是の故に當に知るべし、般若波羅蜜〔多〕の因縁の故  
 に、能く一切の功德を成就すること。一切の功德を成就すとは、諸の菩薩等しく般若を得る者な  
 り。貪欲瞋恚等の在家は罪垢、邪疑、戲論等あり、出家は罪垢皆な悉く除滅して心清淨なることを  
 得。心清淨なるが故に、一切の功德を成就することを得。一切種智とは、所謂阿耨多羅三藐三菩提  
 を得るなり。六波羅蜜〔多〕とは、初地より乃ち七地までは無生法忍を得、八地九地十地は是れ深く佛  
 智慧に入り、一切種智を得て作佛を成就す。一切法に自在を得れば、皆な受持し、乃至華香伎樂すべ

し。須菩提は、常に空を樂しみて行すと雖も、佛と共に般若を説き、又無靜三昧を得るが故に囑累すべからず。阿難は聞持陀羅尼を得て、又常に世尊に親近するが故に廣く囑累す。

囑累品第九十を釋す。

經

爾の時に佛阿難に告げたまはく、「汝が意に於て云何。佛は是れ汝が大師なりや不や、汝は是れ佛弟子なりや不や。」阿難の言さく、「世尊よ、佛は是れ我が大師にして、修伽他は是れ我が大師なり、我は是れ佛弟子なり」と。佛の言はく、「是の如し是の如し。我は是れ汝の大師にして、汝は是れ我が弟子なり。若し弟子として應に作すべき所の者は汝已に作し竟る。阿難よ、汝身口意の意業を用つて供養供給すべし。我れ亦常に我が意の如くして違失あることなからん。阿難よ、我が身に現にあり、汝愛敬

し供養供給して心常に清淨なり。我が滅度の後は、是の一切の愛敬、供養・供給の事は、當に般若波羅蜜(多)を愛敬し供養すべし。乃至第二第三に至つて般若波羅蜜(多)を以て汝に囑累せん。阿難よ、汝忘るると莫れ、失ふと莫れ、最後斷種の人となると莫れ。阿難よ、爾所の時に般若波羅蜜(多)に隨つて世にあり、當に知るべし、爾所の時、佛世にあつて法を説くことあることを。阿難よ、若し般若波羅蜜(多)を書することあつて、受持し讀誦し正憶念して人の爲めに廣く説き、恭敬し尊重し讚歎し、華香、幡蓋、寶衣、燈燭を以て種種に供養せば、當に知るべし是の人は佛を

見ることを離れず、法を聞くことを離れず、常に佛に親近す。

佛般若波羅蜜(多)を説き已りたまふに、彌勒等の諸の菩薩摩訶薩、慧命を持する須菩提、舍利弗、大目犍連、摩訶迦葉、富樓

那彌多羅耶尼子、摩訶俱絺羅、摩訶迦梅延、阿難等並びに一切の大家、及び一切世間の諸天、乾闥婆、阿修羅等、佛の所説

【10】此の品には、般若を付囑して、佛子は斯の法を尊重護持すべきを説く。これぞ一經の結論、即ち流通分なり。

を聞いて皆大に歡喜す。

【圖】

問うて曰く、(三)佛は已に法愛を斷じ、乃ち一切種智に至り、涅槃に著せず相を取らず、今何を以てか種種の因縁もて是の法を囑累し、愛著に似たるが如くなるや。答へて曰く、諸佛の大慈大悲心は初發意より已來た乃至涅槃門に到るまで常に捨離せず、娑羅雙樹の間に於て、金剛三昧を以て衆生の爲に身を碎きて麻米の如くす。何に況んや經法は饒益する所多くして、而も囑累せざらんや。又阿難は是れ未だ欲を離れざるの人にして、未だ盡く般若波羅蜜(多)の力勢果報の利益する所多きを知らず。是を以て殷懃に汝に囑累す、當に好んで受持して、忘失せしむることなかるべしと。是の故に佛は一切法に於て憎愛なく、常寂滅相なりと雖も而も是の般若を囑累す。

問うて曰く、(三)阿難は是れ聲聞の人なり、何を以てか般若波羅蜜(多)を以て囑累し、而も彌勒等の大菩薩に囑累せざるや。答へて曰く、有人は言ふ、一阿難は常に佛の左右に侍し、「佛の」須むる所を供給し、聞持陀羅尼を得て、一たび聞いては常に失はず、既に是れ佛の從弟なり。又多知多識にして名聞廣く普し、四衆の所依たり、是れ能く佛の轉法輪に隨ふ第三の師なり。佛は舍利弗の壽の短くして早く滅度せんことを知るが故に囑累せず。又阿難は六神通(三)三明共に解脱し、五百の阿羅漢の師、能く是の如

【二】 第九問、佛が此の法を囑累して、愛著せるものの如くなるは何故なるか。

【三】 第一〇問、聲聞たる阿難に囑累して、彌勒等の大菩薩に囑累せざりし理由如何。

【三】 三明、阿羅漢果の聖者の有する三種の智明にして又三達ともいふ。即ち宿住智證明(過去の事に通達す)、死生智證明(未來の事に通達す)、漏盡智證明(現在のことに通

利益する所多し、是の故に囑累す。彌勒等の諸大菩薩は、佛滅度の後各各に分散し、度すべき所の衆生の國土に隨つて至る。彌勒は兜率天上に還り、毗摩羅結、文殊師利亦た度すべき所の衆生の處に至る。佛は又是の諸の菩薩の深く般若波羅蜜力を知るを以て、苦んで囑累することを須めず。

阿難は是れ聲聞の人にして小乘法に隨ふ、是の故に佛殷勤に囑累す。

問うて曰く、(西) 若し爾らば法華經及び諸の餘の方等經は、何を以てか喜

王(及び)諸の菩薩等に囑累せしや。答へて曰く、有人は言ふ、「是の時に

佛、甚深難信の法を説くが故に聲聞の人は(座に)在らず。又佛は不可思議

解脱經を説くが如き(時に於ては)、五百の阿羅漢佛邊にありと雖も而も聞くを得ず、或る時は聞くを

得れども而も用ふること能はず、是の故に諸の菩薩に囑累す」と。

問うて曰く、(三) 更に何の法が甚深にして般若に勝るものあつて、而も般若を以て阿難に囑累し、餘

の經をば菩薩に囑累せしや。答へて曰く、般若波羅蜜は祕密の法にあらず、而も法華等の諸經には阿

羅漢の受決作佛を説き、大菩薩は能く(是れを)受持し用ふ。譬へば大藥師の能く毒を以て藥となすが

如し。

復次に、先に説くが如く(二) 般若に二種あり。一には共聲聞の説、二には但た十方の十地に住する

達す)にて六神通の中の宿命通、天眼通、漏盡通に同じ。

【西】 第一二問、若し爾らば、法華經及び餘の方等經等は、何を以てか喜王等に囑累せしか。

【三】 第一二問、何の法が般若に勝るものありて、般若を阿難に囑累し、餘經を菩薩に囑累せしか。

【六】 二種の般若。

大菩薩の爲めに説くものにして、「是れ」九住の所聞にあらず、何に況んや、新發意の者をや。復た九地の所聞、乃至初地の所聞ありて各各不同なり。般若波羅蜜〔多〕は總相、是れ一にして而も異あり、是の故に阿難に囑累するに咎なし。

問うて曰く、(三)先に阿闍佛品の中に囑累を見る、今復た囑累すると何等の異りありや。答へて曰く(二)菩薩道に二種あり、一に般若波羅蜜道、二に方便道なり。先の囑累とは、般若波羅蜜〔多〕の

體を説くことをなして竟り、今は衆生をして、是の般若の方便を得せしめんことを説き竟るを以て囑累す。是れを以ての故に、阿闍佛後説滙和拘捨羅品を見るに、般若波羅蜜〔多〕の中に方便ありと雖も、〔又〕方便〔の中〕に般若波羅蜜〔多〕ありと雖も而も多に隨つて名を受くと説く。般若と方便とは本體是れ一なり、用ふる所の少しく異なるを以ての故に別に説くなり。譬へば、金師の巧方便を以ての故に、金を以て種種の異なる物を作るが如し、皆な是れ金なりと雖も而も各各名を異にす。菩薩は是の般若波羅蜜〔多〕の相を得るに、所謂一切法性は空無所有にして寂滅の相なり。即ち減度を欲するも、方便力の故に涅槃の證を取らず。是の時に是の念をなす、一切法性は空にして涅槃も亦空なり。我れ今菩薩の功德に於て、未だ具足せざれば證を取るべからず、功德具足して乃ち證を取るべしと。是の時に菩薩、方便力を以て菩薩の位に入り、菩薩の位の中に住して甚深微妙の無文字法を知つて衆

【三】 第一三問、阿闍佛品の中の囑累と今の囑累と何等の異なるか。

【二】 二種の菩薩道。

生を引導す、是れを方便と名づく。

復次に、方便あり、菩薩は一切法は畢竟空にして性は無所有なりと知つて、而も能く還つて善法を

起し、六波羅蜜を行じて空に隨はず。若し能く四種の事、若くは疑、若くは邪見、若くは入涅槃、若

くは作佛を生ぜば、般若に是の如くの分別あるを以て、若し能く邪疑を除くも涅槃に入らず、是を方

便となす。有人は言ふ、「般若波羅蜜【多】は饒益する所多く、大珍寶聚の中に於て最勝なり。佛の滅

度の後、多くの怨賊あつて毀壞せんと欲する者を知つて、品品を囑累する

に猶尙咎なし、何に況んや 二處に於てをや。

問うて曰く、若くは囑累は何を以て乃ち爾も慇懃鄭重なるや。答へて

曰く、佛は世俗の法に隨つて衆生を引導すること、譬へば、估客の主の遠

く他國に出でんと欲するに、財寶を以て子に囑累すと雖も、大價妙寶は偏に獨り慇懃にすることが如し。

其の子未だ妙寶の價重きことを識らざるを以の故なり。餘人は估客の主の是は寶價を識る人にして、

而も慇懃に囑累するを以て必ず其の貴きことを知る。若し其の子、寶價を讚說するを聞けば則ち之を

信せず。佛も亦た是の如し。

復次に、若し餘人異衆の中に於て、般若を讚歎して人に囑累せば則ち佛を譏らん。自ら法を稱讚す  
るも、疑つて信ぜざれば、自ら弟子の中に於て讚累するに則ち嫌ふことなし。復た有人は言ふ、「佛

【元】二處、阿闍佛品にある囑累と、此論に説く所の囑累とあり。

【三〇】第一四問、囑累の爾かく慇懃鄭重なる理由如何。

は上品の中に寂滅相、無戲論と説く、是れ一切智なり。是の中に決定して法として取るべきものあることなし、則ち人の以て貴ぶべき所なしと爲す。今慇懃に囑累すれば、則ち佛は空法に著せざる事を知るなり。一切衆生の中に於て、般若を愛念すること佛に過ぎたる者なし。佛は般若の思深きことを知るが故に、是の般若を貴重して而も慇懃に囑累す」と。有人は言ふ、「佛は中道を現せんと欲するが故に囑累す」と。先に諸法の空を説いて、以て有邊を遮し、今は慇懃に囑累して則ち無邊を破す。是れ則ち中道なり。若し人あり、佛は貪心にして此の法に愛著すと謂はば、佛已に種種の因縁を以て般若波羅蜜「多」の空相を説く。若し人あつて、佛は斷滅の中に墮すと謂はば、是の故に慇懃に囑累し、是の如くにして則ち二邊を離る。

問うて曰く、三佛は阿難は是れ弟子なることを知る。何を以ての故に、

「阿難よ、汝は是れ我が弟子なるや不や、我は是れ汝が師なるや不や」と問へるや。答へて曰く、佛に惡弟子あり、須那利多羅等(是れなり)。少因縁あるが故に弟子となり、佛の所に於て射法を取らんと欲するも佛は爲に説きたまはず。是に於て反つて戒めて言はく、我れは佛弟子にあらずと。又須尸摩の如きは、法を盜まんが爲の故に弟子となる。是の如き等は是れ名字の弟子なり。又復た外道等は謂く、阿難は已むを得ずして佛の邊にあり、阿難は曾つて外道の弟子となり、草木を著し神仙を求む。今佛は是れ親族にして尊重なるを以ての故に給侍すと。是の如き等のとを以て

【三】 第一五問、佛が阿難に「汝はこれ我が弟子なりや、我は是れ汝が師なりや」と問ひし理由如何。

の故に、大衆の中に於て阿難に問ひたまはく、汝は是れ我が弟子なるや不や、若し是れ眞の弟子なりと言はば、當に我が勅に隨ふべしと。是の故に阿難は、人をして信せしめんと欲するが故に重ねて答ふるなり。佛阿難に告げたまはく、弟子としてなすべき所の法は汝盡く具足すと。弟子の法とは所謂善の身口意業を以て師に供給するに、弟子の心に身口業を好んで稱せざるあり、弟子身口業を好んで而も心に稱せざるなり。若し弟子善心を以て、深く師を愛樂し、身口相稱して身命を惜まず、勤勞を難しとせず、自ら其の心を捨てて、師の教勅に隨ふ〔是れを弟子といふ〕。阿難は盡く此の事を具足す。佛、阿難に告げたまはく、汝、今現在に我を恭敬せよ、我が滅度の後に於て、般若を恭敬すること亦た是の如くすべしと。

【三】 第一六問、般若は諸佛の師なり、阿難が其の師を尊敬せずして、佛を尊敬するは何故なるか。

問うて曰く、三 般若は是れ諸佛の師なり、而も阿難は何を以てか其の師を恭敬せずして佛を恭敬するや。答へて曰く、阿難は初道を得と雖も、漏は未だ盡きざるが故に、深く法の實を知らざること佛の知る所の如し。是の故に佛は阿難に告げたまはく、汝般若を恭敬すること我を恭敬するが如くすべしと。

復次に、衆生は、佛の三十二相八十隨形好、大光明金色身を見て多く般若波羅蜜〔多〕の微妙甚深無形無色を愛敬す。智者は能く佛身の相好を知り、愚者は之を視て皆な厭足なし。是の故に佛は身を



以て般若に喩ふ。佛は世にある時能く自ら魔を遮す。是の故に佛阿難に告げたまはく、我が滅度の後は好んで般若を守護すべしと。

問ふて曰く、(三)一たび囑累すれば則ち足る、何を以てか三たびに至るや。答へて曰く、佛は深く般若波羅蜜〔多〕を愛するが故に、三たび囑〔累〕するなり。

問うて曰く、(三)若し深く愛せば、何ぞ三たびに限らんや。答へて曰く、諸佛の常の法語は三たびに過ぎず。若し三たびを過ぎて從はざれば、執金剛神は則ち杵を以て之に擬す。又執金剛神の意は、若し三たびを過ぎて從はざれば、則ち是れ逆人として便ち當に之を殺すべし。是の故に佛は問ふこと三たびに過ぎず。

復次に、若し一たび説かば猶ほ緩なり、三たびを過ぐれば太だ急にして凡夫貪著の者に似如するを以ての故なり。

復次に、受者の心に三種あり、鈍根の者は三たびに至つて乃ち善心を生ず。阿難は復た利根なりと雖も、心は聲聞に向ひて但だ一身の度を求むるのみ、是の故に三たび告ぐるなり。囑累する所以は、法をして滅せしめざらんがための故に、汝當に弟子を教化すべし、弟子復た餘人を教へて展轉して相教へん。譬へば、一燈は復餘燈を燃して其の明轉た多きが如し。最後に斷種の人となる莫れとは、世の人の、子あつて若し紹繼せざれば則ち斷種と名づく、〔是れ〕最も恥づべきとなす。佛は此の喩を以

【三】 第一七問、三たび囑累する理由如何。

【三】 第一八問、若し深く愛せば何ぞ三たびに限らんや。

て阿難に告げたまはく、汝、汝が身の上に於て般若をして斷絶せしむること莫れと。

問うて曰く、(三) 先の品中に明すが如く、般若波羅蜜(多)も亦た不増不説、亦た不滅畢竟寂滅相と

説くに、今何を以てか、斷滅せしむること莫れと言ふや。譬へば、虚空の如きは、誰か能く滅する者

あるや。答へて曰く、般若波羅蜜(多)は寂滅、無生、無滅の相にして、虚空の如く戲論すべからずと

雖も、而も文字語言は般若波羅蜜(多)の經卷を書し、他人の爲めに是れを説く。此の中の般若は、

此の因の中に於て而も其の果を説く。凡人は、般若波羅蜜(多)は微妙なりと聞いて即ち著心を生じ、

般若の相を取て諸法を分別す。所謂是れは善、是れは不善、是れは世間、

是れは涅槃等と分別するを以ての故に、是の法の中に於て著心を生ず。著

心を生ずるが故に鬪諍し、鬪諍するが故に諸の罪業を起す。是の如きの人

を名けて般若波羅蜜(多)を滅する人となす。佛阿難に告げたまはく、汝當に般若波羅蜜(多)の相を

知るべし、文字語言に著して衆生を教化すると莫れ、是を不滅と名くと。阿難は般若に隨つて世にあ

ること幾時なるかは、則ち爾許の時か佛の世にあるとを知る(に依りて)。經の中に廣く説くが如し。

佛愍憫に囑累するに、會にある衆生は疑あり、是の故に佛囑累の因縁を説く。所謂般若の世にある

あれば則ち佛在るが爲なり。所以は何んとなれば、般若波羅蜜(多)は是れ諸佛の母にして、諸佛は法

を以て師となす(が故なり)。法とは、即ち是れ般若波羅蜜(多)なり、若し師あり、母あれば、名づけ

【三】 第一九問、般若は已に不増不減なりといふ。今何ぞ斷滅せざらしめよといふや。

て失利となさず。所以は何んとなれば、利は本よりあるが故に、是の故に説く、若し般若にして世にあれば佛も亦世にあり。又法實は佛實を離れず、菩薩に三十二相八十隨形好あるも名づけて佛とはなさず、法實を得るが故に名づけて佛となす。法實は即ち是れ般若波羅蜜〔多〕なり。人の佛に従つて利を得、乃至解脱涅槃を得るが如く、若し人般若の中に於て能く信行せば、亦た三乗の法を以て而も涅槃に入るを得るが如し。是の故に、般若世にあれば、佛の世にあつて法を説くが如くにして異なることなしと説くなり。阿難よ、若し人あり、般若を聽受し、及び書し、又持つ等のことをなさば、是の人は當に佛を見ることを離れず、法を聞いて佛に親近すと知るべし。

問うて曰く、(三三)人に重罪あつて、三不善業を成就せんに、般若を聽受し書持すとも、是の人云何が當に諸佛を離れず、法を聞いて、佛に親近することを得べきや不や。答へて曰く、是のことは先の品中に已に答へたり。

所謂 聽法の者に二種の人あり、一には但だ聽いて、而も之れを信受して行せざるなり、二には聽いて、而して信受し奉行す〔るもの是なり〕。弟子師の語を聽かず、信受して行せざるが如きは、是れを不聽と名づく。若し一心に聽受し、信受奉行するを以て、世を厭ひて涅槃を愛し、小乗を離れて大乘を樂ふ、是の如く聽受することをなす、是を眞聽と名づく。讀誦も亦た是の如く、正しく憶念すれば、隨つて佛の意の如く、有無の二邊を離れて中道を行じ、聞く所の如く受持し、及び其の

【三六】 第二〇問、三不善業を成就する人にして般若を聽受すとも、云何ぞ佛に親近し、離れざるを得んや。

【三七】 聽法の人に二種あり。

義を解し、他人の爲に解説し、恭敬尊重し、華香等をもて供養し讚歎し、初始の微薄より乃至正憶念  
 まで他人の爲めに説くに於ては、其の心轉た厚く功德轉た多く、牢固として動せず。若くは師の説を  
 聞き、若くは經卷を見て華香等をもて供養す。若し智者にして、般若の功德を知つて供養する者は福  
 徳重く、知らざる者は供養の福徳微薄なり。福徳純厚の者は、身を轉ずるも佛を見ることを離れず、  
 法を聞いて諸佛に親近す。福徳微薄の者は、身を轉ずるも三福報を得と言はず、衆罪を償ひ已つて、  
 久しうして後は亦必ず當に佛を得べし。此の中に佛總じて説きたまはく、福徳の純厚微薄も共に漸漸  
 に皆な十方の佛を見、佛の所説を聞いて、漸漸に六波羅蜜を具して皆な作  
 佛を得べしと。佛、佛眼を以て見たまふに、般若には是の如く、大に衆生  
 を利益するものあるが故に、慇懃に囑累するなり。

問うて曰く、(三八) 是の諸の大阿羅漢は已に實際を證して復た憂喜なし、小喜すら尙ほなし、何かに況  
 んや大歡喜をや。答へて曰く、諸の大阿羅漢は三界の欲を離ると雖も、未だ一切智慧を得ざるが故に  
 諸の甚深の法の中に於て、猶ほ疑つて了せず。是の摩訶般若波羅蜜(多)の中には、了了に解説して  
 其の疑を斷除す、是の故に大に歡喜するなり。

復次に、此の諸大弟子は已に實際を得。實際とは即ち是れ空、無相、無量にして分別する所なし。  
 佛は此の寂滅の法を以て種種に名字、語言、譬喩を分別して廣く説きたまふに亦法性を壞せず、又世

【三八】 第二一問、諸の大阿羅漢  
 は已に實際を證して小喜すら  
 なし、況んや大喜をや。

間と相違せず。諸の阿羅漢は是の法の中に於て證るが故に大に歡喜す。佛善く是の空、無相、無量、寂滅の法を説きたまふに、諸餘の大衆未だ悉く漏盡せざるも、信力深きが故に亦大に歡喜して言はく、「此の法は能く我等の生死の苦を盡して佛道を得せしむ」と。是の如き等の無量の因縁の故に大衆皆た歡喜す。

問うて曰く、(元) 佛阿難に是の般若波羅蜜(多)を囑累せば、佛涅槃の後、阿難は大迦葉と共に三藏を結集するに、是の中に何を以て説かざるや。答へて曰く、摩訶衍は甚深にして信じ難く、解し難く、行し難し。佛の世に在す時すら諸の比丘あつて摩訶衍を聞くに、信せず解せざるが故に坐より去る、何かに況んや、佛の涅槃の後をや、是を以ての故に説かざるなり。

復次に、三藏に正しく三十萬の偈あり、并せて九百六十萬言となす。摩訶衍は甚だ多くして、量ることなく限りなし。此の中、般若波羅蜜(多)の如きは二萬二千の偈あり、大般若品には十萬の偈あり。諸の龍王、阿修羅王諸天の宮中には千億萬の偈等あり。所以は何んとなれば、此の諸天龍神は壽命長久にして識念の力強きが故なり。今此の世の人は壽命短促、識念の力薄小にして般若波羅蜜品をすら、尙ほ讀むこと能はず、何に況んや、多くのものをや。諸餘の大菩薩の知る所の般若波羅蜜(多)は量ることなく限りなし。何となれば、佛は但た一身の所説にあらず、無

【元】 第二二問、佛、阿難に般若を囑累せば、佛涅槃の後、阿難は、大迦葉とともに三藏を結集する時、何故に説かざりしか。

量の世の中に或は無数の身を變化するが故に、是の故に所説無量なり。又不可思議解脱經には十萬の偈あり。諸佛本起經、寶雲經、大雲經、法雲經には各各十萬の偈あり。法華經、華手經、大悲經、方便經、龍王問經、阿修羅王問經等の諸の大經は無量無邊にして大海中の寶の如し、云何にしてか三藏の中に入るべきや。小物は大の中にあるべし、大物は小に入ることを得ず。若し問はんと欲せば應に言ふべし、「小乗は何を以てか摩訶衍の中に在らざるや」と、摩訶衍は能く小乗の法を兼ねるが故に、是の故に汝が問ふ所の如くなるべからず。

復次に、有人は言ふ、「摩訶迦葉の如きは、諸の比丘を將ゐて、耆闍崛山の中にあつて三藏を集め、佛滅度の後は、文殊尸利、彌勒〔等〕の諸大菩薩と亦阿難とを將ゐて是の摩訶衍を集む。又阿難は籌量して、衆生の志業

【四〇】二種の解脱味。  
 【四一】修多羅(Śūtra)三藏の中の經をいふ。  
 【四二】毗尼(Śīla)又は毗奈耶、三藏の中の律をいふ。

の大小を知るが故に、是の故に聲聞人の中に於ては摩訶衍を説かず、「若し」説けば則ち錯亂して成辦する所なし。佛法は皆な是れ一種一味なり、所謂る、苦は「是れ」盡く解脱味なり。此の解脱味に二種あり、一には但だ自ら身の爲めにし、二には兼て一切衆生の爲めにす。俱に一解脱門を求むと雖も、而も自ら利すと人を利すとの異あり。是の故に大小乗の差別あり。是の二種の人の爲の故に、佛口の説く所の文字語言を以て分つて二種となす。三藏は是れ聲聞の法、摩訶衍は是れ大乘の法なり。復次に、佛世に在す時は、三藏の名あることなく、但だ修多羅を持つ比丘、毗尼を持つ比丘、

は上品の中に寂滅相、無戲論と説く、是れ一切智なり。是の中に決定して法として取るべきものあることなし、則ち人の以て貴ぶべき所なしと爲す。今慙慙に囑累すれば、則ち佛は空法に著せざる事を知るなり。一切衆生の中に於て、般若を愛念すること佛に過ぎたる者なし。佛は般若の恩深きことを知るが故に、是の般若を貴重して而も慙慙に囑累す」と。有人は言ふ、一佛は中道を現せんと欲するが故に囑累す」と。先に諸法の空を説いて、以て有邊を遮し、今は慙慙に囑累して則ち無邊を破す。是れ則ち中道なり。若し人あり、佛は貪心にして此の法に愛著すと謂はば、佛已に種種の因縁を以て般若波羅蜜(多)の空相を説く。若し人あつて、佛は斷滅の中に墮すと謂はば是の故に慙慙に囑累し、是の如くにして則ち二邊を離る。

問うて曰く、三三佛は阿難は是れ弟子なることを知る。何を以ての故に、  
「阿難よ、汝は是れ我が弟子なるや不や、我は是れ汝が師なるや不や」と問へるや。答へて曰く、佛は惡弟子あり、須那利多羅等(是れなり)。少因縁あるが故に弟子となり、佛の所に於て射法を取らんと欲するも佛は爲に説きたまはず。是に於て反つて戒めて言はく、我れは佛弟子にあらずと。又須尸摩の如きは、法を盗まんが爲の故に弟子となる。是の如き等は是れ名字の弟子なり。又復た外道等は謂く、阿難は已むを得ずして佛の邊にあり、阿難は曾つて外道の弟子となり、草木を著し神仙を求む。今佛は是れ親族にして尊重なるを以ての故に給侍すと。是の如き等のとを以て

【三】 第一五問、佛が阿難に「汝はこれ我が弟子なりや、我は是れ汝が師なりや」と問ひし理由如何。

の故に、大衆の中に於て阿難に問ひたまはく、汝は是れ我が弟子なるや不や、若し是れ眞の弟子なりと言はば、當に我が勅に隨ふべしと。是の故に阿難は、人をして信せしめんと欲するが故に重ねて答ふるなり。佛阿難に告げたまはく、弟子としてなすべき所の法は汝盡く具足すと。弟子の法とは所謂善の身口意業を以て師に供給するに、弟子の心に身口業を好んで稱せざるあり、弟子身口業を好んで而も心に稱せざるなり。若し弟子善心を以て、深く師を愛樂し、身口相稱して身命を惜まず、勤勞を難しとせず、自ら其の心を捨てて、師の教勅に隨ふ〔是れを弟子といふ〕。阿難は盡く此の事を具足す。佛、阿難に告げたまはく、汝、今現在に我を恭敬せよ、我が滅度の後に於て、般若を恭敬すること亦た是の如くすべしと。

【三二】 第一六問、般若は諸佛の師なり、阿難が其の師を尊敬せずして、佛を尊敬するは何故なるか。

問うて曰く、般若は是れ諸佛の師なり、而も阿難は何を以てか其の師を恭敬せずして佛を恭敬するや。答へて曰く、阿難は初道を得と雖も、漏は未だ盡きざるが故に、深く法の實を知らざること佛の知る所の如し。是の故に佛は阿難に告げたまはく、汝般若を恭敬すること我を恭敬するが如くすべしと。

復次に、衆生は、佛の三十二相八十隨形好、大光明金色身を見て多く般若波羅蜜〔多〕の微妙甚深無形無色を愛敬す。智者は能く佛身の相好を知り、愚者は之を視て皆な厭足なし。是の故に佛は身を



以て般若に喩ふ。佛は世にある時能く自ら魔を遮す。是の故に佛阿難に告げたまはく、我が滅度の後  
は好んで般若を守護すべしと。

問ふて曰く、(三) 一たび囑累すれば則ち足る、何を以てか三たびに至るや。答へて曰く、佛は深く般若  
若波羅蜜〔多〕を愛するが故に、三たび囑〔累〕するなり。

問うて曰く、(三) 若し深く愛せば、何ぞ三たびに限らんや。答へて曰く、諸佛の常の法語は三たびに  
過ぎず。若し三たびを過ぎて従はざれば、執金剛神は則ち杵を以て之に擬す。又執金剛神の意は、若

し三たびを過ぎて従はざれば、則ち是れ逆人として便ち當に之を殺すべし。  
是の故に佛は問ふこと三たびに過ぎず。

復次に、若し一たび説かば猶ほ緩なり、三たびを過ぐれば太だ急にして  
凡夫貪著の者に似如するを以ての故なり。

復次に、受者の心に三種あり、鈍根の者は三たびに至つて乃ち善心を生ず。阿難は復た利根なりと  
雖も、心は聲聞に向ひて但だ一身の度を求むるのみ、是の故に三たび告ぐるなり。囑累する所以は、

法をして滅せしめざらんがための故に、汝當に弟子を教化すべし、弟子復た餘人を教へて展轉して相  
教へん。譬へば、一燈は復餘燈を燃して其の明轉た多きが如し。最後に斷種の人となる莫れとは、世

の人の、子あつて若し紹繼せざれば則ち斷種と名づく、〔是れ〕最も恥づべきとなす。佛は此の喩を以

【三】 第一七問、三たび囑累す  
る理由如何。

【三】 第一八問、若し深く愛せ  
ば何ぞ三たびに限らんや。

て阿難に告げたまはく、汝、汝が身の上に於て般若をして斷絶せしむること莫れと。

問うて曰く、(蓋)先の品中に明すが如く、般若波羅蜜〔多〕も亦た不增不説、亦た不減畢竟寂滅相と

説くに、今何を以てか、斷滅せしむること莫れと言ふや。譬へば、虚空の如きは、誰か能く滅する者

あるや。答へて曰く、般若波羅蜜〔多〕は寂滅、無生、無滅の相にして、虚空の如く戲論すべからずと

雖も、而も文字語言は般若波羅蜜〔多〕の經卷を書し、他人の爲めに是れを説く。此の中の般若は、

此の因の中に於て而も其の果を説く。凡人は、般若波羅蜜〔多〕は微妙なりと聞いて即ち著心を生じ、

般若の相を取て諸法を分別す。所謂是れは善、是れは不善、是れは世間、

是れは涅槃等と分別するを以ての故に、是の法の中に於て著心を生ず。著

心を生ずるが故に鬪諍し、鬪諍するが故に諸の罪業を起す。是の如きの人

を名けて般若波羅蜜〔多〕を滅す〔る人〕となす。佛阿難に告げたまはく、汝當に般若波羅蜜〔多〕の相を

知るべし、文字語言に著して衆生を教化すると莫れ、是を不滅と名くと。阿難は般若に隨つて世にあ

ること幾時なるかは、則ち爾許の時か佛の世にあるとを知る〔に依りて〕。經の中に廣く説くが如し。

佛慇懃に囑累するに、會にある衆生は疑あり、是の故に佛囑累の因縁を説く。所謂般若の世にある

あれば則ち佛在るが爲なり。所以は何んとなれば、般若波羅蜜〔多〕は是れ諸佛の母にして、諸佛は法

を以て師となす〔が故なり〕。法とは、即ち是れ般若波羅蜜〔多〕なり、若し師あり、母あれば、名づけ

【三五】 第一九問、般若は已に不増不減なりといふ。今何ぞ斷滅せざらしめよといふや。

て失利となさす。所以は何んとなれば、利は本よりあるが故に、是の故に説く、若し般若にして世にあれば佛も亦世にあり。又法實は佛實を離れず、菩薩に三十二相八十隨形好あるも名づけて佛とはなさす、法實を得るが故に名づけて佛となす。法實は即ち是れ般若波羅蜜(多)なり。人の佛に従つて利を得、乃至解脱涅槃を得るが如く、若し人般若の中に於て能く信行せば、亦た三乗の法を以て而も涅槃に入るを得るが如し、是の故に、般若世にあれば、佛の世にあつて法を説くが如くにして異なることなしと説くなり。阿難よ、若し人あり、般若を聽受し、及び書し、又持つ等のことをなさば、是の人は常に佛を見ることを離れず、法を聞いて佛に親近すと知るべし。

問うて曰く、(三七)人に重罪あつて、三不善業を成就せんに、般若を聽受し書持すとも、是の人云何が當に諸佛を離れず、法を聞いて、佛に親近することを得べきや不や。答へて曰く、是のことは先の品中に已に答へたり。

【三七】 第二〇問、三不善業を成就する人にして般若を聽受すとも、云何ぞ佛に親近し、離れざるを得んや。  
【三七】 聽法の人に二種あり。

所謂る 聽法の者に二種の人あり、一には但だ聽いて、而も之れを信受して行せざるなり、二には聽いて、而して信受し奉行す(るもの是なり)。弟子師の語を聽かず、信受して行せざるが如きは、是れを不聽と名づく。若し一心に聽受し、信受奉行するを以て、世を厭ひて涅槃を愛し、小乗を離れて大乘を樂ふ、是の如く聽受することをなす、是を眞聽と名づく。讀誦も亦た是の如く、正しく憶念すれば、隨つて佛の意の如く、有無の二邊を離れて中道を行じ、聞く所の如く受持し、及び其の

義を解し、他人の爲に解説し、恭敬尊重し、華香等をもて供養し讚歎し、初始の微薄より乃至正憶念まで他人の爲めに説くに於ては、其の心轉た厚く功德轉た多く、牢固として動せず。若くは師の説を聞き、若くは經卷を見て華香等をもて供養す。若し智者にして、般若の功德を知つて供養する者は福德重く、知らざる者は供養の福德微薄なり。福德純厚の者は、身を轉ずるも佛を見ることを離れず、法を聞いて諸佛に親近す。福德微薄の者は、身を轉ずるも三福報を得と言はず、衆罪を償ひ已つて、久しうして後は亦必ず當に佛を得べし。此の中に佛總じて説きたまはく、福德の純厚微薄も共に漸漸に皆な十方の佛を見、佛の所説を聞いて、漸漸に六波羅蜜を具して皆な作佛を得べしと。佛、佛眼を以て見たまふに、般若には是の如く、大に衆生を利益するものあるが故に、懇懃に囑累するなり。

問うて曰く、(三八) 是の諸の大阿羅漢は已に實際を證して復た憂喜なし、小喜すら尙ほなし、何かに況んや大歡喜をや。答へて曰く、諸の大阿羅漢は三界の欲を離ると雖も、未だ一切智慧を得ざるが故に諸の甚深の法の中に於て、猶ほ疑つて了せず。是の摩訶般若波羅蜜(多)の中には、了了に解説して其の疑を斷除す、是の故に大に歡喜するなり。

復次に、此の諸大弟子は已に實際を得。實際とは即ち是れ空、無相、無量にして分別する所なし。佛は此の寂滅の法を以て種種に名字、語言、譬喩を分別して廣く説きまたふに亦法性を壞せず、又世

【三八】 第二二問、諸の大阿羅漢は已に實際を證して小喜すらなし、況んや大喜をや。

問と相違せず。諸の阿羅漢は是の法の中に於て證るが故に大に歡喜す。佛善く是の空、無相、無量、寂滅の法を説きたまふに、諸餘の大衆未だ悉く漏盡せざるも、信力深きが故に亦大に歡喜して言はく、「此の法は能く我等の生死の苦を盡して佛道を得せしむ」と。是の如き等の無量の因縁の故に大衆皆な歡喜す。

問うて曰く、佛阿難に是の般若波羅蜜(多)を囑累せば、佛涅槃の後、阿難は大迦葉と共に三藏を結集するに、是の中に何を以て説かざるや。答へて曰く、摩訶衍は甚深にして信じ難く、解し難く、行し難し。佛の世に在す時すら諸の比丘あつて摩訶衍を聞くに、信せず解せざるが故に坐より去る、何かに況んや、佛の涅槃の後をや、是を以ての故に説かざるなり。

復次に、三藏に正しく三十萬の偈あり、并せて九百六十萬言となす。摩訶衍は甚だ多くして、量ることなく限りなし。此の中、般若波羅蜜(多)の如きは二萬二千の偈あり、大般若品には十萬の偈あり。諸の龍王、阿修羅王諸天の宮中には千億萬の偈等あり。所以は何んとなれば、此の諸天龍神は壽命長久にして識念の力強きが故なり。今此の世の人は壽命短促、識念の力薄小にして般若波羅蜜品をすら、尙ほ讀むこと能はず、何に況んや、多くのものをや。諸餘の大菩薩の知る所の般若波羅蜜(多)は量ることなく限りなし。何となれば、佛は但だ一身の所説にあらず、無

【三元】第二三問、佛、阿難に般若を囑累せば、佛涅槃の後、阿難は、大迦葉とともに三藏を結集する時、何故に説かざりしか。

量の世の中に或は無数の身を變化するが故に、是の故に所説無量なり。又不可思議解脱經には十萬の偈あり。諸佛本起經、寶雲經、大雲經、法雲經には各各十萬の偈あり。法華經、華手經、大悲經、方便經、龍王問經、阿修羅王問經等の諸の大經は無量無邊にして大海中の寶の如し、云何にしてか三藏の中に入るべきや。小物は大の中にあるべし、大物は小に入ることを得ず。若し問はんと欲せば應に言ふべし、「小乗は何を以てか摩訶衍の中に在らざるや」と、摩訶衍は能く小乗の法を兼ねるが故に、是の故に汝が問ふ所の如くなるべからず。

復次に、有人は言ふ、「摩訶迦葉の如きは、諸の比丘を將ゐて、耆闍崛

山の中にあつて三藏を集め、佛滅度の後は、文殊尸利、彌勒〔等〕の諸大菩薩と亦阿難とを將ゐて是の摩訶衍を集む。又阿難は籌量して、衆生の志業

の大小を知るが故に、是の故に聲聞人の中に於ては摩訶衍を説かず、「若し」説けば則ち錯亂して成辦

する所なし。佛法は皆な是れ一種一味なり、所謂る、苦は〔是れ〕盡く解脱味なり。此の解脱味に二

種あり、一には但だ自ら身の爲めにし、二には兼て一切衆生の爲めにす。俱に一解脱門を求むと雖

も、而も自ら利すと人を利すとの異あり。是の故に大小乗の差別あり。是の二種の人の爲の故に、佛口の説く所の文字語言を以て分つて二種となす。三藏は是れ聲聞の法、摩訶衍は是れ大乘の法なり。復次に、佛世に在す時は、三藏の名あることなく、但だ 修多羅を持つ比丘、毗尼を持つ比丘、

- 【四〇】 二種の解脱味。
- 【四一】 修多羅(スートラ) 三藏の中の經をいふ。
- 【四二】 毗尼(ビニ) 又は毗奈耶、三藏の中の律をいふ。



已下いげに法師ほうし之これを略りやくし、其その足たれるを取とつて、以もつて文ぶんの意いを開釋かいしゃくするのみ。復またた備つぶさに其そを廣ひろく釋しゃくせずして此この百卷くわんを得う、若もし盡ことごとく之これを出いださば將まさに此これに十倍はじすべし。



大正九年六月二日印刷  
昭和三年八月十五日發行  
昭和九年六月五日再版發行

# 著作權所有

國譯大藏經 論部 第四卷

【非賣品】

(岡山製本)

編輯者兼

國民文庫刊行會

東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作

東京市本郷區西片町十番地

印刷者

君島潔

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地

## 發行所

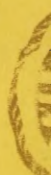
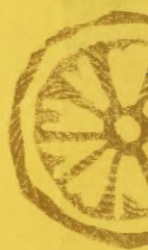
電話神田(五三五番)  
振替東京(八五七二番)

## 國民文庫刊行會









EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3662

